

# 邪神たちの生きる世界

紅鎌 神邪

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

天使や神に対して憎しみを持っている青年が一人。その名は、『神司』。神司は一人の神に大事な家族、姉を殺された。友のオーディンと共に神への復讐を誓う。（このあらすじは【番外編】のあらすじです。）

~~~~~ それから数十年後、神司は家族殺しの神に復讐を成し遂げた。その後は宇宙を創り、惑星を創った。仲間と共に。神司は地球という星に向かい新しく仲間、友人を作っていく。そして、新しく家族も。

途中で主人公の名前が変わります。ご了承ください。（神ノ↓神司）

【主人公多発注意報！】

本編の小説です。東方キャラが出てきますが殆ど二次創作で悪魔や天使、オリキャラばかり出てきます。ですがメインは東方です。

最初はぐたぐたで、読みにくいと思いますが暖かい目で見ていて下さい。  
第六章ぐらいからやつと読めると思います。

# 目次

## 第一章 復習劇

第1話 邪神たちの誕生 | 1

第2話 死闘（復讐）開始 | 8

第3話 死の神の結末 | 13

第4話 V S 地の神と水の神

17

第5話 従者・推測 | 23

第6話 新しい従者の妹は悪魔の神

27

第7話 死んだ者の生き返り | 32

第8話 最高神終了のお知らせ 惑星

の誕生 | 36

## 第二章 地球生活

第9話 着陸！地球！！ | 42

第10話 少女への挑戦状 そのため

には修行を | 47

第11話 相手のボスとの雑談

51

第12話 怠惰の野郎 | 56

第13話 怠惰の潜入調査 | 61

第14話 復習 | 66

第15話 決着 | 71

第16話 一件落着！ 妖怪少女との

出会い | 76

第三章 新たな仲間・友人達

第17話 奴隷の買い取り — 82  
 第18話 従者たちとの初めての旅で  
 出会ったのは怪我している人でした。

89

第19話 泊まる場所： — 94

第20話 バッドエンド — 100

第21話 冥界の少女 — 108

第22話 予知 — 113

第23話 VS 西行妖 — 119

第24話 奇跡の瞬間 — 125

第25話 主人の帰り 邪神の帰り

131

第四章 百鬼夜行

第26話 懐かしき友 — 138

第27話 古き共闘した仲間 — 149

第28話 狂闘 嫉妬 突然の思いつ

き

第29話 正邪探しに人里へ — 161

第30話 宿がまさかの太子の家

167

第31話 こんな所に嫉妬者が：

174

第32話 帰りの時間 改めて入団

180

第33話 宴会 百鬼夜行 紫との

雑談

186

|     |      |              |     |
|-----|------|--------------|-----|
|     | 第34話 | 宴会 百鬼夜行 く告白く | 191 |
|     | 第35話 | 隠れ宴会         | 196 |
|     | 第36話 | 地蔵から人へ       | 202 |
|     | 第五章  | 新たな生活        |     |
|     | 第37話 | 怠惰の突然の告白     | 207 |
| 213 | 第38話 | 怠惰(偽)との対戦    |     |
|     | 第39話 | 真実を伝える為には:   |     |
| 218 | 番外編  | 事の始まり        | 224 |
| 229 | 第40話 | 試験を受けに行こう    |     |
|     | 第41話 | 陰陽師          | 234 |
|     | 第42話 | 怪しまれたのは百鬼夜行  | 239 |
|     | 番外編  | 親友           | 245 |
|     | 第43話 | 陰陽師に取り憑いた悪魔  | 251 |
|     | 第44話 | V S タルウイ     | 257 |
|     | 第45話 | 買い物の後にはトラブルが |     |
|     | 付き物  |              | 262 |
|     | 第六章  | 未来を決める者たち    |     |
|     | 第46話 | 冥王星からのS O S  |     |
| 270 | 第47話 | 二つの道         | 276 |

|      |                 |     |
|------|-----------------|-----|
| 第48話 | 喧嘩と仲間           | 328 |
| 第49話 | 残酷              | 288 |
| 第50話 | 二種の悪夢           | 298 |
| 第51話 | 妖怪を操る者          | 307 |
| カエル  |                 |     |
| 第52話 | V S 夜行 / V S ミカ | 316 |
| 番外編  | 誘惑と召喚           | 324 |
| 第53話 | V S ラスト夜行 / 謎多  | 330 |
| き者   |                 |     |
| 第54話 | 終結              | 337 |
| 第55話 | 信頼する仲間          | 346 |
| 第56話 | 第一次月面戦争開幕       | 394 |

|      |                |     |
|------|----------------|-----|
| 第57話 | それぞれの弱さ        | 354 |
| 第58話 | 最後の戦い V S 神ノ邪神 | 368 |
| 第七章  | 幻想郷での新たな生活     |     |
| 第59話 | 終えた結果と新たな始まり   | 375 |
| 番外編  | 決意と鬼畜な神たち      | 381 |
| 第60話 | スペルカード作り       | 389 |
| 第61話 | 再戦 V S 神ノ邪神    | 394 |

|      |              |     |
|------|--------------|-----|
| 第62話 | 大胆で初めての夜     | 400 |
| 第63話 | 博麗の巫女と普通の魔法使 | 406 |
| い    |              |     |
| 第64話 | 検査           | 412 |
| 第65話 | 異変開始         | 418 |
| 第66話 | 紅魔館潜入        | 423 |
| 第67話 | V S 光矢       | 429 |
| 第68話 | V S 紅風 亜無    | 435 |
| 第69話 | 扉の向こうの黒い妹    | 443 |
| 第70話 | 新しい家族        | 449 |
| 第71話 | 安心した名前       | 460 |
| 第72話 | 眠る者たち        | 466 |
| 第73話 | 俺ができる事       | 474 |
| 第74話 | 向かう先々        | 480 |
| 番外編  | 救世主          | 486 |
| 第75話 | 助けられない。      | 493 |
| 第76話 | 水の神          | 500 |
| 第77話 | 悪魔図鑑         | 507 |
| 第78話 | 怠惰 ベルフエゴール   | 515 |
| 第79話 | V S 暴走怠惰たち   | 526 |
| 第80話 | 相棒の大事さ       | 535 |
| 第8章  | 怠惰の革命        |     |

第81話 仲間たち VS 異形

542

第82話 心の迷い

550

第83話 唐突なる事実と真実

556

### 第九章 異魔邪神編

第84話 生き返った姉

562

第85話 稀神家の初デート

635

第86話 消失者

第95話 組織、始動ッ!

645

第87話 未来の幻想郷

【番外編】神司の過去

653

第88話 世界に誘った者たち

第96話 VS【闇の悪夢】ダークネス  
|| ナイトメア&【破壊と殺戮】ブレイカー

592

第89話 独り

600

マン)ザキ

688

第90話 俺のいない幻想郷

608

第91話 零愛誘拐事件

614

第92話 恐怖

622

第93話 協力の願い【前編】

629

第94話 協力の願い【後編】

|         |                   |     |
|---------|-------------------|-----|
| 第97話    | 主　　と二本の剣          | 700 |
| 第98話    | 後悔と親友             | 709 |
| 第99話    | それぞれの動き           | 716 |
| 第100話   | オーデインの特訓          | 729 |
| 第101話   | 操り人形（ベルフェゴ<br>ル）  | 738 |
| 第102話   | 雷炎を直しに。           | 745 |
| 【番外編】   | 始めはアベル、終わりはサ<br>タ | 803 |
| ナキア（前編） | —                 | 751 |
| 【番外編】   | 始まりはアベル、終わりサ<br>タ | 756 |
| ナキア（後編） | —                 | 756 |
| 第103話   | ドラシロの特訓　信頼す       | 756 |

|       |                    |     |
|-------|--------------------|-----|
| 第104話 | VS 氷結の魔女と伯爵ピ<br>エロ | 776 |
| 第105話 | 無惨な始まり（一ページ）       | 789 |
| 第106話 | VS 過去の友人（剣士）       | 796 |
| 第107話 | VS 謎の黒魔術師          | 803 |
| 第108話 | VS 片羽の天使の子         | 809 |
| 天邪鬼   | —                  | 809 |
| 第109話 | 光の帰還               | 819 |
| 第110話 | 愛が欲しい者             | 826 |
| る仲間   | —                  | 765 |

|      |                   |              |     |     |                  |              |     |
|------|-------------------|--------------|-----|-----|------------------|--------------|-----|
|      | 第111話             | 異変の首謀者       | ——  | 834 | 第119話            | 【後日談】縮む身体    |     |
|      | 第112話             | 吸血竜人(ドラゴ     |     |     | 910              |              |     |
|      | ニュートヴァンパイア)との死闘   |              |     |     | 第120話            | 【後日談】守りたい者   |     |
|      | 842               |              |     |     | 919              |              |     |
|      | 第113話             | 地獄化する幻想郷     |     |     | キヤラクター紹介・設定      | ——           | 933 |
| 855  |                   |              |     |     | 第121話            | 《後日談》邪神王の実家で |     |
|      | 第114話             | 混沌(CH A O S) | V S |     | の話               | ——           | 947 |
|      | 戦争と死(B A D E N D) | ——           |     |     | 第122話            | 稀神家のバイト      | 956 |
|      | 第115話             | 堕ちた元人間       | ——  |     | 第123話            | 世の世界は宴会中!    |     |
|      | 第116話             | 邪神王          | ——  |     | 969              |              |     |
|      | 第117話             | サグメの秘策       | ——  |     | 第一回「邪神たちの生きる世界」杯 | オリ           |     |
|      | 第118話             | 女王の気質(カリスマブ  |     |     | ジナルキヤラクタートーナメント戦 |              |     |
| レイク) | ——                |              |     |     | 第124話            | 第二回戦         | 978 |

第125話 第二回戦・第三回戦

987

第126話 第四回戦

第127話 第五回戦

第128話 第六回戦

第129話 第七回戦

第130話 第八回戦

第131話 準々決勝戦 第一回戦

1045

第132話 準々決勝戦 第二回戦

(前編)

第133話 準々決勝戦 第二回戦

(後編)

1062

第134話 準々決勝戦 第三回戦

(前編)

第135話 準々決勝戦 第三回戦

(後編)

第136話 準々決勝戦 第四回戦

(前編)

第137話 準々決勝 第四回戦(後

編)

第138話 覚醒能力 VS 覚醒能

力

第139話? 魔人 VS 器人

1116

第140話 予想外!?!《決勝戦》暴食の

1073

1083

1093

1101

1107

悪魔

V  
S

刃神の化身

—

1123



## 第一章 復習劇

### 第1話 邪神たちの誕生

? 「あつ、やつと起きたね。」

気がつくくと俺は棺桶みたいな箱から目を覚まして起きていた。そして声がする方を見ると明らかに男の娘がいた。

俺「男の娘か？」

? 「誰が男の娘だ！俺はちゃんとした男だ。そして自己紹介をしてなかったな。でも…それはみんなが起きた時にするでしょう。」

最初はコイツが一体何を言っているのかわからなかったが周りを見ると俺が寝ていた様な棺桶があと六つ程置いてあった。すると次々に棺桶が空き人が出てきた。

? 「おつ、起きてきた起きてきた♪」

すると気が強い人が一人立ってきつきから何を言っているのかわからない男に喧嘩を売り始めた。

? 「誰だテメエは…?」

? 「自己紹介はまとめてするつもりさ。あと君たちには名前が無い。それもあとで俺

が直々に着けるつもり。」

すると気が強い人がよくわからない男に殴り掛かった。しかし男の方はその拳を軽々と掴んだ。

？ 「なっ!？」

？ 「うん中々のパンチだ。君を先に名付けしよう。これからの君の名前は “ サタン ” だ。」

サタン 「はあ!? ふざけんな！」

？ 「ふざけてなどいないさ。さてそろそろその拳を退かしてもらえるかい？」

サタン 「チツ…。」

サタンは拳を退かして悔しそうな顔をした。

？ 「さて！ みんな起きただろうし俺の名前の公表だな。えーつと俺の名前は “ 神ノ邪神 ” 。 お前らを創った親みたいな感じかな。君たちには名付けをするがそのあとの本題は置いて名付けをし始めよう。まずは君からかな。」



神ノ 「さて君の名前は…レヴィアタンとでも名乗ってくれ。」

レヴィ「了解。」

神ノ「次の方〜！」

？「我は患者か何かなのか？」

神ノ「まあな。んじやお前の名前はマモンでよろしく。」

マモン「我には適当に名付けか。」

神ノ「適当じゃない。あとはい。」

神ノ邪神は刀をマモンに渡した。

マモン「これは…？」

神ノ「この刀に名前はない。だから名付けしてあげてくれ。」

マモン「うむ…紅葉姫もみじひめとでも名付けとこうか。」

神ノ「へー…可愛い名前じゃん。大切に使うてあげなよ。大切に使った物はいつか付喪神になって恩返しに来るからな。」

マモン「うむ。愛刀にするつもりじゃからな。んじやありがとよ。」

神ノ「可愛がつてあげろよ♪ささと次の人どうぞ♪」

俺「俺か…何か眠つ…。」

神ノ「おつ、第一号か…。」

俺「その名で呼ばれると何か腹立たしいのだが。」

神ノ「冗談冗談♪さてと…君の名前はベルフェゴールだ。わかつたな？」

ゴール「何か長いな…。」

神ノ「いやいやみんなこれぐらいだよ？まあ最低三文字…？」

ゴール「わからん。お前の知性がわからん。」

神ノ「謎多き者神ノ邪神ってか？w」

ゴール「うるさい。てか何かくれ。」

神ノ「唐突だねえ!?!あと何かくれだあ!?!えーつとねえ!」

神ノ邪神は箱を取りだしガサガサと何かを探し始めた。

神ノ「えーつと…これで良いなら…。」

神ノ邪神は一冊の分厚い本を取り出した。

ゴール「これは？」

神ノ「大魔術書だよ。グリモワールこれでも読んで魔術でも学んどいて。」

ゴール「了解…。」

ベルフェゴールは魔術書を読みながら歩いて行つた。

神ノ「はあく…やつと行つた…次の方…。」

？「この世界に女は居ないのか。」

神ノ「居ないよ。居たとしても俺らの敵だけだ。」

？「チツ…なら早く俺の名前を決めろ。」

神ノ「残念♪もう決まっているのだよ。さて命名しよう！これからの君の名前は…♪  
アスモデウスだあ〜！」

アスモ「あつそ。じゃあな。」

神ノ「バイバイ！アスモ！はいこれ！」

アスモ「ああ？おつと！」

神ノ邪神はアスモに一本の槍を投げた

アスモ「あぶねえじゃねえかよ！」

神ノ「この槍に名前はない！名を付けてあげなよ！あと大切に使うてあげなよ！」

アスモ「わーつたよ！…名前…ロンギヌスな…。」

神ノ「次ツ！」

？ m ( ) m

神ノ「あつ、ああ。よろしく。えーつと…君の名前は…。」

？ (☆▽☆)

神ノ（何だあ？あの顔は…。しかも何故大量に蠅が飛んでいるんだ？）ベルゼブブだ。」

ベルゼ（・ω・）

神ノ「えーつと…嫌でしたか…？」

ベルゼ（—ム—三—ム—）

神ノ「は、はあ…。」

ベルゼ「…ありがとうございます…。神ノ様…♪」

そうベルゼブブは小さな声で呟いた。

神ノ「ん？何か言った？」

ベルゼ（∩∪、）ノ

ベルゼブブは手を振りながらどっかに行った。

神ノ「面白いやつだ…♪さて！最後の方々？」

すると天使の羽の様なものを背中に着けた人が歩いて来た。

？「僕がラストか。」

神ノ「そうそう。君が最後さ♪さて…最後の君の名前は…。」

神ノ・？「ルシファー。」

神ノ「なっ!？」

ルシ「どうだ？ 当たりか？ 俺の勘はこの中でどうやら当たりやすいようだ。因に何故か昔かわからんが記憶があるんだ。その事を教えてくれたまえ。神ノ邪神。」

神ノ「…ふんっ、俺が知るか。」

ルシ「そうか。なら行くでしょうか。」

神ノ「ああ！ 最後に言うなら。」

ルシ「？」

神ノ「その勘。あまり使わない方がお前の身の為だぜ。」

ルシ「了解。それじゃあ…」

神ノ「あと…会議すつからみんなをここに集まる様声を掛けといてくれ。」

ルシ「…了解。」

ルシ「フアーはみんなに声を掛けるためここから去った。」

神ノ「危なかった…あのルシフアー…。奴は要注意人物だな。」

神ノ「邪神は椅子に腰をかけ直した。」

## 第2話 死闘（復讐）開始

神ノ「さて、作戦…今考えたが作戦いらなくね？」

一同「……………」

神ノ「あのー…黙るの止めてくれませんかね？」

一同「……………」

神ノ「はあ…つてよく見たら皆ぶざけてるなあ!？」

サタンはむしやくしやしてどっか行きやがった。レヴィは、はあ…と溜め息を付いている。マモンはアスと一緒に俺が用意したお菓子を食べている。ベルは完璧に寝ている。ベルゼくんは相変わらずハエたちと遊んでいる。ルシくんは何かブツブツ言っている。

神ノ「これつてさ…一人一人あだ名つけれそうだぞ？」

あいつらは自分の性格があふれ出ている…。こりやあだ名を付けないとな♪

神ノ「お前らー！あだ名を…」

ドガーン!!!

一同「!!？」

大きな物音と共に天使や神の大軍が迫って来たのが見てわかった。

物音を出したのはどうやら、その担当の天使がいた様だ。

神ノ「チツ！予定より早すぎるぞ!?すまない皆!!一緒に…いや、お前ら!!暴れまくれ!!ウリエルとかクソ神たちをぶっ潰せ:!!」

俺は大きな声でみんなに指示を出した。すると…

サタン「おお…テメエも良いこというじやねえか!!いいぜ!参加したぜ!!」

レヴィ「いいよ、僕の銃で撃ち抜くよ。」

マモン「フム…:剣術でなんとかなるかなー?」

ベル「眠いけど僕の力があれば勝てるよね…:。」

アスモ「槍で対処できる物なのか??」

ベルゼ（…）

ルシ「俺の力を見せてやる!!」

神ノ「よし!お前ら!行くぞー!!」

一同「おー!!!」

俺たちは天使の大軍に飛び込み、俺たちが天使らへの殺戮が始まった。



神たち「「おー!!!」」

サタン「うるせえー!!」

サタンは、自慢の炎で天使たちを燃やし続けていた。

レヴィ「撃ち抜けー!」

レヴィは水で創った銃で鋭い水の弾を撃っていた。

マモン「……ハッ!」

マモンは先程貰った刀で天使たちを斬っていた。

ベル「うーん……この薬を……よし!これで!魔法陣召喚!!雷風刃!!」

ベルフェゴールは先程貰った、グリモワール魔法書を手にし、魔法陣を出して魔法攻撃をしてい

た。

アスモ「ハハハ!この槍に刺さらない物はほとんどない!!おりやあ!」

アスモデウスはロンギヌスを投げたり、操っていた。

ベルゼ(ハ、マ)ノ

ベルゼブブは蠅を操り、相手を目くらましをさせてみんなのサポートをしていた。

ルシ「神の力使えるの……?えい!できた……!?デカツ!」

ルシファーは興味本意で神力を操り、天使の大軍に投げつけた。

七人「「おつりやあ?!!」「」

神たち「「ぐわあー!!!」「」

神ノ「呆気ねえな…つて、何敵に対して感情を…まあ、まだ雑魚しか来てないしな…  
アイツらに任せよう。」

本当に呆気ない。天使どもがゴミの様に倒されていつている。

そう思っていると、一人の天使が俺に声を掛けた。

?「あれー?神ノじゃーん♪」

神ノ「…サリエル…(チツ!あのクソ神かよ…!あのテンションうぜえ…)」

それは昔、俺といざこざがあった、サリエルだった。

サリ「あれ?いつものように来ないの?」

神ノ「うるせえ…」

サリ「え?なんt…」

神ノ「うるさいつて言つてんだよ!!」

煽りだとわかつている。わかつているが煽りに乗ってしまった。

サリ「そうそう♪君こうじゃないとね♪まあ、だから自分のあm…」

神ノ「黙れ!!お前のそういう性格が嫌いなんだよ!!双銃剣!しやらー!」

サリ「私もねえ…テメーのその腐った性格が嫌いなんだよね…」

神ノ「ああそう！わーつたよ…次は殺すぞ！！サリエルウー!!!」  
確かサリエルは、死を使う神だ。

どっちかっていうとサリエルは上位神の一人だ。性格があまりにもチャラくてウザイ。

え？初対面じゃないのかって？そこはまた違う話で、な♪

さて、こんな奴早く潰して行くか♪

## 第3話 死の神の結末

神ノ「おりやああ!!」

サリ「相当シヨックだったんだね♪あの昔の出来事♪」

神ノ「その話を口に出すな…!!」

その時俺は怒りと力に身を任せててしまい我を失っていた。

サリ「ははは♪今の君はまるで何かに取りつかれた猛獣のようだね♪」

神ノ「うっせーんだよ!!早く俺に殺される!!」

サリ「やーなこった♪その攻撃も暇があるし、君の昔話でもしようかな♪」

神ノ「あ”あ”!?”



とある昔に二人の少年とその姉がいた。二人は母と父と一緒に楽しく暮らしていたが、ある事件が起こった。

いつもの様に少年と姉が遊んでいたら、姉が光の矢に殺された。

その殺した本人はこう言った。

「なーに、神々の遊びさ♪あとその女は病気で死にそうだったんだろ？苦しんで死ぬより俺が殺してあげたんだ♪ほらほら……♪俺に感謝しないとね♪」

少年はその神を睨んだ。

「ああ？俺に感謝するんじゃないやなくて恨むってか？はっ！テメエ……子供だからっていい気に乗るなよ……？」

と言って少年の首を持って上に上げた。

少年は苦しんだ。だが、少年はそのまま神を睨み続けた。

「しつこいんだよ！その睨みを止めろ!!はあ……わかった……テメエの信念はわかった……だが、テメエのその行動で家族が消えるということだけは覚えておけ……」

と神は少年の家をもう片方の手で壊した。その家には母と父がいた。

少年の顔が死んだ。

「ケツ、やつとその目を止めたか……まあ、そのまま困惑して死んどけよ。じゃあな。また会えたら、な。」

神は空に飛んで消えた。



サリ「こうして、その少年はその神に復讐を誓ったのでした♪ちやんちやん♪」

神ノ「いい加減黙れよ……!」

サリ「そうだ! 一つ質問いいかな?」

神ノ「なんだよ? 答える気はねえぞ?」

サリ「いいよいいよ♪じゃあ行くよ? 君の大切な宝物はなんだい?」

神ノ「……アイツらだよ。俺の戦友だよ。今、現在の宝物だな。」

サリ「なんだ♪正直にベラベラ喋るじゃないか♪なら、その戦友を殺したら君はどん

な反応をするのかな?♪」

神ノ「っ! 止めろー!!!」

サリ「さあ! 神ノの戦友たちよ! 我の死の力で消滅し神ノの精神を潰し殺せ!!」

サリエルはサタシたちに魔力の球を放った。

神ノ「止めろー!!!」

サリエル「フハハハハ♪……って!?!」

サリエルが見たのは自分が殺したと思った敵が生きているという場面を目撃したからである。

サリ「な、なんで…」

神ノ「フフフ…あー！ハツハツハツアー!!一つ言わせてもらうぜ！コイツらはなあ！俺の言わば人格、性格の一部から生み出されたのさ！これが本当の「神の邪神」さ♪さあ、邪神の王、この「大悪魔邪神王」に跪け…！死の神 サリエル!!」

サリ「あ、ああ…」

サリエルは跪つこうとしていた。その時…

サリ「がっ…!?!」

サリエルの背中に光の矢が刺さった。

？「何敵の王に跪ついているんだよ？」

？「そうだぜ。サリエル。」

そこに現れたのは「ラファエル」と「ガブリエル」だった。

## 第4話 VS 地の神と水の神

ラファ「おいおい、何敵の王に跪いているんだよ…。」

ガブ「そうだよねー。君はいつもそういう感じで強い奴に命の欠片を捧げているもんね♪」

ラファ・ガブ「だけど…ウリエル様の命令で君は排除しろと言われてるから。ごめんだけで死んでね…♪」

サリ「う…嘘だろ…!？」

ガブ「それがこれ♪本当の話なんだよ♪さて…死んでね♪」

ラファ「待て、ガブリエル。」

ガブ「何だよ！ラーくん早く殺さなくなっていくのかよ!？」

ラファ「確かにコイツは現在虫の息だ。が頬つておいてもかかって死ぬからまずは敵の王を殺しても良いんじゃないか？」

ガブ「確かに!!それじゃあ…サリエルバイバイ♪」

サリ「っ……………なっ!？」

神ノ「あのなあ…確かにコイツを殺すのは構わない…だがな！コイツは仲間じゃない

のか？」

ラファ「確かに仲間だが、ウリエル様の命令だから仕方がないことだ。」

神ノ「ふーん…ならコイツは用済みなんだな？」

ラファ「ああ♪用済みだよ♪どうぞ、殺したいのなら殺していいぞ。殺したかったの  
だろう？」

神ノ「…いや、殺さねえ。こんな倒し方は嫌なのだよ。俺に合わねえ倒し方なんだよ。でだ♪コイツを俺の従者として扱わせてもらう。」

神たち「二はあ?!?!」

神ノ「フフツ…♪さて…：テメエらサリエルを賭けて勝負だ。」

ラファ「いいぜ♪その掛け。俺が潰す…！」

ガブ「僕もいいよ♪」

神ノ「さて…：行きm…」

？「ちよつと待てー!!俺もその楽しいなこと混ぜろよー!!」

危険な戦いに楽しいからと参加するのは勿論サタンだ。

神ノ「サタンか…♪いいぜ。ただし俺の命令に従えよ？」

サタン「ハハハ♪…従う気はねえよ。俺が自由にやらせてもらう。例え相手がお前の戦う奴だろうともな。」

神ノ「はいはい！わーったよ。正直俺もめちやくちやに暴りたい…！ただし！次のボス戦まで体力は保つてろよ！」

サタン「当たり前だろうがよ！」

ガブ「雑談は終わったかい？」

神ノ「ああ！良いぜ!!な？サタンいや…「憤怒」。」

サタン「はあ？誰が憤怒だつて!?!」

神ノ「お前のあだ名だよ！ちなみに！レヴィは「嫉妬」、マモンは「強欲」。ベルが「怠惰」、アスモが「色欲」、ベルゼが「暴食」、ルシが「傲慢」だな。」

憤怒「あ、あつそ。ということは今後から俺のこと憤怒と呼ぶのか？」

ガブ「はああああ！」

神ノ「ああ、そうだな。てかうるさい!!」

俺はガブリエルの顔を掴んで地面に叩きつけた

ガブ「があ!？」

神ノ「そういう俺が復讐をしに来たときお前はその笑顔で俺はボコしたよな？そのあと俺を奴隷の様に扱いやがって…！俺がそのときみたいにならうと思っただろう？」

ガブ「ん！んん!？」

何か言っているがどうでもいい。

神ノ「まだその笑顔かつつよお!!」

俺はもう一回地面に叩きつけた

そのときにもういつもの俺はいなかった…そして俺はガブリエルの腹に手刀を刺した

ガブ「がはっ!？」

ガブリエルは血を吐いて倒れた。

神ノ「息は…してるな…よし…！第2ステージクリア！次は…」

ラファ「うおおおー!!!」

神ノ「来たか…！ラファエル!!だけど…憤怒…頼むわ…♪」

憤怒「しゃーねえな！天使野郎！来い!!」

ラファ「挑むところだあー!!」

二人「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラー!!!」

憤怒とラファエルの二人は殴り合いをした。

それはまるでジョ○ヨのオラオラだ。

憤怒「オラア！」

ラファ「ぐふっ!? チツ! 水よ! 我に力を!!」

すると大量の水がラファエルの体にまとまり鎧を作った

憤怒「:フフフツ: ハツハツハツ! 俺の属性を知ってその技を使うのか!？」

ラファ「何の属性なんだ: :？」

憤怒「火・炎の属性だよ。」

ラファ「な: :なんだと: :!？」

憤怒「本当だぜ。ならくらった方がよさそうだつな! 炎獄斬激迅!!」

ラファ「ぐわああああー!!!」

憤怒「地獄の炎に切り刻まれて死ね: :。」

憤怒「わーったわーった。」

神ノ「おお! サンキューな♪ 憤怒♪」

憤怒「ふう: :てか王よ。わざと休んで俺に任せたよな?」

神ノ「まあな♪ というか俺のことを王扱いかよ♪」

憤怒「嫌か?」

神ノ「いや? 正直少し恥ずかしいなと

ね ♪  
「  
憤怒  
」おいおい  
…  
」

## 第5話 従者・推測

神ノ「さて、サリエル。俺の従者になれよ♪」

サリ「誰がお前の従者になるか！」

神ノ「お前…帰る場所ないだろ？」

サリ「うっ…でも…！」

神ノ「でも？」

サリ「…すみません。私を従者として扱ってください。」

神ノ「ははは♪さて体は大丈夫か？」

サリ「はい。大丈夫です。神ノ様は？」

神ノ「大丈夫だけど…めっちゃ敬語だな。」

サリ「ははは…では、次に行きましよう♪多分…次は…」

神ノ「ウリエルだな。」

サリ「はい。そうです。情報いります？」

神ノ「ああ、教えてくれ。」

サリ「はい。ウリエルは風を扱います。ウリエルはミカエルから一番尊敬されていて

されていない人はゴミのような扱いをし、自分もその中の一人です。なので、ウリエルは皆から「見下しのウリエル」と呼ばれていきました。ちなみに風を操るため台風などハリケーンなども自由に出せてしまいます。災害の中ではトップを争う程です。」

神ノ「ふーん…了解…他は？」

サリ「強いて言うなら…ウリエルには一人の妹がいます。その妹の名前は、「サユリ」といいます。」

神ノ「ふーん…」

その時遠くから気配を感じた。

神ノ「来たか…」

サリ「あわわわわわ…!」

神ノ「落ち着け!サリエル!!」

サリ「いえ、ここは私がやらなくては…!」

神ノ「……わかった…。ただし!危険と俺が思ったら止めるぞ?いいか?」

サリ「はい!そのつもりです!」

サリエルがそう言ったとき…

ドゴーン!!!

ウリ「……神ノと…ゴミが一名…」

サリ「なんででしょうか？ウリエル。私の名前は呼ばれてないですよ？」

ウリ「ああ？テメエはゴミ確定なんだからゴミはゴミ箱に大人しく入っとけ。俺は後ろの神ノに用があるんだよ。そこ邪魔だからどけ。」

サリ「お断りします！私は神ノ様の従者なのですから!!」

ウリ「はあ…何神が敵の王の従者になってんだよ。裏切りには裁きをしないとイケないから…はあ！めんどくさいなあ!!」

神ノ（ん？めんどくさい？怠惰くんと気が会うのじゃない？）後で呼んでみようかな…?」

サリ「私を倒してから行きなさい!!」

神ノ「サリエル!?それフラグだよ!」

ウリ「黙っとけ!!外野はなあ!」

神ノ「うるせえ！サリエルやっちまえ!!」

サリ「は、はい！頑張ります!!さて…来い…死の神が相手ですよ…?」

ウリ「はあ…風の神ウリエル様の風を受けて後悔するなよ…!」

サリ「ん…はああい!!」

ウリ「どこから声出してんだよ!」

それはウリエルに同意するよ…本当にどこから声出してるの？サリエルさん…

そしてサリエルはウリエルに神力を放った。多分それは死の力だと思う…が、ウリエルはその力を風で吹き飛ばしどっかに行つた。そのとき遠くで誰かの苦しい声が聞こえたが多分あの力だと思う。

ウリ「おつつつりやああああー!!」

ウリエルがとてつもなく大きな風の塊を作る。それによりこつちにも憤怒たちの方にも被害があつた。あつ、暴食が大きな風の塊の中に巻き込まれた…が嫉妬が暴食を連れ戻した。

神ノ「うーん…正直この勝負に結末がないな…そういやウリエルに妹でサユリつて子がいたつけない…もしかして…!!サリエル!ちよつと任せたぞ!」

サリ「はい!」

神ノ「七つの邪神たち!サリエルがピンチのときにサポートしてくれ!」

邪神たち「了解!!」

俺は急いで最高神、ミカエルの方に向かった。もしかしたらと言う理由で、だ。普通だつたらウリエルが負けそうだったら妹のサユリが来る筈だ。だが来ない。と言うわけは…「わざと来ない」と「誰かに囚われている」の二択だ。そしてウリエルがミカエルに尊敬…いや、ウリエルがミカエルに逆らわない理由…それは、「妹を守るため。そして、ミカエルに殺させない為」だ。

## 第6話 新しい従者の妹は悪魔の神

俺はウリエルとかの戦いから抜けて直接ミカエルがいる城に来た。抜けて来た理由…それは「真実を確かめる」為である。

神ノ「ここだな。」

俺は大きな城の目の前に来た。

門番「そこ止まれ！」

神ノ「うるせえ、邪魔。」

俺は門番ごと門を破壊して城の中に入った。

神ノ「……ミカエル……」

？「ん？お前は…久しぶりだなあー！あのときの少年じゃん♪」

神ノ「……久しぶりだな。ミカエルで当てるよな？」

？「そうだよ！覚えててくれたのかい♪」

神ノ「唐突だが質問を何個かいいか？」

ミカ「どうぞ♪」

神ノ「まず一つ。お前はウリエルの妹を捕らえているか。」

ミカ「……えっ？ちよつと待つて？俺はウリエルの妹を捕らえていないよ？と言うかサユリ様を怒らせたら僕が殺されるよ？」

神ノ「え？てことは…」

ミカ「まあ♪サユリをこんな風にしたのは僕だけ♪」

神ノ「認めたな…。」

ミカ「うん。認めたよ♪」

神ノ「それじゃあ次の質問。俺の姉を殺したのはなぜだ？」

ミカ「ん？まだそれを引きずってるの？だから前にも言ったけど遊びとお助けたよ。正直あのままだと君のお姉さんは苦しんで死んでたよ？それともそっち方が良かったの？」

神ノ「ああ！良かったかもなあ！まだ生きれるチャンスがあつたかもなあ！」

ミカ「ははは♪前も言ったけどその性格は死を招くよ？」神ノ「分かつてるわ！そんなこと!!だけど…そのままだとお前は負けるぜ？」

ミカ「ははは♪面白いこと言うね♪いいよ。望むところだよ…。神炎…!」

神ノ「炎か…いや、火の神と言うところか…!!黒い炎の神の俺にはちようどいいな…!黒炎!!」

二人の炎が当たり合う。その炎は大きな爆発を起こした。

ズドーン……!!!  
城の中がグチャグチャになる。

ズドーン……!!!

？「……ん……この音……私に喧嘩を売っているのか……？ハハハハハ！今向かうぞ!!」  
少女は牢屋のをブツ壊し外に出て音の方へ飛んでいった。



神ノ「おりやりやりやりやー!!」

ミカ「そらそらそらそらそらそらー!!」

俺たちは殴り合いをし炎を出して戦っていた。

神ノ「互角……か……？」

ミカ「そんなはずは…」

俺らが疲れているそのとき…

？「君たちか！私に喧嘩を売った者たちは！」

ミカ「チツ！…サユリ様！」

神ノ「サユリ…!?!」

サユリ「うむ？よく見るとミカエルもいるじゃないか…お前もあの音の主犯者か…!!  
わかった。貴方たち二人共私がまとめて相手になるわ。」

ミカ「言うじやな…!?!」

ミカエルの言葉が言い終わる前に数本の光の矢がミカエルに刺さっていた。

ミカ「がっ…!?!お前らぁー!!」

光の矢を刺したのはサリエルとウリエルの二人だった。

神ノ「え？いいのか？二人は。」

ウリ「神ノ様！私も従者にさせてください!!」

神ノ「え、ええ!?!お、おい！サリエル！それはどういふことだ!?!」

サリ「実は…私は負けて憤怒様方に助けてもらいました。」

あ、やっぱり負けたの。

サリ「そんなときウリエルが…」

「神ノの前では言えなかったのだけど…正直俺も神ノ従者に成りたいんだ。あのミカエルの手下よりも神ノの方に何かが引いているんだ。多分神ノは今ごろミカエルたちがいる城に行つてゐるはず。俺は助けに行きたい。いいかな？」

「という感じで今に至ります。」

サユリ「……………」

ミカ「はあ!?ふざけるな!ウリエル!嘘だよなあ!」

ウリ「いいえ。これは事実です。いいですか?神ノ様。」

神ノ「いいぜ♪その妹もか?」

ウリ「ありがとうございます!サユリは!」

サユリ「はい?何言つてるの?私と貴方はまだ敵同士よ?まず戦つてからよね♪でもその前に…ミカエル…。貴方を始末するわ♪」

ミカ「ヒイイ!」

サユリ「バイバイ♪」

サユリは神力をミカエルに放つてミカエルは消えた。

神ノ「うーっわ…残酷だあ…」

サユリ「さあ♪始めましょう♪命を懸けた勝負を…♪」

## 第7話 死んだ者の生き返り

神ノ「おりやりやりやー！」

サユリ「ハハハハハハー！♪」

現在、俺とサユリは命を掛けた勝負を上空で戦っていた。

ウリ「神ノ様！私も参戦します！」

神ノ「いや、この戦いは俺とサユリとの命を掛けた真剣勝負。邪魔はしないでくれ。」

ウリ「わかりました神ノ様。」

サユリ「さて、お互い本気を出さない？」

神ノ「そうだな。お前ら誰か結界出せる人いる？」

全員手を挙げた。

神ノ「あつ、全員できるのか：だとよ、サユリ♪」

サユリ「そうね♪大暴れ：する？」

神ノ「そうだな♪お前ら全員結界張つとけ!!巻き浴いになるぜ?場合によっては死人がでるかもな：♪」

憤怒「ああ?俺は死んでも戦い続けるがな。」

嫉妬「ははは♪憤怒はツンデレだなあ♪」

怠惰「遠回しで「神ノ！危なかったら俺も援護するぞ！」ってことだろ？」

憤怒「はあ!?んなこと言っていないだろ!？」

神ノ「なるほど。」

憤怒「神ノも納得するんじやねえー!」

サユリ「……貴方ちゃんと戦う気はあるの？」

神ノ「ああ、ごめんごめん。さて再開しますか!」

サユリ「やつとか!さて……出そうか……本気で最後の死の女神の力を見させて上げるわ  
!」

神ノ「俺も大悪魔邪神王の魔力を見せつけてやるよ……最後の命をなあ!」

神ノ「オラオラオラオラオラー!」

サユリ「アハハハハハハハー!!」

俺は魔力を身に付けた拳でオラオラをした。サユリは神力を拳に惑いオラオラをし  
ていた。そして狂気染みた顔で。

サユリ「そりあ♪」

神ノ「っ!」

思いつきり腹を殴り、飛ばされた。

コイツは強敵だ。何てったって死の女神だからな。だが、サリエルも死の神だった筈何だが…気が合うのか？

神ノ「お前、強いな…！ラストバトルに丁度良いぜ♪」

サユリ「あははははは♪そうね♪貴方、死を覚悟にしているのに楽しそうね♪」

神ノ「まあな♪さあ、次はフザケ無しの本気で行くぞ…！」

サユリ「わかったわ…さて、此方も一切フザケ無しの本気で行くわ…！」

神ノ「了解…漆黒剣 漆黒閃（しっこくせん）!!」

サユリ「神死銀 残酷死銀神!!」

ズザアアア…

俺たちは同時に切った。勿論一切フザケ無しの本気で、だ。

神ノ「っ……」

俺が先に倒れた。つまり俺の負けと言うことだ。

サユリ「私の勝ちね。」

神ノ「……と、思っていたのか？」

サユリ「えっ……」

神ノ「ハハハ！負けとは言ったがが負けとは言っていない!!」

サユリ「ズルくない!？」

神ノ「後もう一つ！本気出すとは言ったがガチとは言っていない!!」

サユリ「それ殆ど同じ!!と言うか全く同じじゃない!？」

神ノ「ははは♪お前…楽しそうじゃん？」

サユリ「くっ…楽しんで…ないし…」

神ノ（ツンデレかよ…）ならさ。まだ俺の仲間になる気はある？」

サユリ「まだ諦めていないのかよ…そうだな。良いよ、仲間になっても。」

神ノ「そうか…じゃあよろしくな♪サユリ♪」

サユリ「ええ♪よろし…」

その時、サユリの胸に光の矢が刺さった。そしてつき抜けた。

神ノ「なっ…誰だよ!？」

？「俺様だよ。神ノ。ウリエル、新しい苦痛をプレゼントだ。」

神ノ「またテメエかよ…」

神ノ・ウリ「ミカエル!!」

なんとサユリに矢を放ったのはサユリに消された筈のミカエルだった。

## 第8話 最高神終了のお知らせ 惑星の誕生

ウリ「サユリ!? サユリイイー!!」

なぜかサユリに殺された筈のミカエルがその殺した本人のサユリを殺したのだ。

神ノ「お前何で生きてるんだ!？」

ミカ「ハハハ♪面白いこと言うねえ♪流石は少年だあ♪さて質問に答えるね♪まあ、まずどうして生きていたかだね。てか死んでねえよ。あんなんで死んでたら天使の王とはなれねえよ。テメエの力は確かに俺様と互角だ。だが…俺様の最上限の神力で殴つたらどうなるかねえ…♪」

神ノ「チツ…! お前らア!」

邪神たち「「おう!」」

神ノ「あのクソ神をブツ殺せ!! あつ、そうそう…これは命令だ。暴れまくれ…!!」

憤怒「待つてたぜ!! その命令!! ぶち殺してやんよ…!!」

嫉妬「おつ!?! 来たねえ…その命令…了解したよツ…!」

強欲「ふーん…殺せば良いんだよな…この剣のサビにくれてやる!!」

怠惰「おお…豪快にするぜ…!」

色欲 「面白い……その命令に俺は乗ったぞ!!」

暴食 (、 ㄥ、)ノ

傲慢 「ほほう……承知したぞ。王よ。」

邪神たちはミカエルの方へ飛んで行った。

憤怒 「お前らア!力合わせんぞ!!」

傲慢 「あれ? w君が言うの? w憤怒くんw」

憤怒 「うるせえ!やるつたらやるんだよ!」

嫉妬 「でも僕らそんなことできたっけ?」

暴食 (・|ω|)ノ ウンウン

色欲 「確かにな。」

強欲 「同意だ。」

憤怒 「あ……もう!ならわかったわかった!一斉にクソ神に自分らの最強技を浴びせろよ!!」

嫉妬 「それなら良いよ!」

強欲 「買った!その言葉ア!!」

怠惰 「その言葉が君にお似合いだよ。」

色欲 「そうだな。」



邪神たち「「なっ…!?」」

神ノ「ハハハ！俺たちがいること忘れんなあ！」

サリ「ミカエルー!!!」

ウリ「絶対許さん…!!」

ミカ「ハツハツハツ♪それは楽しそうな顔してるぞ？皆さん？……まあ！そんなに怒るのも無理がねえがなあ!!」

ミカエルはまず邪神たちの技を避け技を潰しそのあとに俺たちやウリエルたちをぶっ飛ばした。

神ノ「っ！憤怒たちの攻撃も効かないのか!?!」

ミカ「フハハハ！当たり前だろ!?!神ノ!!いや、本名言うか？少年?」

神ノ「俺は昔の名を捨てた…。もしその名を言ってみろ。」

ミカ「神司（しんじ）」

その時俺は心の底から怒りが蘇り自我を失った。

神ノ「……歯あ食いしばれ…。」

ミカ「はあ？ぐがあ!?!」

俺はでミカエルの腹を思いつき殴った。

神ノ「だから言ったろ？歯あ食いしばれて。次はこの攻撃以上の攻撃をするぜ。」



◆ 神ノ「さてお前ら。これでこの戦いが終わった訳だが…ウリエル…本当にすまない。」  
 ウリ「いや、あのとき動かなかった俺も悪いのです。謝るならばサユリの方には？」  
 神ノ「確かにそうだな。心の中で謝って置くよ。………さて皆はこれからどうする？」

憤怒「そうだなー♪そうだ！人間がいつぱい居るところ作ろうぜ！」

神ノ「生命って作れるのか？」

怠惰「不可能はないね。今いる皆で作ればすぐだね。」

神ノ「んじや作るか♪」

皆「「はいつ!!」」

エターナル・クリエイション

皆「「惑星作り!!!」」

こうして地球が生まれ、その他の惑星も作り出された。

## 第二章 地球生活

## 第9話 着陸！地球！！

神ノ「さーて♪皆さん！惑星をいっぱい作ったのだが、皆には一つ一つの神になってほしい！」

ウリ「急すぎませんか？」

サリ「ええ、確かにウリエルに賛成です。」

皆がペチャクチャ喋り始めた。

まあ無理もない。

神ノ「まあまあ、皆さん静粛に!!」

暴食「……そうだよ。一回聞こうよ♪」

一同「……………」

暴食「あれ？どうしたの？皆。」

傲慢「……ぼ……暴食……？」

色欲「喋れるのか……？」

神ノ「あつ、ここではお前ら暴食が喋るのは初めて聞くか。憤怒と嫉妬はこの事は

知ってるんだよ。なあ?」

憤怒 「まあなあ♪」

嫉妬 「まあ、そうだな。」

怠惰 「なんだよ。知ってるんだつたら教えろよ。」

神ノ 「ハハハ♪ごめんな♪さて話が脱線したがどの惑星に行く?」

憤怒 「そうだな。俺は火星に行くか。」

嫉妬 「そうだねー…それじゃあ自分は水星に行くよ。」

強欲 「そうだな…金星だっけ?そこに行くぞ。俺は。」

暴食 「僕は勿論木星だね。」

色欲 「俺は…土星って星かな。」

怠惰 「俺はいいや。眠りたいし。いいか?王よ。」

神ノ 「わかった。いいぜ♪怠惰♪で俺は地球に行くぜ。ウリエルとサリエルはどうする?」

サリ 「…神ノ様。決意しました。」

神ノ 「ん?何が?サリエル。」

サリ 「私、死の神サリエルは惑星の神とはならず、死の狭間と言うところで死の女神として生きていきます。この仕事は本当はサユリさんがしなければいけないのです。」

ですが今サユリさんはこの世にいない。ですので同じ能力を持っている私が役目を果たしたいと思います。それでも……いいですか？」

神ノ「まあ、働きたくない邪神もいるしいいんじゃないやねえか？」

だつて自分の人生なんて自分で考えるもんだろ。

サリ「あ、ありがとうございます!!あの名前も変えさせていただきます。ウリエル、貴方の妹の名前頂いていい？」

ウリ「……いいよ。使つても。」

神ノ「そういやウリエルはどうするんだ？」

ウリ「あー……それじゃ冥王星と海王星の神でいいですか？」

神ノ「ははは♪欲張りだなあ♪いいぜ♪やつてみな。それじゃあまた会おうな!そうだな……まあ、集まる時声をかけるから!それじゃあまたな!!」

一同「「おう!!(はい!!)」」

◆ さて、地球に着いたが…

神ノ「自然だあ!!」

その時誰かから攻撃された。

神ノ「うわあつと!?!誰?!」

すると目の前に少女がいた。

少女「貴女こそ誰…?」

神ノ「俺は女じゃない。男だ。」

少女「へー…それじゃあその証拠見せてよ。」

神ノ「嫌だよ?!と言うか話戻すぞ?お前、名前は?」

少女「浅矢 諏訪子(あさや すわこ)。貴方は?」

神ノ「俺は神n:」

いや、名前は変えとこう。そうだな。昔に捨てたが神司は使うか。そうだなー…確か俺の裏の名が大悪魔邪神王だから…。王を『きみ』としてそのあと悪魔の悪の上の亜を取って『王亜(きみあ)』で、それを繋げると王亜 神司(きみあ しんじ)と名乗るとするか。

浅矢「どうしたの？名前ないの？」

神司「いや、あるぞ。俺の名前は王亜 神司だ。よろしくな♪」

浅矢「……貴方は私の敵じゃないの？」

神司「はあ？どういう意味だ？」

浅矢「まあいいよ。こんなところで住むの？」

神司「そうだな。住むところないな。」

浅矢「んじゃ、こっちに泊まって行きなよ♪」

神司「そうだな。よろしくな♪」

浅矢「うん！よろしくね！」

## 第10話 少女への挑戦状 そのためには修行を

浅矢「ただいまー!!」

? 「あつ、おかえりなさい♪諏訪子様♪」

俺は諏訪子から連れてきてもらっていた。すると巫女服を着た女性が部屋から出てきた。

女性「あれ? お客様ですか? いらつしやいませ。もしかして…泊まって行きますか?」

神司「ああ、よろしく。」

浅矢「そうそう鈴鹿(すずか)。この人敵じゃないらしいよ。」

どうやら女性の名前は鈴鹿と言うらしい。

鈴鹿「えっ? そうなのですか?」

神司「まあな♪てか敵とかどういふことだ?」

浅矢「実はね。私は山の神なんだけどね。」

へえー…あのクソ神の他にウリエルや、サリ…いや、サユリの様に優しい神っているんだな。

神司「へえー…それだけか?」

鈴鹿「これだけでも驚くことなのに動揺さえしてない。凄い……!」

浅矢「それじゃあコレ読んでみて。」

神司「手紙?」

中にはこう書いてあつた。

やあ! 諏訪子!! 貴女の地位を掛けて勝負するよ! 正直土地神は一人でいいの。だからこの勝負に勝ったらこの土地の神となる。勿論逃げてもいいよ? だけど君の信者たちはどう思うかな? 失望するだろうね。で、もし勝負するのならば、一週間後誰に邪魔されないし、町を壊すのはいけないからこの土地の外れにある広い広場に集合!!

八坂 神奈子(やさか かなこ)

おいおい、ご丁寧にふりがな打つてあるぞ。

神司「でも地位を掛けて勝負か? 諏訪子は勝てる自信あるのか?」

浅矢「も、勿論! 勝てるよ!!」

鈴鹿「諏訪子様……一回負けてるじゃないですか……」

浅矢「う、うう……」

神司「てことは……勝てないと実力的に。」

浅矢「そうなんだよ!! 神司!! 手伝つてえく!!」

神司「お? それは俺に鍛えてくれと言つてるのか?」

浅矢「ちよっ！一緒に戦うことだよ!？」

神司「これは君自身の戦いだ。だから俺は手伝えと言われたからな。君が勝てる様  
手伝わせてもらうよ！さて早速準備だ。」

浅矢「はあく…分かったよ。鈴鹿、外借りるね。」

鈴鹿「ええ、良いですよ。」

さて何をするか…技をひたすらする手もあるし俺の攻撃をひたすら避けるという手  
もある。どうしたら良いものか…一度聞いてみるか。

神司「なあ、諏訪子。」

浅矢「ん？どうしたの？」

神司「いや、…両方するか！」

浅矢「いや！何を!？」

神司「よし！一回戦うぞ!!」

浅矢「え、ええ?!ちよつと待ってよ!？」

神司「どうしたんだ？諏訪子。何か問題でも？」

浅矢「あるよ！急過ぎるの!!君は！」

神司「あははは♪部下たちにも良く言われたよ♪」

浅矢「部下？」

神司「前世だよ♪前世。」

もしバレたらめんどくさくなるからなあ：確か：あつちからここに来るまで確か……300年は越えてたな。そりゃあ光の速さで行っても万年は掛かるぞ。これはまだ早いものなの！と言うことで前世の記憶ということした！もし後々バレたら余計めんどくさいな。まあ、今は今に集中するか。

浅矢「ふーん……で、掛かってくるの？」

神司「まあな♪さて……修行を始めようか。鈴鹿さん。合図よろしいでしょうか？」

鈴鹿「あつ、はい！分かりました。では、両者よろしいですか？」

神司「俺は勿論良いぜ。」

浅矢「私も良いよ！」

鈴鹿「それでは……始め!!」

## 第11話 相手のボスとの雑談

浅矢「おりゃあ！」

神司「おお、中々じゃない？」

流石は山の神だけある。中々の実力だ。まあ、邪神の王にとってはまだまだだがな。

浅矢「えいっ！」

神司「っ！良いじゃねえか！カスったとはいえ当たったじゃねえか！これ以上いっばいに俺に当ててみる。そうすれば諏訪子は神奈子に勝てるぞ！」

浅矢「本当!? やったよ！」

神司「よし！続けて：諏訪子！下にしやがめ!!」

浅矢「えっ？」

俺がしやがめと言った理由は遠くから射撃をした銃声が聞こえたからだ。

俺は耳も良いのだ。これは少し調べた方がいいな。

神司「ごめん、諏訪子。少し神奈子のところを調べてくるよ。何で不意打ちを仕掛けたのかをな。」

浅矢「わ、わかった。でも死なない様にね。」

神司「当たり前だな。じゃあ行ってくる。鈴鹿さんも気をつけて!!」

鈴鹿「は、はい！分かりました!!」

そして俺は神奈子の方に向かった。



神司「ここだな。」

おいおい。立派な城が建っているぞ。諏訪子の神社と大違いだ。ちなみに諏訪子と鈴鹿の家と言うのは神社だ。

さて、その話は置いといて。さて…その城の中に

神司「潜入しますかね♪」

?「どこにだ?侵入者?」

神司「チツ…バレた…か!?!た、怠惰!?!」

そう、俺の前に現れた門番の様な人は昔一緒に戦ったあの怠惰ベルフェゴールだっ

た。

怠惰? 「はい? 俺は怠惰って言うお前の仲間じゃないぞ? 俺はイザナギだ。」

イザナギ: 確か、あの伊耶那岐か? 確か和風の神だったよな。俺らは洋風だからな。伊耶那岐は妹がいて伊耶那美がいたはずだ。

ナギ 「で? 侵入者は何しに来たんだ? 」

神司 「そうだった! お前らの城の方から神社に射撃されたんだけど! 」

ナギ 「すみません!! 幻を作れる人が間違っ放つてしまい! 」

神司 「そうかそうか♪ わかったよ。」

お前が嘘をついていることがな。この世に銃というものは無いんだぜ? 」

…  
もつと後に銃は出るが、今の時代には作られてないだろ。まあ嫉妬は創っていたがな

ナギ 「そうですね…。それじゃあ…射撃してしまった礼と言っては何ですが、貴方は少し神奈子様と話して見てはいかがですか? 」

神司 「そうだな。少し邪魔するわ。」

ナギ 「良かった。では此方です。」

俺は伊耶那岐に連れられて神奈子の部屋まで来た。

伊耶那岐がドアをノックする。

ナギ「神奈子様、お客様です。」

八坂「よし、入れ。」

何様だよ…全く。

ナギ「では、ゆつくりしてってください。」

八坂「初めまして、私の名前は八坂 神奈子。地の神です。どうぞお見知りおきを。」

神司「俺は王亜 神司。少し聞きたいことがあつて来たんだが。」

八坂「ほう、それはどういうご用件で。」

神司「お前はなぜ鉄砲を手に入れているんだ？ 一体何処で手に入れた？」

八坂「ああ、あの玉を撃つ筒のことですか。それは一人の浪人がくれたのですよ。これ、いらんからお前にやるわ。と言ってくれましたね。そのあと…あく眠…と言って帰って行きました。」

あつ、そいつ絶対怠惰だ。

八坂「そのあとその者と似ている伊耶那岐と出会ってその横に伊耶那美が居ったな。」

神司「あ…多分その人は俺の友人だ。」

八坂「何?! そうなのか!？」

神司「まあな。性格的にめんどくさそうな口調だったろ?。」

八坂「お、おお、そんな性格だったぞ。」

神司「やはりな。そうだ。話は変わるが家の諏訪子がお前は勝てない程に育て上げるからな……♪」

八坂「ほう…それは宣戦布告と言ったところか？」

神司「そうゆうことだ。それじゃあ一週間後までまたな。」

八坂「詳しくはあと五日だ。」

神司「わかった。それまで鍛え上げて置くよ。楽しみにしてな♪」

八坂「おう！楽しみしてるぞ！」

そして俺は神社に戻った。

## 第12話 怠惰の野郎

俺は現在神社の方に戻っていた。普通に歩いて帰っていた。空を飛んで帰るのも良かったが、歩くのも悪くないと思つてな。まあ相当な時間を食うがな。

神司「へえ〜♪こんなところに森なんてあつたのか。と言うかここに来てから二日しか経つてないのか。そうだ。諏訪子の特訓相手ならなきや。急ぐ為に飛ぶかね。」

俺は空を飛んで神社に向かった。すると面白いことに黒い雲が俺の頭の上だけに雲ができて雨が降っていた。

神司「誰だ？こんなしよぼいイタズラを仕掛けてくる人は？」

まあ可愛いもんだから、別に気にしないがな。

？「フフフ♪私ですよ♪神ノ様♪」

その声にその言い方。そして俺の事を神ノ様と言う人はあいつしかいない。

神司「サリエル：いや、サユリか。」

サユリ「正解です♪」

神司「それにしても久しぶりだな。元気してたか？」

サユリ「はい♪元気になりました！」

何だろう。昔の性格と全然違くてビックリしたのだが。て、言うより最初は別人かと思っただがな。

神司「と言うより何の用だ？何か面白いことあったか？と言いたいところだがサユリ、君のおかげで今面白いことが俺の頭の上で起きてるから消してくれないか？」

サユリ「ああ、コレの事ですか♪ちよつと食べて見てください♪貴方の世界で言う「わたあめ」を手に入れたので食べてみてください。雨が降っているのは少し改良をしたからです♪」

神司「……すまん、この綿雨はお前一人で作つたか？」

サユリ「いえ、通りすがりの怠惰さんと一緒に。」

だろうよ。怠惰か……あのクソ野郎……魔法でヤバイ薬をあのあとに作つてたからな。しかも暇潰しに作った適當の薬だったからそれが入つてると思うと怖くてしようがねえ……そうだと味覚を無くすか。一時的に消しとくか。多分、それをしないと俺味覚がなくなる。だがなあ……しゃーねえ食べたあと解析できるようにしとくか。

神司「今食べなきやダメか……」

サユリ「ええ♪よろしく願います♪」

神司「よし……いただきます！」

それと同時に解析開始!!

神司「………がはっ?!」

解析結果　：　毒の塊を綿雨の機械に入れて綿雨化になった毒の綿雨。  
そこで俺は気を失った。

◆  
神司「うっ……うっ……はっ!」

気がつけば俺は諏訪子たちの神社の布団の上で寝ていた。

神司「ここは……神社か。」

あんまり記憶がねえぞ。怠惰の野郎が作った薬を入れた綿雨に殺されかけた。良かった。少し耐性がついているから死ななかつた。

サユリ「あつ、目が覚めましたか♪神ノ様♪」

神司「……周りに人は居ないか?」

サユリ「?はい。いませんですけどどうしました?」

神司「俺の名前は神ノ邪神だが今、ここでの名前は王亜　神司だ。そこのところ間違

えるな。いいか？」

サユリ「は、はい。分かりました。」

神司「分かればよろしいのさ♪んじや

切り替えて諏訪子のところ戻ろうぜ。」

サユリ「そうですね♪」

神司「それじゃあ…ごめん、先行っててくれ。少し話す奴がいるから。」

サユリ「分かりました。」

よし…行ったか…

神司「召喚ッ！怠惰 ベルフエゴールツツッ!!」

怠惰「お、おい!!何だよ!?!王よ!」

神司「はあはあ…うるせえよ。静かにしろよ。」

すぐ様に絶対声去結界を張って良かった…。

神司「お前…何で嫉妬の拳銃を知らない人に渡したんだ?」

怠惰「ああ?要らなかつたからだよ。」

神司「お前が渡したのは和風の方の神なんだよ。それはどういうことだと思う?」

怠惰「知らねえよ。」

神司「まだ使っていないから良いけど…使っていたら邪心が暴走してしまうんだよ。そ

してまだ言いたいことがある。それが何で俺を毒殺しようと思ったんだ？」

怠惰 「どうせ王は死なないだろ？」

神司 「そうだけだよ…すまん帰ってくれ。その代わりその神から拳銃を奪って俺に渡してくれ。」

怠惰 「何だ。そんなことか♪良いぜ、任せな♪」

神司 「ありがとう。それじゃあ、あつ！そうだ。殺すなよ？傷を付けない程度の戦いな。まず、自分から戦うな。相手から攻撃してきたら相手になれ。わかったな？」

怠惰 「お、おう。わかったぞ。バレないように姿も変えてくるわ。」

神司 「よろしくな♪」

怠惰 「…んじや行ってくるわ。」

こうして怠惰は神奈子の方へ飛んでいった。

神司 「さて結界消して…アイツ結界を通り抜けてって行ったのか…」

よく見たら溶けていた。アイツこの為に何でも溶ける薬を所持してたな…

神司 「さて♪行くか♪おはよう！」

## 第13話 怠惰の潜入調査

怠惰「さて、あの城か…」

俺は王に言われた通りにする為あげた拳銃を返して貰うぜ。

ナギ「おい待て！何しに来たんだ？」

怠惰「おう？拳銃を返して貰いに来たんだよ。」

ナギ「あれは神奈子様のお物だ。貴方の物ではない。すまないが元の場所に戻ってくれないか？」

怠惰「ハハハ俺に戻る場所なんてないよ。そこどけよ。」

ナギ「いやですね。私は門番なのです。貴方の様な人から入らせない為にいるんです。もしまだ言うのなら相手になりますよ？」

怠惰「それは喧嘩を売ったと言うことか？」

ナギ「その他にありますか？」

怠惰「ははは！買ったぞ。掛かってこい…！」

ナギ「望むところです！」

怠惰「…」と思っていたが早く終わらして寝たいんだよ。「進撃の悪魔」

「追撃の悪魔」。後は任せた。」

と言つて幻覚の薬の粉をバラまいて相手に幻覚を見せた。

ナギ「っ!? 何だ!! お前らは!？」

怠惰「んじや、門番くん。いることもない幻覚と俺の様が終わるまで戦つといってくれ。まあ、二体でお前と互角だからな。死ぬことはないから大丈夫だ。安心してくれよ。それじゃあ城の中に入るわ♪ って声は届いてないか。」

そして俺は城の中に入った。

兵士 1 「おい! そのお前!! 止まれ!」

兵士 2 「報告! 侵入者が出現!! 繰り返し返す! 報告! 侵入者が出現!!」

怠惰「うるせえな…めちやくちや喧嘩を売つてくれるよなあ♪ 全て幻覚見せるか。

うーんつとー…」

兵士 3 「おい! 何もしない方がお前の身のためだぞ!!」

怠惰「これかな。そーいっやつ!」

瓶の中に入れた煙を投げて煙を城の中を包んだ。そして兵士たちが次々に倒れた。

? 「貴方が侵入者?」

怠惰「おう? 門番の人に似てるなあ。双子なのか?」

? 「ええ、双子の伊耶那美よ。ちよつと待つて!? まさかお兄様を倒したの!？」

怠惰「倒したって言うか…幻覚見せて放置させといたわ。行った方がいいんじゃないか？」

ナミ「お兄様アアア…!!!」

伊耶那美は急いで門番の方へ走っていった。出オチってやつですかね？まあいいや。俺が渡した人のところに行くか。もう、一つしかこの城に強い気配の人はいないから、多分そいつが拳銃持つてるだろう。

怠惰「さて行動に移すかな。」

俺は二階に向かった。だが至るところにあの厄介な兵士がうろちよろしているからステルス効果のマントを着けて拳銃を持っている人の部屋を探す事にした。

怠惰「と言うか部屋多いな…」

？「分かった！今私も同行しよう！」

兵士 4「本当ですか?!神奈子様がいれば百人力ですよ!!」

八坂「それは言い過ぎだよ！」

何か誉められると言うか嬉しい事を言われるとキャラが変わるのか。変わりすぎだろ…てか！神奈子様?!確か門番が言ってた今の拳銃の主だな。

怠惰「コイツかあ…」

俺は神奈子の後ろについていった。

八坂「どこにいるんだ？」

兵士 4 「えーっと……さっきまではここで伊耶那美様と話していました。」

兵士 5 「大変です！神奈子様の拳銃が何者かによって奪われました!!」

八坂「なんだと!?!」

怠惰「はあ!?!」

兵士 4 「誰だ!?!」

八坂「どうしたのだ!」

兵士 4 「今ここにいる三人ではない一人の声が聞こえました!」

八坂「やはりか……今もいるだろ?そこにいる者。正体を現せ。」

怠惰「っ!……なんだよ。バレてるのか。」

俺はマントを取った。

八坂「お前は誰だ。」

怠惰「俺は怠d……いや、フェルだ。」

八坂「目的は何だ。」

怠惰「俺はお前の拳銃を取りに来たのだが……誰かが取ったらしいな。」

八坂「らしいな。……フェル。」

怠惰「何だ?」

八坂「お主本当の名を言え。」

怠惰「何だ。バレてるのか。俺だよ。久しぶりだな♪」

八坂「お主は！久しぶりだな！名は何なのだ？」

怠惰「俺の名前は怠惰っていう。だが、怠惰じゃなくってフェルと呼んでくれ。さて、俺も拳銃を返して欲しいから、奪った野郎を見つけ出す仕事、俺も同行させてもらおうわ。」

八坂「了解したぞ！」

そして俺たちは拳銃を奪った野郎を見つけ出した。そして拳銃を返して貰った。

八坂「どうぞ、これだろ？」

怠惰「そうそう♪これこれ♪ありがとな！それじゃあ帰るわ♪じゃあな♪」

八坂「またな♪」

さて王が居る場所まで急いで行くか。

## 第14話 復習

俺は今、諏訪子の特訓に付き合っていた。

神司「ん…ごめん、ちよつとトイレ。その間休憩タイム。」

浅矢「わかったよ♪」

神司「さて…」（怠惰。応答願うぞ。）

怠惰（何だ？王よ。ちゃんと拳銃は手に入れたぞ。今そっち向かっている。結界は張つとけよ？来るとき溶かして入るからよ。）

神司（やつぱり溶かして出てたんだ。そういや死人出してないよな？）

怠惰（ああ、出してないぞ。命令通りにな。喧嘩を売られたが幻覚、毒霧で倒しといたよ。と言うか幻覚の方は…あつ！解除しとくの忘れとった。解除！）

ナギ side

ナギ「くつ…はっ!?ナミ…?」

ナミ「お兄様ー!!」

ナギ「ぐへえ?!」

怠惰 side

神司「はあ…早く来い。」

怠惰「来たぞ。」

神司「早いな!? おい!…それで? その拳銃は?」

怠惰「はいこれ。どうするんだ? 嫉妬に渡すのか?」

神司「そうだな…ちよつと聞いてみるわ。(嫉妬)。応答できるか?」

嫉妬(なんだよ…こつちの星のせいでロリ女体化してこの星の民と遊びの途中なのが用は何だ?)

怠惰(ププwマジで? 嫉妬ちゃんかあ?)

嫉妬(ああ!? ふざけんな!)

神司(おい怠惰と嫉妬。何のために連絡してるんだよ。嫉妬、怠惰が取った拳銃を返して貰ったのだが、返すか?)

嫉妬(いや、いらなから神ノにあげるわ。怠惰のクソが取ったとしても俺は無限に出せるから。)

神司(良いのか? 貰っても。)

嫉妬(いいぜ♪じゃ、またな。)

神司「…さて、怠惰。もう用はないか?」

怠惰「て言うか! テメエが最初に呼んだのだろう!」

神司「あー…んじゃ帰っていいよ。」

怠惰「適当だよなあ！それじゃあどっかにブラブラ行ってくるわ。じゃあな♪」

神司「おう。またな♪」

さて諏訪子の練習の手伝いしに行きますか♪

神司「おーい！お待たせ！」

浅矢「もうー！遅いよー！それにしてもトイレ長かったね。」

神司「ごめんって。さて充分休めたか？」

浅矢「うん！そうだね。大分休めたよ♪」

俺ら庭に移動した。

神司「それじゃあ続きを始めるか♪さてまずは…おさらいと行くか。残りがあと3日

だからな。できるか？」

浅矢「勿論！」

神司「最初は突きを俺にしてみろ！」

浅矢「はっ…！」

神司「っ…！流石だ…！ちよつと前よりも凄く強くなっている…！よし！次は突きを

連続で！！」

浅矢「はあー！！！！」

神司「うおっ?!す…凄いい!!待て!次に行くぞ。」

浅矢「うん!」

神司「次は自分の気を一気に込めて俺に放て!!」

浅矢「く!!…:…はっ!!!」

神司「っ!!だが、まだできる。次は能力を使って見ようか。」

ちなみに諏訪子の能力は坤を創造能力だ。

浅矢「お願い!ミシヤグジ様!!」

グジ「シャー!」

ミシヤグジか。崇り神だな。と言うかミシヤグジは蛇の姿じゃないだろ。今は蛇の

姿で現れた。

神司「俺に攻撃してみろ。」

浅矢「行ってください!ミシヤグジ様!!」

神司(大丈夫だミシヤグジ。容赦無しで来てくれ。確かに神としては俺が上だが、普

通に容赦無しで来てくれ。)

グジ「シャ…:…シャー!!」

ミシヤグジは俺の腕に噛みついた。

神司「イテツ…」

普通の人ならそこで石化するのだが、俺には効かない。痛いだけだ。

浅矢「あ、あれ？石化しないの…？」

神司「どうやら俺は特種らしい。さて今回はここまでかな。残り3日だ。頑張るぞ

!!」

浅矢「オー!!」

## 第15話 決着

浅矢「来たよ！神奈子!!」

八坂「はははは！来たか！諏訪子！」

今回は待ちに待った諏訪子と神奈子の地位を取る為の決戦の日だ。何故か観客が  
いっぱいいた。よく見ると諏訪の国と書かれた旗と八坂寺と書かれた旗があった。し  
かもきっぱり判れていて…てか、神奈子の方は城じやないのか？あれ寺だったのか…

まあ、諏訪子の方は色々の特訓したが…倒せるのかな。

八坂「神司。特訓はちゃんとできたのか？」

神司「おう？当たり前だろ？お前に勝たせる為にちゃんと特訓したぞ？」

八坂「ははは！そうか！楽しみにしてるぞ！さあ！掛かって来い!!浅矢 諏訪子!!」  
だいぶ前に思ったけど大体お前は何様なんだよ。一応俺も神だがそこには何も言わ  
ないがな。

浅矢「望むところだよ!!」

さて、もうそろそろ決戦が始まる様だな。

八坂「すまないが、神司。戦いの合図を頼む。」

どうやら俺がこの戦いの指揮を執るそうだな。

神司「任せられたよ♪…さて！今から浅矢 諏訪子 対 八坂 神奈子の地位を掛けて決戦を行う!!ただし命を取る行為は一切許さん。お二方、準備の方は？」

浅矢「勿論良いよ！」

八坂「勿論良いぞ！」

神司「それでは………開始!!」

開始の合図と共に飛び出す二神。

浅矢「お願い！ミシヤグジ様!!」

グジ「シャー!!」

諏訪子はミシヤグジを召喚した。神奈子を石化させるのか？

八坂「祟り神か！そんなので私を倒そうなどまだまだぞ!!」

浅矢「くっ…!!」

うーん…神奈子は俺と互角なのか？少しと言うか俺と互角になりそうだな。勿論、俺は弱気の方だな。

浅「まだまだアア!!」

八坂「今ので立ち上がるか…。フフフ…アハハハハ!!もつと楽しもうぞ!!今、この時間を!!」

浅矢「っ！そうだね…：そうだよね！分かったよ！今より全力で行くよ！神奈子!!」

八坂「そーこなくっちゃな!!」

何だよ。自分たちの大切な地位を掛けてるのに…：二人供楽しく戦っているじゃないか♪そうそう♪殺し合いじゃない戦いは楽しまなくっちゃな♪

神司「さあーつてと…：もうすぐ決着かな。」

浅矢「おりゃあ!!」

八坂「甘い!!あんこの饅頭よりも甘い!!」

浅矢「そんなに甘くないよ!？」

神奈子…：今ごろそのネタ知ってる人あまりいないぞ？まあ、確かな。と言えるところが何カ所があるがな。

まあ…：そうだな…：手遅れになる前に片付けておくか。

神司「鈴鹿さん!」

鈴鹿「あっはい!!どうしたのですか？」

神司「ちよつと急用思ひ出したので、審判頼みます…!」

鈴鹿「!!…：分かりました。そつちの用を済ませたら早く来てください。」

神司「勿論です。じゃあ!よろしくお願いします!!」

さてあの二人の振りをしている神様を懲らしめに行くとするか。

◆  
ナギ「何ですか？どうしたのですか？」

ナミ「どうしました？」

神司「本物はどこにやった。正直に話せ。」

ナギ「何がですか？俺は本物ですよ？」

神司「伊耶那岐は俺とは言わない。」

ナギ「何だって!?!嘘だろ?!」

神司「嘘だよ。伊耶那岐は俺と言うよ…だけど、お前は嘘だろ!?!と言ったよな？て、ことはだ。お前は偽者だ。正体を見せろ。」

ナギ「チツ…!やはり神ノだけには無理だったか…!!」

すると伊耶那美は消え、伊耶那岐がクソ神の一人になった。そのクソ神とは

神司「ガブリエルか…」

ガブ「へへへ！テメエに殺られた後まだ息してて確かめたのにトドメを刺さない神ノが悪いのだよ！」

神司「つて言うか！本物の伊耶那岐と伊耶那岐はどこへやった!!」

ガブ「あの城の下の地下牢で眠らせているよ!!さて!!死んでもらうぞ!!神ノオオオ  
オー!!!」

神司「いつも思うが…うるさいんだよ…。今回は冷静に行くぞ…。千本刃…」

俺は自分の周りに999本の刃をバラつかせ一本自分で持った。

ガブ「なっ…!?何だ!?それは…!!」

神司「見りや判るだろ?千本の刃だよ。さて…塵となつて消えな!!」

ガブ「つああああー!!!」

神司「トドメだツツ!!」

俺はガブリエルに自分の刃でトドメを刺した。

神司「もう…生きるんじゃ…ないぞ。」

チャキーン

俺がいる場所のところだけ刃を仕舞う音が響いた。

鈴鹿「勝者!!八坂 神奈子!!!」

すると鈴鹿さんの声で神奈子が勝った声がと言う宣言が出た。

神司「な?!…何だつて!!」

俺は急いで諏訪子たちの方へ向かった。

## 第16話 一件落着！ 妖怪少女との出会い

神司「おい!?嘘だろ!」

「どうやらあの諏訪子が負けたらしい。」

鈴鹿「いいえ、残念ながら…諏訪子様は負けてしまいました。」

神司「てことは…」

浅矢「うん、私が土地神をやめなけやいけないんだ。」

八坂「だが、負けは負け。そこは何も言えないのが強者と弱者なのだよ。」

神司「……………なあ、皆。少し考えて見たんだが。土地神が二人いたらダメなのか？」

八坂「それは一体…」

神司「だから、諏訪子と神奈子の二人がこの土地の神になるのはダメなのかなと思つてさ。これはダメな決まりがあるのか?それと二人の神の方が信者対決とか争いとかする必要が無くなつて平和じゃないかな?と思つてね。これは良い考えじゃないか?」

浅矢「確かに…」

八坂「それも有りだな。よし!」

浅矢「決めた!」

浅矢・八坂「これから二人でこの土地を守る神として頑張ろう!!」

と言つて諏訪子と神奈子は握手を交わした。

すると…

観客「「オオオオオー!!!」」

観席からそれは良いぞ!!みたいな歓声が上がった。

まあ、丸く収まって良かった。

八坂「さて! こうなったからには貴女の神社に私を住ませてもらうわよ!」

浅矢「勿論! 良いよ! そうだ…名字変えよう…そうだね…洩矢(もりや)にしとくか

…さあ! 行こうよ!!」

八坂「そうだな! 鈴鹿…だっけ? 行くぞ!!」

鈴鹿「は、はい!!」

三人は神社の方へ向かった。

神司「さて、伊耶那岐と伊耶那美のいる地下牢のところに行くか…」



ナギ「はあー!?!? 神奈子様が浅矢の方と同盟を組んだ!?!」

とりあえず、地下牢から出た伊耶那岐と伊耶那美に今の状況を話した。

神司「お、おう。そうなんだよ。」

ナギ「マジですかー…分かりました。では私たちは他の星に…」

神司「ちよつと待て。他の星？それはどういうことだ？」

ナミ「あれ？貴方、神なのにそんなこと知らないの？私たちの生まれ故郷は天界。空の上よ？」

神司「そ…そうなのか…てか!?!いつ俺を神と知った!?!」

ナギ「最初からですよ。その少し出してる神力で丸わかりですよ。」

神司「マジかー…」

ナミ「貴方は生まれ故郷に戻るの？」

神司「俺に故郷なんて無いよ。まず俺の家族の母、父、姉が最高神に殺された。」

ナミ「そ、それは…ごめんなさい…。」

神司「まあ、その神は俺が殺したが…な。」

兄妹「……………」

神司「まあ、気にするな♪さて放浪の旅の続きでもするか。そうだ。諏訪子たちに会ったら神司は旅に出たと伝えてくれ。じゃあな♪また会えたら…な♪」



現在夜で自分は森をさま迷っていた。

神司「あー…今日は木の上で寝るかな…」

普通に下で寝てたら邪魔だし変な目で見られるしな。

神司「何か木の上って落ち着くな。」

何でだろな…夜って平和だな。

少女「キヤー!!!」

神司「……………」

男性「待て! 妖怪!!」

神司「よつと。」

俺は少女と男性の間に木から跳び降りた。

男性「邪魔だ!そこを退け!」

神司「……………」

男性「退けつて言つてるだろ！」

神司「せつかく……」

男性「ああ!？」

神司「せつかく……!平和だな。と思つたらこれか!?そして俺を眠らせろ!!あと!邪魔なのはお前だ!!それとも……俺がお前を殺すか……?」

男性「チツ!覚えてろよ!!」

神司「誰が覚えてやるもんか。大丈夫だったかい?嬢ちゃん?」

少女「う、うん。大丈夫。貴方は……誰なの?」

神司「俺か?俺は王亜。神司。嬢ちゃんは?」

少女「私は八雲。紫(やくも ゆかり)。」

神司「紫つて言うのか……君はどうしてあの人に追われてたの?」

紫「私、妖怪なの。しかも私、まだ小さいから狙われやすいの。それで私の夢を叶える為に人里に行つたらこの状況になつたの。」

神司「……その夢は何だ?」

紫「笑わない……?」

神司「勿論♪人にも妖怪にも夢の一つや二つあつたつて可笑しいことではないから

な。」

紫「……………言うね。私の夢は…人間と妖怪が仲良くなれる国にしたい!」

神司「……………いい夢持つてるな♪よし!その夢の手伝い、俺もするぞ!」

紫「いつもの人や妖怪だったらそこで笑うのにこんな手伝ってくれる人は初めて。」

神司「まあ、まだ順序良く行っていくか。まずは…家になる物を探すぞ!!」

紫「そうだね!!」

こうして俺、神司は紫の夢を叶える為に手伝うことになった。

### 第三章 新たな仲間・友人達

#### 第17話 奴隷の買い取り

俺は現在森の中にある一つの小屋に住んでいる。もう、一年以上住んでるが誰も来る気配がないのでまだ住めそうだ。

紫「ししよー！特訓しよーう！」

神司「まあ、待て。先にしといてくれ。」

紫「はあくいゝわかったよ。ししよー。」

さて食べ物が少ないからちよつと食べ物を採取してくるかな。

神司「ちよつと出かけるよ。一緒に来てくれないか？」

紫「うーんゝわかった。でもゝ」

神司「服装だろ？それだったらゝ」

俺は少し前に上の服が落ちていたので拾った。勿論、洗つてある。そして俺はその上の服を紫に渡した。

神司「どうだ？この服は。これだったらバレないだろ？」

紫「そ、そうだね。買い物？」

神司「そうだな…人里に買い物してくるか。」

紫「あつ、でもそこは…！」

神司「そこはどうしたんだ？」

紫「…危険…だよ。あと心が殺られるかも…」

神司「心配するな♪俺も一応妖怪だ。」

まあ…魔力を持つたな…

神司「なっ♪だから信じろ♪」

紫「わかった。でも覚悟はしといてね。」

神司「わーってるって。」

そして俺らは人里の方へ向かった。



へーえ…ここが人里か…

神司「さて、いる物買って帰るか。」

紫「そうだね！」

神司「さて、買う物買ったし帰るか。」

紫「そうだね！」

俺らが小屋の戻ろうとした時：

商人「どうだい!? そのお兄さん！ 奴隷はいかがかな？」

神司「ああ？……」

すると商人のお爺さんが小さな牢屋の中に獣人や妖精が入っていた。その牢屋に入っている皆は泣いた跡があったり、殴られて赤くなっているところがあったりしていた。

紫は「あちやく……」と言っているような顔をしていた。

商人「どうだい？ 一つ100万だけど、金あるかい？」

ここに来てからろくに仕事をしたことない俺がどうやって買い物したと思う？

正解は勿論、創造だ。強欲の能力を使わせてもらった。強欲の能力は金とか鉄を無限に出せるからな。まあ、と言うことで：

神司「そこにいる奴隷を全員下さい。」

商人「お兄さん。その分の金はあるのかい？」

神司「勿論。ただコレでもいいか？」

俺は懐から出すふりをして金塊を創った。

商人「これはなんだい？」

神司「これは金塊と言って金の塊だ。どうだ？これを三個出すが足りないですかね？」

商人「い、いや！とんでもない！全部持ってけ!!」

神司「ありがとよ♪さてと…牢屋から出して…帰るぞ♪お前ら。」



神司「…さてここ、森まで来たが。まずは、傷を治すか。あ…言つていいかな…ベホイミ!!」

俺は元奴隷の子たちの傷を癒した。邪神なのにこんなことできたのか。俺って。

紫「何か、ししよ…機嫌が良いよ。」

神司「まあな♪さて、君たちに嬉しい情報か判らんが、とりあえず言つとくわ。君た

ち、神に成りたいと思うか？」

子供たちは首をかしげた。

神司「まあ、成りたい人だけでいいが…俺はお前を寿命無しの神にできる。が！しかしだ。寿命が無くなる。つまり、死なないと言うこと。でだ、永遠に死なず、大切な人たちをその目で見届けなければいけない。それも永遠に。この条件がいい人は俺のところに来い。嫌な人は別にいい。もう、自由だからな。ただし、服と厚着は渡しておく。」

すると大半の子は服とかを持ってここから離れた。残ったのは男女の獣人の二人だ。

神司「二人は良いのか？」

少女「うん…！」

少年「しようがない…神様。」

神司「神司だ。君らの名前は？」

少女「シロホオン・マレット。シロって呼んで！」

少年「ドラ・マレット。普通にドラ。」

神司「そうか…なあ、二人は兄妹か？」

シロ「うん！」

神司「さて…神に成っても…良いんだな。」

ドラ 「はい…！よろしくお願いします！」

シロ 「うん！」

神司 「それじゃあ…目、閉じてろ。」

兄妹 「はい。」

神司 「紫も目を閉じててもらえるかな？」

紫 「うん、いいよ。」

えーつと…確かこの清水で良いんだっけ。昔にクソ天使たちの城に行つて清水を盗んだがまさか…今使う事になるなんて…これをぶっかけて…

神司 「よし！皆、目を開けてもいいぞ。」

ドラ 「これで…」

シロ 「神に…」

神司 「成つたよ。さて、唐突に質問だが、君らはこれからどうする？もし良かったらついてくるか？良いよな？紫。」

紫 「うん、何人増えようが旅は続くし楽しくなるしね♪」

神司 「そうだよな♪でどうする？」

ドラ 「うーん…」

シロ 「ついてく!!私一緒に神司についてく!!」

ドラ「ちよっ…！シロ…！！…はあ…わかりました。一緒に同行させて頂きます。」

神司「よし！決まったなら！紫！荷物を持って旅の続きするぞ！」

紫「はい！」

神司「さて…新しい服が必要だろ。はい、新しい服。あつちの草むらで着替えて来いよ♪」

ドラ「はい。」

神司「さて！行くか!!」

三人「二おー!!」

こうして新しく、二人を追加し、俺らの旅は続いた。

第18話 従者たちとの初めての旅で出会ったのは怪我している人でした。

神司「どこに行こうかなー…」

ドラ「そうだ！ 奴隷になる前にここに来たことあるよな？ シロ。」

シロ「えーつと…そうそう！ 近くに海があるよね！」

神司「海？ あるのか？」

紫「うみ？」

神司「でかい湖の一種だよ。ただし湖と違って塩が入っている様にしよっぱいんだよ。」

紫「へー…で、今からそこに行こうと？」

神司「そうだな。ちよつと寄るか。」

シロ「わーい!!」

紫「行こう行こう！ シロ！ どこにあるの!？」

シロ「この先まっすぐだよ！」

ドラ「ちよつと待てよ!!」

三人は先に海の方へ走って行った。

神司「はあ：やれやれ：俺も急ぐしますかね。」

俺も走って三人の方へ向かった。



? 「おぎやーあぁー!!!」

神司「!!」

この声は赤ちゃんの声!! あいつら：！ 一体何をした!!?

そして海が見え始めた時に三人が固まって何かを見ていた。

神司「どうしたんだ！お前ら!!」

ドラ「マスター！ここに赤ちゃんが!!」

シロ「こつちには片方の羽が千切れて倒れている女性が!!」

紫「その千切れた羽に赤ちゃんが包まれて赤ちゃんは無事です。」

神司「色々と言いたいことはあるが、とりあえず、女性の方の応急処置を行うからお前らは赤ちゃんの方を頼む。」

三人「はい！」

再生回復

神司「さて：：Recovery。」

怪我してるところは治した。

神司「息は……しているな。良かったー……」

女性「……ゴホッ！ゴホッ！……ガハッ！」

神司「まず落ち着け！深呼吸を！」

女性「スー……ハー……ありがとう。落ち着いたわ。それにしてもあの子は!？」

神司「その子なら、俺の付き添いが子守りしてるよ。」

女性「はあー……良かった……たくない！すみません、何かボードはないですか？」

神司「お、おう……あるぞ。」

すると女性はボードに何かを書き始めた。

女性『私の名前は稀神 サグメ（きしん さぐめ）。あの子が鬼人 正邪（きじん せいじゃ）。何でボードで話しているかと言うと私は、口に出すと事態が逆転してしまう能力があります……』

神司「なんだ、そんなことか。その能力、消しても良いぜ？」

サグメ『えっ？良いのですか？』

神司「勿論。すればいいか？」

サグメ『よろしくお願ひします。』

神司「3秒数えるとあら不思議♪もう、その能力はありません！試しに「私の目の前にいる者は生きています！」と言ってみてみ？」

サグメ「えっ…私の目の前にいる者は生きています…。」

神司「10秒待つぞ…5…2…1…0！な？死なないだろ？」

サグメ「あっ、本当だ。ありがとう。そういうや、貴方たちの名前は…。」

神司「俺は、王亜 神司。そして、正邪のところにいる三人は…右からドラ・マレット

ト。シロフオン・マレット。八雲 紫だ。」

サグメ「わかった。」

神司「そういうや、能力を消した時思ったのだが、あれは能力と言うか…呪いじゃないのか？」

サグメ「……………」

神司「触れては行けなさそうだ。すまん。」

サグメ「いえ、すみませんでした。答えますね。」

神司「いや、無理して言わなくていい。」

サグメ「わかった。それじゃああの子たちの方に行きましょう。」

神司「そうだな。行こうか♪」

そして俺とサグメはドラたちの方に向かった。

## 第19話 泊まる場所：

正邪「さーぐー…」

サグメ「ありがとね。皆♪はーい。せーちゃんどうしたの？」

正邪「おなかすいたー…：のはんたい…」

サグメ「お腹空いたのね♪せーちゃん

・  
・

今は反対言わなくていいのよ？」

正邪「ほんとうなの…？」

サグメ「うん！そうだよ！」

正邪「わかったよ！へへ…♪」

サグメ「フフフ…♪」

神司「まあ、良かった良かった。」

だが、今言えるのはあの呪いが『一時的に無くした。』と言うことだからな…いつ、呪いが発動しても可笑しくない。まあ、まだあの呪いとは限らないがな。

ドラ「どうしたのですか？神司さん。」

神司「…あつ、いや…何でもない。ただ少し考え事をな。」

ドラ「わかりました。」

神司「そうだ。サグメさん。」

サグメ「はい。どうしました？」

神司「このあとどうするんだ？」

サグメ「う〜ん…そうですね…」

正邪「さ〜ぐ〜！おなかすいた〜！」

神・サグ「……ご飯しよう。(しましろう。)」

神司「おい、三人共、人里に飯食いに行くぞ。」

紫「あれ？人里で食材買ったんじゃ…」

神司「……あつ、すっかり忘れてた。家探さなきや。」

サグメ「それだったら、良いとこあります。丁度そこに行く予定なので。」

神司「それは本当か！では行くか！」

正邪「どこに行くの〜？」

サグメ「お母さんの友人の家♪」

◆ サグメ「ここだな。」

着いたところに人がいっぱいいた。それも貴族っぽい人たちがいっぱい。

神司「あれ？どうしたんだ？」

サグメ「とりあえず行こう。せーちゃんはこっちにおいで♪だっこしてあげるから」

正邪「うん！」

神司「お前ら、離れんなよ。人がいっぱいいるしな。」

ドラ「勿論です。」

シロ「当たり前だよね！」

紫「はい。」

俺たちは人混みの中を越えてその奥の家の中に入った。

神司「何だよ…今、真夜中で深夜だぞ…」

サグメ「輝夜ー！永淋様ー！いますかー！」

何も返事が返ってこない。

貴族「開いたぞ！」

貴族「行け!!」

神司「っ！音無結界!!」

音無結界：結界が張られた外の声は絶対に聞こえなくする。どっちかと言うと…結界に向けて声を発すると反響する。

神司「とりあえず、これでいいかな。」

サグメ「危なかった…」

正邪「うう…」

サグメ「大丈夫だよ。せーちゃん♪」

ドラ「ナイスです！神司様!!」

神司「チツ…うるせえ奴らだ…」

シロ「とりあえず、輝夜さんと永琳さんを探そうよ！」

紫「そうね！」

神司「そうだな。」

俺たちは輝夜さんと永琳さんを探した。

神司「輝夜さーん！」

シロ「永琳さーん！」

サグメ「輝夜ー！」

正邪「えいりーん!!」

ドラ「神司様!この方では!？」

神司「おん?どうなんだ?サグメ。」

サグメ「輝夜…?」

輝夜「うう…はっ!サグ姉ええ!!!永琳!!サグ姉よ!!」

永琳「サグメ…?ど、どうして…サグメが…」

サグメ「や、やあ…」



輝夜さんたちは何でこんなになったか事情を話してくれた。

神司「ほう、話を整理すると…輝夜さんの美しさで村の人が来たと。」

永琳「あと…貴方たちだから話すわ。あと半日で月から迎えが来て私たちをここから

引き剥がす様に月に連れていくのです。無理やりにです。」

サグメ「月から…か…」

ドラ「どうか!?あと半日ですか!?神司様!自分はこの人たちを助けたいです!」

神司「まあ、いいけど…」

シロ「私からも!!」

神司「だから…いいk…」

紫「私も!!」

神司「聞けよ!人の話を!!いいよ!と何回も言おうとしたぞ?!それを阻止するのがお前らの役目か!」

三人「「す、すみません…」」

神司「まあ、と言うことでその阻止する作戦、自分と従者たちは参加します。」

サグメ「神司さんは救護班ですかね♪」

神司「誰が救護班だ。確かに回復させれるが、俺は攻撃担当だぞ?」

攻撃するときは…殴りと蹴りと嫉妬の拳銃だな。

永琳「わかりました。その間準備をしましょう。」

全員「「賛成!!」」

## 第20話 バッドエンド

ドラ「あの…すみません。」

貴族「開いたぞ!!」

貴族「どけ!小僧!!」

ドラ「なっ…!!誰が小僧ですか!?!……ま…まあいいや…それにしても貴方たち。ここに居たら死にますよ?今から死人が出る戦いが始まるので。」

貴族「私たちはここから離れるつもりはないぞ!」

貴族「そうだ!そうだ!」

ドラ「わかりました。では、どうぞ!」

テレポート

神司「おう!瞬間移動!!!」

貴族の皆を自分の家に瞬間に戻した。

輝夜「ありがとう。えーつと…」

神司「そういや、自己紹介すんの忘れてたな。俺は王亜 神司。男の獣人がドラ・マレット。女の獣人がシロフォン・マレットだ。そしてあの子が八雲 紫だ。」

輝夜「わかったわ。改めてありがとう。神司。」

神司「いやいや…これからだろ？月から使者が来るのは。」

サグメ「そうだぞ。輝夜。神司の言う通りだ。だが神司、気は抜くなよ。月の使者たちは今ここに無い機械等を使ってくる。つまり、ここより月の方が技術は進歩しているのよ。」

神司「ん？なんだ？要するにその兵器をぶつ壊せつてことか？」

サグメ「いや、そういうことでは…」

神司「だけど、ぶつ壊せば月の使者は何もできないだろ？」

サグメ「まあ…そうですね。」

神司「あつ、そうだ。月の使者が来たとき正邪たちはどうする？」

サグメ「紫ちゃんもまだ子供だし、せーちゃんは最もダメですね。とりあえず、私、神司、永淋は輝夜やドラたちを守りましょう。」

神司「いや、守るのは正邪と紫でいい。ドラとシロには俺からプレゼントを上げるしそれで一緒に戦ってもらうぜ。まあ、そういうことで今からドラとシロにプレゼントを上げてくるよ♪」

◆  
ドラ・シロ「プレゼント？」

神司「ああ、武器と能力だ。まず能力からだ。ドラには雷と炎を操る能力を、シロには風と水を操る能力を上げようと思うがいいか？」

シロ「私もそれでもいいよ！」

ドラ「俺も賛成です。」

神司「良かった♪んじや、それに適した武器を上げるよ。ドラには「雷炎」。その名の通り能力を上げてくれる刀だ。シロには「ウリエルの加護」だ。この加護は風と水を自由自在に操れるぞ。刀、剣、拳銃等々だ。ちなみに拳銃と言うのはこういう物だ。」

俺は嫉妬から貰った拳銃を出した。

シロ「ヘー♪」

神司「まあ…使うのは本番の時で…クククツ…♪」

ドラ「どうやらその本番が来た様ですよ。」

空から月の使者が降りてきた。

使者「さあ、輝夜と永淋はどこだ。」

神司「さあな？だが知ってても教えないがな♪」

使者「っ！やれ!!」

使者「二はっ…!!」

どうやら怒った様だ。

神司「サグメ！シロ！チビたちや輝夜たちを守っとけ!!」

サグメ「わかった！」

シロ「了解!!」

神司「ドラ…。」

ドラ「どうしました？」

神司「許可を出す。暴れろ。本能覚醒だ。」

ドラ「えっ…それは…」

神司「お前の自由だ。…あつ、一つ報告。」

ドラ「??」

神司「予知が頭ん中走ったんだ。危険だと思ったら俺を置いて遠くまで逃げろ。」

ドラ「神司様…それは…」

神司「そして…悲しいことにこの作戦は失敗する。」

ドラ「っ!?」

神司「どうやら…俺の能力は「運命・予知を見る能力」らしい。だから…その運命から逃れる為に勝つぞ!!!」

俺はそう言つて月の使者たちの方に走つた。

使者「射撃班!!発砲用意!!」

使者「二はっ!!」

神司「射撃?こつちの方が早いわ!!サグメ!シロ!やれ。」

シロ「水銃!ヤッホー!!」

サグメ「シロ、はしやぎすぎ。少し落ち着きなよ。まあ…わからないことは…:…:な  
いっつ!!!」

使者「二ぐわー!!!」

流石は二人だ。サグメは弓で攻撃し、シロは水で銃を作り撃つ…か。サグメの弓矢は無  
限にできるらしい。もう能力を弓矢を操る能力で良くね?

使者「おりやああー!!!」

ドラ「……………」

スツ…………

使者「ぐがあ?!」

おお…ドラも凄いな。さつき渡した雷炎をもう扱ってるとは…。凄いな。

使者「二おりやー!!」

おつ、次は俺の番か。

神司「クククツ♪この強さで俺の予知では敗退か？笑わせるぜ♪」

使者「そうだな。だが、死相は貴方だけではないのです。」

神司「はあ？っ！まさか…!!」

使者「遅かったなあ！テメエの大切な者たちを回収させてもらうぞ!!」

サグメ「貴方は…！流弥（りゆうや）?!」

流弥「サ、サグメさん?! い、いや！今は任務中…！すみません。貴女たちを消したり殺したりさせて頂きます…!!」

神司「消したり殺したりって結局は殺してるじゃん。」

流弥「うるさい!! 殺すたら殺すんだ！」

神司「むちやくちやだ…」

俺はそう思った。その時に草の中がガサガサと音がした。

神司「誰だ!!」

妖怪「グへへへ…お前らか…次こそは俺の物になれよ？輝夜ちゃん？」

草から妖怪がうじゃうじゃと出てきた。

使者「お前らには渡さん!!お前ら!強行突破だ!!」

神司「まさか!?!このことか!?!てことは…サグメ!シロ!ドラ!!俺も参戦するから永琳と輝夜と紫と正邪を死守しろ!予知から逃れる!!」

輝夜「キヤー!!」

使者「さあ!来い!!」

永琳「輝夜様!!」

使者「お前もだよ!永琳!!」

永琳「キヤツ!」

使者たちは輝夜たちを乗せて帰ってた。

神司「手遅れかよ!」

妖怪「お前も邪魔をするのか?」

神司「チツ…ドラ、シロ、サグメ。紫と正邪を連れて逃げる。」

ドラ「で、でも…!」

神司「いいから行け!!」

ドラ「つつ!!わ…わかりました…!!また後で…!」

ドラたちは俺から遠くのところまで走って逃げた。

しかも、とても大きなフラグを置いてだ。

神司「おいおい…さして…覚悟をしろよ。」

妖怪「ふん！お前一人何ができる！！こつちには100以上もいるのだぞ！しかも、もう用はないのだぞ？」

神司「確かに…もう何も無い。だが、運命には逆らえない。俺を殺す気で来い。」

妖怪「お言葉通り…♪殺れ！！お前ら！！」

そして俺は妖怪たちにボコされて気を失った。

## 第21話 冥界の少女

? 『おい！起きろ!!神司!!』

神司「…っ！誰だ！」

? 『やつと起きたか…♪』

神司「…：「邪神王」か…」

邪神王： 神司は家族を殺されてた恨みで禁忌を犯し悪魔の頂点、「大悪魔邪心王」と全ての生命を渡す代わりに不死の力を貰い契約をした。

そして邪神王は神司の体に憑依し、今に至ると言うことである。

神司「てか、何用だよ。まったく…」

邪神王『はあ!?!助けてやってそのいい様か!?!』

神司「ああ?それってどういう事だよ。」

邪神王『教えてやるよ。あの時の真実をなあ。』



妖怪「キャハハハ！弱いなあ！」

神司「なあ♪そうだな♪本当に弱い…。」

妖怪「何?!まだ生きているのか?!」

神司「勝手に殺すなよ…さて教えてやろう…俺の名前は大悪魔邪神王。初期の悪魔だ。」

妖怪「ぼ、ボス!!こ…コイツはあの怠惰様の王であの昔に四大天使を全員殺したと言  
うあの悪魔です!!」

妖怪「なっ…何だと!？」

神司「何だ。怠惰を知ってるのか…だが、怠惰の奴だ。こんな事知らして最後には飽  
きて辞めるはずだ。あと…俺の事も知ってるのか♪口封じが必要だな。なら、本気で我  
を殺して見よ!!」

神司 side:

邪神王『まあ、そんな事があって、妖怪たちを消してやった。あと流弥だっけ？アイツからお前に対して伝言だ。』

神司「何だ？それはまるで流弥が死んだ様な言い方だが…」

邪神王『殺されたんだよ。月の使者に置いてかれてな。そのあと、俺が妖怪共と死闘していたら流弥の方に妖怪が行って…殺された。そして、そいつから伝言だ。「サグメちゃんをしっかりと守って上げろよ。」とな。』

もしかしたら…サグメと流弥は結婚していてその間に正邪がいる…と言うことか…？

神司「わかった…それなら早く戻るぞ。」

邪神王『それは無理な話だ。』

神司「何!?!」

邪神王『ここは冥界。冥界は死んだ者が集う場所。簡単に帰れると思うなよ。』

神司「…って！それはテメエの仕業だろ!?!」

邪神王『クツクツクツ…♪ご名答!』

神司「ふぎけんな!!」

少女「あのー…どうしたの?」

神司「うん?」

声が出たところを見てみると和服の少女がいた。

神司「どうしたんだ?」

邪神王『まず、おかしい点を指摘しろ。ここは冥界だ。まず、人間の少女がこんなと

ころにいるはずがない。』

神司「っ!うるさいぞ。邪神王。」

少女「??」

邪神王『うるさいのはお前だ。神司。わかった。体変われ。』

神司「何を言って…」

少女「??」

邪神王「たくよ…さて、君は何でここにいるんだい?」

少女「私…ここに住んでるの。」

邪神王「あ…ありえねえ…名前は…?」

少女「西行寺 幽々子(さいぎょうじ ゆゆこ)。それが私の名前。」

邪神王『変われ、神司。』

神司「了解。わかったよ♪急だけど、今日、泊まらせてくれない？」

幽々子「いいよ！ついてきて！」

俺は幽々子についてつて幽子々の家に向かった。

## 第22話 予知

幽々子「ここよ！」

うわつ…普通に凄い和風豪邸…てことは…

？「幽々子様…お帰りなさいませ。後ろの者は…？」

幽々子「そういや、貴方の名前は？」

神司「俺は王亜 神司。今日は泊まる宿が無いから幽々子に頼んで泊まらせてもらうことになりました。よろしくお願いします。」

俺はペコリと頭を下げた。

？「わしはここの庭師をさせてもらっている魂魄 妖忌(こんぱく ようき)じゃ。そして、この子は…」

子供!?! いつ来た!?!

？「妖夢(ようむ)だよー！」

妖忌「まあ上がって下され。神司殿。」

神司「それでは…お邪魔します。」

中に入ればもつと和風だった。

妖忌「それにしてもナイスタイミングでしたな！」

神司「何がですか？」

妖忌「夕飯ですよ！しかも今回一人分作りすぎたんですよ。」

神司「と言うことは……？」

妖忌「貴方の分があると言うことです！」

神司「ありがとうございます！」

そして、皆で合掌して食べ終わって自分は縁側で一本だけ凄く目立つ桜を見ていた。

妖忌「どうでしたか？お味は。」

神司「とても美味しかったです。ありがとうございます。」

妖忌「いやいや、客にはおもてなしをする。それが当たり前ですよ♪」

神司「ははは♪そうですね♪それにしても、あの桜って何ですか？」

妖忌「あれは、西行妖（さいぎょうあやかし）。幽々子様の親を殺した桜の形の妖です。」

神司「……………」

何も言えない。

妖忌「……そうじゃ！気分転換に一本勝負しませんか？貴方も刀を使うのでしよう？」

神司「えっ……？」

見ると腰に刀と言うより刃があつた。

神司「あの時のか……」

ガブリエルの件の時のだ。

神司「わかりました。受けて立ちましょう！」

妖忌「なら庭に出ろ。そこでじゃ。」

◆  
妖忌「はっ！」

神司「っ！まだまだあ！」



神司「わ…わかり…ました…。」

妖忌「…それじゃあ、今回は終わりじやな。」

と言つて妖忌は刀を片付けた。

神司「は、はいっ！」

思わずこんな声を出してしまった。

予知

この事は幽々子と妖夢にはごめんだが黙つて置こう。幽々子に最も関係する話だが

…だが…一体誰が殺しに来るとだろうか…

するとあの西行妖のことが頭に通つた。

神司「まさか…！」

俺は西行妖の方に向かった。



神司「近くで見たらこんなに大きいのか…違う違う…邪神王、この木を解析できるか

？」

邪神王『誰が転○ラの大賢者だ！…だが、解析はできた。』

神司「何が解った？」

邪神王『この西行妖は、今まで幽々子の一族の魂を喰い続けている。つまり、転○ラで言う、補食者と言うことだ。もつと解析して行ったら、コイツは危険を感じたら莖を自由に伸ばして敵に攻撃するらしい。少しシミュレーション的なのをすると、鉄を貫通させるほどの力をコイツは持っているぞ。』

神司「コイツが？笑わせてくれる。それなら俺たちも死守しなきゃな。」

邪神王『ああ、たまに俺も交代するぞ。』

神司「わーってるよ。」

キン！

神司「チツ：傷一つも付けない…か。」

邪神王『それなら戻るか。作戦、対策をな。』

神司「そうだな。」

俺は幽々子の家に戻った。

## 第23話 VS 西行妖

神司「幽々子に言うか？」

邪神王『うーむ：言うべきか：黙っておくべきか：』

神司「でも、言わないと言ったじゃん。」

邪神王『というか！何故この話に至ったんだ!?!』

確か：この前は邪神王に西行妖を解析してもらった後、作戦会議をしていたらこの話に至った：

神司「：：つて感じかな。」

邪神王『はあく：我らは話・作戦会議もできないのか：』

神司「とりあえず寝るか。」

邪神王『何故その答えに辿り着く!?!』

神司「仮眠&睡眠だよ。本番で寝不足だと負けるだろ？それに今は深夜の一時だ。」

邪神王『うっ：わ、わかった。では、我一人で少し考えさせてもらうぞ。』

神司「わかったよ。それじゃあ、お休み。」

そして、俺は朝の六時まで寝ていた。

そんな時：

邪神王『おい！起きろ！神司！』

神司「どうした!?邪神王！」

邪神王『妖忌が幽々子を探している！今は妖夢も幽々子の搜索を手伝っている！我々も探すぞ！』

神司「行く場所は一つだ。行くぞ。」

邪神王『やはり…彼処か…!』

神司「ああ。多分、彼処しかない。」

神・邪「『西行妖!!』」

俺らは西行妖の方へ向かった。

神司「はあ…はあ…」

妖忌「神司殿ー!!」

神司「妖忌さん！」

妖忌「まさかと思うが彼奴か!？」

神司「多分…!そうだと思います。」

妖忌「一つ言わせてもらう。」

神司「何ですか？」



邪神王「りよーかい！さて…万本刃。」

神司『相変わらずチートだな。』

邪神王「そりやどーも！行け！」

すると西行妖の周りに万本の刃が囲った。

邪神王「チエックメイトだ。封印 邪・神刀!!!」

その言葉の合図に俺と邪神王は分かれて…

邪神王「行くぞ!!」

神司「あつたりめえよ！戦術 斬切り…！」

邪神王「クカカツ！双銃剣!!」

インパクト・ストライク・シヨット

神・邪「合技 衝撃中心打ち!!!」

そして西行妖の真ん中を俺と邪神王で貫いた。

西行妖「グギャアアアア!!!」

西行妖が俺たちに攻撃を仕掛けた。

神司「邪神王！」

邪神王「うるせえ！」

邪神王は俺の中に入った。



ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
 西行妖「キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
 邪神王「神司!!分かれろ!!」  
 神司「色々とムカつくなあー!!行くぞ!」  
 神・邪「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
 ラオラオラー!!!ソツツツしてっ!!!」  
 神司「人世斬っ!!!」  
 邪神王「邪王刃っ!!!」  
 西行妖「キツツツシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
 西行妖は斬られて西行妖は消えた。」

## 第24話 奇跡の瞬間

幽々子が西行妖に殺されてから三日がたった。妖忌は

妖忌「主人も助けられなくてその主犯をも倒せないなど庭師として失格だ。」

と言いながら俺たちから離れて、「少し旅に出る」と言い残しどこかに消えた。しかも妖夢を置いてだ。

神司「全くだよな…」

邪神王『自分の子を置いて旅に出るはふざけたお爺さんだ。』

妖夢「しんじい〜。」

神司「うん？どした？」

妖夢「おなかすいたよ〜。」

邪神王『ほらほら得意の料理して来いよ♪』

神司「わかつたよ。ちよつと待っててね？」

妖夢の頭を撫でながらそう応える。

妖夢「うん！」

妖夢は元氣よく頷く。

神司「さて…何をやるか…」

俺はそう言いながら食堂へ向かう。

邪神王『それなら、「邪神の特製チャーハン」なんてどうだ?』

神司「却下だ。それなら普通のチャーハンでいいだろ。」

邪神王『ちつ…』

さて…ご飯は…

神司「よし!炊いてあるな!」

釜でだがな。だが、それが美味しい。

まずはフライパンを取りだし約三合だったご飯を一合だけフライパンに入れる。そのあとに冷蔵庫にあったキャベツを半分<sub>に</sub>切つてそのまた半分。それをバラに入れる。そして卵を二個割つてフライパンに入れる。そして火をついたらひたすらかき混ぜてここで俺の決め技…!!

神司「よつと…!」

フライパンを思いきり上に上げ炒めてあるご飯を上<sub>に</sub>上げる。すると下に炒めたご飯が落ちてくる。それをフライパンで華麗にキャッチ!!

神司「決まった…!」

邪神王『お見事!!』

それを約五回する。勿論全て成功だ。

この動作をする一回一回に塩コシヨウを入れる。すると上手く作れるのだ。

神司「妖夢ー！今回はチャーハンなんだが少し焦げてて旨いところ作るかー？」

妖夢「うーん！」

神司「了解!!」

「少し焦げてて旨いところ」…それは…少し固くて焦げているところを言う。しかも少し米が集まって小さな煎餅感覚で美味しいところなのだ！

神司「よし！とりあえずできたな！邪神王！味見よろしく！」

邪神王『なら交代しろ。』

邪神王「……よし。味見するぞ。」

邪神王は俺の体を使って作ったチャーハンを味見した。

邪神王「……！流石だ！やはり旨いな…!!」

神司『しやつ！交代だ!』

神司「……どんな感じ…うん！我ながら上手く作ったな!!」

俺は皿二枚とフライパンを机の上に置いた。

神司「はいお待ち！神司特製チャーハンだ!!」

妖夢「うわー！おいしそー！」

妖夢はこの勢いで元から用意してあったスプーンで一口食べた。

神司「どうだ？美味しいか？」

妖夢「おいしいよ！これなら何杯でもいけるよ！」

神司「ふはは♪おかわりあるからいくらでもどうぞ♪」

妖夢「やったー!!」

神司「それじゃあその間にちよつと行つて来るよ。」

妖夢「わかったー！」

時間はバラバラだが、毎日行つてる場所がある。それが…

神司「元気か…？幽々子…。」

そう、幽々子のお墓参りだ。

邪神王『…………やはり少しずつだが育つて来ているな…。』

神司「…西行妖の芽だろ？」

俺たちが西行妖を倒してから、そして妖忌が去つてから幽々子にお墓を作ろうとしたら、ちょうど幽々子が死んだ場所に芽が出ていた。最初は雑草かと思ひ抜こうとしたが全く抜ける様子がない。しかも俺の靈力を吸いとつていた。まさかと思ひ邪神王に解析してもらつたところ「西行妖の芽」とわかつた。つまりこの西行妖はバラバラに切つたとしても根を抜いたしても西行妖は勝手に生えてくる。

邪神王『…確か…幽々子の死体はこの下に埋めた筈だよな…』

神司「うん？そうだが…今ごろどうした？」

邪神王『埋めた時は少し膨らんだのに今は無くなっている。』

神司「腐って縮んだんじゃないのか？」

邪神王『いや、それでも少しは膨らんでいる筈だ。神司、少し体を借りるぞ。』

神司「お、おい…」

邪神王「…よし…」

邪神王は創造してシャベルを出した。そしてシャベルで幽々子を埋めた場所を掘始  
めた。

神司『おい！邪神王!!』

邪神王「……！やっぱりだ……！」

神司『何がだ。』

邪神王「当たり前だよ。ここにはもう幽々子の死体は無い。体ありがとな。」

神司「……なっ！マジかよ……」

すると妖夢がいる家から懐かしい霊力を感じた。

神司「まさか……！」

邪神王『そのまさかだろうな。』

俺は妖夢がいる家に向かった。

神司「ただいま!!」

俺は勢いよく玄関の扉を開けた。

? 「あらゝ? 貴方は誰かしらゝ?」

神司「ゆ…幽々子…!」

そこには死んだはずの幽々子が大人の姿で出てきた。

## 第25話 主人の帰り 邪神の帰り

神司「ゆ…幽々子…」

幽々子「あの…貴方は誰なの？」

神司「えっ…？」

邪神王『は…？』

妖夢「ゆゆこさまー！」

神司「……とりあえず中に入るぞ。」

幽々子「ええ♪」

俺らはとりあえず居間に行った。

神司「えーつと…俺のことは覚えてるか？」

幽々子「ごめんなさい。貴方のことは覚えていないの。」

神司「そうか…ならこの子は？」

俺は妖夢に指を指す。

幽々子「妖夢ちゃんね。覚えているわ♪」

うむ…どうやら俺のことは覚えていないと…

神司「他に何か覚えていることはないか？例えばここにいる他の誰かとか。」

幽々子「う〜ん：そうだわ！」

神司「何か覚え出したか!？」

幽々子「お腹空いちやつた♪」

邪神王『おいおい：』

神司「は、ははは!!了解したア!妖夢にも作ったが俺特製のチャーハン作ってやるぜツ!」

妖夢「ようむも手伝う〜!」

幽々子「待つてるわよ〜。」

今回チャーハンを作るのは二回目だ。確かに決め技が上手くできるはわかるが二回目 Ⅱ 十回は疲れる。

味見は妖夢にしてもらった。

神司「はい、お待ち……!神司特製チャーハンだぜ……!」

幽々子「うわ〜!おいしそ〜♪いただきま〜す!」

神司「よ、よし……この間休むか……」

幽々子「おかわり!!」

神司「……は?」

幽々子「美味しかったわ♪おかわりよろしくね〜」

神司「……妖夢。俺の特製チャーハンの作り方伝授してやるから二人でチャーハン作るぞ……」

妖夢「わかった！」

今回の疲労は西行妖よりも大変だ…



幽々子「ごちそうさまでした〜♪」

神司「はあ…はあ…」

妖夢「疲れたー！」

このあと幽々子は俺と妖夢が作ったチャーハンを合計20は食べた。流石に疲れた。途中、邪神王と交代し、『邪神の特製チャーハン』というの作ってもらった。幽々子はそれを美味しそうに食べていた。

幽々子「ありがとね〜二人共〜♪そーいや貴方の名前は…？」

神司「はあ…ん…？俺か。俺は王亜 神司。」

幽々子「よろしくね♪」

神司「ああ、よろしく。」

まずはここからだよな。

くその夜く

邪神王『神司。』

神司「どした？邪神王。」

邪神王『帰る準備ができた。いつでも帰れるぞ。』

神司「…！わかった…別れの挨拶してから行くか。」

邪神王『クハハハ！今ごろ挨拶してかえるだあ？ふざけんよ。いつも誰にも挨拶せ

ずにいなくなったじゃないか。』

神司「あれとこれは別だ。」

邪神王『そりゃあ、あれだ。「イイワケ」ってやつだな。』

神司「っ…！」

邪神王『まあ、そういうことだから黙って帰れ。その後また会えるんだよ。そして怒

られる!!』

神司「っ！ふざけるな！」

邪神王『クハハハ！すまん、少しからかってみただけだ。』

神司「それならいいけどよ…明日の朝挨拶して帰してくれ。」

邪神王『りよーかい。』

神司「帰ったらアイツらのことも心配だからな。」

邪神王『神獣兄妹と弟子と正邪。そして、愛人だな♪』

神司「愛人ってまさか…！」

邪神王『頼まれたって言っただろ？「サグメを頼む。」ってよ。』

神司「……わーっつたよ…／／／」

邪神王『あれー？♪テレてるのかーw』

神司「テレてねーよ！」

邪神王『クハハハハハ♪』



妖夢「えー！もう帰っちゃうの!？」

神司「ごめんな。俺も帰らなきゃいけないんだ。」

妖夢「ぶーぶー…」

妖夢はほつぺたを膨らましている。

神司「ははは…ごめんな。幽々子も。」

幽々子「いえいえ貴方のご飯美味しかったわよ♪また来ていいのよ♪」

神司「勿論また来るつもりさ♪んじや、幽々子。妖夢のこと頼むよ。妖夢、ご飯作れるか？」

妖夢「うん！だつて妖夢は12だよ！」

成長が早いぜ…ついこの前は大分小さかったのにな。まあ、このことは置いて…

神司「それじゃあそろそろ帰るわ。またな♪」

妖夢「またね！」

幽々子「また来てよね！」

俺は二人に見送られながら帰り道を歩いた。

神司「それじゃ、邪神王。よろしく頼むよ。」

邪神王『了解。ワープゾーンを作った。これに入ればアイツらのところにワープできる。』

神司「ありがとう。」  
俺はワープゾーンに入って元居た世界に戻った。

## 第四章 百鬼夜行

## 第26話 懐かしき友

ここは…

神司「森か…それに綺麗な満月…。」

邪神王『満月の事はどうでもいい。まずは弟子たちを探そうぜ。』

神司「そうだな。」

？「何がそうだなだ？」

神司「…鬼か…。」

？「どうしたんだ？鬼軍二等兵。…侵入者か。」

天狗もいるのかよ…

鬼「天狗三等兵か…ああ、そうだ。」

神司「何だ？ここはお前らの敷地内か？」

天狗「いや、俺らは警備隊で東西南北で守りがいる。」

神司「へえ…話変えるけどさ。」

鬼「何だ。」

神司「まあ、人探しさ。ちよつと五人ほど。」

天狗「知つてたら教える。」

神司「ありがとう。」

鬼「で、誰なんだ？」

神司「ああ、シロフォン・マレットとドラ・マレットと八雲 紫と鬼人 正邪と稀神

サグメの五人だが…何か知ってるか？」

鬼「…マジか…！」

天狗「シロさんとドラさんとサグメさんと紫さんは東西南北で守っています。」

そう来たか…と言うか守りつてどういう事だよ。いや、確かに神獣だがよ…あれ？

神司「正邪は？」

鬼「はて？此方には正邪と言う者は知らないぞ？」

おかしいな…サグメたちと一緒にいた筈なんだが…まさか…な。

神司「守つてる四人に会わせてくれないか？」

天狗「別に良いが、四人に何の用だ。」

神司「俺の大切な仲間なんだ。頼む。会わせてくれ。」

天狗「わかりました。では…」

良かった。話が分かる天狗で。

だが、鬼は違った。

鬼「なあ、知ってるか？青年よ。」

神司「何だ？」

鬼「鬼は戦闘狂なんだよ。」

神司「なるほどねえ〜：それで俺と戦いたいと。」

鬼「勿論。どうだ良いか？一勝負。」

神司「別に良いぞ。」

邪神王『俺は…』

神司「別にいい。」

邪神王『了解。』

神司「さて…掛かって来いよ！えーつと…」

くるみ

鬼「俺は胡桃！お前は…？」

神司「俺は神司だ。さあ…改めて掛かって来い!!」

胡桃「おーいつと！」

神司「ほい。」

俺は胡桃の拳を受け止めた。

神司「何だあ？お前の実力はそんなもんか？」

胡桃「やるねえ♪君も戦闘狂なのかい？」

神司「一応な♪」

胡桃「面白いねえ♪さて本気を出すかな…！」

神司「やつぱり…俺も本気出すぜ…！」

俺と胡桃が同時に本気を出そうとしたとき…

？「はいはい。そこまでだ。」

誰かが俺らを止めた。

神司「……」

天狗「総代将様…！」

胡桃「何でだよ！今からいいところなのに！」

？「たく…胡桃はここでの一番力が強いものだから…暴れたらダメだよ。」

胡桃「しゃーねえな…」

てんま

？「天魔ちゃんもさ。止めても良いときは止めても良いんだよ。」

天魔「わかりました。」

？「さて…君は誰だい？」

神司「お前こそ誰だ。その様子だとこの二人のボスっぽいな。」  
？「流石だね。そうさ、僕がこの二人の総代将のぬらりひよんだ。」

ぬらりひよん　：　妖怪たちの総代将。特徴は「ぬらりと現れ、ひよんと居なくなる」と言われている。妖怪　百鬼夜行の先頭にいるとも言われている。

なるほど。そう来たか…ぬらりひよんか…

ぬらり「で、君は何しに来たのかな？もしかして…」

神司「ゴクリっ…」

ぬらり「客人か？」

ズコツ

何でだよ。ぬらりひよんのその言葉で俺と天魔と胡桃は転じた。

ぬらり「あ…あれ？違った？」

神司「いてて…俺は人探しに来ただけだって…」

ぬらり「そうなのか…ごめんね。で、人探しって誰？」

天魔「あのですね。」

天魔は俺が先程言ったことをそのままぬらりひよんに伝えた。

ぬらり「…：…良いよ♪着いてきなよ♪案内するよ。」

神司「ありがとう。ぬらり…」

ぬらり「ぬらりで良いよ。単純にね♪」  
神司「うん。改めてありがとう。ぬらり。」



く東の守く

ドラ「神司様!？」

神司「よお、久しぶりだな♪ドラ♪」

いつの間にか少し背が伸びていたドラ。

ドラ「どこ行ってたんですか!？」

神司「冥界だな。」

ドラ「……深追いはしません。」

神司「じゃあ、次よろしくね。ぬらり♪」

ぬらり「次はね……」

◆  
　　西の守

シロ「マスター!!」(シ、ド)

神司「うがっ?!

泣きながら突進してくるシロ。

やっぱりシロも少し成長している。

神司「いてて…」

シロ「どうしたの!? マスター!?

マジかよ…気づいていなかったのか…天然なのかバカなのか…

神司「き…気をつけような…突進するときは…」

シロ「ご、ごめんなさい。マスター。」

神司「たくっ…」

ドラ「妹がすみませんでした。」

神司「いや全然大丈夫だ。」

ぬらり「次行きますか♪」



「南の守」

紫「師匠!？」

やはり紫も成長している。特に身長が。

神司「やあ♪紫ちゃん♪元気か？」

紫「遅いですよ…」

やべっ…泣かせてしまった…。

神司「ご、ごめんって！」

紫「嫌です！」

神司「わかったよ。着いてきてくれたら何かあげようかと思ったのになあ…」

俺は紫に少しニヤつきチラ見した。

紫「…はあ。わかりましたよ。後で服を作ってください！」

神司「了解!!」

ぬらり「うるさいよ。神司くん。」

神司「あれ？俺の名前言ったっけ？」

ぬらり「天魔ちゃんに聞いたよ。」

神司「わかった。」

ぬらり「最後は北だね♪」



く北の守く

サグメ「……」

神司「サグメ……」

サグメ「止めなさい。私に近寄ると厄が訪れるわよ。」

神司「サグメ……」

俺はもう一度サグメに魔法を掛けた。

サグメ「これは……！」

神司「懐かしいだろ♪お前と初めて会った時に掛けた魔法だ♪これで良いだろ？」

サグメ「……バカ」

神司「ごめんな。少し冥界に居た。」

サグメ「死んでたのか？」

神司「ああ、あの妖怪たちの後にな。」

ドラが見事にフラグを建設したからな。だけど死んだって言うか邪神王の野郎が冥界に飛ばしたのだけどな。

ぬらり「んんっ！」

神司「ご、ごめんぬらり。」

ぬらり「いやいや、今回は一つの相が当たったんだ。」

神司「……どういことだ。」

わざわい

ぬらり「『禍の神が舞い降りし、四方の守り神を見つけに行くだろう』とい

しらぎ

う相が俺のパートナーの河童の新羅義が出して言ったんだよ。禍の神……それは君だろ？神司くん。そして四方の神……つまり、ドラ、シロ、紫、サグメの四人……」

神司「それがどうした。百鬼夜行の総代将。妖怪 ぬらりひよん……。」

ぬらり「気が合う、仲間になれる……それはできそうだ。しかし、その新羅義は僕のこともついでに占った。そしたら死の相だって……。禍の神。一本勝負を挑ませてもらうよ……！」

神司「売られた喧嘩は絶対買う。それがこの俺、王亜 神司だ!!良いよ。その本気で来い……。ただし殺さない程度でなあ！」

俺とぬらりとの一本勝負が今、満月の夜の下で行われた。

## 第27話 古き共闘した仲間

ぬらり「ふんっ！」

スッ：

神司「……」

刀で俺に切りかかるぬらり。それを俺は避けた。

ぬらり「やっぱ強いか……！」

邪神王『何だあ？普通に楽しいことしてるじゃないかよ♪』

神司「うるさいな……」

ぬらり「流石は禍の神だね……」

神司「……？ちよつと待てよ。俺は禍の神じゃないぞ？」

邪神王『そうだぞ。禍の神っていうか邪神だかな。』

ぬらり「嘘を言うんじゃない。オーラで丸わかりだ。」

神司「マジか……」

またか。前はナギとナミにも神ってバレたからな。だけど今回は禍付きか……

神司「俺は禍の神じゃないぞ？」

ぬらり「まだ言うのか……！新羅義は嘘は言わないのに……！！」

神司「占い……か……。なあ、何で俺とお前は戦う必要があるのか？」

ぬらり「これも占いで運命だよ。」

神司「……その、しらぎって言う河童に会わせてくれ。」

ぬらり「嫌だね。」

何でだよ。

神司「何でだ？」

ぬらり「何でも俺たちは戦わなきゃいけないウンメイナンドヨ。」

神司「……ッ！」

？「上手く成功したよな。」

神司「……お前が新羅義って河童か……？」

？「ゲッ……！何でこんな所に神ノがいるんだ……！」

神司「その言葉は……クソ神側の者か……！」

？「うるさいねえ……神ノは……！」

神司「テメエは……ああ！思い出した!!ソロモンだろ……！」

ソロ「フフフ……やっぱ、あの河童を使うのは正解だったな♪」

ぬらり「ウウ……」

神司「河童…もしかして新羅義のことか…!!」

ソロ「ご名答だ。」

やっぱりな。今回はソロモンかよ。

正直あのバカは殺した方が良いからな。あのときは力が無かったからな…

神司「ソロモン。お前は確か魔力を使うんだよな。」

ソロ「質問になってない。」

何でだよ。

神司「まあいいや。ソロモン。新羅義とぬらりを返させてもらうぜ…!!」

ソロ「そうか…?それならここ一帯を悪魔を使って燃やしてもいいんだぜ。」

まさか…!!炎の悪魔…カグツチか…!!ここは森だ。そんな事したらこの森が燃えて

酷い事になるぞ…!!

神司「皆逃げろ…!!ここが燃えるぞ…!!」

サグメ「誰も逃げませんよ。」

ドラ「燃えたとしてもシロが消しますよ。」

シロ「そうだよ!マスター!」

紫「そうですわ♪」

天魔「神司は知らないと思うけど私の風は強いのですよ。」

胡桃「総代将は俺も止めるしな。というか天魔は新羅義を助けて来いよ。」

天魔「どこに行けばいいのよ!!」

胡桃「探せ…!この世n…」

ドラ「アウトですよ!?!」

なんか世間話を繰り返しているのだが…

神司「…って!ソロモンの力を甘く見たらダメだぞ!」

ソロ「…:行け!カグツチよ!ここ一帯を焼き野原にしろ!!」

神司「ヤバイ!!手遅れか!!」

?「間違ね。ソロモン。」

ソロ「!?!お前は誰だ…!!」

?「あら?貴方は私の愛する星を死の星にしたのに覚えていないのかしら?」

ソロ「…:!!水の災い…:!!」

?「あら♪やっと思いい出してくれたのね♪そうよ。私は水星の神だった者。水の災

い。別の名を…」

するとさつきまで出ていた煙が消えて水のフィールドができて怪物が現れた。いや、

怪物というよりあの姿は邪神だ。

だってあの神は…

神司「…嫉妬…♪」

？「レヴィアタン…♪」

そう、あの戦いで共闘した嫉妬のレヴィアタンだった。

## 第28話 狂闘 嫉妬 突然の思いつき

ソロ「なんでお前が来るんだよー!?」

嫉妬「いやいやw私の地元の水星を死の星したのは貴方だからね? ソロモン。私の大切な遊び友達を…! 数百人の命を償ってもらうからな…。」

なるほどそれで来たのか。嫉妬の奴は。水星の神として行った嫉妬。

少し前までは楽しそうにしてた星だったのになあ…

嫉妬「それじゃあ覚悟しろよ…?」

ソロ「嫌だ嫌だ嫌だ…ギャー!!!」

ソロモンの頭に嫉妬は腰に付けていた短刀で突き刺した。

するとそこから血が吹き出した。

神司「ぐっ…」

俺はドラたちの目を隠した。これはグロイからな。とてもドラとかには見せれなかった。

ソロ「えっ? 見えないよ!? マスター!」

ドラ「察しろ! シロ!!」

紫「うっ…」

サグメ「っ…!!」

シロはどうやら見たかったらしく兄のドラがそれを止めた。紫は少し吐き気を催していた。それを見たサグメは紫から見えないように翼で隠した。

ソロ「やめ…ろ…」

嫉妬「まだだよ？私の星の皆の命はこれぐらいの少なさじゃないよ？あと何百程だから…死なないでよね？」

ソロ「カグツチ!!来てくれよ!」

ただしカグツチは呼んでも来なかった。

神司「やっぱクズか…嫉妬!やっちまえ!!」

嫉妬「おう!」

嫉妬が大きな声で返事を返した。だがその声でぬらりが起きた。

ぬらり「えっ…ちよつと!神司くん!新羅義を助けて…いや!トドメを刺してくれ!アイツは新羅義じゃないからな!!」

嫉妬「お前に命令されなくてもこのクソは殺してやるわ…!」

ソロ「ヒィー!!?…ぐぎゃあ!」

嫉妬がソロモンにトドメを指してソロモンは動かなくなった。

無惨な結果だ：最初から何もしなければ良かったのに：



新羅義 「総代将!!」

ぬらり 「大丈夫だったか？」

新羅義 「ああ大丈夫だ。そういやアイツは？」

神司 「それなら嫉妬のロリが：あれ？」

いつの間にか嫉妬がいなくなっていた。どこに行ったのだろうか？

新羅義 「ん？まあ良いや。とりあえず何をすれば良い？」

ぬらり 「いや、疲れただろうし今回は休んでて良いよ。」

新羅義 「了解したよ。」

そう言つて新羅義は牢屋から出て部屋の方に帰つて行つた。

神司 「さて：ぬらり。少しサグメ達を借りるぞ。」

ぬらり 「うん良いよ。あと君の仲間だからね？」

神司「確かなな。」



サグメ「……………」

神司「えーつと…俺が言いたい事が分かるか？皆？」

ドラ「正邪さんの事でしよう？」

神司「そうだ。少し話してくれないか？」

サグメ「…ええ。実は…」

サグメがああ後の事を話してくれた。

サグメ「神司と離れてから私たちは竹林を抜けてそのまま人里まで逃げて来ました。」

◆ ドラ「ここまで来れば大丈夫でしょう。」

そこは竹林の反対の山の方面でした。

正邪「さくぐく…」

サグメ「大丈夫よ。せーちゃん」

シロ「それにしても何かボコボコしたところばかりだね。」

その山はボコボコした穴がいっぱい空いていました。

？「ふむ…珍しいな。奴隷の獣人の子供兄妹と片羽の天人と妖怪と天邪鬼の子か…珍しいメンバーだな。」

サグメはそこで翼を広げ皆を守った。

そしてそこに居たのは幼き頃のぬらりひよんでした。

サグメ「私たちに何か様ですか？」

ぬらり「いや、君たちに少し…ね。」

ぬらりひよんはそこで妖怪たちの軍団を作るのが夢だと言っていました。その軍団の名こそが『百鬼夜行』でした。

その後私たちは泊まる宿も無いわけですし百鬼夜行に入りました。

そして私たちは百鬼夜行を作るため三つの種族を仲間にしました。一つは「鬼」。こ

この山は元は鬼のです。そして鬼を仲間にした私たちは次に「天狗」を仲間にしました。そして最後に鬼と天狗より頭がキレる種族「河童」を仲間にしました。そして何日か経ち皆成長しました。勿論正邪も成長しました。

ある日のこと：

正邪「おいサグメ。」

サグメ「どうしたの？」

正邪「私はここを抜けるぞ。」

サグメ「なんで!？」

そう正邪が急に百鬼夜行を抜けると言い出しました。



サグメ「そして…正邪は三年前頃に百鬼夜行を抜けました。」

神司「なるほどね…」

そんな出来事が…一応探しに行くかな。

神司「わかった。それじゃあドラとシロ。着いてこい。」

ドラ・シロ 「「えっ…っ？」」

サグメ 「どうしたのですか？」

神司 「今から俺たちは人里に行つて正邪を探しに行つて来る!!」

突然の思いつきだった。

皆 「「えええー!?!?!」」

## 第29話 正邪探しに人里へ

神司「ぬらり〜」

俺はぬらりのところに向かつて昨日サグメたちに言つた事を伝えに来た。

ぬらり「どうしたの？神司くん。」

神司「正邪の件は覚えてるか？」

ぬらり「！…サグメたちか…うん知ってるよ。まさかとは思うけど…」

神司「多分ぬらりが思っていることは当たりさ。正邪を探してくる。」

するとぬらりは少し悲しそうな顔になった。

神司「どうしたんだ？」

ぬらり「いやいやもしかして会えなくなるのかな…つてね。」

なんだそんなことか。

神司「逆に全然会えるよ。少し人里で情報収集をね。」

少しは正邪を見かけた人もいるかもだからな。

ぬらり「そうか…なら僕は神司くんを信じるよ。」

そちらの方が嬉しいからな。

神司「ああ、よろしく頼むよ。そうだ。俺はドラとシロを連れてくからサグメと紫を頼むよ。」

ぬらり「頼まれたよ。勿論！サグメと紫を守るさ。あと三人の階級を上げなきやだしね。」

神司「どういうことだ？」

ぬらり「天魔と胡桃の階級を最上級に上げるのさ。新羅義は僕のパートナーとして最上級に上げてあるからね。」

神司「なるほどな。それじゃあそろそろ行つてくるよ。二・三年は戻らないからそんなところよろしく。」

ぬらり「任せな！妖怪にとって二・三年は早いからね！」

と胸をドンと叩いた。

ぬらりなら任せれるからな。あと胡桃と天魔と新羅義と紫、サグメがいるならぬらりを支えられるさ。

ぬらり「そうそう神司くんコレ持つてきなよ。」

神司「これは……」

見ると耳に当てる様な物だった。

ぬらり「何でもコレを耳に着けると音を遮るらしくてね。一応ね。」

神司「わかった。持って行くよ。それじゃあそろそろ行つてくるわ。」  
ぬらり「うん！またね！」

とぬらりは手を振って見送ってくれた。俺も手を振り替えた。

神司「ドラ！シロ！行くぞ！」

ドラ「はい！」

シロ「了解！」

俺たちは人里に向かうため山を降りた。



神司「来たぜー！！人里ー！！」

ドラ「長かったですね。」

シロ「疲れたー！」

シロに同意だ。本当に疲れた。山からここまで30分。そんな時間かかって無いと

思うだろうが山の下りは登りよりもキツイのだ。一応翼を生やして飛べるは飛べるが目立ったらダメだからな。

というか大声出した時点でアウトか。

神司「さてお前ら名前を変えようか。」

シロ「えっ？ どうして？」

ドラ「あのなあシロ。俺らがドラとかシロって名前だとここの人里だと目立つだろ？  
ここは「和」だから俺たちの名前も和にしないといけないんだ。」

神司「ありがとうドラ。全部言ってくれて。」

ドラ「いえいえ……」

神司「さて希望の名前はあるか？」

シロ「私千花がいい！」

神司「せんか？ 何か由来でもあるのか？」

シロ「ない！」

ないのかよ……

神司「それなら花って漢字を華にして華扇ならどうだ？」

シロ「華扇……名字も変えていい？」

神司「ああ、良いぞ。」

シロ「ありがとう！それなら茨木で！」

神司「なら偽名だか命名しよう！君の名前は茨木 華扇（いばらき かせん）だ！」

華扇「うん！」

神司「さてドラは虎丸でいいんじゃないか？」

ドラ「なぜ!？」

神司「理由は簡単。ドラって字の「ド」の「」を取って繋げるすると〇つまり円になる。それは丸とも言う。そして残ったトラを虎にして丸を付ける。これで虎丸の完成だ。」

華扇「あとは私の茨木だね♪」

神司「ということでドラの偽名は茨木 虎丸ってことで。」

虎丸「はい！」

さて俺もかな…和のところで「神司」みたいなキラキラネームがいたら一番俺が目立つもんな。

神司「俺の偽名か…」

名字も変えなきゃだし…

そんなこと考えていたらドラ改め虎丸が言った。

虎丸「それなら神野童子はいかがですか？」

かみやどうじ

神司「神野童子？」

虎丸「神司様の神と山から来て野。そして子供の様にどこへでも行く童子。神司様にピツタリでしょ？」

虎丸お前：そんな風に見てたのか？俺のイメージがそんなだとは：

確かにどこでも俺は行ってしまっけどそんな簡単には行っていないぞ？

でも神野童子か：それでも良いか。童子は少し気に入らんがな：

神野「分かった。俺の偽名は神野童子に決定だ。」

少し悪人っぽい感じがあるけどな。

神野「さて正邪探しに行きますか。」

虎・華「オー！」

そしてこれから正邪探しを始める神司たちだった。

## 第30話 宿がまさかの太子の家

神野「というかこんな所に正邪がいるのか？」

現在俺たちは人里にいる。人里で正邪探しの情報収集に出ていた。色々な人に聞いたところ見た人はいなかった。

すると人がやたら集まっている家を見つけた。

神野「なんだあ？」

虎丸「あれは……」

よく見ると人一人が十人程の人の話を聞き色々と話していた。

華扇「人ってこんな大人数で話せたっけ？」

神野「いやそんな事はないはずなんだけどなあ……」

華扇「あつ！もしかしたら正邪ちゃんの事知ってるかもよ！」

神野「まさかそんな事が……」

虎丸「ワンチャンあるな。」

神野「賭けてみるか……」

しょうがない。情報収集は大事だからな……というかまず正邪の事を本当に聞いてい

るかが問題だけどな。

男性「太子様！稲が全て枯れ……！」

女性「私は夫が病気で！」

老人「太子様……体が疲れてのう……」

太子「はいはい皆さん落ち着いて。まず最初のお方から……稲が枯れたのか。もう一回育ててみては？もしかしたら次はちゃんとできるかもしれないよ。」

男性「はい！」

太子「そして夫が病気？それなら近くで看病してあげなさい。」

女性「は、はい！」

太子「最後に体が疲れた？それならちゃんと布団に入って休みなさい。」

老人「わかつたぞ。」

観客「「おおく!!」「」」

何が「おお!!」だ。太子様って人は正論を言ってるだけじゃないか。

男性「ん？太子様！あの人の話ものつてみては？」

男性は俺に向かって指を出した。

神野「……俺え!？」

男性「そう貴方ですよ！」

ふざけんな！集まっている人たちが居なくなつてから聞こうかと思つていたが何でこゝろなつた!？」

神野「い、いえいえ！大丈夫です！」

男性「その慌て方…何かあるな。」

神野「ねえつて！」

俺と男性が言い争いをしていたら太子様つて人が間に入った。

太子「まあまあ落ち着きなさい。貴方も何か相談事があるなら言つてみなさい。」

神野「で、でもなあ…」

太子「大丈夫。何を言おうが私たちは相談にのるだけです。」

神野「はあ…わかった。実は探している人がいます。」

太子「ほう、でその人とは？」

神野「目撃情報を探してまして名を正邪と言うのですが…誰か知ってる人はいるのかなと聞いてみたものの情報は手に入らず。そんな時に太子様たちがいましたので何か聞いたのではと思ひまして。」

演技だ。だいたい太子様信者は多分こんな風に言うだろう。よしこのまま聞けることなら聞いてやる。

神野「どうか私たちを助けて下さい！」

ここで俺は頭を下げる。そのときチラツと虎丸たちの方を見ると少し引いていた。あれ？引くことあった？まあいいや。俺なりの演技を見せてやる。

神野「何か……！何か情報があれば!!」

俺がこう言っていると他の人たちも引き始めた。

計画通りだ。あともう少しで今回泊まる宿が……

太子「わかりました。とりあえず今日は日が暮れ始めている。今日は私たちの家に泊まりなさい。」

よしっ！今回の泊まる宿ゲット！

神野「わかりました。では有り難く泊まらせていただきます。虎丸と華扇行くぞ。」

虎丸「……はっはい！」

華扇「……うん！」



く太子様の家く

太子「では今回はこの部屋で。」

神野「ありがとうございます……」

太子「そんな方苦しくしないで普通に話して下さい。」

何だ。バレてたのか。

神野「虎丸と華扇は部屋に先に入っててくれ。」

虎丸「はい。」

華扇「はい。」

太子「あの子たちは……」

神野「元奴隷の獣人の子供。見てらんないから他にも数人いたけど俺が全員買い取った。」

太子「奴隷を!?全員ですか!?!」

神野「あ、ああ……」

そんな驚く所か? まあ一人何億程度だがな。それにしても金塊三つで全員だなんて店主もチョロいな。

神野「そ、そういう私たちと言ってたがどういう事だ?」

太子「そうだった。それでは改めて皆さんを集めましょうか。」

自己紹介か? それなら俺たちもしなきゃな。

神野「虎丸と華扇来いよー。」

虎丸「はい。」

華扇「どうしたの？」

神野「自己紹介だ。」

太子「そろそろ良いですか？」

神野「ああ、何時でもいいぞ。」

太子「では私から。私の名前は豊聡耳神子（とよさとみみの みこ）です。次に此方が……」

蘇我「蘇我 と自古（そがの とじこ）だ。よろしくな。」

物部「我は物部 布都（ものこのべの ふと）じゃ。よろしく頼むぞ。」

神子「そしてこの人が私の師匠の……」

青娥「フフフツ……私は青娥（せいが）よ。よろしくね♪」

ふむ。神子に蘇我氏に物部氏。そして青娥か。

神野「さて次は俺らかな。先に俺から……俺は神野童子。元人間だ。」

神子「元？」

神野「その件は後程で。そして男の獣人が……」

虎丸「茨木 虎丸です。そして此方が妹の……」

華扇「茨木 華扇です！」

神野「俺らはこんな感じかな。それじゃあ改めてよろしくな。」

神子「はい。よろしくお願ひします。」

今回の宿はここに決定した。

ただしこの時一人の少女がいなくなることは誰も予想しなかった。

## 第31話　こんな所に嫉妬者が…

神子「さて仕事の時間ですかね。」

神野「仕事？昨日の人生相談のやつか？」

神子「はいそうです。ですが人生相談ってよりも相談だけですけどね。」  
と言つて外に出た。

神野「相談ねー…。」

ん？ちよつと待て。何か忘れてないか？

神野「…あつ。」

そうだ、正邪の件だ。完璧に忘れてた。

神野「危ない危ない。」

すると後ろから誰かの声でした。

？「つて何が何が危ないのかしら？　『悪魔の王??』」

神野「ツ!?誰だ!!」

後ろを振り向くと誰もいなかった。

一体誰何だ。それにしても俺の事を『悪魔の王?』と呼ぶやつは初めてだが…

？「誰かお探しなのかしら？」

神野「だから誰なんだよ！」

？「あら昨日自己紹介しあつたじゃないの。」

すると壁から青娥が現れた。

神野「青娥か…で話は変わるが、悪魔の王？って事をいつ知つた。」

青娥「フフッ♪知つて知らない邪仙はいないわよ。」

邪仙だと…今まで聞いたことも無いな。まだまだ技術は進歩しているのか。

神野「なら何だ？俺に何用だ？」

青娥「いや？貴方男の筈なのに可愛いお顔をしちやつてるから見に来てだけよ♪」

神野「止めろよ…気にしてるのに…」

「女？って言われるのが嫌なのは知ってるが「可愛いお顔」って言われるのは初めて

だ。だから俺はすぐ顔を服で隠した。」

青娥「あら可愛い顔が見えないわよ。」

神野「隠してるんだよ。」

しつこいぞ…！ヤバイって…恥ずかしくて死ぬ…。

邪神王『死ねねえけどなあ♪』

黙つとけ。

青娥 「さて冗談は置いて。」

神野 「って！冗談かよ!!」

青娥 「あら信じてたの？確かに貴方の顔って可愛いけど…」

神野 「チツいいやもう…。」

青娥 「じゃっ♪バイバイ♪」

神野 「何しに来たんだよ…。」

青娥 s i b e

青娥 「元気でしたよ♪神ノ様。」

嫉妬 「たくっ…妬ましいわね。神ノ様も…」

青娥 「妬ましくは無いですけどね…」

嫉妬 「どうか!!」

嫉妬はバンツと椅子を叩く。

青娥 「ひっ!?!」

嫉妬 「何で神ノ様はあんな楽しくしてるんだよ！ああ！妬ましい妬ましい！」

嫉妬は自分の髪をワシヤワシヤと掻き始めた。

嫉妬「チクシヨ…なあ青娥。」

青娥「は、はい？」

嫉妬「これからもこんな俺だがよろしくな？」

青娥「はいっ♪」

神野「なんだ。こんな所に居たのか嫉妬と青娥。」

神司が扉を開けて嫉妬たちを見ていた。

嫉妬「かつ…神ノ様…」

神野「しつかし。よく見ると本当にロリだな。」

嫉妬「誰がロリだ。」

神野「ロリにロリって言って何が悪い。」

嫉妬「それ以上言ってみろ。水刃の銃で撃ち抜くぞ。」

神野「おお！怖いねえ！」

嫉妬「ふぎ…けんなよ…!!」

えっ!?!こんな事で怒る!?

確かに少しやり過ぎたのは認めるがな!

神野「おっ落ち着けよ?!嫉妬!」

嫉妬「嫌だね。ていうかまず謝れよ。」

神野「だから何でだよ!？」

嫉妬「えっ? 本当にわからないの?」

神野「だから何なんだよ!？」

すると嫉妬は大きなため息を付いた。

そして殺気が収まった。

嫉妬「はあ…天然なのかバカなのか…」

神野「誰がバカだ!!」

嫉妬「あつ天然は認めるのね。」

神野「さて青娥は大丈夫か…」

いや、大丈夫じゃないな。そりゃあ気絶で「無事です。」って言ったらこええわ。

神野「それにしても嫉妬がここを拠点にするとはな。」

嫉妬「良いじゃないか。」

ここは倉だった。簡単に言うと酒蔵だ。そしてご丁寧に真ん中に椅子が置いてあった。

嫉妬「というか何で判ったんだ? 私が酒蔵にいること。」

神野「そりゃあ隣にある酒蔵から急に大きな音が鳴ったら駆けつけるだろ。」

嫉妬「あつ…あの音か…」

神野「そういや嫉妬は何時からここにいるんだ？」

嫉妬「え…つと…二年前かな。」

ハズレか…

神野「何時まで居るんだ？」

嫉妬「いやいや神ノの様子判ったから出ていくよ。」

神野「そつか判ったよ。それじゃあまたな♪」

嫉妬「そうそう。」

神野「？」

嫉妬「青娥ちゃんを頼むね。あの子邪仙とは言ってるけど本当は自分の「本音」から生まれたから。「邪」違いさ。」

なるほどね…そりや聞いたこと無いわけだ。

と言つて嫉妬は酒蔵から出ていった。

神野（せつかかく住む場所が無いなら俺らの本部に来れば良いのに。）

と心で思っていた神司だった。

## 第32話 帰りの時間 改めて入団

神子「たっだいまー！」

物部「お帰りなのじゃ！太子様！」

神子「うんただいま。」

蘇我「それにしても疲れんのか？いつもいつも人の何十倍話してて。」

神子「そりや疲れるよ。耳が痛くなるよ。」

神野「ん？どしたの？皆。」

神子「いや一人で何十倍も聞こえるのは耳がもたないってね。」

神野「ふーん…あつ。確か…」

俺はポケットを探った。するとぬらりから貰った耳当てが出てきた。

神野「コレはどうかな？」

神子「これは？」

神野「耳当て。少しは聞こえにくくなるかと。」

神子は俺の手の上にある耳当てを取って頭に着けた。

神子「ふーん…」

物部「どうじゃ？」

神子「うん！確かに聞こえにくくなったよ！ありがとうね。神野童子。」

神野「いやいや。」

青娥「神子ー？」

すると他の部屋から青娥が現れた。

神子「どうしたのですか？」

青娥「貴女がやりたかった事が今ならできるわ。」

神子!?

蘇我「まさか…」

物部「できるのか…！」

どうしたんだ？神子の「やりたかった事」…。

神子「神野童子。虎丸と華扇を呼んできて。」

神野「虎丸たち？それなら…お前らー。」

すると虎丸は光の速さで来た。そして華扇は風に乗って現れた。

そのせいで色々な物が散らかった。

神子「うわっ！」

神野「お前ら！何してんだよ！」

虎丸「すみません！少しシロ：華扇と外で紅葉狩りをしてて！」

神野「紅葉狩り？」

窓から外を見ると俺たちのいた山が赤オレンジで一色に染まっていた。

神野「綺麗だな：って！そうだ神子。二人を集めたがどうしたんだ？」

神子「私神子とと自古と布都は師匠の青娥に近づくため神仙になろうとしています。その為には色々な修行という物がありますが私たちは死んでから蘇る「尸解」をしようと思うのです。それを今からできるといふことでお別れを告げる為に虎丸と華扇をお呼びしました。」

尸解ね：んなこと考えた事もねえや。

神野「ふーん：。でそれで会えなくなると？」

神子「はい：。」

神野「何だそんな事か。」

神子「そんな事って：！会えなくなるのですよ!？」

神野「あのなあ？神子たちを信じれるから言うが。俺は一応神なんだぜ？」

神子「……えっ？」

神野「あと俺の本名は神野童子じゃなくて神司。こんな名前がいたら目立つかなと思つて神野童子って偽名にしたの。」

神子「そうだったのですか。」

神司「言つとくか？ドラたちの本名。」

虎丸「いえ大丈夫です。」

華扇「私もー！」

神司「了解。それにしてもよくビックリしなかつたな。」

虎丸「なんとなくの雰囲気です。」

なんとなくつて…それはこつちがビックリだわ。

神子「神司…良い名前ですな。」

初めてだな。良い名前つて言われたのは。

神司「ありがとう。そして元気でな。そんで帰つて来いよう？そんときや一杯飲むか？」

神子「祝いであるなら喜んで参加させてもらいます♪」

神司「待つてたぜ！その言葉!!んじや青娥。後はよろしくな。」

青娥「任されました！」

神司「それじゃあな！」

虎丸「お元気に！」

華扇「またね！」

俺たちはその場から離れてぬらりのところに戻った。



ぬらり「へえ〜：嫉妬さん居たんだ。会って礼をしたかったな。」

俺はぬらりにこの二日間の事を話した。

神司「それでさ。少し考えてみたのだけど〜俺も百鬼夜行に入っているか？」

ぬらり「あれ？もう入団してなかったっけ？」

神司「それなら改めて入団するわ。これからもよろしくな。」

ぬらり「もちろん♪」

ありがとうな。ぬらり…。

というかこの世界は俺がいた世界よりもいい世界で住みやすい。そしてぬらりとかも優しくしてくれるし…。

神司「……」

ぬらり「どした？神司くん。急に黙っちゃったけど。」

神司「あつ、いや大丈夫だよ。」

ぬらり「暗い顔してたら幸福が逃げるぞ。さて……今回は改めて神司くんが百鬼夜行に入ったということで宴会でもするか♪」

神司「宴会か……！それなら全員集めてくるわ！」

ぬらり「いってら〜」

神司はみんなを集める為に部屋を出た。

## 第33話 宴会 百鬼夜行 紫との雑談

ぬらり「かんぱーい!!」

神司「かんぱーい!」

さて今回はどうやら俺 神司の歓迎会だそうだ。百鬼夜行にちゃんとして入ったということだろう。

神司「それにしてもドラたちの歓迎会はしたのか?ぬらり。」

俺は酒を杯に入れながらぬらりに聞いた。

ぬらり「いやしてないからそれも兼ねてだよね♪」

胡桃「なあ〜神司〜!ちゃんと飲んでるか?」

胡桃か。そういうや鬼だから酒には強い筈だが…顔は赤くなってるからこれは完全に酔ってるな。

神司「おかげさまでな。」

天魔「胡桃〜:まだまだ飲むでしょ〜?」

胡桃「ああ!もちろん!!神司も来いよ。」

神司「その誘いは気持ちだけ貰つとくよ。ありがとう。」

胡桃「そ、そうか…わかったよ。私たちはあつちで飲んでるから気が向いたら来なよ」

♪

神司「了解♪」

ぬらり「あれでも彼女はさみしがり屋なんだよ？」

神司「そうなのか？それだったらごめんよ。」

ぬらり「酒ならいくらでもあるからね。それに…！あいつらは酒そして宴会となると戦い意識が無くなってただの酔っぱらいになるまで飲み明かすからねえ！疲れて寝るまでがうちら百鬼夜行の宴会さ！覚悟はしとけた筈だよね…？というかまずっ！ここ  
の昔の宴会の話を……」

と朝を迎えるまでずっとぬらりの昔話を聞かされた。流石に聞き疲れて寝落ちした  
……が起きたらまだ宴会は終わってなかった。

神司「どんだけ体力あんだよ…この軍は…」

それは飲んでから約9時間。つまり夜8時から朝の4時まで飲んでる有り様だ。

神司「酔い覚ましに外出るか。」

俺は縁側があつたのでそこに座った。

神司「ここはヤバイな。少しずつ馴れないとな。」

？「でしょ？師匠。ここはとても疲れるのよ。」

すると声がしたところを振り向くと空間が歪んで間が出来て俺の弟子だった紫が現れた。

神司「おつ紫か。そうだな。ここは疲れるな。」

紫「でしよでしよ♪」

神司「というか紫。こんな技あつたのか。」

俺が居ない間に面白い術をなあ：

紫「いえ違います。これはどうやら私の能力らしく師匠とかはできない様です。」

神司「へえ。まあ色々と使えるだろ。例えば：ほいと。」

俺は持つてきていた杯を紫の間に投げた。すると間に入った杯は俺の手元に間が出てきて帰ってきた。

神司「やつぱりな。面白い能力だな。」

紫「他にも色々と入れれるので面白い能力ですよ♪」

神司「まるで倉庫を持ち歩いてるみたいだな。」

紫「ふふっ♪」

できるかもな。あの間：いやスキマか。

神司「俺もやつてみようかな。」

紫「話聞いてました？私だけの能力ですよ？」

知ってるやい。えーつと…まずはこの空間を崩してつと。

するとこの空間が崩れ始め座っている縁側がグラグラと揺れ始めた。

紫「しっ、師匠!？」

それからその崩れた空間に歪みを加えてと。そしてそれを開いてと。すると崩れた空間から紫が創ったスキマを似足せて他の崩れた空間を元に戻す。すると…

神司「出来た…!」

紫「…嘘でしょ…?」

紫はポカーンとしていた。そりやそうだろう。自分しか出来ない事を他の人が簡単にも出来てしまったからだ。

神司「…まあこれも俺のオリジナルだ。紫のオリジナルはその目玉だらけのスキマだからな。俺は俺流で行くから。」

ちなみに紫のスキマは先程言った通りに中を開いたら目玉だらけのスキマだ。ただし俺のは目玉はあるがそれが全て閉じている。多分コレを開いたら何か良からぬ事が起ころう。使う時は使う様にしなければな。まあ倉庫が出来て良かった。毎回弟子を呼んでいたらきりがいいからな。

紫「わかりました。私は私流で使わせてもらいます♪」

神司「そう♪その方がお前の個性だからな。」

紫は正直者だ。このまま優しく天然真面目バカでいてほしいもんだ。

神司「さて時間は…約朝5時頃か。宴会は…？」

宴会場を見たらまだ宴会は続いていた。ただしドラとシロは寝ているな。サグメは…酒じゃなくて水飲んでんな。酒は苦手と見た。酔ってる感じも無いしな。ぬらりと胡桃と天魔と新羅義は部下を率いてまだ酒を飲んでいた。

本当に長く続くな…逆にく方がおかしいっての。

紫「ふわあ…」

すると紫が大きなあくびをした。

神司「どした？眠いか。」

紫「はい…。そろそろ私は寝ますね。ししよー…。」

神司「了解。それじゃあお休み。」

紫は自分の部屋に戻った。「さて俺も寝るかな。」と思っていたらサグメが此方に向かって来たのでそのまま慌てて縁側に座った。

## 第34話 宴会 百鬼夜行 告白

サグメ「神司…」

神司「さ、サグメかどうした。サグメも酔い冷ましにか？」

いくら何でも喋り方が成ってない。ていうか、宴会で会ってからまだ全然経って無いわけだが…。

サグメ「まあ酒は飲んでませんが宴会場が酒の臭いと暑さが以上なんですよね…。」

神司「酒と宴会は苦手か。」

サグメ「ただしつまみだけは美味しいですよね♪」

神司「わかるわかる。俺は枝豆が好きだわ。何故か食べると止まらない…。」

酒は飲めるが嫌いでもあるからな。酔っぱらいには俺は成りたくないからな。思考が狂っちゃう。

サグメ「わかりますよその気持ち。ははっ♪」

神司「枝豆は主食だーってな♪」

同感してくれる仲間が人が居てくれて良かった。

さて、そろそろ告白と行きますか…

神・サグ 「あの……ッ！」

マジで!?まるで恋愛マンガ的な感じで詰まったのだけど!?

神司 「い、いや……サグメからどうぞ……。」

サグメ 「いやいや……神司さんからどうぞ……。」

神・サグ 「……」

き……気まずい……。この空気は気まずい……。

俺がこんな事を考えていると宴会の方から声が聞こえた。

ぬらり 「押すなって。」

新羅義 「押してるの総代将様でしょ……!」

ぬらり 「違うだろ? 胡桃じゃないのか?」

胡桃 「私のせいですか!」

サグメ 「……」

神司 「はあ……。ドラ!」

するとドラが寝ぼけながら俺の後ろに現れた。

ドラ 「どうしました……? 神司さまあ……ふわあ……」

神司 「目覚まし代わりに宴会場に居たぬらり達と戦って来てくれ。」

ぬらり達 「「ギクツ……!」」

ドラ「…はいっ！それならシロも起こして良いでしょうか？」

神司「勿論良いぞ。目覚まし代わりにな。」

するとドラは目を擦り元気良く返事をした。

ドラ「はいっ！」

そしてドラはシロを起こしにそして覗き魔たちを倒しに行った。

ぬらり「につ逃げるぞっ!!」

胡桃達「はいっ!!」

神司「やつぱりな。気配で丸わかりなんだよ。ぬらり達は…。」

さて覗き魔は居なくなつたことだし…告白を…!

サグメ「…あの…！神司さん！」

神司「はっはい！」

えっ…！どうしたの!?サグメさん!

サグメ「もう昔の事ですが…ちゃんと礼を言ってませんでした…。あの時私と正邪を

助けてくれてありがとうございます…！」

神司「あ、ああ…うん…。礼ならシロに言つてやつてくれ。」

サグメ「えっ…？」

神司「アイツが海に行こうなんて言わなかったらサグメたちとは会えなかったかも

な。」

サグメ「そうだったんですか…。」

そうあの時シロが海に行こうなんて言わなかったらサグメと正邪は死んでたかもな。特にサグメが。さて…気を引き閉めて…！

サグメ「あの…神司さん。」

神司「うん…？」

俺は振り向いてサグメの顔見たら赤く顔を染めていた。

サグメ「あの時助けてもらった時…そして私たちを逃がしたりしてくれた神司さんが…あの…好きでした…。私と…えっと…その…付き合ひさせて…もらいませんか…？」

神司「…フフツ…はははっ！」

サグメ「あの…やっぱり駄目でしたか…？」

神司「いやいや！その逆さ！まさかサグメの方から来るなんて予想外でな♪なら俺からも言わせてもらおうわ。貴女を見て旅をしたりしてから貴女が好きでした。どうか付き合つて下さい…！」

勿論俺はOKだッ！まさかの両思いだとはな。

サグメ「はいっ♪これからも宜しくお願いします♪」

神司「ああ！」

「俺は元気良く返事を返した。」

その場面をまだ覗き見をしていた人がまだ居た。

ぬらり（こりやあ新羅義たちとは隠れ宴会するつきやないな♪）

？「総代将様？つかぬことをお聞きしますが。」

ぬらり「おっどうした♪」

？「もしかして変な事を今考えていませんでしたか？」

ぬらり「…えーつと…」

ぬらりはゆっくり声をした後ろを向いた。するとそこには新羅義たちを捕まえに行つた筈のドラとその妹のシロがいた。

ぬらり「ははは…にーげるんだよー！」

ぬらりは全速力でドラたちからの逃走劇が始まった。

ドラ「あっ！」

シロ「待てー!!」

神司「ほーらっ♪逃げてる逃げてる♪」

サグメ「ぬらりさん…ふふっ♪」

二人の男女は一人の逃げる様を見ながら笑いあっていた。

## 第35話 隠れ宴会

ぬらり「誰も居ないよな？特に神司とサグメは……」

胡桃「右は居ないね。」

天魔「左は無し。」

新羅義「居ないね。」

ぬらり「よっ良し……それじゃあ……かんぱーい!!」

三人「かんぱーい!!」

俺は現在神司たちが絶対に来ない筈の場所に來ている。その場所というのは秘密だ。

新羅義「それにしてもまさか神司くんとサグメさんがねえ……」

胡桃「サグメさんは神司はまだかどずっと言つてたもんね♪」

そう神司が来る前までサグメはずっと神司の事しか思つてなかつたからな。ただ、一種のヤン○レかと思つていた時期があつたから困つた時もあつたからなあ……。

天魔「あの二人ならいい感じの子供ができそうですよね。」

新羅義「ああ！確かに！正義と正義の間の子供はやっぱ正義の心を持つてそうでもないな！」

胡桃「邪神…でしたっけ？神司って。」

ぬらり「そうだった筈だ。まあ新羅義情報だからな。信じるけど。」

新羅義「でもまだ邪神だって決まった訳ではないよ。」

三人「えっ？」

新羅義「禍の神とは言ったけど俺の占いではまだ邪神とは言いにくいかな。でも…俺の占いはハズレだった…。禍の神って言ってしまったしその事を知ったソロモンって奴に自分が悪用されるし神司くんには謝らなきゃいけないんだ。」

胡・天「……」

二人は黙っていたが多分自分と同じ事を思っている筈だ。だから俺は思いきって言った。

ぬらり「…自分を追い込む必要は無いね。多分だけど神司くんだったら謝れば一発で許してくれるさ。」

新羅義「……そうだね。わかった明日謝ってみるよ。」

胡桃「確かに神司なら簡単に許してくれそうだな。次は他の鬼を率いて神司に喧嘩売ってみようかな♪」

天魔「そんな蔓延の笑みのままで言ってなさいよ。まっ、神司さんに逆に負けるだけでしょうけどね。」

胡桃「何を〜！」

天魔「うん？表出る？」

ヤバイこの雰囲気だとこの場所が潰れる…！

ぬらり「おっおい！お前ら落ち着けよ！」

胡桃「うるさい！総代将は黙ってて！」

胡桃はそう言つて持つてる杯を俺に投げた。がそこで俺は避けた。

ぬらり「危ねえ！」

するとその杯はカーブして新羅義の顔にダイレクトアタックをした。

新羅義「ぐぎやあ!?!な…何で俺が…！ぬらり様…わざとですか？」

ぬらり「ちつ違うよ！そんな事俺が今までにしたことあるか!?!」

新羅義「あるね！5回ぐらいこんなありましたけど5回中全部ぬらり様ですよ？」

えっ？そんな事あつたっけ？思いは無いが多分酔つてた時だろうな。

ぬらり「その事は謝るから！」

新羅義「いい機会です。ぬらり様は少しは反省した方がいいと思います。胡桃と天魔

！ぬらり様に全てのストレスをぶつけましょう！」

ぬらり「ふあっ!?!」

何でそうなるの!?!状況がよく掴めないぞ!?!何故俺が巻き込まれなきゃいけないんだ

よ！

ぬらり「よろしいならば戦争だ！四ツ巴でな！」

つておーい！何言ってるんだ！俺は！喧嘩売られて買ってるじゃないかよ！

そんなぬらりの姿を観察する者が外に居た。

インベイション

神司「たくつ…「侵入」が効いてて良かった…。」

サグメ「神司さんの予想通りでしたね。」

そう、俺 神司はまたぬらりなら何処かで何かしているだろうと察しぬらりに幻覚を見せていた。感情操作をな。心では思っている事を体は動いてくれない。そんな感じな幻覚だ。

サグメ「そろそろ止めた方が…。」

神司「まあ…確かにな。こんな所で喧嘩されたらここ本拠地が潰されかねんからな。」  
ちなみに幻覚では俺とサグメが知らな

い場所で話し合いをしている設定になっているが実際は普通に百鬼夜行本拠地だ。

神司「そろそろ気絶させてから布団に一人一人入れるか。ドラとシロにも頼むか。」

俺は心の中でドラとシロに呼び掛けた。

神司『ドラシロ。頼むが少し来てくれ。急用だ。』  
すると二人は直ぐに来た。

ドラ「はいどうしましたか？」

神司「あの四人を気絶させるから一人一人運んで布団に入れてあげてくれ。」

ドラ・シロ「了解しました！」

インベイション・キャンセル

神司「さてと…「侵入解除」。」

するとぬらりたちはバタバタと倒れた。

神司「良し行くぞー。サグメは天魔、シロは胡桃。ドラは新羅義で俺がぬらりな。」

三人「はい。」

三人とはここで別れた。そして俺はぬらりの部屋に向かった。

ぬらり「うくん…」

神司「どうだった？宴会は。」

ぬらり「…楽しかった様で疲れた感じだったかな…って！何で知ってるの!?!」

神司「隠し切れねー嘘は丸わかりだっつーの。っていうかそんなコソコソ宴会して楽

しいか？」

ぬらり「うん！楽しい!!」

神司「やれやれ…」

そんな話をしていたらもうぬらりの部屋の前だった。俺はその部屋に入ってぬらりの布団の前まで来た。

神司「ほら布団だぞ。」

ぬらり「ありがとうね。」

ぬらりは布団の中に入った。

神司「さてお休み…ん？」

気づくとぬらりは俺の服の袖を掴んでいた。

神司「どうした？眠れないのか？」

ぬらり「いいいやそういう事じゃなくて…今日だけ…一緒に寝てくれるかな…？」

神司「何だそんな事か。良いぜ今日だけな♪」

ぬらり「ありがとう…。」

そして今日だけぬらりの布団の中に入って一日を終えた。

## 第36話 地蔵から人へ

シロ「散歩行きたい！」

ドラ「…はい？」

シロ「だからシロ散歩行きたいの！」

ドラ「いやだから急にどうした!？」

神司「どうしたどうした。二人とも。」

ドラ「あつ、神司様。」

シロ「マスター！シロ散歩に行きたいですっ！」

えつ。急な発想だな。まあ確かにあんな宴会の後だと体も鈍るわな。だがなあ…

神司「体鈍ってるのか？シロ。」

シロ「うん！」

シロは尻尾をフリフリと揺らしながら元気に返事をした。

神司「…良いぜ。どうせ予定なんて無いしな。」

シロ「良いの!？」

神司「ああ、良いぞ。」

シロ「やったー♪」

ぐるぐると回りながら跳び跳ねているシロ。そんなに散歩に行きたかったんだな。

ドラ「ありがとうございます。神司様。」

神司「いやいやさつきも言ったが予定も無いから全然大丈夫だ。んじやそろそろ行くか。外寒いから厚着を着ろよ。」

ドラ・シロ「はい！」



とりあえず俺たちは山の周辺を散歩していた。下を見れば銀杏の葉とか紅葉が落ちていた。上を見れば木の枝からひらりひらりと葉が落ちていた。たまに風でも葉が舞っていた。

神司「ううゝ…寒つ…。ドラたちは平気なのか？」

ドラ「えっ、まあ。」

シロ「私たちは獣人だから毛が暖かくて気持ちいいんだよ♪」

そうだ。ドラとシロは獣人だからそんなに寒くないんだ。

神司「良いなあ…。」

そんな話をしてるうちに左に地蔵が見えた。

神司「やあお地蔵様だ。ドラシロ！こんな寒い日にお地蔵様が一人で寂しく立っているぞ。」

ドラ「お地蔵様ですか…古典ですね。」

シロ「可愛いね！」

神司「何かずつと立っているのも可哀想だし動かせてあげたいなあ…。」

うん能力を使おう。それだったらこのお地蔵様も動ける様になるからな。

神司「ドラシロ。ちよつと退いてろ。」

二人は後ろに下がった。有り得なかった事を有り得る様にする。お地蔵様は神に使える…いや仏に使える物だ。神と仏は少し違うが俺が動かしてやっても良いだろう。

神司「よしっ！これで良いかな！」

地蔵「…：貴方たちは誰ですか？」

シロ「わあ！お地蔵様が動いて喋った!？」

ドラ「神司様が…ですか。」

神司「ご名答♪」

地藏「貴方は神司というのですか。」

神司「ああ、俺の名前は神司だ。そして男の獣人が……」

ドラ「ドラ・マレットです。」

シロ「その妹のシロフォン・マレットだよ♪君の名前は？」

地藏「まだ無いのですよね……誰か付けてくれませんか？」

神司「今は冬だが後に春等になる。春夏秋冬……それを四季。名字はその思いを込めて「四季」で。あとは名前か……」

ドラ「姫を映しているように綺麗だから「映姫」なんてどうでしょうか？」

神司「おいおい……」

シロ「たまにはお兄ちゃんも良いこと言うじゃん！」

ドラ「何だろう……その心にグサツと刺さるような痛みは……」

神司「まあまあ。で、名前を合わすと

しき えいき

……「四季 映姫」だな。それでも良いか？」

映姫「はいっ！ありがとうございます。良い名前を付けてくださりまして。」

神司「そんな事言うなって。名前の無い生き物は居ないのだからさ。」

映姫「それではそろそろ行かせてもらいます。」

シロ「元気でねっ♪」

映姫「はい、お元気で。」

映姫は静かにそこを去った。

神司「さてと。散歩の続きでもするか。」

紅葉や銀杏はもう枯れたり落ちたりしているが秋の落ち葉カーペットと思えば楽しいものだからな。

そして俺たちは散歩を続けてシロが疲れたと言ったのでそこで散歩は終了し、今回はここで本部に帰った。

## 第五章 新たな生活

## 第37話 怠惰の突然の告白

神司「そろそろ正邪探しに行かなきゃな…。」

もう何年ここに居るだろう。確かに頻繁に探しに行ってるのではないがたまに外に出て正邪探しには行っている。

そしてこの前怠惰が俺に新しく情報を伝えてくれた。どうやら時代が変わったらしい。武士とか貴族が多く出る時代になったと伝えてくれた。たまに教えてくるのは有難いが怠惰はここ世界の地球に移住しているのだろうか。嫉妬は地球に移住してる事は確認済だ。

『時代が変わった』つまり正邪の移動範囲が広がったという事。

神司「だがなあ…：そうだ！貴族成れば正邪を探しやすいぞ！」

よしっ！ドラたちを呼んで支度の準備だな！

邪神王『何がだよ。でもなあ、今回は嫁さんを連れてった方が良いぜ。』

神司「勿論そのつもり。あと多分だけど貴族に成るには何かのテストみたいな事しないといけないだろ。それで失敗したら嘘でもいいから相手の記憶をいじるだけだから

な。」

邪神王『カツカツカ！エグい事考えるじやねえかよ！流石は我が器！』

神司「テメエの言い方もエグいからな？さて三人を呼んでぬらりに報告するか。」



ぬらり「なるほどそれで許可を得にね…。良いよ！許可を出すよ。」

神司「ありがとうございます。総代将様。」

と言つて俺はぬらりに向かつて跪いた。するとぬらりは慌てて

ぬらり「いやいやいいよ！そこまでしなくても！」

神司「あつ、やつぱり？」

ぬらり「たくーつ…君とは友人関係なんだからそんな事しなくたって許可ぐらい簡単に出すさ。…さてまた里の方へ行くのなら一つ注意事項ね。」

何だ？危険な事でもあるのか？

ぬらり「どうやら妖怪等を殺す役割の陰陽師っていうのが里でうろろうしてららし

い。神司くんだったら多分妖怪・神だつてバレないと思うけどサグメとかの三人はバレると思うんだ。そこところは入念によく頼むよ。もしバレたりした時は遠慮無く僕たちを呼んでくれ。すぐに僕たち百鬼夜行が駆けつけるから。」

神司「了解。まあバレる心配はこつちに任せろ。ドラとシロの耳はこつちの笠で隠すから。あと尻尾はあいつらに任せる。サグメの羽は俺の能力で一時的に消すから。それじゃあまたちよくちよく会いに来るからな。」

ぬらり「うん、またその時にね！」

そして俺たち四人は人里の方に山を下りて行つた。



神司「さてまずは宿を探さなきゃな…。」

そう、宿が無いとサグメたちを置いて貴族の試験に行けないのだ。

？「それなら良い宿があるが寄ってみるかい？」

後ろを振り返ると一人の老人がいた。

神司「あるんですか？」

老人「あるぞ。あとその宿はわしのじゃしな。」

神司「マジか…ならお願いします。行くぞみんな。」

ドラ「はいっ！」

少年少女移動中

神司「さてと…此処ですか？」

宿主「ああ、そうじゃ。あとは好きにしてくれよ。そうそうこの宿には家賃など無いからな。まあ何かあったらすぐにわしの所に来なされ。」

神司「すみません。何から何まで…。」

個々に来る途中シロが腹が減ったと言つて駄々をこねたので宿主さんが近くの団子屋に寄つてくれたのだ。しかも全て宿主さんの奢りで。

宿主「ほっほっほ。まっ、頑張りなよ。神司くん♪」

神司「っ！一体誰から…。」

宿主「俺だよ俺。」

すると頭のカツラとヒゲをとった怠惰の姿が出てきた。

神司「サグメたちは先に宿に入っててくれ。」

サグメ「わ、分かりました…。」

サグメたちは俺に言われた通りに先に宿に入っていた。

神司「さて…場所変えるぞ。」

怠惰「え…ヤ・ダ。めんどくさい。」

神司「いいから変えるぞ。めんどくさいなら俺がテレポートで飛ばすからさ。」

怠惰の顔がニヤリと何か企んだ時の顔になった。

怠惰「おつけ♪それなら遠慮無く飛ばしてもらおうかなあ♪んじやー…」

怠惰は大分奥の山を指指した。

怠惰「その山の麓までなあ♪」

神司「ハア…わーったよ。ほら手貸せ。」

怠惰「ほらよっ♪」

怠惰は俺に手をさしのべた。

そこで俺は怠惰の腕を思いつきし持って怠惰が指指した山の麓まで投げ飛ばした。

怠惰「あつ…！うわアアア…!!!ふつつぎつつけんなアアア…!!!」

神司「うるさい。音無結界（反響付き）。」

俺は飛んでいる怠惰に音無結界（反響付き）を出して入れた。ただし勢いが止まる事は無い。

神司「さて…俺は行くかな。」

俺はレポートで怠惰が指指した山の麓まで来た。するとちようど怠惰が飛んで来たので結界を解いた。

怠惰「ぐあっ！」

神司「お疲れ〜♪」

怠惰「こんつのおく…!!」

神司「で？何用だ。」

怠惰「ああ、そうそう。暇だから俺武士になつてさあ。」

神司「はあ!？」

それは突然のカミングアウトだった。

## 第38話 怠惰（偽）との対戦

神司「えーっと…何だっけ？武将になったと。」

怠惰「ああ、暇だったからな。意外と簡単だったわ。」

神司「因みにどんな事したんだ。」

怠惰「簡単に言えば上位争いだな。まずは下級兵士的な人と闘ってどんどん上に上り詰める感じかな。ほら昔あった地位争いみたいなだよ。」

ああ、諏訪子と神奈子の時みたいな感じか。

神司「ああ…なるほど。なら情報伝達を頼むわ。怠惰。」

怠惰「別に良いぞ。時間もあつて暇な時が度々あるからな。そうそう。一つ新たな情報を手に入れたぞ。」

神司「早いなあ…で、それは何だ？」

怠惰『美しき姫が再び地上に舞い降りん』という情報。判るか？

『美しき姫が再び地上に舞い降りん』？まさか…!?

神司「久しぶりだなあ…。」

怠惰「クククツ…♪だろうなあ。なんてったって…。」

神司・怠惰 「輝夜（姫）だもんなあ……！」

そう。『美しき姫が再び地上に舞い降りん』とはまさに昔月に戻された輝夜の事だった。

怠惰 「で、その輝夜姫様に現在の武士武将や貴族たちが求愛しているって訳さ。確かに俺は伝達係はするつもりだが神ノにも貴族に成ってもらいたい。」

神司 「何を言っているんだ。怠惰は。」

怠惰 「やっぱ駄目か。気まぐれさん。」

神司 「誰が気まぐれだ。あと貴族に成るのはOKだ。因に怠惰は貴族に成る方法を知っているのか？」

まあ情報屋の怠惰の事だ。何かしらの情報は知っているだろう。

怠惰 「まあ知ってはいるが教えるつもりはさらさら無い。」

神司 「はあ？」

何でだよ。何故そうなるんだよ。

怠惰 「暇潰しだ。少し相手になってもらうわ……。」

神司 「ツ……！」

何だ……この怠惰から染み出ている殺気は。怠惰の殺気では無いことは確実にあつて  
いる筈だ。あの暇神の怠惰が人とかを殺す様な殺気を出すことは有り得ないからな。

神司「誰だ？ テメエは……」

怠惰？ 「クククツ……殺すぞ……神ノオオー!!!」

すると怠惰は俺に向けて両爪から長い刀の様な刃を出して襲い掛かって来た。

神司「ツ！ 無双神術 百字斬り……!!」

俺はその場の空気を斬って気で一文字に斬った。すると怠惰は爪でその気を防いでそのまま突進して来た。防がれた気は半分に切れて山にあった二本の木を切った。その木は音を発して倒れた。

神司「やっぱり一筋縄では倒せないか。」

怠惰は自分の本能の力を發揮して禍々しい姿になった。

怠惰？ 「キツシャツキツシャツキツ！」

神司「早く倒さないと人里にも被害がでるなあ……。一閃 神野斬り！」

持っている刀をたてて一気に怠惰に突き刺した。だが効果は今一つの様だ。逆に怠惰の爪に顔を引つ掛かれた。

神司「いってーな！ あー！ わかったわかった……。次の攻撃で楽にしてやるよ……。」

俺は刀を棹に入れていつもより多くの気を溜めた。するとそれに察したのか怠惰は一気に終わらせようと爪にトゲの様な針を爪全部に生やした。そしてそれを俺に向けて突進し始めた。

怠惰「キシヤー!!!!」

神司「……神野!閃奥義 ……。」

怠惰「キシヤー!!!」

神司「残酷無慘殺……!!!」

俺は勢いよく抜刀をして怠惰を斬った。すると怠惰の発狂していた声を止めて元の姿に戻った怠惰は地面に倒れた。

神司「まだまだだ……。次はもつと強くなつて一からやり直して来い……。」  
俺は棹に刀を閉めた。

神司「……さて……誰何だ!怠惰に取り憑いた悪霊は!」  
すると怠惰の体から怠惰に似た女性が現れた。

神司「誰だ。」

怠惰?「……貴女のような人に教える気は無いわ。」

まあ初見の人には話さないか……。つておい!

神司「何で怠惰に取り憑いていた。」

怠惰?「……知らないわよ。ただ気づいたらあの怠惰つて奴に取り憑いていた。」

誰かに召喚されたのか……?

神司「名前を聞きたい。名前はるか?」

怠惰？「勿論あるわ。私の名前はサキユバス。通称 “サキ？” よ。貴女は？」

神司「俺は神司。またの名を神ノ邪神。普通に神司だ。家はあるのか？」

サキ「だから言ってるでしょう？気づいたら此処に居たって。」

神司「そうか…なら今居る宿に來いよ。おもてなしなら幾らでもするぜ♪」

サキ「なら遠慮無く。」

神司「なら怠惰を持って宿に向かおうか♪」

サキ「はい…♪」

俺はサキと一緒に宿に戻った。

帰った時にやっぱりサキをおぶって飛んで帰った方が良かったと損した俺だった。

## 第39話 眞実を伝える為には…

神司「ただいまー。」

サキ「お邪魔しまーす…。」

サグメ「おかえり。って、お前は誰だ…!」

サグメはサキと初めて会ったばかりなのでサグメは戦闘体制に入って構えていた。

神司「いやいや!構えなくていいから!」

サキ「おっ、やるのか…?」

神司「サキもだっ!」

怠惰「うっ…うん…。」

すると気絶していた怠惰が起き始めた。

神司「サグメ!後で説明すつから!サキは初めての人に挨拶したのか!?怠惰はもう少し寝てろ!」

サキ「…:初めまして。サキユバスのサキと申します。少し厄介者ですがお世話になります。」

サキはペコリと礼をした。

何だサキも素直な所があるじゃないか。

サグメ「失礼少し私も取り乱してしまった。改めて自己紹介させてもらう。私は稀神サグメだ。先程の事は忘れてよろしく頼む。」

神司「いや…それはサグメさんが…」

サグメ「何ですか？神司さん…？」

神司「す、すみません…！何でも無いです。」

ん？何で俺が謝っているんだ？まあいいか。

神司「んじや俺は怠惰を布団まで送ってくるわ。布団の部屋ってどこ？」

サグメ「客間に布団があるのでそちらに行つては？」

神司「なるほど。了解。」

俺は怠惰を背負いながら客間に運んだ。

神司「えーつと…ここか？」

襖を開けたらそこにはドラがいた。

神司「あれ？ドラか。」

ドラ「どうしました？」

神司「いや、怠惰を寝かせたくてな。」

ドラ「それならここの部屋使います？」

そう言つてドラは布団を準備した。

神司「仕事が早いな。ありがとう使わせてもらうよ。」

俺をゆつくりと怠惰を布団に寝かせた。そして掛布団を掛けた。怠惰はいい顔で寝ていた。まあ…気絶しているのだから…。

ドラ「この人は？」

神司「そつか。ドラは初めてか。コイツは古き友人の怠惰だ。」

ドラ「怠惰過ぎてあだ名が…。」

神司「いや違う違う。怠惰つて…。」

いや、本名がベルフェゴールだったよな。で、俺が復讐中にアイツらにあだ名を付けて…うん思い出した。確かにあだ名だった。あの復讐中に俺は七人の個性をあだ名にしたんだつた。

ドラ「本名なのですか!？」

神司「いやあだ名だったよ。思い出したからさ。」

ドラ「で…ですよね…。」

ああ逆に怠惰つて名前だったら違和感しか感じないからな。

ドラ「あの…。」

神司「うん?どした。」

ドラ「神司様って…」

神司「どした？言いたい事があるなら言ってみな。」

ドラ「なら言わせて頂きます。怒られても…殺されても構いませんのですが言います…。神司様って神じゃなくて邪神ですか…？」

ああ…なるほど…。つまりこう言えば良いのか。

神司「君の様な勘のいいガキは嫌いだよ…。」

少しイタズラ感覚で邪気を出してみた。

だがドラは本気と思つて雷炎を構えた。

神司「待て待て！少しイジつてみただけだから！」

ドラは雷炎を構えるのを止めてポカーンとしていた。

ドラ「えーっと…つまり神司様は…。」

神司「邪神だよ。しかも邪神の王様。あとドラとシロ、しかもサグメや百鬼夜行のみんなの事はちゃんと友人として仲間としてそして…家族として思っている。裏切りとかは俺はするつもりはさらさら無い。ついでに言えば俺が殺すのは俺を殺そうとした奴だけだ。絶対にな。」

ドラ「…すみません構えてしまつて…。」

神司「いや、俺が最初から神じゃなくて邪神と言つておけばよかつた話だ。だから謝

るなら俺の方だ。ごめんなさい…。」

俺は深く頭を下げた。

ドラ「顔を上げて下さい。神司様。」

神司「…俺は一人だと何もできない。だから俺の体には邪神王っていう悪魔の王に手  
伝ってもらっているんだ…。」

すると邪神王に変わった。

邪神王「初めましてだな。俺は大悪魔邪神王だ。ヨロシクな！ドラくん。」

ドラ「えーつと…邪神王さんで…良いのですか？」

神司『俺のイメージ壊れるなあ…。』

邪神王「知らねえよ。」

ドラ「えっ…。」

邪神王「あー、いやいやこつち話だ。」

ドラ「なるほど…。(多分神司様と話しているんだろうな。)」

神司『おいそろそろ返せ。』

邪神王「わかったよ。んじやドラくんお前のマスターに戻るからじやあな。」

ドラ「はっ、はい…。」

邪神王は俺に体を戻した。

神司「…まあ、こんな奴だが優しくして上げてくれ。」

邪神・ドラ『俺は（邪神王さんは）ペットか何か（ですか）!?!』

キーン頭に直接来る邪神王の声と目の前にいるドラの声が重なりあつてうるさく聞こえた。

神司「ふ、二人で言わなくても…。」

ドラは「何が？」と言つてる様に首を横にして邪神王は「やれやれ」と首を下に向けていた。

と俺がしょんぼりとしていたら襖が開いてシロが怠惰の面倒を見るためにタオルを持ってきた。

## 番外編 事の始まり

昔々宇宙もなく惑星が一つしかなかった時代のこと。そこには最高神のゼウスが雲の上で人間の生活を見守っていた。そして死んだ者は冥界にはハデスが存在する時代であった。これを現代の人々は「ギリシア神話？」と言っていた。さて話は戻すがある時他の家とかは大きな宮殿な筈なのに野原に一つの貧しい家がポツリとあったそこには四人の家族が居た。父母姉。そしてこの話の主人公の弟が住んでいた。ただし幸福や幸せとまではいかず母は病気でタナトス（死）が母の隣にいた。つまり父と姉と弟が母の病気を看病しながら生きていた。

せいか しんじ

母「ああ…星花…：神司…。母は大丈夫よ…。」

せいか

姉の名前は 星花という名前です弟の名

しんじ

前が 神司 だった。

父「心配するな！私たちがいるからお前は死なん！」

（死）「残念ながらハデス様が決めたことだ。貴方の奥さんはあと数日で死んでしまわれる。だが安心して下さい。ハデス様がきつと…きつと…この奥さんを転生させて下さる筈です。」

父「誰が安心出来るか！ たった一度の人生に死の神に理解出来るのか！？ ただでさえ貧しいのに母と姉の星花も病気だぞ！？」

そう姉の星花も病気で命の危険があるのだ。だが母の方がもつと深刻であった。

父「そしてタナトス！ お前の主人…そしてこの世界を産んだ神が我々の敵になる！ 何故だ！？ 何故なんだ！ 何故…！」

と父はタナトスの服の袖を掴みながらそう叫んでいた。涙も大量に流していた。

そんな暗い空気に姉の星花が神司の袖を持って「花を積みに行こう！」と言つて野原の花が綺麗に咲いているところまで走つて行つた。

星花「やっぱ綺麗に咲いてるわね。」

神司「うんそうだね！ 姉ちゃん！」

星花「これを全部積んだらきつと母も喜んでくれるわ！」

神司「えっ！？ これ全部…！？」

ここにある全部の花を積もうとすると軽く3tは越えるだろう。それを姉の星花は

積もうと言っているのだ。どう見ても無茶でしかない。

神司「わかったよ。俺も手伝うから全部の母を積んで母に見せて驚いて病気を吹っ飛ばしてあげよう!!」

星花「エイエイ…」

神司「オー!!」

（数分後）

星花「これぐらいで良いでしょ!」

やっと二人で持てる様な大きな花束が出来た。ロープは家から持つてきて結んだ。

星花「さあ!家に帰るわよわよ!」

神司「うん!」

二人は仲良く母父がいる家に向かった。

その時：不幸が起きた。一本の光の線が星花の胸に小さな穴を開け星花は血を流して倒れた。その時二人で持つのが精一杯だった花束が散りばめた。

神司「えつ…ね、姉ちゃん…?どうしたの…?急に倒れて…!…!…!血…!」

一人の神が天から降りてきた。そしてその神は神司に話しかけた。

神「フフフ…♪いやゝ俺って親切だよなく♪何てったって!もうすぐ死にそうな彼女を先に楽に死なせてあげたのだから!♪」

高らかに笑う神を神司は睨んだ。すると神は喧嘩を買った様に反応し  
神「ああ？もしかして俺を睨んでるの？」

すると神は神司の首を掴んで上に上げた。神司の体も上に上がった。

神司「うっ…う…。」

ただし神司は睨むのを止めなかった。

神「テメエは神の俺に喧嘩を売ったんだ。というか！俺はお前の隣にいた彼女の為に殺したんだ！お前だって判っているだろう！？もうすぐで彼女は病気で死ぬ。だから俺は病気で苦しみながら死ぬより俺の力を使って殺してあげたんだ！そこ理解しろよな！クソガキが!!」

神司は怯まずにそのまま睨み続けた。

それを見た神は呆れて

神「あーわかったわかった。そんなに睨むんだったら少しは限度を知ってもらわなきゃな。」

と言つて神は神司の家、母父丸ごと光の線を飛ばして家を爆発させた。

神司「……」

神司は神を睨んでた目を跡形も無くなっている家を見て思考回路が止まった。

神「これがお前の結末だ。ちゃんと行動は考えてから行動しろ。」

と言つて神は天の方に帰つていった。

## 第40話 試験を受けに行こう

シロ「あれ？取り込み中？ならあととはよろしくね。お兄ちゃん！」

シロはお盆を床に置いてドラに任せると言つて部屋から出ようとした。

ドラ「ちよつ、ちよつと待てつて！」

シロ「ん？話終わったの？ならシロがするねっ♪」

ドラ「うつ、うん…よろしく…。」

シロは怠惰の頭にタオルを置いて俺の隣に座った。

神司「うん？どうした？」

シロ「シロ聞いてたんだ…。マスターが邪神つて…。」

神司「…。」

ドラ「シロ…。」

なるほど…ね。だからすぐ出ようとしたわけか。

シロ「でっ！でもねっ！シロはマスターが邪神でもシロは…！シロはそれでも良いからね！だから…盗み聞きしてたの怒らないでほしいの!!」

シロは泣きながらその事を俺に伝えた。「そんな事か。」と言つてしまう程の話だな。

神司「何だそこに心配してたのか。関係ないね！盗み聞きしていたなら判る筈だが俺はそんなので怒るわけがないだろう。だから安心しろよ。先程もドラに言ったが俺は仲間を信じるからな。まあ、盗み聞きは良くないがな♪」

するとシロは泣き出して、俺に抱きついた。

シロ「まあすたあー！」

神司「えっ？ちよっ…！ドラ！どういう事!!」

ドラはため息をついてシロの行動について話し始めた。

ドラ「えーっと、この状態になりますとすぐには泣き終わりません。そしてデレデレになって自分の気が済むまで甘え続けます。良くその状態になって被害者と自分ではありませんので…。」

神司「何だよ!?その状態は！」

こんなの誰かに見られたらどうするんだよ！早くシロをどうにかしないと…!

怠惰「へえ…神ノにもそんな趣味がなあ〜♪」

神司「たっ、怠惰…！」

怠惰が起きて俺の横に座っていた。

ドラ「あつ、おはようございます。」

怠惰「ああ、おはよう。えーっと確か名前が…」

ドラ「ドラです。ドラ・マレットです。」

怠惰「そうだそうだ。多分このクソ主に聞いただろうけど俺は怠惰だ。よろしくな

！」

ドラ「はい、よろしく願います。」

何だこの状況は？てかさろそろシロ離れてほしいのだが…。

神司「シロ！離れてくれ！」

シロ「いゝやゝだっ！」

神司「はあく…。サグメ〜！サキ〜！助けて〜！」

サグメ「ど、どうしました!？」

サキ「サグメさん…絶対に神司さんを疑ってはいけませんよ。」

サグメ「何がですか！」

ドタドタと廊下を走ってくるサグメとサキの二人。そしてサグメは神司たちがいる部屋の襖を開けた。

サグメ「…神司さん…何してるのですか…！」

サキ「サグメさん！疑ってはいけない!!」

サグメ「はっ！ やつと理解しました。ありがとうございます。サキさん。シロそろそろ神司さんから退いてあげて下さい。」

シロ「……はい。んじや昼のご飯作ってくる。」

ドラ「ちよつと待て！ お前ご飯作ったことないだろう！？ 俺も手伝うから！」

シロとドラは昼のご飯を作り、食堂へ向かった。

怠惰「あれ？ サキちゃんじゃん。お久々♪」

サキ「ああ、お目覚めになられたのですか。ベルフェゴール様。」

神司「二人は知り合いか？」

怠惰「俺の召し使いだな。まあ、お前から貰った魔術書に書いてあったから呼び出して俺の召し使いにさせた。俺の旅のお供としてな。」

へえ…あの怠惰が仲間をねえ…。

それにしても何故あの時サキの記憶が無かったのかが不思議だな。そしていつの間にかつても不思議だし。それなら貴族になって調べる価値があるからな。ということでは俺は立ち上がって部屋の外の廊下を歩いて玄関まで来た。

サグメ「どうしたんだ？ 急に…。」

神司「暇潰し…♪」

サグメ「暇潰し…?」

神司「うん。貴族試験を受けにいこうかと思つてね。サグメも行く?」

サグメ「一緒にお供させてもらいます。」

神司「そんなことしたくていいって。」

サグメ「へへっ…♪」

サグメは舌を少し出してテレた。その姿に俺はドキツとした。

神司「さ、さて、行くか…。ドラシロー! サグメと一緒にちよつと出掛けてくる—!」

俺は台所にいる二人に声を掛けた。

ドラ・シロ「いつてらっしやい!」

神司「さてちよちよいと合格して帰つて来ようぜ!」

サグメ「はいっ♪」

そして俺とサグメは貴族試験をする場所まで歩いた。

## 第41話 陰陽師

現在俺は貴族や武士武将が試験の様な場所に来ている。

神司「それじゃあノックするか。」

サグメ「そうですね。」

俺は門をノックしながら、

神司「頼もく。」

といい続けた。

サグメ「それじゃあ道場破り。神司さん。」

やっぱりか。んじゃどうやって呼ぶか…。

神司「…いつそ門破壊する?」

サグメ「それ行為は本当に道場破りだぞ!」

門番「うるさいぞ! 開けてほしいのなら私に言えばいいではないか!!」

神司「…あつ、門番さん居たんですね。」

門番「居たも何も門を叩く前に確認せい。で、様はなんだ。」

神司「そうだった。私たち二人が今回の貴族試験を受けに来まして。」

門番「ほう。」

神司「ということでは…俺らは貴族…だよな…？」

サグメ「えっ？」

門番「…ああ！神司殿でありましたか！すみません。ささ、入って下さい。」

神司「ありがとなく♪」

そして門番は門を開けて俺たちを入れてくれた。

サグメ「神司さん。何故そんな簡単に？」

神司「門番の記憶を書き換えたんだけだ。試験を受けに来た村人から元から貴族で生まれただという設定に書き換えた。」

もちろんバレたら危ないがな。因に、サグメの羽は俺の能力で一時的に消してある。

神司「さて、ここの城の殿に会って色々と状況を確認しますかね。…とその前に…」  
俺はこの城の全員の人の記憶を書き換え村人から友人に換えた。

神司「サグメ。今からここの城全員の人は友人と違ってくれ。そう設定を書き換えた。」

サグメ「それは…。」

神司「心配するな。後で元に戻すに決まっているさ。ただ、正邪の情報を得たら帰る

つもりだから。」

サグメ「わかりました。それじゃあ行きましょう♪」

く城の中く

殿「おお！久しぶりじゃのう！」

神司「えーつと…誰でしたっけ？」

殿「おいおい、久しぶり過ぎて儂の事を忘れたのか？藤原氏じゃよ。藤原氏。」

自分の事なのに氏というのはどうかと思うが、

神司「そうでしたね、藤原さんでしたよね。」

藤原「そうじゃよ！忘れるなよ。で、今回は何しに来たのかな？」

神司「情報収集ですよ。そして鬼人倒しです。」

藤原「ん？どういう事だ？」

神司「まずは鬼人の事です。天邪鬼という鬼がここ最近出回っている様です。」

藤原「ほう。」

神司「それで手がかりはないかと思つて今回は寄らせて頂きました。」

藤原「手がかりかあ…お前らー！天邪鬼について何か知つておる者は居ないかー？」

藤原が家臣たちに聞いても家臣たちは首を横に振つた。

神司「ありやりや…。」

まあ、そりやあ架空の話で知ってる人が居たら逆に疑うわな。

と思っっていたら一人の女性の家臣が手を上げた。

家臣「あのー…天邪鬼の件なら私、知ってますよ?」

神司「本当ですか!?!」

俺は驚いた様子でその家臣に近づいた。おかしいんだよ。架空の話に手を上げる人物がな。ただしもし、コイツが妖怪だった場合は有り得るがな…。

家臣「ええ、知ってますよ。」

神司「藤原氏、少しこの家臣借りて良いですか?十分程度で帰って来ますので。」

藤原「おう!良いぞ!」

神司「サグメは待っててくれ!」

サグメ「はい。」

俺とその家臣は一緒に外に出て何故この事を知っているのかを聞いてみた。

神司「何である事知っているんだ?」

家臣「知っているも何も、貴方も陰陽師なのでしょう?」

神司「…は?」

家臣「あつ!そうですね。私の自己紹介をするのを忘れてました。私の名前は、安部

晴明です。貴方と同じく鬼を探している陰陽師です。ですが貴方ちよつと違いますねえ。天邪鬼じゃなくて“百鬼夜行”ですよ？私たち陰陽師や貴族が探しているのは百鬼夜行です。」

神司「…へ？」

ダメだ。俺は急に話の内容があり過ぎて混乱していた。

神司「ちよつと待て！百鬼夜行!？」

晴明「そうですけど…何か…？」

神司「いついや、何も…。」

嘘だろ？秘密に隠れていた百鬼夜行がバレ始めているだど？これはなんとしても陰陽師たちを止めなければ…。

晴明「どうかしましたか？」

神司「いや大丈夫だ。少し考え事をな。まあ、何だ…お互い陰陽師として百鬼夜行を倒して捕まえよう！」

晴明「そうですね！一緒に頑張りましょう！」

俺たちはそう言って握手をした。そしてお互い握手を終わらして城の中に戻った。

## 第4 2話 怪しまれたのは百鬼夜行

神司「ありがとうございます。藤原さん。」

藤原「いやいや、それぐらい良いのじゃよ。お前の為ならば陰陽師の一人ぐらい貸すからな。で、今回の様はこれだけか？」

神司「そうですねはい。それではありがとうございます。えーつと…私のお連れさんは…？」

藤原「ああ、それならわしの子と一緒に彼処で遊んでいるぞ。ほれ。」

藤原氏が指指したところに藤原氏の子供と遊ぶサグメの姿があった。

神司「藤原さん、そのお子さんの名前はなんと言うのですか？」

藤原「妹紅だよ。どうやらお前の連れは妹紅と仲良くしてるからな。よろしく頼むな。」

神司「ええ、勿論そのつもりです。お連れの方にも伝えておきますね。」

少年少女帰宅中

◆ 俺とサグメは怠惰から借りた宿に戻った。

すると宿の中からいい匂いが……。多分ドラとシロの夕食ができあがったのだろう。

サグメ「良い匂いね♪」

神司「そうだな多分アイツらの自信作だろうだからな。ただいまー。」

俺が玄関前で大きな声で言うのと真っ先の玄関の方まで来たのはサキだった。

サキ「お帰りなさいませ。神司様、サグメさん。」

神司「おつ、偉いなあサキは。」

サキ「いえ、これも務めでありますから。ささ、こんな話をしている内にドラさんと

シロさんが作った料理が冷めますよ。」

神司「それもそうだな。んじゃ、行こうぜ。」

俺ら三人は居間に入ってドラたちが座っている几まで来た。

神司「おつ、二人共……ちゃんとできたのか？」

ドラ「信じて下さい！しっかりと自分が味見して皆さんが食べれる味にしましたから

！」

シロ「シロたちの自信作だよ！」

なるほど…そこまで言うのなら仕方がない。

神司「んじや、食べるか。…つと、その前に…手洗い嗽をだな♪」

怠惰「そういうや、最近原因不明な病気が流行しているらしいからな。その病気で亡くなつた人もいる様だ。だから手洗い嗽は大切だな。」

そんな病気が流行しているのか…。しかも死人まで…。

神司「それなら、尚更手洗いをしに行くか。その代わり料理が冷めない内にな♪サグメ。」

サグメ「わかつたわよ。」

俺らは手洗いをしに洗面所に行った。

神司「…つて!? 何俺たちはゆっくりと手洗いしてんだ!？」

怠惰「いや! 全部王のせいだからな!？」

サグ・サキ「はいはい…せっかくの料理かわ冷めるので喧嘩はこれぐらいで…さもないと…。」

神司「さあ! 食べようか! ドラシロお待たせ!」

怠惰「すまん! ドラくんシロちゃん!」

サグ・サキ 「…逃げたな…。」

（30分後）

神司・怠惰 「「ごちそうさまでした。」

サグ・サキ 「「ごちそうさま。」

ドラ・シロ 「お粗末様でした。」

神司 「さて一つ本部に連絡するか。」

陰陽師が百鬼夜行の事がバレ始めてらしいからな。そして特に安倍晴明って陰陽師の事は伝えよう。

そして俺はぬらりテレパシーを送った。

神司（もしもし？ぬらり。）

ぬらり（うわっ！って神司くんか。どうしたの？もしかしてもう早ピンチ？）

神司（違う違う。少し情報をね。）

ぬらり（早いね…で、その情報は？）

神司（実はこっちの人里の陰陽師が百鬼夜行の事を知っているんだ。もしかすると

…）

ぬらり（『僕らの仲間』裏切り者？がいる』って事だよね。）

神司（ああ、そういう事だ。あんま仲間を俺は疑いたくはないがな。）

ぬらり（それはお互い様さ…。僕だつて仲間を疑いたくないもん。しかしそこは総代将として仲間と敵をしつかりと判断するよ。）

神司（さっすがリーダー♪しつかり相手を見て敵と仲間を判断しろよ。）

ぬらり（任せてよ…!）

? 「総代将。誰と話しているのですか？」

ぬらり（ごめん！一旦切るよ。）いや何も？どうしたの？さとりちゃん。」

さとり「いえ、総代将の心の声が駄々漏れでしたので。」

? 「お姉ちゃん！」

ぬらり「ほらほら、妹ちゃんがお呼びですよ。」

さとり「はあ…どうしたのー？こいしー？」

ぬらり「…まさかね。」

神司「…切れちゃった…。」

まあ、伝える事は伝えたのだからいいか。

神司「此方も晴明の事を観察するか。それなら外でぶらついたら勝手に寄り付くと思

う…かな…。」

邪王『ただし用心深く観なきやな。そして我もしつかり観るからな。』

神司「勿論そのつもりだ。お前も手伝ってくれるのなら直ぐ見つかるかもな。兎に角明日は藤原氏の家に向かうフリをして清明を探すぞ。」

邪王『アイアイサー！』

そして神司たちは布団に向かい明日の為にいつもより早く寝た。

## 番外編 親友

神司「……」

神司は跡形も無く壊れた家の上に座っていた。そして何も感情も持たずまだ状況が整理しきつてないのだ。ただし一つの感情が心の底から上がってきた。その感情が……『憎しみ』だった。

神司「……とりあえず……姉ちゃんのお墓でも建てるか。」

神司は星花を背負って誰も居ない様な森まで来た。そして神司はそこに星花を地面に下ろした。

そして神司は自らの手で地面を掘り始めた。そして星花が入るくらいまで掘った。

神司「さてこれくらいで良いかな。」

掘り終わった時の神司の手は土で汚れて血だらけになっていた。そしてそつと掘った穴の中に星花を入れて土を被せて埋めた。

神司「さてと……」

神司は森を出て町の方に歩き出した。そして町に着き親友のオーデインの家まで行った。そしてオーデインの家の前まで来て扉を叩いた。

オー「はーい。あれ!? どうしたんだ!? 神司!」

オーデインは真つ赤になつた神司の手を見て驚いた。

神司「ははは。いや? 少しオーに会いたくてね。ごめんだけど入れてもらえる?」

オー「べ、別に良いけど。」

オーデインは神司を家に入れた。

オー「神司、一体どうしたんだ?」

神司「何がだい?」

神司は敢えて知らないフリをする。

オー「気づいていないのか。今君の手は酷く血を流しているそして顔色は酷く真つ青だ。それはバレてはいけない何かを隠している顔だ。ほら、正直に言つてごらん? 素直になれよ。」

神司「……はあ、今から今まで起きた真実を言うけど信じてくれるかい?」

オー「もちろん! 何てつたつて俺らは親友だろ?」

神司「……わかつた。それじゃあ話すよ。」

神司は家族が一人の神に殺された、そして姉、星花を埋めてここに來た話を隠さずそのまま話した。話している内に涙がぼろぼろと流した。だが話すのを神司は辞めなかつた。そして話終わつた。

オー「…なるほどね…。」

神司「くそっ…！」

オー「まあ、まずは涙を拭いてくれ。話はそれからだ。」

オーデインは神司にハンカチを渡した。神司はそのハンカチで涙を拭いた。

神司「…ありがとう。」

オー「さて、その神の顔は覚えているか？」

神司「もちろんだ。あの憎き神の顔が今は奴の顔しか思い浮かばない。」

オー「つまり恨みしかないと。」

神司「ああ、そういう事だ。」

オー「それなら見つけるのは簡単かもな。ほら、この紙にそいつの顔をスケッチしてみなよ。君の能力なら出来るだろう？」

神司「能力じゃないって…。」

神司はペンを持って家族を殺した神の顔の絵を書き始めた。

すると神司は白い長い髪でキリツとした目付き、そしてしつかりとした顔つきを描いて最後に鼻と唇を描いた。その顔は女性の顔に近かった。

そしてその顔は自分の思った通りに描けていた。さらにその顔にオーデインには覚

えがあつた。

オー「あつ……！マジか……。こいつはミカエルだ。少し前にゼウス様がミカエルに殺されそしてそのミカエルが他の神を仲間にして軍を造つたんだ。そして他の神を殺した。残りはハデス様の冥界の神たちになった。確か神司の母の近くに居たのつて……」

神司「ハデスの仲間、(死)のサナトスだ。まさか……」

オー「だろうな。ミカエルはハデス様たちを徹底的に倒すつもりだ。その時にお前の姉、星花がいて病気の事を知り殺した。そして神司がミカエルに喧嘩を売りミカエルは神司の家まるごと壊して消した。その時『ついでに』居たサナトスと一緒に家族を殺したという訳だな。」

そうつまり、ミカエルの目的はサナトスを倒すこと、だったのだがミカエルは星花が病死しそうなのを勘づいて

ミカ「コイツはどうせ死ぬんだし別に殺していいだろ。」

と心に思つて星花を『ついでに』殺したのだ。その後神司がミカエルを睨みミカエルは神司から喧嘩を売られたと察し神司の首元を持つて上げたのだ。そしてしつこいで目的を倒す為に神司の家もろとも消したのであつた。

神司「……くそつたれ神野郎だな……オー、俺と一緒にミカエルを倒さないか？」

神司は真剣な顔でオーデイン言つた。するとオーデインは笑い出した。

オー「フフツ…♪」

神司「なっ、なんだよ!？」

オー「いや？当たり前のこと言われたからさ♪いいよ参戦させてもらうよ。絶対ミカエルを倒そうな!」

神司「…!おう!」

神司とオーデインは握手を交わした。

神司「なら、作戦でも考えようぜ!」

オー「そうだな。そして地下に少し昔の資料に悪魔召喚の魔術書があったから少し漁ろうぜ。」

神司「ミカエルを潰せる様な悪魔を召喚しようぜ!」

そして神司とオーデインは魔術書を読んで読みまくった。するとオーデインが一つの資料を見つけた。

オー「神司、コレ…。」

神司「うんどうした?それは…『悪魔の王の召喚術』…王が出てくるのか!？」

オー「だっ、だろうな…。というか召喚する為にそれ対等の価値があるだろ…。」

神司「…:王ならミカエルを倒せるかもしれない。」

オー「待て神司、早まるな。まだ中身を読んでいないんだ。少し読ませてくれ。」

神司「まあ、それならしやらないか。」

オーデインはその魔術書を開いた。するとオーデインたちが読めない様な字で書いてあった。

オー「うわー…ごめん神司。まずは解読からだわ。これなら…三日だ。三日で解読するから待っててくれ。」

神司「わかった。その間ミカエルたちがどんな奴かを観てくるよ。」

オー「それはつまり外に出てクソ神たちを観察すると言うことかい？」

神司「そういうことさ♪大丈夫死にはしないさ♪」

そう言つて神司は一階に戻り外に出ていった。

オー「まあ俺はお前を信じるから良いけどその言葉、死亡フラグとか言つたら俺はお前を許さねえ。」

## 第43話 陰陽師に取り憑いた悪魔

神司「それじゃあ行ってくるよ。」

サキ「行つてらっしやいませ。」

サグメ「神司…絶対帰つて来て下さい。」

何でそうなるサグメ。俺は今から戦場へ行くのだろうか。それにしてもフラグを建てるよな。俺の仲間は。

神司「大丈夫だよ。死んでたらとつくのとうに死んでるよ。約束するよ。帰ってくるってね♪」

サグメ「フラグですか？」

神司「……」

サグメさん…貴女が言うのかよ…。

神司「…行つてきます。」

シロ「お土産ヨロシクね♪」

ドラ「シロ！」

神司「ああ！煎餅でいいだろ！」

く阿倍 晴明視点く

晴明「出てきた出てきた。一番怪しい人物だからね…。」

藤原さんたちの友人かと思いきやまさか藤原さんたちを操っていたとは…あの時、私は先に気づいたので身代りで避けれましたが自分の中での要注意人物の神司…。

晴明「追跡しますか…。」

く神司視点く

邪王『どうやらお前の罠にまんまとはまっているぞ。晴明とやらが。』

らしいな。人気がない森の方まで行くか。とうか輝夜の所に寄りたから一回寄るよ。

邪王『承知した。』

そして俺は竹林の方へ向かった。

着いてみると輝夜と永琳がいる筈の家の周りに人がいっぱいいた。あれ？この場面見たことあるぞ。デジャブか何かか？少し盗み聞きしようと思いき近に行ってみると、

武士「輝夜様ー！」

貴族「出て来て下さーい！」

とこんな声に溢れていた。そしてその中に藤原さんもいた。

晴明（えっ?! 藤原さん:!!）

神司「マジか:とりあえずコイツら全員気絶させて家に送るか。」

そして俺は足に光を出して家の周りにいる貴族や武士に蹴りや殴りをし、バタバタと倒れた。そして俺はコイツらを元居た場所にテレポートさせた。

すると今までうるさかった場所が一気に静かになった。

神司「ふう:さてと、おーい輝夜ー! 永琳ー! 居るなら返事してくれー!」

俺は扉をノックし続けながら叫んだ。

神司「神司だー! 周りにいる武士とかは前みたいに帰したからさー! 開けてくれよー?」

すると玄関の扉がゆっくりと開いた。そこから永琳が出てきた。

永琳「神司っ!!」

神司「あはは、久しぶりだな。輝夜は居るか?」

永琳「ええ、居るわ。着いてきて。」

そして俺は永琳に言われて中に入った。

永淋「それにしても貴方、あの後生きてたのね。」

神司「いいや。永淋と輝夜が連れ去られた後ドラたちを逃がして俺は妖怪に殺されて一度冥界に行つたさ。」

永淋「えっ!?! 貴方が?」

神司「まあな。話は変えるがどうしてまたここへ?」

永淋「不死の薬を月で作つたのよ。それでね。」

神司「ふーん…で誰だ。無断で人家に上がる悪人は。」

永淋「やっぱりね…。」

俺たちが後ろに向くと居たのはまんまと俺の罠に填まつた晴明だった。

晴明「あら、バレていたのね。(気配と足音はすっかり消してた筈なのに…何で…!?)」  
神司「そりやあなあ。気配消してるつもりだろうが靈気は丸出しだからな。それでわかるから…で俺に何用ですかな? 人里からずっと俺のことを着いてきてますが…。」

晴明「そりやあ、理由は簡単ですよ。陰陽師が妖怪を倒すことは当たり前。昨日からおかしいと思いましたよ。貴方は昨日城の中全員の記憶を変えたおつもりでしたのしょう。ですが私はその事にいち早く気付き自分の身代わりに攻撃を受けさせてこうして動いているのです。そして昨日百鬼夜行の件を話している時貴方は少し思考がおかしかった。鬼探し? 天邪鬼? 結局は百鬼夜行が知られていないかを確める為でしょ

う。バレバレなのですよッ！」

神司「うーむ…場所も場所だ。永淋、また今度話そう。今は奴を倒す。」

永淋「わかったわ。それじゃあ…。」

テレポート

神司「またな♪んじや清明。瞬間移動

!!」

清明「…。」

テレポート

瞬間移動した俺らは怠惰と闘った山の麓まで翔んだ。

神司「…よし、ここなら良いだろう。清明は俺をどうするんだっけ？」

清明「倒します。」

神司「そうか…一つ質問していい？」

清明「いくらでもどうぞ。」

神司「ありがとう…陰陽師ってさ。妖怪と仲良く無いの？」

清明「他の陰陽師によって好き嫌いは異なるけど私は妖怪のこと好きですね。でも貴

方は私が倒す。」

神司「理不尽だなあ…それでお前は俺を倒すとな。」

晴明「ああ、ブツ潰シテヤル……！」

神司「っ!! 何かが取り憑いてるな……! 良いぜ! 本気で潰してやる!!」

すると晴明は笑いだし晴明から悪魔が出てきた。

神司「コイツは……! 赤い服に赤いフードを被りぼろ切れの赤い服を上に着ている悪魔。そして女性の悪魔……コイツは……タルウイ? か!!」

## 第4 4話 VSタルウイ

神司「懐かしいな…。タルウイ…。」

タル「懐かしいのは後にしなさい。貴方がミカエルを倒したって聞いたから貴方を探しに来たのよ。」

神司「ふーん…でも探しに来たわりには大分貴女の周りから熱が出てきていますが？」

タル「そりやあね…貴方を殺すからでしょう…♪」

そう言ったタルウイはさつきより多くの熱を出して球体にした。そしてそれを俺に投げつけた。

神司「キルカウンター！」

俺は刀を抜いて熱球を斬ってはね返した。だが相手は熱の邪神だ。そのはね返した熱球を自分の体に入れて防いだ。

タル「ふう…♪つて！危ないじゃない!?」

神司「危ないのはテメエだ!!いきなり熱の球を投げるからだろ！」

タル「あらそうかしら。…貴方を殺すよりこの人質を殺すのも面白そうよね…♪」

するとタルウイは晴明の首を掴んで空を飛んだ。

神司「なっ?! 晴明を放せ!! タルウイイ!!」

タル「あら? もしかしてもしかするとこの人が貴方は大事なのかしら?」

神司「当たり前だろ…! しかもそいつは今は関係ない筈だ。だろ?」

するとタルウイは不思議な笑みを浮かび出し笑い出した。

タル「あらら…♪それならどうぞ?」

タルウイは晴明を空の上から落とした。

神司「なっ!」

俺は晴明が落ちるところまで来て羽を出してジャンプした。ただし…、

ズシャ…!

何か変な音がした。俺はゆっくりと上、晴明が落ちてくる上を見た。すると

.....

丸い球体と体が落ちてきた。

神司「え……?」

俺はどちらもしっかりとキャッチした。その球体を確認したそしてその球体は顔だった。しかも晴明の頭だ。下から血が垂れていた。そして俺はもう一つの体を確認した。やはりその体は晴明のだった。

神司「……は？」

俺が混乱していると空からタルウイが降りてきた。

タル「ビックリサプライズ！♪フフフツツどうかしら？♪」

神司「……」

俺の目の前で人が死ぬ……俺の目の前で友人が死ぬ……？

神司「……死者再生……」

俺が唱えると清明の首と体がくつついた。そして鼓動を確認するとしつかりと命は動いていた。

神司「良かった……」

タル「あらら……生き返っちゃった……」

神司「……なあ、タルウイ……」

タル「何だi……ぐがあ!!？」

俺はタルウイの顔にアツパーをした。するとタルウイは上に上がった。

神司「関係ないやつを巻き込む……!」

そして俺は真っ黒な羽を俺自身に生やした。そして清明に結界を張った。しかも音無の方を。そして俺はタルウイが飛んだ上まで飛んで下に叩き落とした。

タル「ぐぎゃあ!」

俺はタルウイが落ちた下まで来て、

神司「なあ、タルウイ…。なぜ晴明を巻き込んだ…？」

タル「うつ…うるさい…！」

俺はタルウイの顔を思いつき殴った。

タル「があ?!」

神司「女性だからって邪神だからまだこんなんで死なねえよな…？タルウイ。」

タル「フフツ…貴方…私が死んだらどうなるか判ってる…？」

神司「どうなるんだよ。」

するとタルウイは溶け出し周りの草や大地が溶け始めた。

神司「ふーん…絶対冷度。」

俺はタルウイを氷で固まらせた。すると溶けたタルウイごと凍った。

タル「えっ…？さっ、さぶい…!!冷たい…!!」

神司「これで被害はない。さて、そのまま放置するのも何だし晴明の式神にでも成つとれ。」

これの方が晴明にとつても俺にとつても都合が良いからな。

タル「はいはい…わかりましたよ。」

神司「んじゃ今から解くが絶対に暴れんなよ？」

タル「判ってるわよ。」

そして俺はタルウイのと晴明の結界を解いた。

神司「よし、とりあえず俺らの宿に向かうぞ。タルは晴明を担いでくれ。」

タル「はいはい。」

そしてタルウイは晴明を担いで俺と一緒に宿に戻った。

## 第45話 買い物の中にはトラブルが付き物

神司「ああ！そうだった！」

タル「どうしたの!？」

神司「ああ…：煎餅買いに行くのを忘れてた…。」

タル「煎餅!？」

そう、シロに買ってくる様の煎餅を買いにいかなければいけないのだ。

神司「あく…：ごめんタル一緒に付き合ってくれないか？」

タル「別に良いけど…。」

神司「よし！決定だな。」

そして俺たち（タルウイは清明を背負って）は菓子店に向かった。

神司「確かここだよな…。」

タル「これは？」

タルウイが指指したのは煎餅は煎餅でも醤油煎餅だった。

神司「ああ、違うわ。シロが欲しいのは塩の方なんだわ。」

タル「そつ、そうなの…：というかシロって誰なの？」

神司「シロは俺の従者の獣人の妹側さ。因に従者が俺には四人ほどいるな。」  
タル「そんなに!?!」

ウリエルとサリエル、そしてマレット兄妹だからな。

あと…サユリ…? 確か死ぬ前に成ってた…気がする…。

タル「ふーん…まつ、いいや。で塩ってコレ?」

神司「ん? ああ、それだよ。おじさん、塩の方と醤油の方の煎餅五枚ずつ下さい。」

おじさん「あいよ!」

おじさんは塩と醤油の煎餅を五枚ずつ取って布に入れた。

おじさん「はい、どうぞ。」

タル「えっ! 私!? あ、ありがとうございます…。」

おじさん「また来てよ!」

神司「ありがとうございます。」

俺たちは宿に帰ろうとしていた時に…、

従者「落ち着いて下さい!! 藤原様!!」

従者「そうですよ!」

北の方からそんな声が聞こえてきた。

藤原「うるさいぞ!! その手を離さないか!!?」

藤原さんが従者たちの手を払い走っていた。

タル「何…あれ…？」

神司「見るな。ああ成ると元には戻らん。」

ん？待てよ…？藤原さんが向かっている方向は…

神司「ヤバイ!!」

タル「何がヤバイのよ!」

藤原さんが向かっている場所…それは…

神司「無事でいろよ…!輝夜…!永淋…!!」

タル「ちよつと…待ちなさい!!」

神司「何だよ!」

急がないと輝夜と永淋が危ないのだぞ!!

タル「貴方がそんなに成ってどうするのよ。貴方だって今はあの藤原って奴みたいなのよ…？だからさ、落ち着きなよ…？」

神司「…確かにそうだ。ありがとうタルウイ。良し…!瞬間移動するから俺の方に…って清明いるから難しいか。まずは清明を宿に戻さないとな。」

と言つて俺は清明を宿に翔ばした。そして清明が起きても驚かない様に怠惰に連絡した。

神司『怠惰く?』

怠惰『ん?どした王よ。』

神司『今そつちに晴明を翔ばしたから布団に入れててくれ。』

怠惰『はいよ。』

そして俺らは輝夜の方へ向かった。

永淋「だから今は居ませんって!」

藤原「嘘だな!お前はいつもそう言っ居るからな!」

神司「タルウイ、熱で藤原を退かしてくれ。」

タル「はいよ。」

タルウイは熱を体から出してそれを手に集中させた。そしてその熱をゆつくりと蒸気化させた。

藤原「アツイツ!?(何故だ:何故こんなにアツいのだ:。)

永淋「アツい:?:」

どうやら藤原さんにだけ熱が伝わっている様だ。元敵ながら流石だ。

神司「タルウイ、そのまま藤原さんに熱を送り続けてくれ。」

タル「わかったよ。」

そして俺は藤原さんたちの方へ歩いた。

神司「なあ、藤原さん。」

藤原「おお…神司殿…どうしたのだ…？」

永淋「神司さん…！」

神司「いやね、竹林を少し散歩してたらね藤原さんを見つけてね、そしてたらこの女性と揉めてたのが見えてからね。それで今此処に来たってこと。」

藤原「そうだ！聞いてくれ神司殿！この従者がな！かぐや姫様が居ないとしつこくてな！」

永淋「それは本当に…！」

藤原「黙れ！下民が!!」

永淋「ひい！」

神司「…藤原さん、君には呆れたよ。最初から見えていたよ。人里で従者を引きずりながら歩く藤原さんがね。」

藤原「ど、何処でそれを…！」

バレていることに慌てる藤原さん。

神司「まあまあ、慌てる必要はないって。もうバレてるから。で、何処に行くのかな

…?」

藤原さんがこつそりと後ろに下がろうとしていたのでとりあえず止めた。

藤原「ちよつと待て！私は何故お前に怯えているのだ！」

神司「知るかよ。そんなの俺を恐れているんだろ。ほらその通り足を震えさせてるぞ…?」

と言つて少し殺氣と邪氣を放つた。すると藤原さんは本当に足を震えさせて怯えていた。少し永淋も怯えていたが多分大丈夫だろう。

神司「でだ、二択の質問をする。一つはこのまま俺に殺されるかもう一つは大人しく自分の城に帰つて政治をしっかりとする、そしてかぐや姫様の事をなかつた様に記憶から消すかだ。どっちだ？」

藤原「殺されるのは嫌です…。」

神司「何て？」

藤原「殺されるのは嫌です!!」

神司「んじゃ、急いで帰つてまずかぐや姫様の事を忘れな！そしてこの世のために政治をしっかりとしろ！」

藤原「わつ、わかりました!!」

藤原さんは走つて竹林を越えて帰つていった。途中転けていたが俺は笑うのを我慢

してタルウイに声を掛けた。

神司「タルウイももういいぞ。ありがとな。」

タル「そう。」

永淋をもう一度見ると少し俺らを警戒していた。そっか、邪気を放ちっぱなしだった。俺は邪気を消した。すると永淋はリラックスした。

永淋「ありがどうね。神司……。」

神司「困った時はお互い様さ。大丈夫だったか？藤原さんに何かされなかった？」

永淋「ええ、大丈夫よ。あの人は輝夜一筋の様だったから。」

神司「良かった。んじや帰るよ。サグメさんたちが待つてるからね。」

永淋「サグメ様によろしくって伝えてね。」

神司「そのつもりさ。それじゃ。タルウイ行こうぜ。」

タル「そうね。」

俺らは永淋に挨拶して歩いた。そして竹林を越えて宿に帰ってきた。

扉を開けてただいまと言ったら、シロが真っ先に迎えてくれたそしてシロに続いて皆が来てくれた。怠惰とサキはまだ居た。そしてシロがすぐ来た理由はお土産待ちだった。そして俺は煎餅をシロに渡すとシロは、

シロ「煎餅より団子の方がよかった。」

するとドラがシロに拳骨して、

ドラ「こらっ。」

シロは頭を抑えて痛いと言っていた。そして俺らは居間の方へ行きタルウイの件、そして藤原さんの件も伝えた。

そして長かった今日は幕を閉じた。

## 第六章 未来を決める者たち

### 第46話 冥王星からのSOS

地球から遠く離れた星、冥王星。そしてこの星の神としてウリエルが崇められていた。

ウリ「……暇なこった……」

そんな感じにウリエルはいつも暇だったが、そんな日に一人の従者がウリエルに知らせを伝えるに来了。

従者「ウリエル様！」

ウリ「どうしたんだ？キルア。」

この従者の名前はキルア。ウリエル軍隊長、そしてウリエルに二番に信じられている人間の一人だ。因に一番は神ノ邪神だそうだ。

キルア「侵入者です！私たちの軍が戦っても負けるだけで残り数十名だけとなりました……！」

ウリ「マジか……。少し応戦する仲間を探してみるよ。その間残りの戦友たちを避難させて他の住民も避難させろ。」

キルア「了解致しました！」

キルアはウリエルに言われた通りに仲間たちを避難させに行った。ウリ「仲間か…もししたらあのお方ならば…！」

そして視点は変わって地球の邪神、神司は…、

神司「寒いな…。」

もう冬だな。見りや分かるが雪がしんしんと降っていた。

神司「こりやあ、明日には積もるかな。」

ウリ『神ノ様!!』

神司「うわあ!?!」

ウリ『す、すみません神ノ様。ですけど!』

ウリエルから聞いた話では、冥王星では侵入者が現れた様だった。

神司「…で、助けて欲しいと。」

ウリ『はい…。』

しょうがない従者だなあ…。まあ、時間もあるし暇だし。

神司「良いよ。俺の仲間たちと一緒にそっちに向かうよ。」

ウリ『本当ですか!?!』

神司「まあな。んじや少し待つてろ。急いで行くから。」  
ウリ『了解しました!』

そしてウリエルとの通信が切れた。よしつ、ウリエルたちと共闘するためにぬらりに報告でもするかな。

? 「貴方も仲間思いなのですね…妖怪なのに…。」  
声をした方向を見ると晴明が立っていた。

神司「まあな俺は妖怪…いや邪神だが仲間思いなのだろうな。本当ならお前を始末するつもりが俺の治療で復活させてしまったから…殺すことはもう出来ないのさ。」

晴明「ですが、私は貴方の敵、そして百鬼夜行を潰そうと考えた一人の人間なんですよ…?。」

そこまで深く考えていたのか…。

神司「お前は俺の仲間だ。その事にお前の母は妖怪だろ?。」

晴明「なつ、何故その事を…!。」

そんな驚くことかなあ…?臭いで全然分かるつての。

だが俺はそこで少し遊んで、

神司「さあなあ♪さて仕度しとけよ。今から行くのはこの土地とは違う土地だからな。」

晴明「…はい？」

さてと…ぬらりに連絡するか…。

俺はぬらりに繋げた。

神司『ぬらり？』

ぬらり『うん、どうしたの？神司くん。』

神司『実はなあ、俺が邪神の時代の時の戦友ウリエルってやつが居てな。』

ぬらり『うん。』

神司『そいつが今ピンチなんだってよ。』

ぬらり『…で、一緒に助けに来てくれと…？』

神司『ああ、そういう事だ。』

ぬらり『良いよ。ただ…。』

神司『ただ？』

ぬらりと話していると後ろから声が出て、

？「二つの問題を一緒に解決してほしい。」

神司「うわっ！」

振り向くと後ろにぬらりが立っていた。

神司「で、二つの問題を…？」

ぬらり「うん、一つが僕の後ろにいる二人の子の事なんだけど…。」

ぬらりの後ろを見ると一人は桃色の髪 of 少女と黄緑の髪 of 少女がいた。

神司「この子たちは？」

ぬらり「最近、百鬼夜行に居候中のさとりとこいしだよ。」

ぬらりが紹介すると桃色の少女が自己紹介をし始めた。

さとり「どうも、私は古明地 さとりといいます。そして妹の…」

こいし「こいしだよ♪」

神司「俺はぬらりひよんの友人の神司だ。よろしくな。」

さとり「よろしくお願ひします。」

さとりがペコリとお辞儀をした。礼儀の正しい子だな。

神司「二人がどうしたの？」

さとり「ほら、こいし言ってみなさい…。」

こいし「神司さん…あのね…。」

神司「どしたの？」

こいしが恥ずかしそうにモジモジしながら放った言葉は…、

こいし「私の…！この私の第三の眼を潰してほしいの!!」

こいしが放った言葉は誰もが驚く様な言葉だった。そして俺には少し難しい問題

だ  
っ  
た。

## 第47話 二つの道

神司「ぬらりり…どういふことだよ。」

すっかり説明してもらわなければわからない。ましてや今初めて会った少女の眼を潰せだと…？出来る訳ないだろう…。

ぬらりり「…ごめんよ、神司くん…。これはこいしちゃん自信が決めたことなんだ…！」  
神司「……」

うくん…これは悩みどころだな…ちよつと待てよ、

神司「こいしの件はごめんだけどまた後で。ぬらりり、もう一つは何なんだ？」

そう、もう一つぬらりりからの用件があるのだ。

ぬらりり「そうだった！というかこつちの方が大切だった！」

？「おいおい…ここまでだぜ…。」

ぬらりり「ゲツ…！」

声が出た方向を見ると数人の鬼が居た。あれ？確か鬼は百鬼夜行の仲間だった筈なのだが…、

ぬらりり「フフフツ…まさかそつちから来てくれるとは大感謝だね…。」

鬼「何!？」

ぬらり「神司くん…もう一つの用件っていうのはコレだよ…。」

神司「どういふことだよ。」

俺が困っているときとりが応答した。

さとり「総代将が言う代わりに私が説明します!総代将は鬼たちを!」

ぬらり「言われなくても任せな!」

と言つてぬらりは鬼たちと鬨い始めた。

さとり「実はですね…」

どうやらさとりが言う感じには、ある一人の妖怪が入つて来て百鬼夜行の皆は宴会したそうだ。そんな時にその妖怪が一人一人酒を次いで鬼や天狗、河童に飲ませた。生憎、ぬらりはいつもの酒を飲むと言つて断つた。さとりとこいしはぬらりの方に居たからあの酒を飲まなくて済んだ…のだが、あの妖怪が次いだ酒を飲んだ仲間たちが暴れ始めた。ぬらりたちは三人じゃ無理だと思ひ俺のところへ来た。

さとり「…という事が起きました。」

神司「なるほどね…。」

どうしよう、ウリエルの方にも行かなくちゃだし、ぬらりの方でも加勢しなきゃだし

…待てよ、今宿には怠惰がいるぞ。ウリエルと怠惰は会った事があるはずだ。俺はそう思いながら怠惰に繋げた。

神司「んじゃ、加勢してきますか…! 『怠惰! 速急に応答を!』」

俺は鬼たちと闘いながら怠惰に繋げていた。

怠惰『何だ? 俺含めて全員用意整っているが…。』

神司『緊急事態だ! 百鬼夜行のなあ!』

怠惰「何だ?! 『おっと…すまん。で、大丈夫なのか?』」

神司『今回はぬらりと居候の妖怪二人以外全員敵らしい。』

怠惰『…なるほど、それで俺らがウリエルの加勢に行ってくれと。』

神司『そういう事だ。でサグメだけを置いて怠惰たちは冥王星に向かってくれ。』

怠惰『何故サグメだけ?』

神司『…察しろよ…。』

怠惰『ああ、分かったよ。んじゃ、いく方法はどうする?』

そうだな…冥王星に行くルートがわからん…いや、一つあるじゃないか。

神司『俺がそっちに行ってゲートを開く。だから少し待ってくれ。』

と言い残し最後の鬼を倒した。

神司「よしっ…」

ぬらり「ありがとう、神司くん……。」

神司「いやいや、少し用があるから……。」

ぬらり「……従者の件か？」

神司「それに関わる事だ。」

ぬらりは少し考えて、

ぬらり「わかった、十分で帰って来なよ。」

十分か……余裕だな。

神司「了解！」

俺はゲートを開けて宿に繋げた。

ぬらり「えっ……？」

俺はゲートを抜けて怠惰が居るところに来て、ゲートを閉じた。そこには皆がいた。

神司「ごめんな……。」

ドラ「怠惰さんから聞きました。」

シロ「私たちに任せて！」

サキ「ベルフェゴール様の主人の命令なら……。」

タル「任せなよ……。」

神司「あつ、いや清明とタルウイそしてサグメは俺と着いてきてくれ。」

タル・晴明 「「えっ……？」」

神司 「理由は簡単。晴明は陰陽師だから、タルウイはその式神だよ。」

俺がそう言ったら皆が頷いた。

神司 「サグメはまた助けられなかったら、しかも俺のいないところでだ。だからだよ。」

サグメ 「…了解しました。」

シロ 「え〜？私も女性だよ？」

ドラ 「お前はまだ子供だ。」

シロ 「酷いね!?!お兄ちゃん！」

怠惰 「王よ…」

神司 「どうした？」

怠惰 「早くゲートを開けろ。」

神司 「それを王に言う台詞かよ…」

と言いつつゲートを開いた。

神司 「んじやお前ら、任務の話をするぞ。俺とサグメ、晴明とタルウイは百鬼夜行を救ってくる。そして怠惰とドラとシロとサキはウリエルの星、冥王星を死守してくれ。今開いたゲートの奥にウリエルが居る筈だからな。」

ドラ・シロ 「「了解!!」」

サキ「了解致しました。」

怠惰「了解。」

神司「それじゃあお前ら、検討を祈るぞ。」

怠惰「死なねえ俺らだから絶対に帰ってくるよ。」

そして怠惰たちはゲートに入った。

神司「よし、ぬらりの方へ合流するぞ。」

俺はぬらりの方にゲートを開き三人が入った後に俺が最後に入ってゲートを閉じた。

## 第48話 喧嘩と仲間

怠惰「ここか…」

着いてみたらそこにはウリエルと一人の青年が居た。

？「何奴！」

青年が構えると俺とサキ以外のドラとシロが構えた。

怠惰「なあ、多分あの青年は敵じゃねえぞ。」

そう言うとうリエルが俺らに気付きこっちまで歩いて来た。

ウリ「まさか、貴方が来るとは…神ノ様は？」

怠惰「王なら今頃地球の妖怪軍隊と戦ってる筈だよ。」

？「…ウリエル様…コイツら敵ではないのですか…？」

何だ、青年はまだ俺らを怪しんでたのか。まあ、俺も悪魔だからしょうがねえがな。

ウリ「ああ、古き戦友の…」

怠惰「怠惰だ、ヨロシクな。そして使い魔でサキユバスのサキ。」

サキ「よろしくお願いします。」

サキはウリエルたちに一礼した。

そして俺は王の従者の紹介を続けた。

怠惰「で、王の新しい従者の…」

ドラ「兄のドラ・マレットです。そして妹の…」

シロ「シロフォン・マレットだよ♪ヨロシクネ♪」

ドラは一礼したがシロの方はウリエルたちに握手を求めた。

ウリ「ああ、よろしく。」

ウリエルとシロは握手を交わした。シロは続けて青年の方に握手を求めたが青年は手を払い、

ドラ「何するのですか！」

青年「すまないな、私は握手などは断っているのだよ。」

ドラ「だからって叩いて払わなくとも…!」

ドラが青年にそう言うのもおかしくない。だってシロは握手を求めただけなのだから。

ウリ「ごめんよ…こいつの名前は」キルア・コア?、そして隊長なんだけど…成り始めればかりで…」

キルア「そんな奴らの手を借りなくても私たち、『ウリエル軍』と『冥王軍』の二隊で相手を潰せます…!」

ウリ「だからそれで今はピンチなんだよ!? 状況を判ろうよ!」

俺は二人の間に入り喧嘩を止めた。

怠惰「何でそこで喧嘩するかねえ…」

キルア「貴方には関係ない話…!」

怠惰「はあ…?」

グリアモール

俺は殺気をもろに出して魔術書から大鎌を取り出した。

怠惰「なあ…少し調子乗りすぎだよなあ? 何だっけ、キルアよお…。」

俺はキルアの後ろに周り首に鎌の刃を付けた。

キルア「ッ…!」

怠惰「今回はウリエルや小さい子がいるということが多めに見てやるが、次俺らを嘗めてみる。テメエの首をこの鎌で斬ってやるぞ…?」

これぐらいしないとこういういい加減な野郎は反省しねえからな。

キルア「…:はい…」

ウリ「怠惰さん…」

怠惰「まつ、別に殺さねえよ。」

面倒だからな。

怠惰「ほら行かねえのか？ 侵入者たちを蹴散らすのだろう？」

ウリ「…そうだった…！ 行くぞ！ お前ら！！」

冥王軍「「オオオー！！」」

俺らはこの城から出て侵入者たちの方へと向かった。

そして視点は変わってその頃神司たちは…、

神司「時間は？」

ぬらり「えーつと…十分三十秒。」

神司「あちやく…」

少し遅かったか…まあ、良いだろ目的は時間のことじゃねえし。

さとり「この方たちは？」

神司「ああ、俺の彼女のサグメと…」

サグメ「今紹介があつたと思うが、百鬼夜行部隊の稀神 サグメだ。よろしく頼む。」

清明「元 藤原氏に遣えていた陰陽師の安部 清明です。そして式神の…」

タル「タルウイだよ。」

ぬらり「陰陽師…だと…？」

ぬらりは清明が陰陽師だと知って少し妖気を出した。

神司「待て！ ぬらり！！」

俺はぬらりと晴明の間に入りぬらりを止めた。

ぬらり「退きな、まさか君がその女の口車に乗っているのかい？」

神司「ごめんだけどその考えは間違ってるよ。」

ぬらり「……」

神司「……」

ぬらり「フフツ…♪冗談だよ♪ごめんよ、晴明ちゃん。ただし裏切りは許さないからね。んじゃ、陰陽師さんの手でも借りますかねえ♪」

良かった、とりあえず晴明とぬらりは仲間になった様だ…。

晴明「了解しましたけど、貴方も裏切らないで下さいよ。」

ぬらり「まさかこのぬらりひよんが仲間を裏切るとでも？」

晴明「そうですね？」

ぬらり「君は僕に喧嘩でも売ってるのか？」

晴明「さあ？」

ぬらり「…君と喋っていると気が狂いそうだ。」

晴明「私もです。」

神司「お前らさあ…」

何でこんな事になるんだよ…ただでさえ百鬼夜行が危ないつてのに…、

神司「ほら、さとりこいし、タルウイ。あの二人を置いて行こうぜ。」  
さとり「はい。」

こいし「うん！」

タル「それもそうだね。」

俺はぬらりと晴明を置いて百鬼夜行本部に向かった。すると…、

ぬらり「総代将を置いてかい!？」

晴明「タルウイ!?!神司さん!？」

二人が走って向かってきた。

神司「早く来いよ。」

さて、気を引き締めて…、

神司「今からは遊んでる場合じゃないからな…!」

二人は俺らに追い付いて百鬼夜行本部に急いで向かった。

## 第49話 残酷

怠惰「おらよ！」

侵入者「ぐわっ！」

ドラ「……」

侵入者「おらー!!!」

キンツ……

侵入者「な……に……!?!」

現在、俺らは侵入者を全て排除するために色々と技を試している。

シロ「行けー！」

俺は大鎌で斬って、ドラはいつも刀で相手を斬っている。シロは水や風で色々な方向に放っている、珠に仲間当たっているが……そこは気にしないでおう。そしてウリエルはというと……

ウリ「うくん……」

キルア「どうか致しましたか？」

ウリ「いやね、何故侵入者たちはこの星に攻めて来たのかな、とね。」

キルア「また武器などの目当てででしょう。」

ウリ「そうかな…?」

考え事をしていた。

確かに周りを見れば普通の家、そしてそんな高級そうに見えないウリエルの城。武器だつて普通の銃や刀。まあ、地球よりは時代は進歩しているがな。

だが何故侵入者は攻めて来たのだろうか。

怠惰「サキ。」

俺は小さな声でサキを呼んだ。するとすぐに俺の隣に跪いた。

サキ「はっ。」

怠惰「相手の軍の一人を捕まえて俺に持って来てくれ。」

サキ「了解致しました。」

サキは飛んですぐに一人、捕まえて来た。

侵入者「おっ、おい！止めろ!!」

怠惰「ご苦労、サキ。さてとりあえず城に戻るぞ。」

俺とサキはウリエルの城に戻って、侵入者を縄を両手両足に結んだ。

怠惰「さて、目的を聞こうか…いや、その前にお前は何処から来た侵入者だ。」

ここで俺は少し邪気を放った。すると侵入者は少しビビりすぐに話始めた。

侵入者「月からだよ……」

怠惰「何だ、えらい素直じゃないか。で、ここに来た目的は？」

侵入者「……月軍がこの星を支配して、月の勢力を上げる為だ。」

怠惰「ふーん……何だ、そんな事か……」

侵入者「そんな事とは何だ！」

怠惰「いや？月の人らって普通に話し合いが出来ないのだから……と思ってね。」

侵入者「何を！」

怠惰「だってそうだろう？話し合いをすれば、ウリエルだって力を貸したと思うぞ？ましてや戦争、殺し合いだと？そんなの勝った軍だけ有利で負けた軍は不利だろうよ。武器を造る知識は良いが、頭を使う知能は低いのだな、月つてのは。」

これに反論出来たら逆に褒め称えるわ。普通は反論出来ないからな。ましてや、間違った者に正論をぶつけているだけだが……さすがにコイツも言語を喋る生き物だ。理解は出来るだろう。

と思っていると侵入者の者が、

侵入者「そうかもしれない……だが！この星より我らの方が知識、知能が高いのだ！一度地球という星に行ったことがあるが、そこより進歩している冥王星を我々は選んだのだぞ！これは立派な我々の月人たちの成長という物だな！」

怠惰「…はあ？」

月人「何!？」

何、コイツ…いや、月の人つてのはイカれてるの？頭のネジ外れてる？今までいろんな星、世界を旅したがこんな無様な生き物は生まれて初めてだ。

怠惰「まあいいや。お前は帰れ。」

月人「はあ？」

俺は鎌を構えて、

怠惰「永遠の場所にな…！」

月人「なっ…!？」

月人の首は翔んで体だけが残り倒れた。翔んだ首は俺の手元に落ちた。

怠惰「…サキ、あとの処理よろしく頼む。」

俺はサキに月人の頭を渡した。

サキ「はい…」

そしてサキは倒れた体の所に行き、倒れた体を林檎に変えて、頭を蜜柑に変えた。そしてその果物を美味しそうに食べ始めた。

相変わらずその処理の仕方は変えて欲しいものだ。俺は馴れたが他の人から見ると残酷に見えるだろう。

怠惰「…それじゃあ、残りを仕留めるか…行くぞ、サキ。」  
サキ「ゴクンっ…はい♪」

サキは汚れた口をハンカチで拭いて俺の所に走って来た。  
さて場所は変わり地球の方は…、

神司「うん…」

ぬらり「どうしたの？」

神司「いやね…少し迷っちゃって…ははは…」

皆「…はあ!?!」

ぬらり「迷った!?!」

神司「うっ、うん…」

ぬらり「それじゃあ、着いてきてよ…」

俺らがぬらり着いて行って歩いた。すると上から石や矢が飛んできた。

こいし「いたっ!」

さとり「こいし!!」

どうやらこいしに当たった様だ。

神司「ごめん!ちよつとこいしの所に行ってくる!」

と言って俺はこいしの所に走った。

神司「大丈夫か…?!」

さとり「ええ、私は大丈夫ですが、こいしが…」

さとりが指差したところはこいしの第三の目の場所だった。

こいし「いいよ…お姉ちゃん…神司…私の願いが叶ったのだから…」

神司「……」

俺はこいしの第三の目に手を置いて処置はした。ただ、こいしの目は閉じたままだった。

これ以上、この子たちを危険な目に会わせない。と思い自分が放った言葉が…

神司「今回だけでいい、二人を守るためなんだ。今から二人はこのペンダントに入つてほしい。」

俺はペンダントを創作し、手の上に出した。

さとり「嫌です。」

こいし「こいしも。」

神司「…ああ、判つてたさ。ならば死ぬなよ。」

さとり「そんな事言われなくても私たちはするつもりです。」

こいし「神司、目の怪我を治してくれたのはありがとう。だからだよ、今からは私たちが神司に恩を返すのだからさ♪」

なるほどな、だから入ってくれなかったのか…ならば…、

神司「なら、全力で百鬼夜行を救わなきゃな。」

邪王『クハハハハ！ならば我も参戦しても良いよなあ!!?』

神司「ああ良いぜ、ただし鬼と天狗、河童は殺さずに気絶な。他の妖怪は殺せ。」

邪王『りよーかい。』

そして邪神王は俺の体から出てきた。

神司「タイムリミットは？」

邪王「…：一時間…つてところだな、早めに片づけて今回のボスを探すぜ。見つけたら通信する。」

神司「了解した。」

邪神王は百鬼夜行本部に歩いて向かった。

ぬらり「…とりあえず河童隊は気絶させたよ。」

やっぱり、あの策は河童の皆だったか。

神司「ありがとう。」

ぬらり「…それにしてもさっきのは…」

神司「邪神王のことか。邪神王は俺の相棒さ。」

ぬらり「邪神王？」

神司「まあ…その、今は置いといて先に進もうぜ。」

俺は森の先に進んだ。

いつもの事だが、話さない理由は勿論、話すと面倒くさいことに成るからだ。

ぬらり「上手くスルーしたな…」

ごめんぬらり…俺はお前を騙してもこの百鬼夜行を守るからな。

俺が少し歩いていると、

？「へえ…あんたが胡桃様から聞いた神司か？」

後ろにいたのは一本の長い角が生えた鬼と二本の角が生えたロリの鬼とそのまた小

さな女がいた。

神司「お前らは誰だ？」

？「私は星熊 勇儀。」

？「私は伊吹 すい香だよ。」

？「私華扇！」

神司「華扇!?!」

勇儀「ああん？どうしたのだい？」

神司「いやねえ…華扇という名前を持つ従者がいるから少し驚いただけさ。で？俺を

倒すのかい？」

伊吹「そうだねえ…」

華扇「遠慮なくね♪」

神司「そうか…なら…!」

俺は自身の周りに針を数千本浮かせた。

神司「少し眠ってもらおう。『針千本』!!」

俺は針を全て放った。

鬼「「なあ!?!」」

すると鬼たちは針に当たり眠りに落ちた。

神司「疲れたろ…お疲れ様だな。」

勿論気絶にさせてある。そして俺はその先に向かおうとすると…、

？「あれれ？私の最高な部下三人を倒したのかい？」

声が出た方向を見ると、

神「…：胡桃か…」

天狗「ハハハ！神司くんじゃん！」

河童「確かにね、なら遠慮なく俺らで打ちのめせるなあ♪」

ぞろぞろと出てきたと思ったらそこにいた天狗と河童は、

神司「天魔…新羅義…！」

まさかの百鬼夜行の最高幹部の三人がここに集結してしまったのだ。

## 第50話 二種の悪夢

胡桃「はははっ……！行こうぜ！天魔、河童！」

天魔「良いよ！神司と一回は戦いたかつたんだよねえ♪」

新羅義「名前で呼べよ！胡桃!!」

この三人が相手かよ……！俺には倒せないな……ましてや、アイツがいねえと俺は本気出すことができない……。今は逃げるか……。

神司「今の俺じゃあ、お前らには勝てないぜ？それでも良いのか？」

胡桃「へえ……そんなのでこの勝負に逃げる気かい？」

神司「一時的にな♪」

天魔「逃がさないよ……！」

気づくと天魔が俺の後ろに回って俺の両腕を掴んで逃げない様にした。

神司「ッ！離せ!!」

天魔「ほらほら、胡桃今だよ！」

すると胡桃は俺の腹を思いつき殴った。

神司「ぐあっ……」

胡桃「本当のテメエなら、この天魔の腕ぐらい退けれるだろよ……何で退かねえんだ!!」  
と言つてもう一度俺の腹を殴った。

神司「ううっ……ははは……。」

胡桃「何が可笑しい?！」

神司「無駄たことを……クククツ……」

結局は試しているんだろ……俺を……。

胡桃「ああ……そうかい……なら楽に死ね!!」

すると彼女は先ほどの威力よりも本気で俺のことを殴る構えをとつた。

胡桃「天魔……！私が殴る直前に神司の野郎を放せよ……!!」

天魔「ツ……！了解……！」

神司「受けてたつてやるよ……！殺す気で来いよ……！」

そして彼女は俺を殴る直前に天魔は俺の腕を放して胡桃は先ほどよりも思いつきり殴った。

すると俺はぶつ飛び一本の木に当たつて木は倒れた。そして俺も倒れた。

神司「がはっ……！」

俺は口から血を吐いた。

? 「あらら……まだ生きていたのね……神司さん。」

声がした方向を見ると片羽だけの彼女：サグメが立っていた。

神司「フツ、前にも言ったが、俺は死なねえんだよ。」

サグメ「そうね、貴方は死なないわ。」

胡桃「ちよっ…！どういうことだよ！サグメ！」

サグメ「言葉通りよ、胡桃。」

するとサグメは片羽を広げて三本の矢を飛ばした。

するとその矢は三人の首に刺さって三人はその場に倒れた。

神司「流石だね。」

サグメ「やっぱり負けてましたか…。」

神司「うるさいなあ…俺だって、アイツ…。」

サグメ「どうせまた、邪神王さんですよね。」

神司「あれ？話したっけ？」

サグメ「シロちゃんから聞きましたよ。」

シロ…：まだどこかで俺のこと言いふらしていないよな…。

そう思っていると、邪神王が走って向かって来た。

邪王「よっ♪あれ？負けてるなあ〜w」

神司「うるさい。」

サグメ「貴方が噂の邪神王さんですね。」

邪王「おつ、相棒の彼女さんとこの姿で会うのは初めてか…ああそうとも。俺は風の噂の邪神王だ。これまた厄介な相棒の友だからな。ちよつとめんどくさいと思うがヨロシクな♪」

サグメ「ええ、こちらこそ。」

二人は握手を交わして、

邪王「それにしても間近で見たらやっぱりカワイイよな、サグメちゃんは♪」

サグメ「なっ…!」

神司「口説くな邪神王。悪戯もいい加減にしろ。で、帰って来た理由は？」

邪王「ああそうだな。見つけたよ、今回のボスがよ。」

神司「本当か？」

邪王「本当だとも。」

神司「ならそのボスのところに向かうとするか…。」

俺は立ち上がって邪神王は俺の中に戻った。

サグメ「ですが、その前にもう一戦らしいですよ。神司さん。」

？「あら、バレていたのですか。」

木の影から出てきたのは我が愛弟子の紫だった。

一方その頃怠惰たちは…、

シロ「くしゅん！」

ドラ「どうした？こんな時に風邪か？」

シロ「きつと、私の噂をしているんだよ…。」

いや、多分してないから。

と思いつつ、月軍の人達を倒し続けていた。

怠惰「ドラくん。」

ドラ「はい。」

怠惰「シロちゃんはいつもあんな感じなのか？」

ドラ「ええ、そうですね。」

王も大変だなあ…しかもシロちゃんは泣き付くモードが特に大変だろうな。

さてさて、殺すのも正直飽きたのだが。

月軍「なあ、そろそろじゃないか？」

月軍「もうすぐらしい。」

怠惰「おいおい、この戦争にそんな余裕はないんじゃないやねーのツ！」

月軍「ぐぎゃあ?!」

二つの顔をぶつけて顔をグチャグチャに潰した。

怠惰「サキ、処理よろしく。」

サキ「はい。」

そういや、あの二人が話していた『そろそろ』とは一体…

するととてつもなく大きな殺気と神力を感じた。それはあの“神戦”以来の力と気だった。

すると月軍の一人が大きな声で「退避」と言つて月軍たちは逃げていった。

怠惰「まさか…！いや、アイツは王が倒したはず…！」

ウリ「怠惰さん！」

怠惰「ウリエル、お前らの兵たちも全員下げろ。」

ウリ「ええ、あの殺気は『アイツ』のでしょうから…我が軍全員に告ぐ！一旦城に戻つて後は俺らに任せろ！キルア、よろしく頼む!!」

キルア「了解致しました！」

キルアは皆を城に誘導し、最後俺らに一礼をし城に戻つた。多分あの一礼はウリエルにだと思ふが。

怠惰「ヤバイな。」

ヤバイ理由は二つある。

その一つは、俺とサキ、そしてウリエルは良いが、ドラとシロには殺し合いをしても

らわなきやいけない。だからヤバイのだ。

そしてもう一つ、それは……俺が一人で奴を殺せないこと？だ。正直のところ本当は一人で奴を殺したい。まあ、今回は予想外だったからしようがないがな。

なんて考えていると等々、俺が『奴』と言っていた神が姿を現れた。その姿は前に殺したままだったが服は白から血に赤く染まり色が赤黒くなっていた。

怠惰「久しいな、『ミカエル』。」

ミカ「はあ……君は確か、墮天使のベルフェゴール君か。そしてその天使は元天軍のウリエルだね。」

ウリ「その名を呼ぶなクソ神が。」

ミカ「口が立派になって……だからテメエらはムカつくんだよ……！全てを燃え尽くせ！業火の炎!!」

ミカエルは手から出した炎をウリエルに向かって放った。

ドラ「おっと、炎は僕の得意な能力なのですよ。」

ドラがミカエルの炎を手で受け取り体内に入れた。

ミカ「へえ……面白い獣人だね。でも、君は大きな勘違いをしているよ。」

ドラ「はい？」

ミカ「俺が放った炎なのだから自由に何を入れてもおかしくないのさ。例えば……命

令薬?とか、ね♪」

怠惰 「なっ!?!」

するとドラは頭を抱えながら唸った。

ドラ 「うう…!!」

ミカ 「そしてその薬は飲ませた者の記憶を教えてもらえる。記憶は無くならないから安心しなよ♪さてと…ふうん、君はドラ君といふのか。さてドラ君、実の妹シロちゃんを殺しに行きな…。」

ドラ 「はい…。」

ドラはミカエルの命令に従いシロに向かって歩いた。

シロ 「嘘でしょ…?!お兄ちゃん!」

ミカ 「嘘じゃないさ!殺せ!殺せ!キラー!!」

怠惰 「王がバカなら従者もバカか。」

すると怠惰はシロとドラの間に入り、ドラの首を大鎌で切り落とした。

シロ 「きゃー!?!」

ミカ 「仲間割れか!良いぞ!!」

シロ 「キヤー!…なんてね♪」

怠惰 「何一人で盛り上がってるのさ。ミカエル。」

ミカ「何だと？」

するとドラは自己再生し、首を復活させた。勿論、落ちた首はスタッフ（サキ）が美味しく食べたがな。

ドラ「いてて…、ありがとうございます怠惰さん。」

怠惰「今後からしつかり確認しながら喰えよ。」

ドラ「はい…！」

怠惰「さて、今ので判ったと思うがミカエル。俺とウリエルは勿論、ドラとシロ、そして俺の使い魔　サキは不死なんだよ。そしてテメエは死ぬ体、つまり俺らは勝つということ…！」

そして怠惰は左手の中指を立てて、

怠惰「殺してみろよ！不死の体を持つ五人の軍隊をなあ!!」

これでミカエルへの宣戦布告は完璧だな。

ミカ「ああ…ムカつくムカつく…上等だゴラア!!」

ミカエルは俺たちに向かって炎を出しては投げ出しては投げを繰り返して突進してきた。

怠惰「さあ…！殺り合いの始まりだア!!」

## 第51話 妖怪を操る者 / VSミカエル

神司「紫か…」

紫「……」

サグメ「…神司と邪神王さんの二人は先にボスの方に向かって。」

何を言うと思ったたらそんなことかよ、サグメ。

神司「悪いがその言葉に反発するぜ。」

紫「…はあ、師匠。」

今度は紫が口を開いた。

神司「何だよ。」

紫「貴方のお嫁の言うことは聞いた方が良いと思いますよ。私も師匠が居ない方がサグメさんと話をつけやすいので。」

神司「断る！」

サグメ「紫。」

紫「判ってますよ。」

すると紫は俺の下にスキマを開いて俺を落とした。

神司「なっ！」

サグメ「神司さん！私のことは大丈夫です！安心して下さい!!」

と聞こえてスキマが閉じた。

サグメ「これで話を終わらせれる。」

紫「そうですね♪」

スキマが開いて俺は地面に落ちた。

神司「いたっ！」

？「なるほど、コイツがお前の言ってた神司という者か。」

声をした方向を見るとそこに居たのは上半身が人間で下半身が首なし馬の妖怪だった。そしてぬらりがその妖怪に首を持って今にも死にそうな感じだった。

神司「ぬらり!!」

妖怪「まあ、待て待て。コイツは返す。」

そう言つて妖怪はぬらりを投げた。俺はぬらりをキャッチして息の根を確認した。

神司「良かった！」

ちゃんとぬらりは息をしていた。

だが一つ不思議に思い妖怪に聞いた。

神司「そういや、ぬらりといた一人の人間はどこに行った。」

妖怪「ああ、あの人間か…！美味だったぞ…♪」

神司「何だと…!!」

？「待って神司！コイツの言うことに惑わされるな！」

上から降りてきたのは晴明を背負ったタルウイだった。

神司「タルウイ！」

タル「大丈夫、晴明は無事だよ。」

神司「ありがとう…」

妖怪「まあ、良かったじゃねえか！無事でよ！」

神司「テメエは何が目的でこんなことを…。」

妖怪「クククツ…ある上の者命令でな、百鬼夜行を潰そうとすると神司が来ると言っていたからな。それを実行したまでだ。」

上の者の命令か…

神司「で、その上の者とは誰なんだ？えーつと…」

妖怪「そうだったな！俺の名は“夜行 正宗”、次期の妖怪総代将に成る者だツ！覚えておく用い!!」

神司「すまないな。俺はテストを受けるときはあまり覚えていないままテストを受け

るのさー！」

タル「ダメだよ!? 何の良いこともいっていない!」

神司「タルウイ、ぬらりと晴明を避難させといてくれ。」

邪王『予知だ!!』

その予知には二人の少女が俺と夜行の間に入って俺の手助けしてくれるが二人少女は死にかけるという予知だった。

神司「タルウイ! 二人の少女が来るかもだからその事もよろしく頼む!」

タル「もう〜! 私に全部押し付けなよ!! するけど!」

タルウイぬらりと晴明を森に連れては熱の壁を張って俺を見守った。

神司「さあ来いよ、俺の本気を見せてやるよ。」

と言つて俺は何時もの剣を創った。すると夜行も刀を抜いて、

夜行「ほう…邪神の王様の本気か! それは味わいたいな…俺の隠し手はその本気を見てから見せるとしようか!」

神司「神剣『千本刃』!!」

夜行「妖刀“正宗? 邪銀!!!”

そして俺たちの刃と刃が激しくぶつかり合った。

そして怠惰たちVSミカエルは…

ドラ「雷速『雷光石火』…!」

シロ「水圧『ウォータースプラッシュ×5倍』!!」

ドラは足に雷を着けて速く走ってミカエルを斬って、シロはミカエルの上にミカエルの体重の5倍はある水を落としたが、

ミカ「フハハッ! 何処を見ている!?!」

ドラ「くっ…!」

斬ったり潰したと思っていたミカエルはそこから消えてドラの頭を殴った。

するとミカエルが何人にも増えてドラをミンチにした。

サキ「吸収『ドレインブレイク』。」

サキがドラとミカエルの大群の間に入ってミカエルをタッチしながら中心を回った。すると大量のミカエルは全て林檎や蜜柑の果物に成り地面に落ちた。

ドラ「ありがとうございます。」

サキ「礼の気持ちは受けもらうよ! でも礼を言うなら今は戦って!!」

ドラ「はい!」

サキとドラの行動を見たミカエルはゆっくりと拍手をし、

ミカ「いや…友情だね!」

と言った。だが、その隙に俺とウリエルは後ろを取り、

怠惰「斬伸『大魔法書　く異次元大鎌く』!!」

ウリ「風迅『風斬り鎌』!!」

俺は大鎌をミカエルの首に当てて斬ったがミカエルに防がれてしまったが、そこは計算通り。そして俺は懐に手を入れてミカエルの背中に異次元を繋げて背中に突き刺した。その次にウリエルの攻撃でミカエルに鎌を刺して異次元を消した。すると異次元は消えて鎌はミカエルに突き刺さったまま残った。

ミカ「ぐああ!!やはりコンビ技は良いねえ…!」

ミカエルはそう言って自分の分身を炎で作った。

怠惰「なるほど…今までの分身はお前の能力の炎…いや、陽炎?と言うべきか。」

シロ「水球『ウィーカイン』!!」

シロが陽炎たちに水球を投げたが陽炎は消えなかった。

シロ「ええ!?!消えないの!?!」

ミカ「そんな水の玉じゃ、俺の炎を消せるわけ無いじゃん。陽炎たち!まずはあのシロちゃんから消せ!!」

シロ「ッ!!」

するとドラがシロの身代りに陽炎の攻撃を受けた。

シロ「お兄ちゃん……！」

ドラ「妹に指一本も触れさせねえ……俺は妹に不幸な思いはさせたくないな……！雷迅『速斬雷降』!!」

するとドラは手を上げて陽炎たちに雷を落とす。ただし陽炎は雷が当たっても何も変化がなかった。

ドラ「なっ……！」

シロ「水陣『ウォールクリア』！」

シロがドラの周りの陽炎を水の壁で潰した。すると陽炎は消えて居なくなっていた。

シロ「やつぱ、お兄ちゃん一人では任せられないよ。私も助けられればかりじゃられないね♪兄妹パワーをあの神に見せつけようよ！」

ドラ「……ああ、そうだな。怠惰さん、僕たちは今から今日全部の力を使いかります。もしも倒せていなかったらあととは頼みます。」

怠惰「ああ、任せろよ。おめえらのマレット兄妹の力を見せてみるよ。」

ドラは頷きシロと手を繋ぎ繋いでいない片手を二人は上げて、

ドラ・シロ「僕（私）たちの力を見せてやる!!風雷水炎『マレットエレメント』!!」

二人の手から雷と炎、水と風の球を大きく混ぜて色が黒く成るまで混ぜられた。そしてその球は一つの形に成った。その形というのは……

怠惰 「十字架？いや、大きな槍か。」

そう、形はまさに大きな黒い槍と姿を変えていた。

ミカ 「ふうん…ねえ、まだかい？」

ドラ 「おいおい、まだそこを見てるのかよ？」

怠惰 「は？」

ウリ 「えええええ!!」

サキ 「嘘っ?!」

ミカ 「なっ!!」

ドラとシロがさつきまで大きな槍を作っていた筈なのにいつの間にかミカエルの後ろに回っていた。

シロ 「喰らいなよ!!」

そして大きな槍をミカエルに突き刺した。

ミカ 「ぐはあ…!!」

ドラ 「これで…生きてたら…僕はもう…戦えない…!」

シロ 「お兄…ちゃん…!」

二人は地面に倒れた。俺はサキに二人を運んでくれと頼んだ。

サキ 「はい、『リセット』。よいしょつと。」

『リセット』はサキの能力を解除する言葉だ。そしてサキは二人に小さな声で、

サキ「お疲れ様…♪」

そしてサキは少し大きな結界を二人に掛けてその場を離れて怠惰の方に帰ってきた。ウリ「さて、これでもなおミカエルは生きてるのでしょうか。」

怠惰「戦闘体制はとっておけよ。」

すると砂煙から影が見えた。そこに居たのはミカエルを背負った小さな女だった。

？「初めまして、私はこのミカエルの【光】です。そして貴方方が倒したのはミカエルの【闇】の方です。」

そしてミカエル【光】と言った人物は…、

【光】「唐突にすみませんが、このミカエルは私が受けもらいます。」  
と言ってニコリと笑った。

## 第52話 VS夜行 / VSミカ

神司「神剣『千本刃』!!」

999本の刃を空中に展開させてあと一本を手にとって夜行に向かって空中の刃を飛ばした。

夜行「ハッハッハー!この妖刀”正宗?”を嘗めてもらったら困るなく♪行くぞ…!」  
すると夜行は飛ばした刃の中に突進し、全てを避けた。

神司「なっ…!」

夜行「おいおい、邪神の王様がこんな技しかわけはねえーよ…なッ!!」

夜行は俺に刀で切りつけて来たが、俺はそれをギリギリに避けて夜行の馬足にナイフを投げたが、踏まれた。気付けば刀を持っていない手で俺の頭を地面に叩き付けた。

神司「ぐわあ!」

さらに夜行は手から足に変えて頭を踏んだ。

神司「展開!!」

夜行「うわっ!」

俺は地面にスキマを開いて俺ごとスキマに入った。

神司「これで…踏まれねえよな…」

夜行「ふうん…ここが邪神様の領地か…」

神司「まあな。逃げもできるし隠れもできる、ここは快適だぜ。」

夜行「つまりは、邪神様は逃げたかったのかな？」

神司「いや？それは無いな。お前が言ってた隠し手というものを見せてほしいからここに来たのだよ。」

夜行「ああー！残念！俺の隠し手は地に足が付いてなくちや発動しないのだよ！」

神司「地に足が付く…か。判った、お前の能力は影だろ、影を操るのだろう。」

夜行「ハツハツハー！正解だ。『邪銀開放』!!」

夜行は刀を振り落とすと俺が作ったスキマが無くなり、地上へと戻っていた。

神司「はあ!？」

夜行「奥の手が失敗したな！」

夜行が再び俺に突進し、指を立てると俺の影が動き出した。

神司「チツ！」

すると俺の影が十字の体制を取ると俺の体が影の真似をし出した。

夜行「さあーって！斬られる準備OK!？」

神司「邪神王!!」

邪王『はいよ！』

邪神王が俺から飛び出し長刀で夜行に斬りつけた。

夜行「いってー!!」

その衝撃で影は消えて動ける様になった。

神司「ありがとう、邪神王。」

邪王「情けねえな…まあ、テメエの斬られるところは見たかったかなあ♪」

神司「この畜生が。」

邪王「黙れ弱者！」

そんな喧嘩をしていると倒れた夜行が起き上がった。

夜行「卑怯だな…!! 『木々影槍』！」

木々の影を槍の形にして俺らに投げってきた夜行。すると影の形が変わったからか、本

物の木々も形を変えていた。

邪王「ひいゝ恐ろしい恐ろしい。邪刀『邪刀神忌』！」

神司「神剣『千本刃』。」

邪神王は大きく刀をふって邪の色が着いた波動を放った。俺は何時も通りだが。そして飛ばした木々の影は数十本を俺の刀で防いだ。そして邪神王の波動が木々の影を抜いて夜行の刀を持っている腕を斬った。

夜行「なっ…!!」

神司「流石だな…本物の王様。」

夜行「っ…!!本物の…王様…だっ…!!」

邪王「クカカカッ!!ああそうさ!俺様がお前の言っただ本物の邪神の王様、邪神王様だッ!覚えておきな!!」

夜行「なるほど…!それならその長い髪の毛の奴は邪神王様の器ということですねっ!」

邪王「ああ、そういうことだ。」

確かに夜行の言っていることは間違っていない。ただし…、

神司「…おい、夜行。」

夜行「どうした?器。」

そう、この様に調子に乗ると思うからだ。

神司「はあく…やれやれ…」

夜行「ん?」

邪王「カツカツカ!テメエ死んだなw」

神司「邪神王!戻ってくれ。」

邪王「あいよ。」

俺は邪神王に呼び掛けて邪神王は俺の体の中に戻った。

神司「……創造『西行妖』。」

俺は自分の後ろに昔戦った西行妖を呼び出した。

神司「妖耐『憑依〔西行妖〕』!!」

俺は何時もの剣に西行妖を憑依させた。すると桜色に剣は光った。

神司「今、命名するか。俺の剣の名前は……邪桜剣?だ!」

ここで、新しい剣 邪桜剣が誕生した。

そして、その頃怠惰たち……

怠惰「はっ?このクソ神を私が受けもらうだと?」

【光】「はい、元は同じ種族、同じ体なので。そして今の彼は弱っています。あの“神戦”?の時は私は彼の【闇】に飲み込まれてあんなクソ神に成っていました。なので、今がチャンスなのです。彼が死ねば私も死ぬのですよ。」

するとウリエルが口を挟んだ。

ウリ「なるほど、ならば貴女は俺たちの敵ということですね。」

【光】「なるほど……そう捉えますか。ウリエルさんは。」

ウリ「で?どうなのですか?」

【光】「そうですね…私はそんな戦いや敵などとか気にしてはいなかつたのですが…まあ、敵ではないことを信じて下さいよ。」

ウリ「無理だと言ったら？」

【光】「力付くで彼を持って帰ります。」

ウリ「わかりました、ならば貴女は今から俺たちの敵と認識します。」

怠惰「こうなったらしようがねえな。」

【光】「自己紹介だけはさせて下さい。」

ウリ「ええ、良いですよ。」

【光】「私はミカエルの【光】の存在、通称“ミカ”。そして彼は【闇】の存在、通称“エル”。ではそちらからどうぞ。」

怠惰「殺りがいがあるなあー！」

先に俺が突っ走り大鎌をミカに突き刺した。

ミカ「陽炎『光の炎の高速移動』。走れ!!」

ミカは陽炎を作り、そしてそれに命令し陽炎たちに攻撃させた。

怠惰「弱い弱い!!」

俺が陽炎を切りつけると陽炎が爆発した。

ミカ「さてさて、その一撃により貴女は他の陽炎をも爆発させてしまうのですよ。次

行きますよ……！黒炎『フレイムブースト』！」

ミカはウリエルの後ろまで走り、背中にタッチして、

ウリ「なっ……！」

ミカ「遅い！光黒炎『一筋の炎の光』！」

するとウリエルの背中から光が出てウリエルが吹き飛んだ。

ウリ「ぐっ……!!」

ミカ「うん、陽炎追加ね♪」

怠惰「ちよつと！」

俺はまだ爆発が続いている。

ミカ「貴女は確かサキちゃんよね？」

サキ「何で私の名を!？」

ミカ「知ってるよ♪ちゃんと見てたしね。神ノ様とね♪」

三人「「神ノ!!」」

ミカ「えっ……？うん、そうだよ。どうしたの？」

いや、そうだろ。王とミカエルは敵同士である“神戦”？以来会ってない筈なのにだぞ。何時何処で会ったというのだ。

ミカ（あれ？何か私、可笑しな事言っただけ？）

するとミカの脳内に…、

? 『おいおい、ミカさん…。』

ミカ 『あつ、神ノ様♪』

神ノ 『お前さく…俺と神司は違う存在なんだぜ?』

ミカ 『そうでした…すみません。』

神ノ 『早く終わらせて帰って来いよ。アイツも寂しく待つてるからよ。』

ミカ 『はい!』

怠惰 「さあーて! 反撃を開始するぜ。」

ミカが気づいて後ろを見ると怠惰とウリエルとサキが立っていた。

ミカ 「ありやりや、突破したのね。」

怠惰 「この有能夢魔さんが陽炎を全て果物に変えたからな。」

ミカ 「あはははは…閃光弾!」

怠惰 「なっ!?!」

光が消えるとミカは消えていてエルもいなくなっていた。

ウリ 「くそっ! 逃がしたか!」

ウリエルは悔しそうに地面を叩いた。

## 番外編 誘惑と召喚

神司は現在ミカエルたちが居るであろう場所の真下にいた。

神司「うくん…どうやって上ろう。」

？「それなら俺が連れてってやろうか？」

神司「誰だッ！」

神司が振り向くとそこには黒い服とズボンを着て上にパーカーを着た悪魔らしき者が立っていた。

？「俺は〃神ノ邪神？。天界から落とされて悪魔・邪神に成った者だ。で、少年はどうしてこんな危ない場所の真下に居るんだ？」

神司「天界への偵察さ！あと少年じゃない！俺は神司だ！」

神ノ「おうおう、わかつたわかつた。偵察ねえ…今日は何時もよりミカエルとか他の神も荒れてるぜ？それでも行くのかよ。神司くん。」

神司「行くに決まってるだろ！」

神ノ「一つ忠告をするぞ。『死ぬぞ…！』」

神司「うっ！」

神ノ邪神は神司の脳内に直接言葉を送った。

神ノ『痛いだろ？この苦痛よりも痛いのが今から行く場所だ。それでも行くのか？』

神司「も…勿論…。」

神ノ「…：判った、なら連れてってやるよ。ただし俺もついてくぞ？」

神司「ああ！お前が居れば百万力だ！」

神ノ（子供ってこんなに面倒くさいっけ…）

そして神ノ邪神と神司は天界の方へ向かった。

神ノ「さてここが天界だ。」

神司「ここが…。」

すると二人に気づいた門番が、

門番「お前らは誰だ!？」

神ノ「…相手は二人か…：神司くん、目を隠したまえ。」

神司「う、うん。」

神ノ邪神は神司が本当に目を隠したのかを確認してから素早く門番の頭を手刀で斬り落とした。

神ノ『邪神の悪魔箱』サキ。」

神ノ邪神は小さな箱から一つの球を地面に投げてサキを召喚した。

神ノ「よろしく。」

そしてサキは素早く門番たちタッチしてを果物に変えた。そしてまた球に戻つて神ノ邪神の元に戻つた。

神ノ「さて良いぞ。」

神司「…あれ？あの人たちは？」

神ノ「ん？交渉して帰つてもらつたよ。」

神司「流石だ！」

神ノ「フフフ…さあ行こうか、そして急ごう。」

二人は門を抜けてミカエルたちが居る王宮の近くまで歩いた。

一方その頃オーデインは…

オー「……つた、やつた！解読成功だ！」

普通なら三日掛かる解読を一日だけで終わらせたのだ。

オー「えーつと、何々：『悪魔の王の呼び方』……『1. 召喚者はまず魔法陣を床に描いて呪文を唱える』『2. 悪魔の王が出てきたらまずは槍を掲げて悪魔に突き刺す』『3. すると槍から悪魔は召喚者の体へと入つていき悪魔の王本体と成る』……半端ねえな…迷つててもしょうがない！俺はこの悪魔の王に掛けるぜ！」

そしてオーデインはチョークで魔法書通りに魔法陣を描いていき呪文を唱えた。

オー『ウオンシヤジ・ガ・ルワラア!』

すると魔法陣が光出し悪魔の王が現れた。そしてオーデインは用意した槍で悪魔の王を貫いた、と思つたら

オー「なっ…!」

悪王『飽きたんだよ! テメエらの様な召喚者に呼び出されるのはよオオ!!』

悪魔の王はオーデインに直接脳内でそう叫んだ。

そして魔法陣から悪魔の王が出てきて歩いて怯えるオーデインを追い詰めた。

オー「ひい!」

悪王「フハハハハハ! そんな怯えた顔で見るなよ幼き召喚者!」

? 「うるせえ、黙れ。」

悪王「なっ! テメエは…? 邪神王?!」

邪王「ゴミクズはだからゴミクズなのだよ。」

悪王「うるせエ!!」

悪魔の王は邪神王に殴りつけたが邪神王はそれを受け止めて悪魔の王の腹を殴り壊した。

悪王「ヴァガ…ジイシャンオ…ウウ!!」

邪王「クカカカ! 何だ何だ? 悪魔は腹を殴り壊したても尚生きていると聞いたのだ

が、俺様の間違いか。」

そして邪神王はオーデインを見て、

邪王「どうも、俺様は邪神王。お前が呼び出した者よりも階級は遥かに上だ。まあ、ま  
ずは握手でも……」

とオーデインに握手を求めた邪神王。オーデインは怯えながらも握手をするとオー  
デインでは見えない速度で掌から肩まで引き千切った。

オー「ぐぎやああああ!!!」

そして千切った腕を食べる邪神王。そして食べながら、

邪王「これで契約成立。むしゃむしゃ。」

と言葉を放ってオーデインに、

邪王「さて、どんな願いを求めているのですか?ご主人様……♪」

とニヤリとした顔つきで願いを求めた。

悪王「キツ…サマアアア!!!」

傷を治した悪魔の王が再び邪神王に殴り掛かった。

邪王「五月蟬い。」

邪神王は悪魔の王の頭から足へと思いっきり殴り付けて微塵もなく殺した。

その衝撃でオーデインは頭を壁に打って気絶した。

邪王「さて、少年…気絶か。」  
そして邪神王は座り一睡しようと目を閉じた。

## 第53話 VSラスト夜行 / 謎多き者

桜色に輝く邪桜剣は一度振ると月の光を浴びて綺麗に光った。

神司「やっぱり綺麗に光るなあ…」

夜行「ごちゃごちゃ言つてないで掛かって来いよ！」

夜行は俺に向かって馴れない腕で剣で切りつけた。だが俺は普通に避けた。

神司「馴れてないんだろ？」

夜行「うるせえ！お前を倒せば俺は上の者に褒めてもらえるんだよ！」

何だ、ただ褒めてもらいたいだけか。

神司「なら決めて良いだろ。」

俺は気を溜めて邪桜剣に妖力と神力を流した。すると邪桜剣は白と紫に光った。

神司「一体…」

邪王『西行妖は桜の妖怪だからだろう。それでお前の妖気と西行妖が共鳴しあつて神々しく光ってるんだろう。』

神司「ああ、成る程ね。」

夜行（クソツ…！俺を嘗めた様な顔で見やがって…！）もう…絶対に殺す!!『影変化』

!!

夜行は森の影を吸い込み自分自身の体を大きくして森の木の何倍の姿に成った。

神司「木の何倍の大きさにね……」

そう呟くと俺の体から再び邪神王が出てきた。

邪王「なあ神司。」

神司「どうした？」

邪王「何かさ……♪このでっかい夜行をさ……どっかで見たことないか？」

どっかでかく……あつ、思い当たることが一つ、

神司「西行妖か!!」

邪王「そうだそうだ！西行妖だ！ならばさ♪あの時の戦い方で！」

神司「よっしゃ！やるか！」

そう気合いを入れると上の方から、

夜行「おーい!!今から!!お前らを踏み潰すからなー!!!」

神司「うるせえなー!!『千本刃』!!!」

邪王「おつ、早いねえ♪ならその倍の……『兆本刃』!!!」

すると邪神王の周りに気持ち悪い程の刃が出てきた。

神司「気持ち悪っ！」

邪王「うるせえ！行くぞ、せーのでな！」

神司「ああ……！了解……!!」

すると邪神王は大きく息を吸って、

邪王「せーつつつのツツ!!!」

神・邪「行けー!!!」

ブラス

すると合わせて兆十千の刃が夜行の顔に向けて飛んでいった。

夜行は足を上げて潰そうとしたら目の前に数えきれない数の刃が飛んできて驚いてバランスを崩し山の方へと倒れた。しかし何本か顔に刺さったままで。

神司「……ふっ！」

神・邪「ふははははは……」

二人は転けた大きな夜行を見ながら笑いながら被害が出てないか搜索を開始した。

一方ミカエルたちを逃がし、そして月軍までも逃がした怠惰たちはウリエル、サキ、怠惰の三人で部屋に籠って今回の話をしていた。

ウリ「怠惰さんは、神ノ様と一緒にいましたよね？」

怠惰「ああ殆どな。だがな、一回もミカエルと今回会ったミカという人物とは一回も会った事は無いぜ。」

サキ「それではますます怪しいですよね。」

三人「うーん…」

三人が悩んでると怠惰の後ろに一つの影が現れた。

怠惰「誰だ！」

?「うわっ！」

怠惰は鎌で後ろの者の首に掛けた。

ウリ「怠惰さん！その人は暴食さんですよ！」

怠惰「えっ…?」

暴食「ウリエルくん、さん付けは要らないよ。」

後ろに居たのは久しぶりにあった暴食のベルゼブブだった。

ウリ「それなら俺にもくん付けも要らないですよ。」

暴食「判ったよ♪」

サキ「ベル様!？」

暴食「久しぶりだね♪サキちゃん。」

怠惰「で?どうしたんだよ。」

暴食「ああ、君たちが悩んでたことだよ。」

怠惰「まさか……ミカエルの件か？」

暴食「ええそうですよ。別にですがミカエルは現在神ノ様の前に居るので殺しは出来ませんよ。」

怠惰「ちよつと待て。」

暴食「ん？どうした？」

怠惰「ミカという者も言つてたが王と神ノ様という人物は違う人物なのか？」

この話はウリエルやサキも知りたひ筈だ。

暴食「いや、僕が遣えているのは前 神ノ様だよ。怠惰くんとサキちゃんなら分かるよね？」

怠惰「……は？」

サキ「えーつと……」

暴食「あれ？分からないの……」

そう暴食が言うと、

？「ああー！もう！お前らのおかげで俺が出なきやじやないか！」

大きな声を出しながら歩いて来た者が来た。

怠惰「今度こそ知らない奴だ。」

暴食「神ノ様……」

神ノ「えーつと……俺は神ノ邪神だ。」

怠惰「偽者か！」

サキ「成る程……そういうことですか！」

ウリ（あれ？アイツは確か……）

神ノ「ああそうだったな。『邪神の悪魔箱』の一部の奴らの記憶は消してたんだつた。その内の怠惰は分かるがサキは違う様な……」

ウリ「あつ！思い出した！お前天界に一度人間を連れてきた神ノ邪神だろ!？」

怠惰とサキの攻撃を避けながら神ノ邪神はウリエルに問われた事に答えた。

神ノ「ああ！あの時の兄ちゃんか！妹さんは元気か？」

ウリ「お前には関係ないだろ……」

神ノ「あり？あつそっか。そういや兄ちゃんの妹さんはミカエルに殺されたんだよな。」

ウリ「つ！それを知つてて言ったのか。」

神ノ「いや、完全に……」

ウリ「許さん……!」

ウリエルも神ノ邪神に向かって攻撃をし始めた。

神ノ「何で!？」

## 第54話 終結

神司「そーいや夜行が倒れたり木々がいつぱい倒れたりと里とかに被害出てないかな？」

邪王『うーん、それはあるかもなあ。』

邪神王は俺の体の中に入って被害が出てないか来た道を下りていた。

それにしても予知から避けられたのはとても良かった。あの二人の少女はもしかしたらさとりとこいしだったかもしれないなかったからな。

神司「あつ！サグメ！」

そう考えているとサグメと一緒に紫と出会った、そしてあの三人にミンチにされた場所に戻って来た。

サグメ「あつ、神司さん。」

神司「大丈夫だったか？」

サグメには傷一つ無い代わりに紫はポロポロに成っていた。

神司「…俺がない間何が起こったんだ？」

サグメ「神司さん、この世には知らなくていいこともあるんですよ。」

神司「いや怖いな!?!?てか、紫は無事なのか?」

紫に触れると呼吸は整っていた。意識はある様だった。

神司「うん、大丈夫だな。」

サグメ「それにしても、あの大きな音は何だったのですか?」

神司「ああ、夜行が倒れた音だよ。アイツ巨大化してたからな。後でそこに被害が出てないか見に行くつもりさ。」

サグメ「それなら私も良いですか?」

神司「ああ、良いよ。」

邪王『デートかあ♪』

俺が否定しようとしたときにサグメは、

サグメ「そうそう、邪神王さんは抜きで。」

邪王「酷いねえ!?!」

神司『急に何だよ、変わりやがって。』

サグメ「邪神王さんですか?デートに貴方は不要だからですよ。」

神・邪『「結構酷い言葉ですねえ…」』

サグメ「ということで神司さん、よろしくお願いします。」

神司「はいよ、分離だ。」

すると体から拗ねたままの邪神王が出てきた。

邪王「はあ…行ってこいよ、ラブラブカップルさんたちよお。」

神司「一言余計だ！」

何だよ、邪神王の奴。いつもいつも、一言余計なんだよ…。

サグメ「あの、神司さん。」

神司「ん？どした？」

サグメ「紫ちゃんが現れた時、何故すぐには行かなかったのですか？」

神司「うーん…心配だったから…かな？」

サグメ「心配？そんなに私を信じれなかったのですか？」

神司「いや…」

サグメ「それとも私では紫ちゃんを倒せないと思つてですか？」

神司「あの…」

サグメ「はつきり言つて下さい。こんな私では貴方に不満を積み重ねていきますか？」

神司「無いね。」

サグメ「ですよね…えっ!？」

神司「全部の質問に返答するよ？最初と次の質問に対してだけど、そんなことはこれっぽっちも思つてない。」

逆にその事を俺が今のサグメに質問したいくらいだ。「俺はサグメに信用されているのか」とな。

神司「そして最後のだけど、サグメが俺に不満を？ないない、そんなことはあり得ないね。」

サグメ「……」

神司「どうした？不満か？この答えじゃ。」

サグメ「あつ、いや……少し意外だったので……」

あれ？やつぱり俺って信用されてないのかな……

神司「あつ、ああ……そうか……」

ちよつとだけショックだな……そう思いながらサグメと二人で被害がないか森を歩いていった。

そして最後の夜行が倒れた場所に俺たちは来た。そこには元の姿に戻り、気絶した夜行の姿があった。

夜行には聞きたいことがいっぱいあるからな。

神司「……ほらよ……」

と言いつつ顔に刺さっている刃を抜き蘇生させた。

夜行「……はっ！って器野郎か……」

神司「だから、誰が器野郎だ！」

やれやれ、復活早々ウザイ野郎だ……だが、聞かないとこいつとの戦いの意味がない。

神司「で、今回は何故百鬼夜行を襲ったんだ。しかも潜入してまで。」

その事を聞くと少し怯えた様な顔になった夜行はゆっくりと口を開いた。

夜行「は……ははは……！おお、お前に！何も……教える事は……」

サグメ「もう、止しましょう。この妖怪も今回の件でお疲れでしょう。なので神司さん、宿に持ち帰るのは？」

確かにと俺はそれに納得した。

神司「ならサグメ通りに来いよ。尋問してやるから。」

夜行「絶対嫌だね。」

サグメ「それなら神司さん、私が残ってますので。」

神司「えっ？何で？」

サグメ「いいからいいから……」

と言ってサグメは神司の背中を押した

神司「うう……判ったよ。ただし夜行、サグメに手を出したらさっきの痛みを倍にな……」

夜行「ただでさえ疲れているんだ。んなことはしねえよ。」

神司「…了解。サグメよろしくな。」

と言つて俺は邪神王がいる場所まで歩いた。

サグメは神司がいなくなったのを確認すると、

サグメ「さて…何もかも洗いざらして聞き出してやる…!」

ニヤリと笑うサグメ。そしてその顔を見た夜行は先程よりも怯えていた。

さて、一方その頃怠惰たちは…

神ノ「おい! テメエら!! 思い出したか!？」

記憶を取り戻した怠惰とサキは神ノに正座をさせられていた。

怠惰「本当にすみませんでした…」

サキ「私も…」

神ノ「たくつ…怠惰も怠惰だ。何故召喚時にサキの記憶を改善するかね。」

怠惰「記憶があると主人に逆らうと思いましたが…」

神ノ「はあ…ウリエル、俺も謝らせてくれ。調子に乗ってすみませんでした。」

ウリ「あ、ああ…別に良いよ。今思えば神ノは元からそういう性格だったからな。」

暴食「……終わった?」

神ノ「ああ、終わったな。さて、改めて一つ報告だ。あの神司という今は青年は多分まだミカエルを恨んでいます。なので一つ提案。」

ウリ「提案？」

神ノ「ウリエルに問う、攻め混んできた月軍をまだ恨んでいますか？」

ウリ「勿論、俺の仲間を殆ど殺されたからな…」

神ノ「よし、ということだ。それでは怠惰とサキは神司くんや他の邪神や悪魔に俺と会った事は言わない、そしてウリエルもだ、次にウリエルは今から神司くんに会って…まあ、脳内でいいや、ミカエルに会ったことを話してくれ。」

ウリ「はあ。」

神ノ「そしてミカエルは月軍の仲間だということを伝えてくれ。するとウリエルは月軍と戦う目的、神司くんはミカエルを再度殺す目的が出来る訳だが…その前に…」

神ノは異空間を開き一つの牢屋を持ってくるミカが歩いて来た。

ウリ「それは…」

神ノ「ミカ、説明を。」

ミカ「了解しました♪この牢屋にはエルというもう一人の私が居ます。起きなよ。」  
するとむくりとエルが起きた。

エル「何だよ…ミカ。」

神ノ「やあ、エルくん。お早う。」

エル「ああ。で、作戦通りにだな？」

ウリ「エルには作戦を話しているのか？」

エル「やあ、ウリエル。しっかりこの神ノ邪神から聞いておるよ。」

ウリ「……まだ俺はお前を許してはいないからな。」

エル「はいはい……」

神ノ「エル、お前はもう一回月軍に戻れ。」

エル「えっ……!? いや待て待て? あのクソ場所? 鬼畜だぜ? キ○ガイだぜ? 彼処は……」

!

「月に戻れ」と言われただけで怖れるエル。そんだけ怖いところなのだろうか……

神ノ「安心しろ、ミカと暴食も行くからさ。暴食は神司にバレない様に変装するこ

と。」

暴食「了解したよ。」

怠惰「そういや、神ノ様は行くのかよ?」

神ノ「俺は行かない。そりゃあ俺が行ったらカオスになるわ。ましてや神司くんと

会ったことあるし、迷惑掛けてるからな。」

サキ「つまり神ノ様は逃げるのですか?」

神ノ「に、逃げる?!この俺が?!んな訳ねえだろ!行くになあ!」

この神ノ邪神を見てみんなが思った事は…

皆(ちよろいな…)

神ノ「んじや、俺も変装してミカや暴食の方に着くか…」

怠惰「そつち強くねえか?」

確かにと頷くサキとウリエル。

神ノ「安心しろよ。今回の作戦では月軍が圧倒的に圧して神司軍は負ける様に仕向け

るからさ♪」

怠惰「何だよその隠謀…」

神ノ「まあそゆことで。対戦日は明日からだ。みんな存分に暴れろよ!それでは怠惰とサキはマレット兄妹を連れて地球へ、俺とミカ&エルと暴食は月の方へ…解散ツ!!」

そしてこの場にウリエルを残し、皆は各自に解散した。

## 第55話 信頼する仲間

サグメ「さて…夜行さん…」

夜行「あつ、姉御…！」

サグメはゆっくり夜行に近づき一つ質問した。

サグメ「何故今日に動いたのですか？」

夜行「いや…上司が…」

一つ溜め息するとサグメは…、

サグメ「はあ…誰ですか、その上司といのは…」

夜行「…：…ガープさん…です…」

サグメ「…あのガープですか？」

夜行「はい…！」

少しサグメは考えると、

サグメ「はあ…埒が飽きません。少し器から離れますか…」

するとサグメの体から一人の墮天使が現れた。

夜行「ベリアル様…」

そこにいたのは貴族のような服を着て、ロングの髪の毛の美女が現れた。その女の人の名前がベリアルだった。

ベリ「ほら行くぞ！あのガープの爺の頭を洗い流すぞ。」

夜行「はっ、はい！」

そう夜行が元気に返事すると気を失っていたサグメが起きた。

サグメ「ベリアル…!!」

ベリ「あら、起きちゃったのね。」

サグメ「貴女だけは離さないわよ。」

ベリ「ごめんねえ、少し用ができちゃってね。」

サグメ「だから逃がさないと云ってるでしょう！」

サグメは方羽を広げて矢を放ったが、ベリアルは炎で矢を燃やした。

サグメ「なっ！」

ベリ「たくーっ…夜行は先に行ってな、後で追いつくから。」

夜行「わかりました。」

？「まあ、落ち着けよ。」

？「んな急ぎ用じゃねーだろ？」

？「なあ、夜行!!」

夜行「ひい!？」

夜行の前に来て声をあげたのは勿論…、

サグメ「神司さん…邪神王さん…!」

そう、サグメの愛人、神司とその相棒 邪神王だった。

神司「ベリアルか…邪神王は夜行をよろしく。」

邪王「あいよ、任せな相棒!」

そしてサグメとベリアルの前に神司は降りた。

ベリ「面倒くさいねえ…」

神司「今回の百鬼夜行の騒動はベリアル、お前が関係してるだろ。」

ベリ「あら?そんな形跡、私は残してないわよ?」

・  
・

神司「上級墮天使が…元はアイツの箱に居たんじゃねーのかよ。」

ベリ「アイツ?」

神司「まあいいや。大人しくサグメの中に戻れよ。」

ベリ「あら良いの?私がサグメちゃんの中に戻るとまた呪いが発動しちゃうわよ?」

サグメの顔を見ると当たっているかの様な顔をしていた。

神司「…犯人はお前か…口災いの呪いをサグメに残したのは…」

ベリ「ええ、私よ。結構楽しめたしね♪」

神司「畜生が…！神劍『千本刃』!!」

ベリ「君の様なすぐにカツとなる性格直した方が良いと思うよ。」

ベリアルは手から炎を放って刃全てを燃やし尽くした。

神司「なるほど？剣は効かないようだね。」

ベリ「正解だね、私の炎は一万を越えているよ。」

邪王「それはもうマグマで良いんじゃないのか？」

夜行を倒した邪神王が降りてきた。しかも夜行の頭を掴みながら。

ベリ「ですがマグマみたいにドロドロではないのでまだ炎ですよ。そして夜行は殺したのですか？」

邪王「カツカツカ！殺していねえさ！神司から尋問するために気絶だけにしてあるさ。」

神司「もしくはベリアルお前から聞いてもいいんだぜ？」

ベリ「私は女ですよ？尋問したら貴方は犯罪で捕まります。」

神司「正論だな…」

ベリ「…はあ…こんなんやつてたら埒が飽きませんよ。良いですよ、サグメさんの中に大人しく入ります。夜行の事は貴方たちに任せます。それでは…」

と言つてサグメの中にベリアルは戻つた。だが、

神司「呪いを完全に消す方法は？」

ベリ『少し交代して下さい。』

サグメ「ええ、良いですよ。」

そしてベリアルとサグメは交代して、

ベリ「あるにはあるんですよ。ですが私が掛けた呪いではないので解けません。呪いを弱めることは出来ません。」

神司「最初からしてくれよ……」

ベリ「すみません、では宿に戻りますか。」

神司「お前が言うなよベリアル……邪神王も戻ってくれー」

邪王「はいよ」

そして邪神王は俺の体に戻つた。

そして夜行を連れて宿に戻ると怠惰たちも戻っていた。

神司「お疲れ。」

怠惰「ああ、お疲れ。」

神司「どうだった？冥王星では。」

怠惰「ウリエルの所に攻めてきたのはどうやら月軍だったよ。」

神司「他は？」

怠惰「そうそう、あの憎きお前の天敵、ミカエルが月軍にいてよー。」

神司「ミカエルだど!？」

怠惰「ああ…まあ立ち話もだし、縁側に座ろうか。」

神司「あつああ。」

俺と怠惰は縁側にゆっくりと腰を下ろし座った。

神司「そーいやドラとシロは？」

怠惰「ドラとシロはサキに任せて布団に寝かせてある。そして先程の続きだが、明日頃にウリエルから連絡がきて月に向かうことになっている。」

神司「どういふことだ？」

怠惰「全員参加、『地球（百鬼夜行）＋冥王星（ウリエル軍&冥王軍）VS月軍＋ミカエル』たちの壮大な戦いが幕を開こうとしているんだ。」

神司「そんな…まさか大将は…」

怠惰「多分妖怪総代将のぬらりひよんだろ。」

神司「そんなの無駄な戦いだ！」

怠惰「わかってんなら今出来る事を考えろよ！王!!」

神司「ツ!!」

怠惰「考えてみる…今戦える百鬼夜行、そして俺らで戦える者は何人だ？」

まずは俺と怠惰そしてウリエル。次に回復すればドラとシロも行ける。次にタルウイ。晴明とサグメは地球に残そう。二人の介護はベリアルに頼むとして。次にぬらりもだ。行けるか聞いてみよう。胡桃・新羅義・天魔は置いていこう。他の妖怪たちも。すると合計人数は…、

神司「七人…」

怠惰「何だ、それだけか。たくつ、こういうときに親友を使つて大きな軍を動かしてもらえば良いことを…」

ぬらり「ああ、そうさ。」

話を聞いてきたぬらりが起きて答えた。

神司「ぬらり…」

ぬらり「僕は君の親友だ。こんなことであれば百鬼夜行全員を動かせるさ。」

怠惰「それでぬらりひょん、合計何人だ？」

ぬらり「百鬼夜行を営めてもらつては困るねえ、約180人は行くだろう。そして胡桃・新羅義・天魔が率いる軍を合わせれば、300人追加だよ。そして合計480人に君たち7人を足すと…」

怠惰「合計487人つてところか…結構な人数だ。」

それなら月軍の相手は任せれそうだ。

晴明「七人？それなら九人じゃないの？」

サグメ「もしくは十人だな。」

神司「晴明…サグメ…」

ベリ『フフフツ♪楽しいパーティーの時間よっ♪』

サグメ「神司さん、ベリアルも楽しみにしてますよ。」

神司「…着いてくるならみんなに約束して欲しいことがあるけど…いいか？」

サグ・晴明「「ええ。」」

ぬらり「うん。」

怠惰「ああ。」

少しありがたい気持ちで…そしてニツと笑って、

神司「絶対に俺の目の前で死なないことあと、俺が見てないところで死なないことの

二つを守ってくれ…!!」

俺はそう言った。するとみんなは…、

皆「「…：…了解ッ！」」

笑顔で答えてくれた。

## 第56話 第一次月面戦争開幕

ウリ『神ノ様!』

神司「ウリエルか! 怠惰から聞いてるよ。直接月に向かえば良いか?」

ウリ『はい、それなら自分は先に行つてますよ!』

神司「了解。」

と言つて通信を切つて後ろに集まつているみんなの方に向いた。そしてぬらりに、

神司「あとよろしく頼むよ、妖怪総代将。」

ぬらり「任せなよ、副妖怪総代将。」

一回咳き込むとみんなに、

ぬらり「えー、まだ回復しきつてない者も回復した者に告ぐ。今からは神司の仇として死闘を行いに違う惑星に向かう。それなので一言みんなに伝えたい、死んだとしても任務に務めれる様な死を頼むぞ!」

皆「「オオー!!!」」

鬼「場所が変わろうが俺らは強いんだ!」

天狗「全てを蹴散らすぞ!」

河童「河童の技術も嘗めんなよ!」

神司「ドラ、シロ。」

ドラ「はい。」

シロ「うん?」

神司「回復しきつてないと思うが思う存分暴れてくれよ。」

ドラ・シロ「了解!!」

神司「次にサグメ、清明：ベリアルとタルウイがいるからと言って油断しないでくれよ。」

清明「分かってますよ♪」

サグメ「任せて下さい。」

神司「ベリアルとタルウイもよろしくな。」

ベリ「勝てる気しないわね。」

タル「溶かしつくすぞー!」

紫「……」

紫は少し難しい顔をしていた。

神司「どうした?紫。心配か?」

紫「あつ、いえ…ただ、相手がどんなのかもわからないので…」

神司「そんなのはお互い様さ。」

紫「えっ？」

神司「他のみんなだつてそうさ。相手がどんなのか知らなくて挑んでいるんだ。最初から諦めたらダメだぞ。」

紫「…そうですね。最初から弱気になつたらいけませんよね。わかりました、絶対に誰も仲間を殺させません！」

神司「その行きだ…！」

さて、そろそろ向かう時間だな。

神司「総代将様ー！もう向かう準備はよろしいですかー？」

ぬらり「そうだね、それでは！紫と神司のスキマに入るように！二人は展開準備！」

神司・紫「了解！」

そして俺らはスキマを開いてぬらりに続いて、胡桃たちも入って行つた。そして300ぐらいの妖怪が入って最後に残りの十人程入って行つた。そして俺らも入ってスキマを閉じた。

そして着いた月面を見ると今まで少し違う空気変わった。

神司「ここが月か…」

？「お待ちしてましたよ。」

声がした方向を見るとそこには執事服を着てグングニルを持った青年が現れた。

？「私はゼル。今回、月の門番を任せました。こんなに大軍で…貴方たちはもしや、冥王星の神 ウリエルとの有効性があるのですか？」

神司「その通りだ。」

ゼル「そうですか…ではお通り下さい。」

そしてぞろぞろとみんなは門を潜った。するとガシャンとゼルは門を閉めて…

ゼル「始まりですよ…『オツケーですよ！神ノ様！』

神ノ『おつ、来たか！』豊姫様、来客です。」

神ノは月軍の大將として働いていた。そしてその月の一番上にいると思われる豊姫に言った。

豊姫「来客ですか、ノガミさん。」

ノガミ「はい、自分の仲間の門番から連絡がありましたので間違いないと思います。それでは他の者たちを連れて行きましようか？」

豊姫「よろしく願います、私は貴方を信じているのですよ。」

ノガミ「もちろん！貴女の為に私は尽くしますよ。それでは行って参ります。行くぞ、お前ら。」

月軍「ケツ、昨日入ったばかりのテメエに命令されたくないね。」

豊姫「副隊長！」

月軍「だって…！他の者の命令なら聞くつもりなのにな…」

ノガミ「良いぜ、ただし俺らは俺らはの行動するがお前はお前の行動しろよ。」

月軍「ああ、そうさせてもらうよ。」

ノガミ「良いんだな？ならば今からお前を殺すと言ったら殺されるか？」

月軍「なっ、なんだと!？」

ノガミ「そういうことじゃねーのかよ。副隊長？」

そんな、口喧嘩していると一人の月軍が…、

月軍「大変です！冥王星からの逆襲で、大きな軍を連れてきました！」

ノガミ（来たか…）

豊姫「全員戦闘開始です！地球の軍と冥王星の軍を倒してきなさい！」

月軍「了解!!!」

ノガミ「了解！エル、ミカ。行くぞ…♪」

エル「始まるのか…」

ミカ「殺さないでよね？エル。」

エル「わーってるよ。ノガミ、月軍はいいか？」

ノガミ「俺の許可で動けよ。」

エル「はいはい…勝手なことはしませんよ…」

そして一方神司たちは…

神司「行くぞ怠惰！」

怠惰「了解だ！王よ！」

二人は大勢の月軍に突撃して、

神司「神撃『一撃一閃』！」

怠惰「残撃『刈り魂斬り』！」

二人の飛ばした波により月軍の何人かは倒れた。

神司「よし！」

エル「よう、少年。」

するとミカエルが倒れた月軍たちを踏みつけながら歩いてきた。

神司「まさか、本当に生きてたとはビックリだな。」

エル「フハハッ…！さて月軍には正直飽きてんだよな…」

怠惰「俺も参戦するぞ。コイツは予想以上に強いからな。」

エル「なるほど、ベルフェゴールとか…それなら此方は…ゼル！」

ゼル「えいつ…と…うん？はい！どうしたの？エル。」

すると奥で俺らの仲間が槍を飛ばす門番のゼルが飛んできた。

エル「ゼル、口……」

ゼル「はっ……コイツらをか？」

エル「髪が長い男は俺がやる、大鎌を持った奴はゼル、お前がやってくれ。」

ゼル「了解だ、再展開。」

なるほど、ゼルが使う槍は魔法で出している槍か。

神司「怠惰、ゼルが使う槍は再展開で何度でも復活するから気をつけてくれよ。」

怠惰「任せな、すぐに倒してそちらに援護するからよ。」

神司「ああ、よろしくな。」

エル「さて始めようか……俺と少年の最後のバトルを……！」

そして次の戦争の幕が開いた。

## 第57話 それぞれの弱さ

エル「黒炎『ブロンズフレム』！」

エルは十個ぐらいの黒炎の矢を放ちそれを無回転で飛ばした。

神司「っ……！」

やっぱり一人ではミカエルを倒すことはできないな……あの時はみんなが一緒に戦ってくれたから……

エル「どうした？俺に圧されているが……あの時のお前はその程度だったのか？」  
この時エルは一つの神ノからの指示を思い出した。

◆ 神ノ「ちよつとエル、一つ言わせてくれ。」

エル「何だよ、早く月軍を殺したり神司の軍と遊びてえのに。」

神ノ「もしも、神司くんと戦う時があつた時は思う存分煽つてくれ。」

エル「……は？何故？」

◆ 神ノ「そうすればアイツは……」

神司「そんな言葉を俺はテメエに言われる筋合いはねえ！」

「と言ってブチ切れるだろうw」と神ノは言った。あの時は何故笑っていたのか自分によく判らなかつたが、今の自分なら判るような気がする。

何故なら…

エル「その意気だよ！俺が楽しみにしていた物は！」

本物の神司を見れるという楽しさと本気で戦い合えるというワクワクを身に染みらせることができたのだ。

エル「もつともつと俺を楽しませろ！」

そして一方、怠惰 VS ゼル（暴食）は…、

ゼル「緋槍『爆裂槍迅』！」

ゼルは怠惰に向かって槍を投げたがそれを簡単に避ける怠惰。

怠惰「お前…槍は初めてか？」

ゼル「それは無いと思うけど…」

怠惰「……ゼルいや、暴食だろお前は。」

ゼル（ギクツ…！）違いますか？誰ですか？暴食という者は。」

怠惰「いや、俺とサキ、ウリエルだけなら良いんじゃないの？」

するとゼルは少し考えて、

ゼル「確かにそうかも。」

怠惰「だろ？」

結構ちよろい暴食だった。

暴食「ならさ、適当に方をつけて怠惰くんは神司くんの方へ向かいなよ。」

怠惰「ああ、それが俺の都合でもあるしな。」

すると怠惰は大鎌を構えて、

怠惰「それじゃあ…一気に方をつけましょうか…！魂狩り『人狩り残神【激】』!!」

と言って怠惰はゼルに大鎌で人用に狩り為の狩り方でゼルを斬った。

ゼル「がはっ…！」

怠惰「暴食…俺とお前じゃまだまだ相手になんねえんだ。そしてその甘さは時には敵にしねえとな。」

そして肩に大鎌を掛けて、

怠惰「お前の真の敵はお前の心の“甘さ？”と“弱み？だ。”

と言って怠惰は神司の方に歩き始めた。

◆

暴食「…：…っ…！」

神ノ「ん、気がついたか。」

気がつくくと月面ではなく一つの部屋にいた。そしてその部屋の椅子に神ノ様は座っていた。

暴食「…神ノ様…」

すると神ノ様は小さく舌打ちをして、

神ノ「たくつ…怠惰も怠惰だ。加減したとはいえ、人用の技を暴食に試すかよ…」

暴食「…」

あの怠惰くんの技…あれは人用だったのか…

神ノ「だがな暴食、怠惰が最後まで言ってた言葉覚えてるか？」

暴食「はい、僕の敵は甘さと弱みだと…」

神ノ「そう、だが怠惰が言った言葉はあなたが間違っていないんだ。」

…それは判る。だが、中々口が思うように開かなかつた。なぜか悲しみと悔しいとい

う気持ち体が中でぐるぐると回っているからそっちに意識が向いてしまった。

すると目元から涙が流れてきた。

暴食「…」

神ノ「やれやれ…」

◆

神司「邪神王！」

邪王「おう！」

エル「何だと……？邪神王……！」

神司は邪神王を呼び出し、

神司「行くぞ……！」

邪王「おう！」

そして二人はそれぞれ気を溜めて、

神司「邪神桜『妖怪桜邪神斬り』!!」

邪王「壊神『壊古新武』!!」

神司は一気に積めてエルを斬って、邪神王は手でエルを掴み顔を殴った。

エル「ぐがあ……」

エルは倒れて気絶しかけた。

神司「ありがとう。」

そして邪神王は神司の体の中に戻った。

エル「……っ……！」

？「たくつ……お前らは毎度毎度殺りすぎだ。エル、生きてるか？」

エル「ギリギリ……な……！」

現れたのは黒いタキシード、黒ハットの男だった。そしてこの男から妙な気配を感じ

た。

神司「お前は誰だ……！」

？「俺か？エルとミカ、そしてゼルの親玉、シード。またの名をノガミ。以後ヨロシク……♪」

神司「シード……！」

神ノ「さて、エルまだ戦えるか？」

エル「当たり前だ！再生には時間がかかるが……」

神ノ「いや、それなら休んどけよ。」

エル「ヤだね！」

神ノ「ミカに頼んで罰をだな……」

エル「ミカに!?止めとくわ……」

神ノ「大人しくしてろよ。」

そしてエルは飛んでどっかに行つた。

神ノ「さて、邪魔はいなくなつた。邪神王を呼んで、戦おうじゃないか。」

神司「この野郎……邪神王……」

邪王『出た方が良い、奴は俺らよりもミカエルよりも強者だ。』

神司「判つた。」

そして無言で邪神王は俺の体から出てきた。

神ノ「次は俺が楽しむ番だ！掛かって来いよ！」  
そして俺らはシードという者に戦闘を仕掛けた。

## 第58話 最後の戦い VS 神ノ邪神

神ノ「さて、俺は専門はツツコミのなだがな…」

急に何を言い出すと思えばそんな事か。

神司「何を言ってるんだ？」

神ノ「あついや、こつちの話だ。さて…始めようか…!」

すると神ノは鎌を構えると急速で神司に向かって刃の逆で腹を叩いた。

神司「くっ…!」

すると吹っ飛んだ神司を神ノは追いかけて、

神ノ「第六人格『無に現なし』。」

すると神ノの鎌は刃が消えてただの木の棒に成るとそれで神司の頭を思いつきり叩いた。

神司「がっ…!?!」

邪王『あれは…『人格技』だと!』』

そして神司は一回その場を放れた。

神司「『人格技』?」

邪王『ああ、『人格技』を使える者は俺が知る限り一人しか居ないんだ。』

神司「そいつの名は？」

邪王『神ノ邪神、ただ一人だ。』

そう邪神王が言うと神ノがすぐに神司の方に向かって後ろを取った。

神ノ「終わりか？まだ俺は傷一つ付いてないぜ？」

そして木の棒を刀に変えて、

神ノ「第四人格『死々銀河』！」

すると刀に黒いオーラを出して、ゼロ距離で気を放ち神司を斬った。

神司「っ…!!」

そして遠くに吹っ飛んだ神司は月面に倒れた。すると邪神王が、

邪王『俺と交代だ！神司!!』

ただし、神司は首を横に振り、

神司「嫌…だね！アイツが神ノ邪神だって言うんなら…俺の本気を見せてやらなくて

な…!!」

神ノ「そうか…ならばここで頭と体はサヨナラだな…！」

神ノは刀から鎌に戻して、まだ倒れている神司のところまで走って向かった。

神司「っ…！」

? 「おいおい…情けねえな、俺の王は。」

神ノの鎌を防いだのは、神司の仲間の一人、怠惰だった。

神ノ「へー…怠惰、お前が俺に勝てるっても?」

怠惰「ふん、王の壁ぐらひは俺は慣れるだろうよ。怠惰『スラツシユゴール』!」

怠惰は防いだ鎌で神ノの鎌を弾き、神ノに一撃を入れた。

神ノ「イってー!!」

怠惰「はっ!」

そして怠惰は神司の方に歩いて、

怠惰「大丈夫か? 王よ。」

神司「うん…大丈夫だ。」

邪王『本当は痛い耐えてるんじゃないのか?』

神司「うるさい…」

怠惰「ほら邪神王と喋らないで行くぞ、王よ。」

神司「あれ? 言っただけ…」

神ノ「怠惰ア…! 俺と神司との戦いに手を出したな…!」

怠惰「うるせえ! 元々エルと王の戦いに手を出したのはテメエの方だろ!」

神ノ「ああ…もういい…これで終わらせてやるよ…第五人格…」

神ノが気を高め始めると怠惰が、

怠惰「ヤベエ！王！！邪神王に頼らせて自分の身を守ってくれ！」

神司「えっ？何で…？」

すると邪神王も、

邪王『あれは…神司！交代だ！』

そして無理矢理、邪神王に交代させられ、

神司『おい！』

邪王「今はしようがないんだ！」

すると気をため終わった神ノは、

神ノ「第五人格『鬼死邪創斬』！！」

神ノは大きく四方に刀を振って斬撃を飛ばしてきた。

邪王「避けるぞ！」

怠惰「当たり前だ！当たったら不死でも死んじまうのによ！」

嘘だろ…不死でも斬られただけで死んでしまうのかよ…

そして邪神王と怠惰は避けきると、

神ノ「まだまだアー！！第六人格『無に現なし』！」

何と次は木の棒ではなく邪悪なオーラを出して周りの死体が腐り溶け始めた。

邪王「何だよアレはよ!」

怠惰「とりあえずそれに当たるなよ? 邪神王?」

邪王「当つたりめーだろ、とりあえず神ノは殺せない。」

そう、神ノ邪神は悪魔・邪神に分類されている。だから殺せないんだ。

神ノ「腐食『ブレイズスモーク』だ…第六人格『無に現なし』はランダムなんだよなあ

♪」

ニコリと笑う神ノ邪神。その笑顔が逆に怖く、まるで悪魔の笑みだった。

邪王「くそっ…ただでさえ負けてるのに神ノ煽られてるぜ。」

怠惰「本当に勝てるのかよ…?」

神ノ「いや、勝たせる気は無いね。うん、さらさら無い。逆に負かせるよ。」

邪王「何だと…!」

神司『邪神王、神ノの煽りに乗るな!』

ダメだ、邪神王は既に神ノ邪神の煽りに乗っかってしまっていた。

神ノ「さて、次ので決めようか…

レクイエム

第九人格『奏でる鎮魂歌』…。」

すると神ノ邪神は指揮棒を取りだし、リズムを取り始めた。

神ノ「聴かせてやるよ…この勝負最後の鎮魂歌を…」

怠惰「この音を聴くな！」

邪王「神司、借りるぞ！『音無結界』！」

すると邪神王は俺の体ではなく神ノ邪神に結界を張った。

神ノ（なるほど…自分や仲間にはなく、音を放った本人に結界を張ったわけか…）

流石は邪神王だ。俺の技の応用だな。

神ノ「どうせ、こんな壁ぐらい簡単に割れるがな…まあ声は聞こえてないがな…」

神司『そろそろ交代してくれ。』

邪王「ああ、そうだな。」

邪神王は素直に体を返してくれた。

神司「…よし。」

しっかりと体も戻ってるな…今から神ノを倒そうとしたその瞬間…、

神ノ「すまないな、神司。」

神ノ邪神が結界を破って神司の後ろまで来ていた。

神司「なっ…！」

神ノ「これもお前らを安全に帰す為なんだ。」

と言って神ノ邪神は邪気で作った刃で神司の体を貫いた。

神司「くっ…」

神ノ「燃え尽くせ、邪気の炎よ。」

すると神ノ邪神の邪気が上がり刺さっている刃が激しく燃えた。

神司「ぐあああ!!」

怠惰「神ノ！話が違うぞ!!?」

神ノ「黙れ、上級堕天使が…。」

すると神ノ邪神は鋭く怠惰を睨んだ。

怠惰「っ…！体が動かねえ…！」

神ノ「神司…少しの間、安らかに眠ってくれ…。」

そうして神司は炎の温度により、一回死んでそのまま『今』は起きることがなかった。

## 第七章 幻想郷での新たな生活

### 第59話 終えた結果と新たな始まり

神司「ん…」

? 「おつ、大丈夫っぽいな。」

神司「……ん？」

目を覚ますと、一人の男性がベッドの上で寝そべっていた。

? 「おつ、起きたか。」

そのベッドに居たのはまさかの俺を殺した神ノ邪神本人だった。

そして俺は戦闘体型に入った。だが、

神司「あ、あれ？」

なぜか、体に力が入らないのであった。

神司「な、何で!？」

すると神ノ邪神が俺に近づいた。

神司「くっ…!」

神ノ「はあ、殺さないよ。だってお前は今の間は死んでしまうからね。」

神司「……は？」

神ノ「邪神王を呼び出してみなよ。」

邪神王を呼びかけてみたが反応がなかった。

神司「嘘だろ……」

神ノ「……俺がお前を殺した後の話なんだけどさ……。」

◆

怠惰「神ノ!!」

神ノ「安心してくれよ、ベルフェゴール。」

怠惰「これが安心できるかよ!サキ!コイツを喰え。」

神ノ「おっと、それはヤバイな……」

すると神ノ邪神は後ろを向き、

神ノ「お前らアアア!!!戦闘は止めてくれ!!!」

大きな声で自分の軍に呼び掛けた。

月軍「どういことだ!ノガミ!!」

神ノ「だから戦うのを止めるのさ、こっちの副大将に勝ち、この通り持っているのだから。」

神ノは倒れた神司の頭を持ち上げ、月軍の副大長に見せた。

月軍「ううん…」

神ノ「認めたね、なら皆は城に戻れ。」

月軍「…はっ！」

月軍「チツ…」

そして神ノ邪神以外の月軍が城に戻った。

その時冥王軍は、

キルア「ウリエル様、月軍が帰って行きますが…」

ウリ「まあ…殆ど倒したから俺らも退散！」

冥王軍「…はっ！」

キルア「はい！」

そうしてウリエルの軍も冥王星に帰って行った。

そして一方、神ノ邪神は…、

神ノ「…ウリエルたちも帰ったか…」

サグメ「神司さん！」

神ノ「彼女のご到着か。」

サグメ「貴方は…」

神ノ「私は、門番　ゼルの主の神ノ邪神です。どうもお見知りおきを。」  
と言つて神ノ邪神は一礼した。

サグメ「そんなことを聞いてるのではありません。早く神司を返して下さい。」

神ノ「君だけなら良いかもな…」

サグメ「どういうことですか？」

神ノ「うん！サグメちゃんも一緒に来なよ。おもてなしなら何でもするしさ♪」

サグメ「だからどういうことですか!？」

すると神司を抱える神ノとサグメ以外の百鬼夜行の仲間が大きな穴に落ちて行った。

サグメ「なっ…!？」

神ノ「俺はこの神司を鍛え直したいんだ。邪神王抜きでな。」

サグメ「…貴方と神司さんの関係とは…」

神ノ「…旧き友みたいな感じかな…まあ、邪神王は今の皆を帰した様にもう帰したか

ら今の神司の中には邪神王は居ないよ。」

サグメ「もしかして…」

神ノ「さて、残りは行ってからにしようか。」

と言つてサグメも皆と同じ穴を開けてサグメも落とした。続いて神ノも穴に入った。



神ノ「とまあ、こんな感じだな。」

神司「え？てことは…」

サグメ「あつ、起きましたか。」

サグメが違う部屋からヒヨコツと現れた。

神司「良かった…てか俺の従者の獣人兄妹は？」

神ノ「ああ、そうだね。呼び出そうか？」

神司「頼むよ、大事な家族なんだよ。」

神ノ「了解…！」

すると神ノ邪神は上に穴を開けて俺の従者のドラとシロを落としたり。

ドラ「えっ!？」

シロ「マスター!」

シロが俺に気づき抱きついてきた。

神司「そういうや神ノ、俺は何時まで寝ていた？」

神ノ「時代は変わり外の世界という所の時代で言えば…昭和という時代に成つてるよ。」

神司「ちよつと待て…時代？外の世界？どういふことだ？」

神ノ「つまりはだな…お前は数百年寝ていたということだ。」

神司「……え？」

嘘だろ？俺は数百年もここで寝ていたのかよ……ぬらりは？清明は？まさか……！

神司「そんなのは……嫌だ……」

神ノ「最初はそんな反応だろうな。共が死んでしまったのかと思う恐怖だろ？だがな安心しろよ、お前が思ってることは殆ど無い。」

神司「……はい？」

神ノ「実はな、お前が寝てる間に紫が『博麗の巫女』という者ができてねえ。お前が居た世界は現在では、『幻想郷』という外の世界では見えない世界に成ったんだよな。」

神司「そんなことがあったなんて……」

神ノ「でだ、その世界には博麗の巫女と紫が作ったルール、スペルカードルール、通常『弾幕ごっこ？』の詳しいルールとその為のスペルカードを今からお前に伝授したいと思う……！」

## 番外編 決意と鬼畜な神たち

オー「……うう……」

邪王「おい、小僧。生きてるか？」

オー「…はっ！腕は…」

邪神王に喰われた筈のオーデインの腕はちゃんとそこにあつた。

オー「あれ？」

邪王「いや、喰つたぜ？とても美味しかったからな。礼としてまた腕を生やしといてやつたよ。」

何だ、結局喰われたのか。それに美味しかったのか…頭の中で自分の腕がまた喰われている姿を想像すると恐ろしく鳥肌が立った。

邪王「で？何で悪魔王を呼び出したんだよ。」

オー「逆に何でお前が出てきたんだ。」

邪王「んあ？面白そうだったからに決まってるだろ。その他に理由はあるかよ。」

オー「つまりは暇だったのですね？」

邪王「そういうことだ！で？願いは何でなんだ？」

オー「俺の友達の神司の家族が、天界に居るミカエルに殺されたんだ。」

邪王「なるほど…それで敵討ちとして俺らを呼んだのか…」

オー「そういうことだ。」

邪王「…まあ暇だし付き合ってもいいが、一つ言わせる。」

オー「なんだよ…」

邪王「もしも面白くなかったらお前の魂を食い荒らして永遠の苦しみを送ってもらうぜ…♪」

オー「わかった…！神司の敵討ちができるなら俺の魂ぐらいあげてやるよ！」

すると邪神王はニヤリと笑うと、

邪王「言ったな…♪」

オー「ああ！言ったぞ！」

邪王「ならば俺はお前の遣い魔になる。今だけな。」

オー「…！行くぞ…！」

邪王「おうよ。」

そしてオーデインは外に出て邪神王に翼になつてもらい天界にいらっしゃる神司の方へ向かった。

そしてその頃、神司&神ノ邪神は…、

神司「ここが天界か〜！」

神司は等の目的をも忘れて天界を遊んでいた。だがその間逆に神ノは、

神ノ「……」

神司「どうしたんだ？神ノ。」

神ノ「あつ、いや…（何だよこのガキ…ミカエルを見に來ただけじゃねーのかよ。と

いうか来てみたは良いが、俺は墮天使として普通はここには来てはいけないんだよ…）」

神司「そ、そうか…つて！目的はミカエル撃破だった！」

なんと、神司は天使がいつぱいいる前で大きな声で『ミカエル撃破』という言葉を放ったのだ。その事には勿論天使たちは神司たちを睨んだ。

神ノ（ヤバイヤバイ！）いえいえ！何も無いですよ、ほら神司？家に帰ろうぜ〜？」

神司「何を言ひ出すんだよ！俺らはミカエルを倒すのだから!？」

また大きな声で『ミカエル』という言葉が神司の口から出てきた。しかも俺ら？だ。神ノも捲き込まれていた。

しかも、天使たちは増えて神司たちを睨んだ。

神ノ『うるせえ！脳内の鼓膜ぶち破るぞ!？』

神司「うつ…!」

すると一人の天使が、

天使「…あー！お、お前は…！『七つの大罪』 総団長の神ノ邪神だろ！」  
神ノ「くそっ…！逃げんぞ！神司!!」

すると神ノ邪神は黒い羽を生やして神司の手を引つ張り空へ逃げた。  
するとすぐに天使兵たちが神司たちを追ってきた。

天使兵「までー！大罪人!!」

神ノ邪神は空中で止まると神司を天使兵たちに見せると、

神ノ「今回はお早いですね！だが今回は人間の子供もいるんで見逃して…」

天使兵「んなわけあるかー！」

天使兵たちは止まらず神ノ邪神に襲い掛かった。だが、

神ノ「だがねえ…第八人格『邪神の悪魔箱』。召喚！タルウィー！」

神ノ邪神が空中に箱から出した球を上投げるとボロい赤布を着た女性が現れた。

タル「呼びましたか。」

神ノ「タルウィ、アイツらの体の熱を蒸発させろ。」

タル「つまりは殺してしまっても良いと。」

神ノ「ああ、良いぜ。」

タル「それでは…」

タルウィが天使兵たちの方へ手を伸ばすと天使兵たちが膨れ上がり全てが爆発し、下

に血の雨を降らした。

神ノ「アハハツ！温かい血の雨を人間どもにプレゼントだ！ありがとな、タルウイ。」  
神ノ邪神がタルウイに礼を言うと言ふとタルウイは球に戻った。その球を神ノ邪神は上手くキャッチした。そしてその球を箱に入れ、『ボンツ』と箱は消えた。

神ノ「はあく…神司テメエ、あんな敵がいつばいいいる前でその敵のボスの名前を出すな…つて!!」

持つていた筈の神司がいつの間にか消えていた。

神ノ「…落としたか？」

神ノ邪神は下に神司が落ちたと思いい下に下りた。

その頃神司は…、

神司「ここから出せよ！」

牢に閉じ込められていた。その牢の前にいるのは天使が二人。その天使というのが…

ガブ「こいつだよねー♪神ノの野郎が持ってた可愛い子供というのが♪」

ラファ「ああ、コイツで間違いないだろう。」

そこにいた二人の天使はガブリエルとラファエルだった。そして神司を盗んだという天使がいた。その天使は…、

サリ「はい、ありがとうございます。」  
サリエルだった。

？「おいおい…また変な物盗めとサリエルに頼んだのか？ガブリエル。」

ガブ「何だよ、僕の勝手だろウリエル。」

そこにウリエルも集まった。

神司「ここから出せよ！俺は俺の家族を殺したミカエルを倒すんだ!!」

神司がその言葉を言うと四人の天使がポカンとなった。

神司「な、何だよ…」

ガブ「フツ…」

四人「ニフハハハハッ!」

四人は神司を見ながら笑った。

神司「だから何なんだよ!」

ガブ「ミカエルを倒す?!このガキが?!」

サリ「嘘でしょ?!」

ラファ「そりゃねえや!」

ウリ「可笑しくて面白いことを言うガキだな!」

四人は無理とすぐに神司の言葉を断言した。

神司「何が可笑しいんだ！俺はミカエルに絶対勝つんだ！」

するとガブリエルが牢の中に居る神司の首もとの服を持って引つ張り、

ガブ「嘗めたこと言ってるんじやねーぞ？クソガキ。一応言っておくが僕らの種族は天使じゃない。『神』なんだよ。神を怒らせると天罰が当たるんだぞ？そこるところ分かって言ってるのか？それとも……ただただほざいてるだけか？」

ガブリエルは神司に殺気を放ち、牢の中に叩き戻した。

ラファ「おお、怖いな。」

カブ「昔から僕は怖いんだよ。あの様なクソガキには特に殺気を出してやるよ。」  
ウリ「んじや俺は上に戻るよ。」

サリ「私も……」

カブ「ちよつとサリエルは待ちな。」

サリ「はい？」

カブ「サリエル、君に一つ頼みたいことがある。このガキを蹴つたり殴つたりできる奴隷券をあげるよ。」

神司「えっ……！」

サリ「……」

カブ「何だよ？不満そうだな。」

サリ「いえいえ！ありがとうございます…。」

カブ「んじや、三日間そのガキと一緒に牢屋に入つてね〜♪」

そしてガブリエルは牢の鍵を開けて、サリエルを牢の中に押し込んだ。

カブ「楽しんでね〜♪」

ラファ「乙だな。」

そしてラファエルが牢に鍵を掛けてガブリエルと一緒に上に戻った。

## 第60話 スペルカード作り

神ノ「まずは実戦しながら練習しようか。」

神ノによれば弾幕ごっこは相手を殺してはいけないのとスペルカードというカードの名前を宣言してから発動しなければいけないらしい。そして綺麗な弾幕を放たなければいけないということ。

神ノ「○符『』などのスペルカードだ。そして俺の様な人格技も…第一人格『邪神斬り』、第九人格『奏でる鎮魂歌』等と宣言するんだ。そしてその技を綺麗に出さなきゃいけない。例えば俺の『奏でる鎮魂歌』は歌だから音符を具現化させて攻撃するわけ。」

神司「なるほど…」

神ノ「そして次は『程度の能力』だ。」

神司「どういうことだ？」

神ノ「例えば俺の能力は『予知を見れる程度の能力』と『刃を出して操る程度の能力』と『暇をもて余す程度の能力』だな。」

神ノ「最後のは能力か？」

神ノ「細かいことは気にしな〜い。でお前の能力は？」

神司「えーっと…『予知を見る程度の能力』と…『刃を出す程度の能力』かな…。」

神ノ「まあ…そうか。という感じでドラくんは、『雷を操る程度の能力』と『炎を操る程度の能力』でシロちゃんは、『風を操る程度の能力』と『水を操る程度の能力』。サグメちゃんは、『口に出すと立場が逆転する程度の能力』だね。また能力が分からなかったら俺に聞きなよ。」

サグメ（私ってそんな能力だったんだ…。）

神ノ「ってことはサグメが消したがっていたのは能力という名の個性だと言うわけだね。」

なるほど、だから消せなくて呪いと思つてわけか。

神司「くそつ、あのベリアルめ。」

するとサグメの体からベリアルが出てきた。

ベリ「何かな？神司。」

すると神司とベリアルの間には神ノ邪神が入った。

ベリ「なっ…！神ノ邪神様…！」

神ノ「久しいな、ベリアル。どうした？また箱の中に戻りに来たのか？」

ベリ「いつ、いえ…今は…」

神ノ「今はサグメちゃんの魂をゆっくりと喰つていると?」

ベリ「なっ、なぜそれを…!」

神司「認めたな?」

ベリ「いつ、いやあの…」

神ノ邪神にバレて慌てるベリアル。

神ノ「ここは聖なる場所なんだ。邪のある者には退場を願おうか。」

すると神ノ邪神はベリアルに手を出して念を送った。

ベリ「嫌だ…その“箱”には入りたく……ない…!」

するとベリアルは小さくなり球になった。

そしてそれを神ノ邪神が拾い、

神ノ「ベリアル、お前が悪いんだ。俺の友人の彼女さんに取り憑くからだね。」

サグメ「あの…ベリアルは…?」

サグメが少し怯えながら神ノ邪神に聞いた。

神ノ「この球がベリアル本体さ。俺はもう一つ能力があつてね、『物に念を送ると球にして操る程度の能力』なんだよ。それで神司やサグメちゃんを球に変えて俺の物にできたりするのだけど…そんなことを友人にはしたくないからしないよ。」

神ノ邪神のその言葉を聞いて俺とサグメは鳥肌がたつた。ある意味それは奴隷にな

るのと変わらないからだ。しかもまた奴隷になるのは勘弁してほしい。というところで俺は話題を変えようとした。

神司「神ノ、そろそろ弾幕ごっこの実戦をしたいのだけど…」  
すると神ノ邪神は振り返り、

神ノ「そうだなそれじゃあ、神司たちはスペカを何枚か作っていてよ。」

と言われて俺らは座りスペルカードを考え始めた

神ノ「それじゃあ…その間、俺は暴食たちにもスペカ教えて戦ってくるよ。」

神司「ん？暴食いるのか？」

神ノ「いるよ、あとミカエルの【光】と【闇】もね。」

神司「ミカエル!？」

俺はミカエルがいることにびっくりして思わず立ってしまった。

神ノ「まあ、落ち着いて座りなよ。」

神司「あつ、うん…」

神ノ「大丈夫だよ、【光】の方のミカちゃんは【闇】のエルを厳しく監視してるからエ  
ルが暴れることはないさ。だから落ち着いてスペルカードを作っていてくれ。」

と言って神ノ邪神は部屋から出ていった。

さて、どんな名前のカードにしようか…まずは神剣『千本刃』だ。次は…

と考えている内に三十分はたった。俺だけ悩んでおり、サグメやドラシロは終わり交代しながら弾幕ごっこを実戦していた。

神ノ「やあ神司くん。どうだい？」

神司「ああ、そろそろだ…よし！」

神ノ「できた？」

神司「ああできたよ。神ノ、一勝負してくれ。」

神ノ「良いよ、何枚指定だい？」

神司「んー…そうだな。初勝負だから五枚程で。」

最初はそれぐらいで良いだろう。良い練習に成りそうだし。

神ノ「結構多いのだね…まあ良いや。それじゃあ…」

神ノ邪神は構えをとると俺も構えると

神司「いざ尋常に…！」

神ノ「勝負ッ!!」

## 第61話 再戦 VS 神ノ邪神

神ノ「まずはこれから避けてみてくれ。」

神ノは上下左右を交互に弾幕を放った。がそんなのは俺は簡単だった。

神司「まだ簡単だぜ！そんじや早速一枚目行くぜ！神符『プラズムゴット』！」

大きな雷の球を五つ程飛ばし、一定のリズムでそれを三連続けた。

ただしそれを神ノは軽々と避けた。

神ノ「良いリズムだな、だがそのリズムに馴れば簡単だな。そんじや、俺も一枚目行きますか：邪符『バッドデーモン』！」

黒く禍々しい細い球を空中に十個ぐらい出して最初はゆっくりで避けれたが通りすぎた細い球は後ろで素早くなり戻ってきた。

神司「ええ!？」

それに驚き、俺は避けれず殆ど被弾した。

神ノ「まだまだ行くぜ？邪脚『ブラッドストーム』。」

神ノの脚が黒く光って俺の横腹を蹴ろうとした。それには反応ができて腕で衝撃を防いだ。が引力みたいなのに引かれてもう一回思いつき蹴られた。

神司「っ……！」

ストーム

神ノ「暴風雨だよ、それを利用して本当なら飛ばすのを引力を使いこつちに引いたわけさ。」

俺は邪桜剣を取り出すと、

神司「説明ありがとな！桜符『風舞桜』……！」

一瞬舞うと、風が過ぎる様に神ノを斬った。

神ノ「っ……かはっ……！」

神司「次行くぜ！神剣『千本刃』！」

俺の回りに九百九十九本の刃を出して、俺の合図で刃は神ノに向かって飛んで行った。ただし神ノはすぐに防ぐ体勢をとり、大鎌を構えるとその場でぐるぐると大鎌を回し始めた。

神ノ「はいはいはい！」

そしてそのまま俺に近づいてきて、

神司「ヤバイ！」

すぐに最後の一撃をしようとする神ノは防ぐのを止めて大鎌でその一撃を止められた。

神ノ「俺を嘗めんじゃねーぞ？それでも俺はお前よりも年長者だ。」

神司「そうだな…！それでも俺はお前のライバルに成りたいもんだぜ…！」

そして二人は後ろに飛び下がった。

神ノ「俺のライバル？お前が？」

神司「ああ、そうだ。」

すると神ノは笑い出して、

神ノ「クククツツ…やっぱりお前を天界に連れてった時から変わってないし、面白い人

間だな。」

俺は空中に一本、刃を出して…

神司「神ノ邪神、悪いが俺は〃元？人間だ。」

そしてその刃を神ノに向かって飛ばした。が、それを神ノは素手で掴んだ。そこから

血が垂れた。

神ノ「ああ、そうだったな少年!!」

神ノは俺に向かって走り出した。

神司「俺はもう少年じゃない、青年だ!!」

俺も走り出して、激しく剣と大鎌がぶつかり金属の音がその部屋に響いた。そして俺と神ノは空中にそのまま上がり、激しくぶつかり合った。まさにその勝負は互角だった

…いや、神ノ邪神がこの勝負を互角にしようとして調整していた。

神司「俺も嘗められたモンだな！」

神ノ「お前が俺を越えることは絶対にはあり得ないな！俺は〃元？『七つの大罪』総団長だったんだぜ！」

神司「それは自慢かよ?!」

神ノ「ああ…自慢だ…ねっ！」

神司「くっ…！」

俺は神ノに吹っ飛ばされて下に頭を打った。

神司「がっ…！」

すると神ノはゆっくりと下に下りると、

神ノ「まだ何枚が残ってるが、神は神でも『邪神』からの天罰を一つ神司、お前に受けさせようと思う。」

神ノは俺に左手を向けると、

神ノ「よくも俺の団体・仲間の『七つの大罪』たちに俺の名前を使って騙してくれたな…確かにアイツらの記憶を消してお前にアイツらの球を渡したのは間違いない。だが、俺の名前を使って良いとは一言も言わなかったつもりはない…あの世で後悔するんだな…神司イ!!」

俺は目を瞑り、神ノの言葉を思い出した。『今の間は死んでしまうからね。』今この瞬間思い出してしまった。「ああ……ここで俺は死ぬのか……」と思つてしまった。

神ノはこの時、殺気を俺は身で感じてしまうほど浴びていた。だがその殺気が消えて俺は目を開けると黒いマフラーで見えないが、神ノは笑つてい様に見えた。

神ノ「フハハツ……♪今のは全て冗談さ♪ほら、立てるか？」

神ノは俺に手を差しよべてくれた。

冗談かよ……たくつ……

そして俺は神ノの肩を借りてふらふらな足で立った。

神司「たくつ……冗談がキツイぜ……」

神ノ「もう昔の俺じやないんだ、今の俺は大事なモノが何かをわかつてるからな。もうその大事なモノを失いたくはないというお前の気持ちは俺にもあるんだぜ？」

神司「……それは何だよ？」

神ノ「……教えるつもりないね♪」

神司「教えろよ！」

それで少し暴れてしまい神ノの肩から落ちそうになった。

神ノ「あわわわ！危ないよ！」

神ノが何とか着かんでくれたから落ちずに済んだ。

神ノ「もう…君には君が思っている以上に休んでもらう必要があるらしい。」

神司「まあ、弾幕ごっここのルールはわかったからな、今から少しは戦闘を控えるよ。ベッド借りるぜ。」

神ノ「あく！そこは俺の家！」

神司「何言ってるんだ…」

そして俺は神ノのベッドの上で夢を見るほどの眠りに入った。

## 第62話 大胆で初めての夜

俺は日の光を浴びて目が覚めた。

神司「……」

何で日の光が？ 確かベッドの横には窓が無かったはず……

と思いつつ体を起こしてベッドから下りた。すると美味しそうな匂いが漂ってきた。

神司「……あれ？」

すると匂いが一番強い場所にあつたのはキッチンだった。そのキッチンに神ノが何かを作っていた。

神ノ「やあ神司くん、おはよう。」

神司「おはよう、朝ご飯作っているのか？」

神ノ「まあね、ハムエッグをパンで挟んでサンドイッチをね。」

神司「…手伝おうか？」

神ノ「もうすぐで出来るからそのテーブルのイスに座つてなよ。」

大人しく俺はイスに座ると、他の部屋からサグメたちが起きてきた。

サグメ「お二人ともおはようございます。」

神司「おはようサグメ。」

すると神ノが五人分の料理をもってきた。

神ノ「おはようサグメちゃん。」

ドラ「おはようございます、神司様神ノさん。」

シロ「おはよー。」

神ノ「うん、おはようドラくんシロちゃん。ほらほら席に着いて。」

神ノはみんなが席に着いたのを確認すると、

神ノ「それじゃあいただきますーす！」

四人「いただきますーす。」

俺はサンドイッチを一口食べると、

神司「美味しっ！」

サグメ「うん……！本当に美味しい……！」

ドラ「特に味付けが良いですね。」

シロ「おかわり！」

俺の他にもみんなは神ノのサンドイッチがとても美味しかった。

神ノ「好評で何よりだよ♪サンドイッチは初めてだったけど成功して良かった！」

神司「えっ!?初めてなのか!？」

神ノ「うん、そうだよ！」

サグメ「初めてでこの味ですか…凄いですね！」

神ノ「それじゃあ、僕も…うまつ！」

作った本人が驚いてどうするんだよ。

そしてペロリと食べ終わり、

神司「ごちそうさまでした。」

三人「ごちそうさまでした。」

神ノ「お粗末様でした…さて、今回は何をしようか…」

神司「そういや神ノ、この部屋の雰囲気を変えたのか？」

俺は神ノにここの部屋をリフォームしたのか聞いてみた。

神ノ「フツフツよくぞ気づいたな！実はな！俺らの部屋を幻想郷に移動させたのだ！」

神司「ええ!？」

神ノ「君が寝ている間にこの部屋をリフォームしてそのまま昨日の夜に紫と俺の力で幻想郷まで引越した訳さ！しかもガス代とか水道代、電気代もタダなのさ！まるで夢のマイホームそのままだろ!？」

マジかよ…そんなことできるのかよ…しかもちやつかり紫も参加しちやつてるし。

神ノ「因に俺はお前の補佐役であと一週間はここにいろよ。」

神司「え？どういふことだ？」

神ノ「まだ判つてない様子だね…つまりは…」

サグメ「ここは私たちの家に成つたということだ。」

神ノ「それは俺のセリフ！」

神司「え？貰つて良いんですか？」

神ノ「別にいらぬからね、友人と一緒に住むなんて嫌だろ？しかも俺がここに居るとバレたら色んな人たちに追いかけられそうだからね。あー！想像しただけでも面倒くせえ！つてことで俺は暴食たちの家に帰ります。」

神司「ちよつと待てよ！一週間居るとか言つてなかつたか？」

神ノ「ああ、あれは嘘だ。神司、はいこれ。」

神ノは謎の紙を俺に渡した。

神司「何これ？」

神ノ「一人の時に読みなよ！それじゃあ楽しい家族ライフを♪」

そして神ノはドアから外に出て帰つて行つた。

その夜、自分の部屋のベッドの上で、神ノから貰つた紙を開いた。それは…、

『これを開いたということはまだ家族が増えていないこと。この言葉の意味が判るかな

?判ったなら行動に移すべきだね!

PS・もしも家族が増えたら俺にも見せてくれよ?結構楽しみしてるのだからね。

君の友人は恋のキューピット より』

神司「……」

まさかの神ノからこれを頼んでくるとは……まだサグメとキスもしていないし、このようなことをする予定も考えていなかった。まだ早いだろと思つてしまつている自分がいるし……。

と思つていると部屋のドアが開く音がした。入つてきたのはサグメだったので思わず神ノからの手紙を隠してしまった。

神司「ど、どうしたんだい?サグメ。」

サグメは顔が真っ赤になりながら恥ずかしそうに俺に言った。

サグメ「あつ……あの……神ノさんの手紙……読んだのですか……?」

神司「読んだけど……何ですか……?」

サグメ「ああ!もう……!」

サグメは勢いよく俺に近づき大胆にキスをした。

神司「……!」

そつとサグメは口を離すと、

サグメ「えへへ…大丈夫でしたか？」

神司「…あつ、うん大丈夫だよ…」

まさかだよ。こんな大胆にサグメがキスをしてくるなんて…未だに心臓が異常なほどにドクドクと音をたてて鳴っている。

神司「…ありがとな…今日は一緒に寝るか？」

サグメ「誘ってるんですか…？♪」

神司「うん、誘ってるんだよ♪小悪魔なサグメさん？」

そしてサグメはベッドに入り、今日は一緒に寝た。

## 第63話 博麗の巫女と普通の魔法使い

あの夜から数年たった、サグメのお腹は少しずつ大きくなっていった。そして、外に出て色々なところに寄ったり会いに行ったりしたらみんなは俺に久しぶりに会ったので三日程の宴会を行ったり、何が変わったのかとかを見に行ったりした。そして現在。

一人歩いていると、急に大きな石段が出てきたので上っていくと一つの神社が建っていた。とりあえずお賽銭を入れて願い事をするその後ろに肩を叩かれた。

神司「ん？」

そこには黒髪の巫女さんが立っていた。

神司「どうしました？巫女さん。」

巫女「…貴女見ない顔ね。どこから来たの？」

と急にそんな質問された。なので俺の家を指差し、

神司「あちらの山の下にある白い家から歩いて来ました。歩いていたら急に大きな石段があったので上ってみるとここに神社がありましたのでついでお賽銭を…」

説明の続きをしようとしたら巫女さんの目がキラリと光って、

巫女「貴女…！お賽銭入れてくれたの!？」

神司「えっ！は、はい…入れましたけど…」

俺がそう答えると巫女さんはとても嬉しがり、強く両肩を叩かれた。

巫女「私は”博麗 霊夢”?!この『博麗神社』で巫女をしているわ！それにしても貴女いい人ね！」

急に巫女さんから自己紹介をしてもらったので俺も自己紹介をした。

神司「俺は稀神 神司。今更だが、俺は男だ。」

先程言ったの宴会でサグメと出来ちゃった結婚だと説明してしまったので俺の名字はその時から『稀神』に成ったのだ。

すると霊夢は肩に置いていた手を退かし、

霊夢「貴方、男だったの!?!」

神司「よく言われるよ…」

霊夢「はあ、そうなの。」

?「何だ何だ?変なのが神社に来てるじゃないか?」

声をした方向を見ると空から箒に乗った魔女っ子が下りてきた。霊夢を見ると顔に手を当てていた。

神司「俺は稀神 神司だ。君は誰だい?」

魔女っ子「私は”霧雨 魔理沙? 霊夢の幼馴染み、そして普通の魔法使いだぜ☆」

やはり魔女だったか。それにしても普通の魔法使いって、それはまだ未熟なのだろうか。

神司「そうか、ヨロシクな。」

霧雨「よろしくだぜ！それにしても霊夢、私が来た時嫌そうな顔していたが…」

霊夢「さーて！賽銭貰ったことだし回収して掃除しましょう！」

霧雨「話をスルーするなよ！神司お前も霊夢を止めてくれよ！」

神司「おいおい俺は男だぜ？迂闊に巫女さんの体を触れるかよ。」

霊夢「私の身体目当てで賽銭入れたの!？」

神司「変な勘違いしないでくれ！俺はもう結婚してるんだよ！」

二人は動きを止めるとこつちを向いて、

霧雨「えっ？神司お前、彼女が出来てるのかよ。」

神司「あ、ああ。」

あれ？何かおかしいこと言ったか？

霊夢「ふーん、子供は？」

神司「一応いるけど、まだ生まれてはいない。」

魔理沙は少し考えると、

霧雨「あー！稀神って名前！確か片羽の女の名前だろ！確か下の名前は…」

神司「何だ、サグメのこと知ってるのかよ。」

霊夢「知ってるも何も、紫から第一次月面戦争で聞いているのよ。それでそこには妖怪総代将が率いる百鬼夜行と月軍が死闘したって聞いているわよ。」

霧雨「詳しくはあのババアから聞いてみると…」

神司「?」「ババア?」

俺の声の他にもう一人聞き慣れた声が混じっていた。その声の主が、スキマを開いて現れた。

紫「誰がババアですって?魔理沙。」

そう、我が弟子の紫だった。

霧雨「私は何も言っていないのだぜ!し、神司が!」

紫「神司:~?」

神司「よっ、久しぶりだな紫。」

紫が俺の方向を見ると少し泣き出して、

紫「師匠:~!?!」

霊夢・霧雨「師匠!?!」

紫はスキマから体を全部出した。

紫「お久しぶりですね、師匠。」

神司「お前も元氣そうで何よりだ。噂では俺が死んで忘れられたという話もあったらしいし、ちょうど良かったな。」

そして俺と紫は会わなかった分を話し続けた。そしてその光景を見ている霊夢と魔理沙は、

霊夢「…すごいわ、紫があんなにムカつかずに話せる相手がいるなんて…」

霧雨「そして今はいつも悩んだり何か考えている顔じゃなくて、とても笑顔で神司と話してるぜ…。」

霊夢・霧雨「神司って一体何者…?」

紫「えっ! サグメさんとの間に子供?!」

神司「まあな、まだ男か女かはわからないけどね。」

紫「生まれそうな時は八意 永淋の方へ行くと良いと思いますわ。」

神司「そうなの? それじゃあそうさせてもらうよ。今日はありがとね。」

紫「はい♪ また会うときには、私の式神を紹介致しますわ♪」

神司「多分その時は子供も生まれてるだろうからその時にまた会おうぜ!」

紫「はい♪ では。」

紫はスキマで帰って行った。それで俺も帰ろうとすると、

霊夢「待って!」

霊夢が俺を止めた。

神司「どうした？」

霊夢と魔理沙は今まで楽しそうな顔では無くなり、俺を睨んでいた。それはまるで敵意しているように。

霊夢「貴方は一体誰なの？」

霧雨「それは私も今思ったぜ。返す言葉によってお前をここで倒す。」

俺は髪を少しクシヤツとすると、

神司「またそのような質問か…答えよう、俺は『二元？人間だった者』。お前らの敵では無い。別に争う気も無いし、襲う気も無い。今はただのこの幻想郷の住民だよ。」

霧雨「…その言葉は信じてても良いのか？」

神司「勿論。」

すると彼女らは気を緩めて、

霊夢「…やれやれ、それなら改めて言わせてもらおうわ。」

すると霊夢は俺に握手を求めたので俺は握手をした。

霊夢「ようこそ稀神 神司、人間も妖怪なども受け入れる世界 幻想郷へ。」

神司「…ああ、お招きありがとう、『博麗の巫女』博麗 霊夢。」

そして新たな世界 幻想郷の住民として認められた俺だった。

## 第64話 検査

今日は昨日紫に言われたので一応サグメと一緒に永淋の方へ向かってみた。

神司「永淋いるかー？」

俺はドア越しで永淋を呼んだ。

？「あつ、お客様なら中に入って待合室に来て座って下さい。」

すると永淋の声ではない声が聞こえた。入らないのは失礼なので俺は中に入った。すると何人かの人が待合室で座っていた。それで俺とサグメも待合室で座った。

老人「おや、妊婦さんとその旦那さんかな？」

神司「あつ、はい。」

サグメ「そうですよ。」

老人「そうか、元気な子に育てば良いな。」

サグメ「はい、私もそう思います。」

老人『私も』…って、それはあんたら自身の話じゃろ？『私も』ってのはおかしいと思ふのじゃが。」

サグメ「ははははつ、確かにそうですね。この子がまだ男か女かは分かりませんが元気

に育つのを私は楽しみです。」

サグメは微笑み、自分のお腹を擦った。

老人「それが母親の務めじやよ。」

するとその老人の名前が呼ばれて老人は立つと、

老人「もし、また何処かで会えたらその子のことをわしにも見せてくれないか？」

サグメ「はい……！見せてあげます！」

老人「……ありがとな。」

そして診断室に入ってしまった。このあと数分待ってたら次に俺らが呼ばれた。そして診断室に入ると永淋とうさ耳を生やした看護師が座っていた。

神司「お久しぶりだな永淋。」

サグメ「お久しぶりです。」

永淋「あら！神司とサグメ様じゃないの！」

看護師「サグメ様!？」

うさ耳看護師がサグメの名前を聞くと驚いていた。

神司「サグメ、知り合い？」

サグメ「……ああ！うどんげ？ね！」

神司「うどんげ??」

ん？どういうことだ？このうさ耳看護士の名前がうどんげなのか？

看護士「サグメ様ですか？私は、〃鈴仙・優曇華院・イナバ？というちゃんとした名前が…」

神司「長っ!？」

鈴仙「気にしてゐるのですよ！神司さん！」

永淋「…で？今日はどうしたの？なんとなく理由は判るけど…」

鈴仙「スルーですか!?!師匠！」

神司「なるほど、名前が長いから縮めて〃うどんげ？か…」

鈴仙「勝手に納得しないで下さいよ！」

サグメ「今日はこの子についてに來させてもらった。」

神司「ああ、俺の弟子からのオススメでな。」

永淋「弟子？」

神司「ここ、幻想郷の賢者の紫からだよ。」

永淋「八雲か…まあいいわ、あと何日か調べに來たのよね？」

サグメ「そういうこと。」

永淋「うどんげ、レントゲンを。」

鈴仙が何か板みたいなのを持ってきた。

神司「れんとげん？何だよそれ。」

永淋「レントゲンはね、放射線という物質を使って、お腹にいる子供や妊娠しているかを調べられる機械よ。」

鈴仙「外の世界では、『X線検査』なんて呼ばれているんですよ。」

神司「ふーん…あわっ！」

気づくと鈴仙に腕を引つ張られた。

そしてそのまま外に出された。

神司「何すんだよ！」

鈴仙「今からは女の子領域なんで♪またお呼びしますよ♪」  
と言つてドアを閉められた。

神司「…はあ。」

俺は大人しく待合室で座ることにした。すると後ろの人に肩を叩かれた。

神司「なんすか？」

後ろの人は執事服で黒髪の男の人だった。

男「あんた何で追い出されたか当てようか？」

神司「…いや、当てなくていいですよ。」

男「何だよつれないな」

お前のテンションに俺が追い付いてないだけだよ。とは言えず、男は…

男「まつ、今日はそのまま帰るからまた会えると良いな♪」

男は手を上げると立ち上がり、

男「名前だけ言つとくよ。俺は〃八剣 光矢？またな。」

そして光矢は外に出るとすぐに消えていなくなつていった。

神司「…何者だ、アイツ。」

鈴仙「神司さーん。」

すると鈴仙に呼ばれたので俺はもう一度診断室に入った。するとサグメは喜んでい  
た。

神司「どうした、サグメ。」

サグメ「あと一ヶ月程でこの子が生まれるですって！」

神司「…マジで？」

俺が混乱していると永淋が、

永淋「本当よ、あと一ヶ月程で生まれるから今日からは私たちが面倒を見るわ。」

神司「それは有難いです。」

永淋「さて、今回はこれぐらいよ。神司はカウンターで鈴仙に会計をしてもらって

ちようだい。」

神司「わかりました。」

俺は少なからずのお金を創造して、

鈴仙「お会計は、1080円です。」

1080円分のお金を出した。

神司「あつてる？」

鈴仙「え〜つと〜はい！ちようど貰いました！では、後は私たちに全て任せてくれれば良いのでその時は手紙か何かでお伝えします！」

神司「うん、待ってるよ。」

そして俺は外に出て、思いっきり伸びた。

神司「ううくん…！さて、家に戻ってドラとシロにご飯を作るか。」

そしてそのまま今日の半日が終わった。

## 第65話 異変開始

一つ、紅い館で執事やメイドたちが集まり、主である「レミリア・スカーレット」が作戦を話していた。

レミイ「…良いわね？これで。」

光矢「ああ、良いぜお嬢様。」

そこには昨日神司と待合室で会った光矢もいた。

レミイ「それじゃあ…始めるわよ！」

レミリアが手を大きく上げると一人の魔女が魔法陣で幻想郷の空を赤く染めた。

そして一方神司は…

神司「霊夢く？」

シロ「どんな人なんだろ♪」

ドラ「失礼なことは言うなよ？シロ。」

従者と一緒に博麗神社に来ていた。

神司「…」

寝ているのか？…まさかと思うがこれで起きるわけ…

俺はお金を創造して音がなるように小銭を賽銭箱に何枚か入れた。賽銭箱の中でチャリチャリと音がなった。

すると、もうスピードでここの神社の巫女さんが走ってきた。

神司「…はあ。」

霊夢「誰！誰!!お賽銭を入れてくれたのは!？」

これじゃ、俺の従者たちのイメージが壊れるよ。特にどんな人が楽しみにしていたシロが。本当に予想を裏切る巫女だな…。

霊夢「誰…って、神司じゃない。」

神司「起こしてしまつてごめん。だけど今日は俺の従者を紹介しに来ただけど…」

霊夢「その二人の獣人の子供のこと？」

神司「うん、そうだよ。」

するとシロは自分から紹介し始めた。

シロ「私はシロフォン・マレット。シロって呼んでね♪」

ドラ「どうもシロの妹の兄、ドラ・マレットです。」

ドラ・シロ「よろしくお願ひしますー!」

霊夢「私は博麗 霊夢。ここ、博麗神社の巫女よ!」

霊夢が自分の紹介を終わるとシロが、

シロ「霊夢さんってお金が好きなの？」

と、霊夢の痛いところに質問した。

霊夢「違うわよ？私はお金が大事だからすぐにお賽銭箱を見に来たのよ。」

？「全く…そんな嘘じゃ私は騙せないぜ。」

神司「この声は…」

タイムリングがバツチリな魔法使いが空の上から下りてきた。

霊夢「来たわね！泥棒白黒魔法使い！」

霧雨「何の漢字並びだよ！」

神司「まあ、落ち着けよ魔理沙。結構急に来たが何かあったのか？」

霧雨「そうなんだよ！霊夢、お前の出番だぜ。」

霊夢「どういうことよ…もしかして！」

霧雨「ああそうだ。異変が起こるらしいとブン屋が言っていた。」

ブン屋？一体誰のことだ？

霊夢「でもブン屋でしょ？またガセかも知れないのよ？」

？「失礼ですね〜ガセ情報なんて私は一度も書いた覚えはありませんよ〜？」

すると、また空から誰かが下りてきた。そいつは、白い服を着て背中には黒い翼を着

けた人間？だった。

霊夢「あっ！ブン屋！」

神司「お前がブン屋なのかよ！」

ブン屋「皆さん酷いですね〜…あやや！貴女たちは見ない顔ですね…」

神司「俺か？俺は神司。そしてこの二人が…」

ドラ「ドラ・マレットです。そして妹の…」

シロ「シロフォン・マレットだよ〜♪」

ブン屋「私は〃射命丸 文？。〃文々。新聞」の制作者です。」

文々。新聞か…今度読んでみるかな。

と思っていると霊夢が文に異変の事を聞いていた。

霊夢「ふーん…それ、本当でしょうね？」

文「はい！本当ですよ。何回も私はその周辺を調べましたがなかなか入れなくて…門番に聞いても入れてくれないと。」

霧雨「言っても解らないな直接行けば良いじゃないか！」

と魔理沙が言うと、空が紅くなった。

神司「何だ!？」

霊夢「これは…!」

霧雨「異変だろうな。」

文「ほら！異変が起きました！」

霊夢「あんたが異変だって騒ぐからでしょ！まったく…行くわよ…って。」

いつの間にか魔理沙がいなくなっていた。上を見ると、魔理沙は箒に乗って異変が起こした場所に向かって行つた。

神司「霊夢、俺らもって!?!」

いつの間にか霊夢も飛んで魔理沙に着いていつていた。そして文さんもいなくなつていた。

ドラ「神司様、自分らも行きませんか？」

神司「そうだな、異変を起こした者も見たいし、俺らも行くか。」

シロ「それじゃあ急ごうよ！」

そして、俺らは霊夢たちに続いて飛んで向かった。

## 第66話 紅魔館潜入

霊夢らに着いていつている途中に霊夢が誰かと絡んでいるのが見えた。

神司「あれは…」

シロ「あつ、ルーミアちゃんだ。」

どうやら霊夢の前にいたのはルーミアというシロの友達だったようだ。

そう俺たちが見ているとルーミアが下に落ちて行つた。

神司「何で!？」

ドラ「シロ!」

シロ「今行くよ!ルーミア!」

シロは勢いよくルーミアの方に落ちていき、ギリギリのところまでキャッチした。

ルー「うう…!」

シロ「大丈夫?!ルーミアちゃん!」

神司「…気を失っているだけだからシロはここでルーミアの看病にいなよ。俺らの

見学は無しになったからな。」

ドラ「そうですね…シロ、しっかりルーミアを看病してやれよ。」

シロ「任せなよ！」

シロとルーミアを置いて、俺とドラは霊夢の向かう方へ飛んだ。あんまり飛んでから時間は経ってないのに次は二人の妖精が下に倒れていた。

神司「また霊夢の仕業か…ドラ。」

ドラ「神司様は先に行ってて下さい。あそこの二人は俺に任せて下さい。」

神司「ありがとドラ。」

そしてドラは二人の方へ下に下りた。俺は霊夢を再び追いかけると、何と大きな紅い城が出てきた。

霊夢はその門の前に立っていた。そして門番らしい人が門の前で立って寝ていた。だがその人は無視して、

神司「霊夢…。」

霊夢「あら神司、着いてきたのね。」

神司「霊夢、お前この城に行く間に何人地面に落としました。」  
すると霊夢は何人か数えて、

霊夢「三人ね。」

神司「判ってんなら何でルーミアたちを気絶させた。」

霊夢「あれはしょうがなくよ！」

神司「しやうがなくで子供を気絶させるようなことをするのか！」

靈夢「はいはい判ったわよ。」

靈夢と喧嘩していると門の前にいた門番がこの喧嘩の声で起きた。

門番「うるさいですね…！ 貴女がお嬢様が言っていた『博麗の巫女』ですか！」

神司「ごめんだけど今お話中なんですよ。」

門番「あつ、わかりました…（まあ、不法侵入しないのなら別にいいか。）」

靈夢「あつ。」

靈夢が何かを思い出したかのように門番の方に向かって歩き出した。

神司「おい待て！ 話はまだ終わってない…」

靈夢「…門番、紅い空の原因ってここから？」

門番「ええ、そうですけどそれが何か？」

どうやら紅い雲の異変の犯人はこの城の主らしい。

神司「…そうか、なら迷惑だな。靈夢、一時休戦だ、乗り込むぞ。」

靈夢「元からそのつもりよ。」

門番「それなら貴女たちを止めるのが門番の仕事ですからね。」

神司「一応あんたの名前を聞こう。俺は稀神 神司。」

門番「私は紅 美鈴。格闘家の妖怪です。」

霊夢「あつそ、早くこの異変を解決したいからあんたを倒すわね。」

と言うと霊夢は大きな黒と白の陰陽玉を作り、美鈴にそれをぶつけた。

美鈴「かはっ……！」

そして美鈴は倒れて霊夢はすぐに紅い城の中に入って行った。

神司「…息はあるな…。」

俺は門の近くの壁に美鈴を座らせると俺も急いで城の中に入った。

そして一方レミリアは…、

レミイ「……光矢、咲夜。」

光・咲「はっ……！」

レミリアが二人を呼びかけるとすぐ二人は現れた。

光矢「今のは咲ちゃんより0.01秒、俺の方が速かったな♪」

咲夜「いいえ、私の方が貴方よりも速かったわ。」

二人がレミリアに呼ばれて来た速さを競争していた。が、それにレミリアは…、

レミイ「何を競争してるの！今は『博麗の巫女』がこの紅魔館に入ってきたのよ。そ

して結構強いネズミが二匹。その一匹の相手を今はパチエが対処してくれてるわ。光

矢はそのもう一匹のネズミ駆除、咲夜は博麗の巫女の相手をしてきて頂戴。」

光・咲「了解しました、お嬢様。」

そして二人は即時解散した。

レミイ「貴方はまだ待機よ。」

? 「了解したよ。」

と、レミリアは待機と言われる一人の青年。

一方、神司に視点は戻り…、

神司「…この城広いな…。」

全く参った、この城はとんでもなく広くて霊夢を追いかけていた筈なのに見失ってしまった。

早く俺が行かないと、また博麗の巫女による新たな被害者が出てきてしまう。

と思っていると暗闇から足音が聞こえた。

神司「誰だ！」

暗闇から出てきたのは前の待合室で会った八剣 光矢だった。

光矢「久しぶりだな、お前。」

神司「そういや俺の名前を言っただけでなかったな。俺は稀神 神司。それにしても八剣 光矢、お前がここの住人だとはな。」

光矢「光矢で良いぜ神司。さて、こここの主のお嬢様からの命令でな…お前を倒すという命令だ。」

神司「それは楽しそうな命令だな…受けてたとうじやねーか。後悔はねえな？」

光矢「それは此方のセリフだ。俺のスペカで神司お前を倒すぜ。」

そうか…それなら戦闘狂の俺なら楽しめそうだ…！それなら…

神司「それなら…いざ尋常に…！」

光矢「勝負ッ!!」

そして俺VS光矢の弾幕ごっこが始まった。

## 第67話 VS 光矢

俺と光矢は少し距離を取ると、光矢から仕掛けてきた。

光矢「光符『ライトニングアロー』！」

光矢は弓を背中から取り、構えて光る矢を創作し、それを約五本ほど飛ばした。

最初は普通避けれると思ったが予想は越えてくる。とても避けることは難しいと言ってもいいほど矢は速かった。

神司「つ……！」

肩をかすりそこから少し血が垂れた。

だが俺も反撃しようと思え、俺の周りに刃を出しまくった。

神司「避けてみな！神剣『千本刃』！」

光矢「すごいなあ！だが俺も執事長だ。それぐらい防いでやるよ！光盾『シャインシールド』。」

光矢は光る盾を創るとそれで全ての刃を止めた。だがこの技は俺が最後に攻撃しなきゃ終わらない。

俺は光矢の盾に思いつき邪楼剣をぶつけた。

光矢「なあっ!？」

神司「俺が一撃入れてで、この技は完成するのさ。邪刀『鬼神斬』!」

普通なら気で飛ばすはずの技を今回は至近距離で放った。

光矢に気を放ったはずなのだが、そこに光矢は居なかった。

神司「…あれ?」

光矢「おいおい、どこを向いているんだ?」

声が出た方向を見ると光矢が俺の後ろにいてスペルカードを持ち構えていた。

神司「マズイ…!」

すると光矢は球状の物の栓を抜いて俺の方に転がした。

光矢「もう遅いぜ…!光爆『無差別光線弾』…!」

するとこの部屋が光に包まれて爆発した。

光矢「あつ…やべつ!」

光矢も爆発に巻き込まれそうになったが自慢の能力を足に付けてその場を駆け回った。

光矢「あはは…流石にやり過ぎたよな…?」

神司「ああそうだな、これはやり過ぎだぜ?自称執事長。」

光矢「なっ!？」

煙が晴れて暗闇も明るくなって、俺は光矢の後ろに回っていた。

光矢「…それにしてもよく生きてたな…。」

俺は手のひらサイズの音無結界を出して光矢に説明した。

神司「俺はこの結界を展開して爆発音と衝撃を防いだわけだ。」

光矢「なるほどなあ、なあ！神司！」

神司「何だよ。」

光矢「現在、練習中の技出して良いか？」

神司「手加減無しと言うなら使っても良いぜ。その代わり！俺も取っておきの技使  
う。」

光矢「ありがとな…：光符『ライトニングスパーク』ツ!!」

神司「…刃符『刃球円陣』！」

光の速度で一直線に飛ばす弾幕、それに対し俺は刃を空中に多く出してそれをキュツ  
と集めて30cmぐらいの球状にまとめた。そして俺の腰の周りに刃を多く展開させ  
た。

そしてそれを光矢のと当たったが光矢のとぶつかりあった。

光矢「行けーッ!!!」

神司「全てを防いでやるよ。」

そしてきりがないので一回俺は横に避けた。

神司「まだ練習中なんだろう？なら今は違う技で戦おうぜ。」

光矢「…お前、侵入者な筈なのに優しいんだな。」

神司「確かに俺はこの城に侵入したが今回は見学なんだよ。ここは見逃して…」

光矢「すまないが、侵入者を見逃すことはできない。」

神司「だよなあ…まあ、ここで倒されて外に捨てられたら見学できなくなるからちやつちやつと終わらせるか。」

光矢「はあ？」

俺は刃を光矢の周りに出した。

光矢「…嘘だろ？」

神司「ごめんな、少しの間眠っててくれよ。」

そして俺は手をギュツと握りしめた。すると光矢に刃が全て飛んでいった。

光矢「うわああ!!」

神司「刃符『円刃陣』。」

そして俺VS光矢の勝負は俺が勝った。

神司「あつ、宣言するの忘れてた。」

とまあ、とりあえず光矢とは勝ったので光矢を壁に持たれかけて置いた。

そして霊夢の搜索を再開し始めた。少し歩いていると地下に続く階段を見つけた。

神司「…いや、まさかね。」

その階段を素通りしようとしたときにガタツと物音がなった。

神司「……」

俺は気になり、階段で地下に向かった。下り続けると最後には赤い扉があった。

神司「…誰か居ますか？」

俺はその扉に三回ノックして聞いた。

ただし反応が無かった。

神司「やっぱりあの物音は気のせいだったのかな。」

？「いや？そこに居る者のことに関しては間違いはないよ。」

声が出た方向を見ると何段か上に青年が立っていた。

神司「お前は？」

青年「俺は紅風 亜無。ここ紅魔館の住人だ。」

神司「俺は稀神 神司。異変が起きたから霊夢たちに着いていつたらこの通り離れて

しまつてな…霊夢と魔理沙がどこにいるか分かりますか？亜無さん。」

亜無「迷子か？迷子なのならもうここにはいないかもな。」

神司「は？」

すると亜無は剣を出して構えると、

亜無「判ってるか？もうこの世にはいないかもってことだ…よ!!」

亜無は俺に向かって攻撃をしてきた。

神司「…後悔すんなよ!!」

俺は邪楼剣を出してその攻撃を防いだ。

## 第68話 VS紅風 亜無

亜無「防いだか…避けてみる！嘘符『ダウトドロー！』」

亜無は近距離で自分の手に紅いオーラを付けて俺を殴ろうとした。だが避けることはできることはなく、殴られた。

神司「っ…！いてえ…」

まさか腹じゃなくて顔を殴るとは…ましてやここは地下へ続く狭い階段の上だ。

神司「くそっ！ここじゃ動きづらい！」

レポート

俺は亜無を連れて瞬間移動を使い紅魔館の上空に出た。

亜無「うわっと…瞬間移動が使えるのかよ。」

亜無は少し落ちそうになったがすぐに浮遊した。俺は邪桜剣を持ち直して、神司「行かぜ…？邪剣『ソウルフレア』。」

邪桜剣から邪炎を出して斬るといふ技を不安定な亜無に攻撃を俺は仕掛けた。すると亜無は、

亜無「嘘符『紅き魔竜陣』。」

亜無の周りに紅い円が展開されて攻撃が防がれた。

神司「なるほど、それは俺でいう音無結界なわけか。」

俺は一度後ろに下がり、脚にストームを付けて何も無いところを蹴った。

神司「邪脚『ブラッドストーム』!」

亜無を引力で引き付けると亜無は何が起こったか混乱していた。もちろん混乱したから円陣は解けていた。

亜無「何だよそれはよ!」

ストーム

神司「暴風雨だよ、逆の引力で蹴っているけど…ね!」

亜無「ぐはっ…!」

俺は亜無の腹に横蹴りを入れた。そして亜無が紅魔館の方に落ちて行った。

神司「落ちるのはマズイ!」

俺は亜無が落ちる前にキャッチしようとは急降下した。だが、

亜無「スペルカード発動!紅風『スカーレットタイフーン』…!」

亜無は紅い風で上に上がった。

神司「そんなスペルも有るのかよ。」

亜無が完全に飛べるようになっていた。

亜無「まさか蹴りが来るとは…よし！スペルカード発動！魔力『プラネットムーン』」

素早い月の形の弾幕が複数飛んできた。正直に言えば神ノ邪神の帰ってくる弾幕のときと同じ速度だった。なので、

神司「ツ…！」

避けきれなかった。何個か自分は当たり、体制を崩した。それで落ちていった。

神司「スペルカード発動！無界『音無結界』!!」

落ちそうになりながら音無結界を張り、落ちるのを防いだ。

亜無「粘りますね…それなら…！星符『ストライクメテオ』!!」

神司「いつてー…なっ!？」

亜無は両手を上にあげると隕石みたいなのが五、六個降ってきた。

神司「…チートかな?…って！あれ斬るしかないよな！解除！」

結界を解除し、その場で宙に浮かんだ。そして邪桜剣を構えて、

神司「神剣『千本刃』ツ!!」

999本の刃を周りに展開し、それを全て隕石に放った。全て飛ばしたが隕石に刺さって隕石の勢いを止めきれてはなかった。

神司「それなら…!!」

俺は隕石よりも亜無がいる場所よりも上に行った。

亜無「何する気だ…？」

神司「…これなら…行くぜ！邪脚『ブラッドストーム・改』!!!」

俺は強力な引力で全ての隕石を引っ張った。すると隕石は俺の方向に向かって飛んできた。

神司「よしよし！次は…」

俺は隕石の下に向かって止まった。そしてまた強力な引力を脚に溜めると、

神司「喰らえ隕石!!邪脚『ブラッドストーム・インパクト』!!!」

俺は一個の隕石を蹴りあげて宇宙の彼方に飛ばした。そして残りの全ても蹴り飛ばした。

神司「はあ…はあ…」

俺が疲れていると亜無が上に乗って俺の目の前に飛んで来た。

亜無「よく飛ばしましたね。」

神司「ああ、さすがの俺も疲れたよ。」

今までの中で一番の重労働だと思う。と思っていると亜無が、

亜無『無かったことを有りにする程度の能力』、それが俺の能力の一つだ。」

神司「はあ？」

本当にチート能力じゃないかよ。

神司「つまりは存在を消したり創ったりできる能力かよ。」

亜無「ああできるぞ、例えば異形とかも創れたりできる創造すればな。」

神司「ガチのチート能力か…」

亜無「まあ、チート能力だって言われてもしょうがないな。」

神司「そういや一つの能力だって言ってたな。もう一つは？」

亜無「ああ、そうだな。もう一つは『嘘を見分ける程度の能力』だ。その効果は、嘘を付いた人を見ると、赤く見えて嘘を付いていない人を見ると青く見えるという効果だ。」

なるほどな…とても面白い能力だし、何てったって、

神司「…便利な能力だな。」

亜無「ああ、だから外の世界ではダウトが強かったのさ。」

外の世界…神ノ邪神の情報だと日本っていう場所なんだよな。

また今度遊びに行こうか。だが、まずは亜無を倒さねえとな。

神司「んじゃ、そろそろ決着着けますか…」

亜無「そうだな…」

神・亜「ラストワード！スペルカード発動!!」

神司「邪刀『鬼神斬』…!!」

亜無「紅無『Disappear:Lie:Scarlet』…!!」

俺は邪気を邪桜剣に纏い斬りに向かった。亜無は空に大きな紅い魔法陣を召喚して、その魔法陣に亜無は飛び込み、魔法陣を貫通して出てきた。そして姿が、獣耳に爪が吸血鬼のように長くなり、背中には蝙蝠の羽を生やした亜無が出てきた。まさにその姿は悪魔そのものだった。そしてそのまま俺に突進してきた。

神司「情報量が多すぎる…ぜ!!」

亜無「この姿ではあんまり体が言うこと聞かないのだよ…!!紅神『Scarlet:devil』…!!」

俺はそのまま亜無を斬って通りすぎた。だが、その同時に亜無は爪で俺の体を裂いていた。同時にピチューンと二回聞こえた。

神司「いつ…!!」

亜無「俺は…もう体の…自由は…効かねえ…」

かろうじて俺は生きていて、落ちていく亜無を急いでキャッチして地面に降りた。

亜無の体は元に戻り気絶していた。体は傷だらけになっていた。降りた場所がちょうど紅魔館の門の前で、美鈴が起きていた。

神司「美鈴さん…」

美鈴「あわわっ！その傷だらけの人は亜無さんですか!？」

神司「はい、亜無さんを後は頼みます…。」

俺はフラフラになりながらも門を通ろうした。

美鈴「神司さん…貴方は休まないで大丈夫なのですか？」

神司「はははっ…誰かが俺を読んてるからな…俺はそこへ行かないといけないのさ。」

俺はそう言っ歩いて行くと目の前ギリギリに瓦礫が落ちてきた。

神司「はあ!?!どゆこと…」

すぐに美鈴が俺のところを駆け寄って来てくれた。

美鈴「大丈夫でしたか?!」

神司「あっ…ああ…」

落ちてきたところの上を見ると紅と赤の線が一本ずつと黄色の線が二本が空で暴れていた。

よく見るとそれは霊夢と魔理沙とあと羽を生やした少女二人が戦っていた。

どうやらその流れ弾が瓦礫に当たって落ちてきたらしい。

神司「迷惑で危険な勝負だな…」

体がフラフラで良かった…そのまま歩いていたら瓦礫に潰されて死んでたところだった。

美鈴「とうより本当に行くのですね？」

神司「安心してくれよ、それよりも紅魔館の中に光矢が壁にもたれて寝ているから向かって行ってあげてくれ。」

美鈴「わかりました：神司さんも気をつけて下さいね！」

神司「りよーかい！」

と言って俺は地下の扉の前まで走り始めた。

## 第69話 扉の向こうの黒い妹

神司「ふう…やつと着いた…」

ここに到着するまでにフラフラで何回かつまずいただろう…終いには三回ほど転けてしまった。

しかし、こんな扉の奥にどんな者が居るのか…

俺は三回ノックした。

神司「誰か居ますか…?」

少し間が空くと「居るけど誰?」と返事が帰ってきた。声は少し明るく子供のような声だった。明らかに女の子の声だった。

神司「俺は見学者の稀神 神司だ。君こそ誰だい?」

?「…立ち話もあれだし、一回中に入って来てちょうだい。」

俺はゆっくりと扉を開けて中に入り、ゆっくり閉めてから女の子の方に向くと、その急にその女の子に首を絞められた。

神司「がっ…!」

するとその女の子は微笑むと自分の紹介をし始めた。

？「私の名前は」ブラックドール・スカーレット？。『ブラック』って呼んでね♪私は「フランドール・スカーレット？の狂気の心の塊よ♪ネエ、急にゴメンだけど…私と遊んでくれる？もし遊んでくれなかったら…」

ブラックは俺の首を思いつきり絞めた。

神司「ぐっ…がはっ…！」

ブラック「これよりも痛く苦しいこととしてあげるわよ♪」

俺はブラックの腕を叩き、離してくれと頼んだ。

ブラック「あら、私と遊んでくれるのね♪」

ブラックはすぐに絞めてた手を離すと俺の横腹を蹴り飛ばした。

神司「かはっ…！」

俺は思いつきり壁に頭を打ち、気を失う直前まで追い込まれていた。

さすがにこれ以上傷ついたら気絶じゃ済まない。そしてまた俺は長く、そしてキツイ戦いをしなければいけないらしい。

と思っているとブラックが俺に近づいてきて、俺の頭に踵蹴りを喰らわせた。

神司「くはっ…」

ブラック「もしかして…もう終わり？おもしろくないなあ。」

やっぱり俺一人じゃ…連戦はキツイのだろうか…いつもの連戦だと邪神王がアシス

トしてくれるから連戦はキツくないのだが…

俺が下を向きながらそう考えていると、ブラックが横蹴りで俺を壁に叩きつけた。

もう、立てる気力もさえ無い…どうすれば…俺はブラックに勝てるのか…まだ能力だつて聞き出していないし、見せてもいない。俺は玩具のように遊ばれているだけだ。

神司「…いや…」

ブラック「何？生きてるの？」

神司「まだ…」

ブラック「なあに？」

神司「まだ…死ねないよな！」

俺は立ち上がる気力もないはずが、なぜか立ち上がることができた。

それは、もうすぐで俺の子供が生まれるのに顔も見れず、こんなところで死んでしまつてはイケナイと強く思ったからだ。

神司「まだまだお遊びは始まつたばかりだ！かかつてこいよブラックドール!!邪脚

『ブラッドストーム』!」

ブラック「なあ!？」

俺はブラックを引き寄せて壁に蹴りつけた。

ブラック「かはっ…!」

神司「さつきまでの仕返しさ！まだ生きてるだろ？かかってこいよ！」

ブラックは立ち上がり俺を見ると、微笑んだ。

ブラック「フフツ、やるじゃない。私も本気出しちやお♪」

ブラックは手を出すと、

ブラック「スペルカード発動、嘘無『ダウトドロ』！」

ブラックは手に紅いオーラを付けて俺に殴りかかった。間一髪のところまで避けたが、

一つ疑問があった。

神司「ブラック：そのスペルカードは亜無のではないのか？」

そう、「嘘無『ダウトドロ』」は紅風 亜無のスペルカードだったのだ。

それをなぜかこのブラックは使えるのか。

ブラック「それはだね…私の能力は、『相手の能力・技を模倣する程度の能力』なのよ。」

神司「ふくん、ならば…これで行くぜ！神剣『千本刃』！」

今回は展開してすぐに飛ばしながら俺はブラックに突撃をした。

ブラック「禁忌『レーヴァテイン』！」

ブラックはくねくねとした悪魔の尻尾みたいなものを持って回した。

ブラック「キャハハハ！禁弾『スターボウブレイク』&闇月符『ダークブラットムー

ン』！」

『スターボウブレイク』は各種綺麗な弾幕をバラバラに放ち、『ダークブラットムーン』は黒い月の形をした弾幕がいっぱい出てきた。多分このスペルは亜無のだろう。

見ればわかるが、この部屋は少し広いが殆ど今の二つのスペルで数えきれないほどの弾幕でいっぱいになっている。それを避けるのも苦難すぎる。音無結界で防ぎきれないだろう。この場合は…

神司「…右上左上…」

ブラック「えっ!?何で避けれるの!」

神司「これぐらいの弾幕なら俺の能力で避けれるさ。」

そう、俺の能力、『予知を知れる程度の能力』だ。この大量の弾幕でも予知があれば避けれるさ。結構この能力を操れるように修行したもんさ。今じゃもう、『予知を見て反応できる程度の能力』になっている。

ブラック「ズルい能力だね…それなら…!神剣『千本刃』!!」

ブラックはいきなり俺のスペルを真似しだした。しかもあの数は千本を越えているように見える。だけど…

神司「受けて立つぜ!神剣『千本刃』…」

ブラック「あれ…?私の方が本数多いようなく?」

ブラックは俺を嘗めたかのような顔になり全ての刃を飛ばしてきた。

神司「オリジナルを越えることは確率が一枚も無いんだぜ。オリジナルを越える答えはいつも〝ゼロ?〟という結果が出ているからな!」

俺も全て飛ばした。ブラックが放つ刃は予知で簡単に避けれる。ブラックは俺の刃を避けるのに必死だった。

ブラック「つ…あ、あれ?!神司は…」

神司「後ろだよ…」

ブラック「…負けたわ…」

神司「トドメだ、剣術『人世斬』!」

俺はブラックの背中に向かって一文字で斬った。そしてピチューンと音がなりブラックは床に倒れた。

稀神 神司 VS ブラックドール・スカーレット

win 稀神 神司

## 第70話 新しい家族

ブラック「…うん？」

？「あつ！起きた！」

神司「本当だな、もう大丈夫か？ブラック。」

ブラック「…フランちゃんと…神司？」

神司「大丈夫そうだな。それじゃあ、朝ごはんもあるし上に行くか。」

フラン「そうだね！行こうよ！」

ブラック「う、うん。」

いまいち状況を把握していないブラック。それはそうだ。あの戦いの後、外に出たら  
霊夢たちも戦いが終わっていた。しかも空は紅ではなく、綺麗な青い空に戻っていた。

霊夢「あら神司、どうしたのよ。」

神司「やつと見つけた…俺はお前を見つげるためにこの館の中でさ迷い続けてたんだ  
よ！」

霊夢「どういふことよ！」

神司「まあ、終わったことだし良いけど…で？この後はどうするのよ。」

霊夢「とりあえず私は神社に戻って宴会の準備を始めるわ。そうそう、明日の夜にするからよろしくね。」

神司「了解、色々誘うかもだから多くの酒とおつまみを用意してくれよ♪」

霊夢は少し嫌な顔をしていたが「わかった」と言つて、神社に戻つた。相変わらずだが、魔理沙はもう居なかつた。

神司「さて：一体このあとはどうするか：」

すると、空から誰かが降りてきた。それは、従者のドラとシロだつた。

ドラ「お疲れ様です。」

シロ「終わったの？」

神司「ああ、終わったけど、この後どうしようかなと：」

？「それなら一度ここに泊まりませんか？」

声が出た方向を見ると、ボロボロのメイドさんが立っていた。

神司「あんたは？」

メイド「申し遅れました、私はこの紅魔館のメイド長の十六夜 咲夜と申します。」

咲夜：：えつと：：あつ！思い出した！

神司「光矢が『咲ちゃん』と言つてた人だ！」

そう、光矢と戦う前に言つてた咲ちゃんは咲夜さんのことだつたのか。

咲夜「ちゃん付けは止めてください。それで、どうしますか？一度泊まりますか？」  
神司「そうだな、今日だけ泊まるか。」

サグメには悪いが泊まることにする。明日の昼にでも様子を見に行くか。

咲夜「わかりました。では、部屋の用意をしますので入って下さい。」

その後、気絶していたフランに俺は呼ばれて、フランとブラックの部屋で寝ていたという訳だ。

そして俺たちは食堂まで着いた。どうやらまだできてないらしいので俺は調理室に向かった。

神司「えーつと…ここか。」

調理室を見るとどうやらメイド長の咲夜さんが調理していた。

「そういう昨日は部屋の掃除もしていたな…もしかしてここの仕事全部咲夜さんが!?  
それなら手伝うに決まってるだろ！」

神司「咲夜さん。何か手伝うことありませんか？」

調理室に入ると咲夜さんの他に亜無も手伝っていた。

亜無「あつ、神司さん。おはようございます。」

神司「おはよう、亜無。」

咲夜「おはようございます、神司さん。そうですね…皿洗いをよろしくお願いしま

す。」

神司「了解しました。」

俺は全て洗い終わり、咲夜さんに終わったと伝えた。

咲夜「早いですね…」

亜無「まあ、料理もできたわけですし装って持って行きましょうよ。」

咲夜「そうですね。ではお二人さん運ぶのを手伝って下さい。」

亜・神「わかりました。」

今日の朝飯は、トーストと目玉焼きとシーザーサラダと紅茶だった。全て装うと皿を運びに行った。

テーブルに着くと、みんなが座って待っていた。

神司「お待ちせ。」

レミイ「あら、客人なのにありがとね。」

神司「いえ、自分から進んでやったことなので。」

レミリアがこの主なのは昨日に聞いたので判っているが、まだこの少女が主だということとは信じられない。

レミイ「さて、いただきましょう。」

亜無「そうだね、いただきまーす！」

皆「「いただきますーす!」」

神司「いただきます。」

手伝いをしたのがまさかの皿洗いと運ぶだけの仕事とは…

喉が乾いたので紅茶を飲もうとしたらドラとシロと亜無以外のみんなが俺のことを見つめていた。

神司「えっ?」

咲夜「いつ、いえ…何でも…」

神司「そうか?」

俺は紅茶を一口飲んでみると、

神司「うう…!?!」

ちよつと待って待って!何だよこの紅茶だけ変な味がしたのだ。さすがに吐きはしなかったが、やつとの思いで飲み込めた。

神司「はあ…はあ…すみません、ちよつと外の空気を吸いに行ってください…」

レミイ「い、良いわよ…。」

俺はゆつくりと外へ向かった。

レミリアは咲夜にアイコンタクトを送り、

レミイ(もしかして、咲夜…この紅茶って…)

咲夜（はい…亜無の紅茶です…。）

レミイ「最悪ね…」

亜無「ん？ん!？」

亜無はいまいち状況を把握していなかった。

神司「すう…はあ…朝から酷い目にあつたな…」

…あの調理室に居たのは俺とメイド長の咲夜さんと役職はわからない亜無だけだ。  
まさか…亜無は紅茶作りが苦手か！

神司「そう来たか…亜無。」

さて、戻るか。みんなも心配してるだろうし。

食堂に戻るとレミリアに亜無が怒られていた。

神司「どうしたんだ？レミリア。」

レミリアがこちらに気づくと、

レミイ「あつ神司、ごめんね、亜無は紅茶作るのがド下手なのよ。」

神司「やっぱりか…」

そう来ますか、亜無さん。

神司「了解、んじゃそろそろ俺ら出かけますんで咲夜さんに伝えといて下さい。」

レミイ「うん、何を？」

神司「今日の夜に博麗神社で宴会と伝えといてくれ。」

レミイ「わかったわ…って！それは私じゃなくて咲夜に…」

神司「だから頼んだじゃないか。」

レミイ「咲夜に言つてよね、でもわかったわ。それじゃあ、貴方の家族を連れて来るから外で待つててね。」

神司「ありがとうレミア、でもお前は吸血鬼だろ？日を浴びて大丈夫なのか？」

レミイ「大丈夫よ♪咲夜に連れてきてもらうから。」

神司「ちよつと待つてくれ、光矢に頼んでもらえるか？」

レミイ「あらどうして？」

神司「亜無とは少し喋つたんだ、光矢ともしつかり喋つときたいんだ。」

レミイ「わかったわ、ちよつと待つててちようだい。」

するとレミアは光矢とマレット兄妹を呼んできてくれた。

神司「ありがとうレミア。あとゴメンな光矢。」

光矢「ああ、しかし神司つてただの人間じゃねーよな。」

神司「バレてるのか。」

光矢「当たり前だ、神司は戦い馴れしてるのが戦つてみて判つた。」

神司「俺は強かつたか？」

光矢「当たり前前に強かったぞ、だが戦って判った。お前とはライバルになれそうだ。」  
神司「ならそうするか？」

光矢「そうしてくれるのなら有難い。」

神司「了解：それじゃあ今日の夜にまた会おうな！」

光矢「おう？判った。」

俺は紅魔館を出てあるところに向かおうとしていた。

ドラ「神司様、どこへ向かおうとしているのですか？」

シロ「それシロもちょうど聞きたかった！」

少し歩くのを止めると俺はドラとシロにどこへ向かうのかを話した。

神司「サグメのところへだよ。一昨日話したと思うけど、サグメは今妊娠してて入院してるからお見舞いに行こうと思ってるね。」

シロ「それは女の子？」

神司「まだ分からないからな、それを今日は永淋先生に聞きに行こうと思ってるね。」

ドラ「女の子か：男の子より自分も女の子が良いな。」

神司「ドラにしては意外な意見だな。どうしてだ？」

ドラ「男の子も良いですけど女の子の成長を見守っていた方が反抗期などを見て人間観察には持ってこいなんですよ。なのでが自分的には女の子の方が良いと思うので

すよね…。」

俺はドラの意見を聞いて少しびっくりしていた。あの真面目そうなドラだけを見ていたからだろうが、ドラにキ○ガイサ○コパスな一面があるとは…シロに関しては馴れているようで反応はしていなかった。

神司「わ、判った…それじゃあ向かうとするか…。」

今日一つ学んだ、ドラの前ではあまり俺の子供を見せてはイケナイと。

そして何もなく永淋先生の病院の近くの竹林に入った。

神司「確かここを左にい!？」

ドラ「神司様!？」

シロ「マスター?!」

下に勢いよく落ちてしまった。上を見ればどうやらこれは落とし穴みたいだった。

?「ウサウサ!引かった引かった!」

ドラが声をした方向を見るとうさ耳の女の子が笑っていた。

ドラ「貴女は誰ですか?」

女の子「ウサウサ…私の名前は、因幡 てるなのだウサ。」

神司「ドラー、すぐに始末して俺を引き上げてくれ!」

因幡「始末ウサ!」

ドラ「了解しました。」

因幡は怯えてすぐに逃げて行った。

ドラ「おい！…逃げましたか…」

ドラが因幡を追いかけに行っている間にシロが風で俺を穴から出してくれた。

神司「ありがとう、シロ。」

すると、少し寂しげでドラが歩いて帰ってきた。

神司「逃げられたのね？」

小さく頷くドラ。

神司「大丈夫だよ、この通り俺は無事だったのだし。」

ドラ「そうですね、ですが本当にすみませんでした。」

神司「良いよ良いよ、それじゃあ改めて向かおうぜ。」

ドラ「はいっ！」

そして小さなハプニングが起きたが俺らは病院に着いた。

神司「こんにちわ。」

永淋「あら、神司じゃない。」

神司「こんにちわ、先生。」

シロ「こんにちわ♪」

ドラ「お久しぶりです。」

永淋「あら、二人共久しぶりね♪」

神司「あの先生、今日なんですけど…」

お見舞いに来たと言おうとしたら続けて永淋が、

永淋「そうそう、今日は貴方に良い情報が二つあるわよ。」

神司「二つ?」

永淋「そうよ♪まあ、先に入って入って。」

永淋に言われたまま部屋に入るとベッドに横になっているサグメにも安心したが、それ以前に俺らはサグメが抱えている子供を見て驚いた。

神司「まつ…まさか…!」

サグメ「あら神司♪見てみて!貴方と私の間の子供よ!」

そう、その子供は俺とサグメの間に生まれた子供だったのだ。

## 第八章 怠惰の革命

### 第71話 安心した名前

今俺は、永淋からサグメと子供の体調がどうなのかの話を聞いていた。

永淋「まあ、生まれたのが昨日だからサグメ様にはまだ入院してもらおうわ。あと見たから分かると思うけどあの子は……」

神司「分かっているよ、顔つきはサグメに似ているし性格はまだ分からないけど今だにわからないのがあの子の背中に生えている“悪魔の羽”のことだ。」

そう、俺は元人間にして、少しだけ邪神の血が流れているのだが、悪魔要素は全くない。ましてやサグメは天人・月人だ。悪魔の血なんて流れているわけがないのだ。

永淋「まあ、何はともあれあの子は真正銘貴方の子供よ。大切に可愛がってあげなさいよ。」

神司「当たり前だろ、自分の子を嫌う親なんて親失格だからな。」

永淋「良く判っているじゃない。」

神司「で、子供は退院できるのか？」

永淋「さつきも言ったけど昨日生まれたからサグメ様と一緒にあと二、三日は入院し

てもらうわ。これで話は以上よ。」

神司「ありがとう、永淋先生。」

永淋「貴方には何回か助けてもらっているわ。今日は特別に無料にするからあとはサグメ様とあの子の名前を決めてらっしゃい。」

神司「ありがとう何から何まで。」

永淋「ええ♪」

そして俺はサグメが居る病室に入った。

サグメ「で、どうだった？」

神司「あと二、三日でサグメもその子も退院できるだとき。」

サグメ「結構早いのね。」

神司「そうだな…」

確かに早い退院だな…まあ、それも永淋先生の凄いとこころだろう。

神司「んじや、そろそろ名前決めようぜ。」

サグメ「そうだね、えーっと…あの…」

神司「何だ、考えてあるのか？」

サグメは素早く一回頷いた。

神司「言ってみ。」

サグメ「最初、初めて生まれた子、最初は「？」って意味だけどそれよりも最初なのは『零』、そして『愛』を込めて決めた名前だから『零愛』。稀神 零愛 ってのは：どうかしら…？」

神司「……」

サグメ「あの神司…？」

神司「…れいあ？…零愛…良いじゃん！可愛い名前だよ！俺はそれに賛成だよ。」

サグメ「…ありがと…／＼」

『零愛』か…本当に良い名前だな…♪

神司「名前決めたし、ドラとシロを呼んでくるよ。」

サグメ「うん。」

俺はドラとシロがいる外に向かった。

そして視点は変わって、

サグメ「…はあ…良かったあ…」

正直、神司が零愛という名前を認めてくれるのか焦ってきた。でも神司は聞いた瞬間評価してくれた。そこに私は嬉しかったし、何でか解放感があった。

サグメ「零愛…元気に育ってほしいな…♪」

すると零愛は両手をあげてキャッキョッキョと笑った。その顔がとても愛くるしくて可

愛かった。

サグメ「…多分、種族は悪魔か吸血鬼でしょうね。日の光りは大丈夫なのかな…」

サグメは零愛に日の光りを浴びさせるが何もおかしいことは無かった。

サグメ「…吸血鬼じゃないわね…てことは…」

残りの種族は悪魔ということだ。ただなつてほしくないのは、

サグメ「サキちゃんみたいな種族にはならないでほしいな…」

サキちゃんの種族はサキュバスだ。なので人を惑わすような種族にはならないでほしい。だが、決してサキュバスという種族をバカにはしていない。

サグメ「…それにしても、神司たち遅いな…」

するとドアが開き、神司が入ってきた。

サグメ「ドラくんシロちゃん？」

すると神司が続いてドラとシロが入ってきた。

シロは零愛に気づくとすぐにサグメのところに駆け寄った。

シロ「サグメちゃん！男の子？女の子？」

サグメ「女の子よ♪名前は零愛ちゃん。」

シロ「零愛か…しかも女の子！」

シロは願いが叶ったので喜んでいた。

そしてドラはというと…

ドラ「…可愛い…。」

どうやらサイ○パスな感じはなく素直に可愛いと言った。

神司「それにしても家族が増えるって結構凄いな…」

サグメ「そーいやね…でも楽しいわね♪」

神司「まあそうだな。」

シロ「そーいや今日は宴会なんだけど、サグメちゃんは行くの？」

そうだったな…退院は明日か明後日、宴会に間に合わないな。

そう思っていると、

永淋「安心しなさい、シロちゃん。その件についてだけ…」

永淋先生がドアの前に居た。

神司「先生、それは…」

永淋「今考えてみるとサグメ様は幻想郷に住んでいる普通の人間ではなく月人、だか

ら体に強いはずだわ。サグメ様、体の調子は？」

零愛をシロに渡して、サグメは立ち上がり少し体を動かすと、

サグメ「そーやね、大丈夫そーだ…」

永淋「それなら安心ね、良いわよ今日退院でも。」

シロ「良かったじゃん！サグメちゃんも零愛ちゃんも宴会に行けるね！」

ドラ「そうだなそれじゃあ、今日は異変解決、そしてサグメさんと零愛ちゃんの退院祝いだな。」

神司「やった！えーっとお代は…」

永淋「だから、今回は無しでいいわ。さつきも言ったけど神司たちには色々とお世話になってるからね。そのまま帰っても問題ないわよ。」

神司「ありがとうございます、永淋先生。」

永淋「それじゃあ、サグメ様はお酒は飲んではいけませんよ。」

サグメ「大丈夫です、私は酒を飲まないのです。」

神司「酒嫌いだもんな、サグメは。」

サグメ「つまみは美味しいけどね。」

永淋「わかったわ、それじゃあお大事に。」

そして俺らは永淋先生に見送られて家に帰った。

## 第72話 眠る者たち

現在は真夜中、村が静かになると同時に博麗神社に光が灯った。そして関係者や妖怪たちは今日ここで宴会を始めた。

霊夢「んっ…ぶはーっ！やっぱり旨いわね〜♪」

萃香「酒は旨いからね〜♪」

いつも宴会してそうな感じだけど今回は色々な妖怪たちが集まるので本当に宴会らしくなっている。

まあ、ぬらりと天魔や晴明を呼んでも来てくれなかつたけど胡桃と新羅義は来てくれた。そして俺はサグメと零愛の件があるので紫に頼んで酒は外の世界にある『ノンアルコール』の酒を吞ませてもらっている。

神司「本当に酔わない酒だな…」

紫「でしょ？これでもアルコール度数はとても低めなのよ。」

神司「紫が今呑んでいるのは普通のお酒か？」

紫「いいえ、私が今呑んでいるのは『鬼殺し』よ。」

神司「一番キツいのじゃないか…」

紫「それはないわね、あそこにいる勇儀っていう鬼と胡桃は、焼酎を飲んでるもの。アルコールド数は40〜44よ。」

神司「ははは……酒に弱い人はすぐにダウンだな。」  
特にサグメは一発アウトだろう。

神司「鬼殺しは何パーセントなんだ？」

紫「え〜と……19ね。」

神司「嘘だろ……？」

亜無「いえ、その人は嘘を付いていませんよ。」

すると亜無が口を挟んできた。

だが、紫と亜無は初対面らしかった。

紫「あら、貴方は？」

亜無「はじめまして、僕は紅風 亜無。紅魔館の住人です。」

紫「ああ、あの館の住人ね。でも私が館を幻想郷に連れてきた時には貴方は居なかったわよね。」

亜無「はい、その後ここ幻想郷に転生しまして今調理室にいる咲夜に助けてもらい今は紅魔館に居候させてもらっています。」

すると紫は亜無の説明に納得したように何回も頷いた。

紫「なるほどね、わかったわ。改めて私は八雲 紫、この幻想郷の一応賢者として  
いるわ。あと今頃になると思うけど、ようこそ幻想郷へ♪」

亜無「ありがとうございます、この幻想郷を今もとても楽しく生活を送らせてもらっ  
てます。」

そして亜無は俺の方向に向くと、

亜無「神司も改めてよろしくな！」

神司「おうよ！また戦おうぜ！」

俺と亜無は拳をぶつけて「おう！」と言い合った。

神司「それじゃあ、宴会の続きをするか。」

亜無「そうですね♪」

そして宴会の続きを始め、サグメとの間の子供のことも紹介した。

霧雨「マジでか！」

胡桃「おめでどう！神司！サグメ!!」

するとみんなは拍手をくれた。

神司「ありがとな…。」

すると霊夢が、

霊夢「名前は何ていうのよ。」

サグメ「零愛という名前です♪」

霊夢「みんな聞いた？零愛ちゃんよ」

と霊夢が言うのと、みんながよろしくと駆け寄ってきた。みんなは酔ってるからだろう。性格が変に成っている。

神司「はあ…」

もう疲れたから寝させて欲しい…

そしてそのままダウンしてしまった。

その頃、清明は自分の部屋で最近起こった妖怪が関わった事件の書類をまとめていた。

清明「…はあ！やつと終わったー！」

清明が時計を確認すると時間は深夜の2時だった。

清明「宴会はまだやってるわね…」

誰かが部屋の扉を開けて入ってきた。それは…

領耶「清明さん？」

陰陽師の平崎 領耶だった。領耶は現在、清明のところで弟子になっていて同居しているのだ。

清明「うん？どうしたの？」

領耶「いえ、今夜清明さんは宴会に行くのかと…」

清明「そうだね…多分まだやってると思うから行こうかな。」  
すると領耶はすぐに清明を呼び止めた。

領耶「すみません、今日の外出はしないことをオススメします。」

清明「何ですか?」

領耶「い、いえ…何がと言われましても…」

清明「無いのでしょうか?大丈夫ですよ♪領耶は心配しすぎなんですよ。それでは、私は宴会に急ぐので留守番をよろしくお願いしますよ?」

そう言つて清明は急いで宴会の方に向かった。

領耶「あつ…!うん…多分勘違いだろう…。」

く真夜中の人里く

清明は一人宴会に向かつて少し急いで歩いていた。

清明「うん…領耶一人で留守番させて大丈夫だったかな?」

領耶はまだ17才だからね。まあ、領耶の靈気は以上だから大丈夫だと思ふけど…それにしても神司に行かないって伝えたから来たらびつくりするかな♪

清明がわくわくしながら歩いてると後ろから誰かの足音が聞こえた。深夜2時に誰か歩いてるのはさすがにおかしすぎる。

晴明は念のためと用意していたお札を手に取り構えた。

晴明「誰かは分らないけど出てきなさい。」

？「バレてるのかよ…ああ良いぜ、出てきてやるよ。」

晴明「貴方は…」

物陰から出てきたのは、グリモワール大魔術書を持った怠惰のベルフェゴールだった。

晴明「何だ…怠惰さんですか。」

怠惰「久しいな…晴明。」

晴明「どうしたのですか？もしかして怠惰さんも宴会に？」

怠惰「宴会か…まだできないもんな…」

晴明「あれ？今日ですよね。」

怠惰「俺は知らないな…」

すると怠惰はニヤリと笑って大鎌を取り出した。

晴明「…えっ？」

すると怠惰は大鎌で晴明の胸を貫いた。そして口から血がポタポタ落ちていた。

晴明「かはっ…」

何、で…体が…熱い…

そして怠惰は大鎌を抜くと晴明の胸に手を当てた。

怠惰「…まだ生きてるな、良かった。」

怠惰は清明の息の根を確認し、そのまま手を突っ込んだ。

清明「くっ…！ああ…！」

そして怠惰は何か魂の玉みたいなのを清明の胸から取り出した。

そのまま清明は気を失ったまま怠惰は立ち去ろうとしていた。

怠惰「…誰か居るんだろ？」

物陰で隠れて清明を助けようとしていたが怠惰は気づいた。

？「……」

ただしその人物は聞こえるふりをしていた。ただし、

怠惰「返事無しか…ならば、コイツの息の根を完全に止めるぜ？」

と言って清明の頭を持って大鎌を突き付けた。

？「止めてくれ、出るから。」

そして物陰から出てきたのは今回の宴会を断ったもう一人、ぬらりひよんだった。

怠惰「ぬらりか…」

ぬらり「だから、離してくれないか…？」

怠惰「別にいいけど。」

怠惰は清明を持ったままぬらりの方に投げ飛ばした。そしてぬらりは清明を上手く

キヤツチしたが、

ぬらり「っ…!!」

怠惰はぬらりの体を大鎌で切り裂いた。

怠惰「妖怪総代将だろ？ 簡単には死なねえよな。」

ぬらり「ぐがっ…!! 怠惰…!! お前…」

怠惰「許せ二人共。」

そしてぬらりにも清明にしたように胸に手を突っ込んだ。

ぬらり「ああ…!! 何で…?」

そのまま清明を持ったままぬらりも気を失い、怠惰は魂の玉みたいなのを手に取り、

暗い空に消えていった。

そして気を失った二人はそのまま冷たくなり息の根が止まった。

## 第73話 俺ができる事

神司「……うん！」

俺は目を覚まして体を起こした。すると上に毛布が掛かっており、隣にサグメも一緒に毛布を被って眠っていた。

神司「よく見たら零愛も一緒に寝てるし。」

サグメに抱きつかれている零愛。少し苦しそうだだったので腕の中から放してサグメの隣に寝かせた。

立って周りを見ると、みんなはまだ寝ていた。

神司「……一度散歩にでも行くか。」

時間は朝の8時だった。少し遅いが朝の散歩を俺は始めた。

少し歩いていると一人の男性が大声で誰かを探していた。

男性「ししよーう!! 晴明様ー!!」

どうやらその男性は晴明を探しているようだった。

神司「晴明がどうかしたのですか？」

思わずその男性に声をかけてしまった。すると男性は、

男性「貴女は誰ですか？」

神司「俺は神司。今は結婚しているから、稀神 神司だ。」

するとその男性は、俺の名前を聞いた途端驚いて、

男性「貴方様が…清明様がよく話して仰っていた神司さんですか。僕は清明様の弟子の平崎 領耶です。」

神司「よろしくな。で領耶、清明がどうしたんだ？」

領耶「はい…それがあの昨夜、清明様は宴会があると出ていったまま帰ってこなくて…」

神司「まで、領耶。」

領耶「はい、どうかしましたか？」

神司「それがだな…昨夜に清明は来ていないし、朝起きても清明の姿は無かったんだ…」

領耶「嘘だ！そんなのはあり得ない…」

領耶が困っているとう男性が急いで走ってきた。

そして領耶を見つけると、

男性「やっと…見つけました、領耶さん！」

領耶「はい？どうしましたか。」

男性「どうしたもこうも無いですよ！貴方の師匠の晴明が血を流して死んでるんですよ！」

神・領「……………」

男性「くそっ！百聞は一見にしかずだ…着いてきて下さい。」

男性は領耶を呼んで走って行った。

領耶「…神司さん…」

神司「ああ、急ごう…。」

俺と領耶はその男性に着いていくと、一つの人だけがあつた。

そして、その中心を俺らが見ると…血だらけの晴明が倒れており、何かを下敷きにしていた。

領耶「晴明…さま…！」

その下敷きにされていたものをよく見ると、見覚えのある顔だった。それは…

神司「…ぬらり…？」

ちよつと待つてくれ…晴明の下敷きにされているのはぬらりだと…

神司「おい…嘘だろ…」

やめてくれ…止めてくれ…！

俺は二人の頭に手を置いて蘇生しようと頑張った。だが、現在俺は邪神王が憑いてい

ないので、蘇生することはできなかつた。

神司「何で…！俺はこんな時に…！何で…！役に立てないんだ…！！」

目から涙が流れた、悔やんだ、心が痛かつた。俺の目の前で友人が二人死んでいるのだ。役に立てないことを俺は酷く苦しんだ。

神司「…すまん領耶…一回帰るよ…」

領耶「はい…わか、りました…」

領耶も泣いているのは判つた、俺も泣いている。だけど俺が泣いている理由は友人が亡くなった他に、助けられなかつた悔しみだつた。

俺はそのまま家に帰つて、布団に埋もれてそのまま大声を出して泣いていた。誰も居ない時に泣きたかつた。そして疲れてそのまま眠つてしまった。

目を覚ますと、サグメが横に居てくれた。サグメは眠つておらず、黙つたまま俺を抱いていた。

神司「サグメ…」

するとサグメは俺に、

サグメ「聞いたよ…ぬらりさんと晴明さん亡くなつたんだよね…。」

どうやらサグメもその事を知つていたようだつた。

神司「誰に聞いた？」

サグメ「文さんだよ。あの人の新聞が外のポストに入っていて、一ページの見出しに大きく書いてあったよ。」

神司「そう…だったのか…」

そのまま布団に入ったから気づかなかった。

神司「…そうか、文さんの新聞入ったのか…」

サグメ「…あのね、私もその見出しを見た瞬間大きな声で泣いちゃったんだよ。」

サグメは笑いながら俺に伝えてくれた。その笑顔は俺の背中を押してくれたような感じだった。そしてサグメは俺の胸で泣いていた。

サグメ「うっ、うう…」

神司「ありがとな…ちよつと行ってくるよ…」

俺は立とうとするとサグメが俺の袖を掴んだ。

サグメ「…ごめん、まだ行かないで…」

神司「…わかった、付き合っただけよ…思う存分泣いてくれ…」

そしてサグメは泣いたまま疲れて眠ってしまった。

俺はサグメに掛け布団を掛けてあげて、ドラとシロに一言言った。

神司「ドラ、シロ。」

ドラ「はい…」

シロ「うん…」

神司「サグメと零愛を頼むぞ。俺は少しぬらりと晴明に会ってくる。」

ドラ「分かりました…！」

シロ「任されたよ…！」

そして俺はドアを開けてすぐにある場所に向かった。

俺が正しければ、まだ冥界に居るか、地獄で閻魔様に裁かれているかの二択だった。俺はまず冥界に飛びたった。

## 第74話 向かう先々

神司「ここか…?」

色々と探して、やっと冥界に行けた。

ルートは雲よりも空よりも高く行けば着くということだ。一度行ったことがあったので雰囲気でわかる、ここは本当に冥界であつてる様だ。

神司「それにしても…こんな長い階段あつたつけない…」

着いたは良いが、着いてすぐ目の前には博麗神社のような階段がそびえていた。

神司「…急ぐか。」

俺は飛んですぐに階段を越えて、久々の場所に降りた。

神司「…一回聞いてみるか…。」

そう、そこは昔お世話になつた場所の幽々子と妖夢がいる白玉楼だった。

俺は三回ノックして、

神司「ごめん下さい。」

? 「はい、何方ですか…?」

誰かはわからないがドアを開けてくれた。

神司「あの…ちよつと用があつて訪ねたのですが…」

女「…あつ！神司さん!」

神司「ん?…妖夢か!」

出てきてくれたのはまさか何年ぶりに会い、大きくなつた姿の妖夢だった。

神司「大きくなつたな!元氣してたか?」

妖夢「はいっ!とても元氣にしています!」

?「どうしたの?妖夢。」

するとまた誰かが出てきたが、その声には聞き覚えがあつた。

神司「幽々子!久しぶり!」

幽々子「神司じゃないの?お久しぶり♪」

そう、何も変わっていない幽々子の姿だった。そして少し話していると妖夢が、

妖夢「そういや神司さん。何か大事な用があると…」

神司「ああ、そうだった。実はな…」

俺は今まで起きた事と殺された魂を探して、殺した犯人を聞き出す二つを二人に伝えた。

幽々子「そうね…今教えてもらった二人の魂は残念だけでもうここには居ないわね。」

神司「そうか…」

妖夢「なら、三途の川に留まっているかもしれないね。」

神司「三途の川か…」

妖夢「あの、行くとしたら橋を渡るのではなく、その川の上を飛んでいきそのまま地獄の裁判所に向かって下さい。」

神司「了解、なら行くよ俺は…」

妖夢「此方からは神司さんが向かったことを地獄に伝えておきますね！」

神司「ありがとな！」

そして俺は急いで三途の川の方まで飛んで行った。

長く飛んでいると、途中から外の雰囲気が変わっていき一つの川が見えた。多分その川が妖夢が言っていた三途の川だろう。

神司「ここなのか…」

俺は下に降りると一人鎌を持った女性が立っていた。

神司「あのー…」

女性「はいはい？…って珍しいね、魂じゃなくて旧い体で来る者は…」

神司「いや、俺は死んだんじゃないよ…」

女性「迷ったのかい？」

神司「いやそうでもなくて…」

女性「はつきり言いなよ。」

何だよ、話そうとしたらあんたがすぐに話すから言うタイミングがなかったんじゃないか。

神司「…俺は、二人の魂を探しにここに来ました。」

女性「なるほどね…それならこの川の右をずーつと行くと四季様の裁判所があるから向かいな。因に私は 小野塚 小町。能力は『距離を操る程度の能力』だから、すぐに行かすよ。ところでその二人に会うのは急用かい？」

神司「そうです。」

小町「りよーかい、それなら…!」

すると小町は鎌を川に出すとすぐ近くに何か城みたいなのが出てきた。多分距離を縮めたのだろう。

神司「ありがとうございます、小町さん。」

小町「良いよ良いよ、あと気軽に小町でいいからね。頑張りな…!」

小町は親指を立ててグーサインした。

そして俺は飛んで裁判所に辿り着けた。

小町「さて戻すかな。」

小町は距離を戻すと近くの岩を枕にして寝始めた。

俺は裁判所の中に入ると一人裁判が始められていた。見ると裁判というより一人の少女が判決しているだけだった。

神司「あれか…」

今のが終わるとその少女は次の魂の名前を呼んだ。

少女「次っ！妖怪総代将　ぬらりひょん!!」

ぬらりの名前が呼ばれた。俺は急いで、

神司「その判決待った！」

するとその少女が俺を睨んだ。その顔には見覚えがあつたが今はぬらりの件のことを話すことにした。

少女「何ですか？貴方にこの判決を決めることは無いでしょう。」

神司「ああ、閻魔様：貴女の言っていることに間違いはありません。ですが俺はその妖怪、ぬらりひょんと人間の陰陽師、安部　晴明に用があつてここまで来たんです。今ここで判決されれば、用があつて来たのに意味がありません。貴女なら判るはずです…」

四季　映姫　様！」

映姫「…！もしかして、いやもしかしてもなく…！」

神司「はい、俺は俺の従者と一緒に貴女に名前を付けた一人、神司です。映姫様、お

久しぶりです。」

「どうやら、映姫は俺のことを思い出してくれたようだ。そして映姫は、

映姫「一時中止します。」

と言つて俺に近づいてくれた。

映姫「神司さん…今まで貴方たちに名前を付けてくれたことを一度も忘れたことはありません。名前を付けて下さりありがとうございます。」

神司「いやいや、その前にぬらりの判決が間に合つて良かった…清明は？」

映姫「大丈夫です。ぬらりひよんさんの次が清明さんだったので…それにしてもなぜ今回はここに？」

神司「実はだな…」

俺は妖夢と幽々子に話したことをそのまま映姫に伝えた。

映姫「なるほど…確かに冥界の方から連絡ありました。了解しました。ぬらりひよんさんと清明さんの判決は後に回しますので今はその話を解決してください。」

と言ひ残し、映姫は判決場に戻つた。

そしてぬらりと清明の魂は、殺された前の姿に戻つた。

## 番外編 救世主

神司は敵だった筈のサリエルと同じ牢屋に入れられて身動きができなかった。

神司「……」

一人黙っている、サリエルが話をしてきた。

サリ「あの……」

神司「……何……」

サリ「君は本当にあのミカエルを倒そうとしているの？」

神司「……敵のお前に話して何になるんだ……俺はただ……」

サリ「ただ……？」

神司「……いや何もないよ。逆に聞くけど、お前は何でここにいるんだよ。」

サリ「それは……！」

そこでサリエルは黙った。

神司「なんだよ……見れば判るけど、お前……あの天使たちにいじめられてるんだろ？」

サリ「……！ ……うん……」

神司「何ならさ、今だけ協力してここから出ないか？」

サリ「…え？」

神司がサリエルにそう言うのとサリエルは驚いた顔して、

サリ「何で…」

神司「何でって…簡単だよ『弱き者は守る』、それが男って言うんだろ。」

サリ「…！判った、君と協力して…」

？「誰と誰が協力だって？」

サリ「はっ…！」

神司「くそっ…！」

牢屋の中には一つ鉄格子がある。そこから一人の神が見ていた。その神は…

サリ「ガブリエル…」

地使いのガブリエルだった。するとガブリエルは少しイラついた顔になり、

カブ「ガブリエル『様』を付けろ！」

と言つて牢屋の壁を壊して入ってきた。すると、牢屋の床を鋭いトゲに変えるとサリ

エルの腕に突き刺した。

サリ「ああっ…！」

カブ「テメエ…僕より階級が下なのに様を付けないのかい？」

ガブリエルはトゲを刺したまま折って、そのトゲを思いきり踏みつけた。

サリ「ああああ…!!」

カブ「痛いだろうな…それが僕からお前へのプレゼントだからね!」

大声で叫ぶとグリグリと踏みつけた。

サリ「あああー!!す…すみません…」

カブ「遅いね。そうだった!壊した壁は直さなきゃね♪」

するとガブリエルは床や壁を直した。だが、壁には腕にトゲが刺さったままのサリエルが吊るされていた。

サリ「痛いよお…」

カブ「ごめんよ、小僧。んじゃ僕はここから…」

神司「…待てよ…」

ガブリエルは出ていこうとすると、神司が止めた。

ガブ「何だよ小僧…僕に文句でもあるのかい…?」

神司「お前…アイツをいじめて楽しいか…?」

するとガブリエルはにつこりと笑って神司の肩に手を置いた。

ガブ「楽しいかね…そうだよ、とつても楽しいよ♪君もされてみたいかい…?」

神司「…断る。」

ガブ「チツ…そうかそうか…なら楽になるような遊びをしてやるよ!」

ガブリエルは床の土を操り、トゲを数本作って神司に向かって攻撃をした。だが……大きな崩れる音をたてて誰かが壁を壊して牢屋に入ってきた。

その衝撃で吊られていたサリエルは下の倒れた。

？「やれやれ、こんなところに居たのか……帰るぞ。」

そこに居たのは口調を変えたオーデインの姿だった。

神司「オー！」

ガブ「貴様は誰だ！」

オー「おっと、すまんな今はこの少年を助けろと主人に言われているのでな。お前を構っている時間は無いのだよ。」

ガブ「何だと……！」

オー「たくつ……小僧と主人は守らねえといけないよな？でこの壁の下敷きになつてる天使は……」

神司「オー、まさかと思うが……いや、今のところは誰かだろ……」

オー「ご名答！現在この体の精神は俺様、邪神王だ！よろしくな小僧！」

ガブ「は……？邪神……王？」

邪王「そうだぜ。あと俺はお前を知っている。四大天使の一人、地使いのガブリエルだろ。」

ガブ「敵であるお前が僕のことを覚えていてくれて有難い…だけど、貴様らはいつまでその牢屋に居るんだ？」

邪王「はあ？」

ガブリエルは手を上に上げると壊した壁の後ろから天使の大軍が現れた。

神司「……」

邪王「はあ…めんどくせえな…」

邪神王はオーデインの体から離れると、オーデインの体を神司に渡した。

神司「えっ…」

邪王「小僧、俺様の合図で下に降りろ。」

神司「えっ、でも…」

下は雲があり、落ちたら落下で死ぬ高さだった。

神司「いや！むりむり!!」

邪王「お前は男だろ？」

関係ないだろ…お前は悪魔で俺は人間なんだぞ…

神司「ふざけるな！俺はお前と違って人間だぞ！」

すると邪神王は…、

邪王「そうだな…ならば、落ちてからのお楽しみだ♪」

邪神王はそう言うと、オーデインを抱えたまま俺の背中を持って空に投げ落とした。

神司「うわああああ!!! ふ・ぎ・け・る・なツツ!!!」

そう叫びながらもオーデインは落とさないように抱えていた。

雲を突き破り地面が見えると下には見覚えがある者が立っていた。

神ノ「オーラーアイ！オーラーイ!!!」

そう、地面に居たのは神ノ邪神だった。

神司「かあーみいーのおー!!!」

神ノ「安心しろ！絶対キャッチしてやるから！」

それはフラグなのか。

そんなことは考えている暇ない。あと数秒で地面に着きそうだった。

神ノ「隕石みてえにはええな。それじゃっ！第二人格『鋼の鎧硬め』……!」

神ノ邪神は自信の体を鉄のように硬くし、防御力を上げて隕石のように落ちてくる神司たちを受け止めた。

神ノ「ツ……! ……はあ……はあ……」

何とか防いだ神ノ邪神。神司もオーデインをゆつくりと地面に置き、深く深呼吸していた。

神ノ「はあ……危なかつたあ……」

神司「はあく…怖かったあ…」  
二人は落ち着いた様子だった。

## 第75話 助けられない。

神司「清明……ぬらり……」

清明「どうしましたか？」

ぬらり「そうだよ、神司。どうしたの？」

どうやら二人は俺がここに来た理由を理解していなかった。それもそうだろう。死んでいる者の場所に生きている俺が来るのはおかしいからな。

だが俺は、誰に殺されたか二人に聞いてみた。

神司「二人は誰かに殺されたのか？」

清明「殺されたね……」

ぬらり「ああ、あつという間にね。」

神司「二人を殺したのは誰なんだ？」

その質問をすると二人は怯えた。特に清明が。

ぬらり「ごめん……神司……それだけは怖くて言えないんだ……」

神司「どういことだ？」

清明「……話しても良いけど……ショックは受けないでね……？」

ぬらり「陰陽師……」

神司「大丈夫なのか？」

晴明は怯えながらも小さく頷いた。

晴明「私たちを殺したのは……！殺したのは……」

晴明は怯えて頭を抑えて苦しんだ。

晴明「ああ……！ああ……」

神司「大丈夫か!？」

ぬらり「神司……アレを見てくれ……」

神司「あれ……?」

俺はぬらりが指出す方向を見ると、

怠惰「どうかしたのか?王よ。」

そこには大鎌を持った怠惰の姿があった。

神司「怠惰か……」

ぬらり「アイツだよ!僕と陰陽師を殺したのは!!」

神司「なっ!?!」

急にぬらりが叫んだ言葉は、怠惰がぬらりと晴明を殺した犯人というのだった。

怠惰「うるさい……」

怠惰はぬらりに向かって大鎌で刈ろうとしていた。すぐに邪楼剣を抜くと俺は邪楼剣で大鎌を止めた。

神司「何の真似だ、怠惰。」

怠惰「黙れ、王。この行為は王の為でもあるんだ。」

俺と怠惰は一度離れて、

神司「俺の友人を殺すのがか？」

怠惰「ああ、そうだ。」

神司「ふざけるな！」

さすがの俺も怒る。人殺しが俺に必要なこと…意味が判らない。

怠惰は俺の言葉にムカついたのか、俺に向かつて走り、大鎌を降り下ろした。

俺はその程度の攻撃は簡単に防げた。当たり前だ。

神司「何の目的なんだ！怠惰!!」

怠惰「…今王に言うことはない…!!」

神司「そんなの言ってみなきや判らないだろ！」

怠惰「それも…!!そうだな…!!」

神司「くっ…!!」

怠惰は邪楼剣を受け飛ばし、俺の横腹にかすり傷を付けた。

神司「…ギリギリだ…。」

横腹の服が少し切れただけで済んで良かった…

そう思っていると、怠惰がすぐに次の攻撃を仕掛けてきた。

怠惰「安心するなら、王の近くにいた魂を狩らせてもらうぜ…」

すると怠惰はぬらりひよんの魂と清明の魂を大鎌で奪い取った。

神司「ぬらり！清明！！」

ぬらり「神司くーん！！」

清明「神司さーん！！」

神司「このっ…！怠惰！！」

怠惰はニヤリと笑うと、

怠惰「じゃあまたな…王よ…」

怠惰は二人の魂をもったままゲートを開いて、入ろうとしていた。

俺は怠惰の服をギリギリ掴めず怠惰には逃げられてしまった。

神司「…ッ！怠惰アアア！！」

心の中は再び悔しさに溢れた。

神司「…」

俺は今、自分の家のドアの前にいる。

助けに行くと言って出てきたのに、友人一人も助けられずに戻ってきてしまったからだ…。

俺はこのドアを開けて良いのか判らずにドアの前で佇んでいた。

このままサグメたちにこの件を伝えて一緒に助けに行くのもあるが、また俺は、助けられて自分は何もできないかもしれない…

？「でも、それが『仲間』という言葉ですよ。」

声をした方向を見ると、綺麗なピンク色の髪の少女がいた。その人物は、昔にぬらりが連れてきた少女、古明地 さとり だった。

神司「…久しぶりだね、さとり。」

さとり「はい、お久しぶりです。」

それにしても俺の考えを読んでいたかのように話しかけてくれたな…

神司「そっか、さとりはあの『覚』なのか。」

心が読める妖怪は一種しかない。

その妖怪こそが『覚』と呼ばれる妖怪だ。

つまりはさとりは妖怪 覚 だから俺の悩んでいた心を読んだわけだ。

神司「さすがさとりだ…俺が心の中で悩んでいて心を読んでもくれるとは…」

そう言うときとりは少し悲しい顔になり、

さとり「嫌でしたか……？」

神司「嫌じゃない。逆に有難い気持ちだ。」

さとり「本当ですか……？」

神司「その能力は君の個性だろ？その個性を嫌がるならばその相手の心は暗くなっているだろ。俺の心はどうだった？」

さとり「……綺麗な透明で黒という色が一色もありません。」

神司「つまりはそういう事だ。さとり、俺は君の能力を嫌ったりはしていない。俺はその能力が好きだね。」

さとりは下を向き、恥ずかしそうに少し顔を赤くした。

今まで嫌われていた彼女の能力だったが、神司のその好きという言葉が初めてだったので少し恥ずかしい気持ちになったのだ。

さとり「神司さんが……それで良いのなら……」

神司「外も何だし、家に入ってくれよ。」

さとり「……えっ？どうしてですか？」

神司「何か用があったからここに来たんだろ？」

さとり「……そうでした。ではお邪魔します。」

神司はドアを開けると玄関にはサグメが待っていた。

サグメ「えっ？ さとりさん？」

神司「ただいまサグメ、さとりとは今ここで会ってき。用があつた様だから家に入れてあげようと思つてね。」

サグメ「そうなのね…」

神司「？ どうしたんだ？ サグメ。」

サグメ「何も無いわよ。」

あのサグメさん、絶対に怒つてるな…

なぜサグメさんは怒っているのか俺には判らない。

さとり「…神司さんはサグメさんへ対してのデリカシーの欠片もないのですか？」

神司「デリカシー？ 俺が？」

さとり「はあ…で？ 私はどこへ？」

神司「えーつと…あそこの部屋に…」

さとり「判りました。」

神司「……」

あれ？ 俺何か悪いことでもした？

鈍感すぎる主人公、神司であつた。

## 第76話 水の神

神司「……」

さとりを部屋へ送り、そのあとさとりはサグメを部屋に呼んだ。サグメがさとりの部屋に入ってから一時間はたった。

神司「…話し合いかな…」

零愛「あく…」

零愛がヨチヨチとはいはいではなく、二足の足で頑張つて歩いていた。

神司「おお！シロ来てくれ！頑張れ！」

近くにシロが居たのでシロを呼んで零愛が歩いている姿を見てもらった。

シロ「わあく！凄いよ零愛ちゃん！」

零愛が歩いている姿をシロは間に合い見ることができた。

多分零愛にとつては初めて歩いたであろう。良い思い出ができたなあ〜♪

零愛「あーあう…うえええ!!」

頑張つて歩いてきたから零愛は転けて泣いてしまった。

神司「零愛！」

シロ「零愛ちゃん！」

ドラ「どうしましたか!？」

俺らの声でドラが駆けつけた。

神司「大丈夫だ、ドラ。大丈夫か？零愛。」

零愛「うっ…うう…」

どうやら零愛は大丈夫そうだ。

俺は、零愛を抱き上げると、安心したかのように寝息をたてて眠ってしまった。

シロ「…小さい時の初歩きは疲れるもんね…」

ドラ「何?!零愛ちゃん歩いたの!？」

神司「うん、だからシロを呼んだんだよ。」

ドラ「神司様…それなら僕も呼んで下さいよ…」

神司「ははは…ごめんな？」

だって、零愛が生まれる前にドラが怖いこと言うんだもん…。

そう言っているとさとりとサグメが部屋から出てきた。

神司「あつ、お帰り。」

さとり「神司さん、貴方も…いや、お子さん抱いたままで良いので皆さん来てくれま

すか？」

神司「どこにだ？」

さとり「自分の家、地霊殿に来て下さい。」

神司「…判った、俺ら一同さとりの家に向かおう。」

さとり「神司さん、私は貴方の心を読まずとも、貴方なら着いてきてくれると思います。」

神司「それにしても何でだ？」

さとり「皆さんに話したい事がいっぱいあるんですよ。例えば…妖怪総代将のこと、人里一の陰陽師とか…大鎌持ちの悪魔の事とか…」

神司「！」

さとりが言っているのは、まさか…怠惰のことなのか…

神司「なるほど、それは気になるな…」

さとり「ですよね。どうですか？」

二人のことも気になるが、怠惰のことは俺の仲間を殺した理由を聞かないと…

神司「了解、改めて俺らは行くよ。」

さとり「心を読むまでもないですね。判りました、着いてきて下さい。」

そして俺らはさとりに着いていつて、さとりの家まで歩いた。俺は零愛を抱えたまま

…

その頃一方、怠惰たちは…

怠惰「……」

ある惑星まで移動してきた怠惰は、大きな魔法陣を床に作っていた。

清明「……怠惰さん…」

怠惰「…なんだ。」

清明「そろそろ、私らを連れてきた目的を教えてくださいませんか？」

少し怠惰は考え、口を開くと…

怠惰「目的か…一つ教えるなら、仲間の姉を生き返らせる為にお前らが必要なんだよ。」

ぬらり「その仲間ってのは…」

怠惰「あとの質問を俺は聞かない。そうだな…俺個人で言うことなら言えるな…お前はあの姉を生き返らせるための『材料？に過ぎない』ということだな。」

晴・ぬら「なっ…!」

突然の告白だった。人、妖怪として生きていた二人にとつては信じられない言葉だった。

どうやら怠惰は一回使命感を持つと何を犠牲にしようが止めないようだった。

清明「嫌だよ……私……!」

ぬらり「ふざけるなよ! お前が死神だとしてもそれは許せないな!」

怠惰「霊体の貴様らに何ができるっていうんだ。」

ぬらり「っ……!」

怠惰「貴様ら、この星から逃げるなよ。俺は少し用があり、出かける。まあ、この星から出ようとしても出れないがな。」

すると怠惰は裂け目を作り、その中に入って行った。

そしてこの星に清明とぬらりひよんの二人だけが残された。

奇妙な音と共に裂け目が開き、怠惰が一つの惑星に着いた。

怠惰「ここには……」

怠惰が見ている目の前には、土の壁とかで造られた牢屋があった。その中には水がいつぱいに入っていたのと、一人の天使が居た。

?「……」

怠惰「……水を操りし冷酷な天使、ラファエルはお前か?」

そう怠惰が問いかけると、牢屋の中にあつた水が徐々に消えていき、牢の中に天使だけが残った。

ラファ「ベルフェゴールか…あの戦い以来だな…」

こいつと戦った記憶がない。確かに神ノ邪神様のおかげで記憶は戻ったが…あいつと会った記憶は本当じゃない。

怠惰「すまんな、俺はお前と戦った記憶はないんだ。」

ラファ「そう、か…」

ラファエルは少し悲しんだように下を向いた。

俺がラファエルを知っているのは王たちと天使軍と戦った時があったからだろ。だがそんな考えている暇などないのだ。

俺はすぐに行動へ移した。

怠惰「ラファエル、俺はお前を倒して、靈魂を回収しなければいけないんだ。だから死んでもらえるか？」

ラファ「おいおい、俺に死ぬと言っているのか？フハハツ…ふざけんな。」

ラファエルは牢屋を水てをブチ壊すと、水のオーラを纏い水の槍を持ち構えた。

俺も魔術書を手に持ち、大鎌を肩の上に掛けた。

怠惰「だろうな。だから俺は『お前を倒して』と言ったのだよ。」

ラファ「ベルフェゴール、お前一人でどう俺を倒すんだ。」

怠惰「簡単だ。目には目を、水には水で反撃するまでだ。」

ラファ「俺に水で越えられるか…？」

怠惰「越えて見せる。そして俺の願いを叶えるまで…だッ！」  
俺はラファエルに向かって攻撃を仕掛け始めた。

## 第77話 悪魔凶鑑

自分の家からとても歩き、一つの洞窟の様なところに着いた。

さとり「この奥です。」

洞窟の前には扉があった。そして扉の前に門番の少女が立っていた。

少女「あつ、さとり様。」

さとり「開けてもらっても良いですか？」

少女「はい、お客様ですね。ごゆっくり。」

俺らはその少女に一例して中に入った。

そこは、本当に洞窟みたいだったが、明かりは付いていた。だが、

シロ「暑いよおく……」

そう、とてつもなく暑いのだ。

神司「零愛は大丈夫か……？」

零愛を見ると汗はかいているがキヤツキヤツと笑っていた。

神司「笑ってるなあ……」

サグメ「そうだね……」

さとり「…『みんなが疲れているのが面白い』だそうですね。」  
神司「あ、なるほど…」

「零愛、お前も暑いはずだろ」とは言わない。まだ言葉が分からない赤ん坊だからな。それにしてもとてつもなく暑い。

さとり「そりやあ、ここが一番灼熱地獄に近いですから。」

神司「え？さとり、今何て？」

さとり「だから、ここは灼熱地獄の近くなんですよ。」

そりや暑いわ…というか灼熱地獄に近いのならここは地獄に繋がっているんだな。

ここに歩いて歩いてから約十分がたつと一つの大きな宿みたいな家が見えてきた。

さとり「皆さん着きました、ここです。」

まさかのこの宿のような家がさとりの家、地霊殿らしい。紅魔館よりは小さいが豪邸といえは豪邸だ。

神司「はっ…！」

さとりを見ると、彼女は不満そうな顔をしていた。多分、紅魔館と地霊殿を比べられたからだろう。

俺は彼女に謝った。

神司「ごめんさとり！悪気は無いんだ！」

さとり「…どうせ、あの館より私の家なんてもちつぽけな家なんですよ。」

サグメ「何か悪いことを神司は考えてたの？」

さとり「いいえ？神司さんは何も思つてませんし、悪いこととしてませんよ？ただ…」

サグメ「ただ？」

さとり「私をどう甚振ろうと考えていたそうですが…」

下を向いて泣き真似をし始めるさとり。ただ、下を向いた時にニヤリ笑っていた。

サグメ「神司さん！」

神司「違うよ！そんなことは思つてないし…」

さとりの奴く！倍返しして来やがった。汚してしまつたのなら謝るよ、さとり。

さとり「…判りましたよ、そろそろ入りましょう皆さん。」

サグメ「は、はい。」

神司「…良かった…。」

さすがのさとりさん…サグメさんだけには言わないでくれよ…

そして俺たちは地霊殿の中に入った。

その中に入ると猫耳と猫の尻尾が生えている女性が出てきた。

女性「お客様ですかさとり様。」

さとり「お隣、この方たちを客間にお連れしてください。」

お隣「わかりました、こちらです。」

俺らはお隣と呼ばれている女性に着いていき、客間に入った。

神司「中は普通に和室だな。」

そう、さとのりの家の客間は普通に和室であった。

さとり「まあ、客間ですからね。」

さとりとお隣が入ってきて、お隣は、人数分のお茶を持ってきてくれた。

神司「ありがとうございます、お隣。」

お隣「うんにや、貴方たちはさとり様の大事なお客様ですにや。おもてなしは普通するにやよ。まあ、あとはごゆっくりにや。」

お隣は一礼すると部屋の外に出て戸を閉めた。

さて、ここからが本当に來た理由の本題に入る。

神司「で、さとり。『大鎌を持った悪魔』ってのはどういうことだ？」

さとり「まずはこれを読んで下さい。」

さとりは一冊の本みたいなものを取り出した。その本のタイトルは…、

神司「…『Δ？βολο☒ κυρηνγητ？』…？」

さとり「通訳すると、『追跡する悪魔』…ですが、作者を見てください。」

題名の下に作者が書いてあった。その字は、日本語で書いてあった。その作者は…、

神司「“ソロモン？ …ソロモンだど!?”」

俺は一ページめくると、この本の説明も書いてあった。

『一応記しておく。私は、ソロモン、ソロモン王だ。私は能力を持っており、【星から星へ移動ができる】能力らしいのだ。』

この能力を利用し、色々な悪魔や墮天使などを記していく。あと、もしも地球という星で私に似た人物が居たらそれは私ではなく、私のふりをしている“バエル?”という悪魔、我が“ソロモン72柱?”の一人だ。私は地球には行かない。地球には、私の友が調査しているのぞな。

次に、私が初めて見る悪魔だったら、書に記して、新しいページとして更新されていく。

次のページから悪魔などの説明に入ろう。私は、悪魔の特徴を描く。ちゃんと描けているので安心して読んでくれ。』

と書いてあった。

神司「……」

ペラペラとページをめくり、色々確認していく。

「大悪魔邪神王」、「七つの大罪」…そして、「神ノ邪神」の事も書いてあった。しかも…、

神司「…これは……!」

「七つの大罪を率いる神ノ邪神『ではない』人物 VS 四大天使 & 下級天使たちの死闘」

これはまさしく、俺が姉を殺されたミカエルに復讐するときの出来事だ。

またページをめくると、怠惰の説明に目が止まった。

「ベルフェゴール、現在は『怠惰』。今回、奴は禁忌に手をかけようとしている。

多分、王の姉の死をこの書で知ったのだろう。それで王の姉を生き返らせるために必要な物を集めているらしい。

必要な物は四つ。強い霊の魂と強い妖怪の魂、強い魔族の魂、そして強い神の魂の四つだ。これで死者蘇生はできる。

P.S. もしも怠惰がこの書を読んでいるのなら、この書に記してしまったことを謝る。すまなかった。」

神司「……」

「ソロモン王、謝るなら俺の姉の事を無断で書いたことも謝れ」、脳内でそう言いながら、次のページをめくった。すると、俺の事も書いてあった。少し読んでみると、

「神ノ邪神に認められている一人。自称邪神と名乗っている。」

神司「デマだ！」

“自称邪神??俺は邪神じゃなくて”元?人間だ。

やっぱり書であってデマも流すのか。

サグメ「どうしたの？」

神司「デマだよ…ソロモン王の奴、俺の説明文にデマを書きやがった…」

「はあ…」と一回ため息をつく、その書をそつと閉じた。  
書はさとりに戻した。

神司「ありがとう、さとり。」

さとり「いえ、読めたのなら結構です。あとその書物は貴方にあげます。」

神司「えっ、でもそれは…」

さとりは俺に書物を差し出すと、それを茶舞台に置いた。

神司「どういうこと何だ？」

さとり「…私は本など書物を読んでいます…ですがこれは、私が持っているはいけな  
い気がするんです。」

神司「だからって俺に押し付けるか？」

さとり「いえ、その書物は私ではないので。」

神司「えっ？」

今、なんて言ったんだ？私のじゃない？んじや誰の…

さとり「この書物は、あの人から貰いました。」

神司「ある人？」

さとり「はい…その人は怠惰さんなんです。」

神司「怠惰!?!」

なるほど、そこで繋がるのか…

俺はさとりの話を詳しく聞こうとした。

さとり「はい、最初は驚きました。あの怠惰さんがボロボロで家の前で倒れてましたので…」

そう言うってからさとりは、怠惰の心から流れた記憶を話始めた。

## 第78話 怠惰 ベルフェゴール

あの怠惰さんの記憶は…一人の天使との死闘でした。

怠惰「残斬『残刃激』!!」

まず怠惰さんは、大鎌の刃をを鋭く尖らせて天使の体を切り裂こうとしました。ですが…、

ラファ「水路『水道管』…」

怠惰「くはっ…」

怠惰さんの足に一本の水の線がつき抜けて、バランスを崩しました。

続けてその天使は、その水の線を怠惰さんの体の周り飛ばして、

ラファ「フハハハッ！弱い怠惰！この程度なのか？」

天使は手を前に突きだし、握り締めると、その水の線が怠惰さんの体に数本も突き刺しました。

怠惰「ぐがあ…っ…！『刈り憂怒』…ッ！」

怠惰さんは大鎌を大きく横に一度振りました。そして数本の斬撃を天使にヒットさせた。私？からは見えませんでした。でも…、

ラファ「遅いね？怠惰の墮天使?？」

天使は、水で作った刃で怠惰さんの背中を切り裂きました。

それで怠惰さんは下に倒れて、

怠惰「クソツ：!!」

ラファ「諦めな、お前は俺には勝てない。」

怠惰「…うるせえ…！その逆さ…ラファエル…お前は、俺『ら』には勝てない…。」

◆

神司「ラファエルと言ったのか？怠惰は。」

さとり「はい、そう怠惰さんの記憶にはありました。」

ラファエル「お前はまだ、生きていたんだな…」

強い妖怪の魂（＝ぬらりひょん）と強い人間の魂（＝安倍 晴明）は怠惰が持つてい

る…。次に怠惰が狙っているのは、強い天使・神の魂か…。

神司「判った、それじゃあ続きを頼む。」

さとり「わかりました…」

◆

ラファ「俺らだと…!？」

サキ「はい、そうですよ？」

ラファエルの後ろに居たのは、綺麗な黒い髪で露出が多い服を着た悪魔が立っていました。

ラファ「何だお前は!？」

サキ「私はサキキュバスのサキ♪怠惰様の使い魔です。」

ラファ「つ、使い魔……！」

サキは、右手を上げると、につこりと笑い、

サキ「よくもまあ、怠惰様を虐めてくれましたね…次は私の番ですよ……！」

ラファ「チツ……!どうせお前は!ベルフェゴールよりも弱い筈だ!」

サキ「怠惰様は、少し休んで下さい。」

怠惰「ああ、そうさせてもらう。」

怠惰さんは、大の字で倒れて一度仮眠を取ってそうでした。

サキはラファエルに向かって右手で攻撃し続けていました。

サキ「はああー!!」

ラファ「それだけか?サキキュバス?」

サキ「そんなこと言ってるのも今のうちですよ!私の能力を知ったら驚きますからね

!

ラファ「そうかよ!水刃『エルスラッシュ』!」

ラファエルは、水で作った刃でサキに攻撃をしました。ですが、サキは軽々と避けま  
して、

サキ「遅いですね！そんなので良く、怠惰様を圧倒しましたね！」（まあ、怠惰様の事  
だから『わざと』本気で戦わなかったのでしょうけど……でも私一人だけじゃ、こんな  
神を倒すだけでも精一杯……）

ラファ「どうした??結構辛そうな顔だぞサキユバス？」

サキ「き、気のせいですよ……」

サキは明らかにラファエルとの死闘に苦戦していた。そりやあ、サキは悪魔でラファ  
エルは神に属する天使だ。

サキがラファエルと戦っている事だけでも凄い事なのだ。

ラファ「ふくん…ならばそろそろ終わらせるかな。」

ラファエルは両手をサキに向けると、

ラファ「神海『シン・リヴァイ』ッ！」

ラファエルは、大きな海の渦を飛ばした。するとその渦は龍の形に変化し、サキの体  
にガブリと噛んで通り過ぎた。

サキ「きゃああ!!」

ラファ「お前の力と俺の力には天と地の差があるんだよ。死にな……」

冷徹な言葉をサキ贈るラファエル。サキは負けることを認めていた。

サキ「しようがないですよ…私がこんな神に勝てる訳ない…」

ラファ「だろうな。」

サキ「ですけどそれは…私だからですね！」

ラファ「何だと？」

サキは何かに満足して地面に倒れた。

サキ「…後は任せましたよ…我が主…。」

怠惰「ああ…！任せろサキ！邪鎌『邪牢鎌刃』！」

起きた怠惰さんは、もうラファエルの後ろにおり、大鎌の刃を牢屋の様な形状に裂かせてラファエルを囲んだ。

怠惰「どうだ？ラファエル。そのまま魂を取るかな…逃げようとしても無駄だぞ？」

ラファ「ああ…そうだな…確かにここからは逃げられないっばいな…」

ラファエルは、鎌でできた牢屋の柵をトントンと叩いていた。

怠惰「そのまま縮小してお前を潰す。」

怠惰は、左手を握りしめると牢は急速に縮小した。するとラファエルはその牢の一瞬のすきまをすり抜けて外に出てきた。

怠惰「なっ…！」

ラファ「俺はな？水を操る能力なんだぜ？勿論能力を特訓すりや俺自身の体だって水に変化出来るのさア。」

怠惰「そんな特訓を何時…まさか…！」

ラファエルはニヤリと笑うと…、

ラファ「そうだよ！こんな狭い牢屋に何百年も居りやそういう技も出来るわなア!!」

ラファエルは自身の腕を長い刃に変えて怠惰の体を横に斬ろうとした。

怠惰は少し驚いていたのでラファエルの攻撃をすぐには対処できない状態だった。

怠惰「クソツ…！」

急いで鎌の持ち棒で防ごうとするが、持ち棒はただの木の棒だ。防いだとしても斬つてそのまま来るに違いない。

怠惰が覚悟を決めると怠惰が斬られた音ではない鈍い音になった。

ラファ「なんだとオ!!」

怠惰「サキ!？」

鈍い音の出たところは、サキが怠惰とラファエルの間に入り、怠惰の代わりに斬られたのだった。

そしてそのまま倒れるサキ。

怠惰「っ…!はあ！」

一度大鎌で近くにいたラファエルを切りつけた。

ラファエルはうわつと言つて地面に倒れた。

そしてすぐに怠惰はサキのもとへ向かった。

怠惰「サキ！」

サキ「怠惰……さま……」

血だらけになつて倒れているサキ。まだ息はしており喋りもできていたが、呼吸は荒い。

怠惰「待つてろよ、今から助けるから……」

サキ「いえ……助けはいりません……」

ハツとして気づく。サキは怠惰と同じく不死で死なないことに。

怠惰「ははは……そうだよそうだよな！サキは俺と同じ不死だよな！」

なんとか悲しみを笑いで誤魔化そうとする怠惰。今の言葉も涙を浮かべながらのこ  
とだ。

サキは主の袖を持ち泣きながら頼んだ。

サキ「怠惰様ツ!!」

怠惰「！」

サキ「もうすぐ私は死ぬんです……！それならば……もうすぐ死ぬのならば……！最後に貴

方の役にたつて死にたいです……」

怠惰は理解した。これはサキの魂を主に渡すということなのだ……

怠惰「サキ……！」

サキ「早く……しない……！」

怠惰「できない……！」

そうしている内にラファエルが立ち上がり怠惰の後ろまで走ってきた。

そのまま左手を水の刃に変えて振り落とした。が、

ラファ「なっ……!!?」

怠惰は既に大鎌を刀に変えて受け止めていた。視点はサキの胸に手を差しこんで魔力の魂を持ったままにして。

怠惰はその靈魂を他の靈魂がある場所にワープゾーンを開きそこへ放した。そしてゾーンを閉じるとゆっくり立ち上がり、

怠惰「はあ……これで邪魔者は居なくなつた……！」

怠惰はラファエルを睨んだ。その顔は涙を流しながらの睨みだった。

怠惰「テメエを殺して……サキの思いを叶えて……俺の目標を達してみせる!!」

怠惰は刀を持ち構えるとラファエルに攻撃を仕掛けた。



さとり「…とここまでしか読み取れませんでした…。」

神司「……」

サキが死んだのか…主人の言うことは絶対に守り、仲間思いで優しいあのサキが死んだのか…

多分だが、サキを一番思っていた怠惰ことだ最後の最後までサキを見届けただろう…俺は、さとりに現在怠惰がどこに居るのか聞くことにした。

神司「今怠惰がいるところはどこか分かるか？」

さとりはコクリと頷くと、

さとり「分かります、ですがあの怠惰さんが止めれるかは分かりません。」

神司「どういうことだ？」

さとりは、少し暗い顔になるとついてきて下さいと言って、俺たちは、ある襖がある部屋に来た。

神司「ここは…?」

さとり「…この部屋の中に怠惰さんが居ます…ですが現在暴走しているので今は結界を張ってあります。」

ドラ「どういうことですか?さとりさん。」

さとり「ツ…すみません、ドラさん…あの怠惰さんを止めるにはこうするしか…」

俺はその震えたさとり声を聞きながらも、怠惰が居る部屋の襖に手を掛けた。するとサグメが俺の腕を掴んだ。

サグメ「神司、死ぬことは許しませんよ……？」

神司「大丈夫だよ、サグメ。俺は死なないからよ。」

サグメ「神司……」

俺は改めて襖に手を掛けると、

ドラ「神司様！」

次はドラが俺に声を掛けた。

神司「何だ？ドラ。」

ドラ「……俺とシロも行かせて下さい。」

神司「なぜだ？」

シロ「私もお兄ちゃんもサキちゃんに助けてもらったし、怠惰さんに改めて礼を言いたい。だから……！」

そっか……月での鬨いでドラとシロは怠惰とサキに助けてもらっていたのか……

神司「判った、ついて来いよ。だけどアシストでな。」

ドラ「分かりました。」

シロ「私は嫌だよ。」

ドラ「シロ！」

神司「何に嫌なんだ？」

シロ「アシストのこと、私だって本気で怠惰さんを止めようと思ってるんだもん。マスターにはごめんだけどさすがにその言葉には従えないよ。」

ドラ「…それを言われるとシロに同意だな…。」

まさかあの天然バカのシロがここまで考えているなんて…確かにシロも本気で怠惰のことを思っているらしい。それならそれ相当のことをしてくれなきゃな。

神司「判った、言うことを変えるよ…ドラとシロに命令だツ！暴走している怠惰を全身全霊で止めろ！ただし怠惰を気絶させることを目的で！殺すな！自分自身を死守し、不死ではない俺を死守しろ！俺は勿論だが自分が死なない様に怠惰を止める。まあ、簡単に俺は死なないがな♪んじや行くぞ…！」

ドラ・シロ「はいッ!!」

そして俺たちは襖を開けて結界の中に入って襖を閉じた。

正面を見ると、怠惰は怠惰でも怪物、化物がそこには暴れていた。

## 第79話 VS暴走怠惰たち

怠惰「グギャアアアア!!!」

神司「ッ…!!」

シロ「痛いよおろ!!」

ドラ「くっ…!!」

怠惰の大きな咆哮に耳を防ぐ俺たち。

だが怯むことなく怠惰に呼び掛ける。

神司「怠惰ア!!」

怠惰は俺に気づくと両手の指を刃に変えて襲いかかってきた。

神司「聞く耳無しかよ…ッ!」

すぐに邪楼剣を構えて防ぐが怠惰の力の方が上で押し負けそうになった。

ところが怠惰が吹っ飛ぶのが見え、その近くには雷炎を持って怠惰を斬る姿が見えた。

神司「ありがとう、ドラ。」

ドラ「神司様が危険に見えたので助けに参りました。」

さすがは従者の一人だ、主の命令に従っただけだが、ナイスだ。

だが、飛ばしただけなのでまだ怠惰を倒してはいない。

怠惰「グルルル…ガアアア…!!」

怠惰は自身の爪の刀を切り落とすと、新しく生えてきて形は鎌状に変化した。次に怠惰は、床に魔法陣を展開すると

頭と体が刃の異形やフードを被り、両手が大砲の形をした異形が召喚された。

シロ「何アレ…？気持ち悪い…」

神司「多分、どっかの異世界から召喚したな…怠惰の野郎…」

ドラ「それにしても本当に気持ち悪いな…」

怠惰が右手を俺らの方に向けると、その異形たちは気持ち悪い走り方で走ってきた。

今、俺らが言えることは…

三人「「気持ち悪っ!!」」

そうただただ気持ち悪いのだ。あんな化物＋異形二匹なんておかしいだろ…しかも気持ち悪い走り方＋気持ち悪い異形×2とは恐ろしい。

刃「……!」

刃の異形は、ドラの方へ向かい片手の刃を振り落とす。すぐにドラは雷炎で受け止めたが、

ドラ「っ……!!」

刃の異形の体からとは思えない力がドラを潰していた。

ドラ「ぐわっ……!!」

あり得ない力でドラを押し潰す刃の異形。

ドラ「くそっ……!!こんな奴にやられてなど……!雷斬『雷一文字』ッ!」

刃「……!!」

ドラは一度、刃の異形を退かすために雷炎を鞘に入れてから斬ろうとした。刃の異形に乗られたままでも上手く入れれたが、刃の異形はその腕を止めた。

ドラ「えっ……」

そして刃の異形はドラを上にとげると、壁に思いきり投げつけた。

ドラ「がはっ……!!」

勢いよく壁に叩きつけられたドラは下に落ちて倒れた。

刃の異形はトドメを指そうとするとその間に神司が来た。

ドラ「神司……様……」

神司「大丈夫か?ドラ……」

ドラ「はい……なんとか……」

神司「一回休んでろ。後は俺が殺る。」

やる気を出した俺は、刃の異形の方へ振り向くと、そこには刃の異形と暴走した怠惰が歩いて来ていた。

暴走した怠惰と刃の異形の二体を俺が対処できるのかか……いや、対処しなければいけないのだ。

ドラは心と体は強い子な筈だ。そしてどう倒すか、ここはどうするかという洞察力と観察力も持ち備えている。そのドラをあの手で刃の異形は倒したのだ。これは……苦戦するに違いない。

俺はまず、刃を数千本空中に浮かせて、神剣『千本刃』を使用した。

怠惰は不死だから刺さって大丈夫だろうが、刃の異形は体が“細い？”のと、体が“刃？”ということから、そして声も出さないので攻撃が効いているのかわからない。

神司「くそつたれ……！アイツら攻撃効いてんのかよ!？」

暴走した怠惰が刃が刺さっているにも関わらず俺に向かって走ってきた。上に跳び掛かって鎌のような爪で襲ってきた。

俺はその攻撃を邪楼剣で受け止めるが、続いて刃の異形も連続で攻撃してきた。

まるで二人はコンビのかのように素早い攻撃をしてきた。

神司「くそつ……!!」

受けるのだけでも精一杯だ……ドラはまだ休んでるし、シロは大砲の異形と撃ち合いを

している……そうか！その戦いに協力してもらえば良いんだ！！

俺はシロに伝心を通じて一回話した。すると、

シロ『了解だよマスター。ちようど自分もキツかったしね。』

了承してくれた。どうやらシロも苦戦していた様だった。

んじゃ、作戦開始にしますかね！

神司「とりゃあ！」

一度足で二人を蹴り飛ばし、この部屋をグルグルと回った。

グルグルと走っていると、ドラから伝心が繋がった。

神司『ドラ、大丈夫なのか？』

ドラ『その周辺を駆け回るのなら自分にお任せ下さいよ！』

確かにな……足の速さなら俺よりもドラの方が速いもんなあ……

俺はドラにその役目を説明し、ドラにバトンタッチした。

ドラ「おいおいお前ら！俺が復活したぞ！！かかつてこいよ！炎符『ハイ・フレイム』！！」

暴走した怠惰と刃の異形を煽り雷炎で攻撃するドラ。

もちろん避けた。煽られた二人は俺からドラに敵を変えて向かって行った。

よしと、後は最後の出番までだな。

ドラ「こつちだぜ！雷符『ウエイトサンダー』！」

雷炎から出てくる雷を飛ばすドラ。勿論避けられるので、一回雷炎をしまうと、ドラ『雷速』!!』

足に雷をつけて部屋中を走り回る。ただし、追いかけてくる二人もやはり速い。

ドラ（くそっ……！これじゃあ……すぐに追い付かれる……！）

神司「邪脚『ブラッドストーム』！」

怠惰・刃「……!!」

追い込まれていたドラから一度俺の方に引き寄せた。怠惰は暴走してても理解はしていた様だが、刃の異形は理解していないように首を左右に振っていた。

神司「来いよ……怠惰。」

怠惰に右手で「来いよ」とサインすると、真っ直ぐに俺を襲いに来た。

刃の異形はすぐにドラの方に走って行った。

また最初からだ。だがこの作戦は必ず成功する……筈だ。

神司「邪刀『鬼神斬』ツ!!」

邪楼剣を構えると刃の色が桜色から赤色に光った。近づいてくる怠惰を斬ると、神々しく赤く燃えて怠惰の左腕を下から斬った。

こんなに光を放つことは初めてだ。亜無と戦った時はこんな赤く光を放つことはなかった。

神司「うおおお!!」

今は考えても仕方がないと思いつつ、怠惰のもう片腕を切り落とす。

怠惰「グギャアア!!」

両方の腕を切り落とされて叫ぶ怠惰。

神司「ごめん…怠惰…ッ!」

一度邪桜剣を仕舞って、

神司「桜符『風舞桜』……!」

邪桜剣を抜いて風を斬る様に上に上げる。すると桜色の大きな竜巻ができて怠惰を巻き込み、この部屋中に切り傷がたくさんできた。

竜巻が消えると怠惰は元の姿に戻って気絶していた。

さて後は、二人の異形の処理だけだ。

ドラ「はあああ!!」

刃「…!」

上にジャンプして下に思いきり落とす刃の異形。それを上手く避けたがまだコイツの速さには追い付けない。

あの細い体のどこから、あんなに素早い動きができるのか不思議でたまらない…

ドラ「いやいや、今はそんな考えるh…」

ストーン…

ドラ「はア〜ア？」

はあ？何が起きたんだ？何故目線が『床の畳でアイツの足が見える』んだ？

刃「グルユウウ〜!!」

変な声と共に何かを刺す音が聞こえた。

何を刺したんだ…：…というか俺はなんで『ここから動けない』んだ…：…？

砂煙と共に落ちた何かが消えて、刃の異形が刺している『ナニか』から頭が生産された。

気がつくと刃の異形が、俺の体をめちやくちやに刺していた。

ドラ「いてえよ!!雷炎符『サンダー・フレイム』!!」

雷炎で刃の異形に雷を落とし、炎で斬った。すると刃の異形は吹っ飛んだ。そしてすぐに体の傷を治すが、

ドラ（さっきの夢…？なのか…結構リアルだったな…：…というか体が重い…）

刃の異形は起き上がると、自身の体の刃を何か禍々しい気を放ちドラに襲ってきた。すぐに察した。これはヤバイ…!!

ドラ「ツ…！」

ギリギリで避けたが、壁に当たり何か割れる音がした。

ドラ「おいおい!?まさか……!」

今まで張つてあつたさとりさんの結界が無くなっていることが分かる。つまり、あの異形は俺丸ごと結界を斬るつもりだったのか……。

すぐに神司様に伝心を繋げる。

ドラ『神司様!』

神司『何なんだ?あの音は……』

ドラ『先程、刃の異形が何か禍々しい気を放ちまして、その攻撃で多分さとりさんの結界が壊れたのだと思います。』

神司『マジかよ……今からそちらへ向かうから待つてろ!』

ドラ『はい!』

ヤバイよな……結界が壊されるのは予想外だ。しかもあの刃の異形がだと……

駆けつけると、それはもう……遅かった。

神司「……!」

ドラは刃の異形の禍々しい攻撃によつて量腕を無くして再生ができなくなっていた。

## 第80話 相棒の大事さ

神司「ドラー!!」

ドラにトドメを差そうと腕を上にも上げる刃の異形。間に合う気がしない……  
…そう思っていると、俺の背中から暖かく強い風が吹いた。

神司「シロ……!」

シロ「マスター! お兄ちゃんは任せたからね!」

神司「シロは負けんなよ!! 行くぜ…邪剣『ソウルフレア』!!」

黒い炎を邪楼剣に燃やして刃の異形に切りかかった。

一方シロフォン・マレット VS 大砲の異形は…、

シロ「はあ…はあ…」

こんなの…無理だよ…

シロは一本の水鉄砲一本に対し、大砲の異形は両方の腕に大砲を着けている。そして足も大砲で浮いて攻撃をしてくる。

シロ「…ていうか…飛んでくるのだよね…」

大砲の異形は、シロの方に飛んできて両手の大砲で打った。

一発は避けきれてももう一発は避けきれない。

シロ（助けてよお：マスター…）

マスターはお兄ちゃんの方で戦ってるんだった…私は…不死だけど…これじゃあ…力尽きて倒れるシロ。大砲の異形は、片手の大砲から手を出すとシロを掴み、大きな異空間に繋がる口を開けてシロを投げ込もうとしていた。だが光がシロを掴み食べられるのを免れた。

ドラだ。ドラがシロを掴んで雷炎を構えた。

ドラ「……ざけんなよ……」

大砲「？」

ドラ「シロを食べようとしていたのか…？ざけんなよ!!『雷陣炎武』!!」

大砲の異形の下に雷の陣を床に展開すると炎の鉄骨が出てきた。

ドラ「縮小。」

ドラが小さく囁くとその牢は縮小し、大砲の異形を貫いた。

だが大砲の異形は、何の痛みも感じないのかドラの方へ飛んで来てぶつかるとぶつからないギリギリのところ止まって、ドラの顔面に黒々しい色のレーザーを放った。

ドラ「…かはっ…!」

もろに食らったドラは、床に倒れて気絶した。

そして、現在神司は…

神司「っ…！くっ…！」

刃の異形と戦闘中だった。

刃の異形はドラを斬った時の黒々い刃で神司を殺そうとしていた。感情は読めないが殺気を感じるのだから。

ドラとシロを確認しようとするが、刃の異形が攻撃を仕掛けるので確認する暇がない。

一度遠く下がると何か布みたいなのを踏んだ。確認すると、気絶したドラとシロだった。

神司「なっ…！ドラ…シロ!!」

神司はドラとシロの生命確認すると息はあった。良かった。

すると近くに二つの影が床に映った。それは刃の異形と大砲の異形だった。

俺は二人を守るかのように両手を広げて、

神司「殺させねえよ…ドラとシロは絶対…!!」

くとある魔界く

邪神「……」

麻雀をしていた悪魔や邪神たち。一人の邪神が手を止めて上を向いた。

悪魔「…急にどうしたんだ？」

邪神「いや、何か懐かしい記憶が急にさ…」

悪魔「ほくん…それは昔の記憶、前世ではありませんか？」

邪神「前世…」

悪魔に言われて誰かと共に戦った記憶が甦る。

そして急に頭痛が激しくなった。

邪神「ああ…!!アアアア…!!」

頭を抱える邪神。

そうだ…俺は…!!

頭痛が治まると急に立ち上がった。

悪魔「どうした？」

邪神「…俺は邪神王だ。アイツに憑依して、ついでに良き戦友、相棒。行かなくちやな…!」

背中に黒い翼を生やすとワープゾーンを開き飛んでいこうとした。すると何か大きな壁に飛ばされた。

邪王「ぐがっ…!!テメエ…!!!」

悪魔「まったく…世話をかかるなあ…」

すると麻雀をしていた悪魔たちは霧状に消えて一人異様な悪魔が現れた。

邪神王はそいつを睨むと、

邪王「大悪魔邪神王…!!!」

邪神、悪魔や墮天使の産みの親の大悪魔邪神王（キラティナ）は、神ノ邪神以外の悪魔たちを産んだ張本人。

神ノ邪神は、あの時神司から無理矢理引き剥がすと大悪魔邪神王のいる魔界へ飛ばしたのだった。

邪王「どけよ親父!!急がなきゃいけねえだよ俺は!!」

キラ「どこニだよ。」

邪王「相棒の元にだ。」

キラティナは少し考えると、

キラ「まあいいよ。ダケドねえ…もうここに一生来んナヨ?」

邪王「当たり前だろ。」

邪神王は開いたままのワープホールに入り、相棒の元へ向かった。

そして場面は戻り、神司たちは…、

神司「神劍『千本刃』ツ!!」

空中に数千本の刃を浮かせて二人の異形に飛ばす。が、一切効いているようには見えない。

神司「何なんだよ……こいつら……」

本当に怠惰は余計な物を召喚してくれたもんだ……っていうか、普通の人間に戻ってから……いや、邪神王が居なくなつてから俺はギリギリのところまで戦っている。今だつてそうだ。邪神王が居たときは、従者をすぐに守りに行けた。だが今はこの様だ。従者……家族一人も守れない……

神司「……俺つて本当は……こんなに弱かつたんだ……。」

思わず体の力が抜けてしまい、膝を着いてしまう。

もう、負けたんだよな……

? 『たくよ、やつと来れたと思えばこの様か? 神司。』

この声は……心の中からだ……しかも聞いた覚えがある声……

神司「まさか……お前……」

? 『交代……いや、共に戦うぞ! だ、相棒!!』

間違いない。この声はアイツだ。

神司「おせえよ……! ……早く出てこいよ……!!」

目から涙が自然と出てくる。俺は相棒を呼んで外に出させた。

？「死ぬんじやねーぞ？わざわざ体と心の傷を治したのだから。」

神司「死なねえよ！行くぜ邪神王!!」

邪王「おうよ!!」

ここからが本番だ。頼もしい助っ人が来てくれたもんだ。そして俺と邪神王は邪楼剣と刀を構えて二人の異形に向かって再び攻撃を仕掛けた。

## 第81話 仲間たち VS 異形

邪王「神司、お前は刃の方を任せたぞ。」

神司「了解、邪神王は大砲の異形を頼むぞ！」

邪王「安心しろ、死なねえから。邪砲『プリズムブラスト』！」

大砲「!!」

危険を感じたのか大砲の異形は遠くへ離れて両手を邪神王に向けた。だが、もうそこには邪神王の姿はなかった。

邪王「おらよ！」

もう既に、大砲の異形の真下において片手に邪気を纏い、大砲の異形の顎を思いきり突いた。

するとこの部屋の屋根をつき抜けて、そのまま洞窟の穴まで破って外まで飛ばした。

邪王「おっと、外まではマズイな…」

邪神王は、ワープゾーンを開いて大砲の異形の足を引っ張りこの部屋の床に叩きつけた。

大砲「!!?」

この一瞬で何が起きたか全く理解してない大砲の異形。それでも邪神王は下へ押し潰す。

邪王「知ってんだよ…お前ら『魔神』は、能力や魔力や霊力では攻撃しても効かないことをなあく…ゆういつお前らに攻撃できるのは…」

大砲の異形の頭を持ち上げ腹に膝蹴りを食らわす邪神王。

邪王「武力だよなあ!!」

一方、魔神への攻撃手段が未だに気づいていない神司は、

神司「神符『プラズムゴッド』!!」

どうやらまだ気づいてないようだ。

神司「くそつたれ…! 本当に何で効かないんだよ!」

? 「バーカ、コイツらは魔神だよ。覚えているか? 我が王よ。」

神司「起きたのか…怠惰。」

やっとこの面倒くさいことを始めてきた主犯者のお目覚めですか。

大鎌を持つて怠惰は俺に近づいてきた。

神司「落ち着いたか?」

怠惰「何がだよw」

神司「心が読めるさとりさんとはもうお会いしたよな?」

怠惰「ああ、あの桃髪のロリっ子ちゃん？」

神司「うんその子だよ。そのさとりから怠惰とラファエルとの死闘の記憶の話を聞いてさ……」

怠惰「！なるほど……それで暴走状態になった事も聞いて今に至るってか……すみません、我が王よ……」

多分三人の魂の事で跪いている怠惰。俺が今、言えるのは……

神司「立つんだ怠惰。それで跪いている暇があるなら今はアイツを倒すことに集中しろ。謝るのはその後だ。あと、怠惰はアイツらのことを『魔神』と呼んだな。俺は魔神と会うのは初めてなんだ……助言しながら共に戦おう！」

怠惰「フフフツ……♪了解した！我が『主』よ!!」

大鎌を再び肩に乗せてニヤリと笑う怠惰。

どうやら戦意はある様だ。さて、コイツらの戦い方を教えてもらおうとするか！

怠惰「王よ、近接戦って分かるよな。」

神司「そりゃあ分かる。」

怠惰「つまりだな、コイツら魔神は近接戦しか効かないんだよ。」

神司「確か悪魔と邪神に殺戮兵器として造られたんだよな。」

怠惰「ああ、人間の魂をその作った機械や異物を入れて動いてな。」

また昔の悪魔たちもふざけたことをしてくれる。人間の魂をだど？まあ、今はそんなことどうでもいいんだ。魔神の倒し方が判ったならこつちのもんだ！

神司「んじや行くぜ！怠惰！」

怠惰「そうだな、多分鎌もイケるだろうしな！」

俺と怠惰は武器を構えて刃の異形に向かって攻撃を始めた。

神司「うおおりやあ！」

上から落とすが防がれる。予想通りだ。

その後ろから怠惰が切りかかる。すると刃の異形も油断をしたのか、怠惰の攻撃が当たってよろけた。チャンスタイムだ。

神司「行くぜ怠惰！」

怠惰「任せな！」

俺はそのまま邪楼剣を押しして刃の異形の腕を切り落とした。次にそのまま怠惰が刃の異形の左足を切って再びバランスを崩させた。

神・怠「おりやりやりやー!!」

それを続けながら攻撃をする俺と怠惰。刃の異形は追い付けずにどんどん次々にバラバラになっていく。

残りコアっぽいを見つけると、

怠惰「それを壊して終了だ！殺れ!!」

神司「しゃああー!!!」

油断だったのだろう。相手は『刃』の異形だ。

次の瞬間だった、怠惰の腕が何かによって切られた。

怠惰「なんだと……!」

神司「怠惰!」

そこで俺は斬るのを止めて怠惰の方に気がとられて、刃の異形の攻撃に気が付かなかった。

神司「はっ……!」

すると光が攻撃を防いだ。

ドラ「油断大敵って奴ですね！神司様!」

神司「ドラ!」

シロ「マスター!まだ拳銃持つてる?!」

神司「シロ……!ああ、予備のために……」

ポケットから嫉妬が落とした拳銃を取り出す。それをシロに渡す。

神司「シロ、この拳銃は使う主の邪気で主を操るんだ。気をつけて扱えよ。」

シロ「大丈夫だよ！私は天然だもん♪」

それを自分で言うかな…まあ、その事は置いておこう。怠惰を確認すると自己再生を始めていたので多分大丈夫だろう。

神司「立場逆転だ。怠惰、行けるか？」

怠惰「安心しろよ…俺は死なねえからよ！」

やっぱり怠惰はどこか俺と似ている。こいつは死なない。どこかその様な安心感がある。

神司「了解、んじゃ始めんぞ！お前ら！」

三人「二〇おう!!」

刃の異形はコアから体を再生して復活していた。だが、立場的には俺らが有利だ。

神司「怠惰は俺と真正面に突撃！ドラは能力を生かして削っていけ！シロは遠距離で拳銃で狙撃！弾は交換するように！行くぞ!!」

怠惰「りよーかい…!!」

ドラ「はいっ…!!」

シロ「承知したよ！」

まっすぐ怠惰と俺は刃の異形に攻撃していく。そして雷の能力を生かすドラは刃の異形の体を削っては離れて削っては離れるのを繰り返していた。

さすがに刃の異形は勉強したのか、攻撃したらすぐに体の再生が早かった。だが、そ

の再生は連続して弾が当たり再生が途中止まったりしている。シロの水の能力が弾の速度を早めているので、もうそれは弾ではなく『小さなミサイル』に近かった。

これは完全に倒せる。

神司「油断は無しだ！トドメに行くぞ!!」

怠惰と俺は十字に斬ってドラは前後と往復して斬っていた。シロは先程よりも連続で撃つて全ての攻撃がコアに当たりコアを潰した。

そして刃の異形は消えていった。

く一方、邪神王く

左手を大砲の異形の体に突き刺してコアを取り出す。そして握り潰すと大砲の異形は動かなくなり消えた。

邪王「この程度か…結構楽しめるかと思えばそれぐらいか…。さて、神司の方に戻るか…」

邪神王は、頭に着けているヘッドホンをつけ直すと神司の方に向かって歩き始めた。

邪王「よっ♪」

神司「そつちも終わったのか、邪神王。」

邪王「雑魚だ、あんなの。」

神司「そつ、そうなのか…」

邪神王は俺の体の中に戻ると少し眠ると言つて眠り始めた。

なんだ、雑魚つて言うわりには疲れているじゃないか…

神司「さて、この部屋から出て家族たちに会いましょうか♪」

俺はこの部屋の襖を開けてサグメたちに「ただいま」と言った。

するとサグメが零愛を抱えながら俺に泣きながら抱きついてきた。

神司「心配…させちやつたかな…」

サグメ「おかえり…！神司!!」

本当に心配させちやつたかもな…

サグメを抱きしめ返して、

神司「ただいま…♪」

と、そつと声を掛けた。

## 第82話 心の迷い

神司「んっ…」

今居る場所は、地霊堂の寢室。そこで俺は起きた。

サグメが俺の腕を抱きしめて寝ているので動けない。

神司「…二度寝するか。」

横になって娘の顔を見ようかと思つて零愛を探してみた。

神司「あつ。」

零愛は俺が思っている方の逆に居た。今の寝ている順番は、左から俺↓サグメ↓零愛だった。

少し起きて片方の手で零愛を抱いて横にごろんとなつた。零愛の顔がしつかり見える。これならぐっすり眠れるとチラツと襖の方が目に入った。そこには誰かが歩いている姿が目に入った。

神司「あれは…」

怠惰だ、あの姿は怠惰だった。一体こんな朝早くにどこへ行くのだろうか…

俺は、ゆつくりとサグメから腕を取ると、零愛を抱いたままこの部屋を出た。

怠惰「古明地……」

さとり「あら、怠惰さん。お早うございます。」

怠惰が向かった先はさとりの部屋だった。さとりは作業していて徹夜していてまだ起きていた。

怠惰「ああ、お早う。」

さとり「それにしても朝早くからどうしたのですか？」

怠惰「ああ……みんなには心配させたからな……あと『最後の段階』の魔法陣が残ってるしな。古明地は、俺の心が読めるから今からする事は分かってるんだろ。」

さとり「はい、本当にするのですね？」

怠惰「俺は『怠惰』のベルフェゴール。俺は『怠惰』なはずなのに、この事だけには真剣だ。だからそういう事だ……楽しんで人を蘇らせる。まさに怠惰らしいだろ？ 本当は……誰にも言わずに出ていくつもりだったが……さとりには色々と助けてもらったからな……えーつと……魔術書は……」

神司「コレだろ？」

影からずつとこの話を聞いていた……何か俺の姉に……いや、これは考えないでおこう。

俺は悪魔凶鑑と言われている本を取り出して見せた。

怠惰「王……その本だ。でも何で王が……」

さとり「ああ、それなら…」

神司「さとりから貰った。」

怠惰「返して…」

神司「返さねえよ？」

怠惰「何でだ…？」

神司「…お前、俺らには黙って勝手に出ていくつもりだろ。許さんぞ、そんなこと…」

怠惰「それは、王の…」

神司「俺の何だ、俺のお姉さんだろ。死者蘇生するために、四種類の魂か…もし失敗したらどう責任をとるつもりだったんだ？なあ、怠惰。」

怠惰「失敗はしない。」

神司「それならここから全ての責任はお前に押し付けてもいいんだな!？」

怠惰「どんな責任…」

神司「お前に殺された魂の友人さ…殺した理由はわかったが、許されはしないだろうな…!ぬらりでは百鬼夜行のみんなが許さない、清明では、清明の弟子の領耶、式神とタルウイが許さない…そういう者たちが来るがその責任を全てお前が取ってくれるんだよな…?」

怠惰「壁があるならぶっ壊す。」

神司「それじゃあ…ダメなんだよ怠惰…」

俺は下に膝をついてしまった。そういうことを言いたいんじゃない。

怠惰「話は終わったか？魔術書は返してもらおうぞ。」

なぜか涙が出てるし…怠惰は俺から魔術書を奪うとそのままこの部屋から出ていってしまった。

アイツにとつての俺は、『王から命令を出して動く』。それだけなのだろう…

さとり「神司さん…零愛ちゃんが…」

神司「あつ…大丈夫か？ありがとう、さとり。」

零愛は心配そうに俺を見ていた。

零愛「おとーしゃ…」

神司「!! 聞いたか…？さとり。」

さとり「ええ！聞きました！私…！サグメさんを起こして来ます!!」

驚きが隠せない。二日前ははいはいした零愛が今喋ったんだ!!

走ってサグメとさとりが来てくれた。

サグメ「零愛喋ったの?!」

一個「た」が多いがびっくりし過ぎているんだろう。

神司「うん！喋ったよ!!零愛、もう一回喋ってみて？」

零愛「あーしゃ！おとーしゃ！」

サグメ「呼んだよ！私のことお母さんって！」

神司「ああ、そうだよ！お父さんだよ！零愛！」

嬉しいという気持ちがいっぱいだった。

こんな時に怠惰も居れば…

怠惰「……」

許しか…俺は自分のために動いただけだ…

『それなら神司のお姉さんを蘇させるのは何でなんだ？』

怠惰「この声は…！邪神王か…」

邪王『そうだ、質問に答えろ怠惰。』

何でか…本当になんでなのだろうか…

邪王『それは神司を思う気持ちだろう。お前さんは死なないが生き物だ。感情が無いことはない。神司のことを王と思うならしつかり考えな。今からするべき事は何かをな。』

怠惰「……」

邪王『まだお前さんには迷いがある。それなら少し助言する。今したいことは何だ？』

その目標を見つけて動け。』

怠惰「……」

邪王『それじゃあ、俺はそれだけを言いに来た。また会おうか♪』

と言つて邪神王は怠惰の中から出ていった。

そして怠惰は立ち尽くし歩くことを迷った。今すべきこと…

そんなときに一人の女性が降りてきた。それは…

タル「怠惰だね、清明の恨みを晴らしに来たよ…!!」

王の言う通りだった。清明を殺してその式神のタルウイが来てしまった。

ここからどうすれば良いのか…

## 第83話 唐突なる事実と真実

タル「何で殺したの!? 怠惰!!」

怠惰「タルウイ、俺にも俺の用事が…」

タル「それなら何で晴明を殺したのさ!!!」

タルウイは体から熱を放っていた。怠惰の言葉次第では、すぐに攻撃を仕掛けるつもりらしい。

怠惰「話したら怒らないのか？」

タル「…私はね…! 晴明が生きてたから今の生活が楽しかったの! それなのに…怠惰キサマツ!!!」

タルウイは熱球を何個も飛ばしながら怠惰に近づいた。怠惰は、すぐさま大鎌を取りだして熱球を全て防いだ。しかし、

怠惰「ん…?」

熱球を防ぐ度に大鎌の刃が溶けていた。

怠惰「ヤバイな…」

タル「怒りの熱球さ! お前の魂ごと溶かし尽くしてやる…!! 熱液『フロムスレイヤー』」

!!

溶けた大鎌の液体を使って怠惰の体に飛びつけた。するとそこから液体が怠惰の体を溶かしていた。

怠惰「これは本当にヤバイ！鎌符『グリモワール・サイス』。」

大鎌の刃を復活させてから怠惰は肩に大鎌を置いてタルウイに近づいた。

その時、邪神王の言葉を思い出して急に足を止めた。

怠惰「……」

タル「もう終わりかい？」

タルウイとはあまり会ったことがない……だけど、何か心がムズムズする。タルウイの顔をまともには見れないが攻撃は仕掛けていける。何なんだ……この感情は……

タル「そんな弱さで晴明を殺したの……？そんなのはおかしい……!!」

怠惰「なあ……タルウイ。」

タル「何だよ……」

怠惰「お前はあの陰陽師が居なくなつて悲しいか？寂しいか？」

タル「そんなの……当たり前だろうが……」

怠惰「それなら……それなら……俺が、一緒に居てやろうか？」

タル「えっ……？何で……何でお前の様な殺人鬼と私が一緒居なきやいけないんだよ……」

！  
」

怠惰にとっては心配事であっても、タルウイには聞こえていない。主人、とても大事であった友人がいなくなつて怒りの気持ちの方が怠惰の声よりも上だったからだ。

怠惰「いや！俺はただタルウイが…!!」

タル「うるさい!!問答無用!!!」

タルウイは熱で作つた槍を怠惰に向けて思いきり投げた。

ここはさすがに横に避けた怠惰。そしてそのままタルウイの後ろに行くと、

怠惰「せつかく可愛いのに…」

タル「!!?」

怠惰に急なことを言われて戸惑うタルウイ。顔も赤くして下に座つてしまった。

怠惰「あれ?どうした?タルウイ。」

どうやら怠惰は、正直に言つただけなのでタルウイは可愛いと言われて恥ずかしくて座つたことが判つてないらしい。神司も鈍感ならその従者も鈍感だ。

タル「何も…／＼ないよ…!／＼／＼」

と言つてタルウイは翼で空へ飛んでいつてしまった。

怠惰「……?」

まだ状況が掴めないようだ。そして何か思い出したように手を叩くと、

怠惰「そうだ！死者蘇生魔法の最後の仕上げをしに行かなくては。」  
やっぱり鈍感だ…。

怠惰はすぐに魔法陣の準備をしに行った。

一方この第一主人公の神司はというと…

神司「それじゃあ、お世話になりました。」

地霊殿を後にしようしていた。最初はさとりが我が家に急に来てから怠惰や異形との死闘。俺やドラとシロは何回か死にかけろし…大変な数日だった。

さとり「はい…確かに貴方のここ数日は大変なことが多くありました。五、六日ほどですかね、サグメさんやドラくんシロちゃんはまだ充分に休めたでしょう。ですが神司さんは…」

神司「何なんだ？」

さとり「…貴方自身は気づいていないでしょうけど、心や身体に傷や苦痛が酷くあるのですよ？」

神司「えっ…でも…」

邪神王は…

邪王『すまない神司…確かに心と体の傷は治したと言った。だがそれは、浅い傷のことだ…お前自身の深い傷は完治しきっていない。』

さとり「そうです、邪神王さんの言う通りです。」

邪王『何だ、さとりお前は俺がここに居ても話が通じるのか。』

さとり「ええ、私の能力が『心を読む程度の能力』なので話せます。ですけど、他の人たちにも聞こえる様に出てきてくれませんか？」

大人しく俺の中から出てくる邪神王。

こんな邪神王は見たことがない。なんと言うか…いつもなら何か一言言ってから出てくるというか…

邪神王が俺の方に振り向くと、

邪王「深刻な問題だよな…さとり、コイツの心をどうにか戻せないか？」

さとり「正直、難しいですね…」

ドラ「あの…二人は何の話をしているのですか…?」

邪王「良いのか？」

さとり「神司さんの家族です。話してあげましょう。」

邪神王は、真剣な顔をして俺らに伝えた。

邪王「…神司の身体や心に起きている話だ。今から話すことは全て本当だ。…：…現在、神司の身体にはヒビが入っている。そして心もだ。このバカは今では何気なく大丈夫そうな顔をしているが、」

神司「おい。」

邪王「また今回のような死闘や戦いをするのであれば、次こそは腕が動かせなくなったり立てなくなるかもしれない…。次に心は、また何気ない顔をしているが何かを無くしたり、神経的に来るものがあると心のバランスが崩れて精神崩壊するだろう…。これが今の神司の身体と心の現状だ。」

ドラ「なっ…!」

シロ「ウソでしょ…」

サグメ「…!!」

神司「……」

唐突だったが、それは本当の事かもしれない…。ろくに休みを取らず、心に来るもの、身体に来るものが積み重なりすぎている…

俺は今から何を考えて何をすれば良いのか…。そこから動かなければ次へは進めないだろう…。

## 第九章 異魔邪神編

## 第84話 生き返った姉

あの日家に帰ってから、邪神王がそんなことを言ってから一週間が経った。その後だが、忠告通り戦闘はしていない。地底での俺を見かけた鬼の勇儀が何回か家まで来て戦いを挑んできたが全て断った。ただし断ったのは俺ではなく邪神王が、だ。そしてその一週間の夜がきた…。

俺は家の屋根の上に登り夜空を眺めていた。今夜は綺麗な満月だ。

神司「満月か…」

現在、邪神王はどこかへ行ってしまっていたので心の中に話しかけても返事はない。

神司「戦闘も無しだと、体が鈍るよな…」

寂しく夜空を眺める。すると、一匹の黒猫が俺の隣に歩いてきた。

神司「おや、どうしたんだい？子猫ちゃん。」

黒猫「にゃあ〜ん♪」

どうやら普通の子猫の様だ。迷ったのかな、それなら親を探した方が良いのかもしれないが、今はそんな気にはなれなかった。なぜなら、この子猫は俺になついているよう

に俺に手に頬をゆっくり擦っているからである。

神司「ははっ……どうしたんだよ、本当に。」

頬を擦るのを止めた子猫は屋根から放れてどこかへ行ってしまった。やはり野良なのかもな。

神司「……このまま寝てても良いかもな……」

屋根の上で寝転がる。少し痛みが寝れないことはない。昔は木の上で寝ていたからな。まあ、その後、幼い頃の紫と出会ったけどな。あの頃はとても忙しかったけどな。……今考えれば、結構、体に無理をさせたかもしれない……目を瞑って昔のことを色々と考え始めた。

サグメと初めて会った時、ドラやシロとの出会いや幽々子と妖夢のこと、西行妖の戦闘や大昔での天使や神との死闘。諏訪子や神奈子の決戦。そして、サグメと俺の両方からの告白、零愛の誕生。

本当に色々な事があった。これからも色々なことが起こったりするのだろう……。そう考えている内に眠りに落ちてしまっていた。

一つ…夢を見た…。

俺の姉がこの幻想郷で笑顔で遊んでいる姿を…。

神司「……ははっ…♪」

真夜中の出来事、この時の神司は深い眠いに入っていた。それもそのはず、疲れてるので自動的に体が強制睡眠に入っているからである。

そして、下からこの家の屋根に一人の女がここに飛んできた。

?「……」

足音を発てて神司に近づくと謎の人物。

神司の寝顔を見ると、小さく笑い、

?「この娘が神司…だよね?」

すると、その女の横からスキマが開くとそこからは、幻想郷の賢者 紫と怠惰の悪魔 ベルフェゴールが上半身だけ出して出てきた。

怠惰「ああ、そうだ。」

紫「あら、師匠の寝顔かわいっ♪」

？「あのね、紫。この娘は私のなのよ？」

呆れながらも紫に言う女。すると紫な少し慌てて、

紫「じよ、冗談よ、〃星花？」

そう、この謎の人物の女は、神司の実の姉、星花だった。

実はこの五日前に、怠惰は四種族の魂の蘇生に成功し、星花は再び生きることができたのだ。

最初は、何が起きたか分からない星花だったが怠惰は今までのことを星花に教えたところ、納得がいった様なのでそこで一日を終えた。二日目は、この幻想郷の賢者の紫の家に怠惰は星花を連れていき全ての状況を話した。最初怠惰は紫に怒られたが途中、どちらの立場が上か気づいた紫はすぐに謝った。

…と、色々あり、この様な状況に今はなっている。

紫「星花、一度今の師匠の家族見てみる？」

星花「みたいみたい！」

すると、紫は星花のスキマを作って星花に見えるか確認した。

紫「まず、誰から見る？」

星花「彼女さんはいるの？」

怠惰「いるな…」

星花「それなら彼女さんから！」

紫はサグメの方にスキマを移動させようとすると、

神司「…さつきから黙って聞いてたけど…」

三人「!!」

神司が起きていた。

神司「あんなにキヤツキヤツしてたら寝てる人も起きるわ…姉ちゃんも、来るなら普通に来てくれよ…」

星花「ごめんね〜」

神司「あと紫…」

紫「はい?」

神司「『はい?』じゃない。盗映?はダメだぞ。」

紫「盗映じゃありませんわ♪あれは…」

神司「覗き、だろ?」

盗撮じゃないと認めてるんなら結局は覗きはしてるじゃないか。

紫「えーつと…」

おい、右上を見ても何も無いぞ。嘘が下手か。

神司「はあ…」

全く、この愛弟子は一体どこでそんなのしたのか…

あれは三日前、零愛と二人で散歩をしにいった時のことだ。

神司「零愛と少し散歩行ってくるよ。」

零愛はまだ生まれてから一ヶ月も経っていない。だけど成長が早い零愛はもうハイハイではなく普通に歩いている。

零愛の私服は新しく神ノのところのミカが作ってくれた。どうやら暴食も手伝ってくれたのこと。

サグメ「わかったよ♪行ったらっしやい。」

神司「うん、零愛行こうぜ。」

零愛「うん！」

喋れているし、会話もできている。成長が予想以上に早すぎる。これも天人の血なのか。

神司「零愛く？」

手を繋ぎ一緒に歩いていたのでつきり零愛も歩いているのかと思っていた。

零愛「うん？」

零愛の方を見ると、小さな黒い羽でパタパタと地面から上に飛んでいた。

神司「零愛!？」

飛行を止めて、地に足をつける零愛。そして何も無かったような顔で、

零愛「どうしたの？」

神司「零愛、飛行するときは一回お父さんに言ってから飛んでくれ、な？」

零愛「うーん…：れいあ、そらとびたいく…：」

下を向いて機嫌が悪くなった。

神司「いや、飛んだらダメとは言っていないよ。零愛は飛んでいいよ。」

零愛「いいの？」

神司「良いよ。」

零愛は喜んだ顔を見せると思いきり空へ羽ばたいて行った。

神司「ちよっ！待てっ！待てっ！零愛！」

こんなことがあったな…。

あの躊躇なくの挑戦は俺の性格に少し似ている。俺もよく挑戦ように敵と戦っていったなあ…まあ、そのせいで今はこうなってるがな。

神司「…つて、何で今そのことを思い出すかな。」

星花「何が？」

神司「いや、何も…」

星花「あゝ！何か隠してるでしょ〜！」

神司「だから何も無いって！」

星花「調べてやる、神司が何をしたのか調べてやる。」

神司「止めてくれよ！それは姉ちゃんの昔からの癖だから！」

紫「なんか、師匠と星花って…」

怠惰「姉弟よりも双子みたいだな。」

二人が納得してる中、星花と神司はじゃれあっていた。

星花「そうだ！今のだけじゃなくて私が一回死んだ後の神司ことも調べちゃおう！」

神司「だから止めてくれよ！」

## 第85話 稀神家の初デート

サグメ「えーつと?」

星花「神司の姉の星花です。」

朝になったので姉ちゃんと一緒に家に入った。ちなみに、俺と姉ちゃんは屋根の上で仲良く…じゃなかった。姉ちゃんが自分から俺を抱いて眠った。(なぜか)俺はよく眠れた。

サグメ「…えっ?」

サグメは姉ちゃんと初めて会ったからかもしかはまだ状況が掴めてない(↑絶対それ。)のか反応がおかしくなっている。

神司「サグメ、俺の姉ちゃんだよ。」

サグメ「いや分かってるけど…えっ?」

シロ「いやしようがないよね。死んじゃった人が生き返って来たんだから。」

サグメ「そう…ですよ…ね?」

星花「そうだよ♪私は生き返ったよ。」

なるほど、それでサグメは驚いていたのか。それならしょうがないな。

星花はサグメの耳元に行くよと、

星花「今までごめんね♪サグメちゃん。」

サグメ「はい？」

星花「この鈍感バカな男の娘だけ一人残して私が居なくて。」

サグメ「いえいえ、この鈍感だからこそカッコいいときはカッコいいんですよ♪」

星花「え〜？あのお姉ちゃんが居なかつたら何もできない神司が？」

サグメ「今は結構頼りになると思いますけど…」

星花「そうかなあ〜…でも判ったよ、ありがとね♪」

星花はサグメの耳元から離れると玄関まで行って靴を履いた。

神司「あれ？姉ちゃんどっか行くの？」

星花「まあね♪ちよいと幻想郷を廻ろうかなとね。」

そう言つて姉ちゃんは外に出かけた。

神司「シロ、姉ちゃんと一緒に散歩にでも行つてきな。」

シロ「えっ！行つてきて良いの?!」

神司「ああ、良いぞ。」

シロ「ヤッター♪」

ドラを見るとドラは尻尾を振っていたので、

神司「ドラも行ってくるか？」

ドラ「行ってきます。シロ行くぞ。」

シロ「お兄ちゃんも行くの？」

ドラ「ああ行くぞ。シロ、星花さんにどっちが先に追いつけるか競争な！」

シロ「いいよ♪よーい！」

ドラ「ドンッ！」

ドラとシロはドアを開けると雷と風を使って勢いよく出掛けて行った。

神司「たくつ、ドアは閉めてけよな。」

まだまだ子供だよな、シロもドラも。さて、姉ちゃんもマレット兄妹も出かけてし

まった今、家に残っているのは…、

神司「俺らだけか。」

そう、残っているのは俺。神司とサグメ、そして零愛だけだ。

サグメ「そういうや初めてかもね、三人だけ居るのって。」

零愛「たしかにー！」

神司「…どうする？三人でデートでもする？」

サグメ「えっ…／＼／＼」

零愛「でーとするー！」

サグメは見なくても判るが赤面している。零愛はデートを知っているのか分からない。  
い。

：初デート!? そういや零愛が生まれる前から色々なことあったからデートする暇な  
かったからな。てか、思いつきで言っただけど目的がないよな。

サグメ「どこで何をするの？」

神司「それが…思いついてなくて…。」

サグメ「なるほど? 思いつきね。」

神司「察しが良くて有難いです。」

零愛「でーといかないのー?」

サグメ「零愛はデート行きたいのー?」

零愛「いきたーい!」

サグメ「それじゃあ…。」

神司「そうだな、零愛のためにも里でお茶でもするか。」

俺らは歩いて人里まで来たが、確か、姉ちゃんたちも人里にいるのじゃなかったっけ  
? ばったり会っちゃう可能性もあるということか。

零愛「おとーさーん、だっこー!」

神司「抱っこか? 良いよ。」

零愛を持ち上げて抱っこをする。今日の零愛は一段と甘えてくるな。

サグメ「ふふっ、零愛ったらお母さんよりもお父さんが好きなのね♪」

零愛「うん！でもねでもね、れいあおかーさんもすきだよ！」

神司「うっ!?!」

俺の腹を蹴飛ばしてサグメの方に飛んでいく零愛。

サグメ「あらあら♪」

そんなことしている内に喫茶店に着いた。

神司「あっ！レミリアお嬢様と亜無！」

亜無「ん？神司さん!?!」

レミィ「あら、稀神一家じゃないの。」

まさかのレミリアと亜無が向かった喫茶店に座ってお茶をしていた。

亜無「どうしたのですか？」

神司「いやあ、俺の姉ちゃんとマレット兄妹が出かけたから暇になってね。」

亜無「神司さんにお姉さんいるのですか!?!」

神司「いるよ？まあ…昨日の夜生き返ったからね…。」

亜無「はっ、はあ…。」

神司「逆に亜無たちは？」

亜無「自分は——」

レミイ「私が亜無を連れ出したのよ。」

神司「お嬢様から？」

レミイ「ええ、そうよ。」

神司「へえ。」

亜無「そういうや神司さんはお茶をしに来たのでしたよね。自分らもうそろそろ帰るのでこの席使います？」

レミイ「ちよつ、亜無？」

神司「良いのか？亜無。」

亜無「はい。」

神司「お嬢様は嫌がっているけど。」

レミリアは亜無の脚をポコポコと叩いている。

そうして見るとレミリアが可哀想だな。

亜無「大丈夫ですよ、お嬢様には自分の紅茶を渡しますのです。」

レミイ「えっ？」

亜無「それじゃあ神司さん、また。」

レミイ「ちよつ、ちよつと待つて亜無。」

亜無「はい？」

レミリアは亜無の手を払うと俺の方に近づいて来た。

レミイ「神司、貴方私の館でバイトしない？」

神司「バイト？何の？」

レミイ「まあ…来てから話すわよ。」

レミリアはチラリとサグメたちを見たが直ぐに俺に視線を合わせた。

神司「へえ、まあやってみるか。」

レミイ「あら、やってくれるのね？それじゃあ早速明日から紅魔館に朝10時頃に来てちょうだい。」

神司「わかったよ。」

レミイ「それじゃあ、家族デートの続きを♪行くわよ亜無。」

亜無「はい。」

レミリアと亜無はこのまま紅魔館に帰って行った。

神司「…それじゃあお茶にするか。」

俺はメニユー表を開くと最初に見つけたアイスが美味そうだったのでそれにした。自分は決めたのでサグメにメニユー表を渡した。

サグメ「神司は何にしたの？」

神司「俺はこの巨峰アイスだよ。お茶は生茶でね。」

サグメ「私もそれにしようかな。」

零愛「れいあもー！」

神司「かなりの甘さだぞ？」

サグメ「神司が決めたお茶とアイスが良いの。」

神司「わかったよ。すみませーん、巨峰アイスと生茶を三つずつお願いします。」

俺は近くにいた定員さん呼び止めて注文を頼んだ。

店員「かしこ参りました。少々お待ちください。」

少し待っているとすぐに巨峰アイスと生茶が三つずつ持ってきてくれた。

店員「ごゆっくりどうぞ。」

神司「ありがとうございます。どうぞ。」

俺はサグメと零愛に一つずつ渡した。

サグ零「ありがとう。」

このまま雑談がしてから家に戻った。時計は夕方五時を指していた。その一時間後に姉ちゃんたちも帰って来た。

どうやら色々な場所に行ったら楽しくあったとか。

今日の初デートは成功だ。

## 第86話 消失者

咲夜「神司さん、その窓もお願いします。」

神司「はい……！」

俺は現在、紅魔館でバイトをしている。

シード「おい、新人メイド、亜無先輩の代わりに紅茶作れよ。」

神司「はい……っってお前は新人執事だろうが！」

光矢「メイドが汚い言葉を使わない！」

神司「痛っ！っ……！」

能力を使つて俺のお尻を叩く光矢。

なぜこんなことになっているかというところ、それは約三十分前……

レミイ「来たわね、神司。」

昨日レミリアに誘われて急遽紅魔館でバイトすることになった。

神司「何のバイトすればいいんだ？」

レミイ「貴方には今日一日、紅魔館のメイドになつてもらおうわ。」

なるほど、そう来たか……。俺の見た目が男の娘だからそんなバイトを。

とあつて俺はバイトで男の娘メイドとして働いている。

神司「痛たた……」

まだ光矢に叩かれたお尻がヒリヒリする。能力を使うことないじゃん……。

そう思っているのと冷たい何かが頬に当たった。

神司「ひゃあつ！つて、神ノかよ……」

シード「ホラよ。」

シードというのは神ノ邪神が人里などで使っている偽名だ。シード、野神 シードだ。

神司「あ、ありがとう。」

神ノから貰ったジュースを開けて飲んだ。

神司「うええ、ナニこれ？」

神ノ「飲める？」

神司「飲めないよ！」

神ノ「それじゃ、俺が飲んでるので。」

すると、神ノは筒状の変なものを取り出した。文字で伊右衛門と書いてあつた。

神司「なに、それ？」

神ノ「伊右衛門茶だけど？」

神司「その筒状なのは？」

神ノ「ああ！これは外の世界で空き缶と言つてね。そうだ、神司くんこの空き缶の開け方分かる？」

神司「開け方？」

正直分らない。

開け方に苦戦していると神ノが空き缶を取り上げて簡単に開けた。

神ノ「幻想郷の住人はこの開け方知らないだろうな。もしかしたらお前の弟子は使えるかも。」

神司「紫が!？」

神ノ「多分な。さて、そろそろ休憩終わりにしてバイトを再開しますか。」

神司「んっ……りよーかい。」

すぐにお茶を飲み干して咲夜さんの方に向かった。

く男の娘邪神移動中く

コンコンコン、

咲夜「はい。」

現在は夜の七時である。この紅魔館は咲夜さんが能力広げているらしいのでここに来るまで時間が掛かりすぎた。

神司「神司とシードです。休憩が終わりましたので仕事に戻りました。」

咲夜「分かりました。すぐに用意しますので少しドアの前で待っててください。」

神司「分かりました。」

咲夜さんを少し待っていると、フランとブラックが歩いて来た。

フラン「あー！神司だ！」

黒フラ「神司御兄様！」

神司「わあ?!」

フランと黒フラが俺に飛んでバグをしに来た。どちらか一人なら耐えられるが二人は無理で倒れてしまった。

神司「フラン!? ブラック!？」

フラン「えへへ、見つけたから飛んで来ちゃった♪」

黒フラ「私も♪」

神司「フランは兎も角、ブラックの性格は甘えん坊だっけ？」

黒フラ「もう！神司御兄様もみんなのように黒フラって呼んでよ！」

頬つぺたを膨らませて怒っていた。

神ノ「ん？浮気か、ロリコン。」

神司「誰が浮気なんてするか！あと、ロリコンじゃねーし。」

神ノ「はははっ、モテるねえ。」

神司「神ノオ〜」



咲夜「お待ちせしました：妹様、黒フラ様、あのメイドと執事は何をしていますか？」

咲夜が見るその先には、ケンカをしている神司と神ノの姿だった。

咲夜「はあ：幻世『ザ・ワールド』。」

咲夜は時を止めて神司と神ノの周りにナイフを何本も飛ばした。

咲夜「そして時は動き出す。」

その言葉通り止められていた時は動き出した。

神司「——ッ！」

神ノ「これは！」

俺と神ノは諸にナイフの雨を食らった。



く夜中9時く

俺と咲夜さんはキッチンで紅魔館全員の夜ご飯を作っていた。

神司「痛て……」

咲夜「神司さんたちが悪いのですよ。少し待っている間にシードさんと喧嘩をしているから。」

神司「すみませんでした。」

本当に反省している。俺は少し煽られたらすぐに手を出す性格なのだからその性格を直さなければいけないよなあ。

神司「そーいや、食べる時間遅くないですか？」

咲夜さんは一度ため息を付くと、

咲夜「貴方と執事が喧嘩をしているからですよ？」

すぐに作るのを止めて45度頭を下げて反省の気持ちを含めて謝った。

神司「本当にすみませんでした!!」

こうして夜中にみんなで食べたのは…、

神ノ「……カレーだ。」

そう、レミリアとフラン、黒フラの三人以外は中辛のカレーだ。ちなみにその三人は甘口である。



現在夜の11時。カレーを食べたあと、レミリアから今回の給料を貰ったあとに神ノと一緒に家へ帰った。

神ノ「レミリアに誘われてバイトしたけど思ったより楽しかったな!」

神司「ほはお前と喧嘩だったけどな。」

神ノ「はははっ、そんなじゃ、俺はここで別れるから気をつけてな。」

神司「ああ、じゃあな……え?」

急に地面が無くなり下へ落ちていく感覚になった。

俺はまだ近くにいるだろう神ノの名前を叫んだ。

神司「神ノ!!」

叫んだが神ノには聞こえておらず。

すると、目の前が真っ暗になっていくのが分かった。そして、気が遠くなつていくのも――

神ノ「……………」

おかしい。今まであつた神司の気が感じられなくなつた。瞬間移動テレポルトでもしたのか？  
それでもここから数十分で稀神家に着く筈だ。

俺は元来た道に戻つて稀神家に向かつた。

く邪神移動中く

神ノ「神司！神司は居るか!!？」

ドンドンとドアを叩く。しかし家から出てきたのは神司ではなくサグメだった。

サグメ「神ノさん？どうしたのですか？」

神ノ「サグメか、唐突でごめんだけど神司は帰つて居る?!」

サグメ「ままだけど…どうしたの？」

神ノ「…いや何もないよ。ただ神司は何日か帰つて来ないと思う。それだけだよ。そ

れじやあ。」

家から離れようするとサグメが呼び止めた。

サグメ「あの、神ノさん：神司に何かあったの：？」

神ノ邪神は振り向いて、

神ノ「：もし、今神司のことを心配してるのなら心配しなくていい。俺が責任持つて

神司をこの家に連れ戻す。」

やっぱりか：神司、俺が行くまでどっかで死んでんじやねーぞ……！

神ノ邪神は神司を探すために家に戻って作業をし始めた。

## 第87話 未来の幻想郷

目が覚めると俺は森の上で寝転がっていた。

神司「……」

どこだ？ここ……確か俺は何か落ちて、

神司「そうだ！」

俺は落ちたんだ。て言うかここは魔法の森？時間は……帰って来た時間と同じ夜だよな……月が明るい。

とりあえず立ち上がろうとすると立ち眩みがした。

神司「あれ？」

倒れそうになったので近くの木にもたれ掛かった。すると

落ちるのが早かった。

神司「いてっ！……なるほど。」

この以上な重さは重力？だ。何でだ？新しい結界でも張ったのか？

だがまずはこの魔法の森？を抜けなければ。

その為にふらつくが立って森を歩き始めた。

く男の娘移動中く

神司「抜けたく——つて!？」

ここ幻想郷のはずだよな…何で人里が発展してるんだ？まさか、飛ばされた場所は—

神司「——未来の幻想郷？」

？「当たり前だよ。」

神司「——ツッ！」

振り向こうとしたがものすごい圧と殺気を感じた。今は殺気という気を感じたが今までは後ろの気を感じなかった。

神司「…お前は、誰だ…？」

？「人斬りだよ。お前はオレが直々に殺さなければいけない。」

刀を構える鉄の音がなった。俺も邪楼剣を手に付けた。

神司「…な、なあ…話し合いとかで解決できないのか…？」

現在戦いは止められてる俺だ。だから誰か分からないが相手に話し合いに持ち込む。しかし、

？「無理だ。お前はこの世界で禍なんだよ。今殺さなくてはその後壊さないと…おつと、口が過ぎたな。オレに始末されろ！」

神司「ッ！」

相手が斬りに掛かったので振り向いてしまった。咄嗟で防げたがギリギリだった。しかしこれは相手の力が強く負けていた。もしかしたらこの重力のせいか、いや何かのせいにしてはダメだ。しかし相手の刀が重い。だが、勝てない相手ではない。

神司「邪剣『ソウルフレア』！」

邪気を邪楼剣に纏わして相手にその邪気を放った。

？「くっ……！」

神司「避けたか。」

察したのかすぐに避けた。流石は殺気操る者だけあるな。

？「ほう、やるな神司。」

神司「！　なぜ俺の名を？」

？「分からないか？ならば、コレなら？」

相手は手から炎と雷を出して操りだした。

？「雷符『全雷V』！」

相手は俺に向かって大きな雷を落とした。

神司「うわっ！」

？「まだまだアー！雷炎『燃え盛る炎と雷』！！」

先ほど落とした雷を炎へと変えて時間差で雷が降ってきた。

神司「なんだと!? 無界『音無結界』!」

やはりギリギリだ。それにしても、あの能力はまさか…

神司「ドラ…マレット…?」

俺は音無結界を解除した。

すると相手は髪を上げると、

?「今頃ですか…!でも、本当は貴方様を殺したくはないッ!」

神司「…ドラ、落ち着いてからでいい。ゆっくりとで良いから何故過去の俺を未来に呼んだ訳を教えてください。」

ドラ「…話したら貴方様は後悔する。」

神司「一体何が起きてるんだよ!」

ドラ「…:…未来の話ですが、貴方様は最愛のサグメさんを亡くしています。」

神司「!?! 本当に…!何が起きてるんだ!?!」

ドラ「殺されたんですよ! 災凶悪魔に! あと、その災凶悪魔を操っているのは…: 暴走した魔神 神ノ邪神…!!」

神司「なっ…!」

どういうことだ…: 全ての原因は神ノだと…:

涙を流すドラ。認めたくないのだろうか。勿論、俺は認めたくない。

神司「ドラ…零愛や俺たちは生きていますのか？」

ドラ「…零愛ちゃん、シロは生きています。神司様は…生きていますが…死んでます…」

神司「まさか…！」

ドラ「精神的に死んでます…」

やっぱりか…そりゃあ、病むだろうな。助けなかったのに助けられなかった、そんなのは痛いほど判る。

戦意がない。まるでそれは死体と同じだ。

神司「ドラ、未来の俺に会わせてくれ。」

ドラ「!? ダメですよ！何かのきっかけで命を落とすと永淋先生とさとりさんが…」

神司「俺がそんなに弱い訳がない。」

ドラ「ッ！」

そう、俺がそんな簡単に精神を殺るか。俺は執念深いものだから。

ドラ「もう…全てどうにでもなれ…着いてきて下さい。」

最初の方は小さくて聞こえなかったが案内してくれる様なのでドラに着いて行った。

## 第88話 世界に誘った者たち

ドラ「ここです。」

神司「ここは……！」

着いた場所は百鬼夜行の本部だった。

ボロボロだがまだ建ててあるのは嬉しい。

静かに中へ歩いていくドラ。何もなく十分ぐらいで本部中心にたどり着いた。

そこには成長した零愛と和服と黒いマフラーのような生地を着けたシロもいた。

シロ「兄上、お帰りなさいませ。」

ドラ「ただいま。」

零愛「あれ？ 貴女は……」

神司「ドラ……」

正直怖い。女二人は、俺に向けて殺気を出している。

ドラ「お前ら止める。こいつは俺がいつか殺す標的だ。殺そうしさないと今は危ないから

な。」

神司「なっ……!?!」

ドラ「安心しろ、いつの間にか終わっている。」  
通り魔ってそういうことか…。

ドラ「ほら着いてこい、主のところへ行くぞ。」

神司「ッ…!」

シロと零愛の殺気は怖かったがそれよりも遥かにドラの静かな殺気の方が恐ろしかった。

怯えながらもドラについて行つた。

ドラ「すみませんでしたあ!!」

神司「!!?」

急に謝るので驚きを隠せない。

神司「どうしたの!」

いつの間にかドラの殺気が消えていた。

ドラ「でかい態度を神司様に向けて、しかも殺気まで出してしまい本当にすみませんでした!」

神司「それなら大丈夫だよ。まあ、殺気を出された時は結構怖かったけどね。」

ドラ「すみません!」

神司「大丈夫だって。…で、主って未来の俺のことか?」

ドラ「そうです…神司様、主には気をつけて下さい！」

神司「そんなに危ないのか？」

ドラ「簡単に言えば、今の神司様と主の性格は間反対です。」

なるほど…つまり、今の俺は戦闘はあまり好まないが主は戦闘狂、俺は自分で言うのも何だが優しいに対して優しさの欠片も無いと。主は暴虐なのだろうか…。

ドラに案内されて主の部屋に向かった。歩いて二分で部屋の扉に着いた。そして一度深く深呼吸して気合いを入れてから中に入った。

神司「お邪魔しまーす…。」

椅子に座っている主らしき人物がいた。

主「…貴様、誰だ。」

神司「うっ…！」

主が口を開くと先ほどのドラよりも静かすぎる殺気を感じた。

主「何度も言わせんな。貴様は誰だ。」

神司「じっ、自分は…稀神…神司…です…。」

主「ほう…遂に来た訳か。過去の神司よ！」

やっとな顔を見せたかと思えば、神ノが着けているように黒いマスクを着けて口を隠している、あと長い黒髪で右の顔を隠している。しかし分かることが一つ。

未来の俺は誰も信じない様な顔をし、今にも『死にたそうな表情』が分かる。

神司「……」

主「どうした？過去的神司よ。」

神司「何も無い。」

主「そうか…まつ、この世界の生活は厳しいだろうが頑張れよ。」

神司「はっ？」

ちよつと待て。ここから帰れないと言うのか。

神司「ここでの生活？俺は帰れないのか？」

主「そうだが？俺も…すまん一人にさせてくれ。」

主はそう言ってから部屋を出ていった。

ドラ「神司様…」

神司「ドラか…なあ、何がきっかけ神ノが暴走したんだ？」

ドラ「きっかけ…あの時は…はっ！」

神司「何か思い出したか!？」

ドラ「…原因は不明ですが、七つの大罪の内、憤怒さんと傲慢さんが死闘を行ってしまいました。」

ドラの話を書くたびに幸喜と思うことが無い。あと、話をずっと聞いているが奇妙な

ことが一つ。

何故、話の元凶の全てをこのドラ・マレットは知っているのか。

確かに俺はこの災厄の時代に来てから一日も経っていない。しかしこのドラ・マレットが怪しく見える…。

ならば、こちらが仕掛けるまで。

神司「なあ、ドラ。」

ドラ「はい？」

神司「悪魔みたいな異形つてのは魔神のことだろ？それならば、元々魔神の神ノが魔神にとり憑いたなら暴走するはずがないだろ？」

ドラ「…主は神ノさんが魔神だと知ってないのに何故、貴方は知っているのですか？」  
神司「知らないよ？俺は神ノが魔神だということは一度も知らない。そんじやあさ、最初に神ノが魔神だと言ったのはなぜ？」

ドラ「それは、悪魔みたいな異形が…。」

神司「怠惰に貸してもらった、魔神辞典、ルール17。『魔神作成時の中に悪魔のよ  
うな失敗作 は一度もない。』、ルール19。『決して失敗作は異形である。羽根が生  
えていても、天使や悪魔のようなのは生えない。』というのは、だな。」

ドラ「……」

神司「決まりだな。誰か知らんが現れる！ドラに化ける悪魔め!!」

すると、ドラはクククツと笑うと、

ドラ? 「チツ、早すぎる、あまりにも早すぎる。それにしても邪神王の気配が感じないなあ〜♪」

そう言うのと、化けの皮が剥がれたドラは知っている姿になった。

神司「お前は…!! 夜行か!」

そう昔、百鬼夜行が乗つとりかけた時に俺と邪神王が倒した筈の夜行だった。

神司「何で生きてんだよ。確か、ベリアルにトドメを指されたんじゃ…。」

夜行「バーカ、ベリアル様は俺を殺してねえよ。ベリアル様と喧嘩したのは——」

そこで夜行は重要なところで口止めされたのか聞こえなかった。しかも夜行は誰かにより石化してしまった。

神司「夜行! 一体誰が…!!」

? 「あら、恨むなら夜行じゃない?」

神司「お前…誰だ。」

今まで見てきたのが幻覚のように煙となり、俺の後ろに目を一枚の布で隠した蛇のよ  
うな女性と大きな体つきの男性が立っていた。

男性は悪魔よりも堕天使だろうが、蛇のような女性に関しては悪魔でも天使でもない

ように見える。

神司「お前らは…?」

すると男性の方から口を開いた。

男性「どうも、お初に御目見えに掛かります。私は魔将 ガープでございます。そし

てこちらが——」

女性「石蛇目のメデューサです。どうぞお見知りおきを。」

神司「なるほど、メデューサさんが文字通り、石蛇目で夜行を石化させた。」

メデューサ「ええ、そうよ。ただ、夜行はガープさんの名を言いそうだったから口止めしただけ。私の石蛇目は相手の心までも石化させる。時機に夜行の体は崩れ壊れてただの石になる…ああ、想像しただけで興奮する…♡」

神司「…気持ち悪い。」

メデューサ「あゝあゝ?聞き間違いかしら?今、気持ち悪いと言ったのかしら?」

凄いい形相でこちらを睨むメデューサ。それを見て俺に呆れるガープ。

メデューサから殺意を感じる。これは戦闘が始まりそうだ…。

メデューサ「ねえ!ガープ?!どうせ殺すのだから、このクズの後始末は私がしている?!」

ガープ「良いですよ。始末するのは大事ですから…。」

奇妙な笑みで俺を見るガープ。

俺がメデューサに勝てたでしょう、確実に次来るのはあのガープだ。しかも戦闘禁止だ。早く逃げなければ…。

## 第89話 独り

仕掛けて来たメデューサの攻撃を避けまくる、メデューサの攻撃は蛇の尻尾を振り回して攻撃してくる。

石化している夜行を結界で守りつつ、邪楼剣で防ぐ。

メデューサ「ほらほらほらほらほら！」

神司「ツ……！くっ……」

キツイ、キツすぎる。一回一回の攻撃が重く潰れそうになる。

メデューサ「あれあれえ??弱くない?威勢が良くても力が無いのね。それじゃあ……私が貴女で遊んでアゲル♡」

そう言うともメデューサは口から長い舌を出して邪楼剣を奪った。

神司「あつ……！ぐうつ!!」

凄まじい勢いで尻尾を振り回し、自分の体をぶっ飛ばす。

メデューサ「上げるわよ……♪」

俺の邪楼剣の鎬を使って上に飛ばす。

神司「ああ!!」



神司「…あつ…くそつ…誰、か…助け、て…！」

メデューサ「ダメダメエ♪誰も助けてくれないよん♪」

？「バカか？貴様はよお。」

メデューサ「あ”あ”!?な、何で…石化が解けてんの…！夜行…。」

見るとそこにいたのは石化が解けていた夜行だった。そうか、俺の結界が解けたのか

…だけど、夜行一人で倒せる様な相手じゃない…！

神司「だめだ…！夜行…お前だけじゃ…！」

夜行「アホが、俺一人で戻って来る訳がないだろ。」

？「良く頑張ったな、神司。後は俺に任せろよ。」

夜行の影から出てきた人物は、まさかの神ノ邪神だった。

神司「神ノ…！」

神ノ「救護班！急いで神司の処置を！」

暴食「任せられたよ！」  
ミカ「ラジャー！」

ミカと暴食もここへ来ていた。

神司「暴食…ミカ…！」

ミカ「貴方はもう休みなさい。」

暴食「ごめんね！神司様。君を見つけるまで時間掛かっちゃって…！」

◆ 神ノ「安心しろ、アイツらの後始末は俺が片付けるからよ。」

「ガープ「ほう、まるで私も含めて言ってるようだな。」

神ノ「魔将 ガープだろ？あの時は世話になったな。」

「ガープ「はて？何の事やら。」

神ノ「ああ、気にしないでくれ。こっちの世界の話じゃねーから。」

メデューサ「おい！神司が殺されて良いのかよ！」

すると痺れを切らしたかメデューサが神司に攻撃してきた。

神司「ツ……！」

暴食「<sup>ベルゼブブ</sup>大食魔王。」

暴食は手をメデューサに向けると、気味が悪い大きな口が出てきてメデューサを飲み込んだ。

暴食「……ご馳走さまでした。」

神司「なっ……?!」

神ノ「ヒューッ。」

ミカ（今まで暴食くんが戦う姿を見たこと無かったけど……流石、七つの大罪の暴食を

司る気高き王……。

ガープ（まさか、あのメデューサを一口で喰うとは、流星は暴食の王だ。）どうです？  
暴食の王様、私と……

暴食「仲間になれ、と？ヤダね。」

ガープ「まだ何も……」

暴食「神司様、神降ろしって知ってる？」

神司「えっ……」

“ 神降ろし？か……やったことがないよな。だって俺は……邪神だもんな。

神ノ「ガープ、お前の目的は何なんだ？」

ガープ「フハハハハッ！色々と面白いな！メデューサの死には申し訳ないと思うが、

神ノ邪神、神司、暴食王、そして誰か知らんが天使よ！私は降参するぞ！」

ミカ・暴食「「えっ。」」

神司「はい？」

神ノ「そうか、なら……」

神ノ邪神は刀を構えると、

神ノ「第一个人格『邪神斬り』……」

神司「ッ……！」

神ノ邪神は容赦なくガープに攻撃した。そして煙が出てガープは消えた。

神司「神ノ……！」

神ノ「安心しろよ。第八人格『邪神の悪魔箱』。」

神ノ邪神は箱の中に一個の綺麗な黒のビー玉を入れた。

神司「神ノ、まさか……」

神ノ「そのまさかだよ。降参している敵をわざわざ倒すのは気分が悪いからな。」



神ノの境界によって幻想郷に帰してもらった。

神司「……着いた……！」

着いた、着いたんだ！帰れたんだ！！

エル「お帰りか、神ノ。」

神ノ「エル、ごめんな？今回活躍が無くて。」

エル「大丈夫だ、ただ……行くならミカと融合してからが……。」

神ノ「さあさ、サグメちゃんたちも待つてる訳だしな。」

エル「スルーすんなよ！」

神司「なあ、ガープは神ノが保護するのか？」

神ノ「知らね、でも…いつか出すさ。」

神司「ふくん。」

そう話している内に家に着いた。

長い夜だった…。

神ノ「それじゃあ、送るのはここまでだな。」

暴食「またね、神司様♪」

暴食は俺に手を振ってから神ノが創った境界に入って行った。

ミカ「それじゃあね♪ほら、行くよエル。」

エル「死ぬなよ、神司。」

神ノ「ああ、エルの言う通りだ。死ぬなよ。あと、何かあったらすぐに俺らに連絡し

ろよ。」

神司「う、うん…わかったよ。」

そう言つてミカはエルを引きずつて、神ノも入つて行つて境界を閉じた。

神司「一体何が「死ぬなよ」なんだ？」

俺は家のドアをノックした。するとサグメが出てきてくれた。

神司「ただいま、サグメ。」

サグメ「えーつと…」

サグメが口を手で隠すと、

「サグメ「貴女は…誰ですか…？」

神司「…え？」

## 第90話 俺のいない幻想郷

神司「えっ…サグメ、冗談か何かだよね…？」

サグメ「えーつと…ごめんなさい。」

えっ？嘘だろ？

状況が頭に追いつかない。そうだ、零愛たちなら。

神司「サグメ、それなら零愛は…。」

サグメ「なぜ零愛の事を知っているのですか！」

神司「えっ？」

サグメは零愛の事を知っている。ってことは…、

本当に俺の事を忘れてる？

神司「それなら！ドラやシロは…。」

サグメ「確かにドラくんとシロちゃんは居ますよ。ですが何で貴女が知っているの

すか！」

神司「それなら星花姉ちゃんは…！」

星花「何々？サグメちゃん。お客さん？」

すると部屋の奥から姉ちゃんが出てきた。

姉ちゃんなら俺を知っているはずだって実の姉弟なのだから。

神司「俺だよ！神司だよ！姉ちゃん！」

星花「知らないよ。あと、私には弟なんていないからね。」

神司「！！ そう…ですか…すみません、自分のとんでもない勘違いでした。ご迷惑おかけしてすみませんでした。」

俺はそう言つてこの場から離れた。

そう…か…俺は…いないのだな…。

このあと、近くの地霊殿によつたがさとりに丸くまとめられてお燐に帰された。

永遠亭も…無理だった。

最後に幻想郷で知っているのは…

神司「亜無…。」

最後は、紅魔館だ。珍しく美鈴さんが起きていたので聞いてみる。まあ、結果は同じだろうけど…。

神司「美鈴さん…」

美鈴「珍しいお客さんですね。人間が紅魔館に何用ですか？」

まず美鈴が俺の事を人間と言うのはすでに忘れているのだろう。

神司「すみません、自分ここに来るのが初めてなので迷っちゃって…。」  
美鈴「なるほど、わかりました。もうすぐ夜が来ますので気をつけて帰って下さいね。」

神司「すみませんでした…。」

歩いて妖怪の山に来た。ここは確か天狗の縄張りだ…

神司「……」

?「あの一……貴方って…神司さんですよね？」

神司「!?!」

俺の名を呼んでくれた方向を見ると、一人の女の白狼天狗が立っていた。

神司「あ…君、俺を知っているの…?」

白狼「ああ!すみません!私とは初めてでしたね!私は紅風 亜無の妹の”紅風 ライム?です!よろしくお願いします!」

亜無の妹…そこにもびっくりだが、何より俺を覚えてくれたことだ。

ライム「神司さん、どうして泣いているのですか?」

神司「え…?」

目元を触ると濡れていた。いつの間にか俺は泣いていた。

神司「ああ…あああつ!あああゝ!!!」

膝を着いて泣き崩れた。

嬉しいんだ、今までみんなは俺の事を覚えていなかった。しかし、このライムだけがほとんど会ったことがない俺を覚えていてくれた。だから嬉しかった。

ライム「ちよっ、大丈夫ですか?! 神司さん！」

神司「良かった、良かったよぉ〜！」

ライム「神司さん本当に大丈夫ですか!？」

心が落ち着いてから今までの事を全てライムに話した。

ライム「なるほどねえ。私の能力の『支配されない程度の能力』が起きたから私には効かなかったのかな。それでもこれは酷すぎるね。心を操る妖怪でもいるのかな…。」

神司「俺も分からない。悪魔でもそんな能力を俺は知ってないし…。」

自分の精神状態を通常に戻すのを兼ねて二人で雑談をしていた。

ライム「——そうそう、お兄ちゃんは紅魔館に行っても居ないよ。最近お兄ちゃん一人で家を創ったから。」

神司「そうなの…か…ッ！誰だ！」

ライム「えっ!？」

ライムの後ろの草むらから気配を感じた。しかしそこから出てきたのは、チルノ「あ、あたいさ！さいきよーのチルノ様だぞ！」

大妖精「ちよつと、チルノちゃん。」

紅霧異変の時に霊夢に吹き飛ばされた、シロの友達のチルノと大妖精だった。

神司「えーつと確か…、シロの友達のチルノと大妖精か。」

大妖精「貴女は誰ですか？」

神司「唐突だね、まあ二人とは初対面だしね。俺は神司。今は…ライムごめん、俺の代わりに今までの説明を…」

ライム「分かってるよ、神司さんは休んでいてね。」

ライムは俺より前に出ると、

ライム「私は紅風　ライム。紅風　亜無の妹です。で、神司さんが話したかったのは

…」

く少女説明中く

大妖精「そうだったのですか…」

チルノ「どういうこと？」

ライム「だからね、神司さんの知人みんな神司さんの事を記憶から消えちやっつたというわけ。」

チルノ「あたいは覚えてるよ？」

ライム「それはチルノちゃんと神司さんは初対面でしょ？」

チルノ「そっか。」

大妖精「それで、神司さんはみんなの記憶を戻すために今考えているということですね。」

神司「うん：そういうこと。」

大妖精「残念ですが、私たちは力に成れません。すみません。」

神司「いや良いよ。それでも力に成ろうとしてくれただけでもありがたいよ。」

チルノ「またね！神司！」

大妖精「それでは頑張って下さいね！」

二人はそう言って帰って行った。

記憶操作の妖怪、もしくは悪魔か天使。

絶対に俺は許さない。見つけ次第ぶっ倒してやる。

## 第91話 零愛誘拐事件

シロ「洗濯物干してきまゝす。」

星花「あいよく、気をつけてね。」

零愛「ああ〜う〜」

なんだろう、この違和感。普通な生活な筈なのに。

サグメ「ドラくん。」

ドラ「はい、どうしました？」

サグメ「……いや、何もないわ。」

ドラ「変な違和感のことですか？」

サグメ「!? 何で知ってるの!もしかしてドラくんも…」

ドラ「はい。何か大きな存在を忘れてる気がするんです。」

シロ「あつ、それ私も思った!」

洗濯物を干し終わったシロもこの話に参加していた。

サグメ「シロちゃんも?」

星花「何々? 何の話?」

これで全員が話に参加した。(ただし零愛はまだ喋れないので不参加。)

サグメ「今日もだけど昨日から何か違和感ない?」

星花「判る、確かあの女性が来てからだよね。」

ドラシロ「あの女性?」

サグメ「あの女性って…黒い髪の少し低い声の人?」

星花「うん、何か焦ってたよね。」

サグメ「あの女性、なぜか零愛のこと知ってたし、ドラちゃんとシロちゃんのことも知ってたのよ。」

シロ「ストーカー?!」

サグメ「いやでもストーカーじゃない気がするんだよね。」

星花「誰だっけあの女性、何か自分の名前言っただけ?」

サグメ「言ってた言ってた!何て言っただけ…。」

すると零愛が何か叫んでいた。

四人「えっ…?」

零愛「かーちや、とーちや、しーじ!」

サグメ「『お母さん、お父さん、しーじ』?」

星花「ああ!思い出した!」

零愛「びあああ！」

急に星花さんが大声を出したので零愛が泣き出してしまった。

星花「ごめんね！零愛ちゃん！」

私が零愛を抱っこして泣き止みます。

サグメ「大丈夫だよ、零愛ちゃん。」

ゆさゆさと揺らしてあやす。

零愛「ひぐっ…ぐすっ…」

泣き止んだけど泣いたあとで顔が真っ赤になっていた。

改めて星花さんから話を聞く。

サグメ「それで、何を思い出したのですか。」

星花「零愛ちゃんのお陰だよ、確か神司しんじって言ったの。」

サグメ「神司？」

大きな物音と共にドアが飛んでいく。そこからクワガタの刃の様な武器を持った不思議な少女が出てきた。

？「やれやれ、やっぱり厄介なガキだな。零愛ちゃんは。」

四人「!!？」

まさかの喋ったのは少女ではなく不気味な武器の方であった。

ドラ「誰だ、貴様は。」

？「おお失礼、この娘の名前はアドラエル。そして私がスカノレと申します。」

サグメ「先ほどの口調とは思えない話し方ですね。」

スカノレ「……そうだな、畏まったしゃべり方は俺もムカつく。しっかし、先ほどの貴女の言い方……我々に喧嘩売っているのでしょうか。」

サグメ「貴方ですよね、家のドアを壊したのは。」

スカノレ「まあな。」

アドラ「早くしよう、スカノレ。」

スカノレ「そうだな……さて、任務をこなすか。行くぜ、アドラ。」

みんなの目に見えない速さでアドラが零愛の首を持っていた。

サグメ「零愛ー!!」

アドラ「任務は……殺すこと……。」

ドラ「させるかア！」

スカノレで零愛を攻撃しようとした瞬間にドラが雷炎で受け止める。

スカノレ「アハハア！流石だなあ！神司の従者は！」

ドラ「神司って誰だ！」

スカノレ「あれ？お前のご主人様だろ。稀神きしん 神司しんじって。」

ドラ「誰だ：ッ！」

急に頭に激痛が走る。どうやらこの痛みは零愛とアドラ、そしてスカノレ以外の皆になつてゐるようだ。

アドラ「油断：だよっ！」

アドラはスカノレでドラの体に突き刺す。

ドラ「かはっ：ッ！」

アドラ「あどら知つてるよ。貴方とそこの妹は神司の従者で不死だつて。」

スカノレ「そうだぜ！アドラ！コイツは死なねえんだ！」

するとシロが怒りだして嫉妬の拳銃を取り出して撃つ。

シロ「お兄ちゃんを虐めるなあ！」

アドラ「ほらね、やっぱり貴女がこの獣人の妹だ。」

アドラはドラからスカノレを抜いて弾を弾く。

アドラ「効かないよ。」

シロ「ハアアアア！」

シロは水で作った槍をアドラに投げつける。

シロ「水槍『アクア・グングニル』！」

アドラ「ッ！」

アドラの腕に刺さり倒れる時に零愛を振り落とす。

サグメ「零愛！」

星花「よっ！」

星花さんが零愛を上手くキャッチした。

星花「へへへっ。」

サグメ「星花さん……」

スカノレ「アドラ！」

倒れるアドラに声を掛ける。

すると、むくつと起きるアドラ。

アドラ「……」

スカノレ「アドラさん……？」

アドラ「皆殺しだよ……！殺るよ、スカル。」

スカノレ「でも今回は零愛ちゃん誘拐だろ!？」

アドラ「うるさい。」

スカノレ「やれやれ、主に怒られても怒るんじやねーぞ。」

ドラ「させるかよ！雷斬『雷一文字』……！』」

シロ「水槍『アクア・グングニル』！」

二人は思いきり攻撃するが、全て避けられてアドラの黒いスカルを浮かべた攻撃にやられて首を切られる。

アドラ「怖がらなくても大丈夫。痛み無しで安らかに眠らせてあげる。」  
優しい声だった。気づけば私は真つ暗な世界にいた。



夜の森の中、気絶した零愛を掴んでアドラは歩いていた。

スカノレ「それにしてもよく、アドラちゃんは優しいよな。」

アドラ「何が？」

スカノレ「だつてさ、アイツらを殺さずに気絶させただけなんだから。まあ、獣人兄妹は首斬ったけどよ。」

アドラ「命令だから。」

スカノレ「あつ、なるほど。」

アドラ「あと、あの獣人兄妹を先に殺すことで残りの不死じゃない奴らに恐怖を植え付けられる。だから先に獣人兄妹を殺した。」

スカノレ「まさかそこまでお考えとは…。」

アドラ「スカノレの頭の回転が遅いだけ。あどらは正常。」

スカノレ「たまに毒舌だよねえ…。」

二人はそう話しながら主の元に歩いた。

## 第92話 恐怖

背中から悪魔の様な羽根が生えて妖怪の森を半壊させる。いくつものクレーターも出来ていた。

神司「あ”あ”あ”あ”あ”あ”!?!”

ライム「落ち着いて！神司さん落ち着いて！」

なぜ俺がこんなに暴走しているのか。これは数時間前に至る。



神司「それでさ…。」

ライム「なるほど。」

俺はライムと雑談して心が落ち着いてきた。いつの間にか二日目の夜が来ていた。まさか一日ライムちゃんと話していたとは…。

すると大きな物音が聞こえた。

聞こえた方向を見ると我が家の方向であった。

俺とライムは急いで我が家に向かって走った。

く青年少女移動中く

着けば家の壁は二枚損傷、床に血だらけのドラと首もとに血が溜まっているシロが倒れていた。

まだ立っている壁にサグメと姉ちゃんが埋められていた。サグメと姉ちゃんの体は切り傷だらけだった。口から血も垂れていた。

周りを見た。大事な娘、零愛が居なかつたのだ。唐突に理解した。零愛が誘拐されたのだと。

神司「あ”あ”あ”あ”あ”あ”!?!”

俺は周りの森を破壊し始めた。

絶望した。記憶は無くされているが大事な家族だ。俺が不在な間に大事な家族の家に奇襲されたのだ。怒り狂ってしまってせつかく落ち着いてきたのに落ち着けなくなつた。

ライム「落ち着いて！神司さん落ち着いて！」

ライムが俺に落ち着いてと叫んでいる。しかし落ち着いては狂い始めていた。

ライム「神司さん！」

ライムが一発神司に弾幕を撃つ。

神司「何だよ…俺を落ち着かせる気か？」

ライム「今はそんなことする暇は無いですよ！貴方、サグメさんたちの息を確認しましたか?!してないですよね！パツと見ただけですよね?!まだ死んだと確信できますか?!」

神司「……ごめん。」

ライム「何がです。」

神司「先走ってしまつてごめんなさい…。」

ライム「…はあ、行きますよ。なので背中の羽根、片付けて下さい。」

神司「えっ…?」

背中を触ると生々しい物に触った。

羽根を動かそうと意識するとバタバタと飛んで少し浮かんだ。

神司「うわあ!？」

ライム「大丈夫ですか!？」

神司「無くなれ!無くなれ!」

すると急に羽根が消えて下に落ちた。

神司「いてっ!」

どうやら羽根の出る出ないは意識が必要のようだ。なら何であの時に羽根が生えたのだろうか。今はそんなことはどうでもいい。

俺らは急いでほぼ全壊している家に戻ってサグメたちの息を確認した。

神司「良かった…。」

ライム「星花さんもしつかり生きています。」

神司「ありがとうございます。」

良かった、ライムが俺を止めてくれなかったら今頃サグメと姉ちゃんは死んでいたかもしれない。

ライム「神司さん…。」

神司「どうしたの？」

ライム「サグメさんたちから能力の反応があります。」

神司「！ それは本当か。」

ライム「私は少しレアな白狼天狗の紅風　ライムです。怪しい能力が嗅ぎ分けれます。あと私の能力でその能力を取り除けます。」

神司「ごめん…ライムちゃん、頼んで良いかな…！」

それしかない。今はライムちゃんに頼るしかない。

ライムは能力を使用してこの場にいる皆の記憶を戻してもらった。本当に大丈夫な

のだろうか。そこだけが心配だな。

ライム「はい、終わりましたよ♪」

神司「ごめんねえ、ライムちゃん…何から何まで…!」

自然に目から涙が出て土下座の様な格好していた。

ライム「いやいやっ!そこまですなくていいよ!」

神司「ありがとう…!ありがとう…!」

感謝で一杯だ。俺は泣き止んでからまだ布団やベッドが残っているか確認してから怪我しているサグメと姉ちゃんを寝かせた。そのあとドラとシロには布団を掛けた。

俺は泣き疲れて寝てしまった。ライムも能力を使いすぎてか寝てしまった。

くある洞窟く

スカノレ「主イ、例のガキを連れてきましたぜエ。」

アドラ「連れてきた…。」

洞窟の中では主と思われる少年と零愛を持ち帰ったアドラとスカノレが立っていた。主と思われる少年は王座にゆっくりと座った。

主「早かったな。」

スカノレ「まあな。」

すると洞窟の上に逆さで立っている少女がアドラに話しかける。

少女「聞いたよアドラ、アイツの家族に手エ出したんだって？」

アドラ「あつちから仕掛けてきた…。」

少女「知らねえよ、手出したのは間違いないんだよ。しかも稀神 サグメにも手出したのか？」

アドラ「誰それ…?」

少女「白い髪に白い羽根片方しかない天人のことだよ。」

アドラ「…。」

スカノレ『嘘つけよアドラ。姉貴にお仕置きされるぞ。』

アドラ「あどら気絶させた…。」

スカノレ「うおおい！」

少女は下に降りると頭の白い角を見る様になる。

すると少女は能力を使用して主と少女の位置以外の洞窟の地面を回転する。

アドラ「うわっ……!!」

スカノレ「ああ、もう!」

少女「絶対ガキを落とすなよ。あと傷つけんなよ。」

能力を使つて上下左右自由に操つてアドラをお手玉の様に遊ぶ少女。

少女「ボス、あと何回回します?」

莉亜「そうだな……まあ、正邪の好きな通りに回しとけ。飽きたら止める。」

少女の名前は正邪であつた。

正邪は昔サグメと神司たちといたが反抗期で正邪はどこかへ行つてしまった。そのため神司は正邪を探すが全然見つからなかつた。それもそうだろう、正邪はこの洞窟に住んでいるのだから。

すると正邪はニヤニヤしながら、

正邪「了解、ボス。」

主「ただし殺すなよ、アドラは良い駒なのだから。」

正邪「あいよ。」

主は洞窟の奥深くに歩いて行つた。

正邪はゲスい顔になるとアドラをもつと早く回転させ始めた。

この夜、アドラエルの断末魔がこの洞窟内で響いていた。

## 第93話 協力の願い【前編】

アドラ「……」

正邪に遊ばれたアドラは今…零愛っていう小さい子どもを籠に入れて移動していた。本当はこの子どもは逃がしたい。でも夜になればこの子は妖怪に食べられちゃう。

あどら「あなた…逃がしてあげよっか。」

スカノレ「おい、アドラ。このガキを逃がしたいのは判るが今はダメだぜ。」

アドラ「でもこのままだと主に殺されちゃうよ。」

スカノレ「でもなく…ええ…」

スカノレは少し考える。

アドラと一緒にあのガキを逃がすと俺らは主を裏切ることになるよな…

スカノレ「しやーねえ、ここは悪魔の俺が残ってやるよ。急いで行ってやれ。」

アドラ「…！ありがと…。」

アドラは走ってほぼ全壊させた家に戻りにいった。

◆  
神司「……」

そっか、昨日は夢じゃなかったのか。体を起こすとサグメがご飯を作っていた。

神司「……サグメさ……!」

唐突に怖くなった。もしもライムちゃんが失敗してサグメの記憶に俺が居なかったと思うと恐ろしかった。

するとサグメが火を止めてこつちに歩いてきた。

サグメ「……」

神司「……ツ。」

今、にらめっこ状態になっているが俺は恐いので目を反らす。

サグメ「……お帰りなさい。」

神司「!?!」

小さな声でそう言って俺に抱きついてくるサグメ。

良かった、ライムちゃんの能力は成功していた。

神司「……ただいま……。」

サグメ「んっ?!」

俺も抱き返してゆっくりと口づけする俺。それに驚きを隠せないサグメ。俺は少し

熱いキスをしてからそつと口を退かす。

サグメ「はあ…はあ…／＼」

神司「ごめん、サグメ…あまりにもサグメが居ることに安心できてさ。」

サグメ「だからつて口の中に舌入れます!？」

神司「あははつ、ごめんな。」

サグメ「もう…!？」

またサグメは俺に抱きついてきた。俺も抱き返す。

星花「はいはい、イチヤイチャは外でやって下さい。」

神・サグ「!!?」

いつの間にか起きていた姉ちゃんに驚いてサグメを退かしてしまった。

神司「なつ、何がだよ。」

サグメ「そうですよ…星花さん…!？」

星花「あれ?サグメの喘ぎ声が聞こえたんだけどなあ。」

サグメ「そつ、そんな…／＼あれ…?声出てたっけ…?？」

神司「いや、出てなかったよ。」

サグメ「星花さん!？」

俺たちはじゃれあっていた。

子供たちはまだ寝ているが。



神司「今は神ノがいないからな…。」

零愛が誘拐されてから三日がたった。

その間、ライムに頼んで紅魔館フアミリーの記憶と霊夢と魔理沙の記憶から俺を思い出してもらった。

本当にライムには感謝しきれない。

神司「——そういうことなんだ。頼む！」

今は紅魔館で零愛救出のために仲間を集めていた。

俺はレミリアのいる王室にいた。扉の前には咲夜が立っていた。

レミイ「それで？我々にはどんなメリットがあるんだ？」

レミリアは玉座に肘を付いて威圧感を出して俺を見下す。

これは俺の返答次第、殺される…。

神司「……メリットは……貴女様……いや、お嬢様方が危険な時に一度だけ死守します。」

レミイ「一度だけか？」

神司「はい……！」

レミイ「なら無理な——」

神司「俺が助けてもらうのは今回『一度』だけです。なのでお嬢様方が危険な時に一度だけ助けます。」

レミイ「……」

神司「……」

空気が痺れる。俺が口を出すのは禁句だろう。俺は黙っているしかない。

レミイ「……フフツ。」

神司「！」

急に笑い出すレミリア。

レミイ「面白い！その話、我々紅魔館の皆も参戦するぞ！」

神司「……！あつ、ありがとうございます！」

レミイ「咲夜！至急フランと黒フラを呼んできてくれ。」

咲夜「はい。」

咲夜は時を止めてフランと黒フラを呼びにいった。

レミイ「光矢。」

光矢「はい。」

光矢が見えない速さで出てきた。

レミイ「神司を外まで送ってあげなさい。」

光矢「了解しました。」

光矢と一緒に外までの廊下を歩いていた。

光矢「何だっけ？零愛ちゃんを助けるんだっけ？」

神司「うん、あと相手は強いらしいんだ。ドラとシロを倒したほどだ。」

光矢「ドラちゃんとシロちゃんとは戦ったこと無いからね。あつ、そうだ。」

神司「どした？」

光矢「俺と亜無も参戦するからな。大船乗った気持ちで行けよな。」

何だろう…安心感が全く無い…。いや、光矢は強いだけだな。

でも有難い。亜無と光矢がいるのなら安心はできる。

神司「ありがとうな…。」

俺は外まで送られて光矢と美鈴に手を振って家に帰った。

## 第94話 協力の願い【後編】

く博麗神社 境内く

神司「——こういうことなんだ。」

霊夢「でもねえ、異変じゃないし…。」

神司「そこを何とか！」

博麗神社の境内で霊夢を呼び出して零愛救出に手伝ってもらおうべく手を合わせて願う。

? 「いや、これは異変じゃなくて事件ですよね。」

神司「！」

声が出た方向を見ると地霊殿の主の古明地 さとりが立っていた。

霊夢「さとり…!?!」

神司「さとり…」

さとり「異変ならともかく、零愛ちゃんが誘拐されたのなら私も参加します。」

霊夢「『も』って…まるで私も入っているみたいじゃない!」

さとり「貴女とは言つてません。ただ、紅魔館の皆のことを言つただけですよ？」

霊夢「ええ……？」

さとりの顔がニヤけて霊夢を見てクスクスと笑う。

霊夢「何よ。」

さとり「いえ、博麗の巫女は異変じゃないと動けないのですね。つまり、友人の願いでも無理だと。」

霊夢「いいえ、まだその話を断つてはいないわ。」

霊夢は俺の方に向くと、真剣な顔つきになつて答えた。

霊夢「神司、私も参戦——」

霊夢が言い終わる直前に大きな物音と共に少女が落ちてきて砂ぼこりが起こる。

霊夢「まさか……」

神司「うん、そのまさかだろうな。」

さとり「ええ。」

砂ぼこりが止むと箒が転がってきた。俺ら三人はため息をつく。

少女「いてて……」

神司「大丈夫か？ 魔理沙。」

俺は魔理沙に手を差しのべる。すると魔理沙は俺の手を掴んで立ち上がった。

魔理沙「ありがとうだぜ、神司。」

そう、箒に乗って空に飛ぶのはだいたいの魔女である。その中でもよく幻想郷を箒に乗っている少女といえ、霧雨 魔理沙、ただ一人だ。

霊夢「それにしてもどうしたの。」

魔理沙「そうだ！霊夢！変な奴らが人里に現れて暴れているんだよ！」

三人「えっ!?!」

魔理沙と共に急いで人里へ向かう。

着いた俺らが見た光景は体が刃の様な奴や人形で両手に筒を付けた奴らだった。

神司「おいおい……！奴らはまさか……！」

魔理沙「神司分かるのか!?!アイツらの正体！」

神司「アイツらは異形だ。なぜ急に現れたのか分からないけど、兎に角、魔理沙には通じるだろう、アイツらは魔神だ。」

魔理沙「魔神だと!?!」

霊夢「何よ、魔神って。」

魔理沙「魔神っていうのは悪魔が世界を変えるために造ったっていう殺人専用革命兵器だ。」

やっぱりな。魔理沙は魔法使いだから魔神の知識もあつたのか。あと悪魔の事も。

神司「あと、魔神を倒せる方法は物理攻撃だけだ。」

魔理沙「つてことは私は不要じゃないか！」

さとり「私もですね…。(あの異形というのは、暴走した怠惰さんに似てますね。)

霊夢「魔神、だっけ。アイツらに霊力は効くの？」

神司「えつとそれは…」

？「それなら俺が教えてやるよ。」

異形について全然知らない俺を助けてくれたのは怠惰だった。しかし、いつもの魔法使いたいな姿ではなくちゃんとした私服の様な格好になっていた。

神司「怠d——」

怠惰が俺の口を塞ぎ自分の口到人差し指を当てる。

怠惰「シー、俺が悪魔だと知られたら博麗の巫女さんが黙ってねえだろ。…俺はフェ

ル、魔神を造った一人だ。」

霊夢「貴方のせいなの？」

怠惰「いや、研究中に魔神ら逃げ出して自分の分身を作りまくっているんだ。」(大嘘)

魔理沙「そういや、さつき『それなら俺が教えてやるよ』つて…」

怠惰「ああ、アイツら魔神は先ほどコイツが言った通り物理攻撃、つまり通常攻撃のみということだ。ちなみに博麗の巫女さんの通常攻撃に霊力を使うのなら効く。しか

し霊力弾なら効かないだろう。ちなみに武器に何かしらの力を纏わせるのは有りだからな。」

霊夢「なるほど。」

怠惰「そしてコイツら魔神は身体を中心にある核を壊さなければならぬそうじゃないと幾ら身体を切断したりしてもすぐに再生してしまふ。」

流石にこの話を一番よく知っているのは怠惰だけだろう。

しかし、俺と霊夢、もしかしたら怠惰の三人しか通常攻撃が使えない。魔理沙とさとりは魔術と妖術なので戦えない。

怠惰「そうだ王、零愛ちゃんが生きて監禁されている場所を確認したぞ。」

神司「それは本当か!？」

怠惰「本当だ。あと、紅魔館に魔神の襲撃、敵の本拠地を守っている異形を発見しました。」

神司「そうか、フェルは今からどうするんだ。」

怠惰「俺は今から紅魔館に参戦してくる。この場には強欲のマモンを置いておく。」

神司「今幻想郷に居るのか強欲が?」

怠惰「ああ、強欲は幻想郷で鍛冶屋してる。ついさつき話して来たからすぐ駆けつけてくれるだろう。」

まさかの強欲が幻想郷に居るとは。

神司「了解。」

怠惰「あつそうだ、今回の異変は博麗の巫女や他の人には対処できない。なので戦力はできるだけ上げておいた。それに王にとっての大きな存在からの伝言だ。『もう十分体は休んだだろう。だから俺が到着時に憑依する。』と。」

神司「りよーかい。」

なるほど。『憑依する』、つまり奴が戦力になるということか。

神司「霊夢！」

霊夢「何？」

神司「俺は今から零愛救出に向かう。」

霊夢「ちよつ、それなら私一人で戦えつて言うの!？」

怠惰「それなら安心しろ。今から俺の友人が駆けつけてくれるだろう。」

霊夢「その友人は大丈夫なのね？」

怠惰「フツ、俺の友人は剣術のスペシャリストだ。」

霊夢「なら安心ね。」

安心なのかよ。

神司「それじゃあ耐えてくれよ！」

霊夢「神司の方も零愛ちゃん絶対に救出しなさいよ！」

神司「当たり前だ！」

怠惰に場所を聞いてから一度すぐに我が家に向かった。

すると我が家の玄関前には異形が数体いた。しかし現在の我が家は壁がほぼ無い。そして家族たちは怪我を負っている。

すぐに邪楼剣を構えて核に貫通させて一体倒した。

神司「大丈夫か!？」

すると家の中から中からサグメが出てきた。

サグメ「神司！」

サグメが走って俺に向かっていたがサグメの後ろに刃の異形が飛び掛かって来ていた。

神司「後ろ！サグメ！」

ドラ『『雷速』！』

ドラが『雷速』を使つて異形の核を雷炎で潰す。

ドラ「大丈夫ですか？」

サグメ「ありがとう、ドラくん。」

神司「ありがとう、ドラ。」

ドラ「いえいえ。しかし神司様。」

神司「ああ、物理攻撃しか効かない異形がなぜこんなに。」

しかもどんどん増えていつている。コイツらはまともに戦える奴らじゃない。丸ごと倒そうとしても魔法を使うことになるし(効かない)、一体一体倒してもどんどん増えていく。今こうして考えている間にも増えている。きりが無い。

神司「くそっ……って、おいおいおい！」

俺は一体何を今まで勘違いしていたんだ。異形、つまり魔神の倒し方は『核を潰すこと』つまり、魔法攻撃でも核を潰すことができるのなら。

神司「実行しようか。」

俺は周りに刀を九百九十九本設置した。

俺の推測があつていれば……

神司「神剣『千本刃』。」

一体一体の核に的確に刃を貫通させる。すると異形たちは残り一人を残して消えた。神司「トドメだ！」

最後の異形に邪楼剣で核を切り飛ばす。

すると最後一体も消えていった。

俺の戦略勝ちだ、まさか出来るとは思わなかったが何事を挑戦なんだと学んだ。



急げ、早く稀神の家に向かわないと！

アドラ「はあ……はあ……」

後ろから異様な気配がする。もしかすると、アイツが送り込んだ仲間なのか…。

アドラ「はあ……鬱陶しいな…。」

ホントに急がないと零愛を渡す前に追いつかれる。

するとやつとすることに稀神の家が見えた。

アドラ「見つけた…！うっ…!？」

電気のようなビリビリ感と甘い香りを嗅がされた。

唐突に理解した。敵に追いつかれたのだと。

悪魔「コイツ、一応幹部の一人なんだよな。」

異形「ラシイヨナ、デモコイツカワイイヨナ…♪」

悪魔「主からの命令はアドラエルを捕らえるだけだから気絶させたんだ。そうだな、簡単に捕まって時間も余ったし一発ヤリますか。」

異形「ソレモソウダナ、俺ノ触手が暴レルゼ！」

？「五月蠅い、しかも少女に性的行為か？まさかと思うが零愛を誘拐したのはお前らか？」

悪魔「ケツ、その声は神司かよ。」

異形「気ツカナイノカ？コイツガ持つツテイル籠ニ入ツテイルノガ例ノ零愛チャンダ。」

俺は少女が持っている籠を見つけて中身を見ると可愛く寝ているがボロボロに怪我をしている零愛の姿があった。

ボロボロの姿を見た瞬間怒りが溢れ出してきた。

悪魔と異形が俺に不意打ちを掛けてきたが瞬間に邪楼剣を抜いてバラバラに切り刻んだ。

俺は零愛が起きないように籠を持って少女を担いで家に戻った。

## 第95話 組織、始動ッ!

「ある洞窟の牢屋」

ガンガンと鳴り響く牢屋の前に主と正邪が立っていた。牢屋の中には最も異形らしい異形と人間の様な悪魔が入っていた。

主「やつと君たちの出番かもしれないね……。」

異形「ココカラ出セヨ!!」

異形は牢屋の柵を殴る。この鳴り響く音の原因はこの異形であった。

正邪「五月蠅いなあ。」

異形「黙レ、天邪鬼ゴトキガ。」

正邪「何だって!?!」

暴れる正邪に追い討ちを掛けるように悪口を止めない異形。

主「お前ら静かにしろ。」

主の一言で二人は黙った。

悪魔「……お前ら、まるで子供だな。」

異形・正邪「!!」

悪魔の煽りに反応する異形と正邪。異形は殺気を悪魔に向けて放ちながら首もとを触手で持ち上げる。

異形「五月蠅イゾ、煽リハホドホドニナア。」

悪魔「うるつつさあいいイイ!!」

悪魔は異形の身体を思いきり殴り、異形の腕を自身の首に残して身体が牢屋の壁を貫通して隣まで飛んでいった。

主「良いね、腕は落ちてないようだ。」

正邪（喧嘩買わなくて良かった…!）

すると隣の牢屋から異形が出てきた。

異形「アアー、首イテエー。」

首を左右に曲げて片腕の触手を再生させながら首を直す異形。悪魔はまだ牢屋の中に居た。

主「そーいやお前らの名前を聞いてなかったな。」

異形「俺ハ、【闇の悪夢】、ダークネスⅡナイトメア。」

悪魔「俺は破壊と殺戮のザキ。」

主「今後も宜しく頼むぞ、ダークとザキ」

二人「ハッ。」

二人は主の前に跪く。やはり、ザキは牢屋の中である。

主「さて、お前らつて言つても、ザキに任務を下す。あとダーク、お前の声聞き取りにくいから声を変えておくぞ。」

ザキ「はい。」

ダーク「有り難キ幸セ。」

主は二人の頭の上に手を置いて任務の状況を話す。ダークだけには声を変える機能を追加した。

主「一人、いやあれば二人か。まずはこの組織からの二名の裏切りに刑罰を実行したい。なのでザキは現在拘束中の悪魔に罰を下してくれ。」

ザキ「はいっ。」

主「もう行け。」

主に言われた瞬間ザキは移動を始めた。

主「ダークはもう一名の裏切りを気絶させて連れてこい。先ほど任せた二名の悪魔と異形の通信が切れた。俺の予想だと神司に殺られただろう。稀神の家に向かえ、そして零愛という子供も連れてこい。つまりもう一名の駒を貰うのと子供を拐え。」

ダーク「つまり、アドラエルと稀神 零愛を捉えれば良いと言う訳ですね。」

主「承知しているのなら早く行け。」

命令されたダークが稀神家に向けて移動した。

正邪（ヤバいかも……！サグメに言わなきや……）

主「なあ正邪……」

正邪「な、何だ？」

正邪の方に顔を向けずに主は問う。

主「お前は流石に裏切りは無いよな。」

正邪「当たり前だろ。ボスと私は初めて目的が一致したからな！」

主「だよな……」

しよんぼりとする主、それに疑問を思う正邪。

そんな空気の中に壁が粉碎されたかの様な音が鳴り響く。

正邪「何だ!?この音は！」

主「クツクツク、ザキのサンドバッグが始まったようだな。」

正邪「なっ!まさか……!」

正邪が音のする方に走ろうとすると主が正邪の腕を掴んだ。

正邪「離せよ!」

主「なぜ?」

正邪「なぜって…」

主が殺気を放ちながらもう一度正邪に問う。

主「なぜお前は俺に命令する。」

正邪「…ツ！」

主「ザキと遊んでくるか？それとも俺に洗脳されるか？」

正邪「くっ…」

主は正邪から手を退かす。

主「…これでもまだ俺は忠告してるんだ。」

主はニヤリと笑うと、

主「まだ俺よりも上がいることを忘れるな。」

静かにそれを言い残して主は牢屋の部屋から去っていく。



一方、神司たち、

神司「ただいまー。」

サグメ「お帰り…神司さん！その娘から離れて！」

ドラ「アイツ…！」

俺以外の全員がこのアドラに向けて構える。

神司「待てよ！コイツは零愛を——」

星花「邪魔だよ、我が弟。」

姉ちゃんが蘿を操って俺の体を持ち上げる。持っていた籠も取り上げる。アドラは

両腕と両足を蘿で拘束する。

サグメ「神司さんは黙ってて下さい。」

星花「さあ、起きなさい。」

ペチペチと蘿を操ってアドラの頬を叩く。するとアドラはゆっくりと目を覚ます。

アドラ「えっ、えっ？」

状況を把握していないアドラは力任せで蘿を千切ろうとしたが蘿が硬くて切れない。

星花「切れないよ。あと、私たちの顔に覚えは無い？」

アドラ「あどらが倒した人たちだ…。」

どうやらこの少女の名前は「あどら？」と言うらしい。

さつきからの姉ちゃんたちと”あどら?の話を聞くと尋問のように感じる。

そして約一時間に渡る尋問が終了した。

“あどら?の話によると、本名は『アドラエル・マレット・キラティナイド』。『マレット』が付いていることに皆が驚いた。まさか、ドラとシロの実の母親だったこと。しかしアドラエル自身は『主』という上司に必要なこと以外記憶を消されているらしい。そしてやっと目的の本性を聞き出せた。どうやら上の上司の『主』が零愛を拐えと命令したらしい。しかしアドラエルは零愛を拐ったは良いが、可哀想と感じたらしく零愛一人では動けないのでアドラエルの手で逃がしに来たらしい。そして道中に俺が倒した悪魔と異形に気絶させられた、と。

話が終わったので俺と零愛が入っている籠とアドラエルが蘿から解放される。

アドラ「——それがあの組織の目的だよ…。」

神司「それにしても何故『主』は零愛を誘拐する作戦を立てたのか。」

シロ「色々大胆だね。」

ダーク「ああ、それが我らの組織全体の動きだからな。」

神司「へー……って!？」

皆がいつの間にか入っていた侵入者から離れた。

神司「いつの間に……！」

侵入者の姿は黒い頭に頭から四本の腕、執事服に黒いズボンでマントが着いていた。

背中からは四対の鋭い腕が生えていた。左腕は刃物の様な形で右腕は触手、両足も触手である。

ダーク「クアハハハ、初めましてですねえ！俺はダークネスⅡナイトメア！アドラエルと零愛を連れ戻しに来た！」

神司「神剣『千本刃』！」

千本の刃を飛ばすが触手で払われる。

ダーク「さあ、光の世界を影に変えてやるぜ……。」

奇妙にニヤリと笑って触手を暴れさせた。

## 【番外編】神司の過去

昔々宇宙もなく惑星が一つしかなかった時代のこと。そこには最高神のゼウスが雲の上で人間の生活を見守っていた。そして死んだ者は冥界にはハデスが存在する時代であった。これを現代の人々は「ギリシア神話？」と言っていた。さて話は戻すがある時他の家とかは大きな宮殿な筈なのに野原に一つの貧しい家がポツリとあったそこには四人の家族が居た。父母姉。そしてこの話の主人公の弟が住んでいた。ただし幸福や幸せとまではいかず母は病気でタナトス（死）が母の隣にいた。つまり父と姉と弟が母の病気を看病しながら生きていた。

母「ああ…星花<sup>せいか</sup>…神司<sup>しんじ</sup>…。母は大丈夫よ…。」

姉の名前は星花せいかという名前前で弟の名前が神司しんじだった。

父「心配するな！私たちがいるからお前は死なん！」

（死）「残念ながらハデス様が決めたことだ。貴方の奥さんはあと数日で死んでしまわれる。だが安心して下さい。ハデス様がきつと…きつと…この奥さんを転生させて下さる筈です。」

父「誰が安心出来るか！たった一度の人生に死の神に理解出来るのか!?ただでさえ貧

しいのに母と姉の星花も病気だぞ!？」

そう姉の星花も病気で命の危険があるのだ。だが母の方がもつと深刻であった。

父「そしてタナトス！お前の主人…そしてこの世界を産んだ神が我々の敵になる！何故だ!?何故なんだ！何故…!」

と父はタナトスの服の袖を掴みながらそう叫んでいた。涙も大量に流していた。

そんな暗い空気に姉の星花が神司の袖を持って「花を積みに行こう!」と言つて野原の花が綺麗に咲いているところまで走つて行つた。

星花「やつぱり綺麗に咲いてるわね。」

神司「うんそうだね！姉ちゃん!」

星花「これを全部積んだらきつと母も喜んでくれるわ!」

神司「えっ!?これ全部…!？」

ここにある全部の花を積もうとすると軽く3tは越えるだろう。それを姉の星花は積もうと言っているのだ。どう見ても無茶でしかない。

神司「わかつたよ。俺も手伝うから全部の花を積んで母に見せて驚いて病気を吹っ飛ばして上げよう!!」

星花「エイエイ…」

神司「オー!!」

く数分後く

星花「これぐらいで良いでしょ！」

やっと二人で持てる様な大きな花束が出来た。ロープは家から持つてきて結んだ。

星花「さあ！家に帰るわよ！」

神司「うん！」

二人は仲良く母父がいる家に向かった。

その時…不幸が起きた。一本の光の線が星花の胸に小さな穴を開け星花は血を流して倒れた。その時二人で持つのが精一杯だった花束が散りばめた。

神司「えっ…ね、姉ちゃん…？どうしたの…？急に倒れて…！…！…！血…！」

一人の神が天から降りてきた。そしてその神は神司に話しかけた。

神「フフフ…♪いやく俺って親切だよなく♪何てったって！もうすぐ死にそうな彼女を先に楽に死なせてあげたのだから！♪」

高らかに笑う神を神司は睨んだ。すると神は喧嘩を買った様に反応し、

神「ああ？もしかして俺を睨んでるの？」

すると神は神司の首を掴んで上に上げた。神司の体も上に上がった。

神司「うっ……う…。」

ただし神司は睨むのを止めなかった。

神「テメエは神の俺に喧嘩を売ったんだ。とうか！俺はお前の隣にいた彼女の為に殺したんだ！お前だって判っているだろう！？もうすぐで彼女は病気で死ぬ。だから俺は病気で苦しみながら死ぬより俺の力を使って殺してあげたんだ！そこ理解しろよな！クソガキが!!」

神司は怯まずにそのまま睨み続けた。

それを見た神は呆れて、

神「あーわかったわかった。そんなに睨むんだったら少しは限度を知ってもらわなきゃな。」

と言って神は神司の家、母父丸ごと光の線を飛ばして家を爆発させた。

神司「……」

神司は神を睨んでた目を跡形も無くなっている家を見て思考回路が止まった。

神「これがお前の結末だ。ちゃんと行動は考えてから行動しろ。」

と言って神は天の方に帰っていった。

神司「……」

神司は跡形も無く壊れた家の上に座っていた。そして何も感情も持たずまだ状況が

整理しきつてないのだ。ただし一つの感情が心の底から上がってきた。その感情が……『憎しみ』だった。

神司「……とりあえず……姉ちゃんのお墓でも建てるか。」

神司は星花を背負って誰も居ない様な森まで来た。そして神司はそこに星花を地面に下ろした。

そして神司は自らの手で地面を掘り始めた。そして星花が入るくらいまで掘った。

神司「さてこれくらいで良いかな。」

掘り終わった時の神司の手は土で汚れて血だらけになっていた。そしてそつと掘った穴の中に星花を入れて土を被せて埋めた。

神司「さてと……」

神司は森を出て町の方に歩き出した。そして町に着き親友のオーデインの家まで行った。そしてオーデインの家の前まで来て扉を叩いた。

オー「はい。あれ!?!どうしたんだ!?!神司!」

オーデインは真っ赤になった神司の手を見て驚いた。

神司「ははは、いや?少しオーに会いたくてね。ごめんだけど入れてもらえる?」

オー「べ、別に良いけど。」

オーデインは神司を家に入れた。

オー「神司、一体どうしたんだ？」

神司「何がだい？」

神司は敢えて知らないフリをする。

オー「気づいていないのか。今君の手は酷く血を流しているそして顔色は酷く真つ青だ。それはバレてはいけない何かを隠している顔だ。ほら、正直に言つてごらん？ 素直になれよ。」

神司「……はあ、今から今まで起きた真実を言うけど信じてくれるかい？」

オー「もちろん！ 何てつたつて俺らは親友だろ？」

神司「……わかった。それじゃあ話すよ。」

神司は家族が一人の神に殺された、そして姉、星花を埋めてここに来た話を隠さずそのまま話した。話している内に涙がぼろぼろと流した。だが話すのを神司は辞めなかつた。そして話終わった。

オー「…なるほどね…。」

神司「くそっ…！」

オー「まあ、まずは涙を拭いてくれ。話はそれからだ。」

オーデインは神司にハンカチを渡した。神司はそのハンカチで涙を拭いた。

神司「…ありがとう。」

オー「さて、その神の顔は覚えてるか？」

神司「もちろんだ。あの憎き神の顔が今は奴の顔しか思い浮かばない。」

オー「つまり恨みしかないと。」

神司「ああ、そういう事だ。」

オー「それなら見つけるのは簡単かもな。ほら、この紙にそいつの顔をスケッチしてみなよ。君の能力なら出来るだろう？」

神司「能力じゃないって……。」

神司はペンを持つて家族を殺した神の顔の絵を書き始めた。

すると神司は白い長い髪でキリツとした目付き、そしてしっかりとした顔つきを描いて最後に鼻と唇を描いた。その顔は女性の顔に近かった。

そしてその顔は自分の思った通りに描けていた。さらにその顔にオーディンには覚えがあった。

オー「あつ……！マジか……。こいつはミカエルだ。少し前にゼウス様がミカエルに殺されそしてそのミカエルが他の神を仲間にして軍を造ったんだ。そして他の神を殺した。残りはハデス様の冥界の神たちになった。確か神司の母の近くに居たのって……。」

神司「ハデスの仲間、（死）のサナトスだ。まさか……！」

オー「だろうな。ミカエルはハデス様たちを徹底的に倒すつもりだ。その時にお前の

姉、星花がいて病気の事を知り殺した。そして神司がミカエルに喧嘩を売りミカエルは神司の家まるごと壊して消した。その時『ついでに』居たサナトスと一緒に家族を殺したという訳だな。」

そうつまり、ミカエルの目的はサナトスを倒すこと、だったのだがミカエルは星花が病死しそうなのを勘づいて、

ミカ「コイツはどうせ死ぬんだし別に殺していいだろ。」

と心に思つて星花を『ついでに』殺したのだ。その後神司がミカエルを睨みミカエルは神司から喧嘩を売られたと察し神司の首元を持つて上げたのだ。そしてしつこいで目的を倒す為に神司の家もろとも消したのであった。

神司「…くそつたれ神野郎だな…オー、俺と一緒にミカエルを倒さないか？」

神司は真剣な顔でオーデイン言った。するとオーデインは笑い出した。

オー「フフツ…♪」

神司「なっ、なんだよ!？」

オー「いや？当たり前のこと言われたからさ♪いいよ参戦させてもらうよ。絶対ミカエルを倒そうな!」

神司「…!おう!」

神司とオーデインは握手を交わした。

神司「なら、作戦でも考えようぜ！」

オー「そうだな。そして地下に少し昔の資料に悪魔召喚の魔術書があったから少し漁ろうぜ。」

神司「ミカエルを潰せる様な悪魔を召喚しようぜ！」

そして神司とオーデインは魔術書を読んで読みまくった。するとオーデインが一つの資料を見つけた。

オー「神司、コレ……」

神司「うん、どうした？それは：『悪魔の王の召喚術』：王が出てくるのか!？」

オー「だっ、だろうな……。というか召喚する為にそれ対等の価値があるだろ……」

神司「……王ならミカエルを倒せるかもしれない。」

オー「待て神司、早まるな。まだ中身を読んでいないんだ。少し読ませてくれ。」

神司「まあ、それならしやらないか。」

オーデインはその魔術書を開いた。するとオーデインたちが読めない様な字で書いてあった。

オー「うわ……ごめん神司。まずは解説からだわ。これなら……三日だ。三日で解説するから待っててくれ。」

神司「わかった。その間ミカエルたちがどんな奴かを観てくるよ。」

オー「それはつまり外に出てクソ神たちを観察すると言うことかい？」

神司「そういうことさ♪大丈夫死にはしないさ♪」

そう言つて神司は一階に戻り外に出ていった。

オー「まあ俺はお前を信じるから良いけどその言葉、死亡フラグとか言つたら俺はお前を許さねえ。」

神司は現在ミカエルたちが居るであろう場所の真下にいた。

神司「う〜ん…どうやって上ろう。」

？「それなら俺が連れてつてやろうか？」

神司「誰だツ！」

神司が振り向くとそこには黒い服とズボンを着て上にパーカーを着た悪魔らしき者が立っていた。

？「俺は〃神ノ邪神？。天界から落とされて悪魔・邪神に成つた者だ。で、少年はどうしてこんな危ない場所の真下に居るんだ？」

神司「天界への偵察さ！あと少年じゃない！俺は神司だ！」

神ノ「おうおう、わかつたわかつた。偵察ねえ…今日は何時もよりミカエルとか他の神も荒れてるぜ？それでも行くのかよ。神司くん。」

神司「行くに決まつてるだろ！」

神ノ「一つ忠告をするぞ。『死ぬぞ……!』」

神司「うっ!」

神ノ邪神は神司の脳内に直接言葉を送った。

神ノ『痛いだろ?この苦痛よりも痛いのが今から行く場所だ。それでも行くのか?』

神司「も……勿論……」

神ノ「……判った、なら連れてってやるよ。ただし俺もついてくぞ?」

神司「ああ!お前が居れば百万力だ!」

神ノ(子供ってこんな面倒くさいっけ……)

そして神ノ邪神と神司は天界の方へ向かった。

神ノ「さてここが天界だ。」

神司「ここが……」

すると二人に気づいた門番が、

門番「お前らは誰だ!」

神ノ「…相手は二人か…神司くん、目を隠したまえ。」

神司「う、うん。」

神ノ邪神は神司が本当に目を隠したのかを確認してから素早く門番の頭を手刀で斬り落とした。

神ノ『邪神の悪魔箱』サキ。」

神ノ邪神は小さな箱から一つの球を地面に投げてサキを召喚した。

神ノ「よろしく。」

そしてサキは素早く門番たちタッチしてを果物に変えた。そしてまた球に戻って神ノ邪神の元に戻った。

神ノ「さて良いぞ。」

神司「…あれ？あの人たちは？」

神ノ「ん？交渉して帰ってもらったよ。」

神司「流石だ！」

神ノ「フフフ…さあ行こうか、そして急ごう。」

二人は門を抜けてミカエルたちが居る王宮の近くまで歩いた。

一方その頃オーデインは…

オー「……つた、やった！解読成功だ！」

普通なら三日掛かる解読を一日だけで終わらせたのだ。

オー「えーつと、何々…『悪魔の王の呼び方』…『1. 召喚者はまず魔法陣を床に

描いて呪文を唱える』『2. 悪魔の王が出てきたらまずは槍を掲げて悪魔に突き刺す』『3. すると槍から悪魔は召喚者の体へと入っていき悪魔の王本体と成る』……半端ねえな…迷つててもしょうがない！俺はこの悪魔の王に掛けるぜ！」

そしてオーデインはチョークで魔法書通りに魔法陣を描いていき呪文を唱えた。

オー「『ウオンシャジ・ガ・ルワラア』！」

すると魔法陣が光出し悪魔の王が現れた。そしてオーデインは用意した槍で悪魔の王を貫いた、と思つたら

オー「なっ…!!」

悪王『飽きたんだよ！テメエらの様な召喚者に呼び出されるのはよオオ!!』

悪魔の王はオーデインに直接脳内でそう叫んだ。

そして魔法陣から悪魔の王が出てきて歩いて怯えるオーデインを追い詰めた。

オー「ひい！」

悪王「フハハハハハ！そんな怯えた顔で見るなよ幼き召喚者！」

？「うるせえ、黙れ。」

悪王「なっ！テメエは…？ 邪神王?!？」

邪王「ゴミクスはだからゴミグズなのだよ。」

悪王「うるせエ!!」

悪魔の王は邪神王に殴りつけたが邪神王はそれを受け止めて悪魔の王の腹を殴り壊した。

悪王「ヴァガ…ジイシャンオ…ウウ!!」

邪王「クカカカ! 何だ何だ? 悪魔は腹を殴り壊したても尚生きていると聞いたのだが、俺様の間違いか。」

そして邪神王はオーデインを見て、

邪王「どうも、俺様は邪神王。お前が呼び出した者よりも階級は遥かに上だ。まあ、まずは握手でも…」

とオーデインに握手を求めた邪神王。オーデインは怯えながらも握手をするとオーデインでは見えない速度で掌から肩まで引き千切った。

オー「ぐぎやああああ!!!」

そして千切った腕を食べる邪神王。そして食べながら、

邪王「これで契約成立。むしゃむしゃ。」

と言葉を放ってオーデインに、

邪王「さて、どんな願いを求めているのですか? ご主人様…♪」

とニヤリとした顔つきで願いを求めた。

悪王「キツ…サマアア…!!!」

傷を治した悪魔の王が再び邪神王に殴り掛かった。

邪王「五月蟬い。」

邪神王は悪魔の王の頭から足へと思いつき殴り付けて微塵もなく殺した。

その衝撃でオーデインは頭を壁に打って気絶した。

邪王「さて、少年…気絶か。」

そして邪神王は座り一睡しようと思いを閉じた。

オー「…：…うう…。」

邪王「おい、小僧。生きてるか？」

オー「…はっ！腕は…。」

邪神王に喰われた筈のオーデインの腕はちゃんとそこにあった。

オー「あれ？」

邪王「いや、喰ったぜ？とても美味しかったからな。礼としてまた腕を生やしといてやったよ。」

何だ、結局喰われたのか。それに美味しかったのか…頭の中で自分の腕がまた喰われている姿を想像すると恐ろしく鳥肌が立った。

邪王「で？何で悪魔王を呼び出したんだよ。」

オー「逆に何でお前が出てきたんだ。」

邪王「んあ？面白そうだったからに決まってるだろ。その他に理由はあるかよ。」

オー「つまりは暇だったのですね？」

邪王「そういうことだ！で？願いは何でなんだ？」

オー「俺の友達の神司の家族が、天界に居るミカエルに殺されたんだ。」

邪王「なるほど…それで敵討ちとして俺らを呼んだのか…」

オー「そういうことだ。」

邪王「…まあ暇だし付き合ってもいいが、一つ言わせろ。」

オー「なんだよ…」

邪王「もしも面白くなかったらお前の魂を食い荒らして永遠の苦しみを送ってもらうぜ…♪」

オー「わかった…！神司の敵討ちができるなら俺の魂ぐらいあげてやるよ！」

すると邪神王はニヤリと笑うと、

邪王「言ったな…♪」

オー「ああ！言ったぞ！」

邪王「ならば俺はお前の遣い魔になる。今だけな。」

オー「……行くぞ……！」

邪王「おうよ。」

そしてオーディンは外に出て邪神王に翼になつてもらい天界にいるだろう神司の方へ向かった。

そしてその頃、神司&神ノ邪神は…、

神司「ここが天界か〜！」

神司は等の目的をも忘れて天界を遊んでいた。だがその間逆に神ノは、

神ノ「……」

神司「どうしたんだ？神ノ。」

神ノ「あつ、いや…（何だよこのガキ…ミカエルを見に來ただけじゃねーのかよ。と  
いうか来てみたは良いが、俺は墮天使として普通はここには来てはいけないんだよ…）」

神司「そ、そうか…って！目的はミカエル撃破だった！」

なんと、神司は天使がいつぱいいる前で大きな声で『ミカエル撃破』という言葉を放つたのだ。その事には勿論天使たちは神司たちを睨んだ。

神ノ「ヤバイヤバイ！いえいえ！何も無いですよ、ほら神司？家に帰ろうぜ〜？」

神司「何を言ひ出すんだよ！俺らはミカエルを倒すのだから!?!」

また大きな声で『ミカエル』という言葉が神司の口から出てきた。しかも俺ら？だ。

神ノも捲き込まれていた。

しかも、天使たちは増えて神司たちを睨んだ。

神ノ『うるせえ！脳内の鼓膜ぶち破るぞ!?!』

神司「うっ……!」

すると一人の天使が、

天使「……あー！お、お前は……! 『七つの大罪』 総団長の神ノ邪神だろ?!」

神ノ「くそっ……!逃げんぞ！神司!!」

すると神ノ邪神は黒い羽を生やして神司の手を引つ張り空へ逃げた。

するとすぐに天使兵たちが神司たちを追ってきた。

天使兵「までー！大罪人!!」

神ノ邪神は空中で止まると神司を天使兵たちに見せると、

神ノ「今回はお早いですね！だが今回は人間の子供もいるんで見逃して……」

天使兵「んなわけあるかー!」

天使兵たちは止まらず神ノ邪神に襲い掛かった。だが、

神ノ「だがねえ……第八人格『邪神の悪魔箱』。召喚！タルウイ！」

神ノ邪神が空中に箱から出した球を上投げるとボロい赤布を着た女性が現れた。

タル「呼びましたか。」

神ノ「タルウイ、アイツらの体の熱を蒸発させろ。」

タル「つまりは殺してしまっても良いと。」

神ノ「ああ、良いぜ。」

タル「それでは…」

タルウイが天使兵たちの方へ手を伸ばすと天使兵たちが膨れ上がり全てが爆発し、下に血の雨を降らした。

神ノ「アハハッ！温かい血の雨を人間どもにプレゼントだ！ありがとな、タルウイ。」

神ノ邪神がタルウイに礼を言うと言とうとタルウイは球に戻った。その球を神ノ邪神は上手くキヤツチした。そしてその球を箱に入れ、『ボンツ』と箱は消えた。

神ノ「はあく…神司テメエ、あんな敵がいつばいいる前でその敵のボスの名前を出すな…つて!？」

持っていた筈の神司がいつの間にか消えていた。

神ノ「…落としたか？」

神ノ邪神は下に神司が落ちたと思いい下に下りた。

その頃神司は…、

神司「ここから出せよ！」

牢に閉じ込められていた。その牢の前にいるのは天使が二人。その天使というのが

…

ガブ「こいつだよねー♪神ノの野郎が持ってた可愛い子供というのが♪」  
ラファ「ああ、コイツで間違いないだろう。」

そこにいた二人の天使はガブリエルとラファエルだった。そして神司を盗んだという天使がいた。その天使は…、

サリ「はい、ありがとうございます。」

サリエルだった。

？「おいおい…また変な物盗めとサリエルに頼んだのか？ガブリエル。」

ガブ「何だよ、僕の勝手だろウリエル。」

そこにウリエルも集まった。

神司「ここから出せよ！俺は俺の家族を殺したミカエルを倒すんだ!!」

神司がその言葉を言うと四人の天使がポカンとなった。

神司「な、何だよ…」

ガブ「フツ…」

四人「ニフハハハハッ！」

四人は神司を見ながら笑った。

神司「だから何なんだよ!？」

ガブ「ミカエルを倒す?!このガキが?!」

サリ「嘘でしょ?!」

ラファ「そりやねえや!」

ウリ「可笑しくて面白いことを言うガキだな!」

四人は無理とすぐに神司の言葉を断言した。

神司「何が可笑しいんだ!俺はミカエルに絶対勝つんだ!」

するとガブリエルが牢の中に居る神司の首もとの服を持って引つ張り、

ガブ「嘗めたこと言ってるんじやねーぞ?クソガキ。一応言っておくが僕らの種族は天使じゃない。『神』なんだよ。神を怒らせると天罰が当たるんだぞ?そこるところ分かって言ってるのか?それとも…ただただほざいてるだけか?」

ガブリエルは神司に殺気を放ち、牢の中に叩き戻した。

ラファ「おおく怖いな。」

カブ「昔から僕は怖いんだよ。あの様なクソガキには特に殺気を出してやるよ。」

ウリ「んじや俺は上に戻るよ。」

サリ「私も…」

カブ「ちよつとサリエルは待ちな。」

サリ「はい?」

カブ「サリエル、君に一つ頼みたいことがある。このガキを蹴ったり殴ったりできる奴隷券をあげるよ。」

神司「えっ……！」

サリ「……」

カブ「何だよ？不満そうだな。」

サリ「いえいえ！ありがとうございます……」

カブ「んじゃ、三日間そのガキと一緒に牢屋に入ってね〜♪」

そしてガブリエルは牢の鍵を開けて、サリエルを牢の中に押し込んだ。

カブ「楽しんでね〜♪」

ラファ「乙だな。」

そしてラファエルが牢に鍵を掛けてガブリエルと一緒に上に戻った。

神司は敵だった筈のサリエルと同じ牢屋に入れられて身動きができなかった。

神司「……」

一人黙っていると、サリエルが話をしてきた。

サリ「あの……」

神司「…何…？」

サリ「君は本当にあのミカエルを倒そうとしているの？」

神司「…敵のお前に話して何になるんだ…俺はただ…」

サリ「ただ…？」

神司「…いや何もないよ。逆に聞くけど、お前は何でここにいるんだよ。」

サリ「それは…！」

そこでサリエルは黙った。

神司「なんだよ…見れば判るけど、お前…あの天使たちに虐められてるんだろ？」

サリ「…！ …うん…。」

神司「何ならさ、今だけ協力してここから出ないか？」

サリ「…え？」

神司がサリエルにそう言うのとサリエルは驚いた顔して、

サリ「何で…」

神司「何でって…簡単だよ『弱き者は守る』、それが男って言うんだろ。」

サリ「…！判った、君と協力して…」

？「誰と誰が協力だって？」

サリ「はっ…！」

神司「くそっ……！」

牢屋の中には一つ鉄格子がある。そこから一人の神が見ていた。その神は……

サリ「ガブリエル……」

地使いのガブリエルだった。するとガブリエルは少しイラついた顔になり、

カブ「ガブリエル『様』を付けろ！」

と言つて牢屋の壁を壊して入つてきた。すると、牢屋の床を鋭いトゲに変えるとサリエルの腕に突き刺した。

サリ「ああっ……！」

カブ「テメエ……僕より階級が下なのに様を付けないのかい？」

ガブリエルはトゲを刺したまま折つて、そのトゲを思いきり踏みつけた。

サリ「ああああ……!!」

カブ「痛いだろうな……それが僕からお前へのプレゼントだからね！」

大声で叫ぶとグリグリと踏みつけた。

サリ「あ”あ”あ”ー!!す……すみません……」

カブ「遅いね。そうだった！壊した壁は直さなきゃね♪」

するとガブリエルは床や壁を直した。だが、壁には腕にトゲが刺さつたままのサリエルが吊るされていた。

サリ「痛いよお……」

ガブ「ごめんよ、小僧。んじゃ僕はここから……」

神司「……待てよ……」

ガブリエルは出ていこうとすると、神司が止めた。

ガブ「何だよ小僧……僕に文句でもあるのかい……？」

神司「お前……アイツを虐めて楽しいか……？」

するとガブリエルはにつこりと笑って神司の肩に手を置いた。

ガブ「楽しいかね……そうだよ、とつても楽しいよ♪君もされてみたいかい……？」

神司「……断る。」

ガブ「チツ……そうかそうか……なら楽になるような遊びをしてやるよ！」

ガブリエルは床の土を操り、トゲを数本作って神司に向かって攻撃をした。だが……大

きな崩れる音をたてて誰かが壁を壊して牢屋に入ってきた。

その衝撃で吊られていたサリエルは下の倒れた。

？「やれやれ、こんなところに居たのか……帰るぞ。」

そこに居たのは口調を変えたオーデインの姿だった。

神司「オー！」

ガブ「貴様は誰だ！」

オー「おっと、すまんな今はこの少年を助けろと主人に言われているのでな。お前を構っている時間は無いのだよ。」

ガブ「何だと……！」

オー「たくつ……小僧と主人は守らねえといけないよな？でこの壁の下敷きになつてる天使は……」

神司「オー、まさかと思うが……いや、今のところは誰かだろ……」

オー「ご名答！現在この体の精神は俺様、邪神王だ！よろしくな小僧！」

ガブ「は……？邪神……王？」

邪王「そうだぜ。あと俺はお前を知っている。四大天使の一人、地使いのガブリエルだろ。」

ガブ「敵であるお前が僕のことを覚えていてくれて有難い……だけど、貴様らはいつまでその牢屋に居るんだ？」

邪王「はあ？」

ガブリエルは手を上に上げると壊した壁の後ろから天使の大軍が現れた。

神司「……」

邪王「はあ……めんどくせえな……」

邪神王はオーデインの体から離れると、オーデインの体を神司に渡した。

神司「えっ…」

邪王「小僧、俺様の合図で下に降りろ。」

神司「えっ、でも…」

下は雲があり、落ちたら落下で死ぬ高さだった。

神司「いや！むりむり!!」

邪王「お前は男だろ？」

関係ないだろ…お前は悪魔で俺は人間なんだぞ…!

神司「ふざけるな！俺はお前と違って人間だぞ！」

すると邪神王は…、

邪王「そうだな…ならば、落ちてからのお楽しみだ♪」

邪神王はそう言うと、オーデインを抱えたまま俺の背中を持って空に投げ落とした。

神司「うわああああ!!ふ・ざ・け・る・なツツ!!」

そう叫びながらもオーデインは落とさないように抱えていた。

雲を突き破り地面が見えると下には見覚えがある者が立っていた。

神ノ「オーラァーイ！オーラァーイ!!」

そう、地面に居たのは神ノ邪神だった。

神司「かぁーみいーのおー!!」

神ノ「安心しろ！絶対キヤツチしてやるから！」  
それはフラグなのか。

そんなことは考えている暇ない。あと数秒で地面に着きそうだった。

神ノ「隕石みてえにはええな。それじゃっ！第二人格『鋼の鎧硬め』……！」

神ノ邪神は自信の体を鉄のように硬くし、防御力を上げて隕石のように落ちてくる神司たちを受け止めた。

神ノ「ッ……！ ……はあ……はあ……！」

何とか防いだ神ノ邪神。神司もオーデインをゆっくりと地面に置き、深く深呼吸していた。

神ノ「はあ……危なかったあく……！」

神司「はあく……怖かったあく……！」

二人は落ち着いた様子だった。

何十分か二人は地面に座り休憩していた。すると神ノ邪神は神司に水が入った水筒を渡した。そして神ノ邪神だけ休憩が終わって立ち上がった。少し神ノ邪神は考え事をしながら黙っていると、

神ノ「……すまん、神司。少し大きな急用ができた。」

神ノ邪神に渡された水を飲み終えると、

神司「ゴクツ…んっ…判ったよ。でも…」

神ノ「ああ、天使兵共のことか？それなら、第八人格『邪神の悪魔箱』。」

神ノ邪神はその中から、七つの球を持つとそれを一つずつ地面に投げつけた。

すると、その球から七人の悪魔たちが現れた。

その七人の悪魔こそが…憤怒、嫉妬、強欲や怠惰と色欲と暴食、そして傲慢を司る悪魔たち、“七つの大罪”であった。

神ノ邪神はこの七人の記憶を塗り替えて、主を神ノ邪神本人から神司へと変更させた。そして七つの大罪たちを球に戻すとその球を神司に渡した。

神ノ「これと…」

それから自分の私物を取り出すとその私物をも、神司に渡した。

神ノ「これさえありや、天使兵共と戦えるだろ。」

神司「う、うん…」

神ノ「んじや、急用の方へ向かうかな。」

神司とオーデインを二人残して神ノ邪神はこの場から離れた。

神ノ邪神が向かった先は…大きな黒いお城の門の前だった。

神ノ「よっ、ケルベロス。」

門の前にいる門番は赤と黒の髪に青い耳、そして地獄の番犬とも言われる悪魔ケル

ベロスだった。

ケル「ん……？なっ！なぜお前が！」

神ノ「この主に少し用事があつてな……通らせてくれ。」

ケル「いやでも……」

神ノ『通させろ……』

ケルベロスの脳内に圧を掛けつつ邪気を放った。「次は殺す」とでも言つておこうか……。

神ノ「で？通つて良いよな♪」

ケル「はっ、はい……」

許可は得た。後は大人しく話をさせてくれるかだ。俺は門を通つて扉を開けて城の中に入った。『奴』を呼び出す為に城の内部を壊しまくる。

邪王「神ノ、テメエ……！」

すると『奴』ではないがその血族の邪神王が既にこの城に帰つてきていた。

神ノ「よお、帰つてきていたか。」

邪王「当たり前だ、我が家なんだからな。そうじゃねえ……何しに来たんだ。あのガキたちはちゃんと生きてるじゃねーかよ。」

神ノ「神司つていう生意気な小僧いるじゃんか。」

邪王「（いるじゃんかw）ああ、いるな。…ふはは。」

神ノ「何笑ってんだよ。」

邪王「いや何も…」

神ノ「はあ…んじや話を再開するぞ。で、アイツのことなんだけど…神司の姉と母は心臓病になつてたことは知ってるか？」

邪王「知らん。」

神ノ「俺の小説読み返せよ。」

邪王「バカか!?メタイぞ！」

あつ、やつぱりメタかった？

邪王「なるほど、母や姉の他に神司も心臓病だと。」

神ノ「ああしかもアイツ自身は病氣のことに気づいてないらしいな。」

こいつと俺が天使たちから逃がした後も体の痛みを感じる動作がなかったからな。どちらかと言えば病氣なんて知らない人様な感じだ。

…家族が殺されたから、その心が壊れ復讐をするから痛みの神経が消滅した？もしくは痛みを感じなくなったのか。どちらにしよ、

神ノ「それでだ邪神王、お前が神司に憑依して天使たちへの復讐に協力してやってくれ。」

邪王「何で俺なんだよ。」

神ノ「安心してくれ、期間は千年。どうだ？千年なんて簡単だろう？」

邪王「うーん……」

神ノ「ついでに神司の心臓病も治してくれたら……」

邪王「それにしても何故神ノ邪神、お前はあの神司という小僧を助けようと思うのだから？」

神ノ「それはだね……アイツなら、このくそつたれな世界を変えてくれそうだから……かな。」

邪王「はあ？」

事実、現在のこの世界は人間と天使と悪魔などの種族がいつ反乱を起こしても死人が出る可能性が高い。

俺一人がその反乱止めようとしても喧嘩を買い全種族が俺を殺そうと追いかけてくるだろう……もう始まっているのかもしれないがな。

神ノ「革命だよ、神司が天使の長を潰して俺がこの『裏』を探し突き止めて世界を変える。俺……いや、これからの未来を俺たちが世界を覆す。革命を起こす。」

邪王「神ノ…お前…！」

神ノ「安心しろ…世界を変えるだけだ。お前は何もしなくていい。ただ、神司を見守ってほしいんだ。アイツに親が、家族がいなからな。俺は忙しい。お前は…」

邪王「忙しくないって言いたいのかよ…」

神ノ「ああ。」

邪王「はあ…わーったよ。その作戦に乗ってやろうじゃねーか。ただしその作戦を知る者は俺と神ノ、お前の二人だけだぜ？」

神ノ「判っている。提案したのは俺だからな。」

邪王「だろうな。んじゃ行ってくるが…神司の面倒を見れば良いんだよな？」

神ノ「ああ、あと死なない様に心臓病を治して最後に天使たちを倒せば神司の復讐は終了。そのあと千年は神司と暮らしていけよな。」

邪王「わかった、あつ、そうだ。オーデインはどうすれば良い。」

神司「あの子も成長させてやってくれ。オーデインも使えるからな。」

邪王「了解。」

邪神王は行ってしまった今、俺は『奴』を探しに城の内部を歩き始めた。

『これからは俺様がお前の親だからな。』

『はあ?』

『まっ、お前の脳内に入るだけだけどな。』

『はあ!?!』

神ノ「ここか…」

俺の目の前に大きな扉が現れた。強い邪気を感じる。絶対に『奴』がここにいる。俺はゆっくと扉を開いた。

【ここで話は終わってしまっている。このあと神ノ邪神はどうなってしまったのか  
……。番外編 神司の過去 は一度ここで幕を閉じる。番外編 神ノ邪神の過去  
：  
等というふざけた話は無い。理由は簡単だ。

神ノ邪神という悪魔や堕天使はこの世には存在していないからである。

以上 ソロモン王

## 第96話 VS【闇の悪夢】ダークネスⅡナイトメア& 【破壊と殺戮（ブレイカーマン）】ザキ

神司「お前ら！コイツの狙いはアドラと零愛だ、死守しろ！」

四人「「了解!!」」

神司「ライムは亜無の家に戻ってろ！」

ライム「判った！お兄ちゃんにこの事伝えてくる！」

走ってこの場から離れるライム。それにダークが触手を伸ばして攻撃しようとする。

ダーク「させるか。」

神司「そのセリフ、そのまんま返すぜ！」

全員分かれてダークネスに攻撃を仕掛ける。しかしありとあらゆるところから触手が攻撃してくるのでまずは触手を切って行くしかない。

神司「神剣『千本刃』！」

確実に触手の根元を攻撃していく。しかし、

ダーク「『無限針地獄』。」

触手から針が無数に生えてきてダークネスは触手を振り回して千本刃の刃が振り落

とされていく。

しかもそのせいで余計に近づき難くなった。

ドラ「『雷速』！」

ドラが迫りくる触手を全て避けてダークの目の前まで来た。

ドラ「来たぞ。」

ダーク「へえ……！」

ドラ「『雷一文字』！」

横にダークを攻撃するがいつの間にか抜いていた剣で防がれていた。

ダーク「あぶねえなア！」

ドラ「マジかよ……！」

跳ね返されてドラは後ろに引く。

ダーク「『異常懺悔』。」

ダークの触手がドラの手足に巻き付いてダークが掃除機のコードのように戻ってドラの体に剣を突き刺す。

ドラ「かはっ……!?!」

ドラの口から血を吐きダークの服に血がかかる。

神司「ドラ！」

ドラに駆け寄ろうとすると重い何かにぶつけられて俺の体が吹き飛んだ。何本か木を折ってやつと止まった。

神司「がはっ…」

一体何が起きたと言うのだ。家の方を見ると大きな体の男にサグメと姉ちゃんの首を掴まれて苦しそうにしていた。

神司「止めろオオおお!!」

男「だまれー!!!」

神司「あがっ…!」

サグメ「うゝうゝっ!!」

怒りで男の方に向かったが男がサグメを俺に向けて投げた。それで俺らと反対の方に向に姉ちゃんが投げられていた。

咄嗟にサグメを受け止めるが耐えれないので俺の体を犠牲にしてサグメを守った。

神司「シロー!! 零愛とアドラを連れて逃げろー!!」

今はそれしかない。姉ちゃんは男に投げ飛ばしてどこかにいるか分からない。姉ちゃんの無事を祈るしかない。

シロは必死に風の能力を使って逃げているが男の方が早くシロは男に殴られて気絶させられた。

男が帰ってくるのが早かった。シロを追いかけて一分も経っていない。

神司「ははっ、瞬殺で全滅じゃねーかよ。」

サグメ「勝てる気が、しないね……。」

？「まっ、それも俺らがいなけりゃの話だな。」

声をした方向を見ると懐かしい声だった。しかも俺らの家の周りを見たことある姿が集まっていた。

神司「来るのがおせーよ、相棒。」

あつまっていたのは、邪神王、博麗 霊夢と霧雨 魔理沙、怠惰 ベルフエゴールと強欲 マモン、紅魔館ファミリーの内のレミリア、フランと黒フラと紅風 亜無&ライム、そして八剣 光矢だった。

神司「集まりすぎだろうよ……。」

邪王「喋る余裕が有るようだな。」

レミリアがゆっくりと俺に近づいてくる。横から男がレミリアを襲おうとするが紅いグングニルを瞬時に放ちシロと零愛とアドラを解放する。

強欲が刀を使ってダークの触手を斬ってドラを解放する。

レミィ「……。」

神司「ありがとな、レミリア。」

レミイ「…家、無くなったのね。」

神司「良いんだよ、俺が帰ってきた時からこの状況だったんだ。また家探ささ。」

霊夢「そつ、まあ神司は休んでなさい。」

魔理沙「私らが来たら百人じゃ足りないぜ、千人力だぜ。」

フラ・黒「せんにんりきだー！」

魔理沙の言葉で遊ぶフランと黒フラ。楽しそうに何よりだ。

強欲「久しぶりだな。」

神司「強欲も久しぶり、あれ？さとりは？」

魔理沙「さとりは……異形に攻撃されて肩の負傷で私達が帰らせた。」

神司「判った…。」

さとりは異形に攻撃されて負傷…か。この死闘に参加させてしまったことに謝罪したい。そんな話をしまった俺を悔む。

霊夢「そっ、このマモンって相当強いよね。あの異形を一人で一掃しちゃうのももの。」

怠惰「そりゃあ、剣術の達人だからな。」

強欲「俺の実力ではなく紅葉姫が強力過ぎるだけさ。」

ライム「遅れてごめんなさい！神司さん！」

遅れて俺のところに来たのを気にしているらしい。そういう子はからかいたくなる。

神司「いや良いよ……。ただ死にそうだけどね……。」

ライム「本当にごめんなさい！」

亜無「神司さん……。」

心配そうに話しかけてくる亜無。俺は優しく話す。

神司「大丈夫だよ、俺は死なないからな。」

光矢「まあ、神司が死んでもどうせ直ぐに生き返るからな！」

雰囲気ぶち壊しかよ、この執事長は。それで思わずため息が出てしまう。

神司「はあく。」

邪王「まつ、アイツらの始末は俺らに任せろつてところだな。」

ダーク「強いな、お前らは。」

霊夢「そう？ 貴方たちの方が強いと思うけど？」

男「煽られた、異形野郎、俺はあの巫女を殺す。」

ダーク「待てザキ。」

どうやらあの大男の名前はザキのようだ。

ザキ「我慢、できないツ：!!」

ザキが霊夢の方に突進する。

霊夢「夢符『二重結界』！」

ザキ「！ 壁が…！」

霊夢（思ったより力は…ッ！結界にヒビが…！）

魔理沙「恋符『マスタースパーク』！」

結界にヒビが入ったことに気づいた魔理沙は八卦炉を使ってマスパを放つ。

しかしかすり傷一つも付かなかった。

魔理沙「嘘っ!？」

ザキが攻撃を止めて魔理沙の方に顔を向けた。

ザキ「何したんだ…？ 魔女ツ子。」

ザキは魔理沙の目では見えない速さで殴りに掛かる。

魔理沙「ッ！」

怠惰「無駄だよ、魔理沙。」

強欲「ここは俺らの戦場だ。」

怠惰と強欲が大鎌と紅葉姫でザキの拳を受け止める。

ザキ「お前らは、強い…！」

怠惰「強いぜエ、俺らは。」

ザキ「でもなあ、正直飽きた。」

強欲 「ツ！逃げろお前ら！」

怠惰 「安心しろ、マモン。『狂い裂き』！」

怠惰は縦回転しながらザキを斬っていく。時間差でザキの肩から血を流す。

ザキ 「逃げ遅れたな…？」

超高速で怠惰を殴り殴りまくるザキ。

怠惰 「がはっ…ぐっ…！」

強欲 『『鬼神抜刀』…。』

次くる拳を見切って腕を斬った強欲。他の人じゃあんなの見えないだろう。

すると光が通って怠惰を助ける。

光矢 「大丈夫か？」

怠惰 「大丈夫だよ…数えきれない程の死闘を乗り越えて来たからな…ツ！危ない青

年！」

ダークの触手が光矢に向けて伸びていた。

光矢 「光符『ライトニングスパーク』ツ!!」

魔理沙のマスパみたいに一直線の弾幕だ。触手だけは燃やせた。

怠惰（何故だ、あの触手野郎の方は確か亜無と邪神王とレミリアお嬢が戦ってたん

じゃ…）

見ると亜無とレミリアが倒れていた。邪神王はこの場から居なくなっていた。

怠惰「マジかよ!？」

最悪だ、こつちはこつちで危ないってのにあつちは既にラウンドが終了している。

怠惰はそれに油断し、ザキに叩き潰される。強欲が助けに入るがザキの大暴れには勝てなかった。

怠惰「ぐはっ…!!」

腹をザキに殴られて吹き飛ぶ怠惰。

霊夢と魔理沙も既にやられている。

強欲「くそつたれー!! 第四人格『死々銀河』ア!」

強欲はまさかの神ノ邪神の人格技の『死々銀河』を使った。

鞘に紅葉姫を片付けてから構えてザキに近づき刀を抜いて横に斬った、がザキには効いてなかった。

強欲「負けたなあ。」

紅葉姫を片付けてから降参した。ザキが強欲の顔を思いきり殴り地面に叩きつけられる。それで強欲は気絶した。

まだ息があるレミリアが執事に命令する。

レミイ「光矢! フランと黒フラを逃がして!!」

光矢「だつ、だがお嬢様が…！」

レミイ『『命令』だッ!!』

光矢「ッ…!!俺が戻るまで死ぬんじやねーぞ!!行きまますよ!妹様!黒フラ様!」

黒フラ「光矢、御兄様!」

フラン「御姉様あー!!』

姉を置いて泣きながらも逃げる二人。光矢が二人を守りながら能力を使用して二人の手を握って遠くまで逃げまくった。



ダーク「三人逃走か、まあ良いだろ。本来の任務を遂行しますか。」

ダークは戦闘が終わり、ザキに撤退するために呼び掛ける。

ダーク「おいザキ、引き上げるぞ。」

ダークがザキの方を見るとザキは獣人兄妹と戦闘中であつた。

ダーク「不死だっけ?アイツらも懲りねえな。」

ドラ「雷迅『速斬雷降』!」

ドラがザキの腕を斬るが直ぐに再生して雷炎を掴む。

ドラ「止めろ！」

ザキ「やだね。」

雷炎を粉々に握り潰すザキ。それに絶望をし力が抜けるドラ。止めに殴り掛かるザキ。

シロ「お兄ちゃん！水槍『アクア・グングニル』！」

水で作った槍をザキに投げつける。やはり効かない。

シロ「逃げてお兄ちゃん！」

絶望し妹の声も耳に入らなくて動かないドラ。そしてザキ最後まで殴り、地面に砂ぼこりが起こる。

シロもそれに絶望する。怒りすら沸いてこなかった。

？「まあまあ、そんな絶望するな、シロ。」

？「大丈夫か？シロちゃん。」

砂ぼこりが治まると女の人が一人シロに手を伸ばしていた。

ダーク「稀神 神司……！お前ら、立てないような大怪我だったんじゃない？！」

神司「うるせえ、誰が大怪我だ。」

サグメ「いや、神司さん、私は大怪我でしたよ。」

星花「神司とサグメは大変だったねえ！私なんて人里まで飛んでったんだよ!？」

神司「皆大変だなあ…。」

邪王『カツカツカ！その大怪我治した途端元気だなア！お前ら！』

シロは見た。日光に照らされた家族三人の影を。

神司「さあて、稀神家の復讐劇の開幕だッ！」

神司は二本の刀を鞘から抜いて構えた。

## 第97話 主 〱二本の剣〱

なぜ、俺は刀を二本持っているのか。それは俺とサグメがやられて戦闘不能になった時までには遡る。



邪王「おい、起きろ稀神カップル。」

神司「……起きてはいるけど。」

邪王「憑依するぞ。」

神司「もう、体、動かねえよ。」

邪王「……ここで言うのもなんだが、俺の本名はクロムヴェージュ・キラティナイド?。アドラの兄だ。」

神司「へー……。」

クロム「妹を守るのは兄の任務だろ?」

神司「そーだな……。」

クロム「……お前、いや、お前ら、早く起きないと零愛ちゃんが敵のボスに記憶を消されて都合のいい駒にされるぞ。」

神司「……」

クロム「良いのかよ……！零愛ちゃんもアドラもいい駒にされるなんて嫌なんだ。実際にアドラは既に過去の事の記憶がない。ドラとシロの母親っていうのに……俺の妹っていうのに……！」

クロムが俺の首もとを持って叫ぶ。

クロム「だから立ってくれよ！いつものお前に戻ってくれよ！」

折れた大木に俺を押して首もとから手を離す。

俺は黙る。邪神王改め、クロムには目さえ合わせられない。今の感情は……そう、悔しいだ。クロムに憑依されたとしても敵たちには勝てっこない。

俺の体が無意識にブルブルと小刻みに震え始めた。

クロム「なんだよ、武者震いか？」

神司「怖いんだ……アイツらに勝てないと体が俺に言い聞かせている……。体が動かない……あと、愛する家族たちが傷付くのをるのが怖い……。もう……いいんだ、俺は戦えない。」

サグメ「何諦めてるんですか!!」

神司「!!?」

サグメが俺の両肩を揺らしながら俺に叫ぶ。

クロム「予想外な展開だ……!」

サグメ「神司っていう人間はそこまで堕ちたのですか! 貴方は、どんな死闘の時でも勇気を出して突破してきた。今回もできる筈です。」

神司「でも……」

サグメ「でも何もありません。あと、私や星花さんの命のことは心配しないで下さい。私たちの命は私たちで守ります。そして、貴方には今まで隠していましたが稀神家に代々家宝で続いている刀、『天叢雲劍』を渡します。」

クロム「『天叢雲劍』だど!」  
あまのむらぐもつるぎ

綺麗な鞘に入っている剣をゆっくりと鞘を外していく。全体が見えると神々しく光出した。

サグメ「天叢雲劍が貴方を主人と認めた証拠ですよ。さあ! 行きますよ! ねっ! 星花さん!」

神司「えっ?」

いつの間にか姉ちゃんが帰ってきていた。

星花「あんたが私の弟を器としている邪神王だね。」

クロム「当たり前だ、クロムヴェージュ・キラティナイドだ。気安くクロムと呼んでくれ。」

星花「ああ、よろしく。」

二人が握手を交わす。

サグメ「さあ、さっさとクロムさんは神司さんに憑依してください。」

クロム「りよーかい。」

こういうことがあつて刀と剣とで二本持っている訳だ。



神司「行くぜ、皆。」

サグメ「うん！」

星花「はいよ！」

本当はまだ立ち直れていない。無理して喋って、無理して動いている。何度も何度も、クロムにフォローされながら動いている。

話は変わって、俺たち三人はしっかり役職のようなものがある。

サグメは遠距離攻撃、姉ちゃんは植物でアシスト。そして俺が近距離攻撃だ。姉ちゃんに零愛とアドラを守ってもらっている。ドラとシロには回復したらその時に戦ってくれと頼んである。

しかしドラとシロは最近戦いすぎていると思う。とても心配だ。

邪王『心配するな、アイツらは不死だ。不死っていうのは傷を治すだけでなく身体の疲労なども治してくれる。少し時間掛かるけどな。』

神司「そうなのか……。」

ザキ「戦いに集中しろー!!」

神司「うるせえ！脳筋戦闘狂！」

殴り掛かってくるザキの拳を天叢雲剣で受ける。するとザキの拳から血が飛び出た。

ザキ「??」

神司「これは……！」

遠くの方からサグメが天叢雲剣の説明を話す。

サグメ「天叢雲剣の能力の『風を纏う程度の能力』です！つむじ風等が起こり身を守ってくれます！」

ダーク「そんな余裕分はあるのかな……！」

ダークネスがサグメの後ろまで来ていた。

強欲・星花「あんたもな。」

強欲の紅葉姫と姉ちゃんの蘿がサグメを守ってくれた。

サグメ「強欲さん…星花さん…！」

強欲「つー訳だ、彼女さんと姉ちゃんは俺が守る。そっちは任せたぞ。」

なんだよ、作戦を狂わせやがって。

クロム『それが“強欲”だろうよ。アイツらしいからしょうがない。』

神司「それもそうだな。」

ザキ「潰す、殺す、消す。」

神司「カタコトじゃないのにカタコトに聞こえる。」

クロム『そういう奴だろ、パツパツと倒してコイツらの拠点に乗り込むぞ。』

神司「そうだな…！」

二刀流は初めてだが技を発動する。

神司『『弥生四季乱舞』!!』

空中に飛んで何回転かしてからザキの頭から斬りかかる。しかしかすり傷もなかった。

神司「だよなー、それなら……」

俺は背中から羽根を生やして体全体にクロムの邪気を借りて纏った。

神司「『悪魔化』！」

ザキ「羽根生えただけく！」

殴り掛かってくるが拳の周りを一回転してから、両方の剣で胸に突き刺す。

ザキ「ガハッ：！？」

神司「阿保が、羽根があるから余計に素早いのださ！」

ザキ「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！！！」

神司「殺してみろよ、双剣術『狂い裂き邪神剣』！」

剣の刃を縦から横に裂いていった。

しかし俺の首をザキに掴まれた。

神司「がっ：あ”あ”っ：！」

ザキ「俺、知ってる。人間、首潰す、死ぬ。」

苦しうになりながらもニヤツと口を開いた。

神司「ばーか、俺一人でお前を：倒せるかっての：。」

ザキ「！？」

そうだ、一人（二人）では勝てないことぐらい理解してる。だから俺はライムに

頼んだんだ。



強欲と戦っていたダークネスが少年を見つけると急いで少年の方に向かい、跪付いた。

ダーク「すみませんでした、主。」

この場の空気が痛くなる。それもその筈、この異変の首謀者が今、目の前にいるのだから。

握っていた邪楼剣と天叢雲剣をさらに強く握って技を放つ。

神司「桜符『風舞桜』……！」

二刀流の桜符『風舞桜』は初めてだが成功した。

しかし主という少年に片手で止められた。

少年「初めまして……お父さん……！」

神司「ッ！誰だよ貴様ア!!」

独りっ子の零愛だ。このような子には会ったことはない。

それじゃあコイツは誰なのか。

## 第98話 後悔と親友

少年「初めまして……お父さん……！」

神司「ッ！誰だよ貴様ア!!」

防がれたので一度後ろに退く。

おかしい、どう見てもこの少年は十歳ぐらいだ。確かに零愛も十歳ぐらいだ。

しかも零愛の羽根は俺譲り、コイツの羽根がサグメ譲りと言う可能性がある。

少年「この際だな、俺の名前は苺亜、<sup>がいあ</sup>稀神<sup>きしん</sup>苺亜<sup>がいあ</sup>?だ。」

全員がこの言葉に反応した。アイツ、何て言った？

稀神……だと？

神司「ふざけんな……お前が俺の、息子……？」

苺亜「ははっ、流石俺の能力だ。俺が生まれたことさえ忘れてるぜ。」

神司「ウルセエナア、俺の息子は知らんけどな……俺が居た記憶を家族や友人から消

し去った恨みはここで晴らせてもらうぞ……!!」

俺は苺亜に斬りかかった。すると苺亜はニヤリと笑って俺の腹を思い切り殴る。

神司「ガハッ……!!」

苺亜「俺と同じ思い出を見させたただけだが？」

苺亜が連続で俺を殴りまくる。

苺亜「俺は永遠亭の兎にも忘れられるし、永琳先生にも忘れられた！挙げ句の果てには実の親からも忘れられた!!」

神司「ぐっ……!ッ……!」

苺亜「俺は……忘れられたから悪魔の夫婦に拾われた。そして分かったんだ、憎むべきなのは実の親だと……いや、今まで俺の代わりに全ての愛を受けた零愛！奴を殺して俺が独りっ子だったという記憶に上書きすればいいことだからな！」

神司「そのためにだけに零愛を殺すのかよ!?!」

苺亜「だけとはなんだ！復讐なんだよ……!だから殺すんだよ!!ダークネス！早く任務こなして帰ってこい！」

ダーク「御意。」

クロム『不味い、苺亜つて奴零愛とアドラを連れていく気だ!』

神司「行かせるかよ！邪刀『鬼神斬』!」

苺亜に赤い斬撃を飛ばすがダークネスの触手に防がれてダークネスの手によって気絶させられた零愛とアドラが連れていかれた。

苺亜が何か三人投げたと思えば、

神司「ツッ……！光矢……！」

レミイ「フラン、黒フラ！」

苺亜が投げたのはフランと黒フラを連れて逃げた筈の光矢とフランと黒フラだった。



現在夜7時。苺亜たちと死闘を行った時間は夕方5時。

苺亜たちにはまんまと逃げられた。しかもこんなに死闘をしたため、怪我をしまくった。なので、怪我の治療ついでに紅魔館で作戦会議をしていた。

神司「クソツッ!!」

俺はテーブルに思い切り台パンした。

刻一刻も早く敵のアジトを見つけて壊さないと零愛が苺亜に殺される。

亜無「……光矢は……?」

亜無の問いにレミリアが答える。

レミイ「クロムとパチエに頼んで怪我を治してもらってるわ。」

亜無「俺、手伝ってくる。」

レミイ「ええ、フランと黒フラが目覚めた時に抱いてあげてね。」

亜無「うん。」

そう言つて亜無は治療している場所、魔法大図書館に向かった。

俺の隣には愛人のサグメがいる。それも泣き崩れている。姉ちゃんと言うと、「私のせいだ」と繰り返して泣いて鬱になっている。

ドラも鬱になっている。愛刀の雷炎がザキにより折られたので、主人から貰った大切な刀を意図も簡単に折られて心も折れたのだ。

シロはその様な兄を見て相手を恨んでいた。

レミリアはと言うと、愛する妹を守れなかつた悔しさに涙を流していた。霊夢は霊力が強力なお札の用意、魔理沙は八卦炉の改良をしていた。強欲は紅葉姫の手入れ、怠惰は魔術書を読み込んでいた。つまり異変解決組の二人と七つの大罪の二人はまだ諦めていないということである。

？「何だ、久しぶりに親友に会おうかと思つたのに、何してんだよ。」  
全員「……！」

謎のフードを被つた青年が紅魔館のドアの前に立っていた。

レミイ「美鈴！美鈴は?!」

青年「美鈴？ああ、門番のことか？寝ていたぞ。」

咲夜「美鈴の奴……！」

青年「まあ、門番にはごめんだけど、俺が眠らした。」

それなら余計に戦闘体勢に入る。

俺はサグメに亜無たちに気をつけろと伝えに行ってもらった。

神司「今日は新しい奴が多いな……！」

青年「？ 判らんけど俺はお前らの味方だぞ？」

神司「証拠は何処にあるんだよ……？」

青年「……しょーこ？ なんていらないだろ。まさか、俺の声も忘れたのか？ 神司。」

俺は羽根を生やして青年に向かって天叢雲剣で斬りかかった。

クロム「待て神司！」

俺はクロム呼び止められたので手を止めた。

青年の方は槍を俺の腹部ギリギリまでのところに達していた。

神司「何だよクロム！」

クロム「こいつは俺が呼んだお前の親友だ。」

青年「そうだよ、俺はお前が少年の時の友人であり親友の——」

星花「オーちゃんじゃない！」

オー神司「俺が紹介するっての、星花姉さん。さて改めて……俺はオーティン。思い出した

か？ 大親友。」

神司「ああ…オー…！」

俺は手の力が抜けて天叢雲剣を落として、オーデインに抱きついた。しかも大泣きしながら。

神司「あ”あ”あ”あ…”あ”あ”あ!!”

オー「疲れたろ、神司…：さて皆！敵のアジトは俺が既に見つけた。二日後アジトに向かうぞ。」

レミイ「それなら…！明日…：ツ！」

オー「明日？それなら俺は今行けと言っている。傷の完治が先だ。」

続けてオーデインは人差し指を天井に向けた。

オー「そしてもう一つ。アイツらは二日後に幻想郷全体に異形にバラまくつもりだ。

クロムに頼まれて潜入捜査を俺の従者にやらせた情報だ。」

クロム「だからその二日後にアジトを攻める、というわけだな。」

オー「そう言うことだ。今日はもう夜は遅い、明日は自主連で極めるように。もし特訓していなかったら…：今回と同じ結果になるぞ。」

オーデインが皆に圧を掛ける。

一番近くにいる俺が恐怖を感じながら体がペツちゃんこになるところだった。

泣く意味が違くなる。

そうして、俺らは紅魔館の部屋を借りて、今日は寝た。疲れていたのだろう、すぐに寝れた。

## 第99話 それぞれの動き

夜、悪夢を見た。

我が娘の零愛が俺の目の前で苺亜の手によつて殺される夢を。

それに思わず目を覚ます。慌てず周りを確認する。

現在は紅魔館の部屋のベッドでサグメと共に寝ている。

思わず嫌気が指して舌打ちする。

神司「……チツ、嫌な夢だ。」

唐突に思い出す。零愛が生まれた時、サグメの隣に零愛以外の子供が居たことに。

黒髪に小さいがサグメのような天人の翼を生やした子供。その子が今の苺亜なのだろう。いや間違いない。

神司「ごめんよお、苺亜……。いや、よく生きていてくれた……。本当に、ごめんよお……。目から涙を流しながら泣いて謝った。そこには実の息子も居ないのに。」

泣きながら時計を見ると、夜の2時。丑三つ時だ。耳を済ますと女の子の泣き声が聞こえた。

神司「これは……レミリアか？」

サグメを起こさないようにベッドから降りて静かに廊下に出て泣き声のする方へ歩いた。涙を服の袖で拭きながら。



着いた先に居たのは、泣き声の本人、レミリアと亜無、そして咲夜さんだった。

神司「どうしたんだ……。」

亜無「神司さん……」

亜無も泣いていた。よく見ると三人が大きなベッドの周りにいることに気づいた。

俺は近づいて見てみた。そこには気絶していた光矢、そしてフラン&黒フラが横になっっているベッドがあった。

神司「どうしたんですか、咲夜さん。」

二人とも泣いているので咲夜さんに聞くことにした。

咲夜「私たちの記憶が妹様、黒フラ様、そして光矢の記憶がないという可能性がある」とオーデイン様が仰っていました。」

神司「オーが？」

オー「ああ、《記憶》のムニンがそう言っているんだ。そうなのだろう。」

神司「ムニン？」

オー「俺のワタリガラス、従者だよ。因みに《思考》の方がフギンだ。」

《思考》のフギンと《記憶》のムニン。  
(オセロニア画像参照。)

神司「そう…か。」

オー「……神司、少しの間だけほつといてあげとこう。」

神司「…判った。咲夜さん、俺ら一旦ここから離れます。」

咲夜「了解しました。」

俺とオーデインは俺の部屋に戻った。まだサグメ寝ている筈なのでゆっくりとドアを開ける。

サグメ「スー……スー……」

やっぱりまだ寝ていた。ゆっくりとドアを閉めてから椅子が二つ部屋にあるので俺とオーデインは座った。

神司「はあ…」

オー「大丈夫か？」

神司「そんなに大丈夫じゃない。むしろ我が子らと俺の従者が心配だ。」

オー「……我が子らということは苺亜のことを思い出したのか？」

神司「ああ、完璧にな。」

オー「そうか、それなら尚更助けられないとな…!」

神司「当たり前だ…!」

また一度、家族を助ける。相棒クロムの家族を助けることを決意した。

その頃一方強欲と怠惰は――

地霊殿に向かっていた。

強欲「ここか？」

怠惰「ああ、そうだよ。」

ここからの視点は俺、怠惰にするぜ。

さてまず何故地霊殿ここに来たのかというと数時間前だから…約一時だな。



俺は紅魔館の大図書館で夜更かししながら魔導書と魔術書を読み漁っていた。

怠惰「小悪魔、次の魔術書を頼む。」

こあ「うそっ!もう早ですか!?!」

当たり前だろ、だってここにある魔術書や魔導書が簡単過ぎんだもん。

とは言わず、小悪魔に机の上に山積みされている魔導書等を渡す。大変そうに魔導書を持つてく小悪魔を見ながら下を向いて寝る振りをする。すると、パチュリーに俺のあだ名が呼ばれた。

パチエ「怠惰、で良いのかしら？」

怠惰「うん？ああ、それで良いぞ。どうしたんだパチュリー。」

パチエ「私の使い魔に簡単に指図しないでくれる？」

怠惰「そうか、分かった。それなら小悪魔にはごめんだけど持ってきてくれた魔導書等を片付けてから部屋に戻るよ。」

パチエ「あのね、そう言うこと言ってるんじゃないのよ。怠惰は本を大切に読んでくれているからまだ居て良いのよ。」

怠惰「いや、もう0時だからな。俺も魔術師だけど睡眠も必要だからな。パチュリーも睡眠しといた方が良いぞ。」

俺が大図書館から退出しようとしたその直後に強欲が入ってきた。

強欲「ベルフェゴール、数時間ぐらい俺と付き合え。」

怠惰「ツゝゝ、はあ：」

折角パチュリーに「寝とけ」と言った直後だというのに何だよこのタイミングに来る墮天使は。

チラツとパチュリーと小悪魔を見ると笑いを耐えていた。そりあそうだろうな。

怠惰「…はいいい、付き合いますよ。俺の愛しい強欲さん。」

強欲「俺にそんな趣味はない。」

俺は強欲に着いていきながら紅魔館を後にした。

怠惰が出ていった後、パチュリーは一つ疑問が浮かぶ。

パチエ（ベルフェゴール…？そーういや悪魔辞典つてもものに…）こあ、悪魔辞典を持つてきてくれる？」

こあ「どうぞ。」

パチエ「ありがとう。」

パチュリーは急いで「ベルフェゴール？を探した。」

こあ「珍しいですね、パチュリー様が悪魔に興味を持つなんて。」

パチエ「あつたわ…！やっぱり…！さっきの怠惰は『七つの大罪』の怠惰、ベルフェゴール、よ！しかもさっきの強欲つても『七つの大罪』の強欲、マモン、だわ…！」

こあ「ええ!?私の大先輩じゃないですか!？」

まさかあんな大物の悪魔が居るなんて…レミイ、貴女はなんて大きすぎる悪魔をこの紅魔館に連れ込んだの…。

そして再び視点は旧地獄の怠惰に戻る。

怠惰「で、何でここに来たか理由を聞こうか。」

強欲「教えるのか？」

怠惰「んじや帰るぞ俺。」

強欲「ごめん話します。」

俺が帰ろうとすると強欲が謝りながら俺を止めた。

強欲「実は…古明地 さとりに謝りたくてな。」

怠惰「どうした急に。」

強欲「…昨日、人里に魔神が襲来してきた時さとりだけ守れなかったんだ…だから古明地 さとりに謝りたくて。」

怠惰「なるほどな、しかし守れなかったのはお前のせいじゃないだろうがよ。」

強欲「いや俺が守れなかったんだ。お前ならわかかってんだろ、ベルフェゴール。俺は『七つの大罪』の強欲？を司っているんだよ。守りたい欲があるから守りたかった。」

怠惰「……」

なるほど、マモンは強欲らしい強欲に成りたいのか。全ては俺の思い通りにならないきやいけないという強欲っぷり、流石だな。それなら俺も強欲に全力でサポートする。

そんな感じで話していると地霊殿に着いていた。

怠惰「着いたぞ。」

強欲「うう…改めて来ると緊張というか…」

怠惰「安心しろ、俺も居るから。」

強欲「うう…」

こんな強欲は俺も初めて見る。すると地霊殿の門からお燐が出てきた。

お燐「ベルフェゴールさんとマモンさんですね？ さとり様が呼んでおりますよ。」

強欲「!?!」

怠惰「あー、すまんありがとうお燐。行くぞマモン。」

俺は強欲を引っ張って地霊殿の中に入ってそのままさとりの部屋に向かった。

怠惰「おーい、さとりー…」

さとりの部屋に着くとさとりは包帯で片腕を支えながらメガネを掛けて読者していた。しかもついでに熱の邪神もその部屋の椅子に座って読者していた。

怠惰「…タルウイ?!」

タルウイが声をした方向を見ると、あのいつぞやの殺人鬼が剣術師を連れて立っていた。

タル「怠惰?!あと強欲?!」

怠タル「何で居るの!?!」

本当に何で居るんだよ、タルウイさんよお…。

俺はタルウイをスルーして強欲をさとりの前まで連れてきた。

さとり「大体は心を読んで分かっています。」

だろうな、ならば話は早い。

怠惰「タルウイ、俺とお前は少しここを退室な。」

タル「はあ？何でよ。」

怠惰「いいから行くぞ。」

俺はタルウイの手を引つ張つてこの部屋に強欲とさとりを残して出ていった。

さて視点は強欲に移動しよう。

嘘だろベルフエゴール……！

さとり「強欲さん。」

強欲「はっ、はい?!」

さとりは強欲に微笑むと、

さとり「言葉を発して喋るのが恥ずかしいのなら心で話すだけでも大丈夫ですよ。

私、さとり妖怪ですから♪」

強欲「……嫌だ。」

さとり「え?」

強欲「折角ここまで来たんだ、喋らずに帰るのは俺が許さない。だから言わせてく

れ。」

さとり「……」

俺は深く深呼吸してからさとりに頭を下げた。

強欲「ごめん！」

さとり「!?!」

強欲「あの魔神が人里に襲来してきた時に俺が油断してさとりを守りきれなかった！肩を怪我させてしまつて本当にごめん！」

何度も平謝りした。さとりが慌てて俺を止める。

さとり「大丈夫ですよ、強欲さん。貴方は霊夢さんと魔理沙さんを守つたんです。だから顔を上げて下さい。」

強欲「いや、俺は強欲だ。守るのも俺が強欲だからだよ。つまりだ、俺はお前は大切な仲間だ。だから守る筈だったのに守れなかったんだ。だから俺の気が済むまで謝らせてくれ。」

強欲がめちやくちや謝つてさとりが頭を抱えている姿に怠惰は苦笑し、タルウイが怠惰を見て呆れていた。

タル（コイツ…反省する気、無しだな。）

◆  
くある洞窟く

アドラ「ううーん…はっ！」

目が覚めると縄で腕と足を縛られて椅子に拘束されていた。

周りを見渡すと窓がなく薄暗くグレーのドア一つの部屋だった。

ヤバイ、これはあどらがか何かしらこの組織にされてしまう。挙げ句の果てにはこの組織の操り人形マリオネットになってしまう。どうにかここから逃げなくては。そう思いながら縄を解こうと努力するが縄が硬すぎて切れない。

苺亜「やあ起きたのか。」

大失態だ。縄をほどくのに必死で主が入って来たのに気づかなかった。

アドラ「あ、ああ…！」

苺亜「安心しろよ、お前を殺すことはない。」

アドラが怯えていると、優しく微笑みかける苺亜。それがより一層、恐怖を引き立てる。すると苺亜が何か思い出したように手を叩くと、

苺亜「そうだ！君に見せたい人が居るんだ。」

そう言つてドアを開けるとそこからアドラがよく知っている武器だった。

アドラ「スカノレ…!？」



せれた。

苅亜「ふつつつふ、あとはコイツらをしっかり操れるように邪魔者を消すだけだ。」  
そう言つて駒二体を連れて気分が上がりながらスキップしながらこの部屋を後にした。

## 第100話 オーデインの特訓

↳ 紅魔館広場

朝8:30

オーデインに集められた神司と亜無。

その数時間前に強欲はタルウイを連れて戻って来た。しかし怠惰が居なかったの  
聞いたところ、二人とも話してくれなかった。

まあ、気にしたところでアイツのことだからさすがに帰って来るだろう。

オー「さて、二人には俺を倒してもらおう。」

神司「いいけど大丈夫なのか？」

オーデインは頷くと、

オー「クロムは使用OKだ。亜無くんも最初から本気で来なよ。」

そう言つてオーデインは一本の大槍を構えた。

神司「行くぞクロム。」

クロム『勿論だ。』

亜無「紅神『scarlet:devil』！」

神司「『悪魔化』！」

俺は背中に羽根を生やして邪楼剣と天叢雲剣を構える。亜無も悪魔の様に形を変えて紅風嘘無剣を構えた。

神司「神剣『千本刃』！」

亜無「妖刀『無数の紅い刃』！」

俺の周りに九百九十九の剣を浮かせて放った。亜無も紅い刃を何枚か浮かせて放った。

その直後に俺らはオーデインに向かって走った。

オー「『死神の大槍』」

オーデインは大槍を地面に突き刺す。

神司「危ない亜無！」

亜無の首もと掴んでオーデインからの判決ニm離れる。すると先程放った斬撃が何かの圧によって消えていた。周りの草花も枯れ始めた。

神司「腐食か……？」

オー「そんな可愛いもんじゃない。これは『死』だ。」

神司「……はあ!？」

オーデインが突き刺した大槍を抜くとクレーターが出てきた。

理由は分からないが普通刺してからクレーターってできるもんだよな。

オーデインが大槍を構えると、

オー「当たったら死ぬから気をつけるよ。」

神司「気をつけるよってもんじゃねーだろ!? 風符『神風刃』!」

オー「不意討ちか…?」

天叢雲剣に纏っている風を勢いよく飛ばす。しかしオーデインは頬にかすっただけだった。

オーデインが距離を縮めて攻撃を仕掛けてきた。

オー「不意討ち失敗してるぞ。」

神司「わーってるよ!」

両剣で大槍を受け止める。しかし力負けする。正直、まだ二刀流に馴れてはいない。

神司「っ…! 重い…!」

オー「重いだろ? 俺は『戦争と死の神?』と呼ばれている。だけどそれは俺の元々の能力<sup>スキル</sup>。それでもこの重力は貰った能力だ。名は《gravity》だ。」

神司「何だよ…! 貰ったって!」

オー「ゼウスの爺<sup>ジ</sup>ちゃんに貰った…♪」

神司「ゼウス?!」

オーデインの話では確かゼウスっていう大神はミカエルに殺されたんじゃないよ。一度天叢雲劍の風でオーデインから退く。

神司「何で生きてんだよ。お前から聞いたんだぞ、ゼウスはミカエルに殺されたって！」

オー「……悪いな、あの時はお前の気を紛らわす為にした事なんだ。」

神司「いらぬよ。ただ、遠慮なくお前を倒しに行けると思ってる。」

邪樓劍と天叢雲劍を鞘に片付けて構える。

神司「第肆人格『夜神銀河』：!!」

二劍引き抜いてオーデインを斬る。しかし大槍で防がれて攻撃を防がれた。

神司「風神劍『千本風刃』……!!」

九百九十九本の刃に天叢雲劍の風を纏わせてオーデインに向けて全て飛ばす。

神司「旋風に当たって反省しろ！」

オー「何にだッ！」

神司「俺に嘘ついた件だよ!!」

オー「嘘ついた件は謝る！だから落ち着いてくれ！」

神司「……！」

俺の勝手な思い込み……別に良いじゃないか。ゼウスが生きてるか死んでるかなんて。

ゼウスとは話したことないし、ましてや会ったこともない。

俺はオーディンに向けて何を怒っていた？？？今までの不満が爆発したのか。

せつかく作戦組んでたのに俺の勝手な暴走で駄目にしてしまった。なので、亜無とクロムを呼び出す。

神司「ごめん、二人とも。」

亜無「いや、大丈夫ですよ。」

クロム「まだ暴走して落ち着けたからまだいいだろ。」

神司「はははっ、オーもごめんな。」

オー「なーに、これもお前を覚醒させる罠だ。」

神司「…え？」

オー「判つてたさ、わざわざクロムの使用許可を出したのは一人が俺を引き付けてあとの二人が俺に奇襲する。この作戦はなかなか良いが完全に読んでたからクロムを許可した。」

読まれていた…？確かに俺が考える作戦はワンパターンだ。避けるのも簡単だろうな。

クロム「それにしても神司、何だあの技は。」

そういえばそうだな。友に裏切られたと思った怒りで神ノの人格技みたいな攻撃が

出来たんだよな。

神司「分らない。」

オー「覚醒じゃないか？それにしてもあの人格技、そして二剣の合わせ技……これも何かの運命的なもののかもな。」

神司「意味わからん。」

オー「実際言ってる俺もわからん。」

おいおい、何の会話とツツコミが入るぞ。

兎に角オーのお陰で新しい技が習得できた。しかし――

亜無の特訓にはならなかった。現在9時34分。オーデインとの特訓に一時間はいた。

オー「さて、神司の特訓は終了。」

神司「あつ、了解。」

理解した。先程の特訓は『俺だけ』のための特訓なのだ。

オー「それじゃあ神司とクロムは退場を願おうかな。亜無くんは残って俺と特訓。」

亜無「はい！よろしくお願いします！」

クロム「それじゃあ退散しますか。」

そう言つてクロムは俺の中に戻った。

——一方その頃怠惰は、

敵のアジトに一人潜入していた。

怠惰は朝の帰り、強欲とタルウイと離れてアジトに向かっていた。強欲とタルウイには向かう場所は伝えてある。

アジトにいるのは良いが今居る場所には異形の魔神がうろろしていた。

怠惰「めんどくせえなあ…。」

魔神を一体一体倒すには核を壊さないといけない。それだから面倒くさい。

アジトの岩かげにずっと隠れていたが一体の魔神に見つかってしまった。しかも奇声のような声を出して仲間を呼んだ。怠惰は後悔した。しかし後悔している暇など無い。

怠惰は大魔術書グリモワールを開いて大鎌を取り出して肩に掛けた。

怠惰「ちやつちやつと仕事を終わらせませるか。」

怠惰が遊び任務を終わらせるために魔人の核を大鎌で斬り始めた。しかも笑顔で。

怠惰「どんどん斬つてくぜ〜！」

魔神の奇声を聞いてダークネスが主に伝える。

ダーク「侵入者です。どうします？」

莉亜「…もしかしなくても神司の仲間だ。捕らえ次第俺の方に連行しろ。」

ダーク「はいッ……！」

怠惰「ちよつと……多いよな……」

幾ら魔神を何体も殺すスキルがあつても数の暴力には勝てない。

一体の魔神が刀持って怠惰の左腕の肩を斬った。

怠惰「いてえー！」

ダーク「よおベルフェゴール、久しぶりだな。」

怠惰「一日前に会ったけどな。」

大鎌を持った手の方で斬られた左腕の肩を押しえながらそうダークネスに向かって言葉返す。

ダーク「安心しろ、殺さないから。」

怠惰「だーれが安心できるかつーの。」

ダーク「そうか……んじゃ俺らのために殺されてくれ。」

怠惰「絶ツツ対に！断る！というかお前が俺に殺される……！」

ダーク「それこそ断る。」

怠・ダーク「交渉決裂か……」

ダーク「それなら——」

怠惰「——掛かってこい！」

怠惰は大鎌を、ダークネスは剣を構えた。

魔神の死体が転がっている中、ダークネスと怠惰の死闘が始まった。

## 第101話 操り人形（ベルフェゴール）

怠惰「『狂い裂き』！」

大鎌を振り回してダークネスに攻める。しかし、

ダーク「『壊粉』<sup>かいこ</sup>」

ダークネスは触手を伸ばして剣で怠惰の肩の傷にめがけて攻撃した。

怠惰「ツ！（ヤバい、これは一時退散だ……!）」

怠惰は大量に血が流れた肩の傷を抑えながら後ろに飛んで逃げようとしたしかし、ダークネスは触手に針をバラバラに生やして触手も針も伸ばして怠惰とダークネスごと結界のように囲んだ。

ダーク「逃げようとするなよ？」

駄目だ、これは逃げられない。畜生……でも……

怠惰は肩を切り落として腕を再生する。

怠惰「……サキに情けない俺の姿は見せたくないな。」

ダーク「サキが誰か知らないがお前の事情がどうか知らないが容赦はしない。」

怠惰「『刈り憂怒』……!」

最後の一撃で決める思いでダークネスに斬りかかる怠惰。

ダークネスに素早く米印に斬られる。そこから血が飛び出して怠惰は倒れて気絶した。

怠惰「……がはっ……ッ！」

気がつくとも手足が鎖や手錠で拘束されていた。

怠惰（マズイなあ……手元には大魔術書も無いし、力技は得意じゃないし。）

周りは窓一つ無い薄暗い部屋だった。つまりアドラエルが居た部屋と同じ部屋であつた。ただし怠惰の場合は椅子に拘束されているのではなく壁に貼り付けられていた。

怠惰（それにしてもここは何に使われていた部屋なんだ？）

そう、この殺風景の部屋には拘束器具しかなかった。

椅子や机、ましてやベッドもない。

怠惰（それにしても普通敵を拘束したらすぐに来るだろ。何故誰も来ないんだ。）  
怠惰が疑問点持ち始めているとドアの奥から足音が聞こえた。

「来たか…」と怠惰は思い抹殺されても洗脳されてもいい覚悟を決めた。

莉亜「やあ！怠惰くん！」

ドアを開けて出てきたのは今回の異変のボスでもあり、王の実の息子の莉亜だった。  
そしてその莉亜が満面の笑みで入って来た。

その笑顔が気味が悪い。

怠惰「……何だよ。」

莉亜（お父さんが初めての仲間にしたという怠惰のベルフェゴール。コイツは使えるな…♪）いや？君は確か俺のお父さんと仲がいいよね？」

怠惰「それがどうした？」

莉亜「実はねえ、怠惰くんとお父さん死闘を行って欲しいのだよね。」

怠惰「ヤダね。」

舌を出して馬鹿にする素振りする。すると莉亜は魔方陣を描いて誰かを召喚した。  
出てきたのは頭に角を生やした悪魔が出てきた。その姿は見覚えがあった。

怠惰「…ザキ…!？」

それは莉亜に首を跳ねられた筈の殺風景だった。

苺亜「これで良いのですよね。ザキレウス様。」

ザキ? 「ああ、そうだ。」

怠惰「ザキレウス??」

ザキはザキでも知らないザキが出てきた。

誰だ? ザキレウスなんて。

するとザキレウスが怠惰は話しかけた。

ザキ「久しぶりだな…と言つても昨日会つたか。」

怠惰「誰なんだ。つていうか! 苺亜がここのボスじゃねーのかよ!!」

ザキ「もしかしたらこれで生きれるのも最期かもしれないから話してやれ、苺亜。」

苺亜に説明させるなんて。やはりこの異変のボスはザキ、いやザキレウスなのだろう。しかも途切れ途切れに喋っていたザキの口調が今ではペラペラと喋っている。

苺亜「我々はザキレウス様に拾われた人間だ。俺はザキレウス様に引き取られて色々教えてもらった。次にお前と死闘を行ったダークネスは元々人間で外の世界の住人。廃人になったところをザキレウス様が拾い魔神化されて強化した。正邪はぶらぶらと歩いているところをスカウト。そしてアドラエルとスカノレは親に捨てられたところをザキレウス様に拾われた。」

正邪って確か王の彼女のサグメのところに住た天邪鬼だったような。そうか、ここに

居たのか。

それなら尚更この組織を潰さなければ…

怠惰「はあ!?!」

ザキ「既に数人と闘ったからな。色々な能力を手を得れたぞ。」

マズイマズイ、この事を急いで王に伝えないと…!

怠惰は急いで伝心で神司に伝えようとするも、ザーーツと砂嵐のような音で伝心が遮断される。

怠惰「なっ、何で…?」

ザキ「伝えさせる訳ないだろ。安心したまえ、ベルフェゴールのことはダークが神司たちに伝えるからな。」

くそつたれ、何か少ない情報だけでも、と思いザキレウスに問った。

怠惰「…お前らの目的は何なんだよ。」

怠惰の質問にフツツと笑うザキレウス。

ザキ「話しても良いがな、お前に話した記憶をあとで消させてもらうからな。」

怠惰「ツ…!」

無駄になる前に何とか記憶することにした。

怠惰「わかった…聞かせてくれ。」

ザキ「決心が着いたのか。ならば俺らの目的を話してやろう。」

一言も聞き逃さずにこの話を覚えるんだ！

ザキ「我々の目的は『悪魔流出』だ。」

怠惰「どういうことだ…」

ザキ「例えばこの幻想郷、人里の人間たちが恐怖を感じたモノは具現化されて幻想郷に舞い降りる。ならば俺らのような悪魔が人里で暴れたらどうなる？」

怠惰「…悪魔が人里で溢れ出ることになる…まさかッ！」

ザキ「そのまさかさ！そのループを繰り返せば幻想郷だけじゃない、地球を支配できるのだ！」

最悪だ、今までで一番最悪な異変だ。一体コイツは何をされてこんなにイカれたんだ…

ザキの顔を見直すと俺を殺す勢いのような顔をしていた。

…ミスった!!

ザキ「…もうお前に話すことは何もない。」

ザキが怠惰の頭を掴んで洗脳を始めた。

怠惰「ぎゃああああアアアアア!!!」

痛い痛い痛い！イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ!!!

頭の奥がズキズキ……じゃない、ハンマーで思い切り頭を殴られる感覚だ！そのような感じに現在、見込まれている。

助けて、王……！マモン……！！誰でも良いから助けてくれ、いや助けて下さい……ッ！

……何だ……ナンダ、

王……？誰のことナンダ……？マモン……ダレのことナンダ？

『目の前に居るのがお前の主だ。』

主……？この方は誰なんだ？主……そうか、私はこの方の従者だ。

ザキ「さて、お前は何者だ？」

ゴール「私はベルフェゴール。貴方様の従者です。」

主「そうだ。」

苺亜（凄い、七つの大罪の一人をあんな簡単に洗脳させるなんて、流石はザキレウス様だ。）

ザキ「さてベルフェゴール、任務は侵入者は即殺せ。良いな？」

ゴール「はい……。」

## 第102話 雷炎を直しに。

（紅魔館城内）

「おかしい、もう夜だぞ。なのに怠惰が帰って来ない。昼にマモンとタルウイに再び聞いたが適当な答えで話を反らされてしまった。

俺はメイドバイトの時に借りていた部屋に戻ってベッドに座って壁に持たれてため息をついた。

神司「はあ…怠惰、大丈夫かなあ。」

ドアがノックする音が聴こえた。その音に反応して入っていいと答えた。すると入って来たのはまだ病んでいるドラだった。

ドラ「……」

神司「大丈夫…じゃないよな。」

ドラは泣いて座っている俺に謝ってきた。

ドラ「すみま、せん…！神司様…！」

神司「雷炎の件か？」

ドラ「はい…」

死闘は明後日だからなあ…クロム、雷炎は確かお前が造った筈…。

クロム『いや確かに創造魔法で創れつてもう一回創れるが、ドラは愛用してるんだろ？』

ああ。

クロム『それなら強欲に直してもらえば良いじゃねーか。』

神司「強欲？」

ドラ「…え？」

クロムは俺の中から出てきて着地した。

クロム「よつと、よおドラくん。」

片腕を上げてドラに挨拶する。ドラは泣きながらクロムを見上げる。

ドラ「邪神王さん…。」

クロム「さつき神司にも話したのだが、俺は新しく創る専門だ。だからもし直して欲しいのなら強欲に頼めばいいんじゃないか？」

ドラ「何で強欲さんに…？」

クロム「怠惰の情報では強欲は人里で鍛冶屋鍛冶屋をしているんだ。多分今は家鍛冶屋に戻っているじゃないか。」

神司「ドラ、雷炎を今持つてるか？」

ドラ「持つてますけど。」

神司「よし、それじゃあ今から行くか。」

クロム「それもそうだな。」

ドラ「え」

俺はドラの下に裂け目を開いて強欲の居る鍛冶屋まで落としました。

神司「よし、クロム行くぞ。」

クロム「りょーかい。」

クロムが俺の体内に戻ったのを確認したすぐにドラの落ちた裂け目に入った瞬間に裂け目を閉じた。

く強欲鍛冶屋店く

強欲は紅葉姫の手入れをしていた。すると裂け目が開いてドラが強欲の前に落ちてきた。

ドラ「いたっ！」

強欲「どうした、ドラくん。ん？この裂け目は……」

強欲が裂け目の中を覗くと神司の足が強欲の顔に激突した。

強欲「あがつ!？」

神司「あつ、ごめん強欲。」

強欲「いたた…で、何か用かい？こっちは早く紅葉姫の手入れを終わらせたいのだけ  
れど。」

神司「ごめんな、少し頼むよ。」

ドラ「俺の雷炎を直して下さい!」

強欲「…は？」

雷炎を直して欲しい一心で強欲に向かって土下座するドラ。すると強欲はドラに対して本気で怒った。

強欲「男が簡単に頭を地面に付けるな!!」

神司ドラ「!!」

強欲「もう一度言うぞ？男が簡単に頭を地面に付ける

なって言ったんだ。ちなみにこれを言う理由は無い。男が簡単に頭を付けないのは  
当たり前のことだ。」

ドラ「…ッ!」

確かに強欲の言う通りだ。これはドラが確実にやり過ぎた。

ドラは立って改めて頭を下げて強欲に頼んだ。

ドラ「強欲さん！俺の刀、雷炎を直して下さい！神司様から貰った大事な刀なんです！」

クロム『創ったのは俺だけだな。』

黙っとけお前は。

ドラ「だから、だから…お願いします！」

強欲「……」

強欲はゆっくり近づいてドラの頭を撫でた。

ドラ「……！」

強欲「さつきは急に怒鳴って悪かったな。わかった、ドラくんの刀、雷炎？を直してやろう。」

ドラ「…！ありがとうございます！」

ホツとした。っていうか強欲なら最初からちゃんと頼めば直してくれるだろうけどな。

強欲「さて、本当なら料金は払って貰わないといけないのだけど…明後日のこともある。明日一日かけて雷炎を直してやるよ。ほら、雷炎貸してくれ。」

ドラは鞘から折れた雷炎を渡す。強欲はそれを見ると、

強欲「うわー、ぼつきりとやったな。」

ドラ「すみません……」

強欲「いやいや、大丈夫だ。一日かけて直してやると言っただけだからな。それじゃあ借りとくぞ。」

神司「良かったな！」

ドラ「はい！ありがとうございます！」

あの先程まで泣いていた顔が今じゃ笑顔になっている。本当に良かった。そして本当にありがたい、強欲。

この部屋の時計を見ると深夜2時を越えていた。

神司「さて、このあとドラはどうする？俺は寝るけど。」

ドラ「……恥ずかしいですけど……添い寝、お願いします……／＼／＼」

神司「わかったよ、それじゃあ寝ようか。」

こうして俺とドラはベッドに入って二人で寝始めた。

ドラと一緒に寝るのはドラを従者にしてから初めてだった。結構、ドラのモフモフの尻尾が暖かかったのがわかってすぐに眠りに落ちることができた。

## 【番外編】始めはアベル、終わりはサタナキア（前編）

ある日、一人の魔族と天使族の間に生まれた人間、“アベル”サタナキア？が生まれた。その者はすくすくと育ち、青年まで育った。これは、そんなある日の物語……。

老人「やあ、アベルくん。」

青年が十六になったある日、一人の老人が青年の家に訪れた。その老人は明らかに怪しかったが、青年は上手く話に乗せられて老人に連れていかれた。その二日後……青年の母と父が何者かによって殺害された。しかし青年はこの事を知らないままである。そして、青年は老人と共に一つの技を習得しようとしていた。

老人「さあ、始めようか……アベルくん。」

アベル「はい！」

青年が習得しようとしている技の名は、「人格技」であった。その後やつとのこと人格技を習得した。

悲劇とはいっつき起こるか誰も予測できない。青年は人間だ。そして、世界初の魔神なのだ。



アベル「ギャアアア!!」

老人「ハツハツハツ、頑張れよ!アベルくん!!」

魔神の作り方:

- 一、死んだ生き物の体を用意する。
- 二、人間の魂をその中に入れる。
- 三、完成。

三、五、未完成（異形になる。）

その後、未完成はどこかの異世界に捨てられる。ただし今回は例外である。生きている人間に天使族と魔族の魂を入れ込むとどうなるか。

答えは今行っていることである。

天使族の魂の名は、「ヤシャ||サタナキア?」。魔族の魂の名は、「アスタロト||サタナキア?」。

……後に実験は成功する。その間に起きた異変がいくつか:

まずは、青年の体の中で天使族と魔族の魂は、神化し、天使は「神」、に悪魔は「邪神」

に変化した。そして魂の名も変化した。ヤシヤは「夜叉姫」へ、アスタロトは「レメゲトン」に。この世界には、神と邪神という種族は存在しなかった。神でも天使族、つまり邪神でも魔族なのだ。次に神化してしまったことにより、アベルはサタナキア？の魂は消滅してしまった。そして「神と邪神の魂」は後に融合して、一つの魂となった。実験は成功した。しかし、老人は、

老人「失敗か…魔神番号<sup>ゼロスリー</sup>000？は異世界へ。」

そうして異世界に捨てられた。

その後、その世界の神、ゼウスに拾われ、神と邪神が融合したことをゼウスから知らされる。そして後にアベルによる神殺しが行われるとは誰が予想できただろうか。

くそして、何百年後く

アベル「……はあ！」

ハデス「ッ！」

成長したアベルはゼウスの兄弟でもあり、冥界の王でもあるハデスと闘っていた。

アベルは一本の刀、ハデスは長い杖で戦闘していた。

アベルがハデスの肩を狙ったがハデスも神だ。杖で簡単に防がれた。

アベルは後ろに一度引いた。

ハデス「…今日はここまでだ。」

アベル「…っ！ありがとうございました！」

両方、武器を片付けてから一礼した。いつもこれでハデス師匠の特訓が終わる。

アベル「やつぱり師匠は強いですね！」

ハデス「当たり前前だ、私もゼウスと同じ神だ。魔神のお前よりも上なんだぞ。」

アベル「へへっ、そうですね。」

アベルの仕草を見てまだまだ子供だなとハデスは思った。

そのまま月日は流れた。

ある日にアベルの邪神の魂が暴走し始めた。

この時アベルを止めに努力したのはゼウスとハデスと同じく兄弟 海の神のポセイ  
ドンだった。

ポセ「アベル、早く止まるのだ。」

アベル「ガアアア!!」

アベルは咆哮を放つと邪気を纏わせた刀でポセイドンの片腕を切り落とした。

ポセ「ぎゃあああ!!」

今まで聞いたことのないような叫び声。それを見たアベルは三日月のよ

うな口をするとポセイドンの腹に刀を刺した。そして邪気を燃え上がらせてポセイドンを焼いた。

神属「ゼウス様！」

ゼウス「判っておる！だがあのままだと……！」

あのままだとポセイドンごとアベルを神雷を落とすことになるのだ。

ゼウスがおろおろしているとポセイドンの口の動きに注目した。

POSE『わたしごとうちぬけ』

ゼウスはその動きを見てすぐにポセイドンごと神雷を三本ほどアベルに落とすとした。

神雷が降り終わると丸焦げのアベルがいた。しかしポセイドンの姿は燃え尽き、炭と

なっていた。

## 【番外編】 始まりはアベル、終わりサタナキア（後編）

（天界会議）

その夜緊急で天界会議が開始された。

司会はゼウス。参加者は兄弟のハデスとアテネなどの神が集まった。

ゼウス「アベルは今何処だ。」

アテネ「はっ！現在アベルは天界の地下牢獄の壁に鎖を巻き付けて監禁しております。」

ゼウス「報告ありがとう。さて、今回集まってもらったのは他でもない。私が拾った別世界からの来訪者の件についてだ。」

司会のゼウスが話始める。

ゼウス「その来訪者の名前は『アベルⅡサタナキア』という青年だ。」

ラファ「アイツだろ？あのポセイドン様を殺したっていう化け物。」

ガブ「でも実際にはゼウス様が最後にトドメを差したって聞いたけど？」

アテネ「ガブリエル！ゼウス様のことを悪く言うな！」

ガブ「ああ？るっせえよ、闘いの女神がよ。」

ゼウス「静粛に!!」

全員「!!!?」  
「」

神たちを黙らせるほどの大声で騒ぎを止める。

するとゼウスは槌ガベルを強く打った。

ゼウス「簡単に決めるぞ、判judgment決を。」

↓地下牢獄↓

アベル「……」

アベルを目を覚ますと暗い石のできた部屋の壁に鎖で張り付けられていた。下を確認すると衣服が全て脱がされていた。つまり、今は全裸というわけだ。鉄格子もない部屋なので今が夜か昼かもわからない状態だった。アベルは心細かった。

いつもはハデスとの特訓で一緒に居たり、ゼウスたちと仲良く遊んだりしていた。が今はそんなことを考えている事はこの事ない。

アベルの心の奥から悲しみと怒りが上がってきたが何とか抑え込んだ。

アベルは察した。この感情は『滅び』を招くと。

牢獄の前から何人かが倒れる音が鳴る。そしてこの部屋のドアがゆつくりと開いた。そこから現れたのは、冥界の王のハデスだった。

アベル「師匠……」

ハデス「アベル！」

ハデスはすぐにアベルが拘束してる鎖などをアベルの身体が傷つけないように慎重に取り始める。数十分でアベルに付いていた鎖などが解けた。

ハデスはアベルを優しく抱いた。

ハデス「大丈夫か？怖かっただろ？」

アベル「うん……！うん……！」

二人とも泣きながら抱き合った。

ハデスはゆつくりとアベルにこのあとのことを話した。

ハデス「アベル、しっかりと聞け。今からお前はここから脱獄しなきゃいけない。そしてこの脱獄にはアベルお前一人で行え。」

アベル「えっ!?!何ですか!」

ハデス「しっ！静かにしろ。」

慌て両手で口元を隠す。引き続きハデスの話を聞く。

ハデス「逃げたところでゼウスたちの兵士たちが追いかけて来ると思うが、そいつら

はお前がポセイドンを殺したように殺せ。」

アベルには大きな疑問が一つ浮かんだ。

アベル「師匠……」

ハデス「どうした。」

アベル「ポセイドン様を殺したようにって、誰が殺したのですか？」

ハデス「ツッ！」

それも当たり前前、アベル自身がポセイドンを殺したのではなく、アベルの体の中に融合した神と邪神の魂の内の邪神の魂が暴走したのだから。しかもアベルにはポセイドンを殺す理由がない。

なのでこの事を知らないハデスはアベルが壊れたのかと思い、真っ裸のアベルの腕を掴み牢屋から引きずる。

ちなみにこの牢獄は石でできている。勿論この道も石でできている。

アベル「痛い痛い！師匠！止めてください！」

ハデスは何も話さずにアベルを引きずっていく。

アベルは引きずられてるのでハデスの顔は確認することができないが此方からの確認できるハデスの顔は諦めと怒りのキレたような顔であった。

◇ ◆  
 〽天界の一番端〽

ハデスは天界の一番端まで連れてくるとアベルの腕を持ったまま天界の外に吊るした。

アベル「し、師匠……まさかここから落とすとか……」

ハデス「……すまん、アベル。これもあのお方の命令でな。」

アベル「止めてください……！俺は貴方に何かしましたか?!」

ハデス「黙れアベル！」

そう言つてハデスは下界に投げ捨てた。

アベルの叫び声がどんだん聞こえなくなる。

ハデス「これで良かったのだ……！これで……！」

ハデスは膝を落として泣いて自分を慰めていた。が、その声からアベルに対して謝る声は聞こえなかった。

◇ ◆  
 〽???〽

アベル「……貴方は確か……」

アベルがあ的那天から落とされた筈。なのになぜ生きているのか。それは落とされた直後、謎の裂け目に吸い込まれて異空間に飛ばされたのだ。そして気づいた、目の前に見覚えがある老人の姿があった。その老人とは、アベルに人格技を教え、最後に実の親の魂、夜叉姫とデメゲドンの魂をアベルの身体に無理矢理入れ込むという新しい魔神製作の実験台として扱った人物だった。

老人「やはり我の眼に狂いはなかった！<sup>ゼロスリー</sup> 000? ……いや、アベル青年！我々の仲間にならないか？」

アベル「絶ッ対に嫌だね！」

アベルは即答で答えた。

何を言っているんだ、あの老人は。俺を魔神にした上に異世界に捨てやがって。意地でも仲間になるもんか。

すると老人は腹を抱えて笑いだした。

老人「クククツ……はっはっはっは!!」

アベル「何が可笑しい！」

老人「いやはやすまないねえ、アベル青年。まさか、これもまた断つてくれるなんて……洗脳という実験台がまたできるなんて……♪」

アベル「ツ！」

老人は奇妙な笑顔になると口元を舐めまくった。アベルはそれを見て恐怖を感じた。少ずつアベルに歩いて近づくと老人。後ろ去りするアベル。するとアベルは急に激しい頭痛に襲われる。

アベル「ツ……！」

老人「アベル青年、君はもうこの場に堕ちた時点で我の新しい実験が始まったのだよ。」

アベル「その……実験、とはツ……！」

老人はジャンプしたりして喜びながらこの場の状態について語り始めた。

老人「その実験はねえ！『人格霧状増加実験』！だツ！その実験とは……！」  
「どうやらその実験は——」

天使の神経を綺麗に引つ張り抜く。次にその神経を粉々に粉末状にする。そしてその粉をこの場に撒き散らす。すると魔神の肉体に反応する。老人はその後を見たいのだ。

アベル「あ……ぎゃつ……！つ！」

老人「はあ……♪」

頭が二つに別れるような激しい頭痛だった。

アベルの苦しむ姿を見た老人は歓喜の声を漏らす。そのまま実験が成功すれば本当に面白い結果になれば良いと老人は思う。

老人「それじゃあさようなら……!アベル青年!」

アベル「ガ”ア”ア”ア”ア!!」

するとアベルの体から白い髪に頭に神々しい輪を浮かせて白い四枚の翼を生やした男性が出てきた。そしてアベルはそのショックで気絶してしまった。

老人「おお!新しい神の誕生だ!」

男性「俺が…神?」

老人「そうだ!では手始めにその青年を消し去れ!」

男性「それだけは断る。」

老人「な、なぜだ!」

男性「こいつは俺の生みの親だ、親を殺さない理由など無い。」

老人「ハアアアア!我がキラティナ・キラティナイドの言ウコトを聞ケー!!」

老人は本性を出した。姿も変わり、顔が黒い星の様で腕は三つ、その内の二本はナイフとフォークを持った異形に変わった。そして口調も変わってしまった。

男性「『炎陣』。」

男性はこの場に自身とアベルを囲んでこの場から消えた。



## 第103話 ドラシロの特訓 信頼する仲間

朝になった。今はオーデインとドラとシロは準備運動を始めていた。

オー「そんなじゃあ、始めるか。」

ドラシロ「「お願いしますー。」」

ドラとシロが気合いを入れてあいさつする。

俺とクロムは手合わせしながらオーデインからの特訓を見ていた。

オー「さて、確かお二人は不死と神司から聞いたが…。」

ドラ「はい、そうです。」

シロ「そうだね。」

オー「了解…あと、ドラくん、刀はどうした？」

ドラ「現在、強欲さんのところで修理してもらってます。」

オー「大丈夫なのか？死闘は明日だぞ？」

ドラ「強欲さんが今日までに直すと云ってました。俺は強欲さんを信じていますから。」

オー「そうか…なら俺をどうやって倒す？」

ドラは左手の上に雷、右手の上に炎を出して、

ドラ「雷<sup>武器</sup>炎を使う以外でできた倒します。」

オー「ほう、それはなぜ？」

ドラ「なぜ……？」

へえ、オー、ドラに難しい質問するよな。あの質問の答えは『いつも使う武器が無いから』とか『他の闘い方に挑戦したいから』などというのが簡単な答えだ。

さて、ドラは何と答える……。

ドラ「……このままじゃ、皆を助けられないからです。」

オー「……」

ドラ「すみません、言葉を変えます……。このままの俺の力では大事な時に助けられないからです。」

オー「良い答えだな。オツケー。ごめんな！シロちゃん、ドラくん、特訓を始めようか！」

シロ「あつ、はい！」

ドラ「はい！」

見てわかった。オーデインは子供には優しいタイプだ。もしオーデインが学校の先生なら社会とかしてそうだ。

オー「さて：『戦乱の乱れ大槍』。」

オーデインは槍を空に投げて分散させて乱れて落ちていく。

ごめん、前言撤回だ。オーは特訓のときはガチだったらしい。

ドラ「『雷速』！」

シロ「『ハリケーン』！」

ドラは足に雷を付けて素早く避けて、シロは体の周りに風を張って攻撃を受けないようにした。それで二人は槍の雨を上手に避けていく。

オー「まだまだ行くぞ：第二陣！」

ドラシロ「『ッ！』」

オーデインは槍を分散してもっと増やして降らす。

ドラ「シロ！避けまくれ！」

シロ「わかってるよ！」

：鬼畜だな。でもオーデインの目は本気だ。本気でドラとシロを強化させる気だ。

するとドラはオーデインに攻撃を仕掛けた。

ドラ「炎符『ハイ・フレイズ』！」

『ハイ・フレイム』の応用技だ。通常の『ハイ・フレイム』だと大きな炎を一発放つだけだが、今回のはその炎を数十個放っていた。オーデインの真下でドラは放つ。オーデイン

ンはギリギリのところを避ける。

オー「ツ……！だが、そこからどう避ける!? 死戦『重曹戦槍』。」

オーデインは分散していた槍の全てをドラに向けて攻撃した。これならドラも避けられる。しかしドラは避けなかった。いや、避けられなかった。

ドラ「があゝ ツ!?!」

オーデインの重力によって体を潰されていたからである。

オー「早く動けよ!」

ドラ「ぐぎぎぎっ……!」

オーデインがドラを囓り立てる。するとシロが兄の代わりに攻撃を受けた。

ドラ「シロ……!?!」

シロ「痛いよ……っっていうか、お兄ちゃんだけ狙うとかウザイよ? あんたがマスター

の親友かは知らないけどね、お兄ちゃんを虐める奴は誰であろうと許さない。殺風『慈悲無き風神の槍』……!」

風の槍を飛ばしてオーデインの体を貫通させる。そこから血が流れる。

オー「あゝ、がっ……!?!」

するとシロは拳銃を取り出すとオーデインに構えた。

シロ「安心して? 弾は入ってないから。」

そうだ、その拳銃には弾は入っていない。しかしこの拳銃は能力を使用して放たれる武器なのだ。

シロはオーデインに向かって水弾を数十発放った。右肩に二発、左肩に一発そして右足に二発当たった。

シロ「……」

すると弾切れを起こした。するとシロは水で作った大きな槍をオーデインに構えた。

シロ「『アクア・グングニル』……!」

ドラ「『雷剣』!」

シロがオーデインに水の槍を投げてからドラが雷で作った剣で一刀両断した。なのでオーデインに当たることはなかった。そして水で雷剣は分解されて消えた。

シロ「何でお兄ちゃん止めちゃうの!?!」

ドラ「殺す気か!お前は!!」

シロ「ツ……!」

この場の皆が驚いた。なんとあのドラがシロに対して『お前』と呼んだのだから。

俺は今までドラがシロのことを、いや誰のことも『お前』と呼ぶのは聞いたことがない。

ドラ「これでもオーデインさんは俺らを成長させるために厳しくしてくれているんだ

！これでシロが暴走してどうすんだ!？」

俺の心にもズキツと何かが刺さった。俺もオーの口車にまんまと乗せられて一度暴走してしまったからだ。

ドラは優しくシロを抱いた。

ドラ「お前が怒りたい気持ちも判る、もし俺がお前の立場であれば俺も暴走していたのかもしれない…ごめんな、怒鳴ってしまつて。」

シロ「良いよ…私も悪かつたよお…！」

泣きながら謝り合う兄妹。そこに傷を癒したオーデインがその兄妹にゆっくり近づいて声を掛ける。

オー「良いのか？今は敵の目の前だつてのにか？」

そう言つて二人の体に槍を貫通させる。

二人「アガツ…!？」

オー『SOUL：END』

『SOUL：END』…!？ヤバい、直訳は『魂の終わり』…!!

俺はすぐさまオーデインに近づく。

するとクロムが俺を止めに入る。

神司「どけクロム！」

クロム「案ずるな、これもアイツのレッスンの一つなんだ。」

神司「それでもこれはやり過ぎだ！」

クロムが神司の腕を掴んで地面に叩きつける。

神司「ッ！」

クロム「いい加減にしろよ！オーデインもいてえんだよ！家族が大事なのは俺も判る

！今はお前だけの問題じゃねーんだよ！！まだ暴走すんなら明日の死闘に参加するな！」

そう言つてクロムは俺の身体から離れる。

分かつている、俺のダメなことは。暴走もそうだ。唯一の親友も信用できない、とうか仲間が仲間にする行為そのものを信用していない。今は皆の家族救出、そして幻想郷を守る役割もしなければならぬ。それは俺らに懸かっている。

神司「くそっ……！」

地面に拳を打ち付ける。

悔しきしかない。こんな俺を直したい。人任せにはしたくない。そして後に決意する、全てを守るなら俺は『俺自身の力を隠さない・全て発揮する』……と。



ドラシロ「ありがとうございます！」

オーデインの特訓が終わった。現在の時間は、午後の6時3分だ。まだ怠惰は帰って来ない…もう既に嫌なことが進んでいるのかもしれない。

～夜9時～

神司「レミリア。」

レミイ「何かしら…」

神司「ごめんだけど、霊夢と魔理沙を咲夜に呼んで来てもらえないか。」

レミイ「霊夢と魔理沙を？良いわよ。」

レミリアが手を二回叩くとすぐに咲夜が現れた。

咲夜「どのようなご用件で。」

レミイ「霊夢と魔理沙をすぐに呼んで来てくれる。」

咲夜「承知致しました。」

そしてこの場から消える咲夜。

俺はレミリアに咲夜の能力のことを聞く。

レミイ「ああ、それは咲夜には『時を操る程度の能力』を持つてるのよ。だから消えたように見えた訳よ。」

神司「なるほど。」

咲夜「お呼びしました。」

霊夢「何、急用なのよね。」

神司「勿論だ。」

咲夜「それでは私はこれで——」

神司「いや、咲夜も残ってくれ。」

レミイ「咲夜、残りなさい。」

咲夜「承知致しました。」

神司「……今回の鬨い、君たち四人は人里の救助を願いたい。」

霊夢「何でよ!」

神司「死んでほしくない!」

四人「!!?」

神司「それだけだ……今回の鬨いは『異変解決』という柔なもんじゃない。アイツらも殺しに掛かって来ている。勿論お前らを信用してない訳じゃない。ただ、この死鬨は俺らの問題なんだ。霊夢、レミリア。そして魔理沙と咲夜……こんな鬨いに巻き込んですま

ない。」

レミイ「…判ったわ。」

霊夢「レミリア！」

神司「レミリア…」

レミイ「私たちを信用しているのよね、それならその期待に答えるまでよ。霊夢、魔理沙、貴女たちは幻想郷を守る『異変解決者』なんでしょ？それなら人里ぐらい守つてみなさいよ。あとと思い知つたでしょ、あの馬鹿ほど強い異形や悪魔たち。あんなものは私たちとは互角に闘えない。でしょ？」

霧雨「…レミリアの言う通りだ。あの魔神たちに私たちは勝てない。それなら大人しく人里を守つた方が良いだろう。死なないよりもマシだ。」

霊夢「……」

神司「……良いのか…？」

霊夢「…くないわよ…」

神司「えっ？」

霊夢「良くないわよって言うてるの。私らも嘗められたものね。いいわ、人里を守るのは『博麗の巫女』の仕事ですもの。その戦略、ノつてやるわよ。ねっ、咲夜。」

咲夜「そうね、あとお嬢様がそうするのならお嬢様に着いていくのが私の使命。」

神司「…………ごめん皆…ありがとう…！」

本当ならレミリアも家族の復讐で敵のアジトに乗り込みたい筈だ。それを俺が止めたんだ。本当に申し訳ないと思っている。ただし、あとは明日の死闘あるのみだ。気合を入れていこう。そして、クロムと仲直りしてから今日は休もう。

## 第104話 VS 氷結の魔女と伯爵ピエロ

朝になった、始まりだ。

強欲以外の全員が紅魔館に集合していた。

強欲「おーい、ドラくん！」

強欲が走ってやって来た。ドラは強欲に向かって走って行った。

ドラ「強欲さん、おはようございます。」

強欲「ああ、おはよう。それと、間に合ったよ。」

ドラに直した雷炎を渡す。ドラは雷炎を受けて満足した様子で笑みを漏らす。

ドラ「ありがとうございます！」

強欲「大丈夫だ、請求はドラくんの主にさせるからな。」

神司「えっ？」

強欲「それじゃあすまなかつた。お前がオーデインだな？」

オー「強欲とは初めて会うな。オーデインだ。よろしくな。」

強欲「ああ、よろしく。」

握手を交わすオーデインと強欲。これから死闘だと言うのに余裕そうなオーデイン。

それに睨む強欲。



ダーク「侵入者です。」

ザキ「来たか……！我々も守備位置へ移動。各々好きなように暴れたまえ。」

部下「「はっ！」」

ザキの部下たちが待機する位置まで素早く移動する。ザキは異形をもっと増やすべく異形を創ってはすぐに人里にバラまいた。

一方神司たちは、

神司「……」

順調に前に進んでいた。これまで数十体は異形を倒したがこのアジトに属している敵をまだ見かけていない。

すると急にパツとライトがついて黒いシルクハットを被ったグレーの髪の男性が現れた。

？「レディース&ジェントルメーソ♪朝からお早いところありがとうございます！」

急に俺らの目の前に現れた男性は自己紹介を始めた。

？「私は大悪魔術師の、スカルⅡキラティナイド？と申します。まあ『キラティナイド』は仮名ですけど……さて、この人数を私一人で相手するのは不可能。ですので……♪」

スカルが指を鳴らすとこの場にいるクロムとドラシロ以外の俺たちが落とされた。

神司「クロム！ドラ！シロ！」

ドラシロ「神司様——！」

クロム「安心しろお前ら！ここは俺らがアイツを倒す！倒してからすぐに合流するか  
らな！」

クロムの声がそう聞こえてから穴が閉ざされた。

クロム「さて……始めようぜ。スカル！」

スカル「そうだな……つとその前に特別ゲストのご登場だ！翡翠の氷結使い、  
ラエル・マレットⅡキラティナイド？だ！」

三人「えっ？」

スカルが指差した方向にスポットライトが当てられてそこからロングの髪に蛇のよ  
うな柄のドレスを着た大人びた女性の姿があった。

女性「先程スカル伯爵のご紹介がありました、どうもアドラエル・マレット嬢様、ナイドですわ。」

クロム「アドラ！」

アドラ「あら♪クロム御兄様じゃないのですの。私の初試合は御兄様とですの？」

スカル「そうだけ、アドラエル。初のお披露目だア、華麗にヨロシクな！」

アドラ「勿論ですわ。」

シロ「お母さん…」

シロが怯えながらもアドラエルに話しかける。

アドラ「あら、シロフォンさんじゃないのですの。しかもその隣はドラさん。お久しぶりですわね。」

ドラ「母さんどうしたんだよ！」

アドラエルの異様な態度に疑問を持つドラ。するとアドラエルは高らかに笑うと、

アドラ「どうした？それは此方の台詞ですわ。貴方は私が奴隷市場に売りましたのに何故この場に居るのですの？」

ドラシロ「「ッ！」」

酷い衝撃<sup>カミングアウト</sup>だ。しかしあの優しいアドラだ。これは例の洗脳で記憶が書き換えられて

いるに違いない。

シロ「偽物め……！お母さんから出ていってよ……！」

アドラ「シロフォンさん、これは素の私ですわよ。」

シロ「出て行けー!!」

シロは怒りで空中に『アクア・グングニル』を出してアドラエルに投げつけた。しかしアドラエルは後ろに隠していた武器で簡単に『アクア・グングニル』凍らせて消し去った。

アドラ「スカル伯爵の説明を聞きませんでしたの？翡翠の水結使いだと。」

シロ「五月蠅い黙れー!!」

ドラ「落ち着けシロ！」

もう一本『アクア・グングニル』を投げようとしていたシロの腕を掴んだ。

シロ「離してよ！お兄ちゃん！」

ドラ「落ち着けてば！」

スカル「余所見厳禁……♪」

スカルがシロの腹を殴り掛かったがクロムがその拳を止める。

クロム「コイツらには指一本も触れさせねえ。俺はコイツらにとって『叔父さん』なんだからな。」

スカル「だからどうした!」

クロム「つまりだな…お前の相手はこの邪神王なんだよ。」

スカル「ギヤアア!!」

クロムはスカルの拳に力を入れて握り潰した。

クロム「アドラの方は任せたぞ、マレット兄妹。」

そう言つてクロムはスカルを壁に投げつける。クロムは投げつけたスカルに向かって走つて行つた。

ドラ「母さんは母さんだ。今の母さんは洗脳に堕ちている。シロ、母さんを救うぞ。」  
シロ「判つてるよ。この命が何回死のうとも必ず助ける!」

アドラ「決意はしたのですか?それなら此方も本気でお相手させていただきますわ…」  
♪

アドラは悪魔のような槍でこの場を凍らせる。

アドラ「私のフィールドですわ。」

ドラ「抜刀…」

ここで強欲さんに直してもらつて初めて抜刀した。刃の色は雷の黄色い絵と炎が雷のように交差になつて描かれていた。しかも雷炎から山吹色のオーラを放つていた。これは強欲さんに大感謝だ。

ドラ「雷迅『建御雷』……!」

いかづち  
雷のように移動して母さんに近づいて斬った。

アドラ「『アイスシールド』。」

氷の床から壁が生えて母さんを防いだ。

シロ「『風陣化』。」

シロは体の周りに風を張って氷の壁に突っ込んで破壊した。

アドラ「へえ……!」

シロ「『風弾』!」

手を銃の形にして指から旋風を放った。しかし母さんその旋風を避けてはその指を掴んだ。

アドラ「そのいらぬ指を折りましょうか?」

シロ「いや……いや……!」

ドラ「止めろー!!」

ポキッと音をたててシロの指が不自然な方向に曲がった。シロは声にならない声で叫びこの洞窟内に響いた。

アドラ「あははッ!可愛い鳴き声ね……♪ッ!」

ドラ「母さんテメエ……!」

ドラは雷炎でアドラに攻撃するが武器で防ぐ。

アドラ「あらあら、親になんて態度：死になさいよ。」

ドラ「炎陣『煌めく火炎』！」

雷炎から光を出して爆発が起こりアドラを吹き飛ばした。

ドラ「絶対母さんを元に戻す。シロは指が治るまで休んどけよ。」

シロ「う…ん…」

シロは折られた指を掴みながらドラに返事する。

ドラ「さて、気絶してもらうまで闘ってもらうよ、母さん。」

アドラ「あら甘いんじゃないのかしら。殺すまでの間違いじゃなくて？」

ドラ「いや、俺の意見に間違いはないぜ。」

ドラは雷炎を構え直すと雷炎を発火させた。

異形を殺しまくった。その異形を斬った油を付けつつ摩擦を起こすて発火させる。

幻想入りした漫画がここに来て役立つとはな。

ドラ「爆雷『エクスプローション×サンダーボルト雷 迅 爆 発』！」

爆発の連鎖が起こりその爆発一つ一つに電気が走る。それに続くように雷が雷炎を纏う。それでアドラに斬りつける。アドラは反応が遅れてお腹を負傷させられた。

アドラ「かはっ…！」

ドラ「……これは、結構な……集中力が、いるな……」

ドラは力尽きて倒れて気絶してしまった。しかしアドラエルはまだ気絶していなかった。

アドラ「はあ……はあ……このクソガキがア……!」

水の銃弾がアドラエルの掌に当たる。

アドラ「ああ!」

アドラエルが見た視線には指を治したシロが手を銃の形にしている姿だった。

シロ「もういい加減にしなよ、お母さん。」

アドラ「黙りなさい、何も役に立てない兄に止められないと暴走を抑えられない妹が私に今頃何用よ。」

シロ「洗脳されたお母さんはアホになる。覚えておくね。」

アドラ「何を言ってるの?」

シロ「ワカラナイ?それなら……アホなお母さんでも分かるように私が教えてアゲル。」  
三日月のような口をニヤリと笑うシロ。それに恐怖を覚えるアドラエル。我が娘にもかかわらずアドラエルは死を感じた。

◆  
クロム「で、まだ闘うのかい？ 実力も出さずに出落ちで。」

スカル「ふざけるな！ 邪神王が何をほざくか！」

スカルは手から禍々しい玉を数個周りに放った。

ふーん、破壊玉か。確かに喰らったら喰らったところから蝕むけどそんなの俺には関係ない——

クロム「——ッ！」

マズイ……！

咄嗟にこの破壊玉を避けた。何がマズイか、それはあの破壊玉は周りの空気さえも破壊していたからだ。感じたから分かる。あれは破壊だけでは済まない。

スカル「気づいたところでもう遅い。貴方が避ける様が愚かなピエロに見えるのは私だけですかア♪」

クロム「黙れスカノレ「はあ!」俺は本物の『キラティナイドの血』を引いている。言つたぞ、自称ではないと。」

恐ろしく恐怖を覚えるスカル。すぐに理解した。『コイツは本物のキラティナイド家だ』と。

クロム「知ってるか？キラティナイド家にはな、必ずといった能力が受け継がれる。その能力つてのは：『BLEAK』だ。」

スカル『BLEAK』だと？そんなのハッター——」

パンつとってスカルの近くにある岩が木つ端微塵に破壊される。

クロム「破壊能力：正直、この受け継がれる能力は元々親父だから使いたくなかった。スカル、死なないうでくれよ？」

クロムは物凄い殺気と邪気を放つ。それにスカルはビビり、挙げ句の果てには気絶してしまった。

クロムは内心、使わなくて良かったと安心していた。

アドラ「クロムお兄様！」

アドラエルがクロムを呼び出した。見るとアドラは元の姿に戻っており蛇柄の服を着ていたままだったがだるだるになっている。

クロム「アドラ！」

クロムはアドラエルを優しく抱きしめる。

アドラ「助けて！シロが！」

クロム「シロ？」

シロを見ると、風と水が身体中から溢れだしていた。

クロム「何がどうしてああなった!？」

アドラ「わからない、あどらが偽物のあどらがシロにいつばい悪口言ったのは確か。」

クロム「その前にドラはどうした。」

アドラ「ドラはあどらに攻撃してから気絶した。」

クロム「なるほどなあ…シロちゃん!あんたは何をすれば落ち着く?!」

シロ「…何も、母さんを殺せば終わる…」

クロム「ああ!そうかい!それならアドラの『BLEAK』を浴びろよ!」

アドラ「ええ!?嫌だよ!」

クロム「お前の『BLEAK』は特殊なんだ。」

アドラ「で、でも…」

不安があるのか涙を流すアドラエル。それにクロムは説得する。

クロム「今はお前が頼りだ。お前はシロの母親なんだ。早く助けてやれ。」

そう言つてアドラエルの背中をシロのいる方向に押した。

アドラ「シロ…死なないで!『精神破壊』」

アドラエルは念じるとシロは苦しみだした。

シロ「あつ…があつ!」

アドラ「…」

アドラは念じ終わるとシロは倒れて気絶した。アドラエルは直ぐ様シロの息を確認する。ゆつくりと動く鼓動。アドラエルは安心して腰を抜かした。

クロム「此方の戦鬪は終わりだ。少し休んでから……いや、ドラとシロ、あとスカルが起きたら仲間と合流するぞ。」

クロム&ドラシロ VS アドラエル&スカル

クロム&ドラシロ Win

## 第105話 無惨な始まり（一ページ）

く禍々しい洞窟

上から謎の穴が開いてそこから二人落ちてきた。

強欲「——つと。」

オー「……」

その二人とは仲間と別れた強欲のマモンとオーデインだった。洞窟内は紫色の蔦や触手がうねうねと動いていた。ただただ気持ちが悪い。吐き気もする。

？「ほう、流石はスカルだ。俺の獲物をこっちに寄越すとは。」

触手の壁から一体の異形が現れた。その異形とは——

強欲「……ダークネスⅡナイトメア……」

一昨日に強欲たちが死闘した仲間の一人のダークネスだった。

ダーク「よお、やつとここで因縁の結末かよ。」

オーデインがダークネスに向けて大槍を構えた。しかし強欲はオーデインの前に手

を伸ばして止めた。

オー「何をする強欲。」

強欲「ここは俺に任せてくれ。」

オー「だが実際一昨日にお前は負けている。」

強欲「ツ！あの場に居たのかお前……！」

オー「……居たさ。」

強欲「あの時俺らはピンチだった。それなのに何故助けなかった！」

オー「……」

オー「デインは黙ったまま立ち尽くしてしまった。それをみたダークネスは触手で剣を持ち二人に攻撃を仕掛けた。

オー「強欲！」

強欲「ああ？……ッ！」

強欲は何とか紅葉姫を抜刀し、防いだ。

強欲「卑怯だと……!!?お前らしくねえなあ！ // 政宗？エ！」

オー「政宗……！強欲まさか政宗っていうのは……！」

強欲「そうだよ……！政宗ってのは、あの伊達政宗だよ！」

なぜ異形化したのかはわからない。だが洗脳されたのは確実だ。あの正義感の強い

政宗だ。絶対に自分から悪に染まるなんてあり得ない。

強欲 「元に戻れよ！政宗！」

ダーク 「すまんア、今はダークネス・ナイトメアなんだよ。古くさい // 伊達政宗？  
なんてもうこの世になんか居ないんだよ！」

力に押し負けてすぐに後ろに下がる強欲。

コイツは俺の友達だ。絶対に止めて見せる。

強欲 「第一人格『邪神斬り』！」

神ノ邪神のパクリで邪気を横一文字でダークネスに放った。

ダーク 『触発結界』」

ダークネスは自身の触手で自分自身の周りを守った。

ダーク 『一度俺に負けている』。この言葉の意味が判ってるよなあ。」

強欲 「……何も俺はお前に勝つとは言っていない。俺はお前を元に戻す。」

ダーク 「甘エあめんだよ！」

触手を解いて俺に突進するダークネス。

強欲 「お前は手エ出すなよ！オーディン！」

オー 「ここで座って観戦してるから。」

強欲 「大人しくしてろよ！行くぜダークネエス!!」



タル「ねえ、亜無くん。」

亜無「はい、どうしました？」

タル「しりとりしよ。」

亜無「今ですか!？」

現在進行形で言おう。只今私、紅風 亜無とタルウィさんは、スカルという敵の仲間  
に謎の穴に落とされて気がつくくと再び洞窟の中でした。とりあえず仲間と合流するた  
め、この洞窟を歩き続けている。タルウィさんは暇になりしりとりしようと思案され  
た。

亜無「そ、それじゃあしますか…」

タル「やったー!それじゃあそれじゃあ!タルウィの『い』!」

亜無「『い』…石の『し』。」

タル「神司の『じ』!」

~~~~~

タル「——熱の『つ』！」

亜無「積み木……」

タル「はい！亜無くんの負け〜！」

亜無「え？」

タル「積み木は私が先に言ったよ！」

亜無「マジでか……！もう一回……！」

タル「でも待ってね。どうやら私たちの邪魔をするお客さんが居るわよ。」

タルウイが見ていた先には黒いフードを被り、黒いコートを着ている如何にも魔術師のような格好をしていた。

タル「ちよつと退きなさい。私たちは先を急いでいるのよ。」

魔術師「……〜！」

魔術師は黒い本を開くと詠唱をし始めた。詠唱が終わると魔方陣がが現れてそこから異形が数体現れた。

亜無「タルウイさんは、俺の援護宜しくお願いします！」

タル「合点承知！」

亜無「紅劍『紅風嘘無劍』！」

タル「今回はライムちゃんの代わりにアシストするよ〜♪」

亜無は紅風嘘無劍を左手に装備してタルウイは両手に熱球を浮かせて異形に投げ始めた。

亜無「タルウイさん、異形を倒すには異形の体の中にある玉を壊さないと復活してしまいますよ。」

タル「なぐるほど〜♪ならば…溶かせば良いのかな…！陽熱『熟した火実』！」

宙に浮いて大きな熱球を作り大勢の異形に向けて投げつけるタルウイさん。その熱は想像を越える。何せ洞窟の壁の岩が溶けている。流石の魔術師もこの熱気には耐えられないはず…！

しかし魔術師は異形が溶けている中ゆっくりとタルウイさんに近づいていく。魔術書を開いて詠唱をしながら近づく。そして今更俺は気付く。

亜無「タルウイさん！危ない！」

もう時既に遅し。詠唱は唱え終わってタルウイさんはこの熱気の中、氷結して落ちてきていた。

亜無「タルウイさーん!!」

た。  
タルウイさんの身体は落ちた衝撃で粉々に割れた音だけが静かにこの洞窟内に響い

## 第106話 VS 過去の友人（剣士）

未だに強欲とダークネスが紅葉姫と剣の打ち合いが続いていた。

強欲 『鬼裂抜刀』きれつばつとう……！』

ダーク 『弾圧』。』

紅葉姫を一度鞘に入れ直し勢いよく抜刀する。その同時に小さな爆発が起きるがダークネスは剣を触手で包んでその攻撃を防いだ。

強欲 「はあ！」

ダーク 「フツ……！」

強欲とダークネスは一度後ろに離れる。

一旦整理しよう。このままではこの闘いは永遠に続いてしまう。消耗戦は続くのは危ない。このあとにももう一戦あると考えると思うとこの闘いは本当に危険だ。ならば俺の能力を発動するか。

強欲は身体中から光を放つ。すると身体中から左右に三本ずつ蜘蛛の脚のような金が生えてきた。

強欲 『『金魔神化』、戦粉『金粉一文字』』

紅葉姫を金を纏い横一文字したときにその金を一度に割ってダークネスに飛ばした。俺の能力、『金を自由自在に操る程度の能力』を使って今の姿フォームにもなっているし紅葉姫を金化にもさせた。ただ紅葉姫には負担が大きすぎる攻撃だ。刃こぼれする可能性が高いし、最悪折れる可能性もある。だから本当はしたくなかったが今は許して欲しい、紅葉姫。

ダーク「ツッ！それがお前の技か!？」

強欲「るつせエ！今のお前ただただ気持ち悪いんだよ！触手でうによ、気持ち悪い……」

ダーク「今、俺を侮辱したか……！したのか!？」

強欲「ああ？ああ！そうだよ！そんなに侮辱が嫌いかア？これなら俺ア、お前を侮辱し続けてやんよ!……金鬼神『細慨大迅』……」

ダーク「ツッ！その技……!？」

今から150年前、まだ伊達政宗が生きていた頃……

俺はあの日、神司たちと別れてから金星に向かったが辞めにした。すぐに神司が向かう地球に向かった。

着いた先は『武士』と呼ばれる人たちに溢れていた。俺はブラブラと歩いていると大きな城を見つけた。その城内に直ぐ様入った。だがすぐに城内の武士に見つかって三日間追いかけて回された。それが楽しくてしようがなかった。そんなある日、

——『伊達政宗』と出会った。

武士「待て侵入者！」

武士「大人しく捕まれ！」

強欲「待たねえし、捕まらねえよ！」

この時もそうだ。いつも通り武士から逃げていた。やっと逃げ切れたと思うとそこに一人の武士が刀を素振りしていた。見入ってしまった。すぐと逃げ切れたと思うとそこに一人の武士が刀を素振りしながらこっちに気づいた。すぐに理解した。コイツはなかなか

武士「！ お主か、最近この城内を逃げ回っている猿というのは。」

その武士は素振りしながらこっちに気づいた。すぐに理解した。コイツはなかなか強い奴だと。

強欲「へえ、俺の気配を感じ取れるんだ。」

武士「馬鹿にするな。これでも我はあの伊達政宗だぞ。」

強欲「あつごめん、俺最近この世界に来たからあんたのこと全然知らねえんだわ。」

武士「はあ？ どういうことだ。」

当たり前のことだ。一回で理解できたら嬉しいものだがこれは可笑しいことなのだ。俺らの常識が違うだけである。

強欲「信じてもらえないだろうけど俺はこの星の十人ではない。」

政宗「ほう、それでは地球外生命だと言いたいのか。」

強欲「そういうことだ。」

すると政宗は一度笑うと、俺に刃を向けた。

政宗「そのような嘘で我を騙せるとでも？」

強欲「……良いのか？一応俺を剣士だ。刃を向けるのならば喧嘩を売られたと受け取っていいのかな？」

政宗「勿論だ。」

強欲「それじゃあ……！尋常に……！」

政宗「勝負ッ！」

結局勝ったのは俺だ。政宗は俺の戦闘スタイルに驚いていたがまたその反応が面白かった。

そして今に至る。

強欲「金鬼神『細慨大迅』：。」

ダーク「ツ！その技：!?!」

紅葉姫を鞘に片付けて腰を低くした構えをとる。そして紅葉姫に邪気を纏わせる。

強欲「判るよなア！この構えはよオ！お前が得意とする『雷迅一撃』と同じ構えだもんなア！」

仮にも俺は刀の達人だ。（自称）相手が得意とする構えを殆どは忘れない。ましてや、長年一緒にいた友となれば。

するとダークネスも俺と同じ構えをとった。

強欲「ツ……！」

ダーク「元々は我が得意とする技なんだ。模倣人間に負けて堪るかっていうんだ。」

強欲「……その心を取り戻してくれただけで嬉しいよ——」

二人は刀を抜いて斬って駆け抜けた。

オー「……終わったか。」

血だらけで倒れたダークネスと立ち尽くした強欲。

結果は強欲のママンの勝利。

強欲「お前が俺人間に勝てるわけねーだろ……！」

オーデインは立ち上がると槍を構えた。

強欲「どうした…？オーデイン。」

オー「トドメは指したのか？」

強欲「ああ？」

オー「トドメだよ、コイツは元人間だ。しかも洗脳が解かれないまま死んでいった。」

強欲「……だから何だ。」

するとオーデインは強欲を怒らせるような台詞を言う。

オー「トドメを指せていないのなら俺が指そう。」

強欲「止めろ…！」

オーデインは槍の上に構えて刃を下にして思いきり下に下げた。しかし強欲がオーデインの腕を止める。

オー「その止め方は予想できていた。乱槍『乱れ小針槍』しょうしんせう。」

オーデインは槍を小さな形態に分裂させて強欲の声も聞かずにダークネスに一本残らず刺しきった。

強欲はオーデインの胸板を掴んだ。

強欲「ふっぎけんじゃねえよ!!」

オー「けじめをつけろよ！強欲！」

強欲「ッ!？」

とうとうキレたオーデイン。

オー「お前は一人の友人も葬れないのか!？」

強欲「葬りたくねえよ!これでもアイツは俺の友達だ。簡単に殺したくねえんだよ。」  
オー「……それでも別れは必ずある。それが今回の運命なんだ。強欲、俺を憎むのは構わない。でも、はじめはしつかり付けろよ。」

そう言つてオーデインはこの洞窟の先を進んだ。

拳を地面に打ち付ける強欲。眼には悔し涙が流れていた。

強欲「……クソつたれが……!」

それもそうだ、昔の友人が洗脳されて強欲自身が助けなければいけないという場面で仲間に殺され助けられなかった。その強欲のプライドがぼろぼろに砕かれた瞬間なのだ。

墮天使一人、血だらけの友人の横で涙を滝のように流していた。

## 第107話 VS 謎の黒魔術師

亜無「貴様アー!!」

紅風嘘無剣を振り回して魔術師に向かって気を放った。しかし魔術師は自身の周りに結界を張って防いだ。

亜無「『削除』!」

右腕で結界を切るように右に振る。すると結界が消えた。それに魔術師は混乱していた。

亜無「紅神『scarlet:devil』!」

背中に悪魔の羽根を生やして紅風嘘無剣を持っていない方の手に紅い槍を持って投げた。

魔術師は赤い透明な壁を張って槍を防いだ。

亜無「守りだけか:?!」

俺は魔術師の後ろに回って背中を紅風嘘無剣で斬りつけた。

亜無「ッ!はあ:?!」

斬りつけた筈が魔術師は背中の方に大鎌で防いでいた。しかもその大鎌は見覚えが

あつた。

亜無「まさか…!？」

その大鎌とは、神司の近くにいた怠惰のベルフェゴールが愛用していた確かか：  
グリモワール・サイクス  
 魔術書鎌だ。

その魔術書鎌を持って俺の攻撃を防がれた。一度後ろに飛んで離れる。

何だこの違和感は、コイツは怠惰さんの魔術書鎌を持っていた。そしてあの魔術書、  
 今考えれば引つ掛かる。突然あの場紅魔館から消えた怠惰さん、そして俺の目の前にいる魔術  
 師……

亜無「どうかあのフードを取らないとな。」

そう、魔術師の正体を知るにはその魔術師が被っているフードを取らなければいけないのだ。

魔術師は魔術書を開いて詠唱し始めた。

亜無「させるかア！妖刀『無限の紅い刃』！』」

紅い刃を数十本を魔術師に放つた。魔術師は詠唱を変えて結界を張った。とにかく  
 どうか詠唱は辞めさせられた。

亜無「…五分五分だな…それならこれで決める…！星符『ストライクメテオ』！』」

この狭い洞窟を利用して隕石を二、三個降らせた。

亜無「気絶だけでもさせてやる……！」

魔術師「……『リバウンド反転魔法』……」

亜無「はあ!? ツ……!!」

魔術師は緑色の魔法壁を詠唱無し出してまさかの隕石を一個俺に向けて跳ね返してきた。しかし限度は二個がだったらしく緑色の魔法壁は砕けて一個魔術師に当たった。

亜無「良しッ！」

当たった衝撃で倒れていた。それでフードが脱げた。

亜無「……! だろうな! 怠惰さん！」

フードの中身の顔の正体は亜無の予想通り、怠惰のベルフェゴールであった。そして再び亜無に怒りの感情がこみ上げてきた。

亜無「このボス……! 絶対に許さない……! 光矢たちの記憶削除の罪の上に今度は怠惰さんの記憶操作だと……! いい加減にしろよ……! ふざけるなア!!」

すると亜無の身体の周りから闇の気が出ていた。

怠惰? 「……!!」

魔術師は亜無の闇の気に危険を感じたのか攻撃の詠唱を唱え始めた。亜無の気は漆黒に近い色になっていて誰がどう見ても禍々しいのが分かる。

そんな恐ろしい状況の中、砕けた氷が溶け始めていた。全部が溶けるとそこから熱気

が噴き上がり一人の少女の姿になった。その少女は先程、魔術師に凍らされてから落とされ粉々に砕け散った熱の邪神、タルウイであった。

タル「もおー！何なの?! 亜無くん! ……ん?」

タルウイが見た光景には漆黒の禍々しい気を放ちつつ、我を失いながら暴れている亜無の姿と黒いローブを着た怠惰のベルフェゴールが魔術書鎌を振り回しながら大魔術書開きながら詠唱している姿があった。

タル「……………」

えーと…まず、紅魔館に居なかつた筈の怠惰と悪魔の羽根を生やして、しかも、何か闇の力を感じる亜無くんが私の目の前で戦闘中…。しかも怠惰は変なローブを着ているし…。つまり、怠惰は現在操洗脳られている。あと亜無くんは何らかが原因で暴走中…。タル「はっ…! まずは亜無くんを止めなきゃ!」

今更である。

タルウイは地面に手をつけて、熱を流した。

タル「猫舌『赤い口』」

その熱はこの場の洞窟内に全て流した。すると地面は赤くなっていき熱を発し始めた。

亜・怠「ッ!」

地面が熱くなって燃え始めた。

タル「上手い具合になったね。」

しかしすぐに空中戦になる二人。タルウィは呆れて、

タル「それなら一発KOにした方が良いのかな。」

タルウィは両手を上に向けて熱球を作り出した。

タル「熱符『灼熱地獄』。」

熱球を左手に集中して熱球をいくつにも放った。

しかし器用に戦闘しながら避ける怠惰と亜無。それにムカつくタルウィ。

タル「もおー！めんどくさい！熱球壊『破裂熱』！」

スペカ名通りタルウィは再び両手に熱球を出したが今度は潰して破壊した。

破壊した熱球は弾幕と化し、怠惰と亜無に降り注ぐ。

亜無は暴走しているため熱に触れる度、叫んでいる。怠惰も同じだ、洗脳されてはいるが亜無に魔術書鎌で仕掛けるが、その熱がその攻撃を妨害する。

上手い具合にタルウィは攻撃に成功していた。

タル「行くぜ、ダメ押し！」

片手ずつに熱球を持ち、二人に放ちまくる。

タル「ハアアア!!」

すると怠惰と亜無はタルウイに気付くと二人はタルウイに攻撃を仕掛けた。

だがそこに、悪魔の羽根を生やした男性が洞窟の奥から歩いて出てきた。悪魔の羽根を生やした男性は飛翔して怠惰と亜無、そしてタルウイを含めた三人の後ろ首に手刀して気絶させた。ドサツと音がなり地面に倒れる三人。

？「フフフツ、フーハツハツハアー！これで使える駒が増えたアー！！」

高らかに笑う悪魔の羽根を生やした男性。すると魔方陣を三つ床に出して魔方陣から三体の異形を召喚した。

？「異形ども、この三人を引きずって俺に着いてこい。」

異形「ニイイギイイ！！」

異形たちは一人ずつ手首を掴んで引きずりながら悪魔の羽根を生やした男性に着いて行った。

# 第108話 VS 片羽の天使の子 天邪鬼

一方、異形殲滅係の異変解決組とは言うのと、

く怠惰 VS 亜無&タルウイとの同時刻く

人里では暴走している異形が老人に攻撃を仕掛けていた。

異形「シヤアアア!!」

老人「うわああ?!?!」

霊夢「霊符『夢想封印』!」

魔理沙「恋符『マスタースパーク』!」

レミイ「神槍『スピア・ザ・グングニル』!」

三人は一体一体確実に核を狙って倒していた。

霊夢「大丈夫? お爺さん。」

老人「ありがとうのお、博麗の巫女さん。」

魔理沙「お爺さん! ここら一体は安全じゃないから気を付けろよ!」

老人「ああ、分かっておるよ。」

そう言つて霊夢がお爺さんを連れて安全地帯に送りに行つた。その間、私たちがこの

場は引き留めなければ。しかし増えに増え続ける異形ども。先程、どんな攻撃でも核を壊せば倒せることに気がついた。それでも山のようにいる異形には私、霊夢、レミリア、咲夜の四人じゃキツすぎる。

魔理沙「レミリア！一体一体じゃきりがいいぜ！」

レミィ「分かっているわよ！」

どうしよう…魔理沙は十八番のマスパを連射打ちして、咲夜は何度も時間停止を繰り返してナイフを飛ばして核を確実に破壊している。ただしこれは私らにとつたら体力との消耗戦だ。

しかし能力運命を使わなくても判る。この消耗戦での勝率は0に等しい。

何か勝てる手段は――

薄暗い洞窟の中、私はサグちゃんと二人で歩いてきた。なぜ急いで仲間を探さなかった？慌てていたら何かに躓くかもしれないからだ。だから慌てない。これは私のモットーだ。

星花「この洞窟、結晶とかあるのかな。」

サグメ「多分無いんじゃないですかね。」

星花「……」

ここで不満が一つ。この際だからサグちゃんに聞いてみる。私は立ち止まってサグちゃんに聞いてみた。

星花「：サグちゃん。」

サグメ「ん？」

星花「何でサグちゃんは私に敬語なの？」

そう、サグちゃんは私と会ってから敬語を使っているのだ。それに私は違和感を感じている。

サグちゃんは目を丸くして答えた。

サグメ「えっ、なんでって：星花さんが私より年上だから——」

星花「年上なんて関係ないよ。っていうか、私が嫌なの。何かずっと一緒に居るのに敬語だと違和感あるから：兎に角！サグちゃんは私に対して今後敬語禁止ね！」

サグ「ええ：ええ：」

少し悩んでから、少し難しい顔をして、答えた。

サグメ「わかったよ、星花。これからもよろしくね。」

—

星花「ごめんね、ありがとうサグちゃん。」

私の我が儘に付き合ってくれてありがとう、サグちゃん。もつとサグちゃんと優しく

なりたいたいと思ったんだ。だから、敬語禁止という決まりをサグちゃんに言っちゃたんだ。甦つてから女友達は紫一人だけだった。だけど、神司カミジの家に行ったら、家族のシロちゃんと零愛ちゃん、そしてサグちゃんが迎えてくれた。有り難かった。勿論、ドラクーンと神司も迎えてくれたけど。

私は独りだった。死んでからは魂のままに独りだった。悲しかったんだ。でもまた帰れる場所があると考えると嬉しくなる。

？「友達ごっこも終わりだぜ、サグメ。」

サグメ「……！正邪……！」

声が出た方向にハッと気づいて見ると、黒い髪に赤い目。赤いアホ毛と白い角を頭に生やした少女の鬼が立っていた。服装は外の世界での学校の制服のような服を着ていた。それにサグちゃんはどうやらその鬼について知っているようだ。

星花「サグちゃん、あの子のこと知ってるの？」

サグちゃんはゆつくりと頷くと涙を流していた。

サグメ「正邪……」

正邪「よお、サグメ。最後に会ったのはぬらりひよんが生きてた時だったよな。」

サグメ「そうね……」

正邪「何だっけ？神司って奴も百鬼夜行に入会して宴会の途中にサグメが神司に告白

だったよな。それで零愛が生まれた。」

サグメ「……」

正邪「でもその零愛、生きているかなア？」

二人「!?」

『生きているか』？ 苺亜くんに殺されるってことなの？ でも今思えば、神司とサグちゃんとの間の子供だ。そんな悪に染まる子では無い気がする。まだ会話もしたことがないからわからないけど。

試しに正邪に話しかけてみる。

星花「ねえ、正邪、だっけ？」

正邪「うん？ 確かあんたは神司の姉の…星花、だっけ？」

星花「そうだけど。」

正邪「で、私に何用かな。星花ア〜」

星花「弟の家に襲撃が来たんだよね。それで来たザキとダークネス、そしてアドラは何者かに洗脳されてた気が残っていた。苺亜くんはもろに洗脳されていたね。でも正邪だけ洗脳された気配がない、全くもね。それはなぜかな…？」

正邪「……うるさい」

正邪から殺気が漏れ始める。とうとう、本性が現れた。やっぱり正邪も洗脳されてい

た。自らの意思だけを残しておいてそれ以外にはスイッチが入ったら、戦闘モードに切り替わる設定がされていたのだろう。ということを含めて考えると、今回のボスは苺亜くんではない。

もしあの場に本来、ボスが来ていたとしたら……いや有り得ない、と思う。そしてこの戦闘には私が出る幕はない。

星花「サグちゃん、あとは任せたよ。」

サグメ「！ 判ってるよ……！」

そう、これはサグちゃんの戦闘だ。先程の会話でよくわかった。サグちゃんと正邪は家族、しかも神司と会う前からだ。正邪がサグちゃんの子どもでもいいのかはまだわからない。だけどこの戦闘はサグちゃんの物だ。それだけは確信できる。

正邪「ハアアア!!」

正邪から先制で弾幕を放ってきた。私はサグちゃんが戦闘に集中出来るように離れる。

サグちゃんは弓を構えて矢を正邪に向けて打った。正邪は我を失ってはいるが矢を避けまくる。やはり戦闘に適してはいるらしい。

サグメ「正邪！聞こえているならそのまま聞いてて！」

サグちゃんは正邪に説得させるらしい。

サグメ「ごめんねせーちゃん。私がせーちゃんの有無も聞かずに百鬼夜行に入会しちゃって。」

正邪「……」

サグメ「でも入会したのは貴女を守るためでもあったの。何時月から兵士が来るかわからないから、何時天界から兵士が来るかわからないから……だから……!」

涙を流しながら矢を打つサグちゃん。しかし急に打つのを止めたかと思うと、サグちゃんは正邪にゆっくりと近づいた。

正邪「……ッ! 『回転』……!」

星花「うわつと……」

サグメ「ッ……!」

正邪の合図でこの洞窟が回転して上下逆さまになった。しかも正邪の足場変わらなのまま、つまり私たちは下で正邪は洞窟の逆さまになって床にしていた。なるほど、これが正邪の能力か。

サグメ「せーちゃん……!」

私とサグちゃんが回転が止まってからすぐに体制を整える。正邪を見ると背中から黒い羽根のようなものが生えていた。これも洗脳された効果なのかはわからない。つていうかわからないことだらけだ。

しかしサグちゃんは止まらず正邪の方に飛んで行く。私は止めない。これがサグちゃんの考えなのだから。

正邪「ク、クルナアア!!」

弾幕の火力と速度を上げる正邪。しかもこの洞窟です何回も回転させる。しかし止まらないサグちゃん。

サグメ「止まらないよ、せーちゃん。」

サグちゃんは本当に止まらないまま正邪の目の前まで飛んできた。

サグメ「……せーちゃん……」

正邪「アツ……ガツ……!」

するとサグちゃんは正邪をゆつくりと抱いた。

混乱し始める正邪。サグちゃんは正邪に優しく声をかけ始めた。

サグメ「本当にごめんね……せーちゃん。私がせーちゃんに構ってやれなかったし、遊んでいることもあんまり無かったよね……せーちゃんが天邪鬼だつても知っているよ。せーちゃんは私の大事な家族なの……だから……もう何処にも行かないで……!せーちゃん!」

サグちゃんは泣きながら、ごめんね……ごめんね……と正邪に話していた。正邪は抵抗しなくなると背中に生えていた羽根が枯れた葉のように散っていった。

正邪「うう…私こそごめんなさい…！サグ姉は悪くないよ…私が天邪鬼だから…！」

星花「種族なんて関係ないよ！」

二人「ッ!？」

星花「ごめんサグちゃん。正邪、あんた今種族がどうか言おうとしてたよね。あなたの愛してるサグ姉が種族差別だなんてするわけがない。それは正邪が一番理解してる筈だろ？」

正邪「ッ！」

そう、本当は私が出る幕ではないと思っていたが出てしまった。正邪が種族のことを気にしていたからだ。私も元人間だ。どちらかという『屍』だ。だから私が出てきてしまったんだ。

星花「だからね？正邪は正邪のままが良いんだよ。私だって種族は屍だよ、ふふっ。」

正邪「それなら私は……」

サグメ「もう自分を攻めなくて良いんだよ。」

正邪「へへッ、ありがとね、サグ姉、星花…♪」

私は体を後ろに向けて歩き始めた。

星花「c a s e c l o s e d …」

星花&サグメ VS 正邪

両者 引き分け

『正邪家出事件』、一件落着……！



レミイ「なっ、何よあの異形たち……！」

その姿は、〃鐘のような形の異形？や、〃デカイ鎌のような腕の異形？、〃とてもデカイ片手の形をした異形？や、〃紫色の気持ち悪い身体にデカイ羽根を生やした異形？の集団だった。

魔理沙「恋符『マスタースパーク』！」

直線上に弾幕が飛ぶが傷一つ付かなかった。

## 第109話 光の帰還

魔理沙「いやホントに何なんだよ!？」

レミイ「マスパが効かない…!？」

急に片手の形をした異形が魔理沙を掴んだ。

魔理沙「ヒイッ、イッ…!？」

咲夜「魔理沙! 現世『ザ・ワールド』!」

咲夜が時を止めて空に浮遊し、片手の異形に向けてナイフ何十も設置した。

咲夜「そして時は——」

紫異形「ギイイイ……」

咲夜が気づくと紫色の異形が浮遊していた。

咲夜「なっ、何でコイツが……うっ!」

紫色の異形の尻尾にはたかれて地面に叩き落とされた。そして時は動き始め…な  
かった。

咲夜「時は動き出す…!」

しかし時が動き出すことはない。

なぜなのか、それは咲夜が現在戦っている異形の名は、悪夢の異形？という名であるからである。悪夢の異形の能力は『相手今が一番悪夢だと思ふ事が現実になる』という能力なのだ。なので咲夜にとって最悪な悪夢、同じ時を止めた世界に敵が入り込んでいること。だから悪夢の異形は入り込んだのだ。しかも、咲夜の願いは時を動かせることだ。こんなことは誰も想像していない。当たり前だ。そうして咲夜は悪夢の異形に何回も尻尾にはたかれた。何度も時を動かそうと試みるがごとごとく失敗する。やがて彼女の心がボロボロになり願いが変わった。

咲夜（……もう、私は長くないかもしれない……せめて、妹様を助けたかった……）  
願いが変わった、その事によって時が動き始めた。

咲夜「はっ!？」

片手「キシヤアア!？」

魔理沙「うわっ……!ガバッ……!」

咲夜「魔理沙大丈夫!」

咲夜は急いで魔理沙の元へ急いだ。

魔理沙「つく……咲夜、お前こそ大丈夫か？ボロボロだぞ?」

咲夜「そうよ、あの紫色の異形、アイツ私と同じ時の世界に入り込んで来たのよ。」

魔理沙「はあ？嘘だろ?」

咲夜は首を振る。

魔理沙「マジか……！それなら……魔砲『ファイナルスパーク』ツツ!!」

マスタースパークよりも太い直線の弾幕が紫色の異形を襲う。顔は消し飛んだが核は破壊出来ていなかった。なので頭が再生して紫色の異形は魔理沙に襲った。

紫異形「ギイイイ!!」

紫色の異形は顔の部分が大きく開いて口が現れた。

魔理沙「嫌っ……まだ死にたくない……!」

レミイ「魔理沙! (ダメだ、間に合わない……! 咲夜は重傷で助けられない——!)」

霊夢「夢符『封魔陣』!」

悪夢の異形は札が貼られて苦しみました。

悪夢「ギイイイ!」

札を貼った本人の霊夢が空から降りてきた。

霊夢「大丈夫!? 魔理沙!」

魔理沙「ありがとう……霊夢……!」

霊夢「それにしても、何なの……アイツらは。」

? 「あれは悪夢の異形です。相手が一番最悪だと思いう事が現実になる能力を持っています。」

四人は声がした方向を見ると桃色の髪に首元にサードアイの紐を垂らしたさとりの姿があった。

魔理沙「さとり!?!」

レミイ「もう大丈夫なの?」

さとり「肩は治りました。共に戦うことは難しいですが、異形にプログラムされた情報なら読み取れます。一応アイツらも生き物ですから。」

ドンつと胸を張るさとり。それになんとなく安心感を持つ霊夢。

霊夢「さとり…ッ!危ないさとり!」

さとり「えっ——」

急に吹き飛ばされるさとり。民家の壁を破壊して倒れる。

魔理沙「一体何が…!」

鎌「ゴオオオ…!」

あの両腕が大きな鎌のような異形がさとりを吹き飛ばされた民家の前に止まっていた。

ちなみに、鐘のような形の異形は、大鐘の異形?。

デカイ片手の形の異形が、蟲の異形?。

デカイ鎌のような腕の異形が、憤怒の異形?である。

魔理沙「アイツ……」

悪夢「キシヤアアアー!!」

魔理沙「ヤベっ……!」

大鐘「ゴーン……」

四人「ツ……!?!」

四人と異形がいる周りの空と景色が真っ暗な闇に包まれた。四人が混乱していると一筋の光が四人の横を通りすぎた。その数秒後にレミリアが刀傷を足に受けた。

レミイ「ツ——!」

咲夜「お嬢様!」

レミイ「大丈夫よ……咲夜。ただのかすり傷よ……」

悪夢「一体何なんの闇……うっ……!?!」

悪夢の体に強い襲撃が放たれたのだ。悪夢を手探りで探す魔理沙。

魔理沙「悪夢!」

悪夢「何が起こっているの……?」

悪夢「キシヤアア……!」

蟲「シィー……!!」

憤怒「ゴオオオオ……!」

何にも見えない中、四人は三体の異形に何回も攻撃され続けられた。また四人の横を一筋の光が通りすぎる。しかし、その光に四人は気づいていなかった。その時、起きたさとりがその光について読み取ることができた。

さとり「うう……！わかりましたよ……！」

さとりは立つて闇の中を走りながら、心を読み始めた。異形のプログラム、四人の心の声、そして光についての声。

声を聞きながら一つおかしいことに気がついた。この闇についてだ。だが簡単なことだった。なぜなら、この闇については上を向いたら理解ができた。さとりは一つの弾幕を真上に放った。すると大きな鎌の音が聴こえて、闇が消えた。

霊夢「消え、た……？」

魔理沙「まさか……さとりが……？」

さとり「そのまさかですよ、魔理沙さん。この闇の原因はあの鐘のような形の異形……大鐘の異形？の能力です。この能力は敵味方関係なし、全員を丸飲み能力。敵味方を闇に飲んでから十分後、大鐘の異形が急に落ちてきて個体の物たちを食べるといいう技でした。今回はあと残り三分だったので本当に危なかったです。それもこれもあの光使いの執事のお陰ですね。」

レミイ「えっ？」

咲夜「嘘っ…!?!」

一筋の光が四人の前で止まる。すると上から二体の女吸血鬼も降りてきた。レミリアと咲夜の目からは涙が溢れ出す。

光矢「やあ、咲ちゃん。ピンチっばいね、なんなら俺らが助けてやろうか？」

咲夜「ええ…!頼むわ…!」

光矢「そんじゃあ…!」

光矢はレミリアの前まで行くと跪いた。

光矢「戻るのに時間がかかり、申し訳ありませんでした。それと私たちが来るのに遅れまして申し訳ありませんでした、お嬢様。我々、紅魔館執事長、八剣 光矢。そして妹様、黒フラ様の三名、欠落もなく復活しました。今後とも何なりと御命令を。」

レミィ「命令よ、光矢。私らと共にあの異形たちを倒して人里に被害がでないように対処しなさい。異形どもの核を的確に壊しなさい。」

光矢「承知しました。さーて、妹様、黒フラ様、存分に暴れようぜ…!!」

フラン「行くよ…!クーちゃん!」

黒フラ「勿論だよ、二人とも!!」

三人は気合いを入れたままスペカを宣言して異形たちに攻撃を始めた。そして五人も少し回復し、計八名の異形への一斉攻撃が開始された。

## 第110話 愛が欲しい者

サグメ「せーちゃん、神司さんのいる場所わかる？」

正邪「神司か…多分苺亜のところだと思う。」

サグメ「やっぱりか…」

やっぱり神司は苺亜くんのところ…もう少し聞き出す。正邪は操られていたとはいえ、今回のボスが苺亜くんの他に在る筈なのだ。それを正邪から聞き出す。

星花「正邪、唐突だけど、今回の異変のボスは苺亜くんかい？」

正邪「…違う。」

星花「やっぱりか。」

サグメ「えっ？どうして？」

星花「おかしいと思わないかい？あの優しい神司と心優しいサグメとの間から悪魔のようなひね曲がつた心の苺亜くんが生まれてくる筈がない。でもたまたまひね曲がった可能性もあるけどね。しかし、ほぼ有り得ない。それなら、「苺亜くんを拾った人が苺亜くん嫌な環境で育てて復讐を誓わせた」と考えると納得がいく。それならこのように苺亜くんを育てた親玉がいるということになる。つまりだ、今回の異変のボスは苺亜

くんではない。正邪、これであつてる？」

正邪「……あつてる。」

星花「それならボスの正体とか名前はわかるかい？」

正邪「名前はわかる、でも能力はわからない……」

星花「それだけでも有難いよ。名前は？」

正邪「…奴の名前は、針塊／＼しんか、命儂ミヨウム？。奴は…竜ドラゴンだ。」

星花「…マジで？」

一方神司はというと、数十分前まで遡る。

神司「二日ぶりだな、苺亜……」

苺亜「やあ、お父さん。俺に殺されるために来たのかな？」

神司「稀神家の目的は零愛と苺亜を連れ戻すことだ。だから、帰ってこいよ。」

苺亜「やくダねっ！」

下脛を指で下げて舌を出してあつかんべーの仕草をする苺亜。やはりまだまだ子供だと感じてしまう。

神司「なら、力づくでも帰って来てもらおうぞ。」

！」  
 苺亜「ハハハッ♪俺はお父さんを滅するのが役目なんだよ。本気でかかって来い…」

邪楼剣を鞘から抜いて、自身の周りに刃を何本も創造した。

神司「神剣『千本刃』！」

刃を放つが苺亜は口笛を吹きながら簡単に避けていく。我が息子が避けていくのを見るとだんだん悔しくなってくる。ただ、洗脳されていていなければ、の話だがな。もう一度苺亜に「神剣『千本刃』」を放つ。

苺亜「ワンパターンですかア？それならこつちからーうわっ!!」

俺の方に引き寄せられる苺亜。何を使ったかというと…

神司「邪脚『ブラッドストーム』、そのまま居おつてくれよ…う…」

鞘に邪楼剣を仕舞ってから一気に引き抜いて刀身を赤く光らす。

神司「邪刀『鬼神斬』ッ！」

苺亜「なっ…!?!」

斬られた苺亜は数m飛ばされた。

当たった、というよりも苺亜がわざと斬られた感じがした。

苺亜「イテエな、そんじゃあこちらも…改記『瞬間記憶操作』」

神司「ッー！ガッ、アアッ…!?!」

思わず地面に倒れてもがく。声にならない声を出し、叫び続ける俺。

頭の中の記憶が消えたり、入ったりと瞬時に切り替えが起こる。まるで、スムーズにスイッチが入ったかのような感覚に襲われる。一秒間ごとに消えたり入ったりしている。大事な人や大切な物事が俺の頭の中で出入りしている。痛いのもあるが、苦しいのもある。呼吸の仕方でも三回忘れたため死にかけた。

神司「ア、ア、ツ…ウ、エ、ツ…！」

苺「どお？早く死にたくなつたかな？（笑）」

神司「かつこまで読まなくていいんだよ…う…う…。」

嘔吐はするし、目眩もする。本当に死ぬ…というよりまず俺は…壊れるかもしれない…。

神司「誰か…助けて…」

苺「だくれもつ助けてくれな——」

サグメ「神司さん！」

苺「チツ…」

ゆっくりと俺の名前を呼んだ人の方向を見る。そこにいた人はサグメだった。良かった、サグメのことは忘れていないようだ…嘘だ、何度か忘れてしまった。記憶というのはこんなに簡単に無くなる物なのか…。

? 『『反転』!』

この場の洞窟内が上下逆になる。それで苺亜の攻撃が消えて俺は解放された。しかし洞窟内は逆になっているので地面に思い切りぶつかる。

神司「ツ……! 正、邪……!?!」

あのですと消息不明だった正邪が今ここにいるのだ。もう諦めていたがやつと会えた。思わず涙が出てきた。

星花「大丈夫? 神司。」

神司「姉ちゃん……」

正邪「たつく、情けねーな神司。」

神司「正邪……生きてたんだな、良かった……」

正邪「どうだ? 苺亜は強いだろ?」

神司「ああ強すぎる……でも勝つ、苺亜の心が助けるまで……!」

ゆつくりと苺亜に近づくサグメ。すると口を開いて苺亜に話しかけた。

サグメ「苺亜、零愛はどこにいるの?」

苺亜「零愛零愛うるせえなア……母さん。そんなに皆は俺よりもアイツのことが大事かよ!?!」

星花「勘違いするな! 苺亜くん!!」

苺亜「っ!？」

星花「そんなに大事じゃないなら君の父親は言ったか!? 大事じゃないって!」

：初めて見た。あんなに怒る姉ちゃんの姿を。

姉ちゃんが苺亜の胸元を掴むと、

星花「二日目に君言ったよね、『みんなに復讐』って…何に対してに復讐だ…?」

苺亜「俺のことを愛してくれなかった皆に…」

星花「そうか、それなら質問を変えよう。どんなモノに復讐する気だ…?」

苺亜「そりゃあ、俺を愛さ…あれ?」

星花「おかしいよね、だって…お父さんに復讐しても、お母さんに復讐しても、他のみんなに復讐しても、君を愛してくる人はいない。」

苺亜「あ…：そん、な…：」

絶望で膝をつく苺亜。姉ちゃんの言ったこと、そうつまり——

星花「そう、復讐の意味が違うんだよね? 苺亜くんが今までしたことは復讐ではなく単なる答え探し。」

姉ちゃんはやがむと苺亜と視線を合わせる。そして口調を優しくする。しかし痛い口調だ。

星花「で、どうするの? まだお父さんの記憶をぐちゃぐちゃにする? したら苺亜くん

のお父さんはお父さん……神司じゃなくなって心を壊された灰人形になるだけだよ。」

苺亜「うう……ごめん、なさい……お父さん……」

蹲りながらも俺に謝り続ける苺亜。まだ年は浅いんだ。これから失敗して学べばいい。俺はサグメに肩を借りてふらふらになりつつもゆっくりと苺亜のところへ歩く。

神司「お前が生きてればそれでいい。そして零愛もな。お前も俺の大事な息子なんだからな。」

サグメから離れて苺亜を優しく抱いて頭を撫でる。心が壊れかけているのならば愛を注ぐのが一番効率がいい。俺も家族を守れなかった姿を見た時は心が壊れ始めたがライムが俺を止めてくれた。そのように心を休ませる場所を作つてやると、安心するのだ。

苺亜「ごめんなさい……本当にごめんなさい……」

神司「ほら、元気出して行くぞ。」

苺亜「……うん。」

目にいっぱい溜まった涙を拭いてやってから抱っこしてやる。少し重いがこれも苺亜のためだ。パタパタと羽根を動かして喜ぶ苺亜。やっぱり子供だと改めて感じる。

?「おーい、神司!」

俺の名前を呼ばれたのでそちらの方に顔を向ける。

そこにはオーデインと強欲が走って来ていた。

神司「強欲！オー！」

強欲「おつ、その子はいつかの苺垂じゃないか。つてことは…」

神司「異変解決…とはいかないんだな。苺垂の上にもまだいるんだよな。」

オー「だろうな。」

苺垂「お父さん、降ろして。」

神司「おけ。」

ゆつくりと下に降ろすとジャンプして自ら降りた。

苺垂「皆に教えておきたいことがあるんだ。」

神司「どした？」

苺垂「今から会う奴の種族は…」ドラゴニョートヴァンパイア「吸血竜人？だ。」

神司「どらごにゅーとばあんぱいあ？」

強欲「吸血能力持ちの竜人族のことだ。あの、嫉妬と同じ種族だ。」

苺垂「そうです。しかもアイツは…嫉妬さんの血族なんです。」

皆「ええっ!？」

## 第111話 異変の首謀者

莉亜「アイツは…嫉妬の血族なんです。」

皆「ええっ!？」

はあ?マジで言ってるの?莉亜。確かに嫉妬は女性化で身体は女だけど…まさか…

強欲「でもアイツが好意で子を産むとは思えねエ。」

莉亜「そうなんですか…?」

強欲「ああ、嫉妬は元々男だ。今は何故か女になっているがな。でも、あの嫉妬だ。そんなわけがねえ。でも…子を産む人たちに嫉妬したのか…?」

神司「とにかく行こう。零愛を救出しに。」

オー(アイツが来るのか…:そういうやザキレウスも確か吸血竜人だったような…いや、そうだ。あの二人が今回の首謀者だ。でも、ザキレウスは確か莉亜くんに殺されている筈…:兎に角、必ず殺してやる…)

俺らは次の洞窟の道へ歩いて行つたするとパツと薄暗い場所からとても明るくなつた。床は赤いカーペットが敷いてある。

何なんだ?ここは…っ!?

神司「な…なあ、この床の赤って…」

強欲「わかつている…この床の色は紛れもなく血の色だ。しかも…」

オー「零愛ちゃんのだろ思う。」

姉ちゃんやとサグメがはつとする。もしかしたらこの場に零愛が居て血を飲まれているのかもしれない。まだ生きていることを願いたいが、最悪死んでいるか…

神司「苺亜、零愛は死んでいないよな…？」

苺亜「…多分…いや！アイツは血を大事に飲むタイプだった。多分、貧血とかだと…思う。」

なるほどねえ…！「吸血」竜人の「吸血」はそのまま吸血鬼の竜人ということか。つとと言うことは…力が強い種族が二つ融合したということか…？まだ吸血竜人については知らないが誰であろうと零愛を拐った、苺亜やアドラとかにしたことは絶対に許さないし、許し気もない。

神司「みんな、バラけて探してくれ。」

星花「任せなよ、正邪とサグメはどうする？」

サグメ「私は神司さんと苺亜についていくけど、せーちゃんはどうするの？」

正邪「確か、まだ集まっていない人たちがいるよね。」

強欲「ああそうだ。」

正邪「それなら決まりだ。まだ集まっていない人たちと合流する。多分そのオー？と強欲も同じ意見だろうし。」

強欲「良いぜ、こっちに居れよ。必ずオーデインと俺が守ってやる。」

オー「それについては俺も強欲と同意見だ。神司の大事なんだもんな。というわけで神司たち、あとは頼んだぞ。」

神司「ああ……」

俺らは別れて零愛の捜索に入った。

一方、クロムたちはというと——

クロム「目エ覚ませ！ 亜無！」

シロ「タルちゃん！ 戻ってよ！」

ドラ「ッ！ 怠惰さん！ 気をしっかり！」

あの謎の男性に操られた三人と戦っていた。

クロム「くそつ、アドラー！ 急げエー!!」

アドラはというとスカルがまだ気を失っていて最初の洞窟で看病していた。

クロム「神司借りるぞ、邪炎『ソウルフレア』！」

亜無「紅神『scarlet:devil』……」

亜無の背中から悪魔の羽根が生えて紅槍を投げる。クロムは紅槍を掴んでから思



の拳がぶつかる。

シロ（水の能力だと私の方が不良だ。ならばもう一つの能力で。）

シロ「風陣『エレメント・ウインド』」

風がシロの周りに吹き始めて、タルウイの拳に旋風が移る。すると一気にタルウイの拳か血が吹き出す。

タル「ッ！」

シロ「私を嘗めないでよね！暴風『テンペスト・the・crazy』！」

近距離で風を龍の形にしてタルウイを飲み込む。旋風に切り裂かれて血だらけでタルウイが気絶する。

クロム「……これは、三人に洗脳された形跡がある……誰なんだろうか、この異変の首謀者は……」



莉亜「…お父さん、お母さん。」

神司「どした？」

サグメ「どうしたの？」

苺亜「……まだ全然まともに会って話してないけど、今までしたことには謝りたいんだ。もう、謝っても遅いけど……」

神司「誰に？」

苺亜「みんなにだよ……零愛にも。だからさっ、恩返ししたいんだ。」

神司「そつ、か……」

サグメの目を見るとそこには涙があつた。どうやらサグメも察したようだ。苺亜はこの最終戦で仲間のために死ぬ気だ。敵は針塊 命儂、ただ一人だ。絶対に許さない。もし苺亜が身代わりで殺されたらまた気が狂うだろう。犠牲無しで解決する。それだけ今から目標にしよう。

サグメ「……あつ。」

静かに泣いているサグメが急に口を開いた。

サグメは洞窟の先に指を指した。そこにいたのは零愛が横になって倒れていた。

サグメ「零愛！」

サグメが零愛を見つけた瞬間走って行ってしまった。ヤバい、あれは罠だ。あんな簡単なところに零愛を置いておくわけがない。

神司「待てサグメ！」

苺亜「ツ——！」

俺がサグメの方に走る前に苺亜の方が速かった。思わず凄いと感心してしまった。

苺亜がサグメを突き飛ばすと下から数十本の槍が飛び出してきた。咄嗟で避けたが右肩に傷を負った。だけど零愛の前まで苺亜は来れた。

苺亜「ごめん、お母さん。」

サグメ「ううん、ありがとう……」

神司「大丈夫か!? 二人とも!」

苺亜「うん、零愛も少し貧血気味だけど生きてるよ。洗脳されているかはわかる人に任せよう。」

神司「でも無事で良かった。」

? 「いや、まさか苺亜くんから裏切るとは私も驚きましたが。」

始めて聞く声の方向を向くとそこには灰色の髪に緑の目の男だった。

サグメ「ここに迷い混んだのかな……」

神司「いや有り得ないだろ。外来人なら話は別だけど。でも……今お前、『苺亜くんから裏切るとは』って言ったよな。それじゃあお前が今回の異変の首謀者の針塊 命儂か?」

苺亜を見ると俺とサグメの後ろに隠れている。こいつが針塊 命儂で確定していいだろう。すると男は笑うと背中から青い羽根が生えた。

命儂 「うふふ、そうです、私が針塊 命儂です。苺亜くん裏切りは重罪ですよ？」

苺亜 「だ、黙れ！もう俺はお前の仲間なんかじゃない！」

命儂 「ほう…それなら、死んでもらいましょーか♪」

凄いい勢いで俺の後ろにいる苺亜に急接近する命儂。

すぐに刃を創造して飛ばす。しかし羽根で払われる。

神司 「サグメ！零愛を連れてすぐに増援を！」

サグメ 「わかった！」

零愛を抱き抱えながら走るサグメに気づき、命儂は苺亜からサグメにターゲットを変えて迅速に追いかける。

神司 「悪魔<sup>トランスデーモン</sup>化！」

背中から悪魔の羽根を生やしてから速度を上げてから瞬間に邪楼剣を鞘から抜いて命儂に構える。

神司 「絶対に俺の彼女に手は出させない。」

命儂 「面白い…♪ならば貴女から消しましょう。」

神司 「掛かって来いよ…！」

俺の邪楼剣と命儂の爪がぶつかり合う音が洞窟内に響いた。

# 第112話 吸血竜人（ドラゴニユートヴァンパイア）との死闘

神司「神剣『千本刃』！」

神剣『千本刃』では全て軽々と避けられる。当たり前だ。

すぐに接近戦に持ち掛ける。相手の武器は長く尖った爪だ。こんな単純な攻撃方法ではない気もするが。ただし相手は吸血鬼でもある、竜人でもある吸血竜人だ。ごり押しでは勝てないだろう。ましてや、アイツは嫉妬の血族ということにもなっている。なかなかの強敵だと考える。

神司「邪刀『鬼神斬』ッ！」

刀身を赤く光らせ命儂に横一文字に斬りかかった。すると命儂に俺の後ろに廻ると俺の肩にかぶりついた。

神司「ッ！やめろ…！」

三秒ほど血を飲まれた時に命儂が飛ばされたのがわかった。それで俺は地に膝をついて呼吸を一回整えた。多分、これはちよつとした貧血だろう。

莉亜「大丈夫？お父さん！」

「どうやら苺が俺を助けてくれたらしい。」

神司「ありがとう、苺。あのままだったら死んでたかも……」

でも零愛は俺の数十倍の時間を吸血されたんだろう。頑張ったなあ、零愛……でもアレはガチでヤバイ。

物音とともに命儂が足のみでゆらりと立った。

命儂「痛いじゃないかア、苺くん。君もまた俺の食事のメニューになりたいのかい。」

苺「なる気もねえーしお前の仲間に戻る気もねえーよ。お前に絶対復讐果たしてやる。」

命儂「そうかい……ならどうして復讐なんてするんだい??」

いつの間にか苺の真前に立っており、目を合わせて見つめる命儂。

神司「苺!」

命儂「動くな君は。」

神司「ツー!?!」

近くにいる苺のところへ行くこうと立とうとしたら命儂の圧によって指一本も動かせなくなった。口も唇が震えて上手く喋れない。

神司「あつ、いつ、あつ……!」

命儂「君は苺亜くんの父親だから助けたいのはわかる。しかし今は家族には無縁の話なんです。口出ししないでいただきたい。」

庄だけが俺に向けられる。言葉の重みだろうか。それよりも、この重力操作の能力、最近どこかで見た気がする。いや今は関係無い話だ。どうかこの場から脱出しなれば。

命儂「さて、外野は黙りました。それでは本題に入りましょう。なぜ私に対して復讐などと思いつき込みで？」

苺亜「……なぜも何もあると思うか……？」

命儂「はい？」

苺亜「聞こえなかったか？なぜも何もあると思うか、って言うてんだよ！俺はてめえおかげで人生めちやくちやなんだよ。だから復讐すんのさ。わーったかア?!」

命儂「ツツ!」

命儂は怒りで苺亜の首を両手で力強く絞め始めた。

苺亜「がっ……!」

命儂「黙れ黙れ！私の目的に邪魔なんですよ！私に絞め殺される、それに感謝して逝きなさいッ!!」

苺亜の首を揺らしながら叫ぶ命儂。首が振られたことよって苺亜の眼鏡が地面に

落ちた。

苺亜はニヤリと笑うと、

命儂「何が可笑しい!？」

苺亜「……俺の父さんの、仲間たちを……嘗めんなよ……？」

命儂「まさか——ツ!？」

命儂の左に雷と炎の黄と赤が素早く通る。すると命儂の左横腹から血が吹き出す。

ドラ「苺亜から離れてくれませんか？ 吸血竜人。」

シロ「マスター！ 天叢雲劍借りるよ！」

圧に潰されている俺から天叢雲劍だけを鞘から抜き取って命儂に構えるシロ。

シロ「反応してよね！ 私の能力と！ 風刃『テンペストブレイド』!!」

天叢雲劍の旋風をプラスにして自身の能力と合わせた風で斬撃を命儂に放った。つ

いでに銃で水弾を何発も打った。

命儂「ガアアア!!」

クロム「大丈夫か、神司。」

オー「『gravity解除』。」

神司「ありがとう、二人とも。」

オーが俺に掛けられた重力を解除してクロムとオーの二人が俺に手を差しのべてく

れた。

そうか、この重力操作に見覚えがあつたのはオーがドラに掛けていた時だ。だから違和感を感じたのか。

二人の手を繋いで立ち上がる。

しかしなぜ命儂がオーの能力を使えたのかはわからない。

莉亜「だから言つたろ？ 父さんの仲間たちを嘗めんなよ、つて。」

命儂「ならば貴方を先に殺すまで！」

莉亜「バカだな、お前は。この場にいる者たちはお前の輩下に堕ちた仲間たちを撃破した者たちだ。分かつてるよな、『洗脳された者は気絶すれば解ける』、と！」

スカル「死装『スカル』。」

アドラ「OK、氷戒『フリーザ・デビルブレイク』!!」

スカルが槍のような武器になり、アドラがスカルを持つとスカルは翡翠の氷に纏われた。それを命儂に攻撃する。

命儂「このオ、捨てゴミ娘がアア!!」

クロム「何だとテメエ！ 邪神炎『メガ・ソウルフレア』！」

黒炎を放つと命儂は左手で防ぐ。

クロム「なっ!？」

命僂「いい加減にしろ？ 貴方たち……嗚呼、もういい。まつ、稀神家を滅ぼせばこっちの勝ちだから良いでしょう。もう皆さんお集まりですからね。」

神司「ッ!？」

周りを見渡すと突入組、操られた人たちも集まっていたその中に怠惰もいた。やつぱり操られたのだろう。

しかし、稀神家を滅ぼすとは大胆なことを。

怠惰「ちよつと待て貴様！」

命僂「はい？」

急に怠惰が命僂に呼び掛ける。

怠惰「テメーらのボスはザキレウスじゃねーのかよ！ しかも……目的は魔神を幻想郷にバラ撒くのが目的じゃないのかよ!？」

命僂「フフフツ、ハツハツハ！ ベルフエゴールくん！ 貴方は相当な馬鹿なんですわね！ そんなの私の嘘ですよ、嘘。アハハハツ！」

怠惰「……ッ！ 貴様ー!!!」

魔術書から魔術書鎌を取り出して命僂に斬り掛かる怠惰。続いてタルウイも熱球を投げた。しかし命僂はその熱球を自分物にしたかのように俺らの方に押し返した。

俺の近くにサグメ、零愛、姉ちゃんがいる。しかもこの狭い洞窟だ。仲間全員が巻き

込まれる。

急いで家族のもとに走るが誰かに首を捕まれて壁の押し付けられた。

熱球が地面に付いて大爆発を起こし、二、三秒この狭い洞窟内が光に包まれる。

神司「ガッ……ッ!!」

光が消えて俺が見た光景は仲間全員が火傷を負い、倒れている仲間たちの姿だった。

そして、俺の首を掴んでいる者は、針塊 命儂。その人だった。

命儂「お前が一番厄介だ、稀神 神司。」

神司「何で俺の名を……!」

命儂「会ったことあるだろ? 神司。」

神司「何時だよ……!」

命儂「流弥、という月軍の一人に、ね。」

神司「ッ!」

流弥…流弥と初めて会った時は、夜、輝夜と永琳を月に連れ戻そうとした奴らの仲間として来ていた男、そして…。サグメを守ると思ったきつかけの人? だ。でもあの時クロムが流弥は妖怪に食い殺されたと言っていたが……

命儂「だよ、そう思いますよ、普通だったら有り得ない。しかし私はあの死んだ夜の日、その場で『あの方』に拾われました。そしてこの日を待ち続けた。」

神司「フツ…まるで自分が流弥みたいな言い方だな…そうなのだろうけど…ぐっ!!」  
命儂「もう分かっているでしょう? 貴方はこの場で死ぬんですよ。永遠にね…♪」

捕まれた首をより強く握られる。首の骨がギギギ…と音を出している。ピシツとも数回、音を出していた。首が折れても…コイツに致命傷は当てられる。

神司「!! ぐあツ…あゝア…」

命儂「はははっ、苦しいか!? 息できないか? 死ぬのは怖いんじゃないか?」

神司「くっ、そ…!!」

また強く潰される。もうダメだと思った瞬間、

サグメ「もう止めて! 流弥!」

サグメの声がした。その声の方には服はボロボロで腕と脚に酷い火傷を負ったサグメの姿だった。近くには零愛と莉亜を守るように背中が火傷で酷くなっており、血塗れで倒れている姉ちゃんの姿があった。

神司「ああっ…姉ちゃん…」

サグメ「流弥! いい加減止めなさいよ! こんなこと!」

命儂「こんなこと、ですか…? はあ? 一応聞きますが、私の話を全て聞いていたのなら理解できていますよね。貴女も私の目的ターゲットなんですよ? なのに止めると仰いますか。

しかし安心して下さい。この男の娘の首をボキツと折ってから貴女も私の手で殺してあげますから。あなたの旦那さんが殺されるこの左手でね♪」

サグメに向けた殺気を直に受ける。このまま本当に死んでしまうのだろうか…そうだ、この死闘の場には、死なない人がいるのを忘れていた。

ドラ『『雷剣』！雷符『雷二十斬り』!!』

シロ「水槍『アクア・グングニル』！」

命儂「くっ…!?!」

ドラが命儂の手首を斬って俺は解放される。同時にシロも水槍で命儂の背中に突き刺した。

神司「ゴホツ、ガツ、アッ、アッ…はあ…ハア…」

命儂「この…!クソガキどもがア…!!」

怠惰「落ち着けよ、ヴァンパイア吸血鬼。」

スカル「そうだけ、ハハハハッ！」

アドラ「二人とも、決めるよ。」

命儂はドラとシロに殺気を向ける。しかし、既に命儂の後ろを取った、スカルを持つたアドラと魔術書鎌を背中に構えた怠惰の二人の姿があった。

命儂「黙れゴミどもが!!」

アドラ「翡翠『氷牙』」

命儂「ハア!？」

命儂の下から氷で出来た大きな牙のような棘がが数本飛び出してきた。咄嗟に避けるが、一本の棘が腕に貫通した。

命儂「チツ！」

怠惰「吸血鬼でも首を切れば死ぬだろ!?!死鎌『飛鎌』！」

魔術書鎌を投げて命儂の首を飛ばした。それで地面に体が倒れて頭は地面に落ちた。

やった…のか?こんなにもあつさりとか?それなら今まで皆が死ぬのも狂いで戦っていたのが無駄じゃないか?

命儂「誰が死んだと言った?」

皆「!?!?!」

やつぱりだ、あんなので流弥<sup>吸血鬼</sup>を殺せるわけがない。

命儂は自分の頭を持つと両手で握り潰した。そこから色々と出てきたがあえて言わない。ただし、グロい。

命儂「なあ、シロちゃん。」

シロ「!?! 何…?」

命僂「その剣、貸してもらえないかな？」

シロ「嫌だよ、絶ッ対！」

命僂「だよな、それなら力づく…!!」

シロ「ッ?!」

一度は諦めたかと思うと、あの一瞬にしてシロの目の前に立っていた。そういや、苺亜の時もそうだ。今までそこにいたかと思うと瞬間に苺亜の目の前に来ていた。それは俺も同じだった。それで一瞬にして近付き俺の首を握っていた。

シロは恐ろしくてブルブルと震えながらこの場から逃げるができなくなっており、命僂はシロの両肩を掴むと首を噛んで吸血し始めた。

シロ「あつ…っ！」

命僂「……」

ドラ「シロー!!雷獣『迅雷獣牙』！」

雷剣と雷炎でシロの首に吸血している命僂の腹部に目掛けて横に斬ろうとするが、服は斬れたが皮膚は硬くて斬れなかった。

ドラ「何、で…?」

命僂がシロの首から離れるとシロは貧血で倒れ、命僂は満足そうに息を吐く。

命僂「はあ…♪どうですか？ドラくん。今まで斬れた敵が斬れなかった悔しさは。残

念でしたね♪それにしても良いのですか？シロちゃんのこと…。」

ドラ「ッ！シロ…!!」

ドラがシロを抱えて足に雷を付けてすぐにそこから離れるが同時に命僂も着いてきていた。

神司「ドラ！後ろだ!!」

ドラ「えっ——ゴフツ……」

命僂が持った天叢雲剣によってドラの胸部に貫通するさせていた。幸い、シロには刺さっていなかった。

神司「ドラ、伏せろ！神撃『一撃一閃』！」

無茶だ。ドラの体には天叢雲剣が刺さっている。伏せろなんて無理だ。そんなことはわかってるのでドラには当てないように命僂の首を斬ろうとした。しかし硬くて斬れない。

命僂「もう、良いでしょう、稀神家は私の手で殺させて下さいよ。」

神司「やだね。」

命僂「はあ、そうですか。それなら増援しますか。」

命僂は指を鳴らすと俺の後ろから魔方陣が現れてそこから見覚えのある悪魔が現れた。

？「お前ら、殺す。主の、命令、だから……！」

怠惰「ザキレウス!!」

そう、あの見覚えがある悪魔は一度莉亜の手によって首を殴り飛ばされて死んだ筈のザキだった。

命僂「待ちなさい、ザキレウス。あなた、私の血を少し飲みなさい。」

ザキに左腕を差し出す命僂。その時、予知が頭に流れた。

神司「まさか……！」

『血を飲みなさい』。それはつまりザキは悪魔ではなく吸血鬼。しかもレウス？とは竜などに使われる事が多い。つまり……ザキレウスとは悪魔ではなく吸血鬼ではなくて、吸血竜人だということになる。しかももっと考えれば命僂の皮膚が硬くなったのはシロの血を吸ってからだ。その状態の命僂の血をザキレウスが飲めば——ッ！

神司「動ける者は今すぐザキレウスを止めろ！ザキレウスが覚醒する前にザキレウスだけでも殺せエ!!」

命僂「気づくのはもう遅い！このザキレウスには私を越えてもらおう！いや、越えたのだ!!」

ザキレウスはもう既に命僂の腕に噛みついていた。

## 第113話 地獄化する幻想郷

神司「動ける者は今すぐザキレウスを止めろ！ザキレウスが覚醒する前にザキレウスだけでも殺せエ!!」

命儂「気づくのはもう遅い！このザキレウスには私を越えてもらう！いや、越えたのだ!!」

ザキはもう既に命儂の腕に噛みついていた。すると、命儂の血を飲んでからすぐに苦しみ始めた。

ザキ「ううっ…!?ガアアアア!!!」

神司「ツ！」

ザキの断末魔が聞こえ耳が痛くなる。みんな、両耳を両手で塞ぐがあれはまるで咆哮だ。

叫びながらザキはまだ命儂の血を吸っていた。叫んでるんだぞ、なのに吸えるのかはおかしいが、分かることは一つ。どんどんザキの体が巨大化しているのだ。今は洞窟の天井スレスレだ。しかし直にザキは洞窟内を破壊する。そう思っていると洞窟内が壊れ始めた。

神司「くそっ、スキマ展開！」

ザキの断末魔が一度止まったので急いで超久々に使用した紫のをパクったスキマを開いた。勿論、出口は幻想郷の人里だ。

急いで皆に呼び掛ける。

神司「皆！このスキマに入ってくれ！出口は幻想郷だ！」

皆続々とスキマに入っていく。オーとクロムが姉ちゃんを連れて、莉亜と零愛は怠惰と強欲が連れて行つた。残りは俺とサグメ、そして現在、天叢雲剣に突き刺さっているドラと致命傷で貧血のシロのみとなった。

神司「邪刀『鬼神斬』！」

刀身を赤く光らせて斬撃をあれは天叢雲剣を持っている方の命儂の手首を斬つた。

急いでドラとシロの方に駆けつける。

神司「大丈夫か!?ドラ！」

サグメ「シロちゃん！シロちゃん！」

ドラ「……っ、俺は……大丈夫、です。しかし、シロが……！」

神司「判つた、ひとまず人里に向かうぞ。」

俺は再度スキマを開いた。さっさと入り、スキマを閉じようすると、再び、ザキの断末魔が聞こえ始めた。

どうやら皆が人里に集まれたようだ。

人里には、異形と戦っている霊夢と魔理沙、レミリアお嬢様、そして咲夜がいた。それに他のことに驚いた。異形討伐組に、記憶を失っていると言われた、自称執事長の光矢、そして黒フラとフランが戦っていた。復活してくれたのが嬉しく思う。

亜無「光矢!?!」

光矢は異形の核を潰してから亜無に呼ばれたのに気づく。

光矢「えーつと…：貴方は誰ですか?」

亜無「えっ?」

光矢「…ふふつ、冗談だよ。亜無。」

亜無「おいおい、お帰り…!」

光矢「…ただいま。」

二人は肩を組み合って抱き合う。しかし今はまだ気が抜けない。俺らはあの場から逃げてきたのだ。

光矢「あつ、苺亜。」

苺亜「生きてきましたか、あの時はすみません。」

光矢「とんでもない、あの時は俺たちが一度気絶しなければ負けていた。」

神司「えっ? 光矢は苺亜が味方だつて気づいていたのか?」

光矢「ああ。あの時、俺は妹様と黒フラ様を連れて逃げた。しかも能力<sup>光</sup>を足に付けたままでだ。だけど苺亜は追い付いてきた。そのまま苺亜には負けた。でな、その時間聞いた。『俺はお前らを助けに来た』のだと。」

苺亜「でも光矢さん、あの時の俺は貴方たちを倒す気満々でしたけどね。」

光矢「おいおい。」

笑いながら話す光矢と苺亜。しかしそんな平和な雑談も地獄化するのだった。

突然異形たちが増殖して攻撃体制を止めたのだ。

光矢「一体何が……！」

怠惰「多分命儂の奴が操作してんだろう。」

レミイ「ミヨウム？」

そっか、レミリアたちは洞窟に行つてないから分からないのか。

先程まで起こつた出来事を霊夢たちに簡単に話す。

霊夢「なるほどね、異変の主犯者はあんたの息子じゃなくて、その息子たちを操つた黒幕がいたわけね。」

さとり「その話を聞いたところヤバいですね。」

光矢「何が？」

さとり「分かりませんか？光矢さん。つまりです。命儂がザキレウスに血を飲ませた

ということではすよ？唯でさえ強い命儂の血をザキレウスが飲んでいるのです。それがどんな意味を表してるか分かりますか？」

光矢「ああ、なるほどね、化け物が完成するわけだ。」

オー「そういうことだ。」

光矢「つて、おい。デカイ槍持つてるお前、誰だ？」

オー「そうか、レミリアの妹と黒い方と執事は俺のこと知らないか。俺は神司の古き友人のオーデインだ。よろしくな。」

さとり「……（あのオーデインつて人……どうやら敵ですね。心の中は闇に染まってる。協力できるのも……今の内、ですか……本当、都合よく現れたものです。）」

さとりが読んだ心の中は……

《命儂勝てよ。勝たなければ俺がこの幻想郷を地獄に変えるだけだけどな。絶対だ。目の前のコイツら鬱陶しい。早く死なないかな。特に厄介で死んでほしいのは古明地さとりだ。彼女を先に殺す。そうだろ、さとり、違うか？》

さとり「ツ……！」

オーデインの目がさとりの方に向く。それは心の読めるさとりにしか分からないような静かな殺意の目だった。

怖い、オーデインにいつ殺されるか分からない。そんな恐怖心に狩られている。

さとりを見ると、蛇に睨まれた様にガクガクと体が震えていた。俺はゆっくりとさとりに近づいて小さな声で話しかけた。

神司「大丈夫か、さとり。」

さとり「だつ、大丈夫、です…!」

亜無「嘘ですよね、さとりさん。」

さとり「!?!」

急に亜無が話に入ってきた。

神司「だらうな、声が震えているからな。本当はどうなんだ? 命儂の心が怖いのか?」  
さとりは横に首を振る。チラツとさとりは違うところを見ると、より恐怖で地面にしゃがんでしまった。

まさか…この仲間たちの中に裏切者がいるのか…!?

どうやらさとりは俺の心を読んだのか頷く。

なるほど…仲間たちを疑いたくは無いがさとりがこれほど怖がっているので間違いないだろ。俺は亜無に耳打ちした。

神司「この中 仲間 敵いる 見つけて 俺と亜無だけ 秘密」

亜無「…!?! 了解…!」

単語ずつ亜無に話す。ここまで言えばさすがの誰でも判る。嘘発見機のような亜無

はしつかり役割を果たしてくれるだろう。

すると、地面が上下左右に揺れ始めた。

神司「ッ！一体何が……！」

地面に何個も大きな穴が開いてそこから蛇に羽根が生えた異形が数匹も飛んできた。

莉亜「えっ!? アイツらは吸血竜……そんな、命儂があれほどいらぬから殺したつて

言つてたのに……！」

命儂が処分した? なのに生きている。つまり誰かがどこかに移動させていた。しかも吸血竜は地面を掘ってきたと考える。

最後の一匹の吸血竜が飛んで出てきたら、人里の異形たちも動き始めた。

魔理沙「止めるぜ! 霊夢！」

霊夢「分かつてる！」

レミイ「あとは神司たちに任せた。」

神司「ああ。」

レミリアが咲夜と光矢とWフランを連れて異形を討伐しに行つた。霊夢と魔理沙もだ。亜無にはこの場に残っている。裏切者も探すためだ。

クロム「異形たちの動きが活発化し始めた。」

オー「地響きも少し止んだ、もしかしたら命儂たちは洞窟で潰れたか?」

怠惰「そんなことはねエーだろ。」

強欲「だよな。」

オー「……」

オーの言葉が少し不審だ。いつもはあんなこと言つてたか……？ さとりめまだ震えている。

さとり（声が……増えた……！ この声は……命儂？ とザキレウス……！）……皆さん……！ ザキレウスたちが上がつてきます……！！」

神司「来たか……！ 正邪、苺亜は気を失つている零愛を守つてくれ！」

苺亜・正邪「了解……！」

亜無（未だに赤くならない。怪しいのはオーディンと苺亜、そして正邪なんだが、亜と正邪は、神司が二人のことを信じきつている。それなら残るは——）

神司「オーはその二人の援護に回つてくれ！」

オー「わかつた。」（アイツらがザキレウスたちに目が向いたら即でガキ二人まとめて、大槍で貫いてやるよ……♪）

すると、大きな地響きと共に、でかい竜人のような怪物が現れた。両手には武器のよう尖つた角みなのが付いている。まるで異形という異形の形ではなかった。

ザキ「ルアアアアアアアアアア!!!」

ザキの咆哮が人里を飲み込む。人里の人たちは家に帰っていると思うが、被害が出ている気がする。

星花「なにッ!?何が起きたの!？」

ザキの咆哮により気絶していた姉ちゃんが飛び起きた。背中の破れた服から火傷が目立つ。

神司「姉ちゃん、ザキが巨大化して人里に現れたんだよ！」

星花「ははは…来たのかよ…」

姉ちゃんは苦笑いでザキを見ながら俺の言葉に応える。今にも、『もう止めてくれ』と言いつつ、言いつつやべり方だった。姉ちゃんが混乱していると、ザキが飛び立とうとしていた。

神司「姉ちゃん！」

星花「わかってるよ！植符『網薔薇』！」

薔薇の棘が地面から出てきてザキの動きを止める。だが簡単に突破される。そのまま姉ちゃんの前まで突進して拳を出して殴ろうとしていた。

星花「えっ…またですか…?」

マズイ、あのままじゃ、姉ちゃんがまた死んでしまう。そんなのは絶対に駄目だ。

と思いつつ、すぐに姉ちゃんのところへ駆けるが自分は間に合わなかった。だからこの場

にいる雷いかづちがザキの拳を切り刻んだ。

ドラ「大丈夫でしたか？」

星花「あ、ありがとう。ドラくん。少し腰が抜けたかなあ、ははは……。」

地面に腰をつき、どうにか動こうと努力する姉ちゃん。そこに俺は駆けつけた。

神司「ドラ、ありがとう。大丈夫か、姉ちゃん。」

星花「大丈夫だよ、というより、強欲さんと怠惰さんはさとりちゃんを守った方が  
良いよ。どうやら、震えているからね。」

怠惰「了解だ。」

強欲「そうだな、次こそは、さとりを守ってやるよ。」

さとりを守ろうと、近づくと二人。裏切者を知っているのはさとりだけだ。いつ狙われ  
るかわからないからな。戦闘のエキスパートの二人がいるなら安心できる。

すると、ザキが活発に動き始めた。その先には、避難した人たちの家に到着したの方  
向だった。俺が行く前に先ほどの雷と剣豪が向かって行った。

ドラ「強欲「させませんよ。」

二人がその巨体の腕をを一刀両断した。

ザキ「ガアアアア!!!」

全員でザキに攻撃を仕掛ける。苺亜と正邪が零愛を守っている中、オーデインが痺れ

切らそうとしていた。



オー（始めようか……この幻想郷への鎮魂歌を。借りるぞ雷のツール。槍撃『インフトール』ツ！）

大槍に雷を纏わせ、二人を突き殺そうとするが誰かに肩を掴まれる。振り向くと、そこには自慢の剣を持ち構えた亜無の姿があつた。

オー「どうしたのかな、亜無くん。」

亜無「今、この子達を殺そうとしてませんでしたか？」

オー「何でそんなこと聞くんだ、俺らは仲間じゃないのか？」

亜無「仲間ですよ、仲間だからこそ問うんだ。オーデインさんは、命儚たちの仲間か何かですか？」

ザキと闘う神司さんたちの物音だけが聞こえる。オーデインさんは下に向くが、無言のままニヤリと笑った。

オー「仲間だよ、お前のな。」

オーデインさんの姿が赤く映る。裏切者はオーデインさんで確定だ。

俺は紅風嘯無剣をオーデインさんに向けて構えた。

亜無「やつと見つけたぜ、裏切者……！ やつぱりお前だったか、……北歐神話、戦争と死の神……！ オーデインッ！」

オーデインが『やつと暴られる』と思っているような蔓延の笑みを浮かばせると、分散した槍と大槍を亜無に向かって、放った。

## 第114話 混沌（CHAOS）VS 戦争と死（BADEND）

紅風嘘無剣だけでは、あの数は防ぎきれない。だから、守りのスペルを発動する。

亜無「嘘符『紅き魔竜陣』！」

地面から紅い壁が出てきて俺の周りを囲む。分散された槍はどうにか防げたが、大槍だけは防げなかった。なので紅風嘘無剣で受け止める。するとオーデインがその槍を掴み一度紅風嘘無剣から離すと、グングニルに大槍は戻り再度ぶつけた。

紅風嘘無剣とオーデインのグングニルが、ぶつかり合う。その衝撃で後ろの家がガタガタと揺れ、苺亜と正邪が必死に零愛を守っているのがわかった。この場は危険なので瞬間移動を使用して先ほどまで命儚と死闘を起こしていた場所まで来た。

オー「!! 成る程、他の仲間たちを守ったか。」

亜無「そうさ、お前を倒してからあっちに参戦する。その方が人里のためでもあるし、仲間たちのためになるから、なッ！」

オー「ッ！」

グングニルを押し返し、体制を整える。

亜無「あなたには色々教えてもらったよな、オーデイン。」

オー「ああ、そうだな。でもそれがどうした。」

亜無「あの特訓も演技だったと言うのですか?!

オーデインに問う。俺らをわざわざ強化させたのは今回の異変を解決させるような力まで上げるためのんじゃないのか。事実、俺は格段に強くなった。

亜無「あの時間が無駄だと言わさねえぞ。」

……もしか。今回の異変は命儚と莉亜によった洗脳・精神操作の異変だ。そして、オーデインは心の奥底まで洗脳されているとしたら――

亜無「――ツ！」

オーデインのグングニルが勢いよく飛んできた。ギリギリのところまで紅風嘘無剣で防ぐ。すぐにグングニルはオーデインの手の元に戻る。表情は無表情だった。少し奇妙だ。

オー「……お前の力はここまでか？特訓したんじゃないか、本気じゃない俺と。」

元々ひび割れて崩れそうな洞窟がオーデインの気で揺れ始めた。流石は北歐神話の主神だ。もうこの洞窟は保たないかもしれない。洞窟が崩壊する前にこの死闘を決着をつかなければ。

亜無「そうだな……！紅神『scarlet:devil!』！」

頭から狼の耳を生やし、本来の耳は消した。背中から悪魔のような羽根を生やした。剣を持つていない片手には大剣。ブラッドグングニルを構える。

亜無「二刀流は久しぶりだ。オーデインさん、存分に暴れさせてもらいますよ。」

オー「来い。」

亜無「合技『スカーレット・シヤステイホル』！」

紅風嘘無剣を弓のようにしてブラッドグングニルを矢のように見立てる。そしてブラッドグングニルをオーデインに放つ。

オー『合技』か…必殺技は奥の奥の手で使うものだぞ!!爆槍『バーニングジャツジメント』!」

グングニルの矛先を爆散させて、俺の方向に突き刺そうと突進してきた。

亜無「なっ?!ッ!」

防げずに肩に突き刺しされる。すぐにわかった。肩から何か変なのが流れ込んできた。

ヤバイと思いオーデインを蹴り飛ばそうとしても足がギリギリ届かなかった。

オー「俺は戦争と死の神だ。気づいたと思うが亜無の身体に直接『死』を送っているんだ。しかも足が届かないと見た。そのまま死に行け。」

亜無「ッ……!」

もう死ぬかもしれないと、思っている——

？「貴方は死なないわ、私が守るもの。」

亜無「ツ!？」

天は見えないが上から声がした。

上を見るとそこから見覚えのある妖怪と天使がスキマを開けて出てきた。

亜無「紫さん…サユリ!？」

オー「…サリエル…!!」

サユリ「ハアアアアア!!!」

オー「ツツ!!」

サユリのキックでオーデインが蹴飛ばされる。

二人は着地するが、サユリだけはオーデインを睨んでいる。

紫「待たせたわね。」

肩に刺さっているグングニルを抜いて投げ捨てる紫さん。とても痛いのが、我慢する。

亜無「ツ——!!」

紫「男でしょ？我慢しなきゃ！」

亜無「めっちゃ我慢、して…ますよっ！」

くそ痛えー!!心が叫びたがってるんだ、っつかもう叫んでる!!!

自分にツツコミを入れながらも羽根で体制を整える。まだ紫さんとサユリが来てくれたので助かる。

サユリ「オーデイン：か、実際に話したのは初めてかな？」

オー「フフフツ、落ちこぼれでいらぬ存在のサリエル様が、今更俺に何の用だ。」  
サユリ「お前、操られてるだろ。」

オー「さあね、何の事やらッ！」

サユリ「はあッ！」

オーデインはグングニルで攻撃を仕掛けるがサユリの拳がオーデインの頭を殴った。

オー「ごはっ!!？」

サユリ「私が体術をするとは意外でしたか？」

それは俺が意外だと思ったよ、サユリ。普通に弾幕や武器を使うかと思っていた。

オーデインは立ち上がるとしつこくサユリに向けて刃を立てた。

オー「落ちこぼれに用はねえ！そこをどけ！その妖怪もどけえ！」

目の色が紅黒くなるオーデイン。はつきりと解った。オーデインさんは怠惰さんや苺亜の前から操られており、肉体、精神は当たり前前にも操られている。そりゃあ、さとりさんも闇の心のオーデインさんに怯えるわな。それならすることは一つに絞られた。

オーデインさんは真つ先に俺のところへ一直線で走ってくる。紫さんが俺を守るように前に立つ。しかし今はごめんなさい。

紫さんを左に退かして前に進む。

紫「退かないわよーって！」

亜無「…嘘符……『ダウトドロ』…ツツ!!」

オー「ぐがッ——!!」

拳を紅くさせて思いきり突進してきたオーデインさんの腹を殴った。いつもよりも何倍の力を込めてレフトを入れ込んだ。その衝撃でブツ飛んでいき、狭い洞窟中に飛んでいってぶつかり壁が少し崩れる。

亜無「ふう……」

サユリ「え……?え?殺しちゃったの??」

亜無「殺してないよ。でも手応えはあった。最悪気絶、もしくは……」  
『まだ倒せていない』と言おうとしたが岩が落ちる音がした。

そこから血だらけのオーデインさんが現れた。

亜無「オーデインさん……」

オー「ハア、ハア、ハア…目的、ターゲット確認。排除する。」

三人「!!?」

オーデインさんの様子がおかしい。精神操作の暴走か、または…！

紫「暴走!!」

オー「ガアアアア!!」

三人「ツ!!」

狭い洞窟内で雄叫びを出されて俺ら三人は耳を塞ぐ。

するとグングニルを分散させて全てをサユリ中心に放った。

亜無「サユリ!!」

間に合え俺!と心の内で叫ぶがサユリはシールドを張る。しかし分散されたグングニルの何本かがサユリ腕と脚に刺さった。

亜無「大丈夫サユリ!」

サユリ「近づくな!」

亜無「え…?」

サユリ「私は死の神、サリエル。私が死にはしないけど、今の貴方は死ぬのよ?」

亜無「でもさつき死なないわって…」

サユリ「私たちが守るからね。でも現状が変わった。」

亜無「……」

サユリ「オーデインのことは私に任せて、亜無くんことは紫さん…お願い…!」

紫「…！わかつたわ…！」

呆然とただ立っている俺。サユリ近づくなどまで言われたら俺は何をすればいいのかわからなくなってしまう。すると紫さんがスキマを開けて俺を呼んでいた。まさか、この場から逃げろって言うのか？嫌だよ。

紫「亜無くん！」

はつと気づく。紫さんが俺を呼んでいる声が聞こえた。

紫「逃げるわよ！亜無くん！」

亜無「…：神司さんたちが…サユリが…命を懸けて戦っているのに俺だけ逃げるの？絶対嫌だね！サユリ！俺も戦う！」

サユリ「帰りな！亜無!!」

亜無「だが断る！」

絶対に逃げない。頑固と言われても逃げてたまるか。

するとサユリは何を考えたのか守るのを止めて俺に攻撃しようとして左手を向けた。

サユリ「へえ…：そうなの？なら力強く帰ってもらおうよ！」

亜無「！わーっつたよ！紅無『Disappear Lie Scarlet』ッ

!!

サユリ「天罰『die』[死]」

オー「あゝあゝ?」

俺は大きな紅い球を、サユリは小さいが禍々しい球を同時に放った。このまま行くとこの洞窟は崩れる。

するとオーデインが俺に向かって突進してきた。

亜無「これ待ってたのさ! 『無効化』!」

右手を上から下に振って先ほどの二つの球を消した。俺とサユリは突進してくるオーデインに俺は右手、サユリは左手を向けた。

亜・サユ「紅死『scarlet die impact』ツツツ!!!」

俺の能力、〃無かったものを有りにする程度の能力?とさつきサユリがポロリと言った『死』の能力を合わせた融合スペルだ。色は紅と禍々しい黒白が混ざった色だ。それを魔理沙のマスパのように放つが一度引いてからオーデインさんを引き付けてから衝撃を与えてレーザーを放った。

オー「ウっ、うおおおお!!!」

オーデインさんはどうにか耐えようとするが、急にレーザーが途切れてオーデインさんの背中にレーザーが当たった。

オー「ツツツ!!?」

その答えはレーザーの間に紫さんがスキマを開けてオーディンさんの背中の方にスキマを開けた。それでレーザーを消えて移動したのだ。

紫「神隠し『イリユージョンレーザー』、ってね♪」

少しテンションが上がっている紫とは反対にまだ戦闘の形を解かない俺とサユリ。

サユリ「倒せたかなあ…？」

亜無「流石に、な…」

殆どの力を使ってオーディンさんに攻撃した。まだ起き上がって来たら間違いなく負ける。そしてその考えは現実となった。

レーザーを食らい、少し爆発が起きた砂煙の中からボロボロのオーディンさんの姿があった。

亜無「まだ…倒れないの……かよ…！」

オー「くっ…っ——」

バタリと倒れたオーディンさん。やっと勝てたのだ。俺はゆつくりとオーディンに近づく。

亜無「オーディン、さん…」

オー「……亜無、くん……命儚の目的は…覚えてるか…？」

亜無「…稀神家潰しだった筈…」

オー「正解だ……はあ、アイツは、亜無くんが考える中でも……最悪な計画を……立てている。」

亜無「それって……！」

オー「デインさんはどうにか呼吸をして俺に命の真の目的をゆつくりとだが話続けた。」

## 第115話 堕ちた元人間

神司「さとり！命儂はどこにいるんだ!？」

さとり「……………！ザキの体内です!」

神司「了解、行こーぜ!」

クロム「命儂はザキの体内だア？それじゃあ、ブツ飛ベエ!!」

ザキの巨体の腹部を殴り飛ばすクロム。しかも殴った瞬間、腹部が砕け散った。

アドラ「来たね♪お兄様のBLEAKウ!」

すると殴ったところから命儂がゆっくりと下りてきた。

神司「命儂……!」

命儂「フフフ……!」

神司「ぐあツ!？」

ニヤリと笑うと一直線に俺のところへ来て、俺を地面に思いきり倒して両腕をへし折る。

神司「あゝあゝあゝ!!!」

ドラ「神司様から離れろ……!」

強欲「テメエ神司からア離れる!!」

ドラと強欲が俺の方に走って向かうが命儂には関係ないことであつた。

命儂は二人に斬られそうなるが冷静な声で、

命儂「お前らはザキを殺したと思つているだろうが、アイツは死なないよ。」

ド・強「なつ!?!」

命儂のの腕の指示によつて腹部がえぐれてグロく成りながらもドラたちに攻撃を仕掛けるザキ。その一方、命儂は俺の耳元で囁いていた。

命儂「私の目的は稀神家を自分の手で潰すこと。しかしそれだけでは面白くないので神司、貴方にも稀神家を潰してもらいます。」

そう言つて、俺の耳を甘噛みする。こいつにはそういうプレイが好きなのかはさておき気持ち悪い。俺は勿論動けないのでこの変態の満足を待つしかない。

ぷはあ、と耳から口を退かしたが、

命儂「それじゃあ…私の全血液を貴方に注入したいと思ひます。」

神司「があつ!」

ガブリと俺の首筋を噛むとそこから血液が流れ込んできた。すぐに痙攣が始まつて折られた両腕が治りかけていた。

神司「ああ……あつ!」

命儂「……それでは……ッ！」

何に驚いたのかゆつくりとその方向を見るとクロムが走って来ていた。

クロム「邪炎『ブラッドフレイム』！」

走りながらも命儂に向けて黒炎を放つ。しかし、

命儂「良いのですか？このままだと貴方のパートナーごと焼けますよ？」

クロム「うるせえ！」

放った黒炎は命儂の手前に落ちて、砂煙が起きる。

砂煙の中、クロムは神司の体を探すがすぐに砂煙が晴れてくる。

命儂「狙いはコイツ神司の憑依か！させないですよ。」

急に血液の流れが早くなつていき、まともな思考が出来なくなってきた。しかも

「あつ……あつ」としか喋れない。痙攣も酷くなってきた。

クロム「残念だなあ！」

クロムは命儂の弾幕を避けつつ、俺に憑依する。

クロム『これが目的さア！』

神司「ナイ、スだ……クロム……！」

命儂「私、当たってるじゃないですか!!」

命儂の答えは当たっているにも関わらずクロムは俺に憑依を成功した。

しかし血液の流れは止まらない。

く数十分前く

息子や娘を守っていたが、我が旦那様が襲われているの見てすぐに駆け出していた。

サグメ「神司さん……！」

蟲「キシヤアアア！」

急こうとするが、蟲の異形がサグメの前に飛び出してきた。

サグメ「邪魔！」

直ぐ様矢を放つが装甲が硬いのかびくともしなかつた。そして蟲の異形はサグメを掴んだ。

サグメ「うっ！」

ちよつとずつ力を入れて遊ぶ蟲の異形。

サグメ「ああつ、あつ……！」

咲夜「幻世『ザ・ワールド』！時よ、止まれ！」

咲夜の合図と共に幻想郷中の時が止まった。

咲夜「さて、行きますよ、光矢。」

光矢「俺に対しても敬語かよw」

さて、なぜこの止まった時の中、光矢だけが動けるのかというと、『光は時よりも早

い』。ただそれだけでだからだ。

咲夜「良いじゃない、私の勝手でしょ。」

光矢「ツンデレ咲ちゃん。」

咲夜「はあ？」

光矢「てかほら、合技するぜ。サグメには当たらないようにな。」

咲夜「貴方に言われなくても分かっていますよ。」

咲夜は大量のナイフをサグメには当たらない程度に投げて、光矢は数百本の光の矢を蟲の異形に向けて放った。

光・咲「『時光速』『ザ・ワールド・R』レクイエム…!!」

光矢は咲夜の止めている時を少しだけ光速に動かした。すると時は動き出したが既に蟲の異形には矢やナイフが刺さっている状態で時が動き出した。

光・咲「『そして時は、飛び始める。』」

蟲「キシヤアアア!!」

サグメ「ツ！」

蟲の異形からサグメが放されて地面に打ち付けられる。その時、光矢と咲夜の二人が空から下りてきた。

咲夜「大丈夫、サグメ。」

サグメ「う、ん。大丈夫。」（ホントはちよつと背骨が痛いけど。）

光矢「そうだ、お嬢様から伝言だ。『近々、味方が二人敵側に寝返る可能性、大。もしかしたらオーデインと別にもう一人がこの異変中にこちらに敵意が向くかも。』だそう  
だ。」

サグメ「オーデインさんが…敵?!」

咲夜「それは私も考えたわ、しかしこの異変は洗脳が多い。少なくとも聞いた話ではこの私らの仲間に元々洗脳で敵陣だった人もいる。その事を考えるとオーデインさんも十分に有り得るわ。」

サグメ「確かにそうだけど!」

少し怒り目に話すサグメ。すると大きな妖気と共に大きな爆発音が人里中に鳴り響いた。

三人はその音の方向に急いで向かうと、そこにはボーツとしている神司の姿があった。だが、髪の色は緑色で目は右赤で左青をしていた。

サグメ「神司……?」

神司「うう…! サグ、メ?」

サグメ「そうだよ、貴方の妻のサグメだよ!」

神司「サグメ、か…血イ、吸わせる。」

サグメ「ツ!？」

神司は長く伸びた犬歯を剥き出しにしながらサグメに飛び掛かった。だがあと一歩のところまで苦しみだした。

神司「サグ…メ…ちゃん…!」

サグメ「つ!クロムさん」

声だけだけどわかる。私のことをちゃん付けするのはクロムさんと七つの大罪の人たちぐらいだもん。

続けてクロムさんは私に話す。

神司「神司は…俺が元に戻す…だから、それまで—黙れ、邪神王。」

急に口調が変わり、そこで、クロムさんの話が消えた。

く神司の精神内く

クロム「ハッ、黙るかよ。つて言うか、テメエは誰だ？」

神司はクリスタルのような中で蜘蛛の糸にぐるぐるにされて眠っている。でだ、俺の目の前について、神司の精神内にいる髪と目が朱色の男性に俺は誰だと問う。名前は聞けなかったが、命儂と神司の血液からできた新しい生命体人虫のようだ。しかし…外人虫に虫の息

の命儂は倒れていることから、少しおかしな点があった。

クロム「しっかし、テメエはどこはどこが神司と命儂に似ているんだ？どこも似ていないように見えるのは俺だけか。」

ム力ついたか、一瞬手を出そうとするが、動きを止めて深呼吸を二、三回行う。やつと口を開くと思うと、面倒くさいタイプの相手だった。

？「五月蠅いぞ、邪神王。我を誰だど考える。」

クロム「知るかよ。」

？「我は大邪神官 夢司人命神だ。ゆめつかさびとみょうじん 跪け！我を称えて崇めろ！邪神王のごときの雑魚がア!!」

「はあ、全然知らねえし、知りたいたも言つてねえ。どうせ雑魚はお前だよ。」とは言わず、俺は戦闘体型を取る。

く人里く

途中でクロムさんの声が聞こえなくなった。しかしクロムさんが私に何を伝えたかったのかはすぐにわかった。すぐに神司をpushさえつけて暴走を止めようと神司に視線を戻すとそこには、神司がいなくなっていた。

サグメ「神司……ッ！」

大きな咆哮と共に刃の雨が降ってきた。

神司「『刃降らし』、人里の皆さん、血塗れになりな！」

幸い外に出ている人里の人が自分の家に避難していて良かった——良くなかった。三歳ぐらいの子供が外に出て歩いていたので。

サグメ「危ない！」

私の声に気づいた神司は子供の方向に集中して刃を何十本も放った。

私は必死になってその子を地面に伏せさせて、私は丸まってその子を守った。勿論死ぬ覚悟で守ったが、刃が私に突き刺さらなかった。ゆつくりと神司の方向を見ると、そこにいたのは、悪魔の羽根を生やして、短剣二本で刃を振り払っている我が娘の姿が見えた。

サグメ「零、愛……！」

莉亜「母さん！大丈夫!?」

サグメ「うん、大丈夫だよ。貴方も大丈夫？」

子供「うう……」

怒られたと思ったのだろうか泣き出してしまふ子供。

サグメ「あわわ……ごめんね怒ってないから。」

そこにドラちゃんとシロちゃん、星花も合流してきた。

シロ「私が親を探してくるよ！」

ドラ「お、おい！シロ一人じゃ迷うだろ！」

二人はその子の家を探しにどっかに行ってしまった。

さて、稀神家の家族喧嘩だ。死なないことを目標にして神司を元に戻してやる。

## 第116話 邪神王

煽るのは大の得意だ。今までにも何度も仲間や敵を煽ってきた。それで怒り俺に敵意を向ける相手を見るのが好きで俺も調子に乗っていた。しかし、相手は俺に敵意を向けているというので俺を殺そうとして来る。そんな中、唯一殺意を出さなかったのが、稀神家の皆なんだ。その中でも俺を認めてしっかりと仲間だと言ってくれるのが俺の相棒でもある神司だ。今までのアイツは俺が居ないと強敵に勝てやしない。今回の命の吸血攻撃もそうだ。俺が憑依しないと抜け出せなかっただろう。だから、今回もアイツの手助けをするんだ。

クロム「で？『跪け』だってか？絶対に断らせていただくね！俺も邪神王なんだ、一応“神”なんだよ。狂闘士バィサーカイのクロムヴェージュ・キラティナイドを営めんア!!」

オラオラ攻めで夢司人命神を追い込もうとするが、奴も神だ。簡単に避けていく。しかも華麗に。

夢司「そんなものなのか？お前の實力は。」

クロム「まだ体術もしてねえし、能力も使ってねえんだよ。まだまだこんなところで本気なんて出す訳ないからよ。」

嘘だ。しかし嘘でもない。少しずつだが本気を出していく。まだ、コイツの能力も強さも未知数だからな。

夢司「ハハハ……！ だろうな！ 貴様のような強者が我なんかの実力などに負けることはないだろうからな！」

そう言ってから夢司人命神は俺との死闘に形勢逆転した。

夢司「闇刃『シャドー・クリムゾン』。」

クロム「ッ！」

俺の影から棘のようなのが飛び出してきてきた。咄嗟に避けたが、右手を貫かれた。

夢司「邪神の血も赤なのか。やはり人間味があるのだなア！ 邪神王！」

クロム「るうーッせえ……！」

ムカつく野郎だ。簡単に避けて攻撃は的確に攻撃してくる。しかもアイツの方が人間味があるような気がする。慢心って奴だろうか、そんな気がする。

影が消える。

アイツの能力は昔に闘った、夜行のような能力だ。だが、夜行の能力とは少し違う気もする。何とか攻撃を一発でも当てなければ。

夢司「もう虫の息か？ なら、神司の精神体を、破壊しようかな……♪」

クロム「止まれ、ゴミカスがア!!」

夢司人命神の体がピタツと止まる。神司コイツの精神内で邪気を放つのは何年ぶりだろうか。神司の精神体には傷が付かないように気をつけなければな。

夢司「今、何て言った…？邪神王……」

クロム『生まれ、ゴミカスがア』って言ったんだよ。なんだ？クズとでも言っただけか？夢司人命神さんよお。」

夢司「この、愚か者がア…!!」

クロム「夢司人命神つてのは長いな。そうだな、ユメジ……神命しんみょう 夢司ゆめじつてのはどうだ？」

夢司「黙れ黙れ黙れー!」

クロム「おお!」

夢司の殺気と神気が高まる。コイツの力がどんなものか楽しみになってきてしまった。

クロム「クハハハツ、俺と似てるところあるかと思えば全然違うなア。キレやすいところは辞めた方が良いで、神ならな。」

夢司「神の権限で邪神王、貴様を潰す。」

クロム「煽り耐性MAXなんだ、それぐらいの威圧じゃ俺を倒すことはできねえよ。」

夢司「——黙れ。」

クロム「っ!？」

今までに見たことの無い速さで俺の顔にアッパーを喰らわせる夢司。俺は防ぎきれなくて、上に高く飛ぶ。

夢司「闇一闪『ハザードストライク』」

クロム『BLEAK』…!』

地面にある俺の影が飛んでる俺に向けて一直線に伸びてくる。どうかBLEAKで破壊して防ぐが夢司が俺の影に隠れていて気づかずに腹に拳がクリーンヒットする。

クロム「あつ、があつ…!!」

夢司「という訳だ。この世界から出ていくんだな!」

肘で打たれ急落下て地面に打ち付けられる。もう一回立って夢司と闘おうとして顔を上に上げると、目の前に神司の入った水色の薄い核があった。

そつ、か…俺一人じゃ夢司には勝てないのか。神司がいつも居たから本気で戦闘を楽しんでいたのか。

急に涙が流れてきた。

俺って、泣くんだな……

夢司「おい、どうした邪神王。もう闘わないのか?そのような威勢は消え失せたのか

「？」

クロム「もう殺してくれ……。」

夢司「ん？何か言ったか？」

クロム「俺を殺してくれ、夢司人命神。」

夢司「それを神に向かって言う態度か？」

クロム「……このような馬鹿な私を殺して下さい！夢司人命神様！」

夢司「よかろう。しかし惨めだなア。邪神王ごときが我に逆らうからな。」

惨めなのは正解だ。相棒一人も守れない俺なんて神に罰せられればいいのだ。神司、

ごめん。こんな駄目な俺に今まで付き合ってくれてありがとう。

夢司人命神様の手刀で斬首になった筈だった。

夢司「貴様も我に齒向かうのか。」

？「黙れ。俺の相棒を殺そうとする奴は神であろうと俺の敵だ。」

ゆっくりと俺のことを相棒と呼ぶ人の方を向くとそこにはいつもの相棒が邪楼剣で夢司の腕を斬っていた。

クロム「神司……」

夢司「しかしこれは邪神王が我に頼んだことだ。」

神司「クロムがそんなこと言う訳がない。確かに精神はボロボロになっていた、だが

これは邪神王の精神体だからさ。本体に居るときのクロムの精神体は本当に煽り耐性MAXだ。だが今は違う。今だけは違うのさ。」

夢司「……何が言いたい。」

神司「ここは俺の精神内……ならできるよな。クロムの本気を全力で倍増させることぐらいな。」

神司がそう宣言すると俺に今までに無い力が溢れてきた。

今なら……コイツを殺れる。

クロム「ありがとう、神司。もう大丈夫だ。」

神司「勝てよ、それで俺を救い出してくれ。」

クロム「ああ任せろ。サグメちゃんたちと一緒にお前の身体を救ってやる。」

俺がそう言うと、安心したのか神司は光と共に消えた。

クロム「さあ……って、お前の本気を見せてみるよ……!!」

夢司「ふざけるな! ナメるなア! くそ雑魚邪神が! 本物の神の前にひれ伏せ!!」

クロム「だ……か……ら……:……黙れ?」

夢司「なあ……?!? あばあ……:……!!?」

首を左右に鳴らし、普通に駆けては夢司の顔をぶん殴りブツ飛ばした。

クロム「全て返してやるよ、俺の痛みをな。」

## 第117話 サグメの秘策

神司「キシヤアアアア!!!」

サグメ「麻痺矢!」

弓を引いて矢を放つ。神司の当たるが効果は発揮されなかった。続いて苺亜が神司に拳で攻撃するがしつかりと一つ一つ丁寧に払っていく。

苺亜「お父さん強え!」

神司「刃符『ブレードスパーク』」

苺亜「ひいつ!」

零愛「危ない!」

至近距離での刃が一直線に苺亜に向けて放たれる。苺亜は零愛によって助かった。

——つて!?!今零愛喋った!?

サグメ「零愛!」

零愛「何?お母さん……あつ!」

零愛はしまったと口を両手で塞ぐ。

零愛が普通に喋れたことに歓喜を受ける。我が娘が喋ってくれたのだから。でも場

所と場合を考えて欲しかった…

苺亜を連れてゆつくりと私のところに降りてくる。

零愛「ごめんね！お母さん！」

サグメ「別に良いけど、そういう時はタイミングが大事でしょ？今度から気を付けてね。」

零愛「うん…」

サグメ「でもアレでしょ？苺亜も家に襲撃してきた時に普通に喋ってたから。そんなにシヨツクじゃないかな。」

苺亜「うっ、ごめん。」

星花「サグちゃん、その事は後に回そうか。」

サグメ「家族問題だからね。零愛、また聞くからね。」

零愛「はい…」

零愛への質問攻めはまた違う話になる。

でも、あの神司をどうやったら戻せるのか。いつそのこと、犬歯を抜きに突撃をするか…そんなことを考えている内に零愛と苺亜が神司と戦闘を開始していた。

苺亜「絶ッ対にお父さんを元に戻す！」

零愛「それは同じだよ！苺亜!!斬符『スプライト』！」

刃を使って綺麗な青色の斬撃を放つ。莉亜もそれに続いて超音波を神司に向けて放った。

私も何本も麻痺矢を放つが全然痺れている感じがしない。

神司「ぐう…!!？」

サグメ（何で？何で倒れないの…？あんなに麻痺矢を放っているのに…）すると咆哮を発すると右手に邪楼剣を持って構えた。

神司「ガアアアアア!!! 刃砲『インパクトブレード』、桜符『神隠しレクイエム』」

左手からは刃が三本ずつ乱射で飛んでいき、右手で持っている邪楼剣から紅黒い桜吹雪を散りばめていた。しかも風に乗ってこちらにもひらひらと飛んできた。

星花「キレイね…」

星花は神司のスペルに見とれていたが零愛の反応は全然違った。

零愛「このスペル…！みんな、あの花びらは触らないで！」

莉亜「何っ、でだっ！零愛！」

乱射されている刃を避けながら零愛に問う莉亜。それに応えるように零愛は首を振った。

零愛「分からない。でも当たったら絶対に駄目な気がするの。」

サグメ「ようするに当たってはいけないのよね。それなら…：…星花！植物で神司の動

きを止めれる?!」

星花「……やってみる。」

星花の手の合図で神司の下の地面から蔦が十本程生えて拘束し始めた。

神司「刃符『刃球円陣』……!」

神司の周りに刃の陣が出て、神司の左手に小さい刃の球が上下左右に動いていた。

星花「それで切ろうっていうつもりかい? 無駄だよ、強度をより追加したからね。」

神司「ガアアア!!」

もがくが余計にぐちゃぐちゃになり、蔦が絡まっていった。

星花「止めたよ! サグちゃん!」

サグメ「オツケー、任せてよ……!」

私は一本の特別な矢を弓に掛けて構えた。その特別な矢というのは、一週間前に、私と神司とで調査して作った毒付きの鎮静剤だ。今日はいざという時のために鎮静剤を細かく砕いて液状にして矢に塗った。その矢を今使おうとしている。

サグメ「軌道矢『毒の夜行』……!」

まだ昼だけど……! 今はそんなのどうでもいい。これで神司が元に戻れば――

矢が神司の腕に刺さる。毒なので苦しみ出した。

く神司の精神内く

クロム「何だ、この息苦しきは…」

夢司「外から毒でも入ったのかもな。だが、そんなことが起きてもこの戦闘にはどうでもいいことなのだよ。」

酷い戦闘狂だ…いや、一昔前の俺もあんな感じに戦闘狂だったのかもな…。  
動きにくい身体を無理矢理動かして夢司との死闘を再開した。

く人里く

星花「ああ！ 蔦が！」

苦しみながらも暴れる神司が蔦を力だけで引き千切った。これで自由になれた神司は空を飛んだ。

零愛「お父さん！」

莉亜「マジか…！」

星花「届かないく！」

サグメ「私が行く……！」

片方の羽根しかないにも関わらず、飛んでいった神司の後を着いていった。

サグメ「待つて神司！」

暴走して聞く耳が持っていないのでそのまま暴れる。

早くどうかしないと……！あの毒でクロムさんも汚染され始めているかもだから急がなきゃ。でもどうやったらあの暴走状態の神司を止めれば……確か、外の世界の本で

サグメ「ええい！こうなったらやけだ！」

私は神司を呼んで此方を振り向かせた。一瞬振り向いたので今しかないと思い、私は神司に口付けをした。

神司「!? うううん!!」

私を引き剥がそうとするので後ろに腕を回して退かさないようにした。

サグメ「っ……！」

神司「ううう!!」

一分ぐらいしてからゆっくりと離す。

サグメ「はあ……はあ……」

神司「……サグメ……」

サグメ「！ 神司……わかる？私のこと……」

神司「…うん。ごめん、サグメ…あと、ありがとう。」

神司が優しく私のことを抱きしめた。神司が元に戻ってくれて思わず涙が出た。  
きた。

サグメ「お帰り、神司い…！」

神司「ほんとうごめん。ただいま、サグメ。」

本当に本当に神司が元に戻ってくれて嬉しい。今が一番の幸せだと感じる時間だった。

## 第118話 女王の気質（カリスマブレイク）

レミイ「コイツ、強すぎでしょ!？」

フラン「きゅつとして〜」

黒フラ「どっかーん!!」

ザキ「ウオオオツ!!」

巨大化したザキに苦戦するレミアに妹のフランとブラックこと、黒フラがザキの両腕を破壊する。しかし、すぐに再生されて両腕が復活する。このようなことが何十回もあり、苦戦しているのだ。

咲・光「『時光速』『ザ・ワールド・R』『!!』」

時を加速させて光の矢とナイフを数十本放って攻撃するがザキは苦しんでから傷が再生される。

咲夜「キリが無いわね。」

光矢「今までのザキなら倒せただろうが、不死なら話が違うんだよな。」

さて、どうするか、紅魔館当主としてどうにかこの場をクリアしなければ。

フラン「えっ…?あの剣って…」

咲夜「嘘っ……！」

光矢「はっ！マジかよ！」

黒フラ「無しでしょ、アレは！」

レミイ「……！あの剣は確か、天叢雲剣！」

まさかのザギが取り出したのはザギに合うように巨大化した天叢雲剣だった。

それで斬るのか、誰を？私達しかいないだろう。

すると天叢雲剣を振り下ろそうとしていた。

レミイ「ヤバイ！皆避ける!!」

指示を出してその場から逃げさせる。間一髪で皆避けたが、何回あんなものを振り回されたら人里の人達にも被害が出る。優先順位はまず天叢雲剣だ。どうにかしてアレを離させる。しかしアレを落とすと、人里に被害ある。粉碎？絶対に駄目だ。サグメが受け継いだ来た剣だから粉碎や破壊など持ったの他だ。

レミイ「ツー！ならどうしろって言うの！」

私がどうすれば良いのか迷っていると我が紅魔館の執事長が話しかけてきた。

光矢「お嬢様、一つ提案をよろしいでしょうか。」

レミイ「あら、光矢が敬語とは明日は雪でも降るのかしら？」

光矢「何だよ、一応執事長だから敬語で話したのに。」

レミイ「それは咲夜が言えることよ。で、何の提案なのよ。」

光矢「そうだ。アイツが不死ならすることは一つ。再生されないとこまで殺すんですよ。」

レミイ「…その発想、敵の親玉の執事かよ。」

光矢「これしか思い付かないんだよ！」

やれやれ、思考は変わらずだったか？しかし、それでしか倒せる方法は無いかもしれない。

レミイ「光矢、ワンチャンに掛けよう。それで駄目ならまた作戦を——危ない！」

光矢「えっ——」

ザキの天叢雲剣が光矢のすぐ側まで振られていた。ギリギリのところを私が助けたが、

レミイ「あああああ!!!」

左肩を刷り落とされた。そのまま光矢と共に地面に叩きつけられた。

レミイ「ああ…！」

肩から血が止まらない。それもその筈だ、今は左肩がほぼ無いのだから。

光矢「レミリア様!!」

良かった、光矢は無事だ。誰かがピンタでもしたような音と咲夜の怒鳴り声が聞こえ

る。ピンタしたのは咲夜でされたのは光矢なのだろう。



嗚呼、死んだ筈のお母様とお父様が綺麗な川の上に掛かっている橋の奥で手を振っている。そこへ行きたい。

私の足は既にそちらの方に動いていた。そうすれば楽に成るのだから。

でも行つてどうする。勝手に動く足を止めて、一度考える。

従者、親友、そして二人の大事な妹を残して私はそこへ行くのか？

いや、そのような答えは間違っている。私はまだ、その橋を渡つては駄目だ。まだ寿命もあり、家族もいる。これが理由だ。

だから、ごめんなさい。お母様、お父様、私はまだそこへは行けない、いや行つてはいけないの。これは私の人生なんだから。



目を開けると、咲夜が光矢にまだ怒鳴っていた。私はまだ出血している肩を抑えなが

ら立ち上がった。

光矢「!! 咲ちゃん! レミリア様が!」

咲夜「こんな時に何の冗談を…お嬢様…!」

レミイ「…まだ喧嘩していたのか。我が妹の二人は未だに死闘を諦めていないぞ。速急に参戦して来い!」

咲・光「承知しました。」

二人は各々、武器を持ってザキに向かって妹二人の応戦をしに走った。

さて、光矢の作戦で行くか。もはや作戦ではないがな。

レミイ「神槍『スピア・ザ・グングニル』ツ!!」

紅い槍を創っては投げたり斬り始めた。近くに妹二人が居るのが見えたので、声を掛けた。

レミイ「フラン、クーちゃん。」

フラン「あっ! お姉様! 怪我は大丈夫なの?」

レミイ「…全然平気よ。」

嘘だ、肩はエグれているのだ。死ぬほど痛い。全然平気ではない。今でもやせ我慢の冷や汗がすごい。

だが、二人にあの許可やるまでまだ死ねない。

痛みを我慢しながらも二人に言葉を放った。

レミイ「フラン、クーちゃん……あの化け物を……壊しても良いわ。」

黒フラ「壊せば良いの？ アイツを？」

レミイ「ええ、そうよ……」

黒フラ「なら壊すよ。」

左手をザキの方向に伸ばして空気を握った。するとザキの両足が大破した。

黒フラ（分かっている、お姉様が重症だつてことは。今までに私は役を一つも立てていなかった。ここで役に立てなくて、何がフランちゃんの狂気だ。何が家族だ。アイツは絶対に壊す、壊してやる。）

断末魔のように叫んでいるザキに容赦なく破壊を続けるクーちゃん。これこそごり押しだ。しかし、ザキの四肢を破壊する度、クーちゃんの闇が増大に膨れ上がっているように肌で感じる。

危険だと分かっている、だがザキを抹殺するのが優先的なのだ……いや、違う。目のよりも家族の方が大事だ！ 姉の私がおかしい事を考えていたのか。

私はグングニルを持って、狂気が溢れ出ているクーちゃんの前に立った。

黒フラ「邪魔だよ、お姉様<sup>おねエキマ</sup>。」

レミイ「邪魔してるのよ、クーちゃん。狂気が溢れ出てるわよ。少し抑えなさい。」

黒フラ「破壊して良いダの、狂気を抑え口などト……！私ハお姉様の操り人形じゃナイ  
！」

レミイ「分かっているわよ！貴女は私の操り人形じゃないのよ！」

黒フラ「それじゃあ何で!?」

レミイ「家族だからよ。」

黒フラ「……ふーん、家族愛、か……良いの？こんなのが家族でも……？」

レミイ「あら、貴女は私たちのことを家族とは思っていないかったの？シヨックね……」

クーちゃんが本当に家族と思っていないかったのなら言葉通りシヨックだ。

するクスクスとクーちゃんは笑いでした。

黒フラ「……ふふつ、嘘だよ、お姉様♪ごめんね、でも家族って言うてくれてありが

とぅ……♪」

レミイ「クーちゃん……」

私がいじみじみと思っていると、殺気を放ちながらザキが私を斬ろうしているのを察せ  
た。だけど、そこはわざと動かなかった。だって背中を任せれる従者がいるのだから。

レミイ「その速さだと光矢ね、ありがとう。」

光矢「さっきの借りですよ……！」

素直じゃないのだから……全く。

レミイ「さて、クーちゃん、貴女の好きのように暴れなさい。暴走したりしたら、私やフランが止めてくれるわよ。」

フラン「そーだよ！元々は私の狂気なんだからクーちゃんはクーちゃんだよ！そのままが良いの！」

黒フラ「…ふつつ♪ありがとっ。」

家族が居るから安心ができる。家族が居るから助け合える。それは仲間例えても同じ事だ。クーちゃんもフランも私の大事な妹なのだから。

私はグングニルをザキに向かって投げ込んだ。しかし無理な体制を取りながらも、天叢雲剣でグングニルを弾かれる。その瞬間、ザキに向かって駆け出して右手にグングニルを刺し込む。

ザキ「アアアア!!」

レミイ「痛いなら痛いと言ゆつてみる。」

ザキ「い、痛い…!!」

レミイ「それ以上に私は肩をエグられたんだ！お前にな！」

ザキ「あ”あ”あ”あ”!!」

刺したままグングニルから紫色の弾幕を放った。ザキの手は弾幕と共に散った。片腕、両足、掌を破壊されたザキを私は見下した。

レミイ「……そのまま苦しんで亡くなるがよい。それがお前にとっての唯一の報いだからな。」

何かどつかの閻魔様みたいな口調になってしまった。

フランとクーちゃんの破壊は止まることはなく、ザキは消滅するまで続いた。

ザキの断末魔を聞きながら、空を見上げると快晴の空の中、泣いているサグメに優しく抱いている神司の姿が見えた。

レミイ「助かったのか、良かったな……サグメと神司。」

二人に微笑み、グングニルを消す。

改めて思う。家族というものは良い集まりだからこそ家族なのだ。やはり、家族は大事にしていかないとな。

レミイ「……ありがとう、我が家族たちよ。」

私は肉片が落ちていますが関係なしで家族の元に歩きだした。

## 第119話 【後日談】縮む身体

神司「よつと。」

サグメに抱きつかれながらもゆっくりと地面に着地する。

降りるとそこには息子の苺亜と娘の零愛そして姉ちゃんが待つていた。

零愛「お父さん……」

神司「ははははっ、聞こえてたよ、ありがとな……零あああ!!?」

急に頬を殴られた。何が起きたか判らずに体を起こすとそこには姉ちゃんの姿があつた。家族の三人は唾然としていた。

神司「ね、姉ちゃん……?! なっ、何で?」

星花「この馬鹿弟が……! 心配掛けるんじゃないよ!」

泣きながら怒る姉ちゃん。でも暖かい。

尻餅ついてゐる俺に手を差し伸べる姉ちゃん。手を握ると優しく立たせてくれた。

そして姉ちゃんはそのまま俺に抱きついた。

星花「この馬鹿野郎……お帰りなさい。」

神司「……! ごめん、ただいま……」

零愛 「……苺。」

苺 「うん？」

零愛 「家族って、こういうものだよ。」

苺 「……ああ。」

そう、家族とは――

守る者と助け合い、守られる者はその者を助ける。人間関係に愛が有り、共に泣き合い、共に笑い合う。そのような者達を世は『家族』と呼ぶ。



あの異変から夜が明けた。昨日に霊夢からは一週間後に宴会すると言われた。その一週間の間に体を休ませろとの事だ。

神司 「それにしても、やっぱり野宿は良いですな！」

家はその時、ザキたちによって破壊された。なのでこの夜だけ野宿で今日からは紅魔館に五日だけ泊まらせてもらうことになっている。

家が破壊されて無くしたことがあるのはこれで二回目。あの時は力もなかったからな……でも、今回は家族を守ろうとしたが、逆に体に乗っ取られて暴れてしまった。

神司 「……何もかも、お前のせいだ！ 夢！」

あの異変からクロムが倒した筈なのに、俺の精神内で居座っている夢司を俺が通称、夢と呼んでいる。

夢『それは、すまない…』

神司「クロムよりも傲慢さがあるから二重人格かのような感じだな…」

夢『この場からは出られないから二重人格のようなことはできないぞ。』

神司「…マジ？」

夢『マジだ。』

なんだ、それならクロムのような人格を入れ替えて戦闘は出来ないのか。

「はあ」とため息を吐いてから立ち上がると変な違和感に襲われた。

あれ？いつもよりも地面が近くないか？

下を見ると地面がいつもよりも近く見えた。そして違和感二つ目。

着ていた服とズボンが大きすぎてぶかぶかだったのだ。想定できるのは一つ。

神司「…俺の身体縮んだ?!」

そうでなければ、他に何がある。とりあえずお金を持って朝御飯を買いにいこう。帰ってくる頃には家族三人は起きているだろう。



どこに行っても人里の店は開いていない。

ちなみに、ドラとシロは久しぶりに母親との夜を過ごしているため野宿している場には不在だ。

神司「それにしても開いて…った！」

やっと見つけた店が一つ開いていた。しかし、その店は服屋だった。

神司「この際、この姿に合う服一着でも買うか。」

思い付きで服を買うことにした。

店の中に入ると女性の定員さんが迎えてくれた。

定員「いらっしやいませ。あれ？ボク一人？」

そっか、今の俺の姿は七歳ぐらいの男の子の姿だから定員さんの口調はああなのか。

それなら俺もそれ相当の対応を。

神司「うん！」

まずは元気よく返事をしながら頷く。これぐらいの時期子供時代は覚えている。何せ、若き姉が死んだ時だったからな。

神司「…ひい…！」

定員「うん？どうしたの？」

神司「ううん、何にもないよ……」

ヤバい、さつき脳内で姉ちゃんの「今も若いよ」という声が聞こえた……！全く、定員さんにいらぬ心配を掛けてしまった。

さて気を取り直して、定員さんにこの姿に合う服を聞いてみる。

神司「定員さん！僕に似合う服はどこ？」

定員「そうねえ、お姉さんに着いてきて？」

神司「わかった！」

大人しく定員さんに着いていく。たまに興味があるように、周りをキョロキョロと見渡す。

女物や男物、しかめ外の世界物なものもある。どうやら、今向かっているのは子供用の着物に向かっていているようだ。俺は外の世界物が気になる。

すぐに定員さんを止める。

神司「ねえねえ、定員さん。」

定員「どうしました？」

神司「僕、外の世界物の服が見たいなあ……」

定員「……分かりました。」

近くにあった外の世界物の服の売り場まで戻ってきた。

定員「ここでございます。」

神司「ありがとう！」

定員「では、ごゆっくり。」

俺を置いてここ場を去る定員さん。

さて、選びますか。

神司「……マジか。」

5分ぐらいこの身体に合うか探していたら、約八歳ぐらいの子が着るような服になった。

あとは自分の好きなカッターシャツを着て、あとはジャージを着たら……

神司「チビ神司の完成！」

鏡の前で自分姿を見してみる。

ははは……マジで小さくなったんだな。

神司「宴会までに身体戻らないかな……」

そうだ、明日にでも永遠亭に行つて俺の身体を見てもらおう。永琳なら何か分かるかも。

それで、今着ている服をカウンターまで持って行って買うことにした。まだ安い価格だったので良かったと思う。

さて、このまま家に帰ると、皆は起きている頃だろう。またあのような忘れられた時とは違う感じだろうと考える。

そのまま考えながら歩いていると、いつの間にか家があった場所まで着いた。

ああ、何て言われるかな……

見ると零愛と苺亜だけが起きていた。すると、こつちに気づいた二人は呆然と立ち尽くしている。

神司「え〜と……ただいま？」

零愛「……小さい……」

苺亜「お父さん……？」

だよな、こんな反応だよな。

俺は服の全体を見せるようにくるりと一回転した。

神司「おとーさんだよ！」

零愛「お母さん！お父さんが幼児化しちゃったよ！」

苺亜「ついでに言葉も！」

神司「ちよっ……！言葉は大丈夫だから……！」

これは大事になりそうなので我が子二人を止める、特に苺亜を。

そして、残りのサグメと星花も起きて、野宿していたところに俺は正座させられている。

神司（何で：!？）

サグメ「本当に小さくなったのね…」

星花「何でこうなったかわかる？」

神司「わかりません…」

マジで知らない。一体何がどうなってこう背が縮んだのか。

サグメ「とりあえず、今日は紅魔館で宿泊する日なんですよ？ 兎に角行きましょう。」

星花「サグメ、まだこの子が神司と決まった訳じゃ…」

サグメ「でもそれは昔から知ってる家族の星花が知ってるでしょ？」

星花「うぐつ、確かに…そうだけど…」

神司（ナイス！サグメ！）

この女神様を俺は絶対に守ろうと改めて決意した。

このような会話が少し続いてから妖怪の山を降りることになった。家族五人で歩いて下山中、一瞬だけだが、邪気と殺気が人里で感じた。

神司「…！今の…！今のは…！一体…！」

零愛「お父さんも感じたの。」

莉亜「なるほど、皆もか。」

星花「異変じゃなければ良いけど…」

サグメ「確かにね…」

そして、何もなのまま、山の下まで来たのであとは紅魔館まで飛行して行った。あの殺気だけが謎だった。

## 第120話 【後日談】守りたい者

神司が幼児化して神司が焦っているとき、もう一人の主人公の怠惰 ベルフェゴールは安倍晴明の家の前まで着て悩んでいた。

はつきりした理由を言うと、タルウイのことを異性として好きだからである。この告白は必ず成功させたい。しかし、二つの件があつてフラれる可能性が大きい。その件とは、タルウイの主である安倍晴明を俺本人が殺したこと、そして、命儂の洗脳とはいえ手先になつてタルウイのことを攻撃したことである。

怠惰「……帰るか……」

もう帰ろうとしたときに、家の玄関が開いた。出てきたのは安倍晴明が着ていた和服に似たのを着た青年が出てきた。

安倍晴明が死んだ今、住んでいるのはタルウイ一人かと思っていた、だが実際はタルウイと青年の二人が住んでいた。ここで俺は、青年はタルウイの彼氏だと考える。その事が合っているか否か確かめるためにその青年に話を聞く。

しかし青年の方から俺に話しかけてきた。

青年「……何か用か、悪魔。」

怠惰「へえ、悪魔の気が分かるのか。」

青年「当たり前だ、俺も陰陽師だ。その気ぐらいは探れる。」

怠惰「ならどうする？俺を殺すか？」

青年「勿論だ。」

ならばと、左手に大魔術書を構えて、魔術書鎌を構えた。

怠惰「ならば死ぬ。」

足元に魔方阵を召喚してから鎌の刃に邪気を纏わせて放とうとしたが、少女の叫ぶ声が聞こえた。

？「止めてー!!」

怠惰・青年「!!」

少女の音が聞こえた方向には和服を着たタルウイの姿があった。

怠惰「た、タルウイ……」

タル「もうこれ以上私の家族を殺さないでよ……!」

怠惰「……ごめん……」

タル「もう私に近づかないで。」

怠惰「!?!」

タル「行くよ、領耶。」

領耶「あつ、はい……」

タルウイは泣きながら、領耶を連れて何処かへ出掛けてしまった。

……終わった……また、タルウイに告白できない理由ができてしまった。さらにタルウイに近づいてはいけないことにもなった。これが俺の運命なら受け入れよう。また独り孤独で実験をしよう。

両手に持つている武器を片付けてから寂しく家に戻る。



怒りが込み上げてくる。あの何時でもヘラヘラしながら私の家族を殺してくる怠惰の悪魔に。ムカついて私の熱で溶かしてやりたい。

そうだ、また私の家族を殺してくるのなら、私に近づいてきたなら、熱で溶かして逆に私から殺してやる。そうだ、そうしよう。

——あの怠惰の悪魔が私の家族を殺した。それは清明の死の話ではなく、本当の家族を——、



あの時、私はアベル・サタナキアによりゾロアスター教の一人として創られた。

アベル「へえ、熱の邪神か、面白いな。」

タル「神ノ邪神様、私を創っていただき有難う御座います。」

アベル「気軽に神ノで良いんだよ。しかし、ゾロアスター教の邪神達は強力に強く創らせすぎたな…まつ、良いか。あとは適当にしてくれよ。」

そう言った後、神ノはスキマを開いて何処かへ行つてしまった。本当にゾロアスター教の邪神達が残ってしまった。

皆が暇なので戦闘を始めた。この場面を見て、皆は戦闘狂だと判つた。そして、そんなこんなで数百年が過ぎた。

しかし、こんなときに、アイツは現れた。

怠惰「なア、暇してんだ俺。交ぜろよ…」

この時の怠惰は暇だから殺すというサイコパスな殺人鬼だった。

私以外の邪神たちが怠惰によって肉片になった。私だけ残されて、怠惰が近づいてきた。でも私怯えてで、どう攻撃をすればいいのか分からなかった。

怠惰「女の邪神か…珍しいな。希少主は残しておくよ。良かったなア、俺が見逃して

くれてな。」

そう言つて周りが肉片の場所に独り、恐怖に溺れていた。体の古江が止まらない。邪神でもあろう私が恐くてお漏らししていた。

そこからだ、怠惰を恨むようになったのは……



私を殺すなら殺せ、あの邪神達のように。

……何で昔の事を思い出したんだ。ああ、怠惰を恨む理由を思い出すためか。

もう少しで八百屋だというところで、領耶が私に話しかけてきた。

領耶「タルウイさん……」

タル「うん？どうしたの？」

領耶「いや……あの悪魔と仲直りしないのかな、と思いましたが……」

タル「誰があんな奴と仲良くならなきゃいけないのよ！」

領耶「そつ……そう、ですか……」

あんな殺人鬼と何で私が仲良くしなくちゃいけないんだ。

そんなこんなで八百屋で食材を帰って帰宅途中、誰かが私たちをついてくる人影が分

かった。

また、あの怠惰の野郎か？それならこの場で殺してやる。

タル「怠惰！またあんたは……ッ!？」

後ろに居たのは、あの時、怠惰に殺された筈のゾロアスター教の邪神の一人だった。

？「よつ久しぶりだな、タルウイ〜」

タル「渇<sup>ザ</sup>きの邪神<sup>チエ</sup>乾<sup>ザ</sup>きの邪神<sup>チエ</sup>は熱<sup>タル</sup>の邪神<sup>ウイ</sup>と協力して作物を熱でからかしたり、乾<sup>ザ</sup>きで作物の水分を抜き取り、村の人々たちを困らせていた。乾<sup>ザ</sup>きの邪神<sup>チエ</sup>の性別は女性である。…生きてたのね…」

ザリ「死ぬわけではないよ。私たちは、悪魔の上位互換の邪神なんだぜ？」

タル「そうだけど…」

ザリ「なあ、そんなことよりさ、またこの世を荒れ地にしようぜ、昔のようにな！」

領<sup>ネ</sup>「それは聞き捨てならないですね、ザリチエさん…でしたっけ？」

ザリ「何だ？下級種族の人間がよオ、ザリチエ様、だろ。」

少し傲慢差があつて、さらに人間を見下しているザリチエ。正常運転だからと言って、家<sup>細</sup>族<sup>耶</sup>を見下すのは何かムカつく。

しかもザリチエはこんなことを言い出した。

ザリ「なあ…コイツ、殺していいか？タルウイ…？」

領耶「ツ……コイツ……!!」

最悪な再開だ。あの時の友はもういないのか。殺気を出すザリチエの前に手を掲げて立った。

タル「それだけは絶対ダメだよ！いくらザリチエでも領耶は殺させない！」

ザリ「下級種族の人間の犬になったのか！ならばタルウイお前も熱を乾かせてやる!!」

タル「挑むところだア!!」

？「はい、ちよつとタンマ。」

タル・ザリ「誰だ!!」

見ると、そこには……最悪の悪魔が鎌を肩に置いて立っていた。

怠惰 ベルフエゴールだ。

なぜコイツが居るんだ、ホント最悪だ。

タル「私に近づくな！怠惰！」

怠惰「……はあ、何で今日はこんなにも不幸なんだ……タルウイに告白しようと思ったら陰陽師アイツが邪魔するし。」

領耶「はあ!？」

怠惰「それで、近づくなつて好きな人に拒絶されるし……挙げ句のはてには殺したクソ

邪神も生きてるしよ……何なんだろうーな、今日はよオ〜！」

鎌を地面に突き刺して、左手で髪をわしやわしやした後、下を向く。

怠惰「『悪魔の羽根』……」

怠惰がそう、ボソツと言うと、羽根が生えた。

ザリ「何なんだ！ 貴様は……私たちを葬って何になるんだ！」

ザリチエがキレるのは同感だ。なぜあにもゾロアスター教の邪神たちを虐殺したのか、それこそ本心だ。

怠惰「ばーか、あん時は偶々村の人たちの話を聞いたんだよ。『邪神達が作物を枯らしたりして迷惑だ』ってな。それほど俺動いたんだよ。」

ザリ「は？ 普通は私らの姿は人間には見えないんだよ？」

怠惰「普通はだろ？」

ザリチエの言う通り、人間には私らの姿は見えない。しかし、それなら矛盾が生じる。人間には『私らの姿は見えない』、ならば何故、領耶は私らの姿を見えているのだろうか。それは簡単だ。

答えは怠惰が直ぐに放った。

タル「まさか……！」

領耶「……！なるほど。」

怠惰「そう、普通の人間には無くて、普通じゃない人間には有るものとは、『靈感』だ。」  
靈感を持つているだけで私らの姿を見ることが出来るって言うのはおかしい話だ、あの殺戮の話と領耶が私の姿が今まで見ていたことを思い出すと、確かに辻褄が合う。なら、あの始めて神司に会った時の煎餅屋の翁ちゃんも靈感が会ったと言うことになる。

ザリ「霊、感…?!ふざけるな！そんな糞で雑魚で貧弱で下級種族の人間に靈感を持つた人間なんかにお前は動いたって言うの?!」

怠惰「黙れ、孤独の邪神が。」

ザリ「ヒイイ…！」

物凄い怠惰の殺気だ。あの活気あるザリチエを一言で静かにさせるなんて……

しかし怠惰のあの殺気、初めて見たかも…

怠惰がザリチエに急接近すると、ザリチエは避ける余地もなく接近された。

怠惰「なあ、また俺に殺されたいのか…？」

ザリ「ヒイイ…！」

怠惰「人間の汚えところばつか言いやがってよオまあ、それは置いといて、俺はタルウイに告白するために来たんだよ。絶対に邪魔するなよ？」

ザリチエは勢いよく首を上下に振る。

そう、怠惰の目的はタルウイへに告白するためだけなのだ。怠惰はタルウイに拒絶されてもストーカーの如く、着いてきていた。

怠惰はザリチエから離れると、次は私の方に近づいてきた。

タル「な、何…?」

怠惰「なあ、タルウイ：俺お前のことが好きなんだ。だから、付き合ってくれ！」

怠惰の以外な言葉に驚いて一瞬時が止まったように感じた。

たつ、確かに告白しようと言つてたけど…マジなの…?

だけど、今の気持ちはコレだ。

タル「ごめん…少し考えさせて。」

私はこの場から走つて去つた。いや、これは逃げたのだ。

初めて聞いた、怠惰が私のことが好きだなんて。私は少し怠惰に気は寄せていた。で

も清明を殺したクソ怠惰を許して付き合うのも何かおかしい。何なんだろう…このぐ

ちやぐちやな気持ちは。

領耶「タルウイ！」

領耶もタルウイを追いかけられるためにこの場から去つてしまった。残っているのは怠

惰とザリチエの二人だけだ。

怠惰はあのタルウイの返事を振つたと大きく勘違いしてショックを受けていた。

怠惰「……振られた……」

ザリ「あははっ！失敗してんじやねーかよ——ッ……!!」

怠惰に煽るザリチエだったが気づいたときには、怠惰の鎌がザリチエの首の半分まで刺さっていた。

ザリ「あ、あ、あ、ア、ア、!!」

怠惰「動くなよ……？お前の首が飛ぶことになるぜ……」

刺さっていた鎌を抜くとザリチエの腹部を蹴り倒した。

怠惰「さつき、ザリチエは俺の事を馬鹿にしたけどそれはどうでもいい。俺がムカついてんのは、タルウイが大事にしていた人間のことを侮辱したことにムカついてんだよ。」

怠惰の怒りは頂点に達していた。もうこの場でザリチエを消す、もしくはサキの代わりの従者にしようとしていた。もうこの場でザリチエを消す、もしくはサキの代わ

り下がり、邪神の階級を下げるか、もしくは……俺の永遠の従者に成

ザリ「そんな、な、……」

殺されるのが嫌なザリチエ。それは確実だった。

しかし、墮天使、死神の従者などに成る邪神など笑いにされるだけだ。だから私は

人間の犬、つまり人間の従者に成ったタルウイを馬鹿にした。そんなことなら死んだ方がまだマシなんだ。

ザリ「……私を殺せ……」

怠惰「あつそ、じゃあな。」

それで呆気なくザリチエは鋭利な刃によつて斬首された。

飛び散る血飛沫を直に受ける怠惰。

魂を刈り取る担当の俺だが、ザリチエの魂を掴むと、小さな裂け目を創った。行き先は三途の川だ。

怠惰「小町、あとはよろしくな。」

裂け目を開いた近くにいたのは、閻魔直属の小野塚 小町だった。

小町「おつ、珍しいね、BAGEL。」

俺の名前は、ベルフェゴールだ。それを英語にすると、『BAGEL FE GOA  
L』

だから、小町にはBAGELと呼ばれている。

しかし俺は気に入っていない。小町が勝手にそう付けたんだ。

怠惰「はあ、まあ良いや。でだ、本題。」

小町「——って！血だらけだよ!?また誰か殺つたの?!」

怠惰 「話を聞けえ！」

く死神説明中く

怠惰 「——という訳なんで、ヤマザナドゥに宜しく頼む。」

小町 「あー、了解。で？告白の件はどうなったの？」

怠惰 「ああ、話したっけ？」

小町 「話した。」

怠惰 「……振られました。」

小町 「まあ、女の心を掴むのはムズいもんよ。」

怠惰 「はあ……まだ宴会があるしそんな時にでももう一回告るか。」

小町 「何?!宴会あるの?!何時?!」

怠惰 「六日後。」

小町 「六日後か……四季様に聞いてみる！」

そう言つてヤマザナドゥのところへ走つて行つてしまった小町。ザリチエの魂を頼

むよ……?

さて、タルウイを追いかけるか否か……

怠惰 「どーすっかな……」

一度、家へ戻ることにした。

実験場しかない家だが、今日一日は寝ることにする。

## キャラクター紹介・設定

神かみのじやしんノ邪神（アベルⅡサタナキア）

ズレパニ・ロツサ

種族：魔神

能力：暇をもて余す程度の能力

物に念を送ると球にして操る程度の能力

魔神実験作の成功品。黒マスクを常に着けている。

謎の老人、キラティナ・キラティナイドに教えられた人格技を自分の技として扱っている。後にBLEEKを手に入れる。

ミカエル

種族：神

能力：焰と黒炎を操る程度の能力

聖戦後、「光」と「闇」に別れ、二つの神が現れた。

「光」は母性溢れる女性のミカ、「闇」はキレやすい男性エル。

神ノ邪神の基で後書き班として働いている。  
ゼウス殺害  
 無実の罪で一度神司たちに殺される。

稀神きしん 神司しんじ

種族：元人間

能力：予知を見て反応できる程度の能力

刃を出して操る程度の能力

元々、もう病気で死が迫っていたがクロムヴェージュ・キラティナイドの憑依のお陰で病気は無くなった。その前に姉がミカエルの手によって殺される。その恨み、復讐を果たすため聖戦を起こす。結果は神司たちの勝利で終わった。

性格は相手を護る、目的を果たす為なら何でもする。人使いが荒い。自分を犠牲にしても敵は倒す気持ちを持つ。

見た目は完全に男の娘。

髪を伸ばしているのに理由は特に無し。強いて言えば、死んだ（今は生きている）姉の真似。

武器は刀、剣の二本、又は刃である。

一本目は刀で邪楼剣、二本目は剣で天叢雲剣。

邪気と殺気に敏感。

精神内にクロム（邪神王）を住ませ、クロムが夢司人命神、通称 夢を精神内に封印することに成功した。

紫を弟子にした後に人里へ行って偶々遭遇した奴隷商人を発見、クロムの力を使い、金塊と交換して、奴隷の子供たちを全員買い取った。その内の獣人の兄妹のドラ・マレットとシロフォン・マレット（通称、シロ）が神司を主として着いていくことになった。

妻は稀神 サグメ。

両思いのまま、その日同時に告白して勿論成功した。

その後、双子の兄妹の苺亜と零愛が誕生。

零愛は『何でも切り裂く程度の能力』、苺亜は『記憶をイジる程度の能力』。

《予知を見て反応できる程度の能力》とは、その能力名通り、少し未来の事を予知できる能力だ。（簡単に言えば、チェンソーマンの未来の悪魔みたいな能力）

次に《刃を出して操る程度の能力》とは、空中、体からや地面、つまり何処からでも刃を出して、さらに操る能力のことだ。出せる数に上限はない

邪楼剣

形は普通に刀のよう。

色は黒一色。

覚醒時に桜色に光る。

能力は『重さを自由自在に変える程度の能力』

天叢雲劍あめむらぐものつるぎ

またの名を『草薙劍』くさなぎのつるぎ

形は劍のよう。劍なので両刃。

色は黒一色。

あの有名なヤマタノオロチを倒したと言われている伝説の劍。

劍自身が主を生やして決めると言う。

能力は『風を纏う程度の能力』

稀神きしん 零愛れいあい

種族：天人と元人間とのハーフ

能力？何でも切り裂く程度の能力

元人間の神司と天人の稀神 サグメの間から生まれた長女のハーフ。

背中にはお父さん似の悪魔の羽根を生やしている。

お父さんとお母さんのどちらにも甘えている。

武器は『ツイン・レギオン対二刃』。

稀神きしん 莉亜がいが

種族：天人の元人間とのハーフ

能力：記憶をイジる程度の能力

零愛と同じく天人と元人間とのハーフ。

背中にはお母さん似の天使の羽根を生やしている。

お父さんとお母さんには甘えない。零愛から見ると頼りになるお兄ちゃん。

ドラ・マレット

種族：獣人

能力：炎を操る程度の能力

雷を操る程度の能力

シロフオン・マレット

種族：獣人

能力：水を操る程度の能力

風を操る程度の能力

《マレット兄妹》

実の母親、アドラエル・マレットⅡキラティナイドと父親の獣人との間に生まれた兄妹。しかし父親の獣人に人身売買されて、集団で奴隷として人里で売られていた。そんなとき、神司に金塊三つで買われた。忠誠心ある二人は心優しい神司に一生着いていくために神司の中にいるクロムヴェージュ・キラティナイドから不死を頂いた。

それから神司にドラは『雷炎』、シロは『邪流』<sup>マギ・ナガレ</sup>を貰った。その後二人はその武器を活用している。

稀神 <sup>きしん</sup> 星花 <sup>せいか</sup>

種族：屍

能力：植物を操る程度の能力

昔にミカエルに殺されたが、怠惰 ベルフェゴールの禁断魔術によって生き返った。一番親しい友達は、八雲 紫だそうだ。(稀神 サグメは家族なので違うとのこと。)

《七つの大罪》

憤怒 サタン

種族：悪魔

能力：獄炎を操る程度の能力

七つの大罪『憤怒』にして、団長。人間のことは嫌っている。理由は生意気だとのこと。七つの大罪総団長の神ノ邪神に「人間を好きになれ」と言われるが、そこでキレル。その件で神ノ邪神と死闘を開始するが、結果は敗退。そこで神ノ邪神に『憤怒』を賞される。しょうがなく人間を好きでいるが、段々と人間を好意で好きに成りつつある。

嫉妬 レヴィアタン

種族：吸<sup>ドラゴニユート・ヴァンパイア</sup>血 竜 人

能力？水に司る程度の能力

聖戦後、水星に行くこと、なぜか女体化。その後、地球でソロモン王ソロモン72柱のバエルに召還されたがバエルを殺害。そのまま女の身体のまま地球で住むことに。

神ノ邪神の持っている武器の多さに嫉妬したことを気づいた神ノ邪神に「お前、嫉妬者だなく」と言われ、『嫉妬』になり、武器の一つの『邪流』<sup>マジ・ナガレ</sup>を貰った。（しかし、現在の使用者はシロフォン・マレット。）

『邪流』は、撃てば撃つほど撃った人は邪心が強くなるが、邪神や悪魔、吸血竜人と魔神

は例外。

『邪流』は神ノ邪神にもう一度造ってもらった。

強欲 マモン

種族：墮天使

能力：何でも斬れる程度の能力

彼には斬れない者は無いんじゃないかと皆は靴を揃えて言う。

今は幻想郷で鍛冶屋を営んでいる。

江戸時代に伊達政宗と友人関係があつたが、針塊 命儂の手によつて異形にされてい  
た。

愛刀は『紅葉姫』。

怠惰 ベルフェゴール

種族：墮天使・死神

能力：魂を刈り取る程度の能力

従者の使い魔でサクユバスのサキがいたが、四代天使の一人のラファエルにより戦死  
する。その前には、タルウイの主、安倍晴明、神司の友人のぬらりひよんを殺害し、魂

を抜き取った。その後ラファエルの魂を刈り取ると禁断魔術に四つの魂（安倍晴明、ぬらりひよん、ラファエル、サキの四つ）を使用し、神司の姉の星花を死者蘇生に成功した。

武器は『大魔術書』と『魔術書鎌』。

戦闘や主の前だと頑張るが、それ意外はだらだらとしている。それを見た神ノ邪神は、「怠惰だなあw」と言つて『怠惰』を任命した。

色欲 アスモデウス

種族：魔神

能力：硬化させる程度の能力

地獄に住んでおり、食事は女性・女子の魂を凍らせてから好んで食べている。

武器は槍、『銀槍竜 ロンギヌス』。ロンギヌスを覚醒させると、槍から銀竜が飛び立つ。上に乗ると、そこには槍が刺さっている。それを抜き、乗りながら攻撃する。

女の子の魂ばかり食っている（物理的に）、神ノ邪神に『色欲』と任命された。

暴食 ベルゼブブ

種族：蠅（ノ王）

能力：腐食させる程度の能力

神ノ邪神の手によって、蠅から人の形にさせてもらった蠅の王。その時以来、『暴食』を受け貰った。

気が優しく、人見知り。初対面時は絵文字で話す。

大事な人が亡き者になると暴走しがち。

体の中に凶悪な魔神を飼っている。(実質、そっちの魔神の方が『暴食』らしいが、それを食ったのでベルゼブブの方が『暴食』に等しい。)

傲慢 ルシファー

種族：墮天使

能力？奇跡を操る程度の能力

最高神 ミカエルの立場、四代天使から引きずり落として自分が四代天使に入るため、ミカエルに喧嘩を売るが、見事敗退した。しかも、最高神に反抗したため、ルシファーは地に落とされた。

その事を知った神ノ邪神は目をつけて、七つの大罪に引き入れて、『傲慢』を与えた。

また、憤怒 サタンとはたまに共闘するが仲良しまではいけない。しかしそれはサタンの話。ルシファーはサタンと仲が良いと思っている。サタンが自分なことを苦手だ

とは理解している。早く仲良くなりたいたいと思っっている。

紅風 亜無（嘘無 純）

種族：人間

能力：嘘を見破る程度の能力

無かったものを有りにする程度の能力

日本で交通事故に遭うが、天界のサユリの力で幻想郷での第二の人生を送ることに。つまりは外人。

「嘘を見破る程度の能力」は、嘘ついている相手に能力を使うと、その相手が赤く見える。そして嘘をついていない相手に能力を使うと、青く見える。

紅風 ライム（嘘無 来望）

種族：白狼天狗（元人間）

能力：支配されない程度の能力

紅風 亜無の妹。どうやって幻想郷に来たか自分も覚えていないが、おそらく、八雲 紫が連れてきたのだろう。現在は、妖怪の山のところの天狗の里で戦闘員として働いている。

「支配されない程度の能力」は名前通り、能力や、洗脳等、精神的に支配されるのを断固拒否する能力。

八劍やつるぎ 光矢こうや

種族：人間

能力：光を操るする程度の能力

11歳頃に自身の実の母親と父親を殺害。

雨の中一人で居たところを、紅魔館の当主 レミアア・スカーレットに偶々拾われた。最初は乗り気ではなかったが、段々と馴染めるように。現在は、紅魔館執事長として暮らしている。

「光を操るする程度の能力」とは、主に自身の身体の周りに光を付けたりして、身体能力を上げる。

十六夜 咲夜とは少女期からの同期。

武器は十六夜 咲夜と光矢の二人が少年少女の時の特製の弓。（矢は自身の能力の光の矢。）

タルウイ

種族：邪神

能力：熱を操る程度の能力

神司を殺すため、幻想郷にやって来るが、その標的に返り討ちにされた。挙げ句の果てには安倍晴明の式神として生きていくことになる。最初は嫌々だったが、長く同居すると親しくなった。そんなある日、主の安倍晴明が怠惰、ベルフェゴールにより禁断魔術の生け贄されたことを怒り、ベルフェゴールに戦鬪を挑むが、敵であるベルフェゴールからの意外な言葉で赤面し、戦鬪どころじゃなくなり退散。

怠惰の突然の告白により、一度深く考えるために、告白を保留した。

クロムヴェージュ・キラティナイド（邪神王）

種族：邪神

能力：邪心を操る程度の能力

大悪魔邪神王 キラティナ・キラティナイドの血族にして三兄妹の長男。

神ノ邪神の頼みにより、神司の身体に憑依。その後、神司の体の中の病原菌を邪神の血で抹消。そして、神司の復讐のため、自分の身は出さずに神司に憑依したまま七つの大罪と共に聖戦に参加。

聖戦後は、白玉楼にて自分の体を現した。

現在は、神司の体から離れて自分の体で別行動している。

ブラックドール・スカーレット（黒フラ）

種族：吸血鬼・フランドール・スカーレットの狂気

能力：相手の能力と技を模倣する程度の能力

紅風 亜無の能力によってフランドール・スカーレットの狂気を分けられた姿。性格はフランドールとほぼほぼ似ている。

好きな人は神司らしい。理由は、自分から襲い掛かったのに気絶した自分を看病してくれたから、らしい。

フランドールの狂気の塊なので我を失う事も多々ある。

レミリアに家族と言われ、改めて紅魔館の住人となった。

## 第121話 《後日談》 邪神王の実家での話

「邪壊邸」

キラティナイド家が住んでいる邪壊邸<sup>やかいてい</sup>。

そこに今、ドラとシロが滞在していた。

ドラ「……」

むすつとして椅子に座るドラに気づいたクロムはゆつくりと隣に座る。

クロム「よつと……どした？ドラくん。」

ドラ「……んー、母さんの事が……ねえ？」

あれか？アドラがドラ達の母親だという急なカミングアウトにまだ馴れないと言うことか。

まあ、あの操られていた時のアドラの闇を見てしまったと言うのもあるのだろう。

しかし、シロちゃんは馴れてもうアドラと楽しくじゃれ合っているが……そうだよな、ドラくんも男の子だ。

クロム「馴れないのか？」

一応聞いてみる。

ドラ「いや…まだ信じれないんです、よ…母さんを…」  
クロム「つまりはアドラをまだ敵なのか疑っている」と。

ドラ「はい…」

なるほど、ならまだ俺がアシストできることだな。

ゆつくりと（ついでに優しく）ドラくんに話しかけた。

クロム「ならアドラ、じゃなくて母さんのことを観察するといい。」

ドラ「観察…?」

クロム「そつ、人間観察さ。相手を信じれないのなら相手の動作を観て、相手を覚えれば怖くねえーよ。」

ドラ「……」

クロム「そつからだ、相手を敵と判断するのはな。」

ドラ「…でも…」

クロム「でも何だ？敵は敵だとも？」

ドラ「違います。」

この言葉だけハッキリと答える。なら大丈夫そうだな。

クロム「んじゃ、馴れてこいよ。ドラくんはドラくんのやることをやってこい。」

ドラ「はい！」

元気よく返事してアドラの方に駆けていくドラ。俺はベランダで一人紅茶でも…  
スカル「よお、邪神王様ア。」

後ろからアドラの武器のスカルが人形で来た。

クロム「ん？お前はケルベロスと一緒に門番していたんじや…」

スカル「居たツスよ？でも門番つまんねーツスもん。」

クロム「ああ、そう…」（？▽？；）

だからケルベロスと一緒に門番させたんだろーがよ。戻って来たならしょうがない。  
とりあえず、ケルベロスに謝って来よう。

クロム「…ケルベロスとこ行くぞ。」

スカル「何でツスカ。」

クロム「あとな、一様俺、ここの王子だぞ？」

スカル「キラティナ様の長男なだけでしょ？」

クロム「だから敬語を使わない？」

スカル「素で宜しいのですか？」

クロム「どっちでも良いよ。」

呆れたんだよな、正直のところ。話をスルーしたことに気づいていない。本当に邪壊  
邸の後先はどうなるのか…でも最悪、俺の妹たちが何とかしてくれるだろ。あー、でも

なあ、アイツだけがなく！

クロム「スカル、ちよつと久々にアイツに会ってくるよ。」

スカル「妹様ですか？了解です。」

何か敬語だったな、スカルアイツ。

俺は無言でこのベランダから出て、地下まで行つて大きな扉の前まで来た。

最初に言つておく。アイツと言うのは俺の妹、そしてアドラの姉さんだ。能力は『破壊と殺戮を繰り返す程度の能力』、名は『リングロイド・キラティナイド？、通称紅魔の殺戮ルージユ？。ルージユ：リングの性格は俺やアドラよりも似て似つかない性格だ。ただただ破壊衝動が止まらない性格なんだ。

扉を三回ノックする。ここで死ぬかは俺次第だ。

リング「はーい。」

反応があつた。

『お兄ちゃんだ、開けて良いか？』

聞いたところ、許可が出た。

大きな扉をゆつくりと開いて中に入る。まだリングに背を向けたままゆつくりと扉を閉める。

クロム「リング、久しぶり。」

リング「あははっ！お兄様久しぶり！」

黒髪ロングに紫色のフリフリを付けてドレスを着たリングが紫色の羽根を使つて俺の方に飛びつく。

こんなに無邪気な性格だが、過去に神五体を相手にして五体とも殺つて勝つた程だ。神殺しは重罪。だからこの部屋に幽閉しているのだ。

リング「ねえねえ！お兄様、遊ぼう！」

クロム「良いよ、何して遊ぶ？」

リング「外行きたい！」

それは無理だ。外に出したらどんだけの人が犠牲に：

クロム「それはダメだ。」

リング「あっそ、なら自分から出るもん。」

クロム「？」

リングは立ち上がるとすぐに羽根を飛ばたかせて飛んで外に出ていった。

クロム「しまった！鍵を閉めるのを忘れていた！」

マズイことになる。この邪壊邸にはドラクーンとシロちゃんが滞在中なのに：！！

すぐに上に戻つて見た光景は、アドラと楽しそうに会話していた。

クロム「ええ：」

リング「アドラ久しぶり！」

アドラ「姉様……！お身体の方は大丈夫なのですか？」

リング「うん、大丈夫だよ。」

クロム「リング……破壊衝動は落ち着いたのか……？」

リング「あつ、お兄様……今は安心だよ、誰も殺したくないよ。」

そう言うところリングはドラとシロを見つけた。

リング「アドラの子供？」

アドラ「ええ、そうですよ。二人とも、挨拶を。」

シロが先に緊張しながらリングに挨拶をする。

シロ「えーっと、シロフォン・マレットです。シロって呼んで！」

続けてドラも挨拶する。

ドラ「シロの兄のドラ・マレットです。宜しく願います。」

リング「私は……ルージュ・キラティナイド！貴方らのお母さんのお姉さんだよ。宜し

くね！」

クロアド「!?」

おいおいおい、リングう！何でルージュ紅魔の殺戮を名乗ってんだよ！

俺もアドラも動揺している。

確かに、『リングロイド』っていう名前は珍しくて言う側も嫌なんだろう。俺もクロムは良いが、『ヴェージュ』はおかしいと思う。まあ、そんなことは置いといておく。

アドラ「良いの？ 姉様の名前、勝手に変えちゃって。」

クロム「大丈夫だ、親父に何か言われたら俺が何とかする。リン：ルージュが外に出た事もな。」

ルージュが名前を変えたって誰も責めない筈だ。まあ：親父がどうするかは別の話だがな。

クロム「あつ、そうだ。アドラ、六日後に博麗神社で宴会があるからドラちゃんとシロちゃんを連れて絶対に来いよ。」

アドラ「わかったよ：：」

クロム「どした？」

アドラ「いや：ドラくんもシロちゃんも宴会の後は神司さんの方に戻っちゃおうと思うと悲しくてね：：」

クロム「それなら——」

ルー「そんなのシンジって奴を殺せば良いんだよ。」

クロム「殺させるかよ！」

急な破壊衝動が俺の相棒を殺すと言いだめた。

そんな事するならいくら実の妹でも俺は神司を死守する。

ルー「なあに？お兄ちゃん。」

クロム「ツ……なるほどな、長年リングと住んではいたが……幽閉してて分からなかったな……リンググロイド、お前……二重人格なのか！」

そう、リンググロイドとルージユ本来の性格は違う人格だったんだ。だから今思えば、リングの大人しい性格と異なる驚異の殺戮は同一人物であり、おかしな性格だった。

ルー「や……と、理解してくれたんだ！お兄ちゃん！」

クロム「いつものリングならお兄ちゃんとは言わないからな。」

そういうことだ。普通、リングなら俺のことはお兄様と、呼ぶんだが、先程のリングはお兄『ちゃん』とちゃん付けした。だから分かったんだ。

しかし、二重人格は思い付きで言ったつもりがまさかの当たりとは……

さらに俺はリングを見るとより分かりやすいヒントがあった。

クロム「目が紅いな……」……紅いのがルージユでいつものエメラルドのような目がリングなんだな？」

ルー「よくぞお分かりで！」

人差し指をピンつと立ててウインクする。

なるほど、ホントに分かりやすいヒントだこと。

クロム「ルージュに忠告させてもらうぞ。」

ルー「どうぞ♪」

クロム「神司は俺の大事な相棒なんだ。殺そうしたら俺は許さないからな。」

ルー「むう、それなら仕方ないね。分かったよ、お兄ちゃん。」

クロム「ごめんな。」

ルー「大丈夫大丈夫！それじゃあ、リングに戻るね。」

ルージュが目を閉じて再び開けると元のエメラルド色の目をしたリングに戻った。

リング「どう？ルージュは良い子でしょ？」

クロム「ああ…良い子だよ…」

暴走癖があるルージュ…：まだまだ十分に残す理由がある。神ノが言う約束までもう少しだ。それまでルージュを扱えるようにしないと。

クロム「あつ、アドラは宴会行けるんだよな。」

アドラ「うん。」

## 第122話 稀神家のバイト

家族で紅魔館に着いたのは良いが、

美鈴「zzz…zzz…」

門番である美鈴が立ったまま壁に持たれて寝ていた。

確かに今日は暖かくて眠くなるが、流石に仕事中は寝ないな。

サグメ「美鈴さん、起きて下さい？」

美鈴「…うくん、おはようございます。」

サグメが美鈴の体を揺すって起こす。30秒位揺らすとやっと起きた。

サグメ「門を開けて下さい、予定通り来ましたから。」

美鈴「…は！すみません！サグメさん！って、この三人の子供達は？」

零愛「妹の稀神 零愛です！」

苺亜「零愛の兄の苺亜。」

神司「そして、二人の親の神司だ。」

美鈴「零愛ちゃんと苺亜くんはわかりましたけど、何で背が縮んだんですか!? 神司さ

ん！」

それはこつちが聞きたい。朝起きたら背が縮んでましたー、なんて誰が信じるんだ。とりあえず誤魔化す。

神司「知らね☆」

星花「うわっ…」

神司「何で姉ちゃんが退くんだよ！」



神司「——まあ、そんなこんなでやつと入れた訳よ。」

亜無「あはは、お疲れ様です。」

やつと美鈴となぜか姉ちゃんを説得させてやつと紅魔館内に入れた。

苺亜「それにしても、何で父さんの背が縮んだのだろう。」

神司「多分、クロムが俺の精神内に夢を封印したからだと思う。」

この部屋に居る皆は誰だそれはと首を傾げる。なので夢について皆に話す。

星花「それだと、その夢のせいだと言えるかもね。」

神司「だろ？」

星花「夢司は命儂と神司の血が混ざって出来た生命体なんでしょ？」

神司「そうクロムからは聞いている。」

星花「ならその副作用みたいな代償みたいな事が神司の身に起きているね。」

そうか、夢を俺の中に封印することで俺の背まで一緒に封印されたのか。何か、納得  
いかねー……

そんな話の中、この部屋にレミリアお嬢様が咲夜さんを連れて入って来た。

レミイ「あら、皆御揃いね。なら話が早いわ。」

咲夜「サグメさんと星花さんは宴会があるまでここで働いてもらうことになりました。」

サグメ「何で!？」

星花「……神司、お前だね……？」

神司「さあね、でも二人のメイド姿見てみたい!」

サグメ「しんじい!」

神司「あはは……ごめん。」

あの二人を指名したのは俺だ。

館に入ってからすぐに俺だけ別行動してレミリアお嬢様のところへ行った。それで  
この身体のことも話して二人を指名させてもらった。

神司「まあ、この身体じゃ、台所にも立てないし、出来ることなら部屋の掃除するこ

としか出来ないから。」

レミイ「んじやその部屋掃除を神司にやって貰うわ。」

神司「承知しました、お嬢様。」

零愛「ねえねえ！私は！」

零愛は仕事をしたいらしい。レミリアお嬢様が考えていると、苺亜がレミリアお嬢様に提案した。

苺亜「なら、俺らは窓拭きで良くないか？」

咲夜「窓拭きですか…でもそれは妖精メイドたちがしてくれてますし…」  
皆が悩んでいると、フランと黒フラが走って来た。

フラン「お姉様！暇だから遊ぼっ！」

黒フラ「遊ぼー！」

神・レミ「それだ!!」

黒・フラ「え？」

神司「零愛、フランたちと遊び行きなよ。」

零愛「えっ、でも仕事…」

サグメ「今は遊ぶ時間に見てみたら？」

嫌そうな顔しながら頬を膨らませる。そこで苺亜も零愛を説得する。

苺「要するに俺らが出来ることは無いの。仕事が満席なのさ。」

零愛「むう：分かったよ：お父さん！仕事が空いたらすぐに言つてね！」

苺「そんなじゃ、フランとクーちゃんて良かったつけ？」

黒フラ「それで良いよ〜！」

フラン「右に同じく〜！」

同時に右手を上げるフランと黒フラ。

苺「それではお遊戯に出掛けてきます、お嬢様。」

レミイ「行きなさい。」

苺「は〜！」

四人は廊下をキヤツキヤツと走つて数秒で声が聞こえなくなった。

レミイ「では各自、仕事をしに行きなさい。」

神司「皆、行つてらっしゃい。」

レミリアお嬢様と苺以外の皆がこの部屋から出ていった。

さて、二人には構わずはたきでも取りに行きますか。

入つてすぐ左の棚からはたきを取り出して、まずはこの部屋を掃除し始めた。

苺「レミリア、ちよつと席を外してくれない：？」

レミイ「ん？良いけど：」

ボタンと閉まるドア。これで亜無との二人きりになった。

一体どんなことを俺に話すのか。亜無が俺に話し掛けるまで掃除しながら待つ。

神司「……」

亜無「…神司さん…」

神司「ん？どうした？」

亜無「…あの裏切り者の件なんですけど…」

神司「……」

確か、あの仲間の中に裏切り者が居るって俺が亜無に伝えたんだった。

黙って何も言わずに佇んでいる。

亜無「……裏切り者だった人は…オ——」

レミイ「あつ、そうだ神司。」

亜無「くく！」

話しかかった事がお嬢様によって遮られて話せなくなってしまうた。それに先程、部屋から出ていったレミリアお嬢様が十分もせずに入ってきた。しかも俺に用があると来た。

神司「はい、どうしました？」

レミイ「ちよつと着いてきてくれる？」

神司「良いですけど……」

亜無を見ると、椅子に座って机に倒れていた。

亜無にはちよつとすまないが、レミリアお嬢様の用を済ましてくるよ。廊下に出てそのまま外を歩く。

レミイ「貴方に見せたい人？が居るのよ。」

神司「見せたい？」

レミイ「そつ、見せたいのよ。」

まだ人に会わずなら判るが、見せたいなんて表現は普通使わない筈だ。

さらに人のあとに疑問文になっていることから、人じゃない種族と考えられる。

歩いていくと、地下に繋がる階段の着いた。

地下？囚われているのか。

どンドン下りていくと、薄暗い地下牢まで来た。

死臭もして気持ち悪くなって思わず鼻をつまむ。

レミイ「ここは昔私の両親が使っていた。捕らえた人間をここに連れてきて閉じ込める。最後は血を全て吸い取られて貧血で死亡する。そしてそのまま腐っていくのよ。」

神司「まさかレミリアも……！」

レミイ「そうだとしたら、抗う……？」

神司「…家族に手を出さないっていう約束なら俺は抗わない。」

シリアスな空気になると、レミリアは微笑んだ。

レミイ「ふふふつ、嘘よ嘘。貴方は私の大事な仲間だもの。殺したりするのは私のプライドが許さないわ。」

神司「それじゃあ…あの話も…」

レミイ「あれは本当。でも貴方に見せたいのは別なの。」

そう言うってから数十分歩くと一つの大きな牢屋があった。

そこに居たのは、体の大きい見覚えのある悪魔が鎖に繋がれながら倒れていた。

神司「ちよつと待て、あれはザキか…!？」

見覚えのある悪魔というのはあの異変で暴れていたザキが地下牢で囚われていた。

レミイ「私と妹たちで倒したのは良かったけど、あのままじゃ人里の人たちにも邪魔じゃない？だからここに閉じ込めたのだけど…後処理をどうするってなってるね…」

神司「最初から相談するって言ってよ…」

レミイ「あら、言っただけじゃなかったっけ？」

神司「相談の『そ』の文字も言っただけだよ…」

ザキの後処理って…えげつない相談だな。

そう、だな…俺のスキマにポイ捨てするか、もしくは霊夢と紫のどつちかに封印して

もらうかの二択だよなあ。

マジでどうしよう…

とにかく案が思いつかない。レミリアは考える俺を黙って見ている。っていうか、私らの案は尽きて助けてほしい目で見えてくるのは止めてくれ。

選択肢は決めたが一つの質問が思い付いた。

神司「ザキの後処理は俺のスキマで何とかするとして、レミリアに一つ質問良いか？」  
レミイ「何かしら。」

神司「命儂の死体はどこにあるんだ？」

ザキがここに捕らえているのだから、あの場に命儂の死体を放置するわけがない。俺も人里に吸血竜人が転がっていたら流石に何か起こすから、俺だったらの話だけど。

レミイ「……あるにはあるけど、死んではいないわよ。」

神司「なら話が早い。案内をお願い。」  
レミイ「着いてきて。」

牢屋がまだいくつもあつた。その五個隣の牢屋に命儂が座っていた。

レミイ「針壊 命儂、起きれるか？」

命儂「……神司、か。」

神司「なあ流弥、あのお方ってのは誰だ？」

命儂「唐突ですね、でもその答えはNOです。」

神司「俺は誰だと聞いているんだ。」

命儂「すまない神司……ならば奴のあだ名だけ、教える。」

暗い顔で答える命儂。名前は言えない様子だけど、あだ名だけなら何か掴める……!

命儂「……神司は聞いたことあるかもな、〃大悪魔邪神王?を。」

神司「は?」

ちよつと待て、大悪魔邪神王は知っている。何せ、俺が聖戦の時に名乗った名前なのだから。でもあれはクロムが――

神司「あっ!」

そうだ、〃大悪魔邪神王?はクロムの親父のあだ名だ。少ししか聞いたことがないけど、間違いない。

まさか……ラストは大悪魔邪神王を倒さないと、全ては解決しないってのか。

流弥が命儂になった元凶はそうだとしたら、神ノの力がある。

命儂「……て言うか、今更なんだが……神司の背、縮んだ?」

神司「黙れ!」



とりあえず、ザキにトドメを指して、命儂は回復するまで紅魔館の地下牢で生活することになった。

今俺は、仕事…ではなく亜無を探している。亜無の話をまだ聞いていないからだ。あんな中途半端なところで終わったら最後まで聞きたくなる。

探しているとまず見つけたのは咲夜さんとサグメと姉ちゃんの三人だった。

神司「あつ、サグ——え、かわいい。」

メイド姿をしているサグメを見つけた瞬間、何かグツと心にきた。

正直凄く可愛いという単語の組み合わせしか出てこない。

サグメ「神司：／／／」

俺を見つけるとサグメは頬を赤らめた。メイド姿が恥ずかしいのかもしれない。でもまた、そこが可愛い。

星花「いひひつ、どうだ弟よ！」

姉ちゃんもメイド姿で現れた。

それに眼鏡をかけている。

神司「何、イメチェン？」

星花「あつ、気づいた？えへへ、似合うでしょ♪」

腕を後ろにして自慢気に俺を見てくる。

確かに似合ってはいる。またニヤニヤしているので何か言っしてほしい様子だ。

神司「似合ってはいるけど、その眼鏡、度あるの？」

咲夜「そこについては安心して下さい。だてなので。」

なら安心だ。正直姉ちゃんは目が良すぎるから眼鏡なんてつけていたら目が壊れるだろうからな。

神司「それで？皆は今から仕事？」

咲夜「ええ、この六日間手伝ってもらいます。」

星花「さつ、さすがに休息は、あるよね…？」

青い顔で咲夜さんに聞く姉ちゃん。少し怯えている感じもある。

咲夜「では、星花さんだけ休みは無しで。」

星花「酷い嘘は止めてよ!!」



一方、地下部屋はとうとう――

零愛「カードゲーム飽きたね…」

フラン「そーだねー。」

黒フラ「苺亜ー、何かない？」

苺亜「んー、寝る？」

三人「賛成!!」

現在昼2時、暇をもて余した子供四人は昼寝を始めた。

さて、視点を戻して神司は、亜無の搜索を再開していた。先程の部屋には居なかった  
ので違う部屋に居ると思っていた。でも違った、この館内には居ないのだから。

亜無は紅魔館の屋根に座っていた。泣きながら自分を責めながら、ただただ座るだけ。

そんな光景を俺は眺めることしか出来なかった。何があったのか、聞くことは出来ず  
に今日という日が過ぎてしまった。

## 第123話 世の世界は宴会中!

夜 8時、宴会から一時間が経った。

結局、身体は元に戻らなかつた。まだ急ぐことはないから良いが、早く元の姿に戻りたいものだ。

皆バラバラの箇所に集まって、宴会を楽しんでいる。

例えば、霊夢と魔理沙は雑談しながら酒を飲んでもう出来上がっている。

霊夢「それじゃあ皆!精神異変お疲れ様でした!!かんぱーい!!」

霧雨「もう飲んでんのに今更かよ!」

宴会は始まったばかりだ。宴会まであの残り六日の間に亜無とは口を聞いていない。別に喧嘩をしたわけでは何か、声を掛けずらかつた。

神司「……亜無探さねーと。」

夢『……神司、予知を見ておけ。』

神司「何で?」

夢『予期せぬ事が起こることもある。恐ろしいことになる前に見ておけ。』

夢の言葉はスルーする。それに予知に頼ってばかりじゃ現実では使いたくないから。

精神内でギヤーギヤー言っているがあえて聞かないふりをする。ガンガン頭が痛いけど。

この夢のアドバイスを無視したことにより後に夢が思っていた事が起こるとは今の神司は気づきもしなかった。

亜無を探すが境内を探しても見つからないので外に出る。レミリアたちは宴会場に來ているので亜無だけ來ていないのはおかしい。

神司「一体、どこに居るんだ…亜無は…」

境内には居ない、さらに神社内にも居ない。なら、最後に残るのは屋根の上しかない。紅魔館でのあの時も屋根の上で独りで座っていた。そう確信して屋根の上まで跳んだ。

見るとそこには、少し暗くて見にくいのが、亜無の背中が見えた。

神司「やつぱり、ここに居たか、亜無。」

優しく亜無に声をかけた。亜無はハッと気づいたように振り向いた。しかし俺だと気づくと暗い顔になった。

亜無「……神司さん…すみませんでしたあ!!」

もう泣きそうな顔をしながら俺に謝り始めた。というよりも泣いている。

——って何で謝ってきたのか。

理由はすぐにわかった。

神司「ま、まずは落ち着いてくれ！」

亜無「うう……」

亜無は俺の前まで走って来た。

宴会を楽しむ皆の声が静かに聞こえる。

亜無「……本当にごめんなさい……お、俺……オーデインさんを、こ……殺して、しまつて……！」

気づくと俺は亜無に邪楼剣を向けていた。

夢がうるさく怒鳴っているが上手く聞き取れない。

神司「……なあ、亜無？そのままでもいいから、事実を話せ。」

泣きながら怯えている。関係ない。事実を話してもらうまで引き下がるつもりはない。

それから亜無は、オーとの死闘について話始めた。

味方の振りをしていたのはオーデイン本人だった。しかし当の本人は洗脳済みだったと亜無は話す。それで、負けそうなところをサリエル改め、サユリと紫に助けられたとのこと。

やつと倒せたとはいきや、自害してこの死闘は終わつたらしい。

そうになると、オーデインは亜無が殺してはいないことになる。

神司「その話の内容だと、亜無はオーを殺していないぞ。」

亜無「違う：ほぼ俺が殺したんだ：最後だつてオーテインさんを助けることができなかつたのだから：。」

深刻だ：ぶるぶると体が痙攣してしまっている。

亜無はこの一週間は苦痛だったに違いない。

俺は人を殺めることがよくあつてわからないけど、人を殺める恐ろしさはここまでくるのか。

神司「だけど、オーは亜無を恨みながら、亡くなつたか？」

もう怒りが治まってきている。なので亜無のことは許しかけている。

亜無「……笑つて亡くなりました：」

神司「そうか：」

オーの奴、『笑つて』：か。アイツらしい死に方だな。

とりあえず、亜無とは別れた。



さて、場所は変わって屋根から境内に。

神司と亜無が、シリアスな会話をしていた時、境内ではキラティナイド家の皆で酒を

飲んでいた。一部を除いては。

アドラ「シロちやくん! 飲まないの?」

アドラは酔っぱらってシロに飲まないか誘っていた。

もちろん、シロは一切酒を飲んだこともない。

シロは断ればいいのかわからないでいると、ドラが二人の間に入った。

ドラ「母さん、俺もシロも酒は飲めないんだ。」

アドラ「え……じゃあ、しょうがないね……」

潔く諦めるアドラ。

アドラは周り見ると、兄はちびちびと飲んでいて、スカルはごくごくと勢いよく飲んでた。ルージュは酒を恐る恐る飲んでる。

アドラは他に自分みたいな飲み方の人いないか探していると、急に襖が開いて、四人の団体が入ってきた。

エル「一番強い酒はどれだー!!」

勇儀「こつちだぞー!」

ミカ「もうエル! 走らないの!」

神ノ「おお、結構盛り上がってるなあ……」

四人の団体というのは、神ノ邪神と愉快な三人だった。

エルは入ってきて早々、酒を求めに勇儀の方に走って行ってしまった。  
暴食「行っちゃいましたね。」

神ノ「まあ、宴会なんだし良いんじゃないね？」

——つてか、この宴会凄いな：天界の黒炎のミカエルに、暴食入れての七つの大罪の  
三人がこの宴会場にいるなんて驚きだ。

神ノ「……神司が居ねえな。」

周りには、というよりもこの宴会場にどこにも神司の姿が見当たらない。

神ノ「……んじや屋根の上か。」

察しのいい神ノは宴会場から出て、屋根の上を確認すると神司と亜無の姿が見えた。  
すぐに呼び掛けようとするが、何か変な雰囲気だったので話を盗み聞きしながら屋根  
の端を持って懸垂し始めた。

亜無「違う：ほぼ俺が殺したんだ：最後だってオーデインさんを助けることができな  
かったのだから……。」

オーデインが：死んだのか。フム、さらには亜無が殺したのと同じだと言いたいらし  
い。生憎、あの場には居なかったから分からないが今は酷い状況ってことは理解した。

……また後で話し掛けるか。

懸垂するのを止めて宴会場に戻った。

神ノ「うわあ……」

宴会場に着くと、酒に酔った皆が荒らしながら暴れていた。その中で酒を嫌う人たちは端に避難して、クロムと強欲だけはゆっくりと酒を楽しんでいた。

あの短時間で何があつたんだよ。酒を嫌う組にはサグメちゃんやミカも居た。

神ノ「一体何でこうなつたんだよ。」

クロム「んお!? 神ノ来てたのか。」

神ノ「来てたとも……じゃねーよ。何があつたんだよ、少し席を外している間に。」

クロム「ああ、紫が持つてきたアルコール度数89%の酒をエルががぶ飲みしたわけよ。」

強欲「そしたらエルの野郎、静かに暴れだしやがって。」

神ノ「は、はあ……」

だからミカさんも避難したわけね。納得だ。

しかしまだ喋つてんのか? あのシリアス男子二人は。まだ屋根に居んのか?

神ノ「あつ、そうだ。クロム、明日ンんなつたら皆に言つといてくれないか?」

クロム「んあ? 何を。」

神ノ「それはなあ——」

神ノはクロムに囁き声で内容を伝えると、クロムはニカツと笑うと内容に納得した。

それから神ノは暴れているエルに拳骨で気絶させると、暴食と皆ミカを連れて家に戻って行った。

さて、その頃怠惰のベルフェゴールはタルウイを口説いていた。

怠惰「なあ、タルウイ、彼女になつてくれよ」

タル「何？人殺しの殺人鬼が被害者の友人を口説くなんて意味わかんないですけど。」  
グサグサと正論を放つタルウイだが、現在の怠惰は微量だが、酒に酔っているので心には来ていない。逆により一層しつこくなっていた。

怠惰「つせーな：マモンほど強欲じゃねーが、アスモデウスほど色欲じゃないけどよ  
：俺はお前を俺のモノにしてエんだよ。」

タル「強情だね：で？相手は怒ってるんだよ？友人二人も貴方に殺されてるの、判る？」

怠惰「判ってる：いや、判ってるつもりだった。安倍晴明に関しては本当にごめん：  
でもザリチエの件は——」

タル「判ってるよ……」

タルウイは怠惰の言っていることは理解している。怠惰が何度もタルウイに謝ろうがタルウイは許さない。なぜなら、謝ってほしいのはその話ではないのだから。

殺人のことは既に許している、怠惰の強情な告白もOKなのだが、許していないの

は怠惰のデリカシーの無さに怒っているのだ。

怠惰「なあ、何で許してくれないんだ？怒ったらせつかくの可愛い顔が台無しだろ？」  
タル「……／＼／」

何で今、顔の話をするの？今は関係ないじゃん……！

あまりにも不自然且つ、空気を読む読まない以前の話になってきている。

その場でタルウィの心を読み取って酒のつまみにしている悪趣味なさとりはなんとか二人の関係が良くならないかと強欲に相談することにした。

さとり「どうすれば良いと思いますか？」

強欲「うーん……ベルフェゴールは超絶KYにして鈍感だ。恋愛の場なら最悪なパターンだな。」

さとり「そんな……」

強欲「まだベルフェゴールには恋愛という文字は早かったか。」

そう言ってから強欲は横になっていびきをかいて寝始めてしまった。

# 第一回「邪神たちの生きる世界」杯 オリジナルキャラクター トーナーナメント戦

## 第124話 第一回戦

〈天界の闘技場 《エターナル・ザ・コロシウム》〉

強欲「レディース&ジェントルマン！それではこれから『第一回《邪神たちの生きる世界》杯 オリジナルキャラクタートーナーナメント戦』を開催します！」

周りにいる観客たちの歓声が聞こえる。

真ん中には、正方形のフィールドがあつてそこから円を描いて観客席がある。

強欲の言った通り、邪神たちの生きる世界のオリジナルキャラクターの大会だ。参加者はその中から神アイツノ が選んだ八人の人たちだ。その中に勿論、俺も参加することになつている。

嫉妬「さてつと、それじゃ早速始めて行こう——というか、まずはトーナメント戦という訳で私が二つずつくじを引いて対戦相手を決めてしまいたいと思いまゝす。」

そう言いながら取り出される青い箱、その中から対戦相手が決まるのか。

嫉妬が最初の二つの白いボールを引き抜いた。

嫉妬「ほら、読んで。」

強欲「何で俺なんだよ。まあ、読むけど……」

渡されたボールの名前を確認してから叫ぶ。

強欲「第一回戦はッ！紅風 亜無 VS 稀神 苺亜ッ！」

神司「おお、初戦から苺亜か。」

苺亜「勝つて今回も父さんを負かしてやる。」

神司「おいおい、いっお前が俺に勝った？」

苺亜「異変のときに、ね……♪」

神司「あれは勝ったとは言えないだろ……奇襲だったし。」

と苺亜や家族の皆と雑談しながらくじ引きが終わるのを待っていた。

すると強欲が一人、聞き慣れない名前を叫んだ。

強欲「第七回戦はッ！稀神 零愛 VS アベルⅡサタナキアく!!」

「アベルⅡサタナキア」……一体どんな奴なのか……さらには、我が娘の相手だ。零愛にはなんとかして頑張ってもらえない。

さて、くじ引きが全て終わった。トーナメント表はこういう感じで八人全員のくじが引かれていた。



し、殺害は禁止とする。死なない限り何でも有りだからな。」

嫉妬「次はフィールドだね。このフィールドから落ちたら即失格。落ちたらね。」

強欲「スペルカードの使用数に制限はないからな。」

嫉妬「それじゃ……始めようよ！」

強欲「そうだな。んじゃ第一回戦を始めるから参加者は準備してくれ！」

強欲の呼び掛けにより、莉亜と亜無が同時に立ち上がる。

神司「莉亜、張りきって行けよ！」

莉亜「勿論！」

レミイ「亜無、勝ちに行きなさい。」

亜無「任してください、絶対に勝ちます……！」

二人は観客席から跳んでフィールド上に着地した。

嫉妬「さて今回の実況はこの私、七つの大罪 嫉妬のレヴィアタンとツ！」

強欲「同じく七つの大罪 強欲のマモンが解説を務めるぜ、よろしくなあ！」

会場から盛大な拍手が二人に向けて起こる。会場の皆が一弾となった瞬間だった。

嫉妬「さて、今回のファーストマッチを飾るのは、紅魔館に居候をし、相手の思想を覆

す、ダウトマスター！紅風 亜く無ツ!!」

強欲「対する相手は！」

嫉妬「記憶操作はお手の物、格闘技も得意とする稀神家長男であり神司子供の一人！稀神く、苺亜ア〜!!」

強欲「両者、準備はよろしいか？」

亜無「勿論！」

苺亜「問題ない。」

強欲「では：始めッ！」

強欲の両手を上に挙げて開始の合図をする。そのタイミングで両者は距離をとった。

苺亜「哀夏『苦痛のスピリット』！」

苺亜が咆哮を放つとまずは亜無を怯ませた。その瞬間に敵の方に駆け出して腹にドロップキックを喰らわせた。それで亜無は衝撃のあまり、倒れてしまった

嫉妬「ダウン！まさかの試合開始から30秒の出来事！苺亜の咆哮があまりにも効果抜群なのかー!?!」

苺亜は倒れた亜無の横でガッツポーズをとる。

ただし、油断も束の間。亜無がゆっくりと立ち上がる。

嫉妬「おっとー！亜無のダウンは取り消しだあ！」

亜無「……」

苺亜「ハッ！効いてるな？」

亜無「…なあ、苺亜はこの場にいるのか…？」

嫉妬「え？いますよ？」

亜無「そう、か…」

立ち上がったのはいいが、いまいち亜無は状況を掴めていない様子だ。

苺亜の位置も分からずうろろしている。

サグメと我が息子の観戦をしていると光矢が俺に呼び掛けて来た

光矢「よつ、苺亜くん結構いい感じじゃねーか。」

神司「ああ、 فقط…」

光矢「この勝負は亜無が勝つてか？」

神司「…：…そうだ。」

サグメ「えええ!?何で！」

神司「見え見えだよ、だって苺亜は能力の使用数は一回で継続中なのに対して、亜無はまだ一度も能力を使用していない。」

光矢「だが、亜無の方も不利な状況だ。何が起きたのか分からないが確実に苺亜くんは亜無に何かしたな。」

苺亜「次行くぜ！怒冬『非力な断末魔』！」

苺亜が亜無を触ると宙に高く飛んでいった。

亜無（ツ！イテエし、何も見えないし：何か対処を早くしないと——そうだ。）  
飛ばされながらも身体を動かさせてスペカ宣言した。

亜無「紅無『Disappear：Lie：Scarlet』ツ!!」

嫉妬「亜無の頭から白いケモミミに背中からは悪魔のような羽根を生やした！」

光矢「へー、なるほどな。」

神司「ケモミミを生やして聴力を頼るか。そうなるか——」

星花「視覚を失いつつあるね。」

嫉妬の実況を聞かなくても、俺らの自己判断で対戦を観戦している。

後々、強欲の解説しているを大して聞かない気がする。

強欲「どうやら反撃する様子だ。」

亜無「紅劍『紅風嘘無劍』！妖刃『無限の紅い刃』！」

紅風嘘無劍を何も無い空間から創りだしてから横一文字に振ると、紅い妖気が刃の形をして苺亜の方に飛んでいった。

苺亜が避けていると、亜無大きな太刀が降ってきた。

苺亜「おわあっ!?!」

亜無「手応えなしか。」

苺亜「見えてるのか？」

亜無「正直言つて真つ暗で光さえ見えない。だから、聴力に頼ることにした。」  
ケモミミをびくびくと動かせる。

苺亜「なら、終わりにするか。喜秋『嫌悪な懺悔』。」

亜無「あつ、そつ。星符『ストライクメテオ』。」

苺亜の手首から指先まで長く黒い爪クローで亜無に掛かるが、亜無の降らせた隕石に足止めされた。

合計五つ降ってくる隕石は一つ一つが大きいため、降り終わる頃にはフィールドがポロポロになっていた。

一度砂煙で見えなくなったが、瓦礫の上に二人は立っていた。

嫉妬「マジでかよ…」

強欲「二人の意地だな、これは。」

神司「ギリギリだな…」

光矢「これで続けるのか。」

嫉妬「足場は瓦礫の上ですが大丈夫なのですか?」

強欲「だ、誰が何と言おうがこれはフィールド上だ。」

言い切つたぞ、あの墮天使。それじゃあ二人のどちらかが落ちるまで決着がつかないのではないか。

そう考えていると、苺亜が先に動いた。

苺亜「楽春『狂神卍鬼』！」

一度駆け出すと亜無のいる瓦礫のところまで一瞬に近づいた。スピード強化のスペカと言ったところだろう。

亜無「嘘符『紅き竜魔陣』」

苺亜「ちよっ——！」

神司「あつ。」

皆「え！」

まさかの亜無は自分が乗っている瓦礫をまるごとシールドで守り、苺亜を場外にさせた。

嫉妬「じよ、場外です！第一回戦の勝者は紅風 亜無でくす！」

レミイ「ナイスよく!! 亜無く!!」

客席の皆が沈黙になっている中、紅魔館の当主だけが喜んで叫んでいた。

## 第125話 第二回戦・第三回戦

嫉妬「さて！第二回戦を開催させていただきます！」

客席から歓声がとても大きくなる。

なんて言っただって今日の二人は——。

強欲「第二回戦目は邪神対決だ！まずは一人目！」

嫉妬「悪魔界、天界で知らない者はいないだろう！大悪魔邪神王の息子にして元人間を依り代に使用している邪神王！クロムヴェージュ・キラティナイド家の長男のクロムだ！」

クロム「フハハツ！崇めよ、讃える愚民！我がキラティナイド家の長男のクロムだ！」  
嫉妬「フィールド直してくれてありがとねー！」

クロム「おう！」

そう、前回の試合中に亜無がフィールドを隕石で粉々にしてしまつた為、クロムが一から直してくれたのだ。

観戦している観客に手を振るクロム。すると女性の人たちがキャーと歓声を上げる。クロムってあんなファンサービスをする奴だっけ。

夢『多分だが、この日が楽しみ過ぎて変なテンションになっているのだろう。』

神司「でしようね。」

嫉妬「さて、この邪神王を相手するのは、怠惰という堕天使に二度も仲間を殺される哀しき熱heatの邪神girl。しかし！その涙は熱によりすぐに乾く。亡き安倍晴明の式神！タルウイ!!」

タル「嫌な説明…後で蒸発させましょーか？」

嫉妬「い、いえ…御断りします…」

怠惰「頑張れよー！タルウイ！」

タル「なっ…!?あんなんかに応援されたくないわよ！」

ツンデレが出まくってるぞ、タルウイ。

ツツコミどころ満載な邪神対決になりそうでまだ試合は始まってないのに心配になつてきた。しかし、どちらも邪神と呼ばれるほどの上位クラス。派手な試合になりそうだ。

強欲「それじゃあ始めるぞ、第二回戦、レディー…：ファイト！」

始まった瞬間、クロムは破壊の力、タルウイは熱の力でお互いの拳がぶつかり、会場全体に衝撃がくる。

神司「ーッ!!」

衝撃に耐える者は耐えて、耐えきれない者は飛ばされていく。中には気絶する人も出

てきた。

神司「皆！大丈夫か?!」

星花「ギリ、ギリね……」

サグメ「私も……!」

莉亜「零愛、大丈夫か……?」

零愛「ちよつと……気持ち悪いよ……」

莉亜「父さん！零愛吐くかも!」

神司「わかった!」

ドラ「えげつな……」

シロ「まだ耐えられるけど、こんな場に馴れてないと死んじやうよ。」

シロの言う通りだ。この試合は下手すりや死人が出る。

数分拳をぶつけていた二人は一度下がって呼吸を取る。

クロム「ハッ！久しぶりだ！こんなにも熱い闘いが出来るのは!」

タル「熱いでしょ？だって熱の邪神タルウイだもん。」

クロム「面白くねえ!」

タル「同感よ!」

タルウイは『熱球』を、クロムは邪炎『ソウルフレア』を放つがどちらも相殺。ただ

し、それで攻撃が一時中断はされない。 // 相殺して煙幕を出させる”。それこそ二人の目的だ。

煙幕の中に二人は走ると、クロムがタルウイの腹を殴り、煙幕の外に吹っ飛ばした。嫉妬「タルウイが膝を付いてダウンしました！」

強欲「やつとダウンか。あの戦闘で何人の被害が出たか分かったか？」

嫉妬「はい、私の部下命標の報告によると：5300人中、1567人が気絶した状態らしいです……！」

強欲「マジか……約三割の人が気絶か……」

恐ろしい邪神たちだ。こんなにも被害が大きい闘いができるなんて……

タル「やつぱり強いや、王様は。」

クロム「もう終わりじやねーよなア、タルウイさん。」

タル「ハハハ……嘗められてるねえ……うぐっ！」

クロム「おっと、動くなよ？お前の身体の細胞を破壊したんだからな。」

あの殴った時に破壊したのか。器用な奴め。

夢『最初からあの戦法だったと我は考えるがなあ。』

神司「論破しないでくれませんか？夢司人命神様？」

まあ、論破されるのもしようがないだろう。

試合に戻ると、タルウィは溶けてきていた。

あつ、あの技は……

嫉妬「タルウィの身体が溶けてきていますがどういう状況なんです？」

強欲「あれはタルウィの特性だ。タルウィ自身は液化化できるからな。」

クロム「なるほど、それで破壊された細胞を治すと。」

タル「それはどうかな……！猫舌『赤い口』。」

亜無「そこで使うか。」

タルウィはフィールド上に溶けて熱されたフライパンの如くアツアツにした。

熱すぎて跳び跳ねるクロム。ここでタルウィは上半身だけつくと次の弾幕と繋げ

る。

タル「熱球懐『破裂熱』！」

両手に熱球を出すとそれらを潰して弾幕を放つ。

クロムは焦りながらも空中に飛んで、自由自在に飛び回り回避した。

上手いこと避けるクロムに対し、ちよつと短気なタルウィは一回も当たらないので苛

立ち始めていた。

嫉妬「さあ！何でも有りになってきましたこの試合！どちらの邪神が勝者になるのか

?!」

クロム「何でも有りだろうがしつかりした弾幕ごっこで行かせてもらうぜ！邪砲『プリズムブラスト』

オ！」

フィールドに向けて手を伸ばすと、そこから一直線の弾幕を放った。

フィールドごと飲み込んだタルウイは避ける暇もなく受けて元の姿に戻ってしまった。

タル「痛すぎ…流石は王様だね…」

クロム「そろそろリタイアしないのか？」

タル「するも何も、私のことを好いている人が応援してくれているからね。降参するつもりはないよ。」

クロム「そうか、なら早めにダウンをしてもらおうか！『兆本刃』！」

タル「熱液『フロムスレイヤー』！」

数兆本もの刃が飛ばされる中、一人で二本の腕を動かして刃を溶かし続ける。しかし、数兆本の刃を一人で処理するのは至難の技だ。

嫉妬「エグい数の刃がタルウイを襲い掛かる！その数を一本一本処理し続けるタルウイ！あー！体に何本か貫通したア！」

強欲「自身の身体を液状にしているから体に刺さることはないだろうが——」

怠惰「——痛いだろうな……」

タルウイが死闘を怠惰は観戦するしかない。本当はクロムを殴りに行きたいのを我慢している。愛してるタルウイが痛い目にあう姿が怠惰も苦痛なのだ。

体は貫通しても服は違う。服はいつも彼女が選んで着ている。決して彼女の熱で作っているわけではない。

やっと、刃の雨が終わつたと落ち着くと、邪神王は再び『兆本刃』というスペルカードを宣言する。タルウイは絶望した。

クロムが刃を降り続けて20分後、タルウイの服はポロポロになり、袖は既に無くなっていた。

タル「はあ……はあ……」

クロム「トドメだ。邪砲『プリズムブラスト』……楽になりなア!!」

タル「ツ……!!だが、断る!『熱球』!」

熱球と相殺する考えだったのだろうが、タルウイの魔力はもう無いに等しいのか、相殺ができず一直線の弾幕を喰らい気絶してしまった。

嫉妬「勝負あり!第二回戦の勝者はクロムヴェージュ・キラティナイド!」

クロム「お疲れさん。」

怠惰「タルウイ!」

試合が終わった瞬間、怠惰は気絶したタルウイの元に駆けていった。ゆさゆさと揺らしてどうにか起こそうとしていた。

怠惰「タルウイ！タルウイ！！」

タル「……もう、ゆっくり休ませてよ……」

怠惰「タルウイ！……うわっぷっ。」

怠惰がタルウイに抱きつこうとしたがタルウイはサツと避けた。

タル「たくっ、何してんだか。ほら、立ちなよ。」

怠惰「あー、はいっっ！」

タルウイが怠惰に手を差し伸べると、タルウイが腕を引つ張り、接吻をした。

怠惰「……え？」

タル「相変わらず鈍感墮天使……」

怠惰「うん?!」

タル「なぐんにもないっ！」

怠惰「鈍感墮天使にも教えてくれよ。」

タル「聞こえてんじゃん！」

あの野郎、勝ったのはクロムなのに一番幸せな感じになりやがって。でも次は怠惰、お前なんだぞ。

嫉妬「さあ！このまま第三回戦行きましょーう！」

神司は怠惰が優勢になると思っていた。だが、神司の予想は遥かに越えていた。

強欲「続いて第三回戦！今度は七つの大罪バトルだ！」

嫉妬「出来たばっかりの彼女とイチャイチャするため?!否!!主の姉を生き返らせるため?!否!!ならばなぜ怠惰になる!!怠けて適当に生きる死神の墮天使！怠惰 ベルフェゴールツ!!」

怠惰「なかなか面白い説明だな。タルウイの仇か：興味ねえな！」

暴食「さつきイチャ付いてたのにな？」

嫉妬「さあ！上空から邪気を纏って現れたのは、後書き班レギュラーにして蠅の王！自称か神ノ邪神の独断かは分からないが、神ノ邪神の相棒とされる極度なコミュ症悪魔！暴食 ベルゼブブ！」

暴食「まあ、間違っていないから良いけど。」

怠惰「イチャ付きは別に良いじゃねーかよ。だがな！好きな人が敗れたからって仇を取る理由にはならねーんだよ！」

暴食「嗚呼、そうかい！強欲くん、もう始めちゃって良いよ！」

怠惰「いや、早く始めろ！」

強欲「わーったよ、レディー……ファイトツ！」

始まってから暴食は蠅の大群を飛ばして、怠惰は魔術書鎌を扱って接近戦に持ち込む。

暴食「蠅たち、剣になれ。魔剣『蠅インセクト・デイオウオロスの魔王』。」

怠惰の魔術書鎌を受け止めると魔剣を操って押し返した。

嫉妬「怠惰の鎌を押し返した、嘘ーッ!!」

暴食「黙れ、嫉妬。」

暴食はまさかの実況席にいる嫉妬に向けて魔剣を放った。

まさかの事態に実況席だけでなく観客席もざわつき始める。

神司「暴食！嫉妬は実況なんだ！だから現状報告してるんだよ！」

暴食「…ふくん、まあ、でも。こんな不意打ちを避けるなんて、落ちてないね！嫉妬

♪

嫉妬「うるさい！でもありがと！」

まさか、あのコミュ症の暴食が大胆なことをするとは。

嫉妬の後ろの壁に刺さった魔剣を抜くと、自分の右に付けた。

怠惰「一つショーをしているのか？」

暴食「大丈夫…落ち着いて…：…よし、試合を楽しもう！ベルフェゴール！」

怠惰「質問に答えろよ！」

大振りです暴食に斬り付けようとすると、避けずに刃を掴んだ。

暴食「覚えてないの？ 僕の能力は、『腐食させる程度の能力』。そんな刃なんて痛いだけさ。」

痛いのかよ！

ツツコミたいところだが、試合に集中しているのでツツコめない。遂には、魔術書鎌の刃が腐食して折れてしまった。

やりやがった…！ 刃を腐食させるなんて恐ろしい能力を…

腐食は進んで魔術書鎌全体を腐食していた。なので怠惰は思わず手離してしまった。

怠惰（マズいな…俺のスペルカードはほぼ鎌を使うスペルばかりだから不良だなあ。）

怠惰が暴食の攻撃に避け続けている姿を観ていると、さとりがこっちに向かって歩いてきた。

さとり「怠惰さん負けそうですね。」

神司「負けねえよ。アイツは…怠惰、だから…なあ…」

怠惰だから勝つてくれる感じがしない。勝ち負け関係なしで闘ってそうだ。

怠惰「斬伸『大魔法書×異次元大鎌×』！」

暴食「意味ないよ…痛っ…！」

暴食の周りから何枚もの鎌の刃が飛んできて攻撃する。暴食は避けたり掴んで腐食させて回避するが、一枚の刃が暴食の足を斬り付ける。

怠惰「『刈り憂怒』！」

これをチャンスと気に直ぐ様、魔術書グリモアールを開いて魔術書鎌を取り出して暴食に斬撃を喰らわそうとするが、蠅たちが壁となり斬撃の勢いを弱くさせて暴食には致命傷と言える傷は当てられなかった。

暴食「怠惰、蠅さんたちを舐めないでもらいたいね。」

一度、技を変えてしまったので飛んでくる鎌の刃が止まってしまった。

暴食「で、どうするの？もう終わり？」

怠惰「……………手の内がねえよ。今回は相手との相性が悪かった。降参する。」

唐突な怠惰の降参宣言で観客席の人たちがざわつき始める。

嫉妬「えー、試合を観戦している皆様、落ち着いてください。怠惰 ベルフェゴールが降参するということで第三回戦の勝者は暴食 ベルゼブブです！」

流石に怠惰が降参すると考えていた人は何人か居ただろう。それにしてもそんな簡単に降参するものだろうか。

## 第126話 第四回戦

強欲「さあ！今回は第四回戦目は、瞬き厳禁だ！」

嫉妬「光を操りし文字通り光速！紅魔館の執事長といえはこの人！八剣 光矢ア!!」

光矢「勝つ、でも…相手は神様なんだよな……」

フラン「頑張つてね〜！光矢！」

レミイ「ちよつ、危ないわよ！」

観客席から上半身を乗り上げるフラン。それに応えるかのように手を挙げる光矢。

観客席の人たちが盛り上がった。

嫉妬「続いて入場するのは、最高神 ミカエルの片割れである光と闇の【闇】の方、神

様だが、思考は悪魔！エ〜ルツ!!」

エル「あんたが相手か。文字通り秒速で倒してやるよ。」

光矢「安心しろよ、全部避けてやるから任せとくれよ。」

お互い煽りまくつて話す。早く始めてくれ、解説強欲さん……。

俺の心の声に応えるように強欲がフィールドに降りた。

強欲「まあまあ、煽り合いじゃキリがねえからさ…試合で終わらそうぜ？」

光矢「そうだな、けりをつけてやる。」

エル「そのセリフ、そのまんま返してやるよ。」

強欲「準備は良さそうだな。そんなじゃ、レディー…ファイトツ！」

やつと始まった。しかし二人は動かない。まるでこの場の時が止まった感覚に襲われた。

光矢「じゃあ、動くか——！」

最初に動いたと思われる光矢が立っていた場所から急に消えた。しかし消えたのではなく、エルの後ろに光速で移動したのだ。

エル「いつの間に…！」

光矢「喰らいな…!!」

エルが振り向いたと同時に光矢は矢を構えていた。そして、矢を放った。

光矢の光で作った矢をエルに向けて打った筈がエルの体は矢がすり抜けていた。

嫉妬「一体全体どういうことなのか!?!エルの体に矢がすり抜けたア！」

強欲「よく見ろ実況!あれはエルじゃねえ！」

嫉妬「え?どういうことですか？」

強欲の言葉を聞いてハッと気づく。エルの体が若干揺らめいて見えた。まさか…いや、勘違いではない。あれを作れるとは……

強欲「なら解説だからな、してやるよ。あれはエルが作った炎の残像、つまり——！」

強欲・夢『「——陽炎か。」<sup>だ</sup>』

強欲と夢の声が重なって聞こえた。するとエルがワツハツハと言って笑い出した。

エル「ご名答だ、強欲のマモン！俺の能力、『黒炎を操る程度の能力』が陽炎を作り出したのさ！」

光矢「チツ、当たったのに。」

エル「当たっても効かなければ同じだぞ。例えば、炎陣『フレアサークル』。」

光矢を中心としてから半径1mに炎が円になって燃え始めた。

エル「触れば熱いが、触らなければ安心だろう？」

光矢「そーだな、上が筒抜けだもんな。」

光矢が筒抜けの上に乗ると、炎が上を蓋した。

光矢「なあ!？」

エル「しかし技というものは磨けば恐ろしい能力になる。それも操作<sup>コントロール</sup>できる程にな。」

『蓋した』ということは、光矢は炎に閉じ込められたということ。

光矢「うーん、どうすつかな……ゲホツ、ゲホツ……なんだあ……息苦しい……うう……」

火災が起きた時と同じだ。火災の時に煙をすると肺が火傷をして息ができなくなる。

つまり―死に至る。

嫉妬「現在、光矢はエルの炎によって密室空間に飲み込まれて状態です！」

強欲「恐ろしい能力の使い手だ。まさか、一酸化炭素中毒を引き起こそうするなんて。」

嫉妬「光矢、大ピンチです！」

光矢（……死ぬかな、俺……いや、なら）『光速』！

足に光を付けて炎の外に駆け出す。少々火傷を負ったが、脱け出すことはできた。

光矢「はあ……はあ……」

嫉妬「光矢がああ炎の空間から突破することに成功！観客の皆さんを含めて私もハラハラしましたよ！」

光矢「なあ……エルさんよお、俺を殺す気だったろ？」

エル「死ぬギリギリのところ助けるつもりだったんだか？」

光矢「ああ、そうかい！光符『ライトニングスパーク』ッ！」

右手を前に出して一直線の光の弾幕がエルの方向に飛んでいった。

紅霧異変の時とは遥かに強い弾幕だとわかる。

光の弾幕はエルに被弾して砂煙が起きた。

光矢「……化け物めが……!!」

エル「もう終わりか？」

砂煙が晴れると、エルは謎の剣を持って平然と立っていた。

嫉妬「まさかの無傷！あの弾幕を受けて尚、エルは無傷です！」

強欲「あの剣は見たことが一度もないな。」

エル「黒炎剣『しゅくえんのつるぎダーク・ブレイド』。俺の能力を活用して作った剣だ。さらにこの剣は、黒炎を纏うと攻撃力が増す。」

光矢「そうかよ、光符『ライトニングアロー』！」

複数の光の矢をエルに乱射するが、エルは陽炎を巧みに扱い避けまくる。

嫉妬「エル、大量の光の矢を避ける避ける！」

強欲「しかし、あの光速な矢を見切れるとはな……！」

それもそうだ。光矢は紅霧異変よりも遥かに強くなっているのだから。

だが、そのような強化した光矢の矢をエルは易々と避けている。光矢の言う通りエルは化け物だ。

光矢の技が終わると、エルは光矢の所まで一気に近づいてダーク・ブレイドで光矢を斬り付けた。

光矢「っ！」

エル「……よつと！」

光矢「うわあ！」

エルは光矢の足を蹴って転ばせてその上に座る。  
そして一つため息を付く。

エル「はあ……」

嫉妬「強い、強すぎるぞ！エル！流石は最高神のミカエルだ！」

強欲「戦闘慣れをしているからか、剣の扱い方が上手だ。」

エル「執事長がこんなんじや、館の主は頼りなさそうに思ってるだろうな。」

光矢「そんなことない！」

光矢「そうかあ？ならその主は見る目無しだな。さらには主の目は相当節穴のようだなあ。雑魚だな雑魚。雑魚の執事長に雑魚の主か！雑魚の紅魔館、略して、雑魚う魔館だな！ハッハッハ!!」

光矢「……黙れ……!」

エル「あ、あ、ん、?」

光矢「黙れって言つてんだよ！」

この時、光矢の何かが壊れる音が光矢は察知した。

光矢の声に驚いたエルは少し力が緩んだので、体を光で纏わせて脱け出した。

光矢「もう許さねえよ。」

右手を拳銃のような形にしてエルに打った。エルは避けたが観客席の下の壁を貫通

して何処かに飛んでいった。光矢はその光弾を何発も打つがエルは避ける。

エル「そんなもんかあ?!」

光矢「……知ってるか? 光の速度は。」

エル「真空中では光速約30万kmだ。」

光矢「なら判るよな?」

エル「……はっ!」

光矢が上に指を向けるとそこには何十発もの光の矢が空中にぐるぐると回っていた。

まさかあの数って……!

夢『光矢の奴が放った物だろう。』

嫉妬「何ですか……あれ……!」

強欲「光速約30万kmの矢を撃っていたのが帰ってきたのか、もしくはあの溜まっていたところから撃っていたか。」

光矢「これはお前が避けた矢の数だ。」

エル「なっ!?!」

まさに強欲の言う通り、帰ってきたのだ。

光矢「無駄だよな? お前が避けたから時間が無駄になったんだよな? なら受ける、紅魔館を侮辱した罪をなあ! 光神『ライジン・ザ・ブラスト』……!」

エルの方向に手を向けると何十発ものの光の矢がエルを襲った。

光の矢が終わるとエルは気絶していた。

嫉妬「勝負有りです！流石のミカエルの闇も避けることは出来なかった！勝者は八剣光矢!!」

## 第127話 第五回戦

強欲「さあ！予選もとうとう、折り返しだ！第五回戦だア！まずはこの人！」

嫉妬「キラテイナイド家の血が繋がっており、神司の従者の一人！マレット人と

大悪魔邪神王の娘キラテイナイドとの混血の妹！シロフォン・マレット、通称 シロオ！」

シロ「マスター！お兄ちゃん！そしてみんなー！応援ヨロシクねー！！」

強欲「続いては？」

嫉妬「怪しげに笑うのは、墮天使の蘇生により屍として生まれ変わっても弟のためなら全力で手助けする正義の姉！稀神 星花ア！！」

星花「シロちゃんだからって容赦はしないよ。」

ついに来た、家族対決。この試合が俺は楽しみにしていた。何てたって、姉ちゃんとシロの試合なのだから。

強欲「さてと、始めるz……」

嫉妬「待つて！今回だけは私がしたい！」

強欲「始めの合図をか？」

嫉妬「うん！」

強欲「……ならわかった。もともと役は違うんだから今日だけな。」

嫉妬「やった。」

静かにガッツポーズを取る嫉妬。

おいおい、しつかりしてくれよ。

さて、嫉妬がフィールド内に下りると二人に声を掛けた。

嫉妬「よし、二人とも良さそうだね。それでは第四回戦、よーい……始めっ！」

シロ「水槍『アクアグングニル』！やあ！」

星花「水槍すいそうだね、ならば、薔薇符『ローズ・ア・ソーン』。」

シロの投げた水槍を大きな薔薇の棘で相殺した。姉ちゃんは次の一手をシロに向かって放った。

星花「連続攻撃行くよ！樹木『セル・リーフ』！」

シロ「嘘っ！」

空気中から蔦が伸びてシロの身体を拘束する。

さらに先程の薔薇符『ローズ・ア・ソーン』でシロに近距離で攻撃するが、シロの体の周りから風が吹いて蔦を切り、ギリギリのところまで回避した。

シロ「危なあっ！」

星花「惜しかったか……」

シロ「『惜しかったか…』じゃないよ！危な過ぎるよ！」

星花「それで？」

シロ「え？」

星花「危なくない死闘なんて無いんだよ…！花喰『モンスター・ザ・フラワー』」

シロ「ヒイ…!!」

フィールドを破壊して出てきたのは、大きな口の食虫植物だった。

ただただ気持ち悪い。口から出てきた触手がシロを再び拘束した。

シロ「また!?っ！気持ち悪い…！」

嫉妬「ナニコレ!?食虫植物…?？」

強欲「すまないな、読者様。邪神世界本作邪神たちの生きる世界を略して、邪神世界はRじゃんせかい—

18じゃないからな。」

良いのか、メタイ話になってしまっているじゃないか。

シロ「は、『ハリケーン』！」

風を体に纏って触手を千切ろうとするが、なかなか切れない。

星花「不死の体を見て一つ、試したい事があるね…斬ったり刺したりしても死なな

いのなら、丸ごと食べたらどうなるかなあ、と思ってるね…♪」

シロ「ヒイ…いや、嫌だ…！」

星花（トドメかな…）じゃあ、お休み。」

シロ「嫌だああああ!!!」

星花「……ッ！」

シロの体が光ると漆黒の闇に包まれた。その闇で触手が燃え尽きた。

嫉妬「シロの拒否する声に反応する謎の闇の力。どういうことですか？」

強欲「おそらく、キラティナイドの血があるからだろう。」

嫉妬「え？」

強欲「分からないか…ならな、マレット家は元々キラティナイドの家系なんだよ。もう分かるだろう？」

星花「予想外だ、あんな力を隠してたなんて…」

あーこれは、間違いなく姉ちゃんの負けだ。

あの食虫植物をフィールド内に生やしたまでは良かった。しかしキラティナイドの血が流れてるまでは理解していなかったようだ。

でも嫉妬の紹介で言ってたよな。

シロ「ねえ、星花ア…避けてね……」

星花「え——ッ!?!」

急に竜巻に飲み込まれる姉ちゃん。シロが何かしたのは判るが、シロが何かした動作

はない。

姉ちゃんが何とか脱出を試みるが、シロが二体の水の龍を作り出して竜巻に紛れた。一体は竜巻の逆周りに動いて、もう一体は竜巻の上から侵入して何回も姉ちゃんを喰っては上に行き、竜巻に捨てる動きを繰り返していた。

星花「あがつ！……うう！」

嫉妬「さあ！シロの逆襲が始まった〜！この龍と竜巻はいつまで続くのか!？」

強欲「……そろそろ溺れるな。」

シロ「……解除。」

長い時間、シロの水と風で弄ばれた姉ちゃんはフィールド内に捨てられて解放された。

星花「はあ……はあ……」

シロ「……だから避けてって言ったのに。あと、これで私のは終わったけど、下を見てみなよ。」

星花「……はっ！」

下にあつたのは、姉ちゃん本人がシロのことを攻撃するために出した食虫植物の触手の床だった。

姉ちゃんの血の気が引く。姉ちゃんがこの場から逃げようとするが、触手が姉ちゃん

の体に纏まり付く。シロは既に空中にいるので姉ちゃんをただ眺めている。

星花「助けて…シロちゃん…!!」

シロ「私の絶望を思う存分味わってね…」

星花「ああああ…」

姉ちゃんは食虫植物に呑み込まれた。

もうシロの勝ちだろ。

嫉妬「…はっ！勝負あり！星花の自滅により、シロの勝ちです！」

ドラ「シロく！星花さんを助けてやれく！」

シロ「そうだね、勝ったし。」

シロは天叢雲剣を抜刀すると、食虫植物に巨大な旋風で破壊した。

すると食虫植物は枯れていき、服の所々が溶けている姉ちゃんが倒れて出てきた。

シロ「星花、大丈夫…じゃないよね…?」

シロが駆け寄ると、わんわんと泣く姉ちゃんの姿があった。

星花「ぐすつ、もういやだあ、何でなの…」

あの冷静な姉ちゃんが泣き崩れている。

驚き過ぎて硬直してしまった。

神司「ね、姉ちゃん…?」

星花「うう…負けたの？私…」

シロ「うん…」

星花「そつか。なら、おめでとうシロちゃん！」

ゆつくりと立ち上がるって頬笑む姉ちゃん。シロは泣いて姉ちゃんに抱きついた。



自分のコロシアムの外で星花は誰かを探していた。

今日の試合は終了。明日が第六試合目。家に帰る客の中から探すのは大変だけど、これは異変に近い。

だが、見つけた。

星花「やっと見つけた、今回の試合の首謀者。」

神ノ「俺！」

星花「そうだけど、他に誰がいる？」

神ノ「いやいや、いるくない？ミカエルとか——」

星花「精神異変後の宴会に邪神王 クロムに何を伝えた？」

神ノ「…！ああ、それは『コロシアムを始めるから楽しみにしている』って伝えた

ただだよ。」

嘘だろう。あー、亜無を連れて来れば良かった。

星花「それなら何で覚醒している人たちが増えているの？」

神ノ「実力でしょ？俺は関係無いよ。」

星花「そうだね、でも光矢の能力覚醒、暴食の悪魔本能やクロムの変なテンションのゴリ押し。最後にシロちゃんやんのキラティナイドの血の覚醒。おかしなことばかりのついでにその事が起こる前に薄暗い幕が張られるんだよね、それで、その気と同じ気を見つけた。それが貴方だ、神ノ邪神。」

神ノ「……………」

どうだ、ここまで見抜ければ白状するだろう。

しかし、彼女が考えていることとは予想は大きく外れた。

神ノ「で？」

星花「——え？」

神ノ「それで当たってどうする。だから何だったんだ、俺には関係ないと言ったばかりだ。あとなー、忙しいんだよ俺は。」

星花「ちよっ、待って！」

そのまま立ち去ろうとする神ノを呼び止める。

神ノ「…何?」

星花「まだこの考えの返答を貰ってないのだけど…!」

神ノ「ああ、面白い考察を有難う。でも答えはもう少しで辿り着けるだろう。何故この大会が開催されたか、をね。そだ、今日は面白い考察を話してくれたお礼として一つ教えよう。」

星花「何をだい…?」

神ノ「『今夜の月も頭がおかしい』。それと、これは弟に伝えてくれ。『今の内に強くなつとけ』とね。星花、これは未来の話だ。くれぐれも気をつけて。」

星花「…分かった…」

## 第128話 第六回戦

強欲「第六戦はこのバトル！」

嫉妬「邪神王の器にし、二児の父親！アイツに相応しい性格はそう、『鈍感』！また相応しい名は、『刃の化身』！姉を殺され幻想郷の異変を止めし、謎に体が縮んでしまった幼き邪神世界の主人公！稀神 神司イイ!!」

何か変なこと言われたが聞き間違いだろう。

魔理沙「頑張れ、幼き鈍感男！」

神司「うっさい！」

聞き間違いではなかった。

嫉妬「続いては、又もやキラティナイドと獣人の血すじで兄貴の方！雷と炎の使い手で付けられた名は、『雷炎神獣』！相手の神司従者、ドラ・マレットオ！」

強欲「まさかの予選で主とぶつかるとはな、誰が予想したか。」

神司「やつとだな、ドラ。」

ドラ「ええ、つていうか、初めてじゃないですか？神司様と俺が戦うなんて。」

神司「そういえばそうだな……」

ドラとシロを拾<sup>貰</sup>つてから一度を刀を交えたことがなかったな。なら、本気で戦おうか。

神司「そうだ、縛りしないか？」

ドラ「縛り？」

神司「そう縛り。刀技だけの縛りをしない？」

ドラ「なるほど……それじゃあ判りました。ならその縛りで構いませんよ。」

神司「よしっ！OKだ、嫉妬待たせたな、始めて良いぜ！」

嫉妬「はい、では刀技縛りの第六戦を始めさせていただきます。」

強欲「そんじゃあ武士道という訳で……いざ尋常に、勝負を開始する！」

神司「邪刀『鬼神斬』ッ！」

ドラ「ッ！」

刀技……つまり、剣術や斬撃も有りだ。

桜色の斬撃を放ち、ドラは足に雷を付けて回避する。続けてドラは雷炎に雷の付与を付けて斬り付けてきた。俺も邪気を邪桜剣に纏わせて防ぐ。

雷の付与と邪気が勢いよくぶつかり黒色と黄色の気が弾ける。それから一度引く。なかなか剣術だが、まだ追いつける。

ドラ「追いつきますか……！」

神司「馴れてきてるからな、光の能力者でな。」

ドラ「そーですか……！」

雷炎を動かす毎に爆発が起きて俺に斬り掛かる。

ドラ「爆雷『エクスプロージョン×サンダーボルト雷 迅 爆 発』！」

神司「うわあ！何ソレ!？」

大きな爆発音に驚き、反応速度が鈍り、被弾してしまった。

避けれた筈の攻撃を受けて倒れる。しかし、額に傷を負ってしまったがまだ浅い。動ける。

嫉妬「何とか立ち上がる神司！さらに反撃を開始したく……！」

強欲「しかし、あのドラの技には驚いたな。」

嫉妬「ねー、あんなになるかな？爆発音。」

強欲「本当に刀なのか疑問だな。」

嫉妬「直したのあんなでしよ……？」

苦笑いで対応する嫉妬。でも今は実況とかの声は関係ない。

しつつかし、こうしてドラと刀を交えるのは楽しいな。

神司「桜符『風舞桜』……！」

リズムよくステップを踏んでいき、大きく邪桜剣を振ると、大きな桃色の風を引き起こした。するとドラは何を考えたのか風の中に向かって走り出した。

ドラ「雷迅『建御雷』」

入ったと思ったら、すぐに風の中から飛び出してきた。しかも、雷の様な動きで攻撃を仕掛けてきた。

神司「ッ！」

邪桜剣の身幅を使って攻撃を止める。

神司「うぐぐ……！」

ずっと受けの時間が続く。このままでは罅が明かない。ならば、近距離攻撃で行くでしょう。

神司「邪剣『ソウルフレア』！」

ドラ「ヤバッー！」

邪桜剣に邪気を纏わせてから近距離で放つ。ドラは避けれずにフィールドギリギリまで飛ばされて止まる。

まだ耐えられるか。流石は俺の従者だ。でもまだ俺は素早さ強化をしていない。

神司「『悪魔化』！」

背中から悪魔の様な羽根を生やせて後ろの服を破く。ちび神司だからか羽根もその

サイズになつてしまった。

神司「ちよつと小さいかなー…でも、素早さ強化はしてるだろ…！」

一度駆け出すと、一瞬でドラの前まで走れた。

ドラ「ッ！」

神司「受けてみな！この速さを！神撃『一撃一閃』ッ！」

後ろは場外、受けても翔ばされて場外。どつちにしても場外になる選択ドラがとつた行動は――

ドラ「よっ！」

神司「なっ!？」

下や左右に避けるのではなくまさかの上に跳んで避けたのだ。

気づくとドラが俺の後ろに立って形勢が逆転してしまつていた。

ドラの爪先には、雷雷が飛び散つていた。

なるほどな…それで高く跳んで避けた訳か…！

ドラ「『雷陣炎武』！」

神司「ッ！」

雷炎に雷を炎を纏わせて一気に詰めて首に雷炎を当ててきた。

ドラ「チエックメイトです……！」

嫉妬「あくつと！首に雷炎を当て、絶体絶命の大ピンチの神司！」

強欲「さあ……どこから切り抜けるんだ？！」

神司「……さて、それはどうかな？！」

俺が絶体絶命の大ピンチ……ハッターリだ。あと二、三步でフィールド外だ。しかし、俺は悪魔この姿よりも強力な生物になれる。

ドラ「ハッターリ、ですよ？このままの状態で逃げることは不可能です。」

神司「そうか？」

俺は上に両手を挙げてからスペルカード宣言をした。

神司『『吸血鬼化』』トランスヴァンパイア

軽くジャンプすると簡単に10mの高さに跳べた。

さて何故、『悪魔化』よりも『吸血鬼化』の方が優れていると俺が判断するのか。

確かに吸血鬼は日光や流水、銀のナイフに弱い。だが、その代わり悪魔より吸血鬼の方がスピード遙かに速い。さらに動体視力、攻撃力増加、部分再生、蝙蝠変化……等々と得ることが多い。

幸い、このコロシウムには屋根がある。窓とかもあつて光が差しているが直射日光は

ないので大丈夫だ。

嫉妬「何が：起きたんですか：!？」

強欲「わからない：でも『吸血鬼化』……吸血鬼になったのか：？」

神司「鋭いね、強欲。ほおは、ひいははふへほ？」

吸血するためにある犬歯を見せつける。

ドラ「まさかですね：面白い！ならば雷と吸血鬼、どちらが速いか決めますか！最後のスペルカードで！」

神司「……いいな？避けるのは無しだぞ？」

ドラ「当たり前です。それじゃあ——」

ドラが今まで見たことのないフォームをとる。

炎と雷がうねっている雷炎を前に出して、鞘を地面に向けながら左手で持っている。

足は右を後ろに、左は前にしゃがんでいる。

何なんだ、あの構えは……！

ドラ「まだですか？神司様……？」

神司「ッ！」

考えることは無い。俺はドラを倒すのだ。

あれがドラの本気なら、俺もそれ相当の技を繰り出す。

神司「——良いぜ……」

神・ド「……………!!」

神司「第肆人格『夜神銀河』!」

ドラ「雷迅炎獣『永炎雷華』!」

一回一回雷で移動しては炎が発つ動きでドラは斬りつけてきた。

俺は邪桜剣を一度鞘に片付けてから斬りつけた。

それで二人は同時に斬りつけた。

神司「……………ツ!!」

ドラ「……………何、で…?」

ドラが倒れて神司は斬られて血を横腹から垂らしながら膝を付く。しかし、神司の勝ちだ。

嫉妬「勝負有り!第六戦目の勝者は神司の勝ちです!」

星花「……………まだ言わないでおこう……」

弟の勝った姿を静かに眺める星花だった。

## 第129話 第七回戦

嫉妬「それじゃあ、始めるよ！第七回戦目をね！」

今回の試合は我が娘だ。しかし相手の正体は不明のアベル。聞いたこともない名前だからこそ、注意深く観戦しよう。後の対戦相手になるかもしれないからでもある。

嫉妬「さて！まずは：邪神世界の主人公の娘にして何でも切り裂く程度の能力と悪魔の羽根を持つ心優しき悪魔！稀神兄妹の妹の方、稀神 零愛ッ！」

苺亜「頑張れよ！零愛！」

シロ「知らない奴なんて切り刻んでしまえー！」

いや、殺しちやったらダメなんだよなあ。

呑気な話や応援をしていると恐ろしく大きな殺気がこの場を包んだ。

嫉妬「つ、続きましては……！人とは言えぬこの殺気。コイツは一体、人間なのか……!? 誰も知る筈のない謎多き人物！アベル・サタナキア！」

何なんだ……！コイツは本当に……！

黒い髪に右目は青色、左目が赤色の背中には長刀をかけている。

零愛の前まで歩いて来ると自分よりも小さい零愛を見下ろした。

アベル「……」

零愛「……誰かに洗脳されているの……?」

アベル「……俺が?ンな訳ねーよ。ただただ今回は……こういう設定なんだよ。」

零愛「こういう設定……?」

強欲「お取り込み中のところスマナイが、試合を始めるぞ……あとアベルとやら、殺しは禁止だ。」

強欲の始めがなしで既に手刀を零愛の首もとに当てていた。

するとアベルはへらへらと笑いだし、両手を上に挙げた。

アベル「冗談冗談、分かっているって殺し厳禁だつてね……♪」

零愛（気づかなかった……）

ほんと、強欲さんが言わなかったら私、死んでたかも。

強欲「そんじゃあ、殺し無しの七試合を、よーい……始めッ!」

零愛「先手必——あぶっ!」

先手必勝だと言って短刀二本を逆さ持ちして駆け出した零愛だったが、アベルに顔を掴まれて地面に叩き付けた。

零愛「うぐうっ!!」

アベル「邪炎『ソウルフレア』。」

零愛「うぶううう!!?」

神司「っ——!!」

顔を掴んでまま黒炎を放った。それを直視してしまった俺は怒りが溢れ出してしまつて観客席から下りようとする、姉ちゃんが俺の腕を掴んだ。

神司「離せ、姉ちゃん。」

星花「ごめん…今は無理……」

神司「何でだよ！」

星花「……強欲が言つてたじゃん、『殺しは禁止』だつて……」

俺はハツと我に返つてから強欲の方を見ると、紅葉姫を持ち構えていた。いつでも零愛を助けに入れるようにと。

零愛「うう…零式『蒼柳』！」

アベル「っ！」

アベルを蹴り飛ばしてから綺麗な蒼が渦巻きを巻いてアベルを切り裂く。

零愛「血は止まらないからね。」

アベル「あつそお、ならさア、俺が出血死する前にテメエを倒しやあ勝ちなんだなあ？」

邪気が増す。背中にかけている長刀を抜刀すると、長い黒刀だった。

アベル「晃雅宗こうがそう。しつかりと受けろよ、零愛！」

零愛「ッ！」

ニヤニヤと笑いながら長い刃を零愛に向けて振り回す。

何とかして短刀を×のようにして攻撃を受け止める。

アベル「ははっ、受け止めるかア！第一人格『邪神斬り』イ！」

零愛「ッ！」

神司「なっ!？」

クロム「はっ！なるほどな！」

アベルの晃雅宗から邪炎が立ち上ぼり威力を上げた。零愛は無理だと察知し横に一

先ず逃げた。

それにしてもだ。アベルが使用したスペルカードは“人格技”だ。昔、クロムが言っ

ていた。人格技を使う奴は一人しか知らないと…。

神司「アイツ…!神ノか!？」

夢『彼奴が神ノ邪神というお主の師なのか?』

神司「ああ…」

夢『しかし、聞いたのとは全然、性格が違うが…さらには、お主の記憶の顔が一致せぬ。』

神司「そうなんだよ、だから俺も驚いているんだ。」

嫉妬「あの人格技って……！」

強欲「ああ、間違いなく神ノ邪神だ。」

実況席からマイクが強欲と嫉妬の声を拾い、観客席に流される。

すると神ノを知っている観客たちがざわつき始めた。

この場には幻想郷の住人の他に悪魔が色々と観に来ていた。

あの神ノの性格と殺気が漏れている姿は夢の言う通り記憶と一致しない。だが一つあるとすれば、月での戦闘だ。その時の神ノは現在の神ノと似ている。

アベル「よく逃げれたなあ。」

零愛「どうせ、今のままだと押し負けるから。」

アベル「ざっくり行けばなあ。」

アベルは戦闘体制を解くと自己紹介と一つ宣言を放った。

アベル「俺は神ノ邪神！昔の名前がアベル・サタナキアだからそう名乗った。分かっていると思うが、俺は戦い好きだ。だから……零愛が子どもだろうと本気で倒す！」

観客席から歓声と拍手が喝采し始めた。

何だ、この喝采は。まるで零愛が悪役で正義の神ノ邪神が悪役を成敗する場所なのか

……？ここは。

神ノに対して怒りを覚える。いつもはアイツのノリだが、今回ばかりは違う。こんなクズが正義だと？肩書きも大概にしろ。

神司「ふざけるな……！」

声を発すると、周りの観客たちが俺のことを睨み始めた。

「無視していこう」と思っていた。だが、この会話で怒りが頂点に達した。

悪魔「それにしても、殴ったり蹴ったり斬ったりとしてるが全然死なないな、あの雑魚ガキ悪魔。」

悪魔「あんな甘えん坊のガキンチョなんて神ノ邪神様なら、いとも簡単に殺せるだろう？」

悪魔「遊んでんのさ、ただの肉片になるまで。」

悪魔「なるほどく、片羽根のダメ天人とただの器の悪魔モドキとのハーフは肉片がピッタリだもんなあ！」

神司「黙れ、クズ共が。」

悪魔「あ、あ、？」

サグメ「神司……！」

星花「神司？」

慌てるサグメと俺を止める姉ちゃん。今は本当に止めないでほしい。

三人ほどの悪魔たちの会話に邪魔するように入った。

我が娘の悪口には何とか耐えたが、関係の無い妻の名前が出てきた。まだ、俺の悪口なら良い。でも俺以外の家族の悪口が出たならもう許せない。完璧に堪忍袋の緒が切れた。

悪魔「何ですか？甘ちゃん悪魔モドキの神司ちゃん？」

悪魔「俺ら何か悪いことしたかなあ？」

神司「……外に出ろ……消し炭にしてやるから。」

悪魔「あれ？喧嘩？甘ちゃんがそんなに怒ってんの？ダサイね。」

今発言した悪魔は俺の俺の胸ぐらを掴んで脅しを始めた。現在の体は縮んでいるので簡単に浮いてしまう。

悪魔「テメエ、気持ち悪いんだよ。邪神王様の器のくせによ。」

神司「……」

悪魔「何だあ？その目は。」

上から目線を落として悪魔を睨む。

そのいざこざを静かに眺める二人が座っていないながら話し始めた。

エル「懐かしいな、あの光景。」

ミカ「どうする？止める？」

エル「……いや、あの昔、力無き少年がどこまで成長したか見てみたい。」

ミカ「はいはい、ヤバそうになったら私は止めるからね。」

エル「勝手にしろ、だけどお前が出る巻くは無いだろうがな。」

エルはニマニマと笑いながら試合の方に集中するのを再開した。ミカは一度深呼吸してから一旦落ち着き、神司たちの方を向いた。

神司「……俺の娘の初試合なんだ。ゆっくりと応援させてくれ。」

悪魔「こつちも神ノ邪神様の戦い方を目に収めたいんだよ!」

神司「…要は応援する相手は違うが、目的は同じなんだな。」

悪魔「ツ!」

俺は零愛を応援していて、あつちの悪魔は神ノを応援している。どちらも応援を邪魔されたくないという傲慢さが原因だった訳だ。

悪魔たちは一度考えて話し合うと納得したらしく、俺に握手を求めた。

悪魔「すまない、確かに我々は言いすぎた。」

神司「俺もキレてごめん。」

悪魔「いや、娘の初試合なのだろう?キレルのもしょうがないさ。」

悪魔「さて、仲直りできたついでに名前だけでも話すかな。俺はシエムハザ。シエムと呼んでくれ。」

悪魔「僕はオセ。」

悪魔「我はバルバトス。」

シエム「よろしくな！」

神司「…ああ、よろしく。」

シエムと優しく握手を交わした。

さて、こんなに簡単に親しくなれるものなのか。少し様子見た。

シエムと握手を交わしている中、<sup>嫉妬</sup>実況の衝撃な声が聞こえた。

嫉妬「ま、まさかの…!? 零愛の胸に、晃雅宗が貫通したー!!?」

神司「はあ!?!」

サグメ「れいあー!!」

星花「嘘でしょ…!!」

シエムの手を振り払ってからすぐに観客席の前まで走って出る。

神司「なあ…:…嘘だろ…」

俺が見た光景は、神ノが零愛の背中に手を付けていて、邪気が纏った晃雅宗を胸を貫通させられて血を吐き続ける我が娘の姿だった。

神司「強欲! 動けよ!」

構えていた強欲はあまりのショックで立ち尽くしていた。

神司「あんの役立たず！」

零愛を助けに下に飛び下りようとすると、神ノが零愛を俺の方に投げた。

神司「はあ!？」

ちようどキャッチできる場所に投げられたので優しくキャッチする。

零愛の服は血だらけだが傷は治りかけていた。っていうよりも掠り傷程度で零愛の血ではなかった。

神司「……まさか……？」

神ノ「……たくつ。レヴィ、場外だぞ。」

神ノが嫉妬に言うが嫉妬は神ノを睨んで何も話さない。

神ノ「レヴィアターン！零愛は場外だぞー？」

嫉妬「うるさいな！第七回戦目の勝者はアベル・サタナキア改め、神ノ邪神の勝利!!」

いやいや言っている気がするが神ノの勝利だ。



神ノ「痛て……」

暴食「カツコつけて零愛ちゃんの脇の間入るように自分の腕を貫通させる人が言えるセリフじゃないですよ、全く。」

医務室のベッドに横たわり暴食に左腕を包帯で巻かれている最中の神ノ邪神。

あの試合で強欲は重症は有りだと言っていたので、神ノ邪神は、大勢の観客の前でまるで、零愛を刺し殺したと思わせておいて、本当は自分自身の腕を刺すという騙すシヨウを成功させたのだ。しかし代償はデカイ。

神ノ「だつて面白そうじゃん！邪気いっぱい出した戦闘狂が敵を殺したと思つたら、生きてました〜、つてなつたら『神ノ邪神も慈悲あるんだな』つてなつて好評になるでしょ!？」

神司「——の割には批判の声も聞こえますが？アベルさん？」

医務室のドアの前に持たれ掛かる神司。

やつぱりここに居た。零愛の傷は浅いからな、神ノはどこかしら大怪我しているだろうからな。

神司「何が面白そうだ。見ている側は悲しくなるんだよ、特に家族がな。」

神ノ「……そう、か。確かにあれはやり過ぎた。しかも家族の前で……さらには女の子の顔を弱火とはいえ、邪炎で焼いてしまった。零愛ちゃんに言つといて——」

神司「お前自身が直接零愛に謝れ。」

人任せにする気かこの邪神は。

神ノ「……分かった、ホントにごめんな神司も。」

神司「はよ腕治せよ、準決勝で戦うんだから。」

神ノ「！分かったよ、ぜってー勝つからな。」

神司「また後でな。」

神ノに手を振って家族が待つ外に向かった。

たくつ、あの邪神には困ったモンだ。

## 第130話 第八回戦

嫉妬「さあて！予選もあと一つ！」

強欲「ラストを飾るのはこの二人！」

嫉妬「悪魔の妹 フランドール・スカーレットの狂気！能力は『相手の能力と技を模倣する程度の能力』、ブラックドール・スカーレット、通称 黒フラ、クーちゃん!!」

黒フラ「皆さん！応援、宜しくお願いしまーすっ！」

観客席の方に笑顔で手を振る。フランは元気に振り、レミリアお嬢様は控えめに手を振って応援している。

嫉妬「ミカエルの『光』の化身！母性溢れる自称 神ノ邪神の秘書、ミカ〜！」

ミカ「エルの分も勝たなきやね！」

エル「負けてくれ…」

ミカ「何でなの？」

エル「え、だって俺負けたもん。」

ミカ「エルが負けてほしくても勝っちゃうもんねえ♪」

笑顔で歩きながら黒フラの前にくると挨拶するために握手を求めた。黒フラもそれ

に乗って握手した。

ミカ「良い死闘をしようね♪」

黒フラ「死闘に良いも悪いもあるの？」

ミカ「さあ？でも良い試合しようね。」

ミカは引き続き笑顔で黒フラに対応する。まだ子どもの黒フラはミカとの会話が謎でよくわかってない様子だ。

二分程経つと、強欲が降りてきた。

強欲「そんじゃ始めて良いか？」

ミカ「いつでもどうぞ。」

黒フラ「ミカ姉さんと同じく。」

ミカ「姉さん!？」

黒フラに姉さんと言われて驚きが隠せないミカ。

又もや黒フラはわかっていない様子である。

黒フラ「どうしたの？」

ミカ「いや…何でもないよ。」

心の中ではジャンプしたい程、喜んでいるのだ。

強欲は溜息を一つ吐く。

強欲 「観客も待つてるしさあ、始めないか？」

黒フラ 「いいよ。」

ミカ 「良いよ♪」

強欲も呆れながらも始めようした。

強欲 「始めるぜ、よーい……始めッ！」

先程の握手していた平和な空気は消え、ミカの周りに蒼い炎が揺らめき始めた。

黒フラ 「紅劍『紅風嘘無劍』……」

黒フラが先ず模倣したのは亜無の劍の、紅風嘘無劍だ。

劍まで模倣するなんてな。亜無の能力を使った劍だから可能ってことか。黒フラの

能力は亜無よりもチート染みているな。

黒フラはミカに向かって駆けて斬り付けようとした。

ミカ 「馴れない劍術は止めた方がいいよ——ッ!？」

黒フラ 「取った。」

意外に黒フラは劍を上手く扱い、ミカの後ろを簡単に取る。

この様な芸当はなかなかの予想外で観客席だけではなく、実況席でも盛り上がっている。

嫉妬 「黒フラのバックの取り方が華麗すぎますね。」

強欲「華麗だったな、ミカはどうやら黒フラの剣術を舐めすぎていたな。」

ミカ「……まうたみんな、騙されてるよ……私はバツクなんて取られていないのに。」

黒フラ「——ええ!？」

黒フラが有利かと思えば、ミカはその場からうつすらと消えた。どこにいるのか皆が探しているとバルバトスが上空を指差した。そこには、空中浮遊しながら黒フラを見下ろしているミカだった。

強欲「……陽炎か!」

ミカ「ピンポン♪やっぱりマモンは鋭いねえ〜。」

親指を立ててマモンにグッドのサインをする。

ミカとは零愛の服などを貰うためにしか話したことがない。なので今回のミカの戦闘は初めて見る。

黒フラ「『刃降らし』!」

ミカよりも上から刃を降らした。刃を扱う能力は俺の能力だが、こんなスペルカードに見覚えがないな。

ミカは全ての刃を軽々と避けてから、黄土色の火炎を数発、黒フラに放った。

黒フラ「無界『音無結界』!」

俺の結界を自分自身に出して火炎を防ぐ。

おいおい、黒フラが使ってるスペカがほぼ俺のじゃないか。まあ、この模倣能力が黒フラの能力個性だから良いのだけど。

結界を解くと、次は黒フラ自身の周りに大量の蠅を出してきた。

次はどうかやら暴食のようだ。別に蠅は模倣しなくても…。

上空にいるミカに接近して右で殴る。ミカはその拳を掴むと黒フラを振り回して部舞台に投げ飛ばす。

嫉妬「黒フラ！部舞台に強打！」

強欲「肩から一気に落下しましたが大丈夫か？」

嫉妬「おお、立ちあがりましたよ。」

黒フラ「痛てて…」

ミカ「どう降参するなら今の内だよ。」

黒フラ「『蠅インセクト・デイオウオロスの魔王』…『邪流マギ・ナガレ』」

右手に蠅の魔王を、左手に邪流を装備する。

この世に三丁目の邪流だ。全く、何本同じ銃が増えるんだか。造ったのは俺じゃないけどな。

ミカ「…勝率はあるの？」

黒フラ「ミカ姉さんのバーカ。」

皆「!!?」

邪流を右手に持たせて、左手であっかんべーの仕草をする。

まさかの黒フラがあっかんべーをしかもミカにすると。観客も実況と解説も呆然としている。でも一番驚いているのはミカだろう。

黒フラ「勝率は有り無しで決めるんじゃないよ、自分自身で作るモノさ!」

ミカ「その通りだよ。」

黒フラ「つと、ゆーことで!本気でミカ姉さんを倒したいと思いまーす!禁忌『フォアオブアカインド』!」

皆「!!?」

黒フラが四人に増えたので目の錯覚かと思ひ擦るが、黒フラは四人のままだ。

観客席からフランが「私のスペルカードだ!」と叫んだ。つまり、あのスペカは、フランのスペカらしい。

黒フラ「弾幕だと威力が四分の一らしいから剣術で倒すよ!」

分身1「判ったよ!んじや私が蠅の魔王を使うからね!」

分身2「…うう…それじゃあ…:クーは紅風嘘無剣にするの…:」

分身3「そつれじゃ〜!私は魔術書鎌グリモワール・サイヌを持つちやうもんね〜♪」

黒フラ「わかったわかったから、皆でミカ姉さんを倒すよ。」

まるで喜怒哀楽のような四人の黒フラは、個人個人に模倣武器を持ってミカに掛かる。

ミカはエルが使用していたダーク・ブレイブで四人の連携の攻撃を対処している。黒フラの連続攻撃は凄まじいが、それよりもミカの剣さばきが凄い。

黒フラ「邪刀『鬼神斬』！」

分身1「蠅王『斬蝕童』オオ!!」

分身2「妖刀『無限の紅い刃』……!」

分身3「『刈り憂怒』お♪」

ミカ「ツ!『フレイムサークル』!」

放たれた四人の斬撃を炎の陣で防ぐ。

黒フラ「嘘……!」

分身3「まだだよ!♪」

まさかの炎の壁に突っ込んで無理矢理ミカの目の前まできた。

分身3「トドメなのだ!!♪」

黒フラの楽と思われる分身がミカの右肩から斜め下に魔術書鎌を振り落とす。

すると、炎の陣は消え、ミカは血を流しながら部舞台に落下した。

嫉妬「おっと!次はミカが落下してきた!」

強欲「どうやら、黒フラの分身の一人がミカを斬ったようだな。」

俺からはよく見えなかったが、あの炎の陣があつた場所には黒フラの分身がいるから  
そうなのだろう。

それにしても、よくあの炎の壁に突っ込んだな。

黒フラは三人の分身に礼をしてから分身を自身に取り込んだ。そうすると、さつきま  
で創造していた武器たちが消えた。

黒フラは部舞台に落下したミカの下に下りる。

黒フラ「大丈夫？ミカ姉さん…？」

ミカ「……」

黒フラ「…ミカ姉さん……？」

なんだ？何で立ち上がらないんだ？

すると、黒フラが助けの声を叫ぶ。

神司「マジか…！」

すぐに向かおうとすると、神ノが俺よりも早くミカの横に着いた。

ミカの腕などを触って確認していると、神ノは溜め息を吐く。

神ノ「はあ…なるほどな。ミカの魂は生きているから大丈夫だよ、クーちゃん。」

黒フラ「魂は？」

神ノ「ああ、あのね、ミカはエルと違って肉体がない魂だけだからね。だから昔に俺がミカの魂を魔人形ゴレムに入れたんだよね。で、その魔人形が壊れたから体も口も動けなくなつた訳。つとと言う訳だから：嫉妬、勝者はクーちゃんだよな？」

嫉妬「そつ、そうだね！えくつと：ミカの体の損傷により、第八回戦の勝者はブラックドール・スカーレット！」

これで、初回戦は終わった。次からは準々決勝だ。

## 第131話 準々決勝戦 第一回戦

嫉妬「さあ〜って！準々決勝戦を、始めていこうか!!お前ら〜!!」

嫉妬が右の拳を突き上げると、乗りの良い観客たちは皆、拳を突き上げる。

嫉妬の言う通り、今回は準々決勝だ。今まで通り死闘になるが、こつからはもつと命懸けだ。

嫉妬「さあ〜って！準々決勝初の第一回戦は、まさかの部舞台破壊した上に押し出し勝ちの創造者！クリエーター紅風 亜無!!」

亜無「…よしっ！目も見える、調子もヨシ！絶対に勝つぜ！」

目を何回も瞬きさせながら体を動かす亜無。あとは気合いを入れた。

続いて一気に邪気を放ちすぐに収めたクロムが呼ばれなくても現れた。

嫉妬「続いて第二回戦での戦闘は文字通りゴリ押し！熱の邪神の勝率は元々無かつた様なもの！勝ち負けの概念をも破壊する破壊者！ブレイカークロムヴェール・キラティナイド!!」

クロム「神司と死闘するのは俺だア！」

いや、まだ神ノに勝てるかわかんねえのに宣言するな。

そんなことは置いといて、創造者 VS 破壊者とは上手いこと言うなあ、嫉妬の野

郎。

さてそろそろ本戦の開始だ。

実況席から強欲が二人に声を掛ける。

強欲「予選と同じように、殺しは無し of 重症有りだ。手加減なしの本気の死闘を楽しんでくれ。それでは両者、構え。」

亜無は紅風嘘無剣を、クロムは見たことのない刀を邪炎から取り出す。

刀は刀でも、刃には邪気が纏っている。

強欲「——始めッ！」

亜無「ハアア！」

クロム「フンッ！」

紅風嘘無剣と邪刀が激しくぶつかり合い、火花が散る。両者、押していたが、一度亜無が左に避ける。

嫉妬「いきなり熱いぶつかり合いだ！」

強欲「邪神王の邪刀か…これは見物だぞ。」

亜無「妖刀『無限の紅い刃』！」

クロム「神剣『千本刃』。」

神司「何で!？」

亜無紅い無数の刃が設置されると、クロムは俺の『千本刃』を空中に設置した。

何で模倣能力の後にまた俺の技を模倣されなきゃいけないのだ。まだ黒フラならしょうがない。クロムもオリジナルを捨てよ。

夢『王のモットーは“使えるものはとことん使う”らしい。ならば使えるだけパクった方が良いだろう。』

神司「なるほどな…」

夢の説明が終わったところで死闘に目を向けた。

紅い刃と刃が相殺している中で亜無とクロムは剣術で戦っている。

亜無「紅夢『紅雷斬』！」

クロム「邪魔『黒蕾華』！」

亜無は紅い雷を円を縦に斬り上げて、クロムは漆黒の華ができるように紅風嘘無剣の刃を防ぐ。

亜無「紅神『Scarlet:devil』！」

亜無の頭からケモミミと背中から蝙蝠のような羽根を生やして左手にブラッドグングニルを持つてクロムを突いた。

クロム「ぐうっ!?!」

嫉妬「亜無がクロムを突き飛ばしたー!」

クロムの腹を突いて飛ばす。亜無は追撃をするために一気に跳ぶ。

亜無「そのまま倒す！」

クロム「——倒せるかなア!？」

亜無がブラッドグングニルで突きで攻撃を仕掛けたがクロムは右手を前に出して一度握ると、ブラッドグングニルが粉碎した。

亜無「なっ!？」

亜無が驚くのも無理はない。槍の刃はクロムに触れていない。つまり、何らかの能力を使用した訳だ。

クロム「選手紹介で言ってただろ？破壊者だブレイカーってな。」

触れずに武器破壊とは、亜無の勝率は大きく下がった。

亜無の顔が青くなる。明らかに焦っている。

クロムは亜無の焦り具合を見て見極めて、邪刀の刃に邪炎を纏わせて亜無を斬りに走った。

亜無「ヤバい……！敗ける……！」

レミイ「上に避けなさい！」

亜無「っ!？」

クロム「逃がすかよ！邪炎『スネークフレア』！」

レミリアお嬢様の指示で上に羽ばたいた亜無を刃に纏われている邪炎を蛇の様に動かして亜無を喰おうとさせるが、亜無がブラッドグングニルを咄嗟に創り邪炎に投げ

る。  
邪炎を貫通すると、下にいるクロムに向けられて落ちていた。

クロム「チツ、おらよッ！」

器用に邪刀を投げてブラッドグングニルに当ててどちらの刃先を破壊した。

亜無「器用な邪神がよお！」

クロム「ハツハツハ！ただ単に破壊しまくるのも面白くねエだろオよ！」

相変わらずの戦闘狂だ。邪神王の威厳は何処へ言つたやら。

亜無「…それもそうだな。だが、勝ちを譲る気はないからな。」

クロム「遊びながら勝つてやるよ…♪」

嫉妬「声援はよろしいですが誘導は止めましょう。」

レミイ「あら、私に言ってるのかしらね。」

レミリアお嬢様は嫉妬に言われているのに関係ないと思いつつながら亜無の戦闘を観戦する。

確かに、声援は有りだろうが動きたいように動けない選手のことも考えないといけな  
いよな。

観戦に戻るとクロムが楽しそうに笑いだした。

クロム「クッククック、それにしてもだ。邪神王の俺をここまで闘えたのはお前が初めてだ、俺を楽しませろよ！紅風 亜無！」

亜無「楽しませれたらの話だがなあ！」

クロムが殴りかかってくるので亜無は『嘘符『紅き竜魔陣』』を宣言して紅いバリアを張った。

少し早い気がするが、守る手段は正解だ。

クロムは亜無に伝わるように叫んだ。

クロム「ダツシユ<sup>オラ</sup>行<sup>オラ</sup>くぜエ！」

亜無（まさか…！ジョジ〇のオラオラ…！）

クロムは誰にも見えない速読で紅いバリアを殴打する。

あの殴打…！西行妖や夜行の時に繰り出した時の…！

懐かしい、もう四、五十年前になるんだな。あん時はまだ、息子と娘が生まれてなかったもんなあ。

過去を振り返っていたら、歓声が聞こえた。見ると、紅いバリアが殴打により粉碎していた。

亜無「ツ！嘘符『ダウトドロー』！」

右手を紅く光らせてクロムを殴ろうとすると、クロムは拳を掴んだ。

クロム「実況が言ってたろ？もう一度だけ言うぜ…破壊者だつてな…！その右手を破壊してやるよ。」

亜無「ツー！止めろ…！」

クロム「止めろだア？ヤーなこった！」

亜無「止めろー!!星符『ストライクメテオ』オ！」

一気に力を入れて破壊を試みたが、亜無が隕石を五つ部舞台上に降らせた。

嫉妬「またこのパターンかよ！」

強欲「ピンチの時こそ、頼ろう隕石つてか。」

隕石を降らせて第二回戦と同じように部舞台を壊すのかと思えば、クロムが亜無の手を離し、隕石の真下まで飛んだ。

クロム「ゴミ始末すつかな…破壊『連殺』！」

邪炎を拳に纏わせて次は隕石に殴打した。隕石は一つ一つ丁寧に粉碎される。しかし、欠片になっても降下するスピードは落ちない。

クロム「大掃除だなこりや！『BRE||AK』！ハッ！」

邪気を放ち隕石の欠片が残らないように全て飲み込んで被害は0で済んだ。

相変わらず隕石に頼りすぎだ。苦しい時に全て隕石を降らすとなると、幻想郷がク

レーターだらけになってしまふ。

今回や紅霧異変時に隕石を降らせているが、クロムや俺が降らすのを阻止している。まあ、第一回戦<sup>初</sup>目<sup>戦</sup>では阻止できなかったがあれはしようがない。

亜無「そんな…」

クロム「物に頼るな。結局本気のお前とは闘えなくて残念だ。」

そう言うときクロムは部舞台上に倒れた。

嫉妬「どうしたのでしょうか。クロムが急に倒れましたが。」

クロム「あー、魔力切れだ。」

皆「!?!」

クロム『BREllAK』や魔力使いすぎた…つてな訳で指一本も動けない。降参するわ。」

皆「……えええええ!!?!」

まさかの事態すぎる。

いや、まさかクロムが魔力切れを起こすとは…。

——と言うわけで、

嫉妬「えーと…クロムの辞退により、一回戦の勝者は紅風 亜無です!」

亜無「……勝った気しねえ…」

クロムの降参により準々決勝 第一回戦勝者は亜無になった。

帰りに、亜無のテンションが低くなっていたので亜無を呼び止めて雑談しながら紅魔館に戻った。

さて、二回戦目の出場者は、光矢 VS 暴食だ。恐ろしい死闘になりそうだ。

## 第132話 準々決勝戦 第二回戦（前編）

強欲「第二回戦はこの男たちだ！」

嫉妬「闇の神相手に逆転勝利！光神で紅魔館執事長！八剣 光矢ア〜！」

光矢「神の次は悪魔かよ。チツ、どんな奴かパチュリー様に聞いときゃ良かったぜ。」  
悔やむな、光矢。

確かに暴食の怠惰戦はあまり参考にならない。怠惰は不利だと言っていたが、改めてあの戦闘を思い出すと本当は勝てたのではないかと思う。

ただ面倒くさくなっただけなのかも。

嫉妬「続いては、相手が降参したことにより、未知数な戦闘、大食悪魔こと、暴食のベルゼブブ!!」

『蠅イソセントデオウネロスの魔王』を地面に向けながらゆっくりと歩いて出てきた。

どうやら今回は殺気や邪気を放たずにだ。しかも悪魔らしく堂々とだ。

暴食「光矢くんではないんだよね？」

光矢「ああ、悪魔のベルゼブブだよな。」

暴食「うふふ、暴食でいいよ。あだ名の方が覚えやすいしね。」

光矢「ん、暴食ね。よろしく。」

暴食「うん…死なない程度でよろしく。」

光矢と暴食が握手を交わす。

光と悪魔…また面白い死闘をしてくれそうだ。

強欲が握手を交わす二人の様子を見て、声をかける。

強欲「両者準備はよろしいか？」

光・暴「勿論。」

強欲「了解。それでは！準々決勝第二回戦！用意!!」

手を離すと、暴食は歩いて距離を取り、光矢はその場から動かずに左手を暴食に向ける。振り向いてそれに気づいた暴食は、腰を低くして『蠅の魔王』を構える。

コロシウムから声援が消え、静寂が訪れる。

強欲「——始めッ！」

光矢「光符『ライトニングスパーク』！」

左手から光線が一直線に飛ぶと、暴食は『蠅の魔王』を横に向けながらも前に出して切り裂くように使って防いだ。

光矢「なッ!?!」

暴食「悪魔を甘く見ないでね…腐食『ブレイズスモーク』。」

光矢「ツ！手榴弾！」

暴食が『蠅の魔王』を粉碎すると白色の煙が一瞬で部舞台に充満した。

煙に対抗するように手榴弾を爆発させて煙を一時的に止めた。

この危ない状況に一早く察したのは嫉妬だった。

嫉妬「!? 神ノ邪神！観客席にだけ大結界を！」

神ノ「……なるほどなあ！『邪神大結界』！」

観客席を丸ごと包む様に神ノが大結界を張る。

このスペルカードはあらゆる物を腐食させる煙だと今解説の嫉妬がそう話した。

この結界は中から戦闘を観ることは勿論、声を届けるし声を聞くこともできる。流石

は神ノだ。

さて、煙が晴れてきた。

光矢「はあ、はあ……耐えきってやったぜ……！」

暴食「へー、やるじゃん。次は煙ミストじゃなくて直接攻撃にさせてもらおうよっ！」

光矢「ッ！」

光矢と並ぶほどの速さで光矢を左に斬り飛ばす。

光矢は場外ギリギリで耐えると光の矢を数十本展開して放つ。

しかし暴食は先程の光速で矢を避けまくる。

素早すぎる。俺は予知能力を使って見ているが、暴食と光矢の動きはギリギリ見えている程度だ。ほんとに早い。

暴食「…ワンパターンはつまらないよ。ほら、あの時の…エルくん戦で見せたあの大技をさあ…受けてあげるからさっ。」

光矢「チイツ！光符『ライトニングアロー』！」

暴食（ああそっか。もつと矢が必要なんだね。）

光の矢をわざとらしく避けつつ、『蠅の魔王』から邪気の弾を放つ暴食。光矢もその弾幕を避けているが、暴食がわざとずらしているように見える。何かを待っているのか…暴食が避けた矢を目で追うと上空に向かった。

そこには、暴食の避けた矢が何百本の光の矢が飛び回っていた。

あの形…光神『ライジン・ザ・ブラスト』か。

光矢「…そろそろだな…」

暴食（まだかな…？）

暴食が頃合いを見極めているとその時は来た。

光矢「光神『ライジン・ザ・ブラスト』…!!」

左手を暴食の方に向けて溜まりに溜まった大量の光の矢を放つ。

嫉妬「ついにキター！あのエルとの戦いにて逆転勝利の決め手となったトドメの必殺

技、光神『ライジン・ザ・ブラスト』だア〜!!」

強欲「そのタイミングだとマズいな。」

暴食「それを待っていたのさ! 蠅術よつじゆつ『反射インセント・マホカンタ蠅』!」

蠅たちがペースト状になり、邪気や黒魔術が重なり大きな反射板に変わる。光神『ライジン・ザ・ブラスト』がその反射板に直撃すると光矢の方へ返ってきた。

へー、あの蠅はあんな使い方もあるのか。暴食が黒魔術を使用するところも見るのは初めてだ。

光矢「ツ!」

これで勝てるかと確信していたのか、予想外な反射板に驚き、避けることも出来ずに自身の技を喰らった。

もう見てられない試合だ。でもここは光矢に何としても勝ってもらいたい。

嫉妬「現在土煙で見えませんが、光矢に矢が全て跳ね返った様子です!」

強欲「油断大敵とは正にこういうことだな。あのままだったら、光矢はもつと痛い目に遭うぞ。」

暴食「いや〜! やつぱり僕は欲に充実した方が性に合うね!」

アツハツハと上手いこと実験が成功した気分なのか、笑い声を上げて笑う暴食。

あんな元気で陽キャな暴食を初めて見た…。聖戦ではずっと無口だったから今の暴

食を見ると、我が子の成長を見ている気分になる。

零愛「……」

神司「ん？どうした？」

零愛「ううん、ただこういうところでお母さんはお父さんに惚れたんだなあと思つて……」

神司「？どういうこと？」

零愛「……実況の嫉妬さんの言う通りだね。」

神司「零愛、俺が鈍感だと言いたいのか？」

零愛「え？そうじゃないの？」

神司「冷たいって……零愛……」

零愛「はははっ♪ごめんね、お父さん♪」

成長の速さは感心するけど、こんなにも舐められるとは……父の威厳が欲しいものだ。

夢『御主も大変だの。』

全くです。

こんな話をしていると、土煙が晴れてきた。

そこにいたのは、体の色んな箇所には火傷を負っている光矢の姿であった。折角の執事

服がボロボロだ。

光矢「はあ……はあ……」

暴食「どお？自分自身の攻撃を喰らう気分は。」

光矢「……最高なんだよなあ……！ありがとよ、暴食悪魔サン……♪」

暴食「なあ!!」

嫉妬「なんということでしょうか！暴食にカウンターを喰らいながらも尚、立っており！更に、光矢の体が黄金に輝いているー!!どういう原理何ですか!?実況の強欲さん！」  
強欲「お、恐らくだが……喰らった光の矢を全て自分自身に吸収して取り込むことによって、光を付与させたのか……!?!」

他に考えられることはない。間違いなく光矢自身に光の矢を取り込んだに間違いない。

光矢「フフフ……はははははは!!喰らいやがれ！光符『無差別爆撃光線』!!!」

超無差別に光符『ライトニングスパーク』を放つが、勿論暴食はサツサツと避ける。無

駄な労力を使わない様にも見える。

こんな適当では暴食には勝てない。そう思い心配も束の間。光矢の口角は上がっていった。

光矢「当たれー!!!」

暴食「簡単な弾幕だね。蠅術『反射蠅』」

再び蠅術『反射蠅』によって跳ね返る光の弾幕。また光矢に直撃した——と思われた。光矢「もうそこには居ねえよ。光神『ライジン・ザ・ブラスト』！避けてみやがれ！」  
暴食「ツ——!!」

反射板に守られていない背に光速で移動し、暴食、誰もが避けられないような残っていた光の矢を数十本放つ。勿論、暴食は避けられないまま弾幕を喰らった。

暴食「ぐわああアア！」

大量の矢に射られた暴食が苦しみ部舞台上にもがき始めた。

何か様子がおかしくなり不安が募る。

## 第133話 準々決勝戦 第二回戦（後編）

何か……ヤバい感じがする。悪寒と言うか、鳥肌がヤバい。結界越しである筈なのに死を感じる。

暴食「ツく!!くそツ……!こんなので終わって堪るか……!嫌、なんだよ……!まだ実験し足りない……!八剣 光矢ア……!実験体となつてその生命を絶つて終われ!!罪破りベルゼビユート・デイズター『暴食の魔王』!!」

暴食は自身の胸に服の上から手刀で罰点を付けた。すると、六枚の羽根が禍禍しい形状になつて頭には左右に黄色い角が二本、爪が伸びて黄色いクローみたいなになり、頭の上に光輪が浮かんだ状態に。

咆哮をあげた。結界内でも聞こえる程だ。

嫉妬「罪破り!!?やりやがったな!あのバカ!!」

強欲「最悪の場合……俺が斬る……!」

神司「何が起きているんだ!」

さっぱり分からん。

罪破り?聞いたこともない言葉だ。それにしてもあの暴食の異形な姿……聖戦でも見

たことない。

俺が困り果てていると神ノがこちらに向かって歩いてきた。

神ノ「やあ、迷いの子羊よ。」

神司「誰が子羊だ。それにしてもあれは何なんだ？」

神ノ「罪破り…またの名を『大罪破り』。罪在りし者だけが行う事を許されている禁忌の中の禁忌で最大級の禁術だ。払われる代償は寿命の五分の一捨てることになる。」

神司「なっ!?!ならすぐに止めないと！」

俺の肩を掴む神ノ。何だよ、早く止めないといけないのに…!

神ノ「無駄だよ。暴食もそれなりの覚悟を持って決断したこと。半端な覚悟じゃだめなんだ。」

神司「……………」

神ノ「まっ、準決勝に合ったら、お互い死闘なんて物騒な事考えずに楽しもうや。」

神司「…ああ……………」

どうせ、そんなこと考えていないだろう。合った瞬間、顔色変わるだろうからな。



何であんなに強いんだ。あの八剣 光矢つて人間は。人間なんだろう？ 悪魔でも神でもない。ただの光の能力を身に付けただけの人間なのに――！

どうしてこうも差があるんだ。

負けたくない。僕は暴食のベルゼブブだ。『暴食』なんだよ……!!

暴食「ツク!!!くそツ……!こんなので終わって堪るか……!嫌、なんだよ……!まだ実験し

足らない……!八剣 光矢ア……!実験体となつてその生命を絶つて終われ!!罪破り

ベルゼブブ・デイスター  
『暴食の魔王』!!

僕の服の上から体に指を突き刺して斜めに大きく罰点を描く。

痛い、痛すぎる。だが、負けるよりもマシだ。

勝ち誇る感覚、この『禁術』の試用運転をするためなら何でもする。

寿命の五分の一の命を代償?こんな実験のしがいがあることをしないとという選択肢

はない。

僕の頭から黄色い角が左右に二本生えてきた。さらに禍禍しい形状の羽根が六枚浮き、黄色と黒の光輪も頭の上に浮いた。爪が黄色くなつてクローのようなにもなった。

光矢「な、何だよ!その姿!」

暴食「フフフ……バーサーカーだから、気ヲつけテ?」

僕は光矢くんに向かって駆け出す。



腕や太股に騒ぎすぎている血を抜くんだがな。あれはそれ程、血が溜まっていたんだな。」

そう、これは遮血だ。自分を冷静に戻さないといけないから。

暴食「……」

光矢「おつ、おい……大丈夫か……?」

暴食「……有難う、大丈夫だよ。」

少しふらついて、頭が治るまで痛いのが、大丈夫なのは変わらない。

でも頭は不味かったか? 逆に貧血で倒れそうだ。いや、今頃後悔しても遅い。ならば、今、出来る限りの事をしよう。

光矢「そつ、そうか……それで? 対戦には害は無いのか? 痛みとか……」

暴食「それを含めての大丈夫だよ。」

光矢「そうか……なら再開とするか!」

そう言った光矢は姿を消したが、気配が僕の後ろにあつた。

暴食「腐食『蠅々跳蚊』!」

蠅というのは、明かりが強い場所に群がる習性がある。まさに飛んで火に入る夏の虫と言うところだ。

今の光矢は光輝いている。つまり——本能的に攻撃を仕掛けることができる!

光矢「ぐうう!!」

嫉妬「死角にいた光矢に上手いこと回し蹴りを喰らわせることが出来ました! 暴食のベルゼブブ!」

強欲「タイミングバツチリだな。」

顔の横を蹴られた光矢が勢いよく飛んでいく。光を使用していたから余計に飛ばされる。

暴食「うん、何でか知らないけど身体が軽いよ。」

光矢「痛つー…え? ギリギリじゃん…」

くそつ、部舞台ギリギリで留まってしまったか。早く終わらせて——!

暴食「ぐはあつ——!!?」

何が起きた…? 速すぎて目が追いつかない…!

今あった出来事をありのままに話す。

飛ばした光矢くんに目を離さずに見ていた。勿論、先頭体制はとっていた。なのに、なのにだ。気づいたら光矢くんは僕の下まで来ていて腹部を光速に殴りつけたんだ。

僕は踞る体型をとり、地面に倒れる。



見えなかった。飛ばされたと思えば、暴食を殴られて倒れていた。

光矢が急に覚醒した。一体どこで覚醒する要素が……いや、負けたくないという心の強さか。レミリアお嬢様のためにも、紅魔館執事長のためにも悪魔を倒すというプライドの現れだ。

光矢「どうだよ……はあ、はあ……まだやるか……？」

息切れしている。光矢はギリギリで戦っている。対して暴食は起き上がらない。

暴食「……痛つたいなく……」

光矢「!?嘘だろ……」

暴食はゆっくりと立ち上がる。ヤバい、光矢にはもう大きな光技を使う気力がない筈だ。

しかし、光矢は左手を暴食に向ける。

嫉妬「まさかまさか!ここにきてあの構えは——!!」

嫉・強「『光符』『ライトニングスパーク』!!?」

そうだ、間違いなくあの構えは、光符『ライトニングスパーク』だ。

一番最初に暴食に避けられたスペルカードだ。

それに対して暴食は——!

嫉妬「それに対する暴食は——!?!」

強欲「蠅の壁……蠅術『反射蠅』……」

まさかの蠅術『反射蠅』。

もし、暴食が光矢よりも気力が上であれば、暴食の勝ち。逆に光矢が暴食よりも気力が上であれば、光矢の勝ち。

結局は、気力勝負になる。

嫉妬「まさかまさかまさかの！終わりは！リベンジラストバトルッ！」

強欲「息を飲むとはこういう事だな。」

会場内が沈黙と緊張が流れている中、二人だけが動かずに構えをとって立っている。

光矢「——光符『ライトニングスパーク』ッ！」

暴食「蠅術『反射蠅』！」

光速に撃たれた光線が反射板に勢いよくぶつかった。今までののを見ると、あの現最強の光神『ライジン・ザ・ブラスト』を跳ね返した反射板なのだ。なのに跳ね返らない。

つまりは、暴食が完璧に弱っているということになる！

ここは勝ち時だ。そう思っていると無意識に光矢にエールを贈っていた。

神司「行けー!!光矢あー!!」

光矢「！ はああああ!!」

暴食「くっ……!!」

神ノ「暴食！負けんじゃねーぞ！命を払った代償を無駄にするんじゃねー!!!」

暴食「……！勝つてやるよ……！」

光線も反射板も砕けない。つまりは、まだ五分五分というわけだ。いや、訂正する。光矢が暴食を五分五分まで追い込んだんだ。

『悪魔を追い込ませた』：最初からレベルの差は大きくあった。でも、この短時間で相手のレベルまで上げること成功させた。本当に凄い。

すると光矢の光線が急にピタリと止まった。

暴食「えー？」

光矢「これでドドメだあああ!!!」

勢いを止めると暴食に油断が生まれた。その瞬間、光矢が再び放つ光線を反射板を貫通して暴食に直撃した。

嫉妬「ついに破りました！あの強硬な反射板を光矢が光線一本で破りました!!」

強欲「悉く破っているな、あの執事長は。」

光線に直撃した暴食はそのまま倒れてしまった。光矢が暴食に近づき生存確認すると左腕を大きく上に挙げた。

嫉妬「——ということが決まりました！勝者は、八剣　こー——」

観客席だけに収まらず会場内に歓声が包む。

勝った！完全勝利だ！

思わず近くにいた亜無とハイタッチしたのも束の間、罪破り前の暴食が倒れている暴食から出てきて光矢に蠅で作った棍棒で頭を殴った。すると光矢は倒れて気絶した。

観客全員が何が起こったか分からず、混乱していた。

暴食「残念だったね、本当に惜しかった。」

嫉妬「ま、マモン…何が起きたの…？」

強欲「……！まさか、蠅を体に纏って衝撃を無効にしたっていうのか…!？」

嫉妬「ど、どういうこと？」

強欲「皆さん、あの暴食が出てきた皮に注目してください。」

強欲に言われて皆が部舞台に顔を覗き込む。そこにあつたのは、異様に蠢いている蠅の集合体であった。

当に気持ち悪いの一言に尽きる物であった。

神司「何だアレ…」

零愛「うおえ……」

莉亜「父さん！零愛吐くかも！」

神司「直視するな！あと座って安静にしてろ！」

サグメ「水取ってくる！」

神司「ありがとう！」

とりあえず嘔吐しかけている零愛はサグメと苺亜に任ずとして、俺は蠅の集合体を直視する。

暴食の蠅……操れるとはいえ、あの光線を防げるのか……？ いや、あの蠅は鋭利なナイフにも変形して暴食の頭に刺していた。そこから血も出ていたのは事実。さらに暴食の蠅は蠅術『反射蠅』という反射板にもなれるからそうなのだろう。

暴食「それで？ レヴィアタン。勝者は僕だよね？」

嫉妬「そつ、そうだね。準々決勝第二回戦の勝者は、暴食のベルゼブブ！」

暴食「よし……！」

小さくガッツポーズをとる暴食。その後ろで光矢は担架に乗せられていた。

大丈夫だろうか。多分、腕の骨とか折れていそうだが、縁起が悪いのは考えないでおこう。

## 第134話 準々決勝戦 第三回戦（前編）

ゆつくりと目を覚ます。見えたのは、真つ白い壁だ。

もううんざりだ、壁は。

……だけど、突破出来たんだよな、あの壁には。成長したもんだな、俺も。  
？「……あつ、気がついた？名前わかる？」

女の声だ。その言い方的に医者か？俺に話しかけているのか。

名前……わかるぞ。俺は——

光矢「八剣 光矢……だよな？」

女医「合ってるわ。自分で起きれる？」

光矢「多分……痛ッ！」

利き手の左手を使って立とうとすると腕に電気が走って立てない。

女医「やっぱり痛いか。」

光矢「何が起きたんだ……？」

女医がカルテを持ってきて、俺に見せてきた。

そこには、『八剣 光矢』と書いていた。

女医「わかる？ここの割れ目。そこにヒビがあつて今にも折れそうなの。」

光矢「つまり、骨折寸前つてことか？」

女医「正解。」

なるほど、少し暴れ過ぎたつて訳か。

自己解釈したあとに、吸血鬼レミリアお嬢様とメイド咲ちゃんが入つてきた。

咲ちゃんだけは泣いて入つてきた。

咲夜「光矢……！」

光矢「あー、大丈夫——ッ！」

咲ちゃんか俺にギューつと抱きついてきた。

え？え？え？何この状況……？

咲夜「良かった……ホントに良かった……！」

泣きながら俺に抱きつく咲ちゃん。

つてか——

光矢「痛い痛い痛い！左腕つ、左腕の骨、ヒビ入つてんの！」

咲夜「え？ご、ごめんなさい……！」

レミイ「永琳、光矢の腕は治らないの？」

あつ、永琳先生だったのか。髪を結んでいなかったから分からなかった。

永琳「治りはするわ。でも三週間は安静にしないといけないわね。」

レミイ「光矢、貴方はその三週間は休暇を取りなさい。」

光矢「え？しかし、私は執事長なのですが……」

レミイ「大丈夫よ、その間は亜無に働いてもらうから。」

とぼつちりだな。御愁傷様、亜無……しかし俺の代わりの紅茶になるとどうなる。あいつは苦手だぞ、特にティーを淹れるのは。

まあ、だからと言って執事仕事ができる訳でもないか。ここは大人しくお嬢様の命令に従う。

光矢「はい、わかりました。」

レミイ「宜しい。」

それにしても、三週間の休暇か。急に言われても何すれば良いのかわかんねえし、フラン様と黒フラ様と飯事でもするか。

レミイ「暴れなければ良いわよね？」

上を指差しながら永琳に話すお嬢様。

ん？どうということ？

永琳「……ああ、良いわよ。」

レミイ「それじゃあ、行くわよ二人とも。」

光矢「どこへ行くのですか？」

レミイ「どこって…決まってるじゃない——第三回戦の会場、二回目の主従戦よ。」



嫉妬「さあ！第三回戦を始めて行きましょう！」

一、二回戦同様に歓声があがる。

三回戦…準々決勝。俺の順番だ。更には、相手がシロと言うじゃないか。『場を味方にする戦法』…警戒しつつ動かないと——っていうか……

神司「さっき見逃したけどさー…何で天叢雲剣を使用してきてんの？シロ！」

そう、姉ちゃん戦でさらっと使用していた天叢雲剣。その前から命儂戦の時に使っていた。

シロ「えへへ、認められちゃった♪」

神司「『認められた』って…俺全然使っていないのだが？」

シロ「使わなかったマスターが悪い！」

神司「そうだけでもね。」

反論不可能。シロの言う通り、使わなかったんだ。あの時、命儂戦では使う使わない

以前に苺亜や零愛たちを守るという意識が働いてしまっていて頭が回っていない。でも返さない理由にはならない。

神司「んじゃ：俺が勝ったら返してもらおうぞ。」

シロ「勝ったら、ね。」

俺が戦闘体勢をとるとシロも俺に続いて戦闘体勢をとる。それを見た強欲が開始の合図を出す。

強欲「それでは両者、用意：始め！」

神司「シロの剣術、見せてもらうぞ！邪刀『鬼神斬』！」

邪楼剣を桜色に光らせてシロに斬撃を放つ。シロは天叢雲剣の能力を使用して斬撃を破った。

なかなかやるな。しかしまだまだ未熟だ。

神司「邪炎『ソウルフレア』！」

次は邪楼剣に邪炎を附与してシロに邪炎を放ちながら斬る。するとシロはニヤリと微笑むと、

シロ「相性バツチりだね！水槍『アクア・グングニル』！」

水を槍のような形ににして邪炎を相殺させた。

やつぱ、一筋縄にはいかないか：

だが、勝てない相手ではない。

神司「はあ！」

相殺された直後にシロに向かって斬りつけた。

シロが剣を扱うのを見るのは初めてだ。

シロ「ハアア！」

神司「……剣の使い方に馴れてないだろ？」

シロ「そんなことないし！」

いや、明らかに剣に体が持つてかかっている。ならばサツサツと終わらすか？

『吸血鬼化』を唱えて背中から羽根を生やして犬歯を伸ばす。そしてシロに襲いかかる。

神司「『トランスヴァンパイア吸血鬼化』。壊してやるよ……精神をなあ？」

シロ「ツツ！水風『ウオータウィンドスピア』！」

神司「全然遅い。」

天叢雲剣の風を応用して水の槍の火力を上げた。がしかし、吸血鬼の俺には止まって見える。簡単に避けてシロの腹を蹴りあげてから邪楼剣の峰で叩き落とす。

嫉妬「とても速い！吸血鬼化神司には追い付けないのだろうか!？」

強欲「圧倒的な実践の差だな。」

神司「実践の差？確かにあるかもな。でも、馴れない戦闘は避けた方がいい。そうだ

ろ…？シロフォン・マレット。」

◆  
シロ「……」

確かにそうだ。そうやって改めて考えれば、今まで勝てた戦闘の中で唯一の共通点が一つある。それが『感情の高ぶり』だ。

負けたくない一心、怒り…その感情を全て闇や狂気に変えてきた。  
準々決勝戦もそれで勝てばいいんだ。

私を壊す…？強者振舞いしないでよ、マスター……ッ!!

シロ「……そうだね…それじゃあ、壊し合おうか！マスター！」

◆  
笑顔だ。いや、狂気染みているの間違いだ。

神司『夢！何かできるか!?!』

夢『……はっ、我は御主の友か何かか?』

神司『違うのか……?』

夢『笑わせるな、人間ごときが。そのまま従者に殺められる。』

そう言ってから夢は一切喋らなくなった。

チツ、誰を依り代に封印されていると思ってるんだよ。しょうがない。今まで通りで戦うとするか。しかし、ありや何なんだ?

シロの体の周りから紫色のオーラがうようよと動いている。

シロ「マスター！私はマスターを殺す気で行くよ。だから…壊れないでね?」

神司「それは此方のセリフだ——よッ!」

嫉妬「おおっと!先に仕掛けたのは神司だ!しかしシロの謎の紫オーラが襲いかかるウー!」

神司(鉤爪……?でも避けられないことはない。)刃符『円刃陣』。

自身の周りに刃を展開してシロの紫色のオーラに触れられないようにした。一応これで少しは攻撃から守れると思う。

シロに突進しながら紫色のオーラを対処する。

神司「シロー!俺だけを殺せよ!」

シロ「周りなんてどうでもいい。マスターさえ殺せれば——」

神司「なら一回休みになってもらうしかないな。」

オーラの中にいる本体の方へ直接、突きで攻撃を仕掛ける。

しかし、シロはオーラを厚くして刃が通らない

神司「チツ……」

シロ「ははっ♪絶対通さないよ！」

神司「あっそ……」

一度地に着いてから納刀してから次のスベカの用意をする。まさか――

神司「まさか……シロに使うことになるとはな……」

殺気がガチのシロだ。だから目を覚まさせる。夢に覚めてもらう。

神司「第壱人格『魔神斬り』……ッ！」

一気に抜刀して邪楼剣に纏わせていた邪気をシロを守るオーラにぶつける。

バチチツと音を立ててオーラに亀裂が入る。それを機に神剣『千本刃』を放つ。

シロ「ッ!? 負けない……!!」

神司「第肆人格『夜神銀河』……ッッ!!」

吸血鬼化した状態で神速の納刀からの抜刀をし、オーラを破りつつシロの左腕を斬り落とす。

シロの断末魔と共に紫色のオーラが割れたガラスのように弾けて碎ける。

シロは死にたくなる程の痛みが込み上げていて思わず天叢雲剣を落とす。それを俺

が拾い上げる。

神司「それじゃ、返してもらおうぞ。」

シロ「返し…てよ…ッ！」

声が震えながら俺に返せと乞う。相当痛いだろうな。でもシロを含めたマレット兄妹は俺と違つて不死で自動再生を持っている。

神司「返すかよ。シロは不死だからそれを利用してこれを奪いに来いよ。」

シロ「！絶対<sup>殺し</sup>にッ！奪<sup>合</sup>つてみせる…ッ！！」

さて、家族喧嘩<sup>殺し合</sup>を始めようか――。

## 第135話 準々決勝戦 第三回戦（後編）

シロ「水槍『アクア・ザ・グングニル』ッ！」

神司「神劍『千本刃』！」

水の槍と刃が相殺しまくる。こんなのは無意味、だと承知の上である。

シロは焦っている。左腕の再生が追い付いていない。

今の内だと感じたので、邪楼剣でシロに斬り付けたが、シロは風を自身の周りに展開していた。

シロ「風符『ハリケーン』。その刃は通さないよ。」

神司「はっ、目には目を。風には風をッ！風神『魔眼風舞刃』！」  
まがんふうまじん

ここで初めて邪楼剣の能力を発動させる。能力は、『重さを自由自在に変える程度の能力』。

その能力を使用して邪楼剣と天叢雲剣の重さを軽くした。そして両刃に風を纏わせてシロの風バリアに猛攻撃を繰り出す。

神司「ハアアアア——ッ!!」

嫉妬「神司の連打！連打！連打!!が止まらないイ——!!」

強欲「さて、どこで終わるかな…?」

——風には流れがある。

例え上下左右に動く風で不規則な動きだったとしても、必ずしも何処かには絶対に共通の流れがある。

連打しながらでも流れの道を見つけてやる。

シロ（ヤバイ、少しでも気を緩めたら必ずマスターに斬り刻まれる。何とかして脱け出さないと——）

神司「ー見つけた。」

シロ「え……ッ！」

流れをしっかりと見つけたので次のスペカを準備する。

神司「風符『神風刃』！」

風の壁の流れに天叢雲剣の風を放つ。すると風の壁は止まって消えた。

シロ「嘘!？」

神司「余所見と油断！」

シロ「うゝうゝっ!!」

やっと再生した左腕ごと斬る。再びシロの断末魔が聞こえる。それに紛れてサグメが俺を止める声が聞こえた。しかし止まる気はない。シロが気絶、又は降参をするのを

待っている。

一度、四肢切断させて降参に仕向けるのも有りだが、流石に子供の前では教育に良くない。

俺は一切負ける気持ちはないからここまでしているのだ。

シロ「うう……っ……痛いよ……助けて、お兄ちゃん……」

神司「兄に助けを乞うか。良いぜ、呼んでやるよ。魔術『雷獣召喚』ッ。」

シロ「ッ!?!」

紅い魔方陣が地面に展開されてそこからドラが召喚された。ちらりとシロは実況席を見る。召喚スペルはルールにはない。

嫉妬「おおっとお!?!これは……アリのなのでしょう……?」

強欲「アリだな。無しとはルールに書いてネエからな。自由にやれってこつたア……」

神司「っし、許可は得たぜ……」

ドラ「なぜこのような真似を……」

神司「なぜかな?主従で一人ずつ闘ってみただけど戦闘に馴れていない……のかなあ?闘い方がなってない。だからこの際、兄妹なら強いのか試したくてな。邪符『神降禁術』、見せてみるよ……!兄妹の絆をよお!!」

ここで俺はクロムを神降しを行い、俺の精神内に無理矢理降ろした。そしてクロムに夢の封印を解いた。

そうすることによって俺はガキの身長から元の身長に戻った。

夢『ハ…?』

クロム『そうしねえと相棒の本気が出せねえからな。』

夢『だからと言って我の封印を解いて良いのか?』

クロム『——安心しろよ。俺が食い止めるから勝手に暴れさせたりはさせない。邪神に誓ってだ。』

神司「ありがとう、クロム…」

クロム『思いつきり遊んでやれ。』

神司「……ああ。」

嫉妬「神司の体が漆黒に光ったかと思うとその瞬間になんと！青年の姿に——いや?!元の姿に戻ったのかア——!!?」

強欲「従者相手にそこまで本気になるか……?」

マモンよ……らしくないな。その罪<sup>強欲</sup>でいるのであれば家族愛という欲に溺れる筈なんだがな。

神司「ドラ、シロ…俺を殺せ。」

ドラシロ「ッ!?!」

嫉妬「それはルール違反です。」

神司「大丈夫だよ。死なないから。」

ドラ「それは余裕だからですか？」

シロ「舐めてるの？」

神司「負けせばいいんだよ、俺をな。掛からないのか？なら俺から掛かるぜ。神劍『千本刃』。」

ドラシロ「……………」

ドラは左にシロは右に避けた。千本を避けるのは簡単だろう。まずはこれでドラのために準備体操だ。

避け続けていたドラが急にスピードアップして俺に斬りかかってきた。流星は雷獣だ。速い——！

咄嗟に邪桜剣で防ぐ。

ドラ「……………」

ドラが力負けて距離をとった。そりゃあそうだろう。あの時は夢の封印のせい<sup>前</sup>で力が半分以上も出せなかった。今なら100%の力が出せる。つまり本気<sup>ガチ</sup>だ。

神司「どうした？まだ全然余裕だぞ。」

シロ「五月蠅い！」

シロが何本もの水槍『アクア・グングニル』を放っていた。本当、全然戦闘に馴れていない。疎らに射つならしっかり狙って射て。

神司「刃符『円刃陣』。」

自身の周りに刃の結界を張る。このぐらいの雨なら全然防げる。

バシャバシャと音を立てて落ちる水の槍。余りにも弱い。

すぐに結界を解くと、シロに向かって桜符『風舞桜』を放ち上に斬り飛ばした。

シロ「うぐっ……！」

ドラ「くそっ……！雷迅『建御雷』……！！」

シロ「痛……！暴風『テンペスト・the・crazy』！！」

シロが立ち上がるとすぐに今度は二人合わせて攻撃を仕掛けてきた。ドラは身体全体に青と黄色の雷を纏いながら俺を斬りに掛かり、シロは風で作った龍を俺目がけて打ち、そして俺は風に取り込まれた。

風の龍に呑み込まれる前に無界『音無結界』を自身に張って防ぐ。さらに結界の中で目を瞑って予知を確認する。

そこにはシロのスペカが終わった瞬間に来るドラのスペカが見えた。

成る程、それなら結界は解かなくて良いという訳か。

そう考察しているとシロのスペカの効果が切れた。

神司「さて：ツ!?」

ドラが来るまでは予知できた。が、結界を斬るところまでは見れていない。

咄嗟の判断で再び邪桜剣で防ぐが、急なことで力負けしてしまった。

ドラ「まだまだアー!!」

神司「ツ——!!」

油断大敵だったのは俺自身だった!

このまま圧されると態勢が崩れる。あんなに余裕をかましていたのに我が従者兄妹に負けるのは流石にカツコ悪い。だからこそ、負けられない…!

神司「スキマ展開!」

ドラ「うおっ…!!」

俺の背中にスキマを開いたことよって回避した。一難が去った。

ドラ『雷速』ツ!

神司「なあ!」

ドラの声が聞こえた瞬間に足に雷を付与して斬りかかってきた。

ギリギリを避けたと思ったが横腹を擦った。

どういう訳だ…!まさかあの瞬間に入ったという訳か!?

神司「ドラが来るのは予想外なんだよ！戻るぞ！」

ドラ「追い付きますよ！」

またスキマを開いて部舞台に戻ってきた。

そこにはシロが風を纏わせた水槍を何百本を展開して空中に浮かんで待っていた。

シロ「両符『アクアスピア・風』。待ってた、よっ！」

まさかの一気に全部放った。近くに長男ドラが居る——いない。

いつの間にかシロの下に移動していた。

神司「マジですか……はあ——トランス・デーモンこんなの攻撃系スペカはいらないな。『悪魔化』……  
終らせる。」

予知能力をフル可動させて水槍を全て避けた。俺のスピードは今のだと幻想郷一だ。

動け、動け、動け。今からは絶対に止まることを許さない。

とりあえず、シロのスペカは終了した。このスピード、ドラとどちらが速いのか。なんてことは今は関係ない。

ドラの眼が追い付いても無駄だ。

ドラ「雷獣『迅雷獣牙』ツ!!」

獣人の本性の獣の力に雷の素早さをプラスにして素早さを大幅に上げながら雷炎で斬りにきた。

神司「チツ、しつこいなあ！神撃『一撃一閃』！」

邪桜剣の刃に邪気を纏わせて防ぎながらも距離をとる。空中に浮かびマレット兄妹を見下ろす。

そして左手を前に出す。

神司「避けれるモンなら避けてみる！風神剣『千本風刃』！」

周りに風が付与された999本の刃を展開した。

『避けられる』、判っている。だから、もう一つ、スペルカードを宣言する。

神司「邪脚『ブラッドストーム』……！」

ドラシロ「「ッッッ?」」

右足で空を蹴り暴風を起こす。それに引かれていくドラとシロ。さらに、風に付与された999本の刃。不可能弾幕とはこのこと。

ドラは必死に逃げようとするが、シロは一切動かない。疲れているのか息が荒いのが判った。

この勝負は俺とシロの勝負だ。つまりはシロ負ければ俺の勝ちだ。

しかし、また俺は甘かった。

シロ「うう……！あああああ!!!」

急に咆哮を上げて部舞台に大きなクレーターをつくる。

シロの奴、またキラティナイドの血の暴走か……!

神司「ドラ、今までに一番強いスペカ、使えるか……?」

ドラ「任せて下さい……! 妹のためなら、やります!」

神司「よく言ったツ! 第五人格『鬼神邪楼斬』!!」

ドラ「雷神『健<sup>タケミ</sup>雷<sup>カミ</sup>命<sup>チノミコト</sup>』!」

俺は縦横斜めに米字斬りをし、ドラは雷に乗ってシロを斬り落とした。

シロは感電しながらも闇を纏い感電を無くした。

神司「任せろ……!」

油断も束の間、シロが安心した瞬間に峰打ちで斬り、意識を落とした。

神司「次は訓練が必要だな。」

嫉妬「決まったア!! 思わず私や強欲も見とれてしまう程の死闘でありました!——つこと

で、勝者は神司イ!!」

これでやっと、俺の準々決勝は終わった。

## 第136話 準々決勝戦 第四回戦（前編）

嫉妬「さあさ、準々決勝最終ラウンド！飾るのは、弟子の娘に容赦無し！邪神の王に統べる者、神ノ邪神は仮の名か!?アベル・サタナキア！」

神ノ「ハツハ、ラツプみてえだな。」

晁雅宗を肩に掛けて笑う神ノ。余裕そうだな。

レミ「余裕そうだな、神ノ邪神。」

神ノ「レミリア…！」

まさかレミリアお嬢様が神ノに話し掛けるとは。

レミ「その余裕な姿もここまでだ。黒フラ、勝ちなさい。」

黒フラ「はい♪」

華麗に跳び部舞台に舞い降りる。思わず見蕩れてしまいそうだ。

黒フラ「次の挑戦者はだくれだ？」

神ノ「おれ〜♪」

皆が黙る。今まで神ノと黒フラを応援やコールしていた観客たちが神ノの反応により、黙ってしまった。

嫉妬「さ、さあて、役者は揃った！それじゃ始めてもらうよ！」

強欲「さてつと、両者用意——始めッ！」

両者開始された瞬間に空に飛んで空中戦になった。

神ノ「予選で大体判ったぞ。クーちゃん。模倣だろ、あんたの能力。」

黒フラ「気軽にクーちゃん呼ばわりしないで。判ったのは分かったけど、零愛ちゃんにしたこと、まだ怒ってるんだから！」

神ノ「おけおけ。そんなに倒したいのなら、俺のスペカを模倣してみろ。第一人格『邪神斬り』……！」

勢いよく黒フラに斬り掛かるが、黒フラは咄嗟に邪桜剣を模倣して第一人格も模倣した。金属音が鳴り続き、空中戦をする。

模倣するのは良いんだが、よくクーちゃんが、神ノそれに追い付けるのが凄い。

神ノ「ハツハア！追い付けるのか!?体が反応してるのか?それとも動かしているのか?」

黒フラ（勝たなきや零愛に申し訳ない……!）

神ノ（キリがない……しかし、どこまで模倣できているのか……そこが疑問だな。なら変えてやるか。）第六人格『無に現なし』……デスピアスサイスか……斬首!」

嫉妬「何か、神n……アベルは楽しんでる様に見えますが解説からはどう見えますか?」

強欲「うーむ…いや、楽しんでるわ。こりや実況も解説もいらないわ。」

観客（（言っちゃったよ！この解説!!））

とうとう言っちゃったよ、この強欲の悪魔は。解説が一番言っちゃダメだろ。

と、言いつつも強欲は淡々と解説していた。何々だよ、全く。

斬首されかける黒フラは、急降下して下から光矢のスペル、『ライトニングスパーク』を放つ。

神ノ「第二人格『鋼の鎧硬め』。効かねえよ。」

黒フラ「はあ…ウザい、ハッキリ言つてウザいよ。」

神ノレミ「!!?」

え?クーちゃんが罵倒…?反抗期に入ったのか?いや違うだろう。零愛を傷つけた怒り現れだ。

反省していないようにヘラヘラと笑う神ノのことが相等、嫌悪感を抱いたのだろう。

確かに神ノの煽りに対応すればより煽られ怒りが増す。だけど、一番信頼しやすくて家族思いなやつだ。

神ノ「あはは…ウザい、か…——今更か?」

黒フラ「開き直るつもり?」

神ノ「そうだな。開き直らせてもらおう。さあ…（俺の煽りに）堪えられるかな!」

鎌を振り回して腕を切断しようとするが、黒フラは回避。怒っている割には冷静に回避している。

あの無邪気なクーちゃんがここまで本気なのは初めて見た。

神ノ「ほらほらッ、ほらほらア！」

黒フラ「ッ……！第二人格『鋼の鎧硬め』！」

神ノ「模倣ってよりも疑似能力じゃないのか？その能力はよオ?!」

黒フラ「……！」

その質問はなかなか酷い。

程度の能力は個人のオリジナルだ。だからこそできる可能性がある。模倣能力だつてそうだ。誰が能力や技のみをコピーするだけの能力と言った。

決めたのはブラックドール・スカーレット、本人だ。

黒フラ「……そうだよ……！模倣が能力だつて言うなら、とことん真似してやる……!!」

そう言うのと黒フラは姿を変えて漆黒の竜の姿になった。

———という原理……？

神ノ「へえ、模倣を越えたか。」

黒フラ「模倣というのは真似をするということ。でも……真似するだけじゃ限界があるならば、真似の対象がこうするのではないかと考えれば、模倣真似を越えることができる……

！

嫉妬「まさかのここで……！能力が覚醒した黒フラア！」

強欲「理解不能な人たちに説明をするとだな。程度の能力とは未だに明らかになつていない能力、はつきりしていかない。そのため、能力には『覚醒』というモノがある。その例の一つが、ブラックドール・スカーレットだ。」

程度の能力の『覚醒』……!!!

確かに程度というのはハッキリとしていない時に使われる。なら、その程度を越えることが可能だ。

俺も出来るのだろうか。いや、しなければならぬんだ。

黒フラ「……」

神ノ「まつ、別に竜なんてテンプレ的なことにならなくてもいいけどな。」

黒フラ「……それもそうだね。」

クーちゃん、竜の姿から元の姿に戻ったが、羽根がフランの様ではなく、レミリアの様が変わっていた。

それも覚醒の一つなのか。

黒フラ「神ノも覚醒してるでしょ。」

神ノ「まあね。でも疲れるからしたくないのよね。」

黒フラ「——それじゃあ、降参<sup>ま</sup>けて…!!」

神ノ「勝率は自分自身で作るモンだ、ぜ…!!」

お互いの拳がぶつかり合う衝撃が強い。

破壊の妹の狂気の塊と邪神を従わす程の悪魔が死闘しているんだ。そりゃあ、衝撃が強いのは当たり前だ。しかし、妙だ。神ノがめんどくさがり屋なのは承知しているが、戦闘好き、面白い物好きの神ノがここで疲れると言うのは本当に妙だ。考えられる可能性は……何かを待っている—。

神ノ「ハハア！中々力強くなってるじゃん！」

黒フラ「本気だよッ…！付与『雷神』！」

神ノ「ッ!？」

殴り合っていたクーちゃんの手が急加速する。神ノは、それを防げずに連打に襲われた。

あの神ノが押し負け…？んな訳ない。今までにそんなことは有り得ない。

嫉妬「なんと！黒フラの拳が雷降のように連打が止まらないイイ!!」

強欲「圧倒的連打の嵐。さて、神ノ邪神はどうする…?!」

神ノ「ッ——、はあ、緩い。」

黒フラ「!? ううっ…!!」

連打に負けていた神ノが黒フラの顎にひじ打ちを喰らわせた。

思わず、ガッツポーズをとる悪魔が何体か見えた。

ニヤリと笑う神ノは、黒フラの腹に連打を入れ始めた。

嫉妬「今度は逆に神ノが殴打！」

強欲「楽しんでやがる……！戦鬪を……！！」

止まらない殴打、苦しむクーちゃん。そして、楽しむ神ノ。

悪魔だ。神ノ邪神は……！！

神ノ「——オラオラオラオラ……！オラア！」

黒フラ「……！！」

吹き飛ばされるクーちゃん。神ノは呼吸をゆっくりと整えている。

クーちゃんは直ぐに立ち上がるが、ふらふらしている。軽い脳震盪で膝を着いてしま  
うが頑張つて立とうとしている。

神ノ「もう止める。ブラツクドール。幾ら吸血鬼だからと言って、死にはするんだ。」

黒フラ「ヤ、ダツ……ネ！模倣『オールフルジェネレーション』……！！」

クーちゃんが展開したのは、水と風の槍、炎と雷の竜と999本の刃、大勢の光の矢  
だった。

神ノ「おおつ……強化模倣のオンパレードだな……」

綺麗でカッコいい弾幕だ。スペルカードルールでは満点の弾幕なんだが、神ノはサツサツと避けていく。

神ノ「さてつと……ブラックドール！俺を殺したいんだろ?!」

黒フラ「……!もつと言うなら、壊したい……!!」

神ノ「そうか。でもこんな状態じゃ、本気出せないよね?」

黒フラ「ツ……!」

神ノ「チャンスをやる。もう一度完璧な状態で俺を殺こわしてみろ。ただし、覚醒した俺をな。」

黒フラ「ツ!?ツ……!!」

## 第137話 準々決勝 第四回戦（後編）

神ノ「そんじゃまあ、悪魔共。待たせたなア……神ノ邪神こと、アベル・サタナキアの本気、見せてやるよ……！」

神ノは、そう言うといつも身につけている黒いマフラーを外した。

すると、髪色が白くなり、邪気と魔力が跳ね上がった。

初めて見る。マフラーを外した姿や勿論、白髪神ノも……

神ノ「最終形態……かは知らん。ただ……俺の覚醒verなのは確かだ。」

黒フラ「ツ……」

神ノ「……さあて！どつちが先に壊れるか勝負だ！ブラックドール!!!」

「ハハハハッ」と笑いながら瞬間的にクーちゃんの前に止まる。

神ノ『『能力覚醒』……暇『退屈な遊戯』』

クーちゃんが急に吹っ飛ぶ。吹っ飛ばされた先を見ると場外。つまりは、神ノの勝ちだ。

嫉妬「なっ……!?なんと!?場外!!!ブラックドール、場外です！勝者、アベル・サタナキア!!!」

一部の神ノ崇拜の悪魔は歓声を上げるが、それ以外の観客は啞然呆然だった。何が起こったのか分からずこの試合は終わった。



【医務室】

神司「どうなんだ？永淋。」

永淋「どうなのって……左腕骨折だけよ。」

レミ「それだけなの!？」

永淋「落ち着きなさい。そうよ。でも記憶に障害——」

苺亜「それなら僕の使用します。元のクーちゃんの記憶をインプットするだけなので。」

永淋「相変わらず便利な能力……」

苺亜「先生、逆ですよ……皮肉な能力でムカついてます。」

下を向いて怒りがこみ上げる息子の姿を見て、そつと肩に手を置き「優しいな、苺亜は。」と言うと、泣き出してしまった。あんな異変に自身の能力を悪用してしまったことを悔やんでいるんだろう。本当に優しい子に育ってくれた。ありがとう。

しかし何だ。神ノの野郎……零愛に続けてクーちゃんに場外勝ち。何が、したいんだ

……。

レミ「……アベル……サタナキア……ッ!!」



神ノ「……」

暴食「神ノ様……」

神ノ「……シリアスか、ははは。」

流石にやり過ぎた。レミリアに殺される。暴食がやった光矢の件、先ほど俺が倒した黒フラの件。二人とも紅魔館メンバーだ。もう怒り狂っている筈だ。

神ノ「はあ……」

闘技場の壁の上に座り、黄昏ている。マフラーも着けて髪色も元の黒色に。やり過ぎた、本当にやり過ぎてしまった。

あの瞬間、何が起こったのか話そう。

俺は黒フラに近づいた時に、俺の能力『暇をもて余す程度の能力』を覚醒させた。暇な時、生き物は何をするか。それは遊戯だ。

俺が行った遊戯は、黒フラのことを玩具のように扱い、ただ遊ぶ隙る隙ることを超高速に繰り

返しただけなのだ。

速すぎた。だから他の人から見れば俺は何もせず黒フラだけが吹っ飛ぶように見えたのだ。

これが先ほどの全貌だ。

神ノ「やってしまったなあ…」

「はあ」と溜め息を一つつこうとしたら、殺気を感じた。その方を見ると紅い槍が飛んできていた。

右手で受け止めると同時に蹴りを入れてきた。すぐに左手でその足を掴む。

? 「クソツツ！ 離せ！」

神ノ「レミリア…!!」

なんて早い復讐だろうか。

離せと言われたのでとりあえず離す。でもそのままの勢いだと、まだ向かってくる気がするが。だからこそ先に謝る。

神ノ「ブラックドールと光矢の件は本当にやり過ぎたと思ってる。すまない。」

レミ「謝ろうが無駄なこと。やった事実だけが残っているんだ！」

神ノ「…!! 確かにそうだ…:…: だけどあれは死闘なんだぞ!!」

レミ「ツツ!!」

神ノ「あの場に立った以上、死ぬ気で闘うしかない。それでブラックドールは闘った。しかし負けた。」

レミ「何を言ってるんだ……！妹を持つ姉の気も知らないで……！！」

神ノ「逆上か?!レミリア！誇り高き紅魔のスカレットの血筋はどこへ行った?!妹が傷付いて怒るなら何故止めなかった?!お前は二女の姉なんだろ!!」

レミリアの胸ぐらを掴む。

レミ「ッ!?!」

神ノ「守ってやれよ！気づいてやれよ！妹の気持ちをや！執事もよく暴食をあそこまです追いつ込んだと思つて賞賛したさ。ブラックドールもだ。俺は、能力を使用せずに勝とうしていたら能力が覚醒し、俺も覚醒せざるおけない状況まで追いつ込まれた。スゲーよ、紅魔館メンバーは！ミカエルを二人で倒せるんだろ!?!」

レミ「……」

声を荒くしながら問う。今回の戦闘を含めて予選も紅魔館メンバーは良い闘いを見せてくれた。生き物と言うのは苦しい時に覚醒を見せてくれる。だから本戦を開催した。

胸ぐらを離す。レミリアは地に膝をつく。そして涙を流す。

やっと気づいたのだろう。

レミ「…私は…ただ、熱くなりすぎていただけ…」

神ノ「そうだよ。主従なんて関係無しに、レミアは『紅魔館ファミリーを負けない』と考えていたのか知らないが、戦闘に熱中していただけなんだ……だけど戦闘に熱中していたのは俺らも同じだ。選手だもん。」

レミ「…ごめんなさい、神ノ邪神。」

神ノ「神ノで良いよ。もしくはアベル。」

相当シヨックを受けたか。しゃーない。おぶってやるか。「歩けるか？」と首を横に振るからおぶった。

神ノ「あつ、暴食は次の試合があるから先に休んできな。」

暴食「了解しました。」

振り戻って黒フラや光矢がいる医務室を探すのに道を迷ってしまつて時間がかかつてしまったのは俺とお嬢様の二人だけの秘密だ。

## 第138話 覚醒能力 VS 覚醒能力

嫉妬「さあ！長かった本戦も残り三戦になりました！」

強欲「何でもアリだったがもう流星にないことを願いたいな。」

嫉妬「でもさ、次の試合……」

強欲「次の——あつ、そうだったな……」

嫉妬「さて気を取り直して、準決勝一人目は！邪神王を追い詰め、魔力切れの降参にさせた紅魔館の居候！紅風 亜無く!!!」

歓声の中から名前を呼ばれた亜無はテンションをアゲて登場すると思っていたが、顔がマジになっていた。

亜無「……」

嫉妬「さて！二人目は——光魔こうまの執事を振りで逆転勝利を収めし、暴食の悪魔 ベルゼブブく!!!」

暴食「次の実験台は……君かな？」

歓声上がる。特に女性人が。

あの身長約156cmの青年が人気なのか、もしくは上位悪魔の七つの大罪だからな

のかは定かではない。

嫉妬「——ということまで役者はそろった!!」

強欲「両者用意……始めッ！」

暴食「亜無くん、光矢の仇とか考えてる？」

亜無「ッ！気づいていたのか……」

暴食「殺気漏れ漏れ。そういうや光矢の腕、骨折しているんだっけ？」

亜無「お前のお陰でな。」

暴食「その件はごめんね！熱くなりすぎたんだ。」

両手をパンツと合わせる。多分、光矢の件で謝っているんだろう。

亜無「許す気はない……ただ、能力覚醒をしたくて堪らないだけなんだよ！」

亜無の殺気がドツと上がった。亜無の能力は、『無かったことを有りにする程度の能力』と『嘘を見分ける程度の能力』。どちらか覚醒した。

力』と『嘘を見分ける程度の能力』。どちらか覚醒した。

亜無「ベルゼブブ……俺の能力を覚えているか……？」

暴食「確か、『嘘を見分ける程度の能力』と『無かったことを有りにする程度の能力』

だよね？」

亜無「そうだよ……まあ、物は試しだ。」

一体何をするのか、見ていたら判る能力ではなかった。



亜無「これが光矢の分だ。」

暴食「グググツ…!!そう、か…! 亜無くんの覚醒能力は——グウウ?!」

紅風嘘無剣を創ると膝着いている暴食の腹を刺した。

亜無「シー……まだ言うな。神司さんが勝ち上がって来るまで黙ってな?」

暴食「この…野郎……ツ!!」

亜無「ああ? 死ぬか?」

暴食「嫌だね! 僕も覚醒するよ!」

暴食の能力は『腐食させる程度の能力』。大体のことが予想できるが果たして…。

暴食の邪気と魔力が上がるのを身で感じた。暴食はスピードが上がると亜無の肩に触れた。

亜無「…その真意は…?」

暴食「スキル『腐食』スイアウロスイ。しかし、腐食させるだけでは我が『暴食』には物足りない。《食

べ狂い》のベルゼブブ。貴様のことも食らい尽くしてやるよ…!♪」

ニイイと笑う暴食は亜無の肩にかぶり付いた。

亜無は叫び、観客は引く。特に暴食のことを応援していた女性人悪魔たちが引いていた

た  
亜無「ツ!」

暴食「……物理的ぶちゆりへきはほだろ？……まっ、食ったのは別だがな。」

亜無「はあ？」

今回の戦闘が『覚醒』なだけあって、色々と無茶苦茶だ。理解するのだけでも大変だ。

暴食「敢えて言おう。僕の『覚醒』は、全てを食らう能力だ。物は勿論、概念や理なども食らう。」

亜無「つまりは…何だ？」

暴食「お前の魔力を頂いた。」

亜無「!?」

そんなことが有り得るのかと自身に問うが、腐食の能力だと暴食本来の罪と一致しない。ならば、暴食本来の能力が存在すると考えるのが、妥当だろう。

だからこそなのか、全てを食らう能力が暴食の罪に合っている。

暴食は「クククツ」と静かに笑うと亜無の周り全体に魔方陣を展開した。

暴食「食え、反魔『全魔法』フル・マジック。」

虹色に放たれる無数の光線。しかし、亜無に当たる前に光線が消えた。

亜無『全ての魔力の攻撃を受け入れる』と俺は勝てなくなる。だから負けてしまう。」

暴食「……あく、なるほど？食ってやるよ、お前の『嘘』を。」

亜無「小声で喋るな、ベルゼブブ。俺が負けること勿れ。腐食に任せない様に注意し

ろ。」

亜無の会話が急にバグる。何を言っているのかさっぱりだ。だけど暴食は理解している。せめて亜無の覚醒能力が解れば……。

嫉妬「おおっと！綺麗な弾幕の次は、肉弾戦だ!!」

強欲「それにしても亜無はさつきから何を言っているんだ？」

嫉妬「解らない？亜無は逆さ言葉を使っているんだよ。」

神・強「逆さ言葉ア??」

嫉妬「例えば、『上に行くぞー!』は『下に戻るぞー!』になったり、『避ける!』が『受け取ってやるよ!』になったりと言った感じになる。」

そういう覚醒能力か。やっと理解できた。それなら暴食に触れなくとも攻撃が可能になる。

因みにどんな覚醒能力なのかというと、嘘が本当になる能力と俺は推測する。

多分だが、『無かったことを有りにする程度の能力』と『嘘を見分ける程度の能力』が『覚醒』によって融合して、『虚言と反対のことが起きる能力』に進化した訳だ。なんかサグメの『逆転させる程度の能力』に似てるな。発動条件があるけど。

亜無「当たらねえな！痛くないな！早く勝っちまえ！暴食!!」

暴食「ホント、厄介な能力だね！蠅符『ディオヴオロスフィスト!』」

蠅を拳に纏わせてそれを放つ。放つだけならまだ良かったが、数えきれない程の蠅が亜無を襲う。

亜無（ツ!?くそつ、喋れない…!虚言を吐くには口を開かなければならない…でも口を開くと大量の蠅が口の中に…）

暴食「残念だね! 蝕<sup>むしばみ</sup>『腐食する息吹』!」

大量発生の蠅を追加で増加させた。もうキモいを越えて、おぞましい。疑似死体の時の蠅よりエグい。

嫉妬「何なんだ!?あの大量の蠅たちは!!?」

強欲「あんだだけの魔力を一体どこから…!?」

暴食「僕は喰らったのさ、亜無くんの魔力をねツ!」

亜無「!?」

暴食「先程、魔力を頂いたよね? 亜無くんの魔力を奪ったけど、さつきのは僕の魔力<sup>嘘付け</sup>。」

やりやがった。亜無は蠅が口の中に入らないようにしているため喋れない。

つまりは――

嫉妬「ベルゼブブが優勢だ…!」

亜無（チツ…）

覚醒能力 VS 覚醒能力：どちらも狂ってるほどチートだ。

しかし、あんだだけのチートっ振りな亜無をここまで追い詰めるベルゼブブの『全てを食らう能力』が上手になるなんて。

だけど、亜無の勝率はまだある。

亜無「やけくそだ！」

暴食「もう遅い。」

一気にスピードを上げてベルゼブブに殴りに掛かったが、簡単に拳を止められて、蠅で付与した拳を亜無の溝に入れた。

亜無「カハツ……！」

暴食「終わりだな。」

蠅をゼロ距離で放射して亜無に食らわす。何百、何千万の蠅が亜無を取り込んでぶつかる。

この蠅はベルゼブブの魔力によって強化されてまるで一匹一匹が鉛玉の硬さになる。

全部の蠅が通り過ぎると、亜無はフラフラと立っていたが、30秒位すると、バタリと倒れた。

嫉妬「ここで試合終了だアー!!まさかのチート使いの亜無がダウン!勝者は、暴食のベルゼブブー!!!」

暴食「お疲れ様、亜無くん。」

## 第139話？ 魔人 VS 器人

神ノ「さあゝって、神司！本戦前に一戦しようぜ！」

神司「なんだよそのテンション……」

準決勝一回戦目が終わってから、家族で博麗神社に戻ろうとした時に神ノに止められた。

って言うか、本戦前って……それ、一日前なんだが……戦闘狂の神ノのことだ。少しでも俺と闘いたいらうな。でも、家族たちがなあ……

サグメの方にチラツと視線を向けると、サグメはニコツと笑って「大丈夫ですよ。」と言ってくれた。なら言葉に甘えて行ってくるか。

神司「それじゃあ、行ってくるよ。」

手を振って見送る。サグメがニコニコして手を振り返してくれた。やっぱりニコニコしてるサグメは可愛い。

サグメが見えなくなるまで待っていると、神ノに肩を叩かれた。

神ノ「良いお嫁さんを見つけたな。」

神司「ああ、本当にいい人だよ。サグメは。」

神ノ「ふーん……あつごめん神司、ちよつと待つててくれないか?」

神司「ん、おお……」

神ノが大急ぎで家族が歩いて行つた方に走つて行つた。

サグメにはホントに感謝している。初めて会つたときは死にそうだったところを助けたつけ。何があつたかはまだ聞いていない。いや、聞くのが怖いと言つた方がいいだろう。片方の羽根が千切れて、そこに正邪が包まれていた。今までの話しの中で、サグメは月から来たと思つている。一体、過去に月で何が起きたのだろうか……

神ノ「神司どうした?」

歸つてきた神ノがどうしたのだと思ひ、俺に話しかける。

神司「ちよつと考え事……」

神ノ「何を考へているかは判らないが、言いたいことがあるならばつきり言つた方がいいぞ。結構単純な答えかもしれないぞ。」

神司「そうだな……そうだな! 聞いてみるよ!」

神ノ「おう! 何かは知らんが解決して良かった! さあ! 闘うために移動するか!」



神司「結局、部舞台で闘うのか。」

神ノ「雰囲気作りも必要だろ？」

神司「まあ……」

あれ？俺って流されやすいのか？

神ノ「……っし、やるかあゝ晁雅宗、暴れるぜ。」

神司「晁雅宗？」

神ノ「俺の愛刀にして相棒だよ。」

あれは……零愛を倒した時に使用していた長刀か……見ていた限り、あまり使っている様子がなかった。いや、あれは速すぎて見えなかった。

神ノ「まあ、長刀って言っても、手作り感満載だけだな。」

晁雅宗を眺めながら撫でる神ノ。俺の邪楼剣も結構長い付き合いだよな。そろそろ付喪神でも……なんちやって。

神ノ「さて、最初っから本気出しますか。」

神司「ツ!?!」

一気に邪気と魔力が跳ね上がる。この感じはまさか……!

神ノ「クククツ、着いてこいよ？稀神 神司！能力覚醒!!」

気づいた頃には、俺の目の前に居て左腕を晁雅宗で叩かれていた。その瞬間、腕の骨

が粉碎された。

神司「ぐあっ…!？」

神ノ「なんだア? 軽く叩いただけだぜ? 覚醒しろよ。簡単だぜ?」

神司「ツ!ぐううう…」

その場に蹲る。腕が痛い。今までに無い痛みすぎて上手く喋れない。

簡単に神ノの誘いに乗った俺が悪かった。辛い。

それに、簡単に覚醒しろと言うなよ、簡単じゃないんだよ! コツとかも何も分からないっのに!

どうにか立って邪楼剣を抜刀する。

どうする…: 神ノの刀捌きは、常人じゃない。ましてや、人格技を使ってくる。覚醒状態での人格技はまだ見たことない。

神司「…:…: 来た…:!!」

神ノ「ツ!」

俺には予知がある。それなら相手が来る前にそこから避ければいい。

結果、左から来た神ノの攻撃を後ろに避けた。避けれたのはいい。ここまでならの話だが。

そのまま神ノは方向転換して下がってきた所まで近づいて俺の左足をぶつ叩く。

崩れるように膝から倒れて痛みと葛藤する。俺の予知があっても避けきれない。

神司「ぐあつ——!!ううツ……」

神ノ「あーあー、少しは耐えろよな。おめえーマジで成長しないの何なん?こんなだから、夢司人命神に精神負けんだろ?少しは勝とうという姿勢しろよ。ダセエなア。」

神司「……ね……」

神ノ「ん?」

神司「死ぬよ……!!カスな失敗作がア——!!」

神ノ「うおっ……」

俺の身体が銀色に光る。何なのだろうか……この、楽観的な気持ちは。今なら今まで出来なかったことも出来そうな気がする。

神ノに対して右手を向けると、銀色の刃が四本が四方に向いた。

何だ?このスペル……やったことがないのに何が起きるか判る。

神ノ「(何も起きないのか……)こっちから仕掛けるぞ!第一人格『邪神斬り』!!」

神司「爆風『鎌鼬』」

四本の刃の先端から風が飛び、神ノを切り裂く。切り裂いた箇所から血が流れ出す。何が起こったか理解出来ない神ノに続いて斬撃を入れる。

神ノ(第一人格が効かなかった……!?いや、防がれたが合っている……のか……?それにし

ても、あれが神司の覚醒か…? そうだとすると——なんて都合が良いんだ…! ) よく当たてたな! 」

神司「黙れ。」

神司「! ? 」

「神司の魔力が更に上がる。予知だけが覚醒したのではない。それはもう一つの能力にも反映されている。」

神司が右手の刃を解除してから、上に挙げる。すると、今までに見たことの無い大きな刃が三本出ていた。

神司「反撃『最<sup>Bounce</sup>終<sup>End</sup>弾<sup>Blade</sup>刃』。」

神ノ「ちよつ、ちよつ! とりま守ってみるか! ? いやいや! 死ぬだろ! ? これ怒らせたらダメなやつかよ! ? 」

思い切り神ノの上から直撃する。その時点で砂煙が起こり、目の前が何も見えなくなる。

神司「まだまだ行くぞ。剣技『桜吹雪』。」

右手を上には上げると、空から桃色の花卉がヒラヒラと舞い降りてきた。

その時に、砂煙が晴れてくると、神ノが血だらけになりながらも歩いているのが見えた。

神ノ「あー…マジで死ぬかと思った…覚醒しても追いつけるなんてなあ…」

神司「死なないか…」

神ノ「殺そうとしたのね？でも残念でした〜！俺不死なので〜！」

キヤハハツと俺を嘲笑う。ムカつく…早く何でもいいからコイツを殴りたい。

それにしても、入ったと思っていたのに、血だらけで気絶もしないなんて…更には、煽

りもまた健在…！

ずつとアハハつと笑っていた神ノが急に倒れた。

神司「神ノ!？」

直ぐに駆け寄ると、泡吹いて気絶していた。

神司「…俺の勝ち？」

とりあえずは俺の勝ちでいいと思う。その後は、家まで神ノをおぶって帰った。

## 第140話 予想外!?《決勝戦》暴食の悪魔 VS 刃神の化身

準決勝最後は俺 VS 神ノだ。昨日の疲れもあるため昨日は帰ってからすぐに寝付けた。家族のみんなも察してくれたらしく、静かに寝れた。

家?あの宴会が終わってから博麗神社にて宿泊している。それにしても、司会と実況の二人が何か慌ただしい様子だ。

嫉妬「えーつと、次に開戦される筈だった神ノ邪神選手が棄権するという情報を得ました。ですので、続いては、決勝戦を開始することになりました。」

神司「ツ：：!!なるほどなア：：!!」

あのクソ邪神が：： 昨日俺と戦ったのって、最初っからコレが目的か：：！俺を育ててから本戦に持つてくるためにこの試合を始めたんだな。このトーナメント戦を考えたのは神ノ邪神、本人だから。

だから普通なら強いミカエルやクロムが簡単に降参したってことか。でも皆進化しているのも事実。

なら、何の目的のために：：

嫉妬「それでは御二方、入場をよろしくお願いします！」  
観客席から降りる俺と暴食。

とりあえず今からは暴食とのタイマンに集中することにしよう。

暴食「神司様、神ノ様からお聞きしましたよ。何でも、能力が覚醒したとかなんとか。」  
暴食の言葉を聞いて周りの人達がざわめく。変な期待とかされそうで嫌な気持ちになりそうだ。

静かに頷くと、俺に対しての歓声が上がる。

嫉妬「なんと！神司が何時かは不明だが、覚醒したという事実を認めたアー!!つまりは…！また覚醒バトルが見れるということだなッ!？」

強欲「さあて、そろそろ開始するぞ？覚醒 対 覚醒の勝負。用意…：始めッ!!」  
無言で動き出す暴食。周りからは無数の蠅が漂っている。

あの蠅は、今までの試合を見て推測するとすれば…弾丸よりも硬くてなかなか潰れないように強化してある。だからこそ無闇に向かい合うのは止めるのが一番だ。しかし俺は、敢えてここでは何もしない。

嫉妬「おおっと!?!なぜ動かない!!?」

この弾幕は蠅だ。だが、硬すぎる蠅は蠅ではなく暴食が放っている魔法虫に過ぎない。なら逆に考えてみよう。

魔法の一つ一つは、自身の魔力から創られる。大きな塊が降ってくるのなら話は別だが、今回と亜無前回の試合では、単体で蠅を飛ばすことはなかった。完璧な憶測だが、この蠅は――

神司「――痛いだけのただの目眩しだ！刃符『刃球円陣』！」

暴食「チツ：：」

手の上に刃の球を浮かせながら、自身の周りに刃の結界を張り、蠅を防ぐ。

俺の結界は刃で出来ているため、蠅も斬られて攻撃が効かない。

少し時間が経ってから、暴食がこちらに歩いて来た。

暴食「ふうん、刃のバリアか：：それならこれならどう？」

俺の目の前に来ると、刃の結界に直接触れる暴食。その瞬間に予知が見えた。

神司「マズイっ：：!!」

危機を感じて咄嗟の判断で、刃の球を暴食の方に投げ飛ばした。刃の球が暴食に当たると同時に結界は腐食して溶けてしまった。

暴食「ははっ♪さて、神司様の本気も見たい訳だし：：僕は覚醒しないよ。」

神司「：：は？」

暴食「今のままの本気で倒してあげるよ。掛かってきな、刃神――ぐあっ!!?」  
顔を思い切り俺に殴られる暴食。ハッと我に帰ると、少しポーツとする。

神司「……はっ！ごめん暴食！あまりにもあの煽り方が神ノだったから、つい……」  
暴食（か、神ノ様の嘘つき……!! ああやって煽れば本気の神司様が見れるって言うからやったのにく！ガチギレの神司様が来ちやったじゃん！）

暴食が、チラツと観客席に座っている神ノを見ると、そこには、爆笑しそうなのを必死に耐えている神ノの姿だった。

また仕組んだな、あのバ神……よし、この試合が終わったら暴食と一緒にボコろう。

神司「大丈夫か……？ 暴食……」

暴食「あーもう……思い込んだこと全部神司様にぶつけてやる……八つ当たりさせてもらいますよ！」

そう言って蠅を上下左右に放つと一匹ずつ爆発していき連鎖爆破を起こし始めた。

俺は逃げ惑うが、まずは音無結界で防げるか試す。しかし、すぐにヒビが入って壊れる。ならばと次は予知を覚醒させる。

昨日覚醒したばかりでまだ慣れないが、今何が起こるのかを予測できるまで来ていた。どうやら、この爆破に避ける道はないらしい。

神司「クロム！夢を解放してくれ！」

クロム『おっ、良いのか。なら夢、暴れる。』

夢『命令するな、我はお主よりも上位神だ。』

うだうだ言っていたが、夢の幽閉から解放させることにより、俺はデバフ<sup>チ</sup>がかか<sup>ビ</sup>るこ  
 とになる。そうして、逃げ道が増えた。

神司「『吸血鬼化』!」  
トランスヴァンパイア

夢は、邪神の器人の俺と吸血竜<sup>ドラゴニュートヴァンパイア</sup>人の命夢との混血から生まれた。そつから、俺も吸  
 血鬼になれるようになったのだ。だから夢と吸血鬼は深い繋がりがある。

二つを解放したことにより、スピードは超加速する。一気に暴食の真ん前までに詰  
 めた。

暴食「はっは、良いねえ!」

神司「舐めんじゃねえ!」

横一文字で斬ろうとすると、暴食は既に『インセント・デイオウオロス蠅の魔王』を構えて防いでいた。

暴食「そんな一撃で僕を倒せるとでも?」

神司「速さだけでも追いつくためさ!」

俺が上に飛ぶと、暴食も続いて上に飛んできた。空中戦を開始するためにフィールド  
 は大きくしたい。

最初に仕掛けたのは勿論、俺。あんな一撃で倒せないのは知っているさ。暴食には覚  
 醒してもらいたい。いや、させる。ピンチまで追い込まなければ、覚醒はしてくれない  
 だろう。

なら、フルで予知を使いまくるまで。

神司「夢！封印だ！第壱人格『悪夢斬り』ッ!!」

クロムに夢を再度封印してもらい身身を元に戻す。それから、空中で斬り掛かる形を取って邪楼剣に邪気を纏わせて一気に斬る。

しかし、『蠅の魔王』が斬れるだけだった。

暴食「…神ノ様のパクリだよね…それ…基本が成ってないんだけど。それならさ、ちやんとしてくれない？マジでムカつくから。」

静かにキレル暴食。そういや、暴食は極度の神ノファンだ。今までの行動で、神ノを裏切る行為は見た事ない。だからこそその怒りか。しかし、本来の目的の暴食の能力覚醒を見れる。

暴食の周りから邪気のような黒いモヤモヤが出てくると、殺気がこの会場を飲み込んだ。

嫉妬「うわっ、観客席に居る数百名は気絶しちゃったよ!？」

強欲「あのバカはまた…」

暴食に呆れる実況と解説。またしても観客席に結界を張る神ノの姿もあつた。同時に暴食は俺の胸ぐら掴んで蠅の球に閉じ込めた。

辺りは真つ暗の闇に包まれていて何も見えないが、蠅の蠢く音と共に羽根が擦り、羽

ばたいている音が聴こえる。

神司「っ！」

暴食「殺すのはダメなんだよね…だから痛ぶらせてもらいますよ…腐食『ブラッドデーモン』。」

じわじわと息が出来なくなつて溶かされているような感覚に陥る。

苦しい…

神司「ぐがっ……あつ……」

暴食「死なないから安心して眠りなさい。僕からのお仕置はコレで以上になりますから。」

眠る……？ふざけんな……！でも俺の体に蠅がモゾモゾと居て離れないため、身動きが取れない。

神ノを倒した時みたいに覚醒をすることは出来ないかと試みるが、できない。

だが、手段は一つあった。

俺を含めた暴食の周りに刃を千本以上配置した。

暴食「はっ……！ちよつと待つて下さい！そのままだと神司様も——」

神司「関係、ない……！『千……本、やい、ば』……!!!」

弱々しく上げる右手は勢いよく握り締める。すると、俺ごと暴食の体に刃が貫通す

る。

痛い、がここで勝たなければ……!

再び俺らの周りに千本以上の刃を設置する。そして放つ。

神司「痛ッ……!! 離すなよオオオオ!!!」

暴食「いや! これ以上はダメだ! って!?」

俺の胸ぐらを離そうとするから、その腕を掴むのと同時に再度、周りに刃を千本以上配置した。

俺の体力はもう限界だ。だから、最後の『千本刃』だ。

神司「じゃあな……ベルゼブブ。神剣『千本刃』……!!」

暴食「喰い戻し『付与』!」

胸ぐらを離すと『蠅の魔王』を持っていた手で俺の腕を掴む。そこから、刃に串刺しされていた箇所がどンドン治っていき、刃が押し出されて俺の傷と魔力が全回復した。

神司「……は?」

暴食「自暴自棄な戦闘は控えて下さい。死闘でも所詮、神ノ様が考えた暇潰しなのですから。」

神司「アイツの暇潰しに付き合っているだけで暴食に勝てるのなら本望だ。蠅の球体を解除しろ。剣技で死合たたかおうじゃないか。」

俺の腕から手を離れた後に少し考える暴食。それからゆっくりと口を開き始めた。

暴食「…なら一つ、約束して下さい。」

その内容は、単純な事だった。俺も納得して頷く。暴食の言いたいことは十に承知だ。だから守ろう。家族のためにも、俺のためにも。

蠅の球を解除すると蠅が砂と化した。

嫉妬「おっと？御二方、無傷で帰還して来ましたが、何が起きたのでしょうか。」

強欲「見れなかったから、何を解説すればいいのか…」

実況も解説も混乱している。そりゃあそうだろう。この事を知っているのは俺と今、戦闘している暴食の二人だけなのだから。

さて、剣技とは言ったが、暴食の剣技とはどんなのを見せてもらえるのだろうか。

暴食「剣技、でしたよね。」

神司「そうだ。」

暴食「それなら、『覚醒』。」

先程の殺気とはまた別の圧を放つ暴食。ヒリヒリと痛むように体が疼く。

暴食のせいで致命傷だった筈の怪我は治ったんだ。また無茶してでも倒す。

神司「『覚醒』。刃符『千本の銀刃』。放てッ!!」

自身に銀色のオーラを纏い覚醒する。そのまま『千本刃』に銀のオーラを一枚ずつ纏

わせて一気に放つ。強化した『千本刃』だ。スピードも強化してある。

暴食「腐食『ブロードスラッシュ』っ！」

『蠅の魔王』の周りから薄紫色のオーラが出てくると、『千本刃』を叩き落とし始めた。しかし、すぐに俺は行動する。暴食に邪楼剣を振り下ろす。だが、『蠅の魔王』で受け止める。

暴食「不意打ち？」

神司「戦略。」

後ろに飛んで離れる。やっぱ、一筋縄では行かないよな。

次に邪楼剣に銀色のオーラを纏わす。そこから勢いよく駆けて横に振る。すぐに暴食は反応して受ける。次から次へと振るが、全て受けて終わる。ならば――

神司「邪刀『鬼神斬』！」

オーラを銀色から桜色に変えて近距離で放つ。咄嗟なので暴食は反応出来ずに直撃する。するとすぐに暴食から殺気を感じたので一度離れる。

危ない危ない……近づきすぎたか。暴食の間合いに入っていたんだもんな。

暴食「流石は神司様だ。少し頭をずらさなければ命はありませんでしたよ。」

神司「たつく、油断も隙もないな。」

よく言うよ、結構本気だったんだぞ、アレ。

通常の剣技では勝てないことが分かった。ならば、二刀流でだ。

シロから奪取した雨叢雲剣を左手に持ち構える。

暴食「風の剣か：確かそれで神ノ様を倒したのだよね…」

神司「爆風『鎌鼬』。」

四枚の風の刃を暴食に放つ。素早い且つ、鋭い刃だ。だが、このままでは避けられる。

これは、初めて予知が覚醒した時に理解したことなのだが、なんと、この「爆風『鎌鼬』」、「邪脚『ブラッドストーム』」様な吸引力が付いているというのだ。つまり――

暴食「ええ!?痛っ…!」

引き寄せられて切り傷を何ヶ所も負う。四枚の風の刃が俺の元に戻ってくると、二枚ずつ邪楼剣と雨叢雲剣の刃に戻って行った。

神司「舞踊え!『弥生四季乱舞』!」

飛躍し、雨叢雲剣の風を扱い、体を捻りながら高速回転切りをする。まだ『舞』は終わらない。

神司「桜符『風舞桜』…!」

ステツプを踏みつつ、暴食の腕などを切り、ラストに桜色の竜巻を巻き起こす。

竜巻を直に喰らった暴食は風の勢いで上に吹っ飛び落下する。

暴食「かはっ…!」

神司「ラストワード…」

暴食「ツ!？」

神司「第新人格『魔眼永続—!!』」

いつもよりも思い切り地面を踏み込んで、一気に暴食を数十回斬る。そして駆け抜ける。

他の人からは一回しか斬れてないように見せるために。つまりは、神速で暴食を斬るわけだ。

神司「—抜刀術。』」

ゆっくりと納刀して、気を高める。後ろで暴食が吐血する声が聞こえたので、振り返ると、蠅の大群が襲いかかって来ていた。

咄嗟に『音無結界』を張る。耳障りな音は聞こえなくなったが、暴食は手から謎の大口の化け物を出して結界ごとを呑み込もうとしていた。

急いで結界を解き、後ろに下がる。

神司「なんだ!？」

嫉妬「何アレ!?! 大口に左腕だけある化け物…!!」

強欲「…!?! 魔人…だと!?!」

神司「魔人…!! なら核さえ壊せば—やっべえ!」

核を壊しに凸る勢いだったが、予想以上に動きが早い。魔人を出してる暴食自身は、ただ突っ立っているだけで何もしない。

神司「クツソ……！予知……ツ!!？」

予知を発動させようとするが、眼に力が入らなくなってきたことに気づいた。覚醒の代償がこのタイミングに現れたのだ。

神司「……万事休すか……?!」

予知が発動しないのはまだ大丈夫。しかし、眼に力が入らなくなるのはまた違う話だ。この状態で戦闘するのは間違いなく死ぬ。今の暴食は制御出来ずに気絶していると思つて間違いない。

ならば、ラストワードと言つたが最後のスペルカードだ。

神司「本場に最後のラストワードだ!!反撃『Bounce最終End Blade弾刃』!!!」

巨大な三枚の刃を空中に出し、思い切り振り落とす。

嫉妬「神司の上に大きな三枚の刃が今、あの魔人の頭に振り落としたアアア!!」

神司「気付く暴食!!目を覚ませエ!!」

砂煙と共に両断される魔人。どうやら核も斬れたらしく、消滅していく。そのまま暴食は倒れる。

急いで、支えに行き肩を持つ。ホントに気絶しているだけで息はしている。とりあえ

ずホツと安心する。そのタイミングで嫉妬の勝者宣言が会場内に響いた。

嫉妬「ついに！ついに！！決まりました！！予想外のハプニングが多発していましたが、この決勝戦！栄えある優勝者は——稀神 神司だアアア！！優勝、おめでとうございまーす！！」

客席から拍手喝采される。

この長い長いメタイ大会がとうとう幕が閉じたのであった。この後は、今までにない宴会が行われて、酔いつぶれた。



その宴会から二日後に、なんと、優勝者には何でも願いが叶えられるとの事。それの一つだけ。家族と話し合ったところ、満場一致で決まった。

「家が欲しい。どうせなら超大きな一軒家が。」

この事を聞いた鬼たちがすぐ様駆けつけて、家を建て始めた。またその間は、博麗神社で寝泊まりし、家が建てられるのを待った。それから三日が経過し、二階建ての一軒家が人里に建てられて、現在暮らしている。